

茨城県教育財団文化財調査報告第436集

瑞 龍 遺 跡

一般国道 293 号常陸太田東バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 卷

平成 31 年 3 月

茨城県常陸太田工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第436集

瑞
龍
遺
跡
下
卷

公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第436集

ずい りゅう
瑞 龍 遺 跡

一般国道 293 号常陸太田東バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 卷

平成 31 年 3 月

茨城県常陸太田工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

5	平安時代の遺構と遺物	371
(1)	堅穴建物跡	371
(2)	掘立柱建物跡	453
(3)	井戸跡	470
(4)	柱穴列	471
(5)	土 坑	472
6	鎌倉・室町時代の遺構と遺物	477
(1)	掘立柱建物跡	477
(2)	方形堅穴遺構	478
(3)	井戸跡	483
(4)	墓 坑	485
(5)	柱穴列	491
(6)	道路跡	492
(7)	溝 跡	494
(8)	段切状遺構	499
(9)	土 坑	500
(10)	ピット群	505
7	江戸時代の遺構と遺物	517
(1)	掘立柱建物跡	517
(2)	方形堅穴遺構	518
(3)	粘土貼土坑	521
(4)	墓 坑	534
(5)	道路跡	536
(6)	溝 跡	539
(7)	土 坑	541
8	その他の遺構と遺物	553
(1)	堅穴建物跡	553
(2)	掘立柱建物跡	554
(3)	井戸跡	555
(4)	溝 跡	555
(5)	土 坑	556
(6)	ピット群	565
(7)	遺構外出土遺物	567
第4節	まとめ	572
付 章		599
1	瑞龍遺跡出土人骨について	国立科学博物館人類研究部 梶ヶ山 真里
2	瑞龍遺跡の自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
写真図版		PL 1～PL110
抄 録		
付 図		

5 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 40 棟、掘立柱建物跡 14 棟、井戸跡 1 基、柱穴列 1 条、土坑 28 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

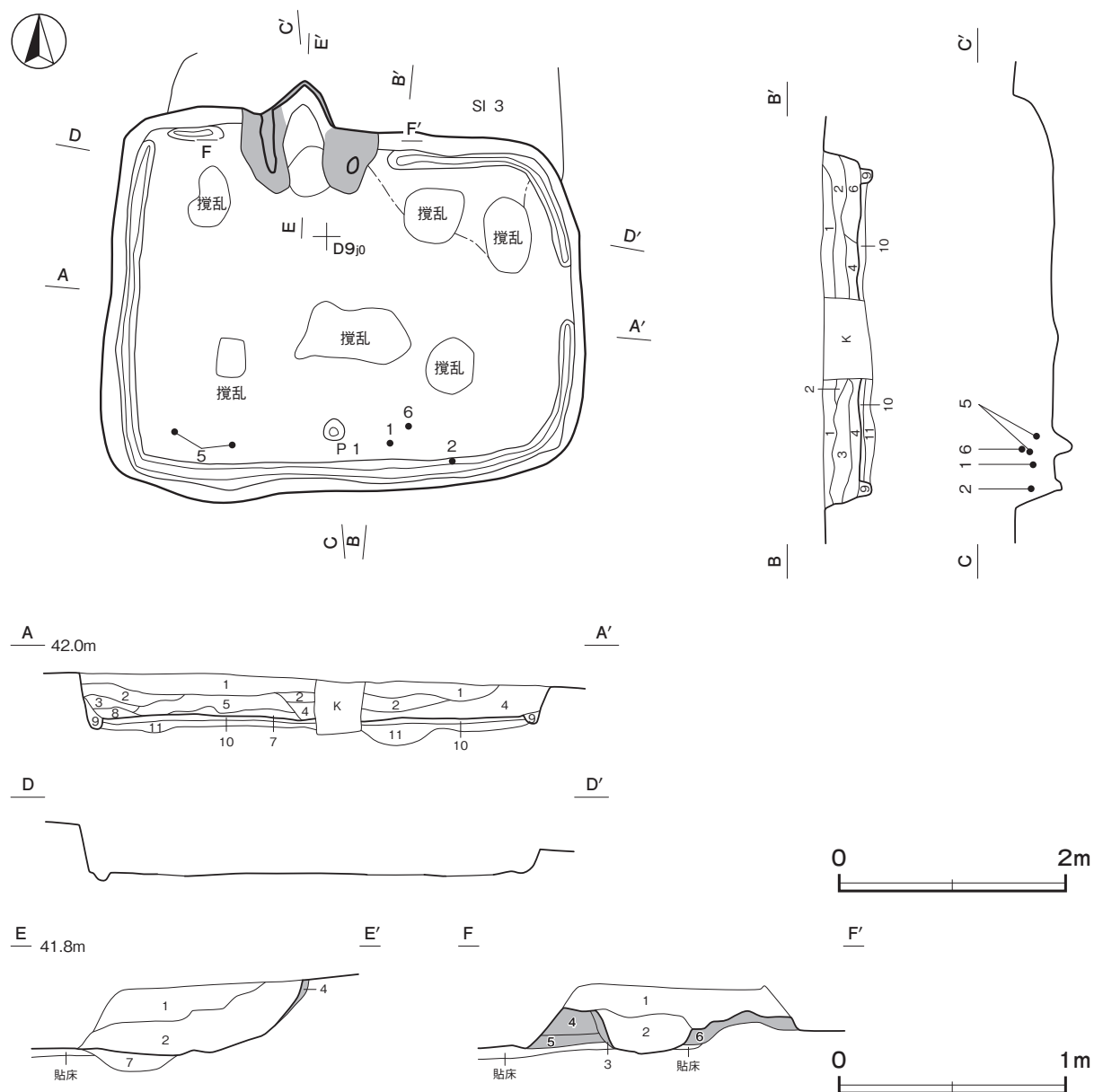
第 2 号竪穴建物跡 (第 299・300 図 PL38)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の D 9j0 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 3 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 4.22 m、短軸 3.50 m の長方形で、主軸方向は N - 5° - W である。壁は高さ 24 ~ 39 cm で、ほぼ直立している。



第 299 図 第 2 号竪穴建物跡実測図

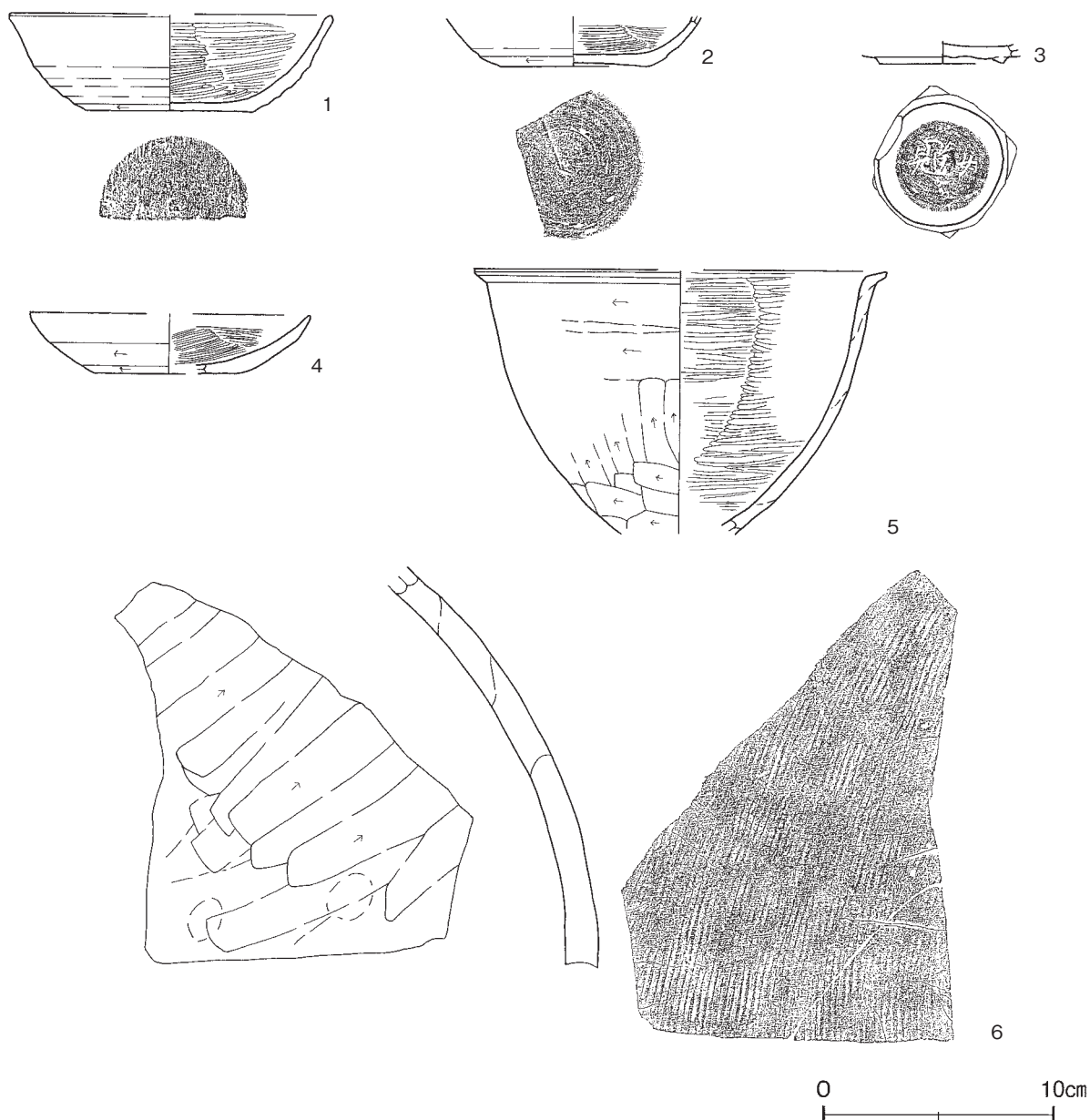
床 平坦な貼床で、北東部を除いて踏み固められている。貼床は、第10・11層を10～20cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が、北西隅部及び東壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁の西寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは102cm、燃烧部の幅は30cmである。燃烧部は床面から10cmほど掘りくぼめられ、第7層で埋め戻されている。袖部は地山及び床面に第3～6層を積み上げて構築されている。火床面は第7層の上面で、火熱を受けているものの赤変硬化はしていない。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、第4層が貼り付けられている。火床面からは外傾している。第1・2層には、ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 4 黄褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 褐灰色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 5 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量 |
| 3 暗赤色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量 | 6 黄褐色 | 粘土ブロック・焼土ブロック中量 |
| | | 7 灰黄色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |

ピット P1は深さ38cmで、出入口施設に伴うピットである。



第300図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

覆土 9層に分層できる。不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第10・11層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 | 7 暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | 粘土ブロック少量, ロームブロック微量 | 9 におい黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 10 におい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| | | 11 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 480点 (坏 72, 高台付坏 1, 蓋 2, 皿 3, 鉢類 5, 甕類 397), 須恵器片 19点 (坏 7, 高台付坏 1, 蓋 1, 甕類 10) のほか, 縄文土器片 44点 (深鉢), 弥生土器片 104点 (壺類), 剥片 3点 (チャート, 瑪瑙, 石英) が, 主に南壁際から出土している。1～6を含めた多くの土器は, 小片で接合関係に乏しいことから, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉に比定できる。3の高台付坏に記されたヘラ書きの資料から, 当域周辺に国字を知る者の存在が想定できる。

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第300図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.0]	4.7	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい褐色	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する横位の磨き 内面黒色処理	覆土中層	50% PL92
2	土師器	坏	-	(2.2)	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する横位の磨き 内面黒色処理	覆土中層	20%
3	土師器	高台付坏	-	(0.9)	5.4	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	底部外面高台部貼付け後削り出し「 ■ 女 \square 」のヘラ書き 底部内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土中	10% 巻頭下段
4	土師器	皿	[12.2]	2.6	[6.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り 底部内面体部から連続する横位の磨き 内面黒色処理	覆土中	30%
5	土師器	鉢	[17.8]	(11.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面縦位のナデ後下端に横位の削り 体部内面横位の磨き 内面黒色処理	覆土中層	10%
6	須恵器	甕	-	(17.5)	-	長石・石英・針状物質・砂礫	灰黄	普通	体部外面縦位の平行叩き 体部内面斜位のナデ指頭痕	覆土中層	10% 木葉下窯。

第7号竪穴建物跡 (第301・302図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE9b0区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第4号竪穴建物跡を掘り込み, 第8号竪穴建物, 第10号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第8号竪穴建物, 第10号土坑に掘り込まれているものの, 長軸4.05m, 短軸3.82mの方形と推定でき, 主軸方向はN-3°-Eである。壁は高さ20~30cmで, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 第8号竪穴建物に掘り込まれた部分及び北東隅部, 東壁際の一部を除いて, 踏み固められている。貼床は, 第6層を10~15cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 北壁東半部及び東壁, 南壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは92cm, 燃焼部の幅は40cmである。燃焼部は床面から20cmほど掘りくぼめられ, 第6層で埋め戻されている。袖部は, 芯材として加工された凝灰質泥岩を深さ10cmのピットに第5層で固定した後, 床面及び第6層上面に第4層を積み上げて構築されている。火床面は第6層の上面で, 火熱を受けて弱い赤変硬化が認められる。煙道部は壁外に50cmほど掘り込まれ, 火床面から外傾している。第1~3層は, 焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

土層解説

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 褐 色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 | 4 褐 灰 色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 暗 褐 色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 | 5 暗 褐 色 ロームブロック少量 |
| 3 黒 褐 色 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 6 黒 褐 色 ロームブロック少量 |

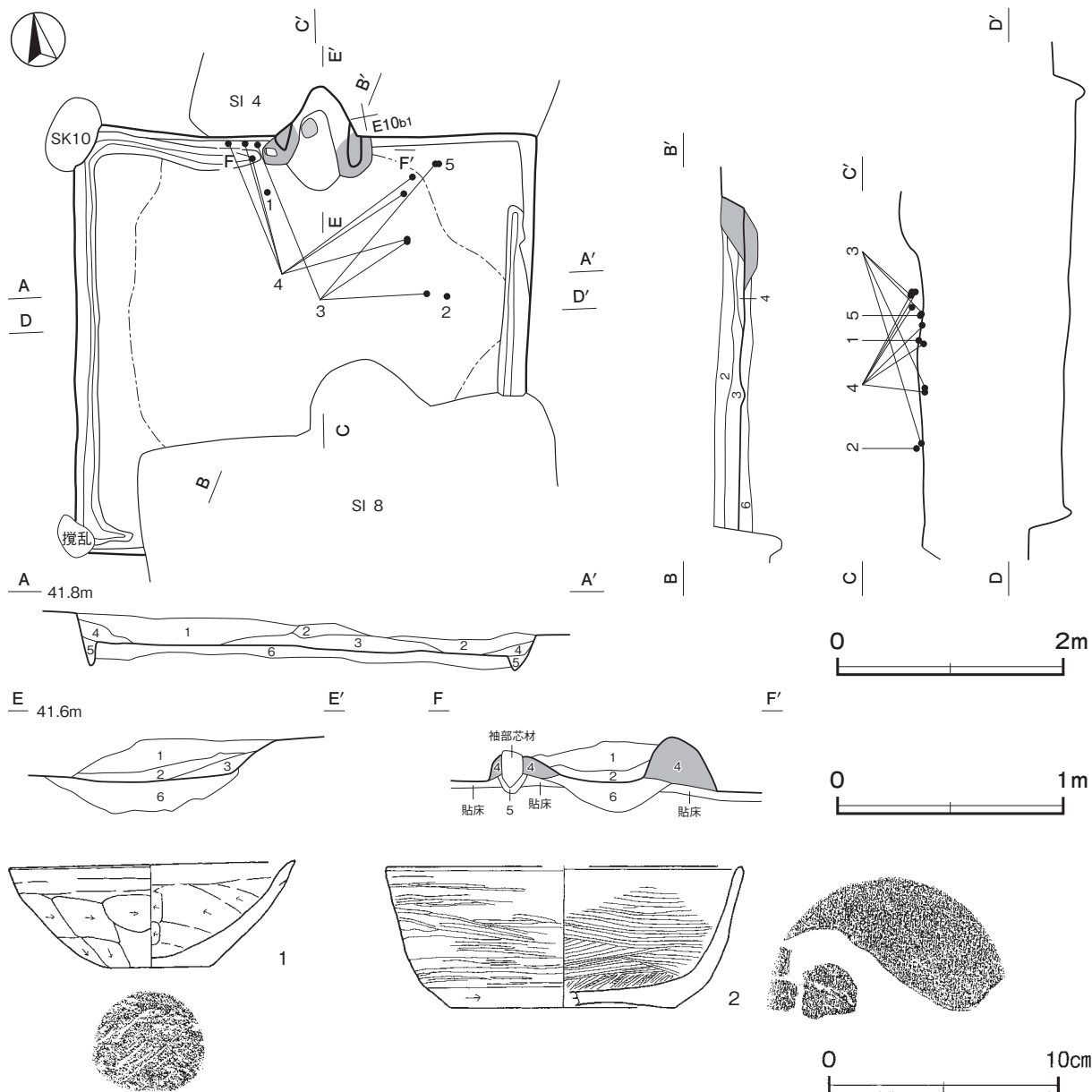
覆土 5層に分層できる。不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第6層は貼床の構築土である。

土層解説

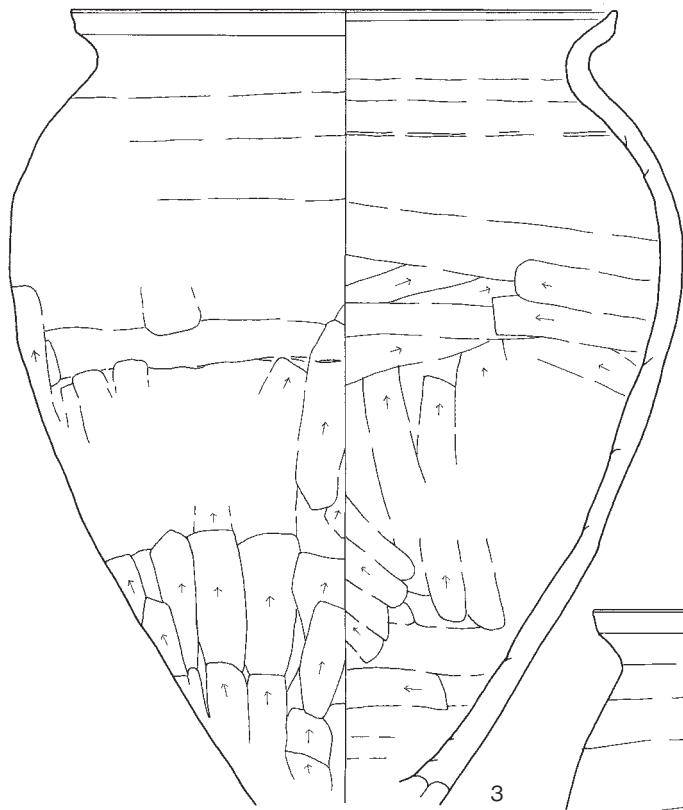
- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 4 にぶい黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 灰黄褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 暗 褐 色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 161 点 (坏 16, 高台付坏 2, 蓋 2, 甕類 141), 須恵器片 3 点 (坏 2, 甕類 1), 石製品 1 点 (袖部芯材) のほか, 縄文土器片 13 点 (深鉢), 弥生土器片 5 点 (壺類) が, 主に竈周辺から出土している。多くの土器は小片であるが, 大型の破片は竈周辺に散在し, 接合関係が良好であることから, 埋め戻しに伴って一括で投棄されたと考えられる。

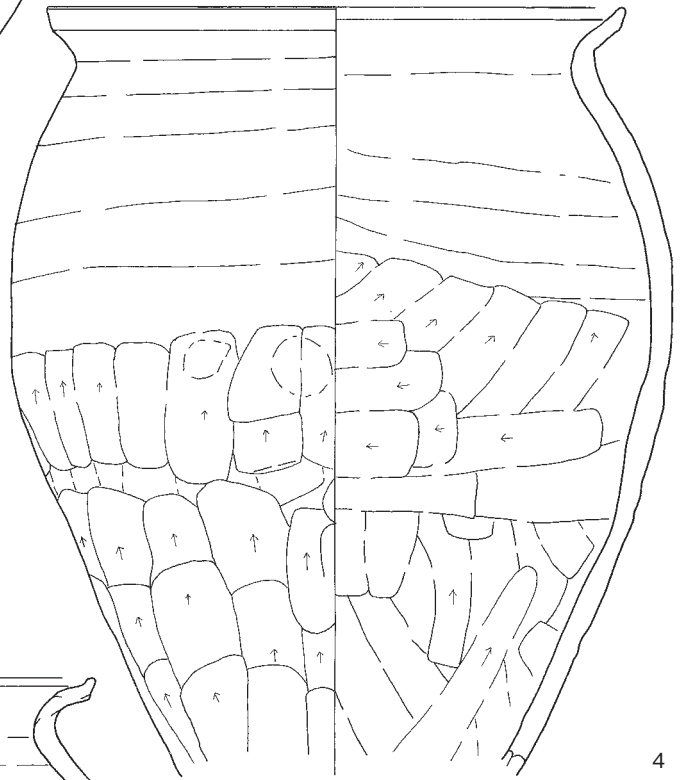
所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



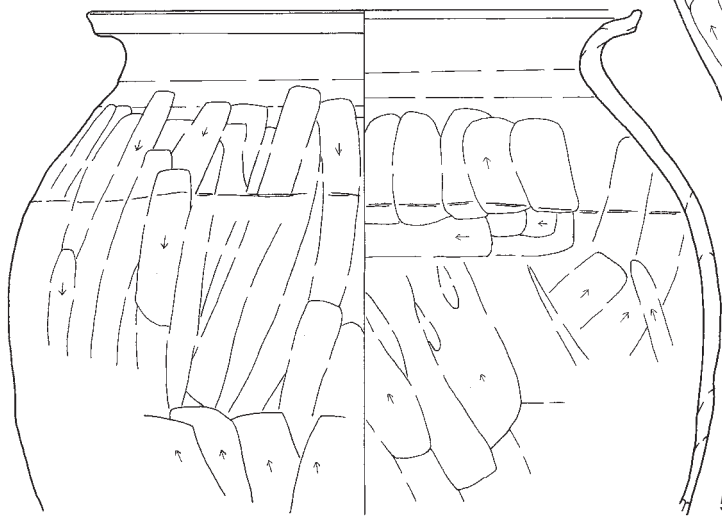
第 301 図 第 7 号竪穴建物跡・出土遺物実測図



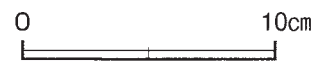
3



4



5



第 302 図 第 7 号 豎 穴 建 物 跡 出 土 遺 物 実 測 図

第7号竖穴建物跡出土遺物観察表（第301・302図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.4	4.6	4.8	長石・赤色粒子・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦位の削り後横位の削り、内面横・斜位のナデ 底部一方向の削り	覆土下層	90%
2	土師器	坏	[15.5]	6.1	[9.7]	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁から体部外・内面回転による磨き 体部外面下端一方向の削り 底部外面二方向のナデ 内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	40% PL92
3	土師器	甕	[21.6]	(31.5)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦位のナデの後中位以下に縦位の削り 内面縦・斜位のナデの後横位のナデ	覆土下層	50% PL98 煤付着
4	土師器	甕	[22.8]	(30.5)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦位のナデの後中位以下に縦位の削り 内面横位のナデ中位以下に縦・斜位のナデの後横位のナデ	覆土下層	50% PL98 煤付着
5	土師器	甕	[21.7]	(20.0)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦位のナデの後中位以下に縦位の削り 内面縦・斜位のナデ 指ナデ痕 輪積痕	覆土下層	30% 煤付着

第8号竖穴建物跡（第303～305図 PL38・39）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE9c0区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第7・9・12B号竖穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.20m、短軸3.75mの長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁は高さ40～48cmで、直立している。

床 平坦な貼床で、全面が踏み固められている。貼床は、第11・12層を5～20cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が、北東隅部及び南壁東半部、東壁の一部を除いて巡っている。

竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは160cm、燃烧部の幅は72cmである。燃烧部は床面から20cmほど掘りくぼめられ、第11層で埋め戻されている。第11層の上面には粘土を主体とした第9層が層圧10cmほど貼り付けられている。袖の構築土の下位に位置し、竈の周辺に貼り付けられていることから、基盤と考えられる。袖部は、芯材としてQ3を深さ10cmのピットに第10層で固定した後、第9・10層上面に第6層を積み上げて構築されている。火床面は地山及び第7・9・10層の上面で、第7層は火熱を受けて赤変硬化している。Q1・Q2は下端部が第8層で固定され、火床部に据えつけられていることから、支脚として用いられている。煙道部は壁外に60cmほど掘り込まれ、第6層が貼り付けられている。火床面からはほぼ直立している。第5層は煙道からの流入土、第4層は天井部内壁の崩落土、第1～3層は天井部材の崩落土であることから、自然に崩壊している。

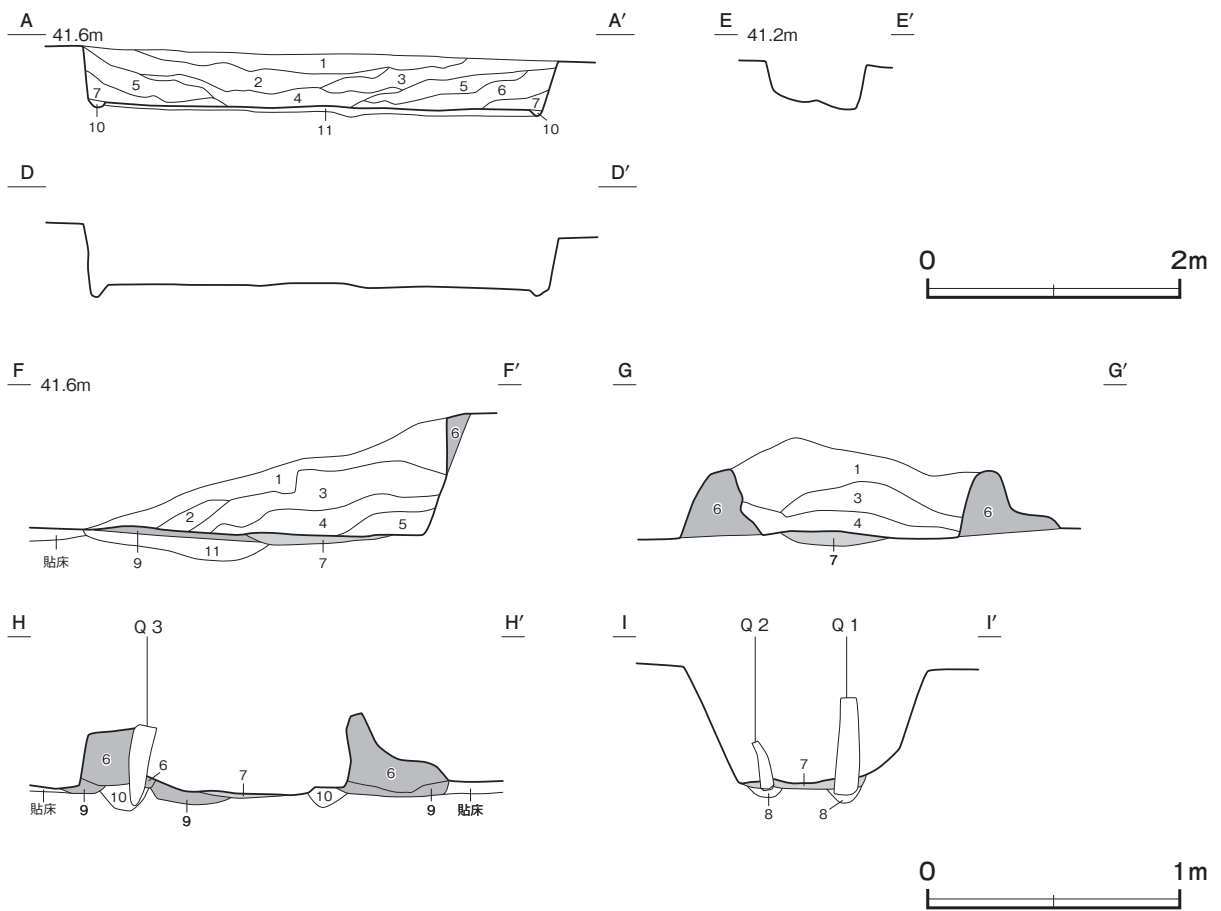
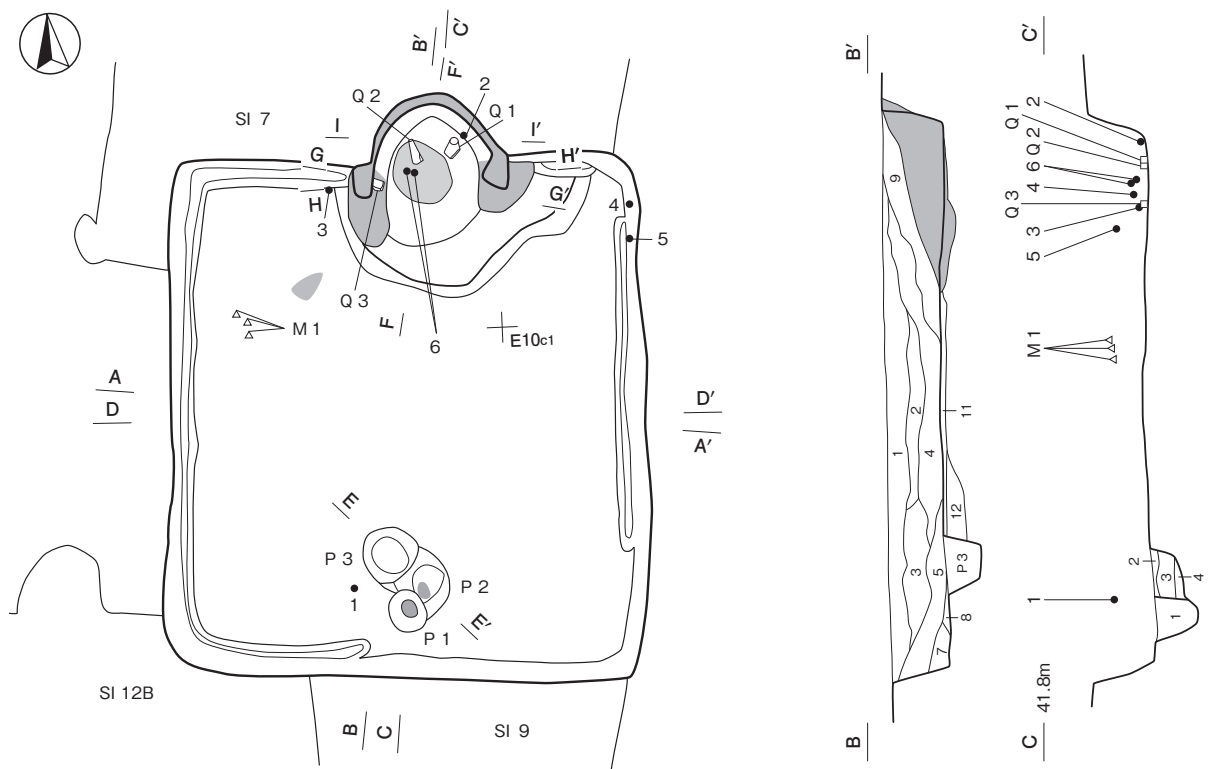
竈土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 褐灰色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 7 赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック中量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 3 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量 | 9 浅黄橙色 | 粘土主体土、焼土ブロック少量 |
| 4 明赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土ブロック少量 | 10 暗褐色 | 鹿沼軽石ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量 | 11 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック・鹿沼軽石ブロック少量 | | |

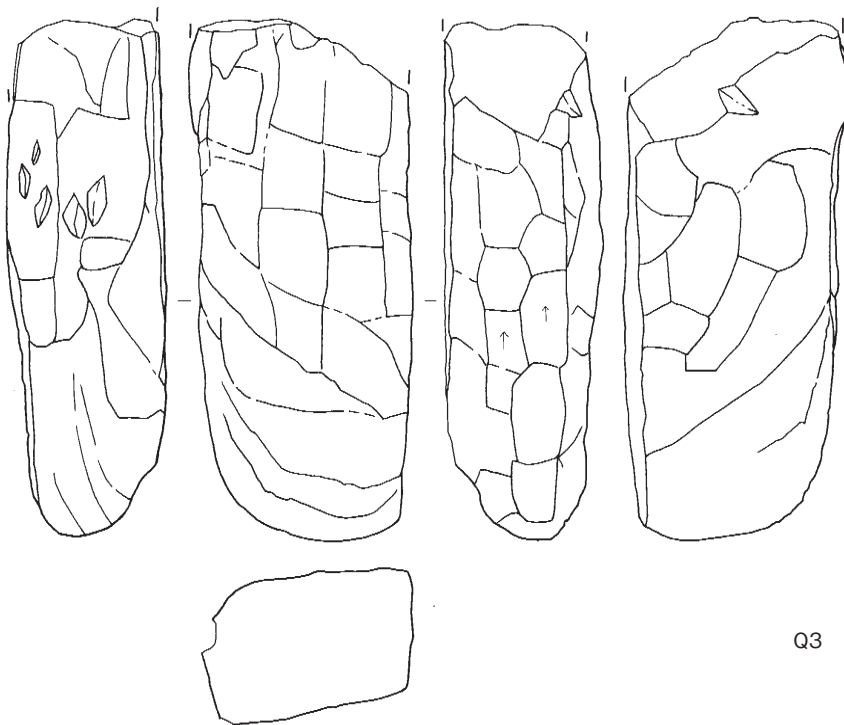
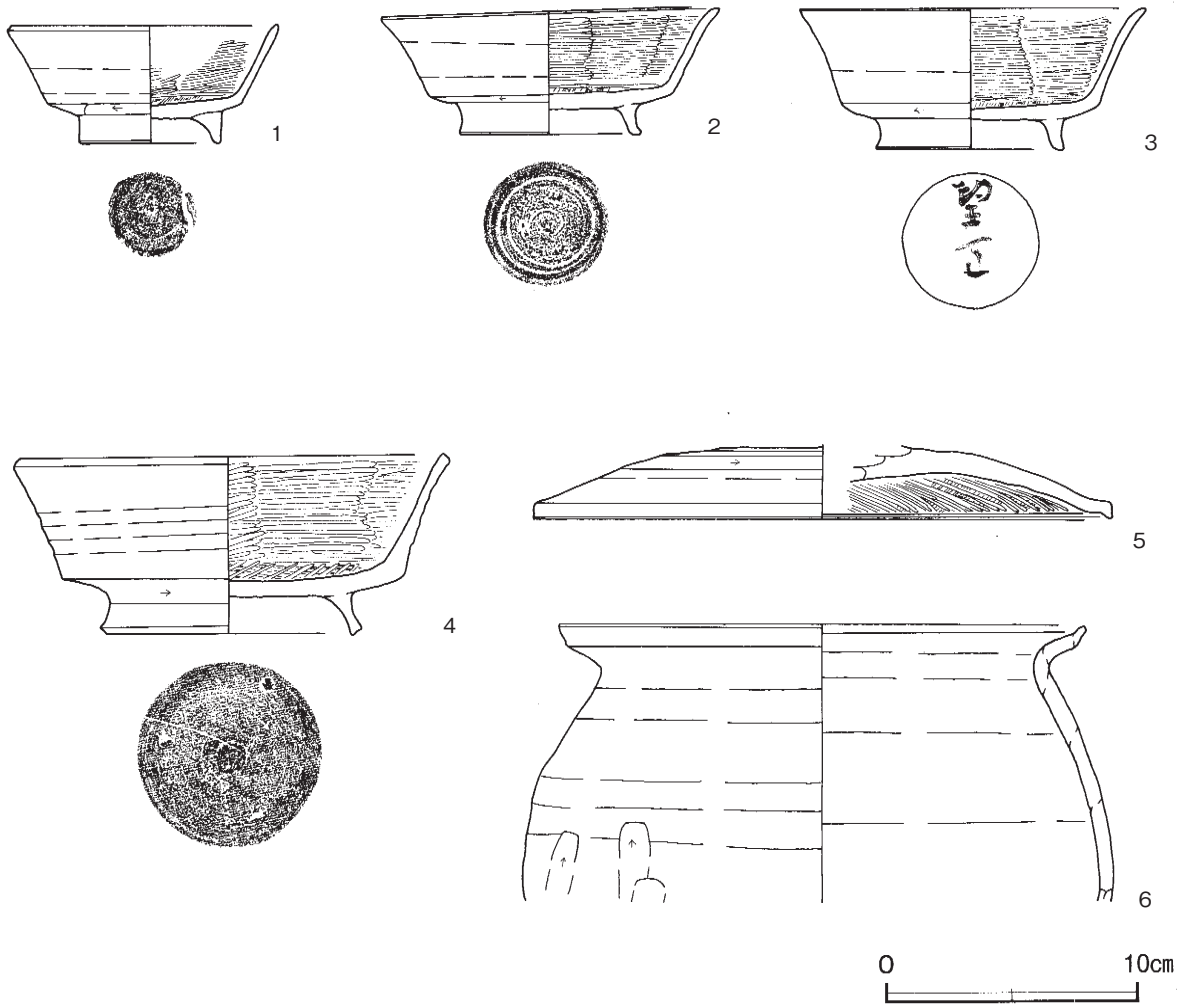
ピット 3か所。P1・P2は深さ32～40cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P2は、P1に掘り込まれていることや貼床構築土の下で確認されたことから、P1に立て替えられている。第3・4層は埋め戻しに伴う覆土、第2層は貼床の構築土、第1層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1・P2の底面で、柱の当たりを確認した。P3は柱の当たりが確認されなかったことやP2と重複していることから、P2の抜取穴の可能性はある。

ピット土層解説（各ピット共通）

- | | | | |
|----------|------------------|-------|--------------------|
| 1 にぶい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |



第 303 图 第 8 号竖穴建物迹实测图



第 304 图 第 8 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)

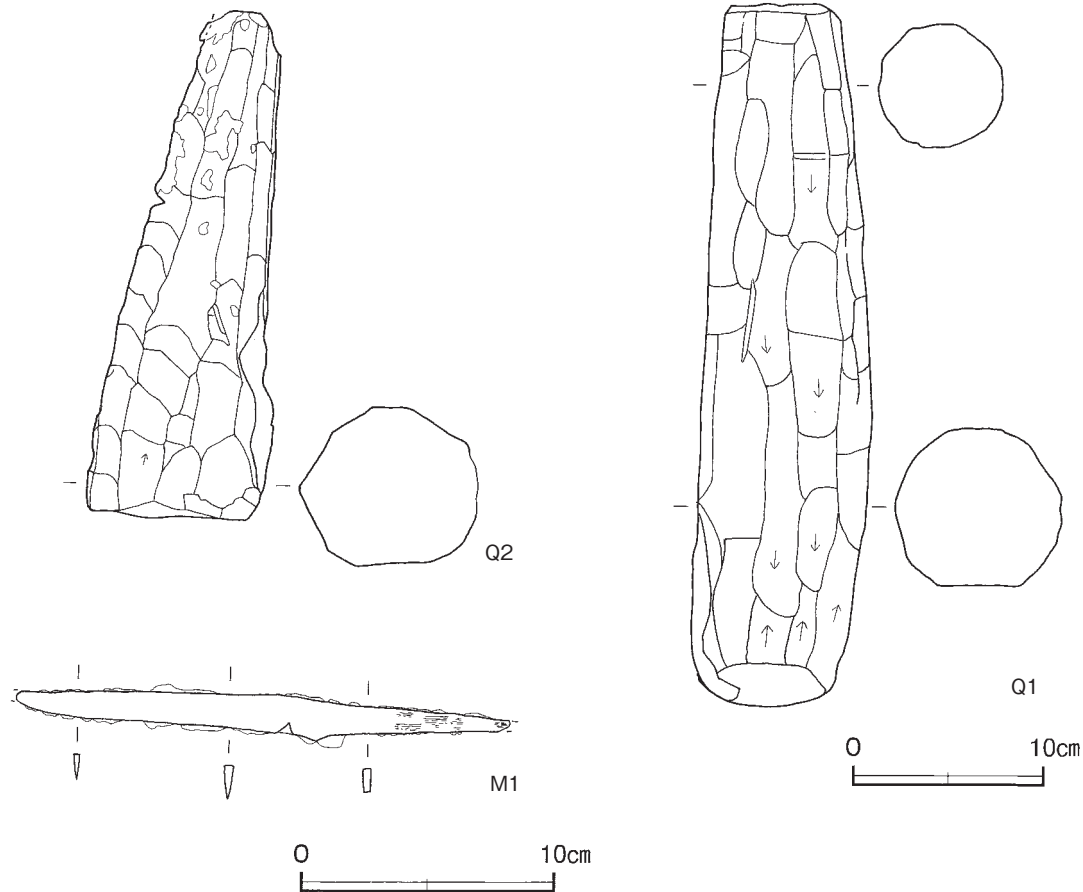
覆土 10層に分層できる。第7～10層はローム粒子が含まれていることから自然堆積，第1～6層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻しに伴う堆積である。第11・12層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 8 褐色 | ローム粒子中量，鹿沼軽石ブロック少量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック中量 | 9 褐灰色 | ローム粒子中量，焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量，鹿沼軽石ブロック微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量，鹿沼軽石ブロック少量 | 11 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 褐灰色 | ロームブロック少量，鹿沼軽石ブロック微量 | 12 におい黄褐色 | ロームブロック中量，鹿沼軽石ブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 480点（坏 30，高台付坏 9，蓋 10，盤 11，甕類 420），須恵器片 7点（坏 4，蓋 2，長頸瓶 1），石器 1点（砥石），石製品 3点（支脚 2，袖部芯材 1），金属製品 1点（刀子）のほか，縄文土器片 13点（深鉢），弥生土器片 11点（壺類），剥片 1点（チャート）が出土している。多くの土器は比較的大型の破片で，接合関係が良好である。第1～6層にかけての出土量が多いことから，埋め戻しに伴って一括で投棄されたと考えられる。

所見 時期は，出土土器から9世紀中葉であるが，重複関係から第12B号竪穴建物跡よりも新段階に比定できる。



第305図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第8号竪穴建物跡出土遺物観察表（第304・305図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	10.5	4.7	5.4	長石・雲母・針状物質・赤色粒子	におい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って円状の磨き 内面黒色処理	第1～6層中	70% PL93
2	土師器	高台付坏	13.4	5.1	7.2	長石・雲母・針状物質・赤色粒子	におい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って円状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	95%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師器	高台付坏	13.7	5.6	7.5	長石・雲母・針状物質・赤色粒子	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って凹状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	80% PL93 「望万呂」墨書
4	土師器	高台付坏	16.7	7.1	9.8	長石・雲母・針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って凹状の磨き 内面黒色処理	第1～6層中	90% PL93 「-」刻書
5	土師器	蓋	[23.0]	(2.9)	-	長石・雲母・針状物質・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り 内面二方向の磨き 内面黒色処理	第1～6層中	20% PL95
6	土師器	甕	21.0	(11.0)	-	長石・雲母・針状物質・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ロクロナデ後縦位の磨き 体部内面ロクロナデ	竈覆土下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	支脚	36.6	9.3	8.2	1,281	凝灰質泥岩	上・下面一方向の削り調整 側面二方向の削り調整	火床面	PL105
Q2	支脚	20.2	7.3	2.1	370	凝灰質泥岩	上面調整不明 下面一方向の削り調整 側面一方向の削り調整	火床面	PL105
Q3	袖部芯材 (27.2)	12.8	8.3	(1,050)	凝灰質泥岩	上面・側面削り調整 下端部先尖状に加工 袖芯材	袖部構築土中		

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子 (19.5)	1.7	0.3	(28.29)	鉄	刃部先端欠損 刃部断面三角形 茎部一部欠損 茎部断面長方形片削	第1～6層中	PL108	

第9号竪穴建物跡 (第306・307図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE9c0区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第8・12B号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 第8・12B号竪穴建物に掘り込まれていることから、東西軸3.64m、南北軸は1.81mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定されるが、主軸方向は不明である。壁は高さ12～17cmで、ほぼ直立している。

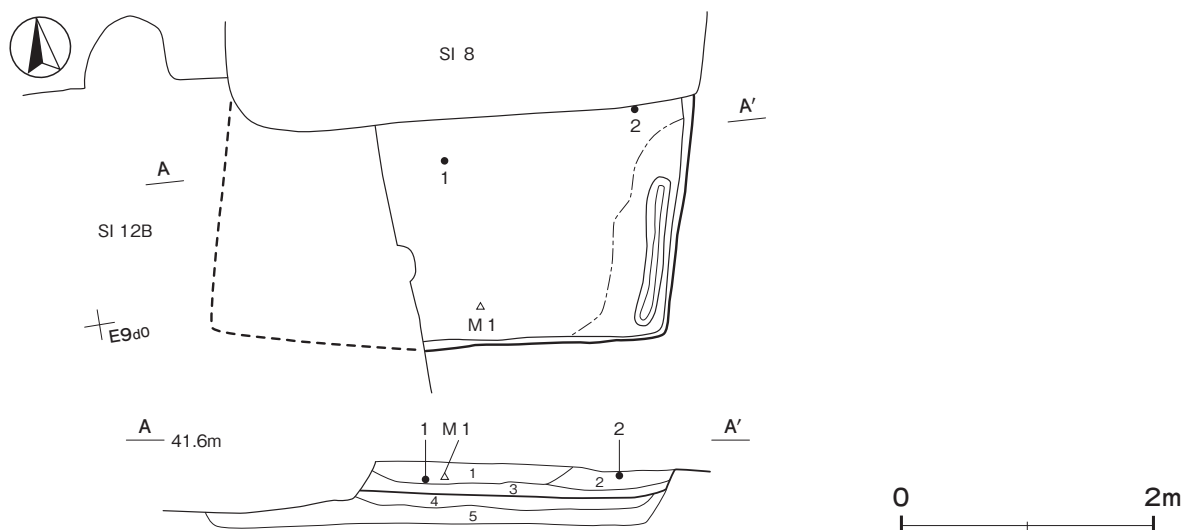
床 平坦な貼床で、第8・12B号竪穴建物に掘り込まれている部分及び東壁際を除いて、踏み固められている。

貼床は、第4・5層を20～30cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が、東壁下の一部で確認された。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから埋め戻しに伴う覆土である。第4・5層は貼床の構築土である。

土層解説

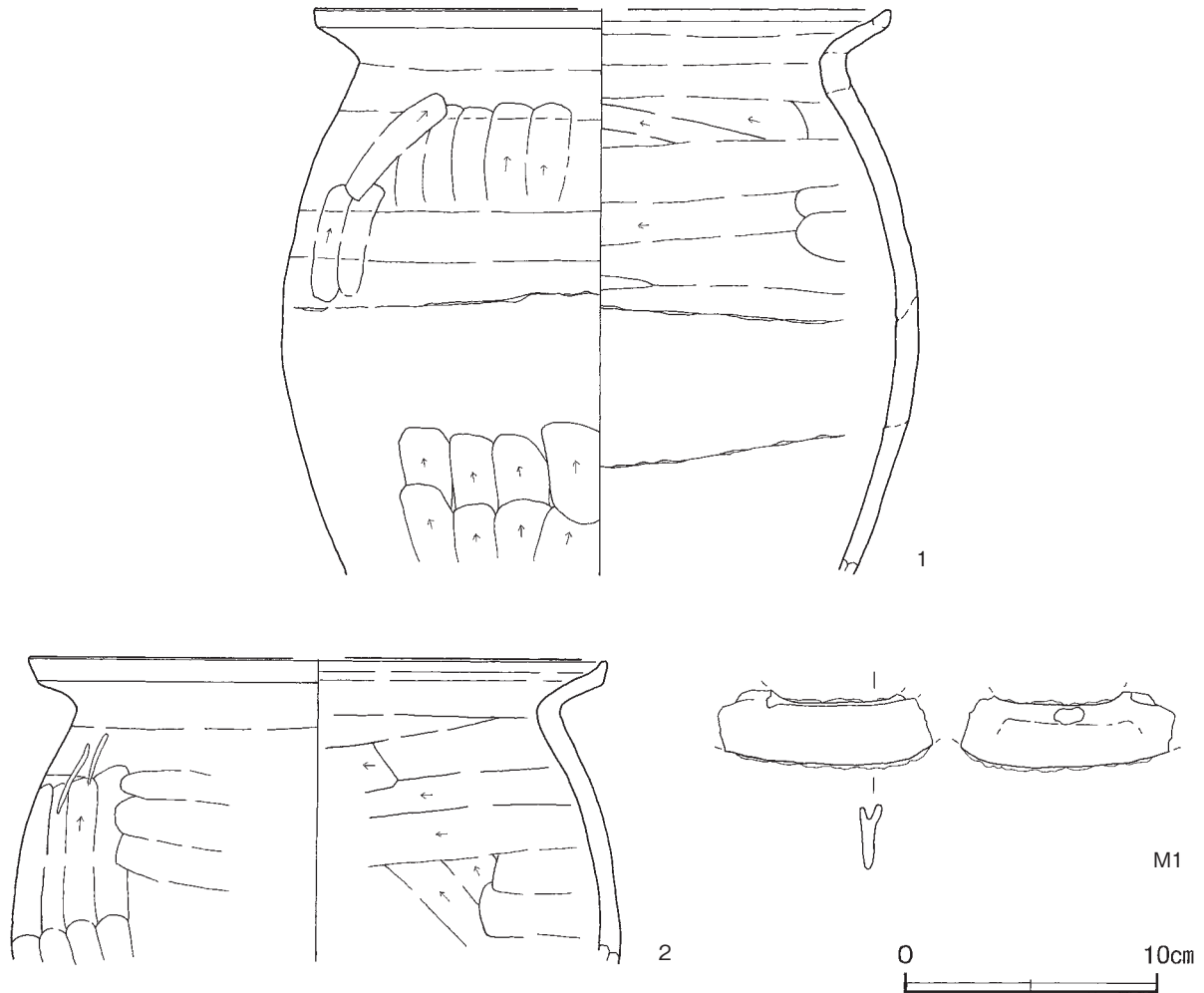
- | | | | |
|-------|---------------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 | | |



第306図 第9号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 41 点(甕類), 金属製品 1 点(鋤先)のほか, 縄文土器片 3 点(深鉢), 弥生土器片 3 点(壺類)が全域から散在して出土している。土器は小片で, 接合関係に乏しいことから, 埋め戻しに伴って破損したものが投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 307 図 第 9 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 9 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 307 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	甕	[22.8]	(22.5)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ロクロナデ後縦・斜位のナデ 下端縦位の削り 内面斜位のナデ後横位のナデ	覆土第 1 層中	10% 煤付着
2	土師器	甕	[22.9]	(12.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ロクロナデ後縦・横位のナデ 内面斜位のナデ後横位のナデ	覆土第 2 層中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	鋤先	(8.5)	(3.0)	0.8	(38.83)	鉄	平面 U 字状 断面 Y 字状 着装部差込式 一部欠損	覆土第 1 層中	PL108

第 10 号竪穴建物跡 (第 308 ~ 310 図 PL40)

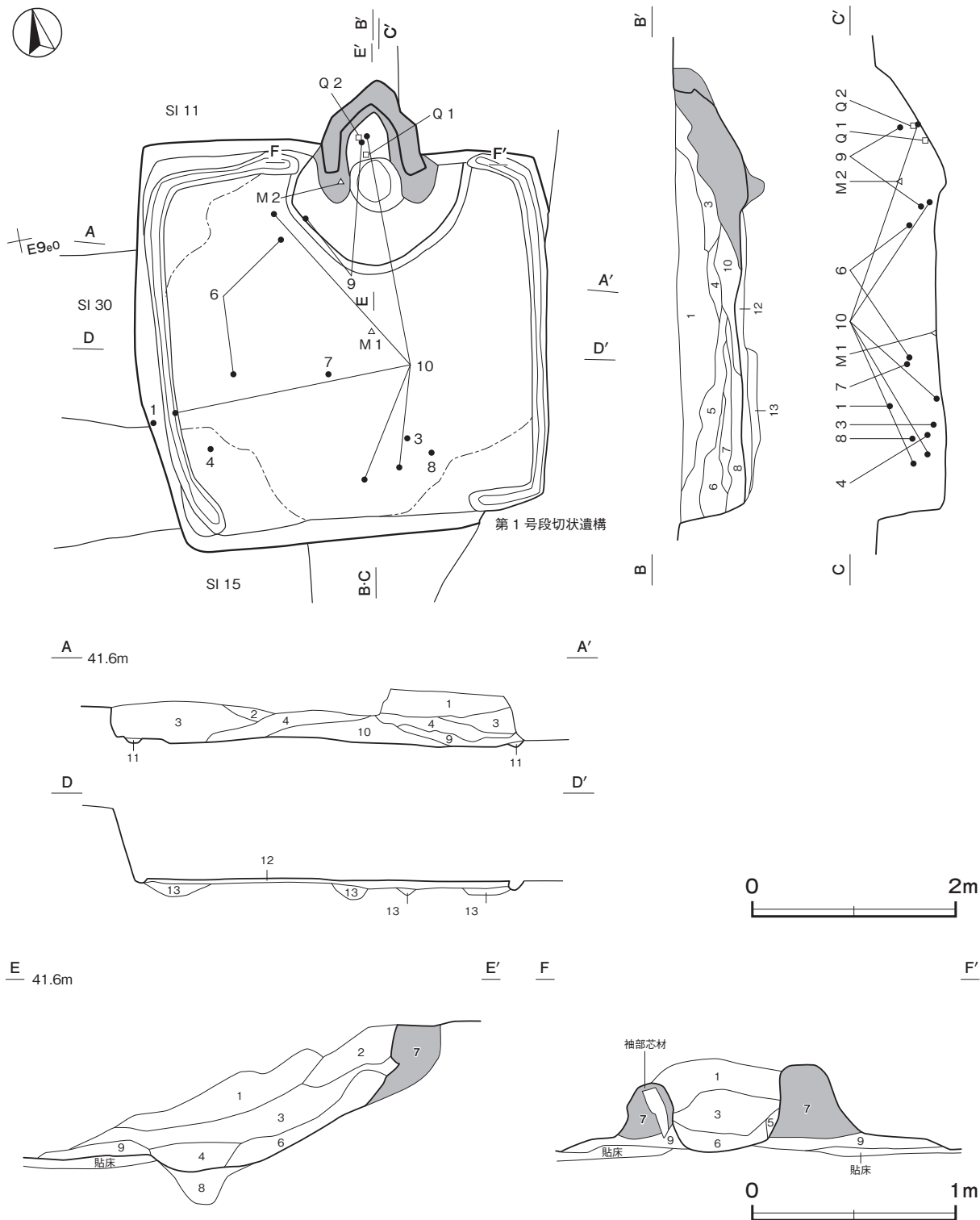
調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9e0 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

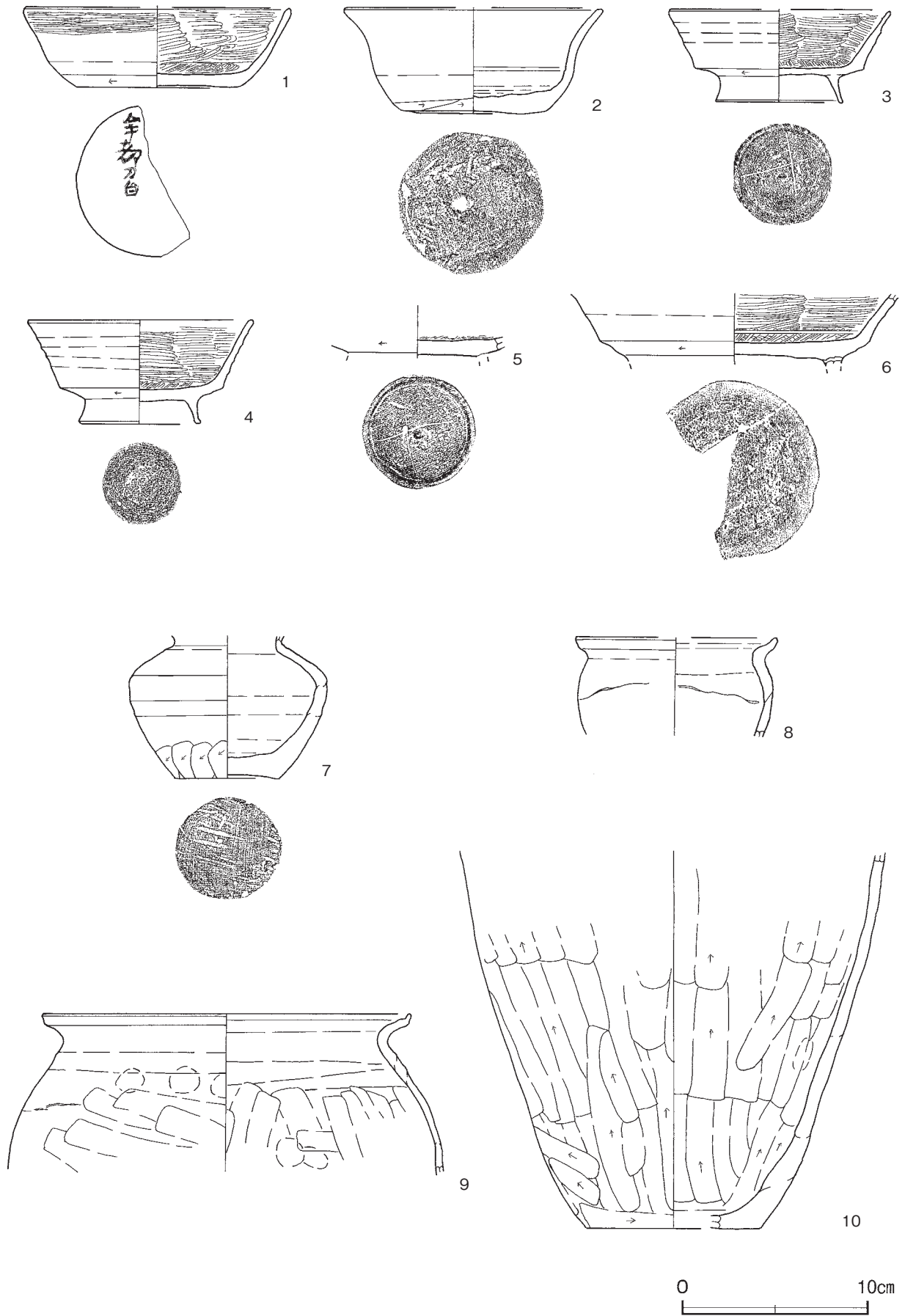
重複関係 第11・15・30号竪穴建物跡を掘り込み、第1号段切状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 東壁が第1号段切状遺構に掘り込まれているが、長軸4.04m、短軸4.00mの方形で、主軸方向はN-11°-Eである。壁は高さ60~65cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、南東壁、南西壁、北西壁際を除いて踏み固められている。貼床は、第12・13層を5~20cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が、竈付近及び南壁下の一部を除いて巡っている。



第308図 第10号竪穴建物跡実測図



第 309 図 第 10 号 竖穴建物跡出土遺物実測図(1)

竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは128cm、燃焼部の幅は50cmである。燃焼部は第9層が層圧10cmほど貼り付けられた後、30cmほど掘りくぼめられ、第8層で埋め戻されている。第9層は袖部の下位に位置し、竈の周辺に貼り付けられていることから、基盤と考えられる。袖部は、芯材として加工された凝灰質泥岩を第9層で固定した後、第9層の上面に第7層を積み上げて構築されている。火床面は地山及び第8層の上面で、火熱を受けているものの赤変硬化はしていない。煙道部は壁外に70cmほど掘り込まれ、火床面から外傾してから直立している。第1～6層には、焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|----------|---------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 6 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 7 浅黄褐色 | 粘土ブロック主体、焼土ブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量、粘土ブロック少量 | 8 暗赤灰色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 9 黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 | | |

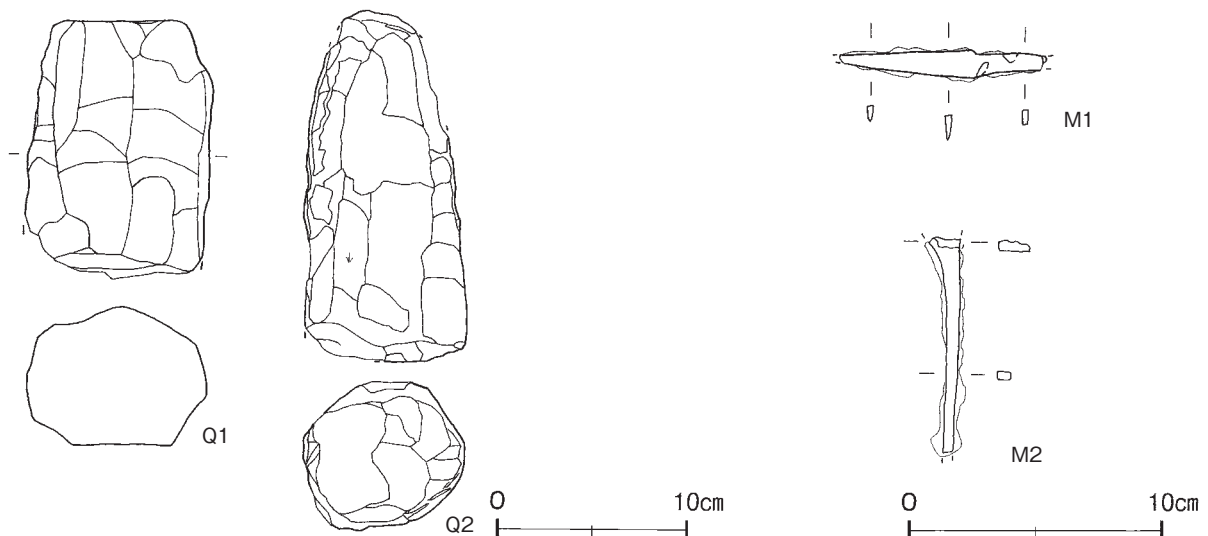
覆土 11層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第12・13層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 10 灰黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 | 11 明黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・鹿沼軽石ブロック少量 |
| 6 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 13 灰黄褐色 | ロームブロック・鹿沼軽石ブロック少量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片1,052点（坏107、高台付坏22、蓋5、盤7、鉢類4、甕類907）、須恵器片35点（坏16、蓋6、盤2、短頸壺1、甕類10）、石製品7点（支脚2、袖部芯材1、竈材4）、金属製品2点（刀子、鏃）のほか、縄文土器片42点（深鉢41、浅鉢1）、弥生土器片63点（壺類）、剥片2点（チャート、瑪瑙）が、全域から散在して出土している。多くの土器は比較的大型の破片で、接合関係が良好であることから、埋め戻しに伴って一括で投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。7については8世紀前葉から中葉の所産であることから、第11号竪穴建物跡からの混入と考えられる。



第310図 第10号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 10 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 309・310 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.2]	4.3	8.6	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横位の磨き 体部外面下端一方向の削り 内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り 内面二方向の磨き後見込みに沿って円状の磨き 内面黒色処理	覆土上層	30% PL92 「牟都刀目」 墨書
2	土師器	坏	[13.8]	5.7	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端一方向の削り 底部多方向の削り	覆土中	50% 煤附着
3	土師器	高台付坏	[11.8]	5.0	[6.8]	長石・石英・雲母・針状物質・赤色粒子	橙	普通	体部内面二方向の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って円状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	60%
4	土師器	高台付坏	12.0	5.7	6.2	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい黄橙	普通	体部内面二方向の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 「+」ヘラ書き 内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	95% PL93
5	土師器	高台付坏	-	(1.1)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	底部外面回転ヘラ削り 「+」のヘラ書き 内面二方向の磨き	覆土中	10%
6	土師器	高台付坏	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母・針状物質・赤色粒子	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り 「×」のヘラ書き 内面二方向の磨き後見込みに沿って円状の磨き 内面黒色処理	覆土中層	30%
7	須恵器	短頸壺	-	(7.7)	5.6	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部外面下端手持ち削り 底部一方向の削り	覆土中層	30% PL90 新治窯
8	土師器	小形甕	[10.6]	(5.3)	-	長石・石英・雲母・針状物質	灰黄褐	普通	口縁部横ナデ 口縁部横ナデ 体部外面劣化のため不明体部内面	覆土中層	10% 内面煤附着
9	土師器	甕	19.8	(8.6)	-	長石・石英・雲母・針状物質・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面口縁部後縦・横位のナデ 内面口縁部後縦・横位のナデ	覆土中層	20% 煤附着
10	土師器	甕	-	(20.3)	[9.4]	長石・石英・雲母・針状物質・赤色粒子	橙	普通	体部外面縦・斜位のナデ 内面縦位のナデ 底部外面多方向のナデ 内面見込みに沿ってナデ	覆土中層 覆土下層	30% 煤附着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	支脚	(13.5)	9.6	7.6	(554)	凝灰質泥岩	上・下面欠損 側面一方向の削り調整	覆土下層	
Q 2	支脚	18.3	8.5	8.5	(537)	凝灰質泥岩	上面調整不明 下面二方向の削り調整 側面一方向の削り調整	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(8.0)	1.2	0.3	(5.45)	鉄	刃部一部欠損 刃部断面三角形 茎部一部欠損 茎部断面長方形 両関	覆土下層	PL108
M 2	鎌	(8.5)	(1.3)	0.4	(9.22)	鉄	鎌身一部欠損 柄部一部欠損 頸部断面長方形	覆土中層	PL108

第 12A 号 竪穴建物跡 (第 311 図 PL41)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 d0 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 12B 号 竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 壁は、第 12B 号 竪穴建物への拡張時に掘り込まれているが、長軸 3.44 m、短軸 2.84 m の長方形で、主軸方向は N - 13° - E である。壁は高さ 5 ~ 6 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、全面が踏み固められている。貼床は、第 8 層を 10 cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が、北壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは 74 cm、燃焼部の幅は 50 cm である。燃焼部は床面から 20 cm ほど掘りくぼめられ、第 2・3 層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第 3 層上面に第 1 層を積み上げて構築されている。火床面は第 2・3 層の上面で、第 1 層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、第 12B 号 竪穴建物に掘り込まれていることから確認できなかった。

竈土層解説

- 1 浅黄褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック微量
- 3 褐灰色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片 1 点 (甌) が出土している。土器は小片で、貼床の構築土中から出土していることから、混入と考えられる。

所見 時期は、第 12B 号 竪穴建物の年代から 9 世紀前葉から中葉と推定できる。当跡の壁が壊されているにも関わらず、貼床面が残存していたことは、第 12B 号 竪穴建物へ拡張されても、当跡の床面を使用していた

ためと考えられる。

第 12B 号竪穴建物跡 (第 311 ~ 313 図 PL41)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 d0 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 9・11・12A・13・14 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 8 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 第 8 号竪穴建物に掘り込まれているが, 長軸 4.80 m, 短軸 4.66 m の長方形で, 主軸方向は N - 7° - E である。壁は高さ 20 ~ 26cm で, ほぼ直立もしくは外傾している。

床 平坦な貼床で, 東壁際及び西壁際を除いて踏み固められている。貼床は, 第 6 層を 10 ~ 20cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 第 8 号竪穴建物に掘り込まれている部分及び北壁西半部, 東壁, 南壁, 西壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 108cm, 燃焼部の幅は 70cm である。燃焼部は地山及び床面から 10cm ほど掘りくぼめられ, 第 9 層で埋め戻されている。袖部は, 芯材として加工された凝灰質泥岩を深さ 10 ~ 15cm のピットに第 8 層で固定した後, 床面及び第 8 層上面に第 5・6 層を積み上げて構築されている。火床面は地山及び第 7 層の上面で, 第 7 層は火熱を受けて赤変硬化している。また火床面の北端部からは, 深さ 10cm のピットが確認でき, 第 8 層で埋め戻されていたことから, 支脚が据えつけられていた可能性がある。煙道部は壁外に 60cm ほど掘り込まれ, 火床面から外傾している。第 1 ~ 5 に層は, 焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることや竈材が飛散していることから壊されている。

竈土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量	6 浅 黄 橙	粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量
2 褐 色	焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量	7 灰 黄 褐色	粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量
3 暗 褐 色	焼土ブロック中量, ロームブロック少量	8 黒 褐 色	ロームブロック少量
4 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量	9 暗 褐 色	ロームブロック少量
5 褐 色	ロームブロック少量		

ピット 19 か所。P 1 ~ P 5 は深さ 64 ~ 80cm で, 配置から主柱穴である。P 5 は, P 1 に掘り込まれていることから, 立て替えられている。P 6・P 7 は深さ 39cm・30cm で, 出入り口施設に伴うピットである。P 8 ~ P 19 は確認面からの深さ 40 ~ 71cm で, 壁に沿って配置されていることから, 壁柱穴の可能性がある。P 6 は深さ 40cm で, 出入り口施設に伴うピットもしくは壁柱穴の可能性がある。第 4 ~ 7 層は埋土で, 第 7 層は P 5 の覆土である。第 3 層は柱痕跡, 第 1・2 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 2・P 3・P 7 の底面で, 柱の当たりを確認した。

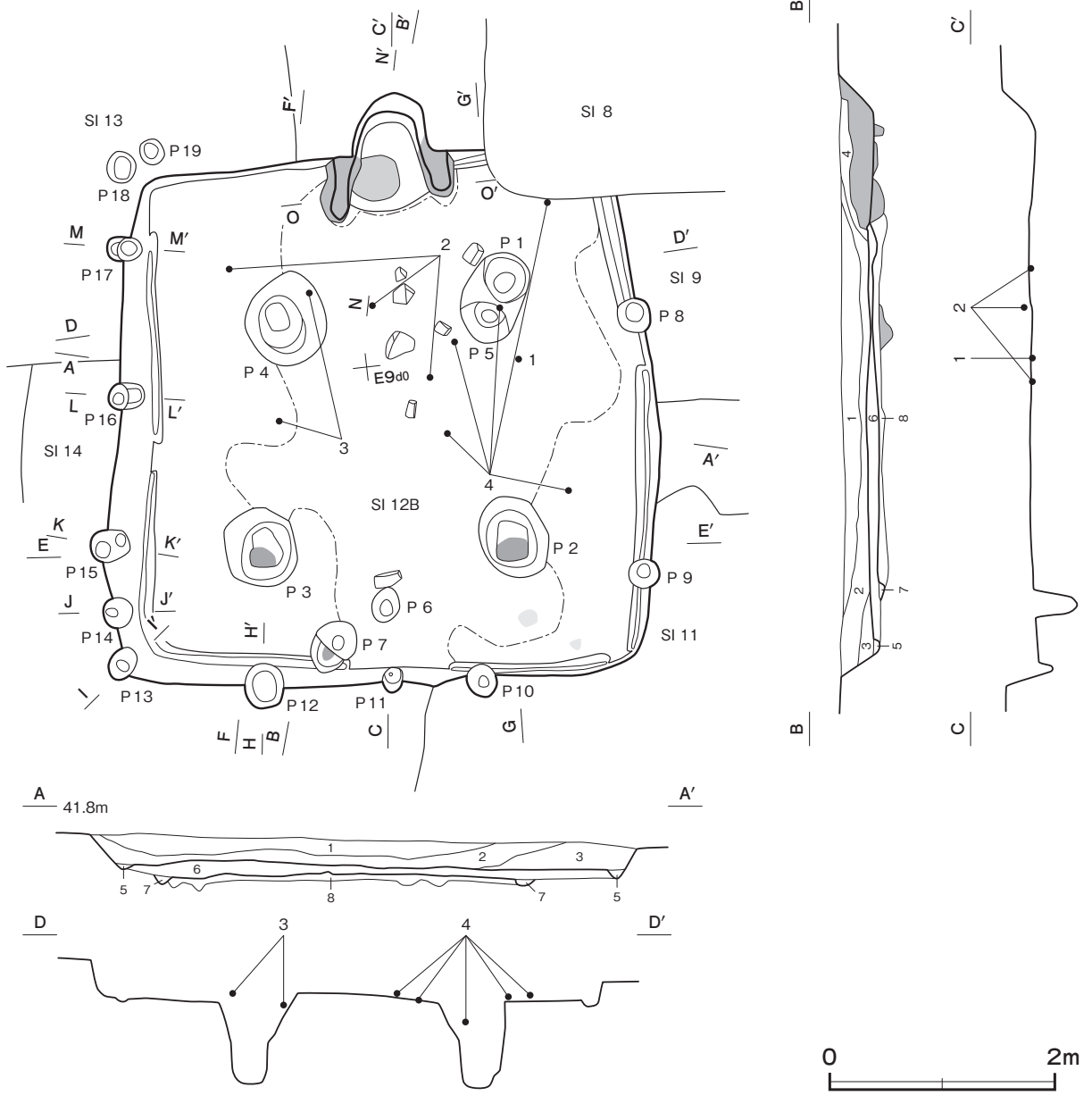
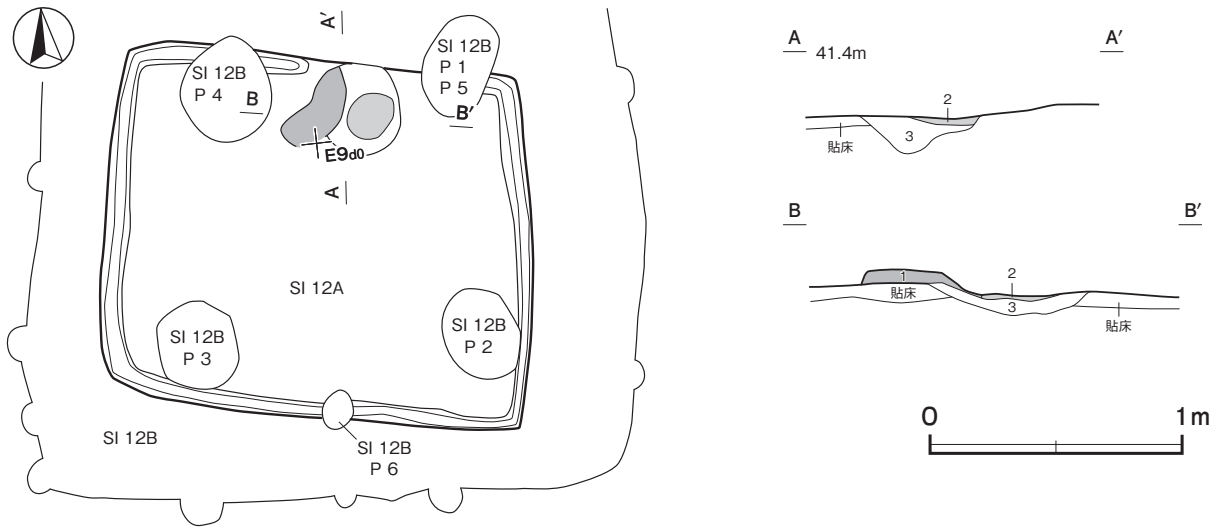
ピット土層解説 (各ピット共通)

1 黒 褐 色	ロームブロック・焼土粒子少量	5 暗 褐 色	ロームブロック少量
2 にぶい黄褐色	ロームブロック少量	6 褐 色	ロームブロック中量
3 黒 褐 色	ローム粒子少量	7 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
4 灰 黄 褐色	ロームブロック中量		

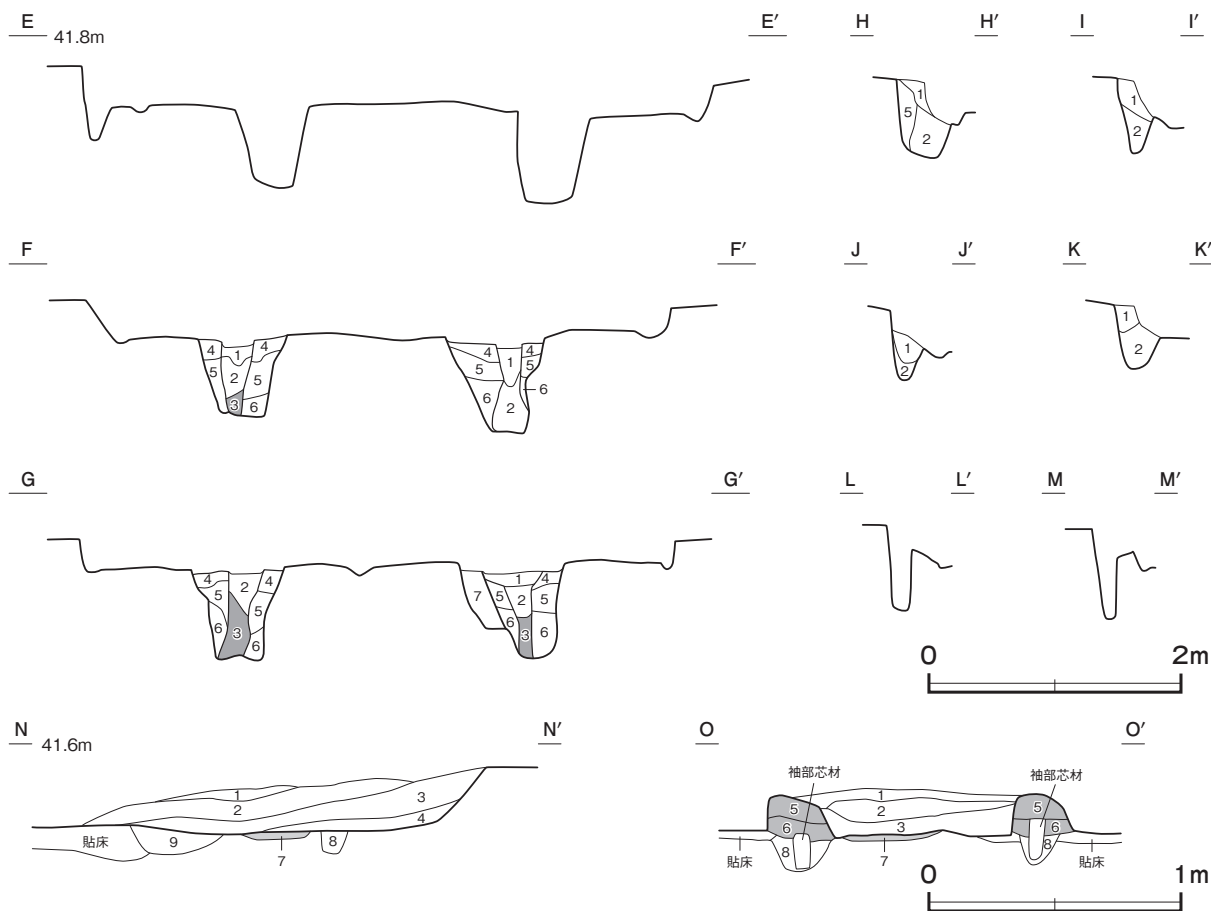
覆土 5 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。第 6 層は貼床の構築土である。第 7・8 層は拡張前の第 12A 号竪穴建物跡に伴う堆積層で, 第 7 層は壁溝の覆土, 第 8 層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗 褐 色	ローム粒子少量	5 褐 色	ロームブロック少量
2 黒 褐 色	ローム粒子少量	6 にぶい黄褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
3 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子少量	7 黒 褐 色	ロームブロック少量
4 褐 灰 色	ローム粒子少量, 焼土ブロック・粘土ブロック微量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック中量



第 311 图 第 12A · 12B 号竖穴建物迹实测图



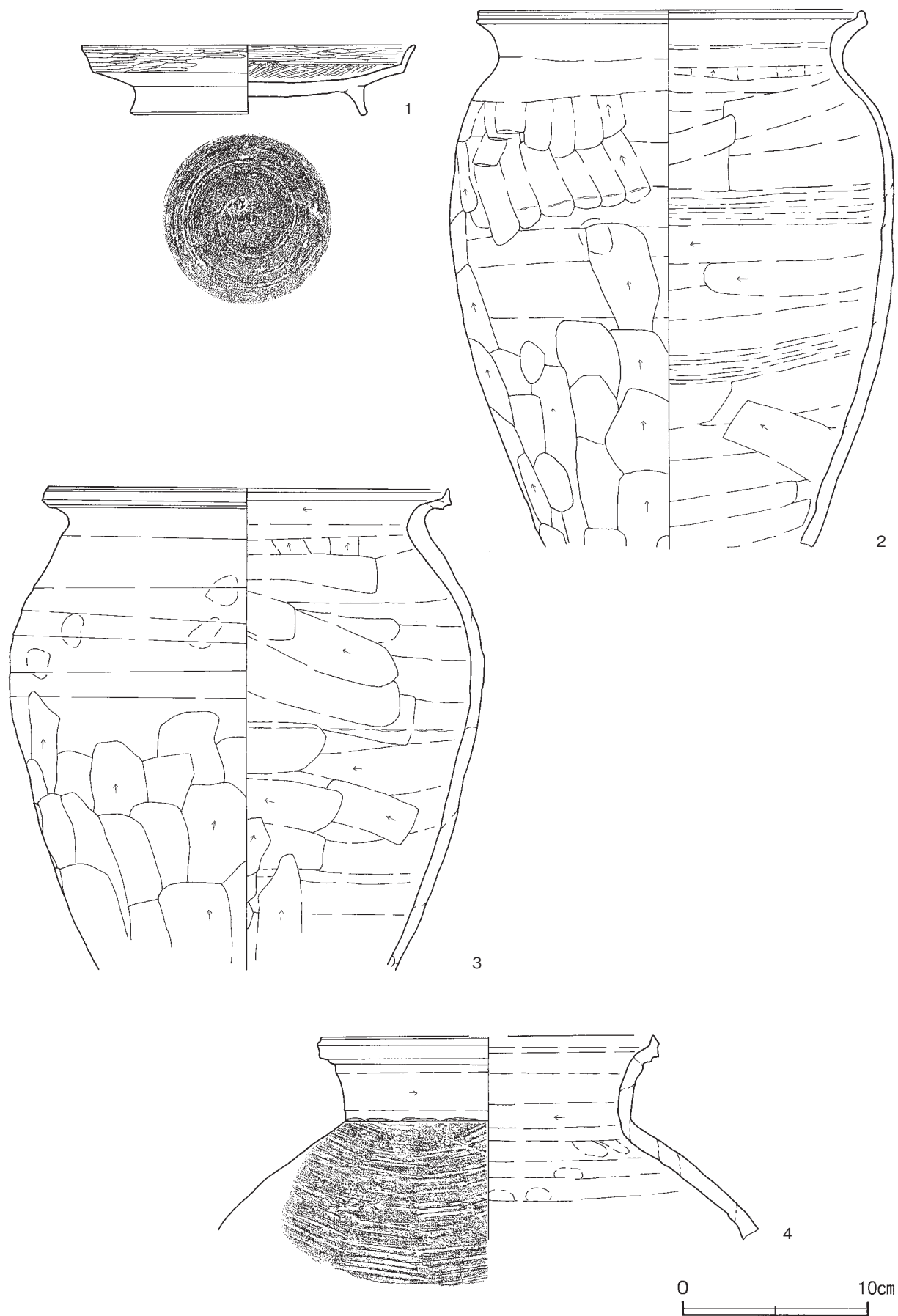
第 312 図 第 12B 号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 698 点 (坏 40, 高台付坏 1, 蓋 2, 盤 2, 甕類 653), 須恵器片 9 点 (坏 5, 高台付坏 1, 短頸壺 1, 甕類 2), 石器 6 点 (砥石), 石製品 10 点 (袖部芯材 2, 竈材 8) のほか, 縄文土器片 18 点 (深鉢), 弥生土器片 48 点 (壺類) が, 主に北半部から出土している。土器は大型の破片から小片まで含まれている。大型の破片の接合関係は比較的良好であることや床面に比較的近い高さで出土していることから, 廃絶に伴って廃棄されたと考えられる。小片は覆土中からの出土であることから, 埋没の過程で投棄されたものである。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉であるが, 重複関係から第 8 号竪穴建物跡よりも古段階に比定できる。本跡の壁に沿って, 12 か所のピットが確認できたことから, 壁建ちの建物であったことが想定できる。

第 12B 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 313 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	盤	17.8	3.7	12.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横位の磨き 体部内面横位の磨き 底部外面回転へら削り 内面二方向の磨き 後見込みに沿って凹状の磨き 内面黒色処理	床面直上	90% PL95
2	土師器	甕	20.8	(29.0)	-	雲母・針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ロクロナデ後縦位のナデ 下端に縦位の削り 内面縦位のナデ後横位のナデ	覆土第 2 層中	80% PL98 煤付着
3	土師器	甕	21.6	(26.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ロクロナデ後下端に縦位の削り 内面縦位のナデ後横位のナデ	覆土第 2 層中 P 4 第 1 層中	40% 煤付着
4	須恵器	甕	[17.8]	(11.0)	-	長石・石英・針状物質・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面ロクロナデ 体部外面横位の平行叩き 内面ロクロナデ 指頭痕 酸化炎焼成	覆土第 2 層中 P 5 第 1 層中	30% 産地不明



第 313 图 第 12B 号竖穴建物跡出土遺物実測図

第 16 号竪穴建物跡 (第 314 ~ 316 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 e8 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 15 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 5.06 m, 短軸 4.15 m の長方形で, 主軸方向は N - 10° - E である。壁は高さ 20 ~ 40cm で, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 北東隅部, 南東隅部, 南西隅部, 北西隅部の壁際を除いて踏み固められている。貼床は, 第 7・8 層を 10 ~ 30cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 竈付近及び北東隅部, 南西隅部, 北西隅部, 南壁中央部の壁下を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 134cm, 燃烧部の幅は 64cm である。燃烧部は床面から 20cm ほど掘りくぼめられ, 第 10・11 層で埋め戻されている。袖部は, 床面及び第 10・11 層上面に第 6 ~ 9 層を積み上げて構築されている。火床面は第 10・11 層の上面で, 第 10 層は火熱を受けて赤変硬化している。Q 2・Q 3 は下端部が第 10・11 層中に据えつけられていることから, 支脚として用いられている。煙道部は壁外に 50cm ほど掘り込まれ, 火床面から外反している。第 2 ~ 5 に層は, 焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることや P 4 周辺に竈材が廃棄されていることから壊されている。第 1 層は, 廃絶後の覆土である。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック少量, ロームブロック微量 | 7 におい黄褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 浅黄橙色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量 | 8 灰黄褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 3 灰黄褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 9 浅黄橙色 ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 4 におい黄褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 10 明赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック少量 |
| 5 赤褐色 焼土ブロック多量, 粘土ブロック少量 | 11 におい黄褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量 | |

ピット 11 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 58 ~ 84cm で, 配置から主柱穴である。第 3 ~ 5 層は埋土, 第 1・2 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 5 ~ P 9 は深さ 30 ~ 74cm で, 壁に沿って配置されていることから, 壁柱穴の可能性もある。また P 5・P 9 については, 竈の袖部付近に配置されていることから, 竈との関連性も考えられる。P10・P11 は主柱穴の間に配置されていることから, 補助柱穴と考えられる。P 1・P 3・P 4・P 7 の底面で, 柱の当たりを確認した。

P1 ~ P 4 土層解説

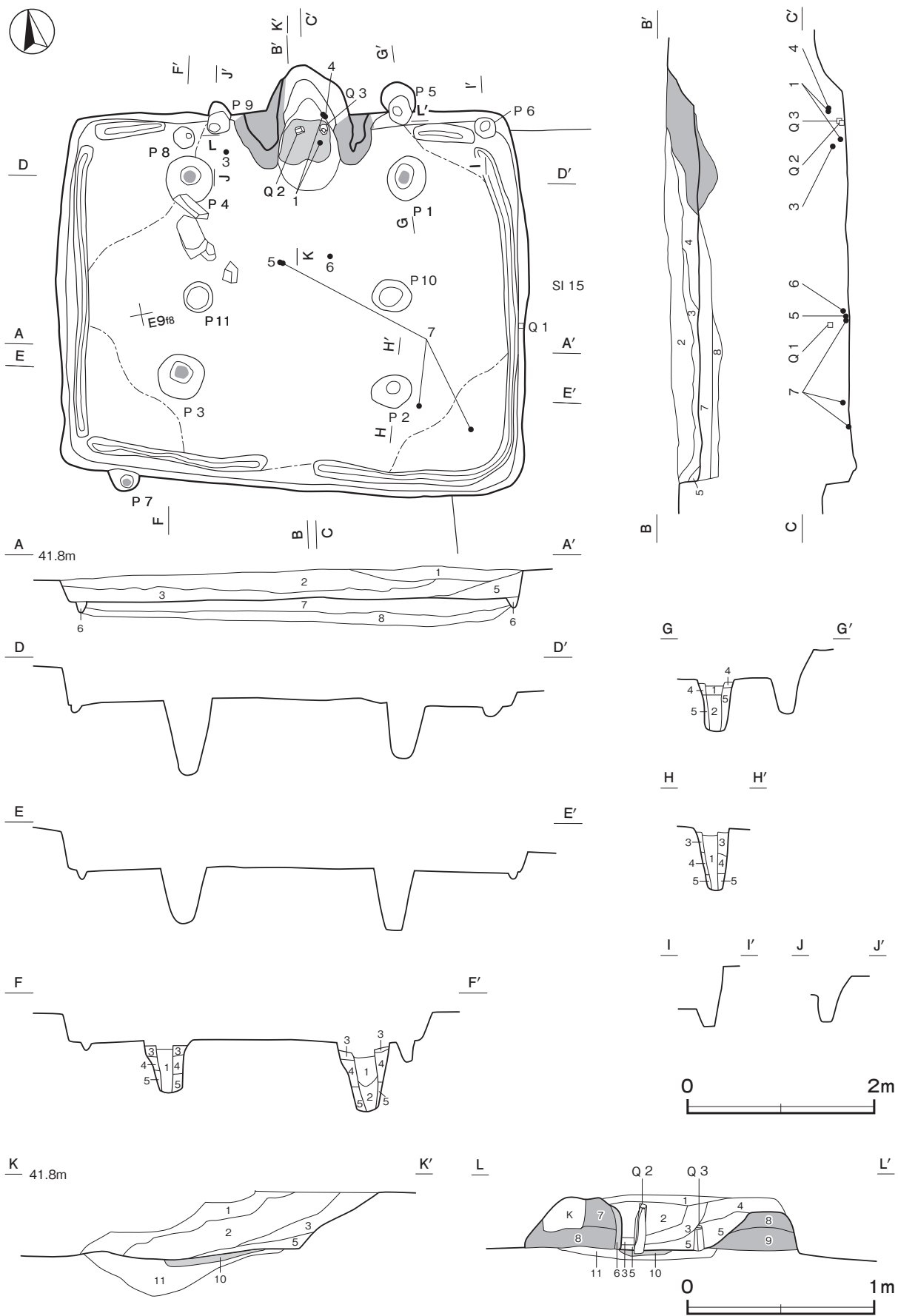
- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 4 におい黄褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 5 灰黄褐色 ロームブロック少量 |
| 3 灰黄褐色 ロームブロック中量 | |

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。第 7・8 層は貼床の構築土である。

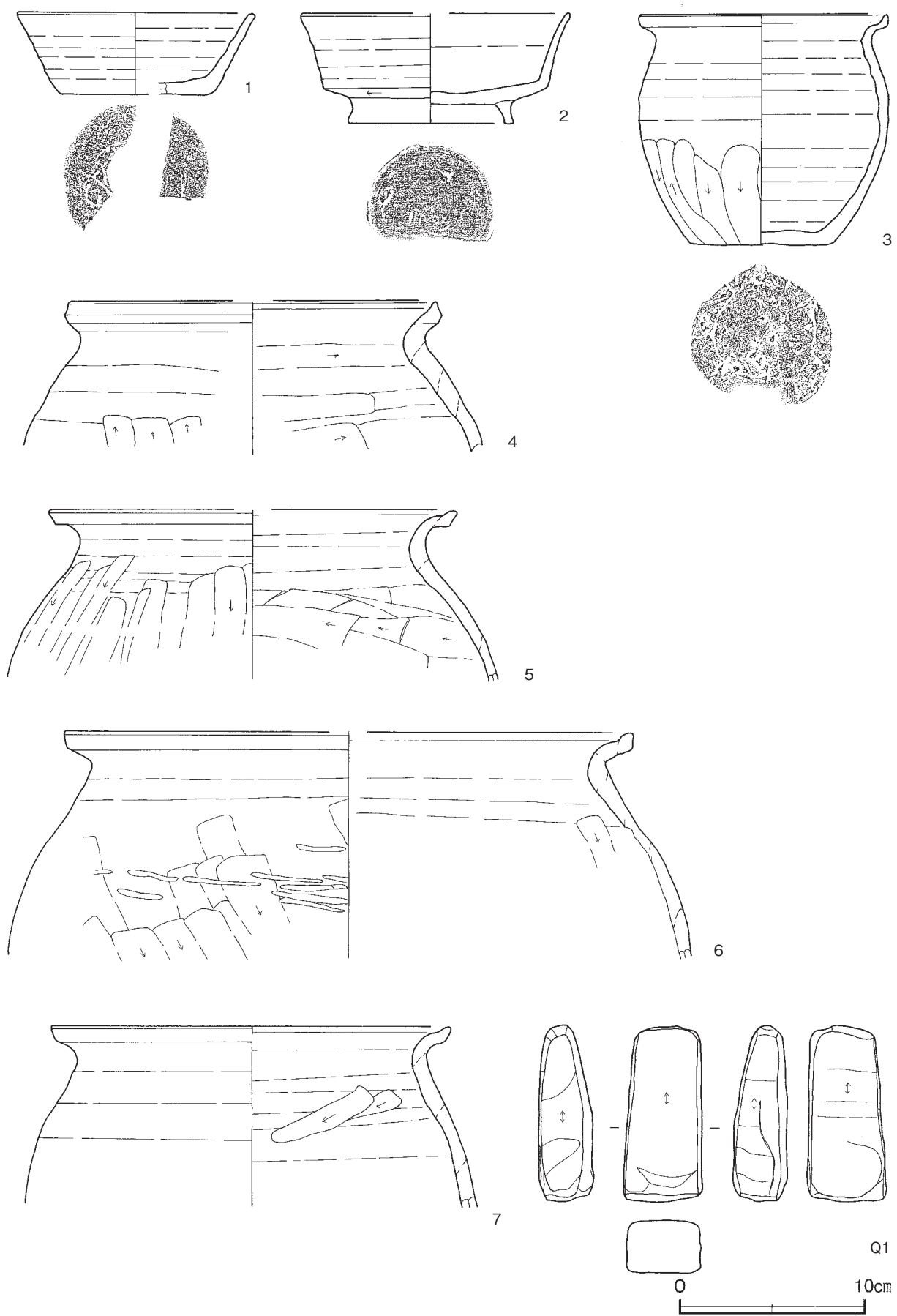
土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 におい黄褐色 ロームブロック少量 |
| 3 褐灰色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 7 におい黄褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量 |
| 4 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量 | 8 灰黄褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 545 点 (坏 18, 高台付坏 5, 蓋 3, 甕類 519), 須恵器片 32 点 (坏 8, 高台付坏 2, 蓋 5, 甕類 17), 石器 1 点 (砥石), 石製品 3 点 (支脚 2, 竈材 1) のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 弥生土器片 1 点 (壺類) が, 全域から散在して出土している。多くの土器は, 接合関係が比較的良好であることから, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。3 は竈周辺から良好な遺存状態で出土していることから, 竈の廃絶に伴って廃棄されたと考えられる。

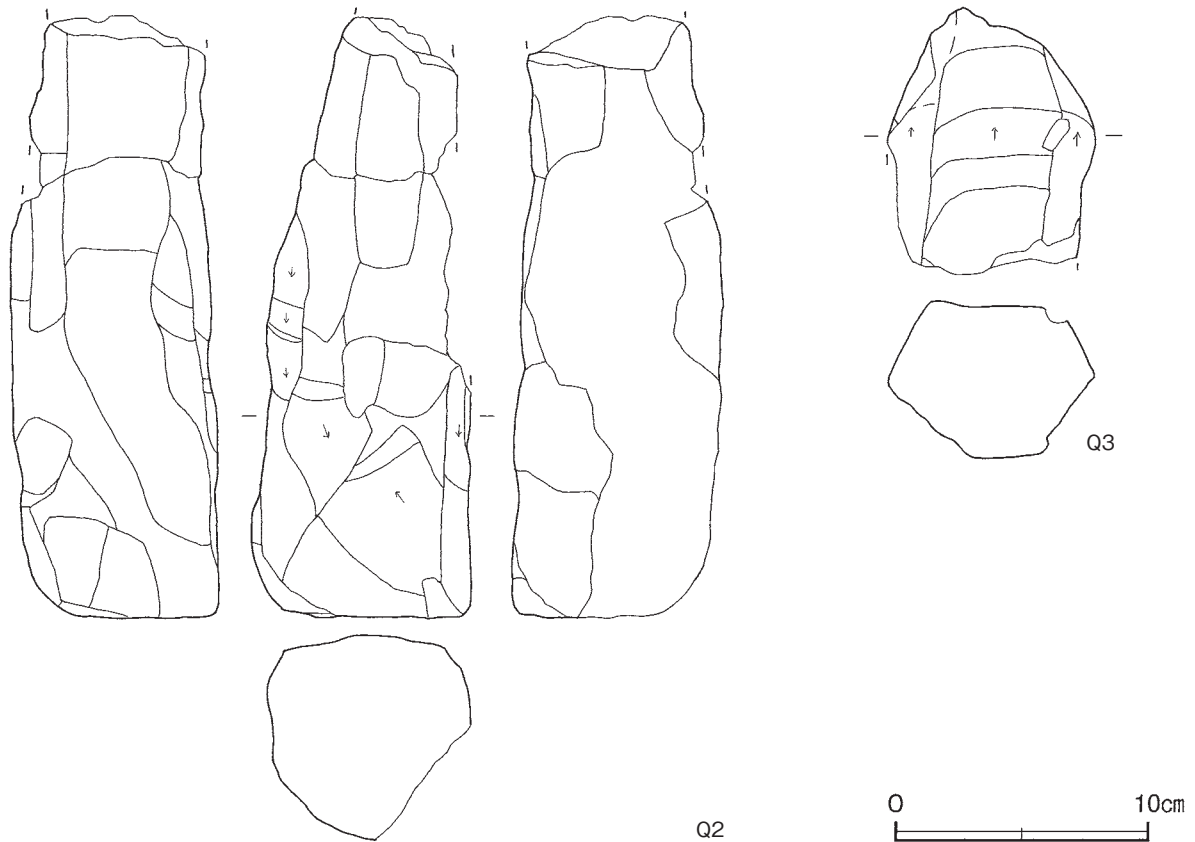


第 314 图 第 16 号竖穴建物迹实测图



第 315 图 第 16 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。竈からは長短の支脚が各1本ずつ据え付けられていたことから、小形甕と甕の二掛けであったと考えられる。



第 316 図 第 16 号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 16 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 315・316 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[12.7]	4.4	7.8	長石・石英・針状物質	灰	普通	ロクロナデ 底部一方向のナデ	竈覆土中層	40% PL96 木葉下窯
2	須恵器	高台付坏	[14.5]	5.9	8.8	長石・石英・針状物質・細礫	灰	良好	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後高台部貼付	竈覆土中	40% PL96 木葉下窯
3	土師器	小形甕	13.2	12.5	7.8	長石・石英・針状物質	橙	普通	ロクロナデ 体部外面下端縦位の削り 底部多方向のナデ	覆土第4層中	70% PL97 二次焼成 煤付着
4	土師器	甕	[19.8]	(8.2)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	ロクロナデ 体部外面縦位の削り 体部内面横位のナデ	竈覆土中層	10% 煤付着
5	土師器	甕	[21.7]	(9.1)	-	長石・石英・針状物質・細礫	にぶい橙	普通	ロクロナデ 体部外面縦位のナデ 体部内面横位のナデ	覆土第3層中	20% 煤付着
6	土師器	甕	[30.5]	(12.4)	-	長石・石英・赤色粒子・細礫	橙	普通	ロクロナデ 体部外面縦・斜位のナデ ヘラ圧痕 体部内面劣化のため調整不明 わずかに縦位のナデ	覆土第3層中	20% 煤付着
7	土師器	甕	21.5	(9.8)	-	長石・石英・針状物質・細礫	にぶい橙	普通	ロクロナデ 体部内面部分的な斜位のナデ	覆土第3層中	30% 煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	砥石	9.7	4.5	2.8	241.67	緑色変成岩	砥面 4 面	覆土第 2 層中	
Q 2	支脚	(23.9)	7.8	7.4	(824)	凝灰質泥岩	上部欠損 側面削り調整 底部一方向の削り調整	火床面	
Q 3	支脚	(10.6)	8.2	6.3	(259)	凝灰質泥岩	下部欠損 側面削り調整 底部一方向の削り調整	火床面	

第 18 号竪穴建物跡 (第 317・318 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E10f1 区、標高 41 m ほどの台地緩斜面に位置している。

重複関係 第1号溝，第1号段切状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 西半部が第1号溝跡に掘り込まれていることから，南北軸は3.92 mで，東西軸は1.44 mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが，主軸方向は不明である。確認できた部分での壁は，高さ8～13cmで，ほぼ直立している。

床 第1号溝に掘り込まれた部分及び削平された部分を除いて，ほぼ平坦で，地山が踏み固められている。壁溝が，北壁及び南壁下の一部で確認できた。

ピット P1は長径110cm，短径98cmの楕円形である。深さ20cmで，壁は外傾している。覆土は，ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。配置から貯蔵穴の可能性はある。

ピット土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量

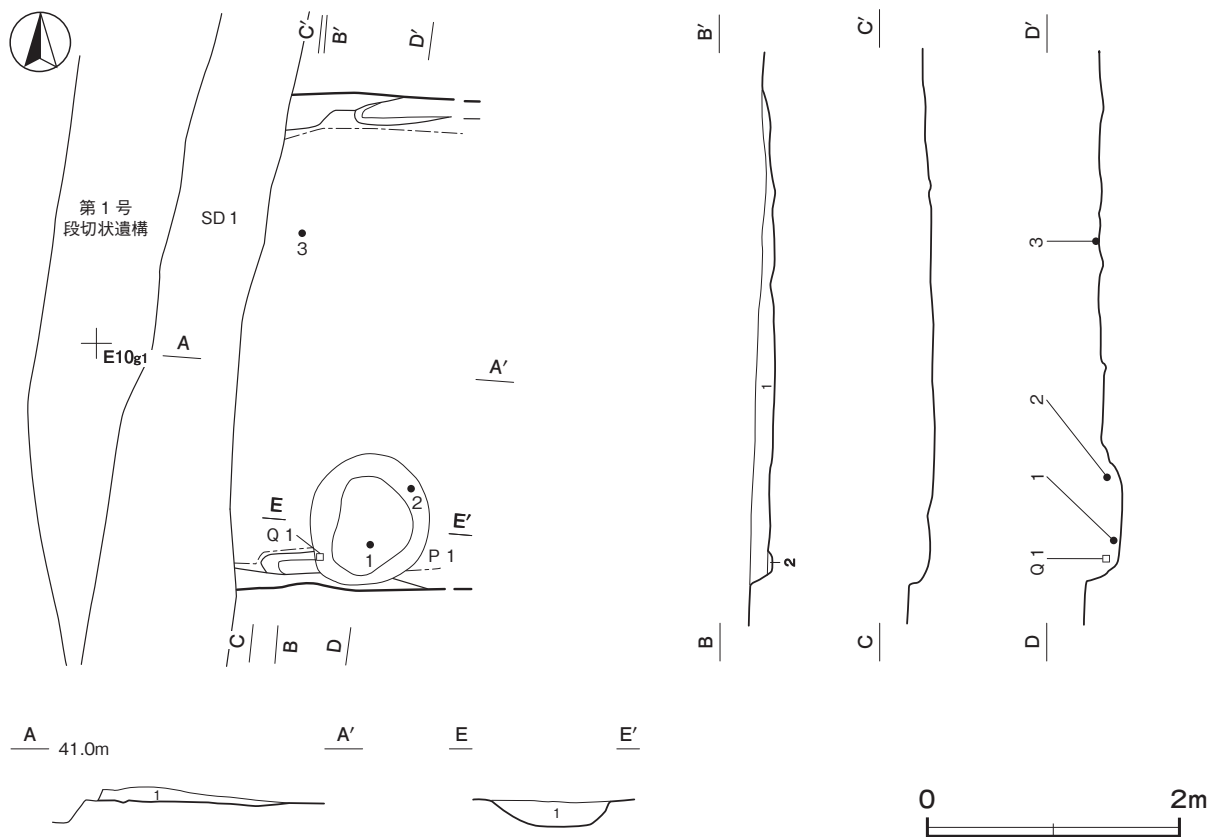
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

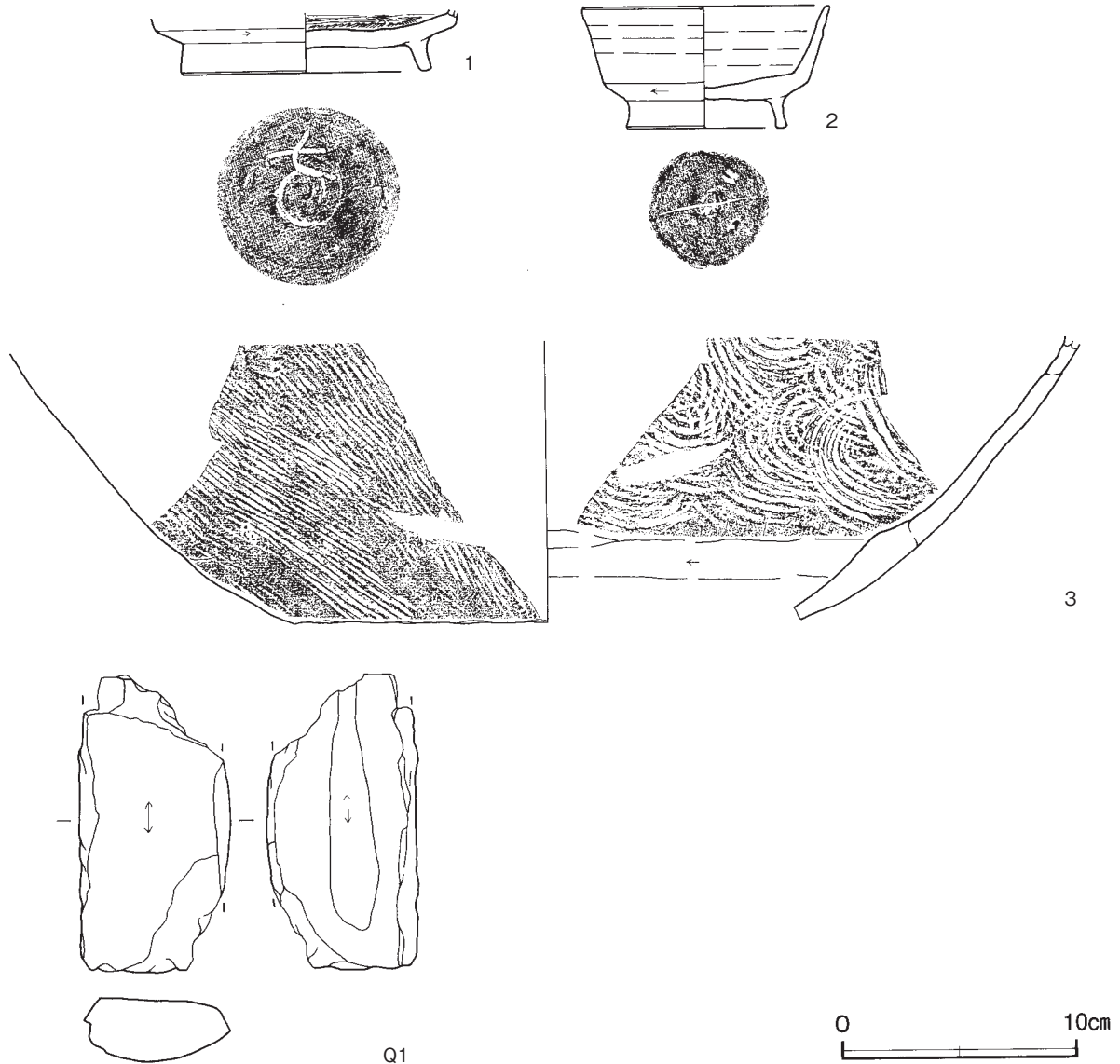
1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量 2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片44点（坏1，高台付坏1，盤1，鉢類1，甕類40），須恵器片5点（高台付坏1，甕類4）石器1点（砥石）のほか，縄文土器片5点（深鉢），弥生土器片5点（壺類）が，全域から散在して出土している。多くの土器は，接合関係に乏しいことから，破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。1・2はP1から良好な遺存状態で出土していることから，廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は，出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第317図 第18号竪穴建物跡実測図



第 318 図 第 18 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 18 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 318 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	-	(2.6)	10.6	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 「七」のヘラ書き 内面二方向の磨き 内面黒色処理	P 1 覆土中層	40% PL95
2	須恵器	高台付坏	10.4	5.2	6.6	長石・石英・針状物質・細礫	暗灰黄	良好	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り後高台部貼付 「一」のヘラ書き	P 1 覆土中層	80% PL96 木葉下窯
3	須恵器	甕	-	(12.2)	-	長石・石英・針状物質・細礫	黄灰	良好	体部外面斜位の平行叩き 斜位二方向のナデ 体部内面同心円状の叩き 下端横位のナデ	覆土下層	10% 木葉下窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	砥石	(12.8)	2.6	2.8	(309.50)	凝灰岩	上面欠損 下面調整不明 側面縦位の削り調整	P 1 覆土中層	

第 19 号竪穴建物跡 (第 319 ~ 321 図 PL42)

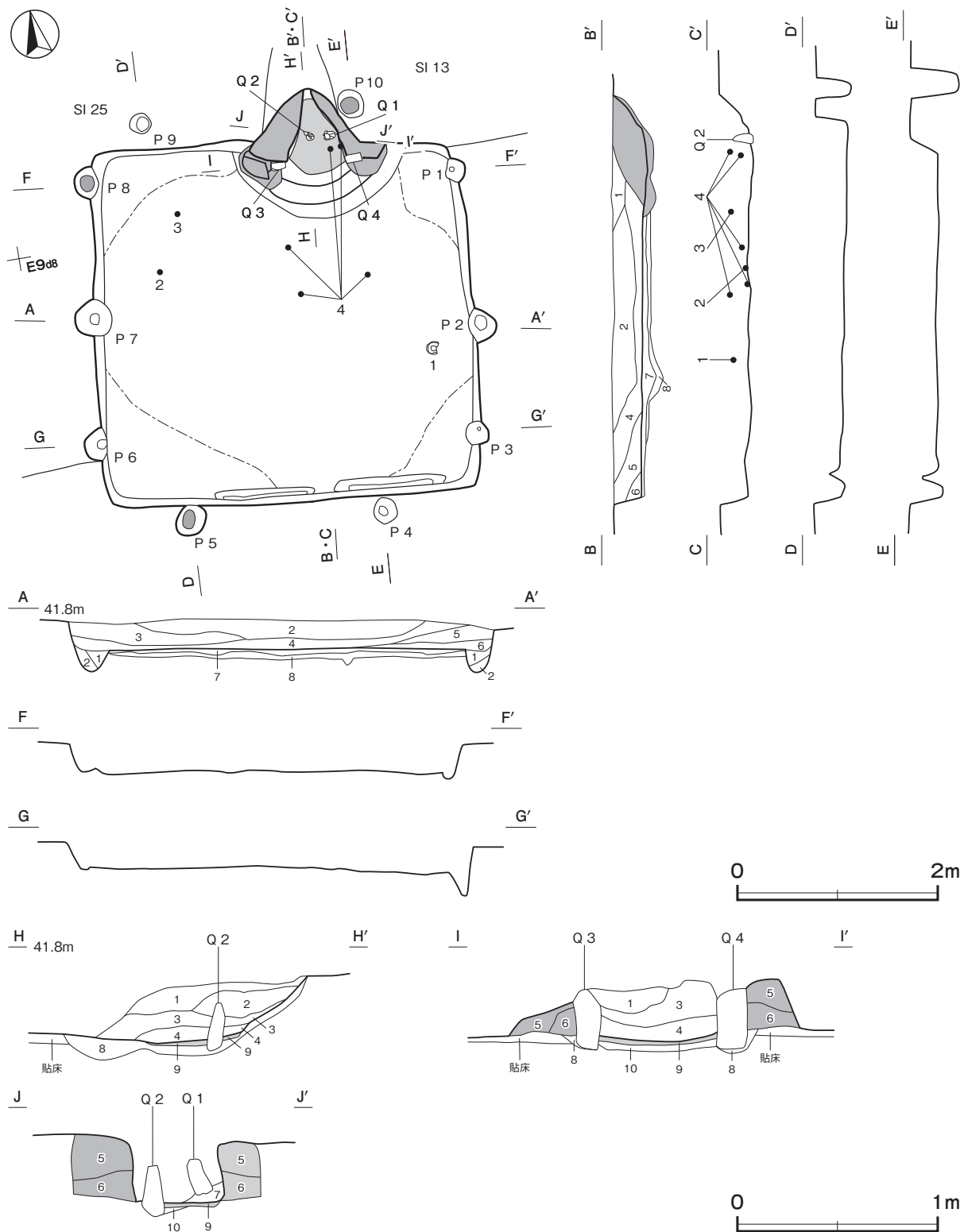
調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 d8 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 13・25 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.80 m, 短軸 3.64 m の方形で, 主軸方向は $N - 6^\circ - E$ である。壁は高さ 22 ~ 28cm で, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 四隅の壁際を除いて踏み固められている。貼床は, 第 7・8 層を 10 ~ 20cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 南壁下の中央部で確認できた。

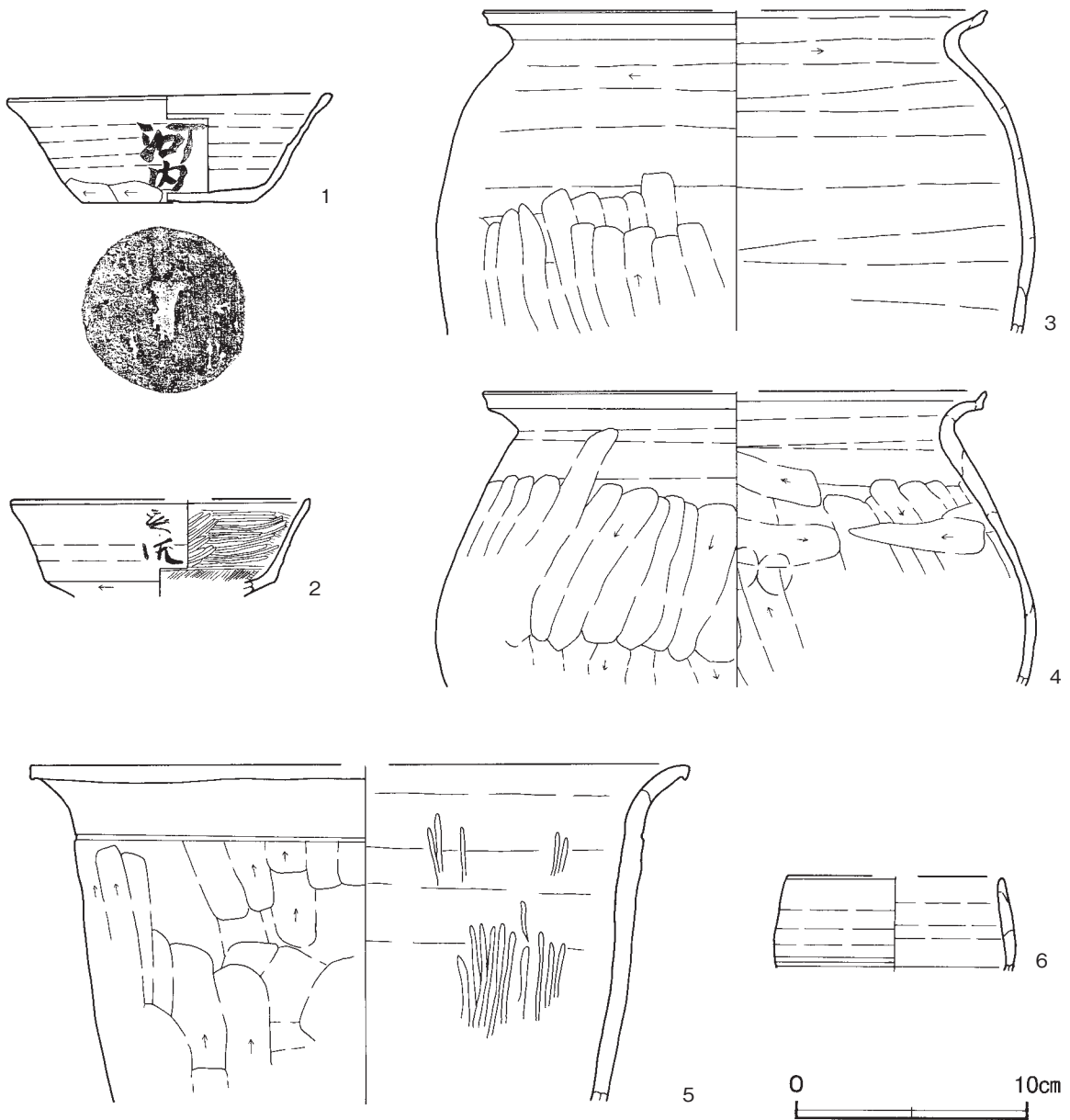


第 319 図 第 19 号 竪穴建物跡実測図

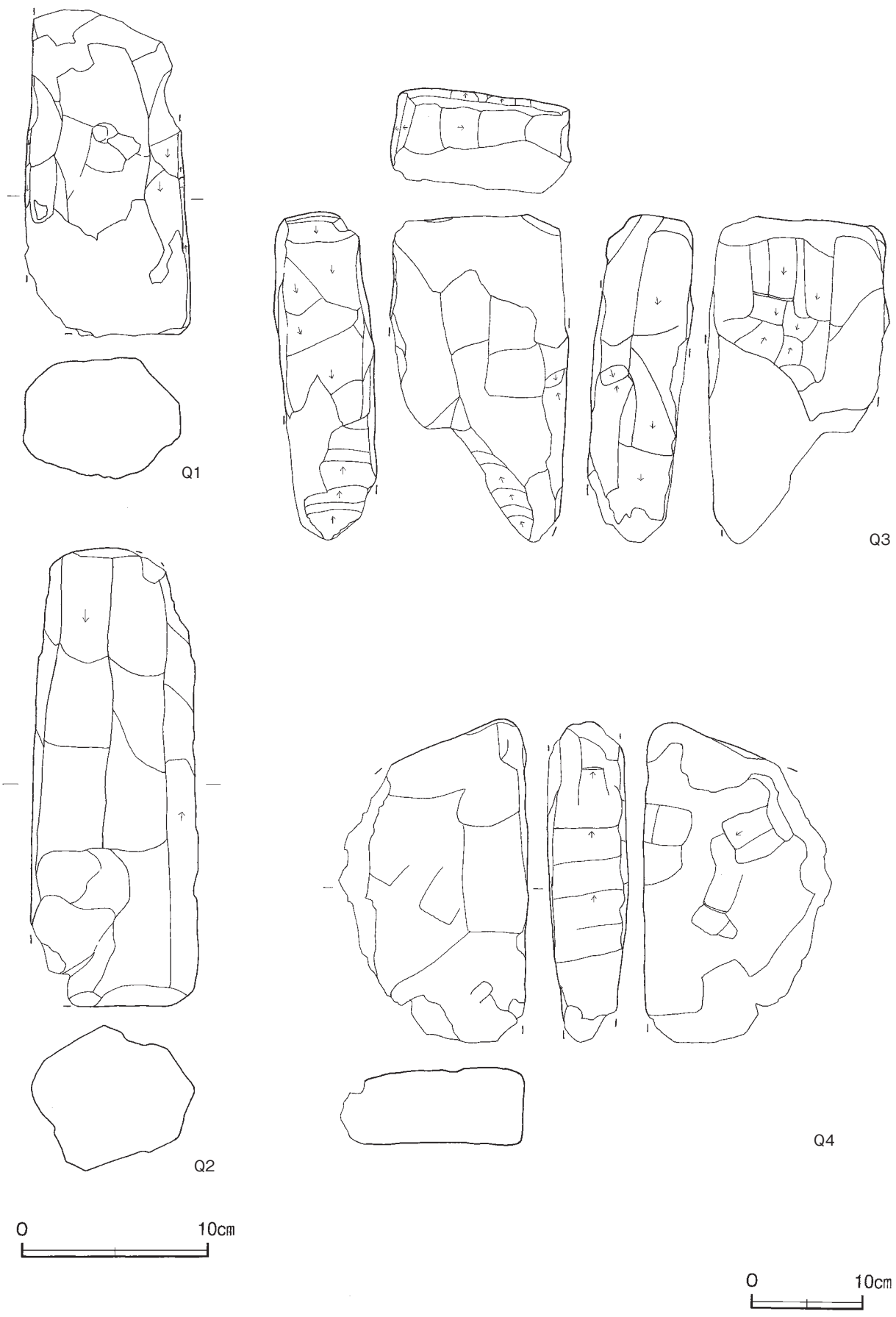
竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは102cm， 燃烧部の幅は54cmである。燃烧部は床面から20cmほど掘りくぼめられ， 第9・10層で埋め戻されている。袖部は， 芯材としてQ3・Q4を深さ10～18cmのピットに第8層で固定させた後， 地山及び床面上に第5・6層を積み上げて構築されている。袖の構築土から露呈した状態で確認したQ3・Q4は， 赤色に変化していないことから， 袖部の構築土によって覆われていたと考えられる。火床面は第9・10層の上面で， 第9層は火熱を受けて赤変硬化している。Q2は下端部が第9・10層で， Q1は第7層で埋められ据えつけられていることから， 支脚として用いられている。煙道部は壁外に50cmほど掘り込まれ， 火床面から外傾している。第1～4層には， 焼土ブロックや粘土ブロックが含まれており， Q3・Q4が露呈して確認できたことから壊されている。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1 明黄褐色 粘土ブロック中量， 焼土ブロック少量 | 6 褐色 粘土ブロック少量， ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 7 灰黄褐色 粘土ブロック中量， ロームブロック少量 |
| 3 褐灰色 焼土ブロック少量， ロームブロック微量 | 8 褐灰色 ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 焼土ブロック少量， 粘土ブロック微量 | 9 暗赤褐色 焼土ブロック中量， ロームブロック微量 |
| 5 灰黄褐色 粘土ブロック中量， 焼土ブロック微量 | 10 におい黄褐色 ロームブロック少量 |



第320図 第19号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 321 図 第 19 号 豎穴 建物 跡 出土 遺物 実測 図(2)

重複関係 第1号段切状遺構に掘り込まれている。

掘方の規模と形状 第1号段切状遺構によって東半部や床面が掘り込まれていることから、南北軸は3.75 mで、東西軸は2.20 mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。掘方は、南西隅部と北西隅部が一段低く掘り込まれていることから、隅部を掘り込む構造と推定できる。南西隅部の掘り込みの規模は、長軸122cm、短軸80cmの不整な台形である。深さは20cmほどで、壁は直立もしくは外傾し、底面は凹凸である。北西隅部の掘り込みの規模は、長軸176cm、短軸110cmの長方形である。深さは20～40 cmほどで、壁は直立し、底面は凹凸である。

貼床構築土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、床の構築に伴って埋め戻されている。

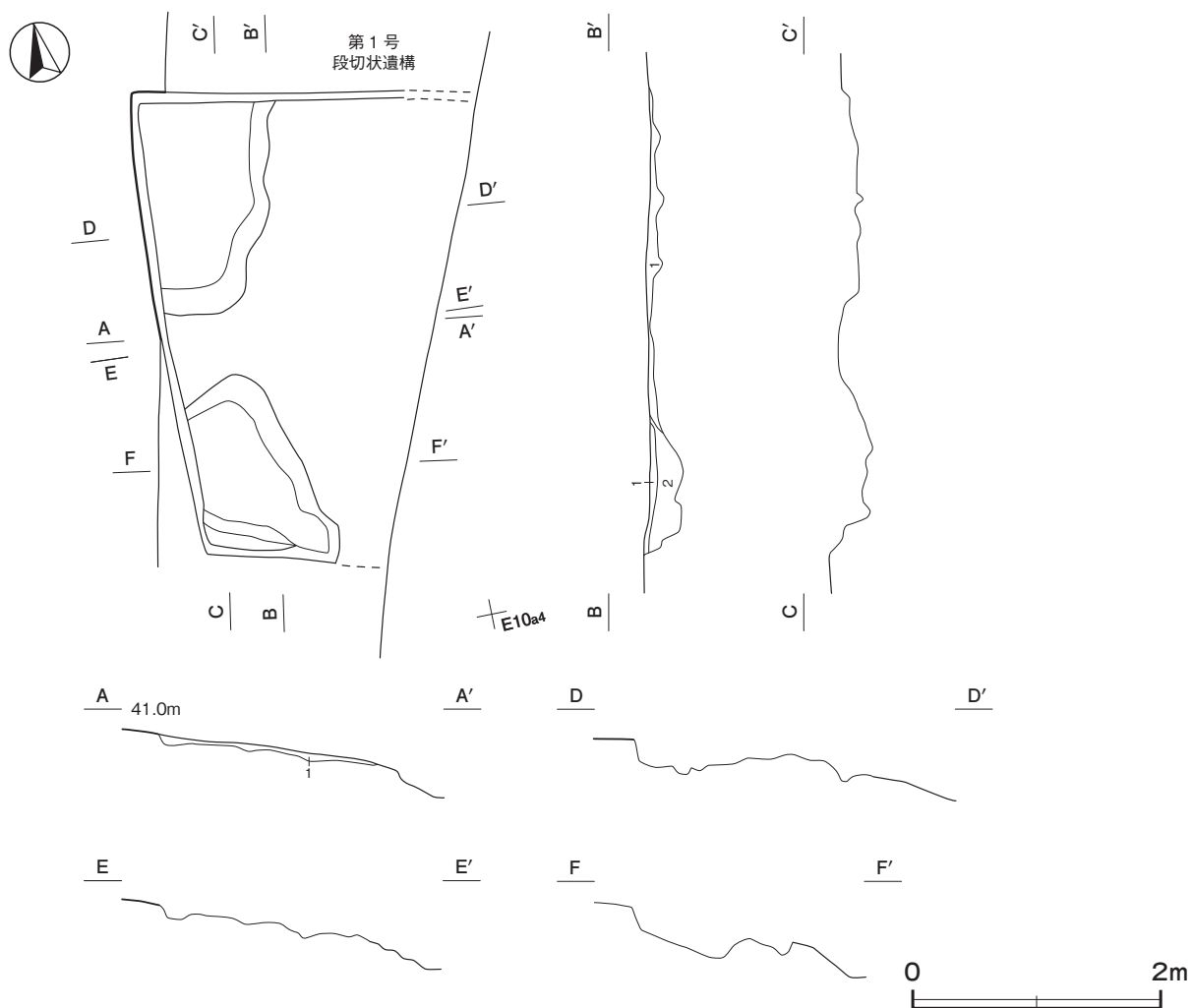
貼床構築土層解説

1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片16点（蓋1，甕類15）のほか、弥生土器片2点（壺類）が、全域から散在して出土している。多くの土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損したものが埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器からは明確にできないものの、確認できた壁の軸線や掘方の標高が、周辺に位置する第18号竪穴建物跡とほぼ同じであることから、9世紀前葉と推定できる。



第322図 第20号竪穴建物跡実測図

第 21 号 竪穴建物跡 (第 323 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E10a3 区, 標高 41 m ほどの台地緩斜面に位置している。

重複関係 第 1 号段切状遺構に掘り込まれている。

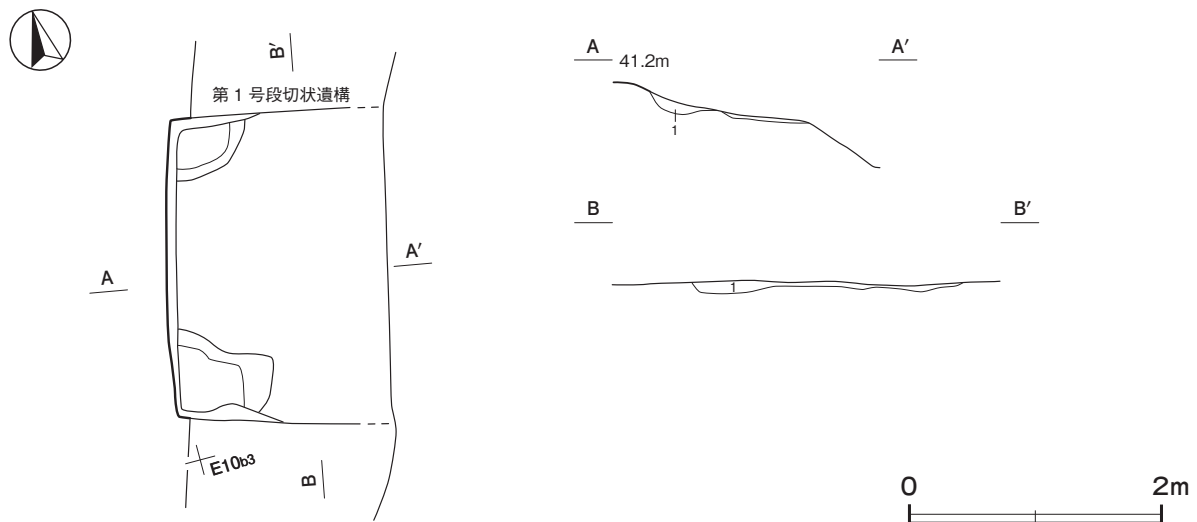
掘方の規模と形状 第 1 号段切状遺構によって東半部や床面が掘り込まれていることから, 南北軸は 2.49 m で, 東西軸は 1.75 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが, 主軸方向は不明である。掘方は, 南西隅部と北西隅部が一段低く掘り込まれていることから, 隅部を掘り込む構造と推定できる。南西隅部の掘り込みの規模は, 長軸 78cm, 短軸 68cm の不整な長方形である。深さは 10cm ほどで, 壁は外傾し, 底面は凹凸である。北西隅部の掘り込みの規模は, 長軸 58cm, 短軸 48cm の扇形である。深さは 10cm ほどで, 壁は外傾し, 底面は凹凸である。

貼床構築土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから, 床の構築に伴って埋め戻されている。

貼床構築土土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

所見 時期は, 出土土器からは明確にできないものの, 確認できた壁の軸線や掘方の標高が, 周辺に位置する第 18 号 竪穴建物跡とほぼ同じであることから, 9 世紀前葉と推定できる。



第 323 図 第 21 号 竪穴建物跡実測図

第 26 号 竪穴建物跡 (第 324・325 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の D 9h6 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 27・28・52 号 竪穴建物跡を掘り込み, 第 19 号 土坑に掘り込まれている。

規模と形状 上部を後世の耕作などによって攪乱を受けていることから, 南北軸は 2.40 m, 東西軸は 2.35 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき, 主軸方向は $N - 90^\circ - E$ である。壁は高さ 5 cm で, ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦と推定でき、竈の前面が踏み固められている。

竈 東壁の中央部付近に付設されていると推定できる。焚口部から煙道部までは115cm、燃焼部の幅は70cmである。燃焼部は床面から10cmほど掘りくぼめられ、第2・3層で埋め戻されている。袖部は確認できなかったものの、左袖先端部と思われる粘土材が掘方の北西際で確認できた。火床面は第2層の上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30cmほど掘り込まれ、火床面から外傾している。第1層には、焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

竈土層解説

- 1 黄 橙 色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 赤 褐 色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

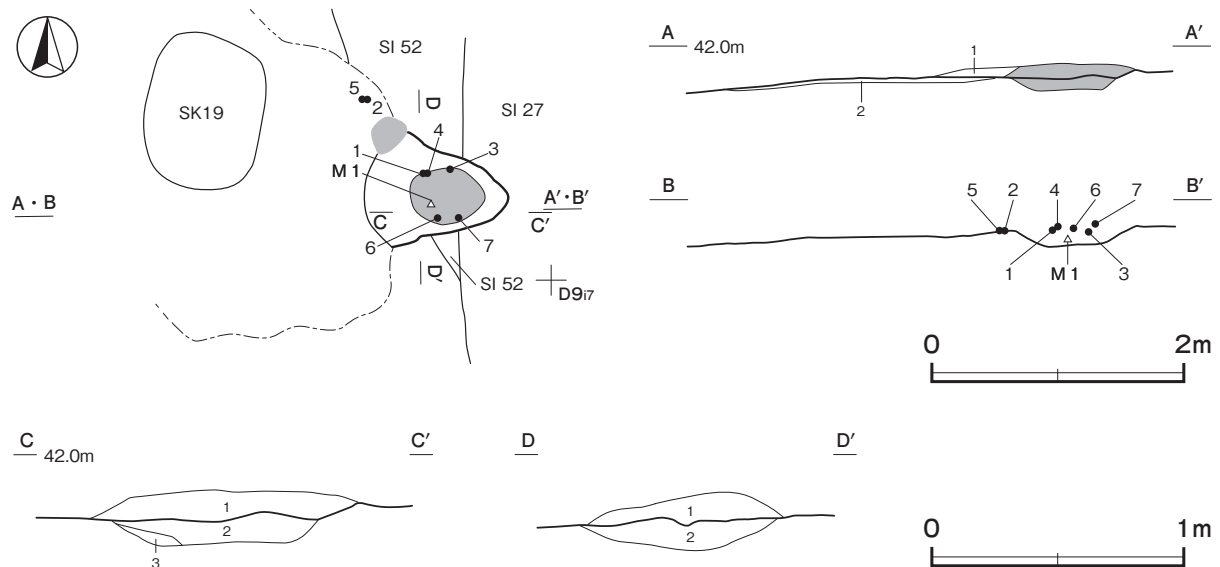
覆土 単一層である。第1層はロームブロックや粘土ブロックが含まれているが、層厚が5cmほどであることから、堆積状況は不明である。第2層は床の形成土で、地山が硬化している。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 褐 色 七本桜軽石ブロック・ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片29点(椀5, 高台付椀2, 小皿1, 甕類21), 石製品1(不明), 金属製品1点(釣針)のほか、縄文土器片4点(深鉢), 弥生土器片3点(壺類), が、主に竈から出土している。多くの土器は完形品や中型の破片で、接合関係が良好であることから、竈の廃絶に伴って一括で投棄されたと考えられる。

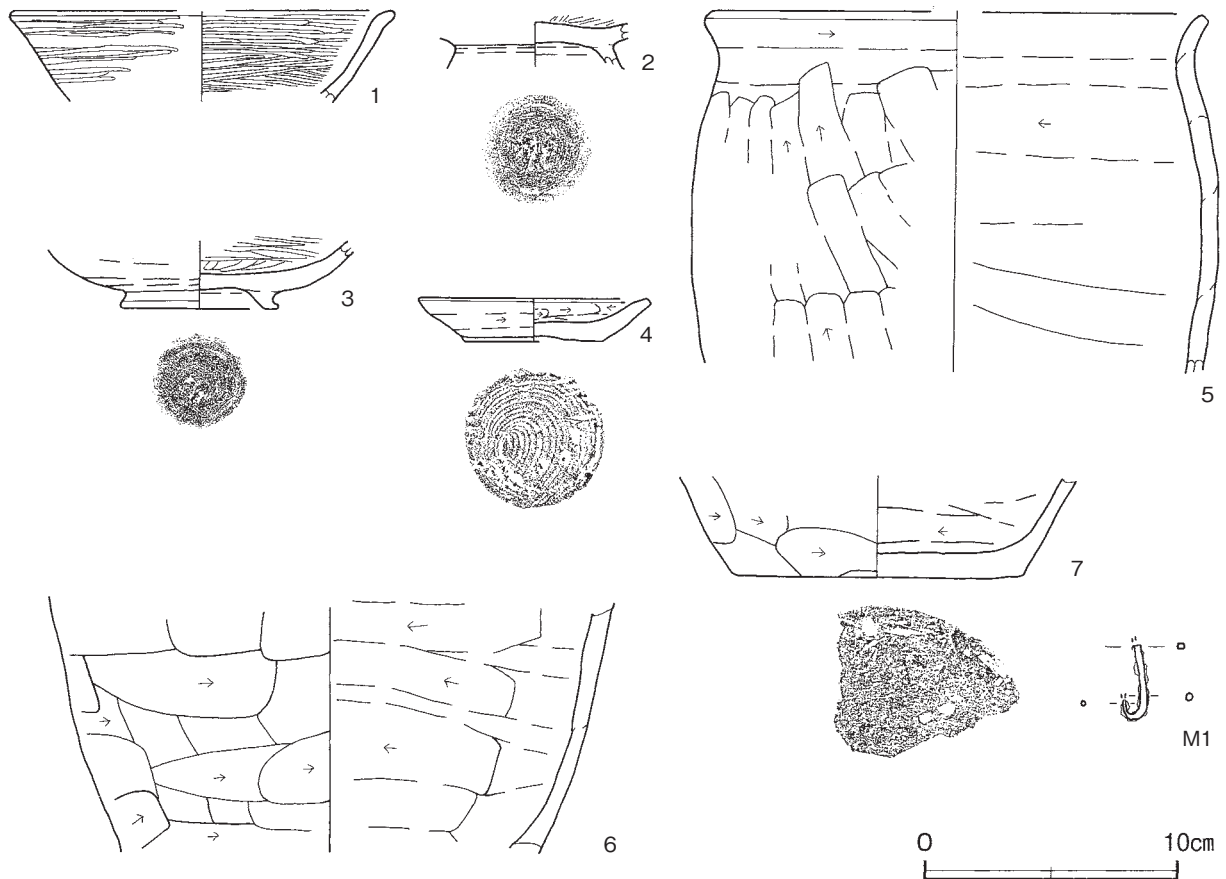
所見 時期は、出土土器から11世紀前葉に比定できる。



第324図 第26号竪穴建物跡実測図

第26号竪穴建物跡出土遺物観察表(第325図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	椀	[15.1]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい黄褐	普通	口縁部外面横位の磨き 内部面回転による磨き 内面黒色処理	竈覆土下層	20% 二次焼成
2	土師器	高台付椀	-	(1.8)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	底部高台部貼付 内面放射状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	30%
3	土師器	高台付椀	-	(2.7)	[6.1]	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部外面横位の磨き 底部高台部貼付 内面放射状の磨き	竈覆土下層	40% PL94
4	土師器	小皿	8.8	1.7	5.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 体部内面横位のナデ 底部回転糸切り	竈覆土下層	100% PL95
5	土師器	甕	[19.4]	(14.2)	-	長石・石英・針状物質	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦位のナデ 内面横位のナデ	覆土下層	20%
6	土師器	甕	-	(9.4)	-	長石・石英・雲母・細礫	暗赤褐	普通	体部外面横位の削り 内面横位のナデ	竈覆土下層	10% 7と同一個体
7	土師器	甕	-	(4.1)	[11.4]	長石・石英・雲母・細礫	暗赤褐	普通	体部外面横位の削り 内面横位のナデ 底部二方向のナデ	竈覆土下層	10% 6と同一個体



第 325 図 第 26 号竪穴建物跡出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	釣針	(3.0)	(1.0)	0.3	(0.78)	鉄	鉤元断面長方形 撞木状もしくは耳状 針先部欠損 反しの有無不明	竈掘方	PL108

第 29 号竪穴建物跡 (第 326・327 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の D 9j8 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 6・23 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 28・40 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.30 m, 短軸 3.28 m の方形で, 主軸方向は N - 18° - E である。壁は高さ 22 ~ 30cm で, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 竈の前面および中央部が踏み固められている。貼床は, 第 7・8 層を 5 ~ 20cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 竈付近を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。第 40 号土坑に掘り込まれているが, 焚口部から煙道部までは 110cm と推定され, 燃焼部の幅は 48cm である。燃焼部は床面から 5cm ほど掘りくぼめられ, 第 6・7 層で埋め戻されている。袖部は, 床面及び第 7 層に第 5 層を積み上げて構築されている。火床面は第 6・7 層の上面で, 第 6 層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 50cm ほど掘り込まれていると推定でき, 火床面からはほぼ直立している。第 1 ~ 4 層には, ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|-------------------------|--------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 5 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 6 明赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック微量 | 7 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | | |

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。

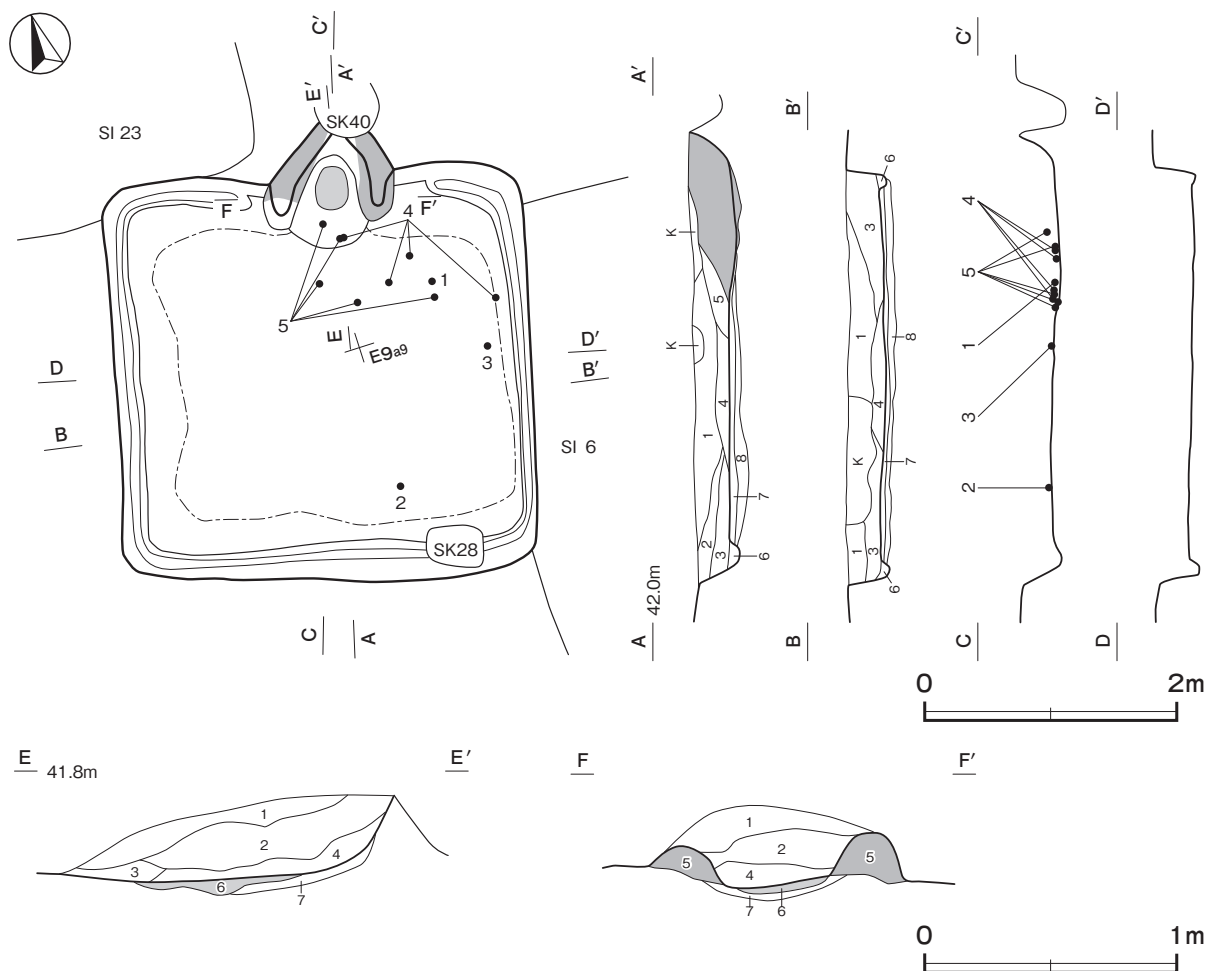
第7・8層は貼床の構築土である。

土層解説

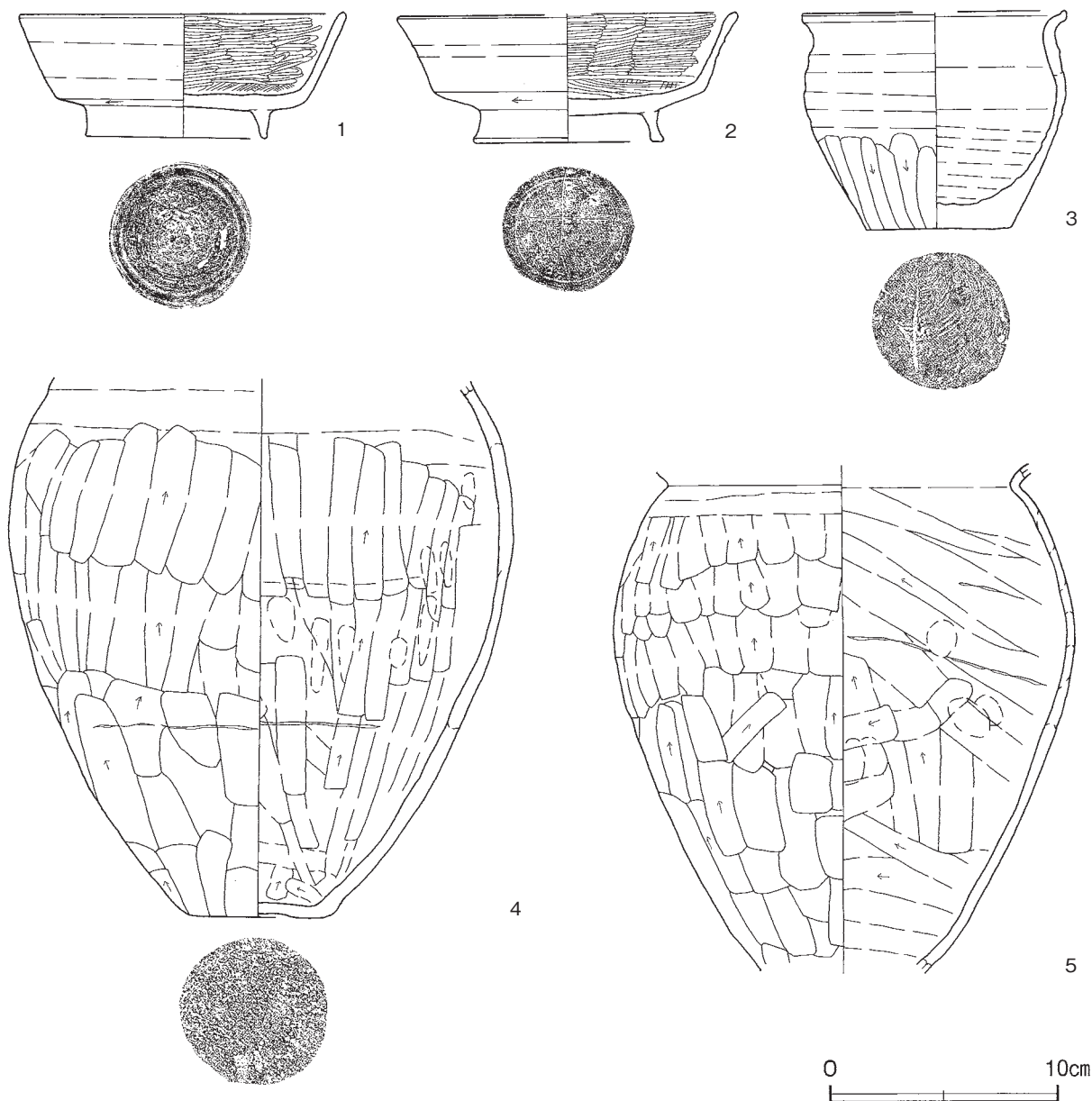
- | | | | |
|-------|----------------------|----------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 七本桜軽石粒子微量 | 5 褐灰色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 黒色 | ロームブロック少量, 七本桜軽石粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | 7 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 178 点 (坏 27, 高台付坏 2, 蓋 1, 皿 1, 甕類 147), 須恵器片 5 点 (坏 3, 蓋 1, 甕類 1), 石器 1 点 (砥石), 石製品 1 点 (竈材) のほか, 縄文土器片 12 点 (深鉢), 弥生土器片 34 点 (壺類), 剥片 2 点 (瑪瑙, 粘板岩) が, 主に竈周辺から出土している。多くの土器は大破片で, 接合関係が比較的良好であることや覆土下層から出土していることから, 埋め戻しの早い段階に一括で投棄されたと考えられる。1・4・5は竈周辺から出土していることから, 竈の廃絶後に投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。



第 326 図 第 29 号竪穴建物跡実測図



第 327 図 第 29 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 29 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 327 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	14.0	5.6	7.8	長石・雲母・ 針状物質・赤色粒子	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土第4・5層中	90%
2	土師器	高台付坏	[14.8]	5.6	8.4	長石・雲母・ 針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込み部に沿って凹状の磨き「十」のヘラ書き 内面黒色処理	覆土下層	50% PL93 煤付着
3	土師器	小形甕	[11.4]	9.6	6.3	長石・雲母・ 針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 体部下端部縦位の削り 底部回転糸切りの後一方向のナデ	覆土下層	60% PL97 煤付着
4	土師器	甕	-	(31.2)	8.2	長石・雲母・ 針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面縦位のナデ後中位以下に縦位の削り 内面縦・斜位のナデ 底部一方向のナデ	覆土第4・5層中	50% 煤付着
5	土師器	甕	-	(29.5)	-	長石・雲母・ 針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面縦位のナデ後中位以下に縦位の削り 内面縦位のナデ後横・斜位のナデ	覆土第4・5層中	50% 煤付着

第 35 号竪穴建物跡 (第 328 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の D 9j5 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第34・36・49号竪穴建物跡を掘り込み、第2号掘立柱建物、第2号ピット群に掘り込まれている。

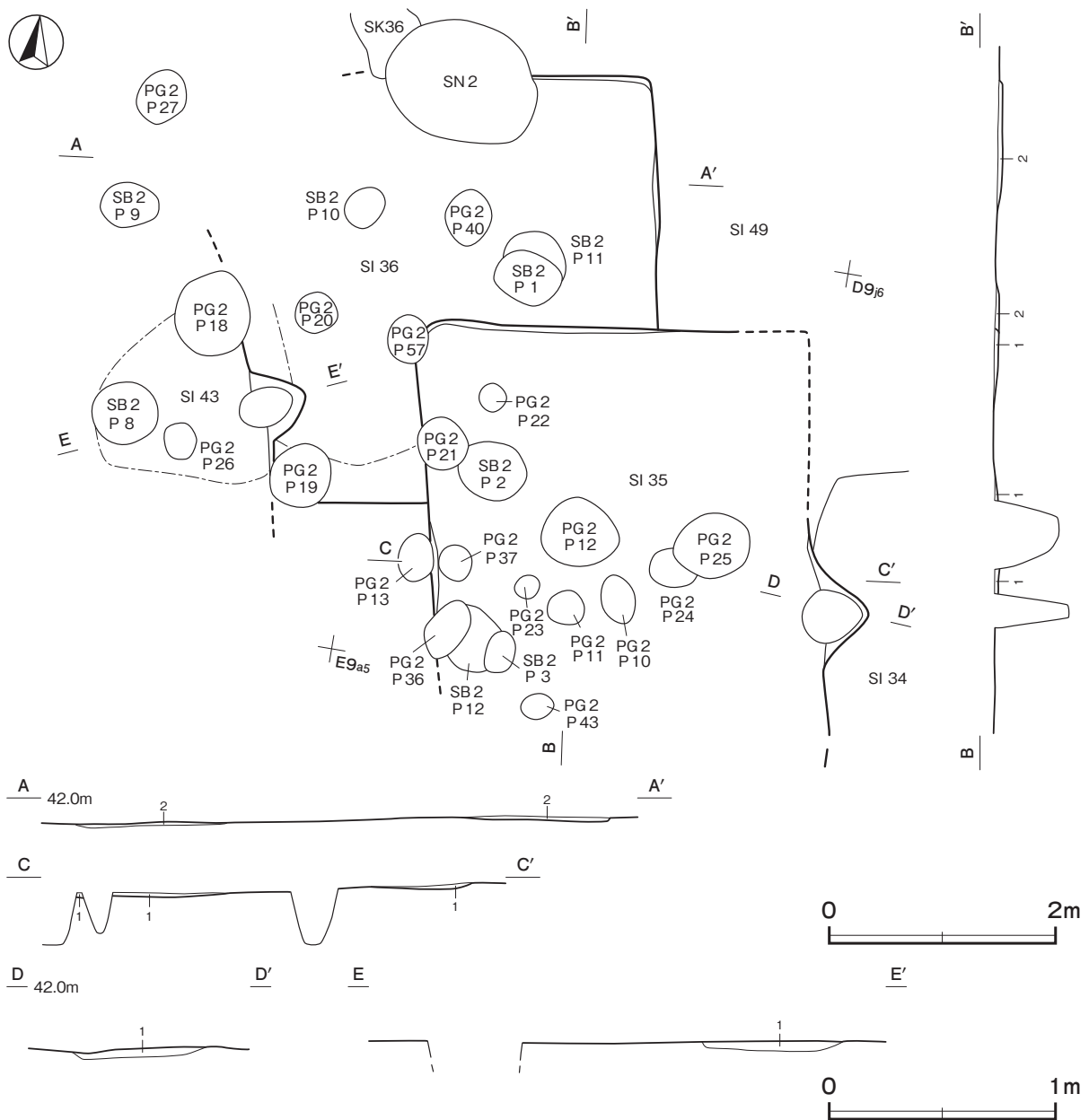
規模と形状 耕作などによって削平されていることから、東西軸は3.38mで、南北軸は2.70mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-72°-Eである。残存していた壁は高さ4cmで、ほぼ直立している。

床 残存している部分から、ほぼ平坦と推定できる。北壁際の西側の地山面が踏み固められている。

竈 東壁に付設されている。焚口部から煙道部までは60cm、燃焼部の幅は40cmである。燃焼部は床面から5cmほど掘りくぼめられ、第1層で埋め戻されている。袖部や火床面は、耕作などによって攪乱を受けていることから、不明である。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれているが、断面形は不明である。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量



第328図 第35・36・43号竪穴建物跡実測図

覆土 単一層である。層厚が5 cm未満であることから、堆積状況は不明である。

土層解説

1 灰黄褐色 ロームブロック少量、今市軽石ブロック微量

所見 時期は、出土した土器がなかったものの、周辺に存在する東壁に竈を有する第26号竪穴建物などと同時期と考えられ、10～11世紀と推定できる。

第36号竪穴建物跡（第328図）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD9i4区、標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第49号竪穴建物跡を掘り込み、第35・43号竪穴建物、第2号掘立柱建物、第2号粘土貼土坑、第36号土坑、第2号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作などによる削平や第35・43号竪穴建物に掘り込まれていることから、南北軸は3.82 m、東西軸は3.42 mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。残存していた壁は高さ4 cmで、ほぼ直立している。

床 残存している部分から、ほぼ平坦と推定できる。南壁際の一部で、地山面が踏み固められている。

覆土 単一層である。層厚が5 cm未満であることから、堆積状況は不明である。

土層解説

2 褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、出土した土器がなかったものの、周辺に存在する東壁に竈を有する第26号竪穴建物などと同時期と考えられ、10～11世紀と推定できる。

第43号竪穴建物跡（第328図）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD9j4区、標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第36号竪穴建物跡を掘り込み、第2号掘立柱建物、第2号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 耕作などによる削平や第2号掘立柱建物などに掘り込まれていることから、南北軸は2.20 m、東西軸は1.40 mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-64°-Eである。残存していた壁は高さ3 cmで、ほぼ直立している。

床 残存している部分から、ほぼ平坦と推定できる。竈の前面の地山面が踏み固められている。

竈 東壁に付設されている。焚口部から煙道部までは60 cm、燃焼部の幅は33 cmである。燃焼部は床面から5 cmほど掘りくぼめられ、第1層で埋め戻されている。袖部や火床面は、耕作などによって攪乱を受けていることから、不明である。煙道部は壁外に40 cmほど掘り込まれているが、煙道部の断面形は不明である。

竈土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、出土した土器がなかったものの、周辺の東竈を有する第26・35・42号竪穴建物跡などから10～11世紀と推定できる。

第 42 号 竪穴建物跡 (第 329 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 b4 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 46 号 竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 上部を後世の耕作などによって攪乱を受けていることから, 南北軸は 1.50 m, 東西軸は 1.10 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき, 主軸方向は N - 65° - E である。残存していた壁は高さ 3 cm で, 直立している。

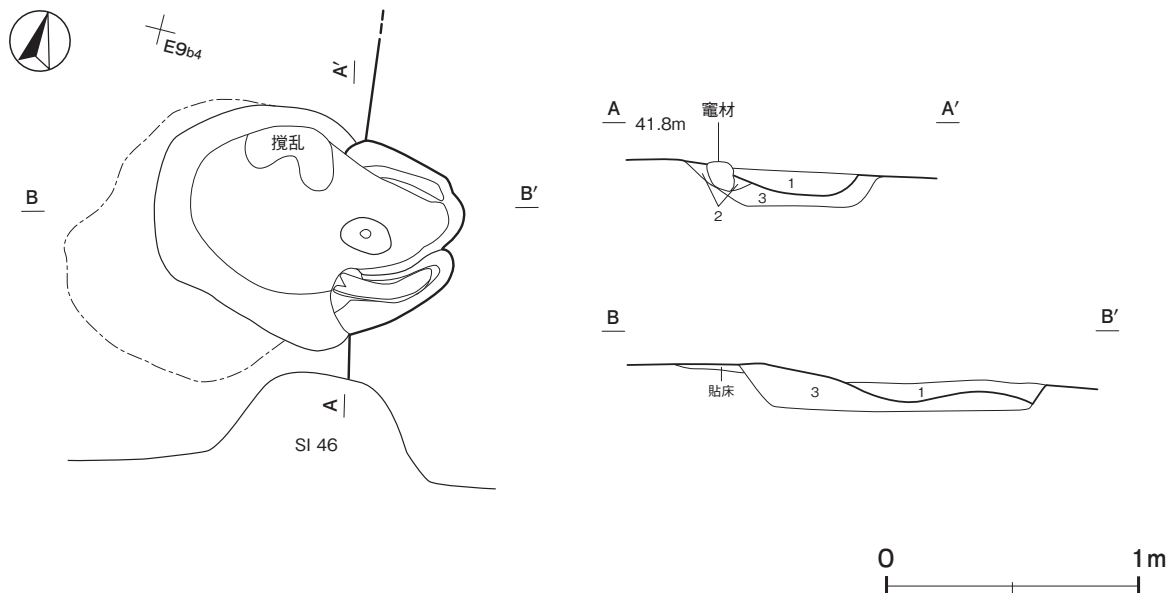
床 残存している部分から, ほぼ平坦と推定できる。竈の前面に踏み固められた部分が, 確認できたのみである。

竈 東壁の中央部付近に付設されていると推定できる。焚口部から煙道部までは 125 cm, 燃烧部の幅は袖部が壊されているが, 45 cm と推定できる。燃烧部は床面から 15 cm ほど掘りくぼめられ, 第 3 層で埋め戻されている。袖部は確認できなかったものの, 煙道部の右壁に凝灰質泥岩が第 2 層で固定された状態で確認できたことから, 第 3 層上面に粘土を積み上げて構築されていたと考えられる。火床面は第 3 層の上面で, 火熱を受けているものの赤変硬化はしていない。火床面には長径 20 cm, 短径 15 cm, 深さ 23 cm のピットが確認できたことから, 支脚が据えつけられていた可能性がある。煙道部は壁外に 40 cm ほど掘り込まれているが, 煙道部の断面形状は不明である。第 1 層は, 焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

竈土層解説

- 1 にぶい黄褐色 粘土ブロック・焼土ブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量, ロームブロック微量
- 3 灰黄褐色 ロームブロック少量

所見 時期は, 出土した土器がなかったものの, 周辺の東竈を有する第 26・35・43 号 竪穴建物跡などから 10 ~ 11 世紀と推定できる。

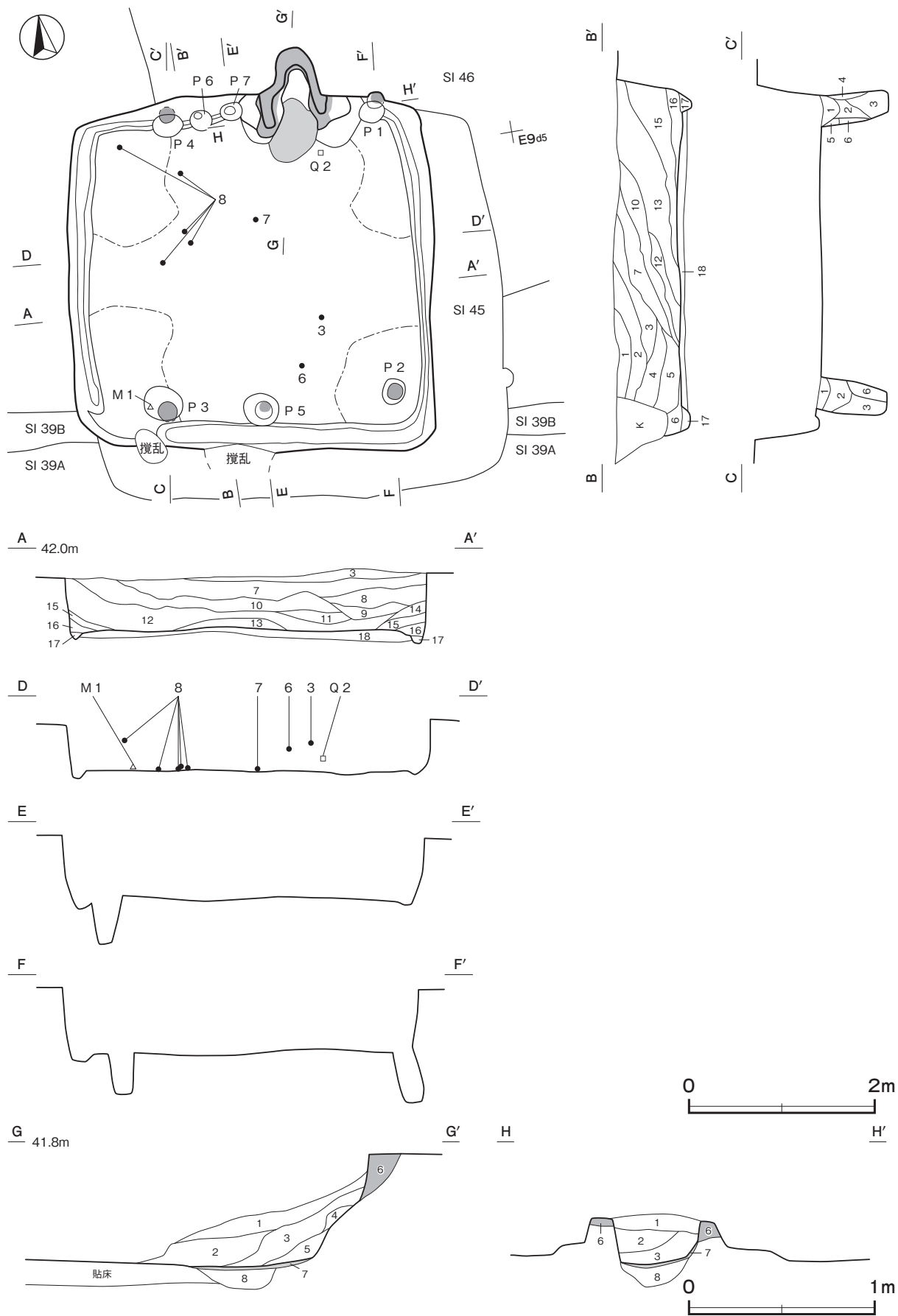


第 329 図 第 42 号 竪穴建物跡実測図

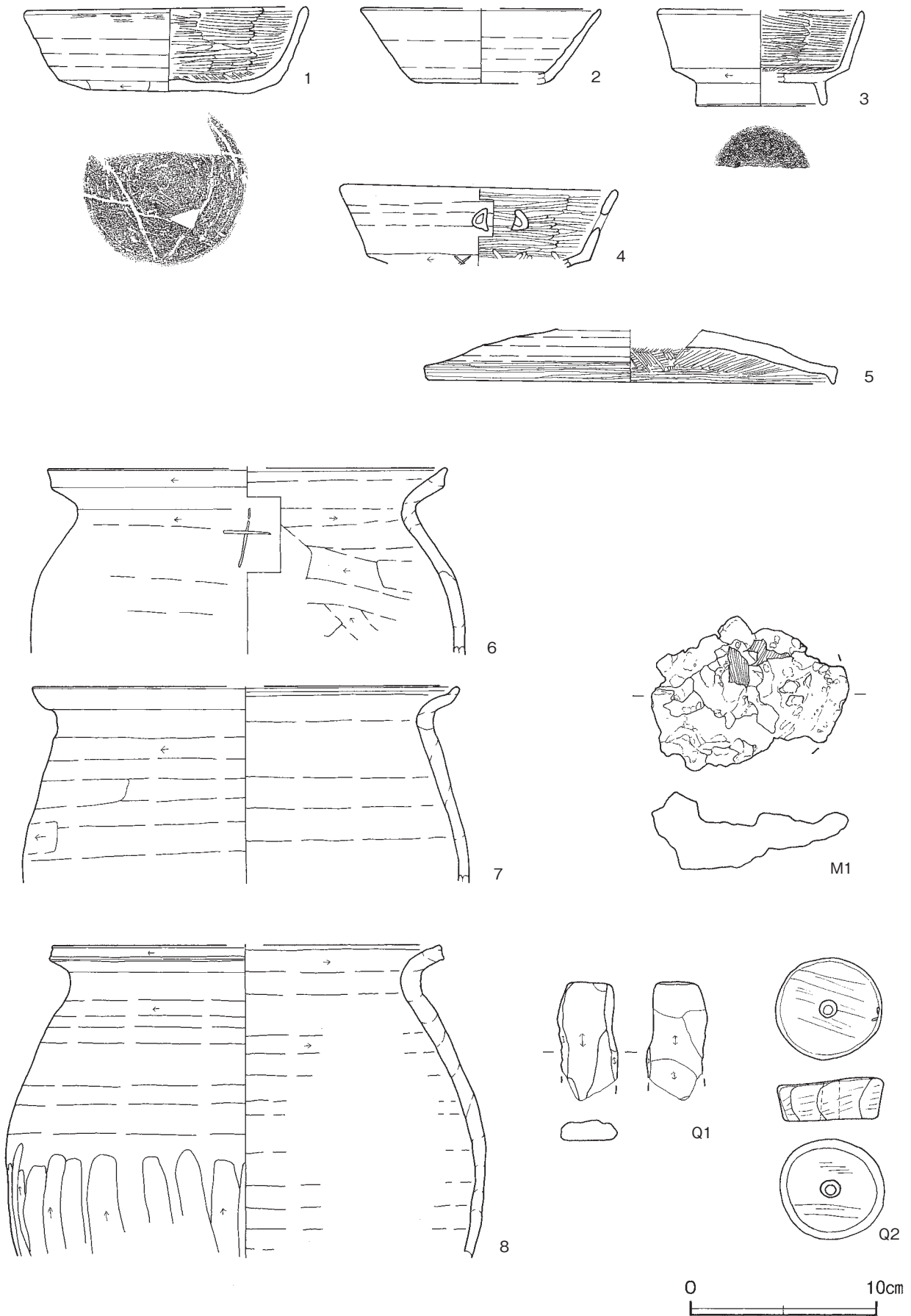
第 44 号 竪穴建物跡 (第 330・331 図 PL32)

調査年度 平成 25・26 年度

位置 調査区東部の E 9 d4 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 330 图 第 44 号竖穴建物迹实测图



第 331 图 第 44 号竖穴建物跡出土遺物実測図

重複関係 第39B・45・46号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.94 m、短軸3.82 mの方形で、主軸方向はN-15°-Eである。壁は高さ64～80cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、四隅部の壁際を除いて踏み固められている。貼床は、第18層を5～10cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が、南西隅部の壁下を除いて巡っている。

竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは122cm、燃焼部の幅は48cmである。燃焼部は床面から15cmほど掘りくぼめられ、第7・8層で埋め戻されている。袖部は、半島状に削り出した地山の上面に第6層を積み上げて構築されている。火床面は第7・8層の上面で、第7層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、第6層が貼り付けられている。火床面からは外反した後、直立している。第1～5に層は、ロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから壊されている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|--------------------|
| 1 褐灰色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 5 赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 2 浅黄橙色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | 6 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック微量 | 7 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 4 橙黄色 | 焼土ブロック多量 | 8 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |

ピット 7か所。P1～P4は深さ46～74cmで、配置から主柱穴である。第5・6層は埋土、第4層は柱材の抜き取り時に壁面が崩落した土、第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土である。P5は深さ52cmで、出入口施設に伴うピットである。P6は深さ11cm、P7は深さ22cmで、壁柱穴もしくは竈に関わる施設のピットの可能性があるが、明確にはできなかった。P1～P5の底面から、柱の当たりを確認した。

P3・P4土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 5 黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 6 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |

覆土 17層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第18層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-----------|---------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 10 褐灰色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 11 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 褐灰色 | ロームブロック・炭化物少量 | 12 におい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 褐灰色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 14 黒褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック中量 | 15 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 16 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 8 暗褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 | 17 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 9 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 18 褐灰色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片1,324点（坏67、高台付坏7、蓋12、盤1、コップ型土器1、鉢3、甕類1,233）、須恵器片58点（坏42、蓋5、鉢2、瓶1、甕類7、不明1）、石器3点（砥石2、紡錘車1）、石製品7点（支脚1、甕材6）、金属製品1点（鏃）、椀形滓1点（247.34 g）のほか、縄文土器片105点（深鉢）、弥生土器片73点（壺類）が、全域に散在している。土器は大型の破片から小片まであり、接合関係に乏しいことから、破損したものが廃絶に伴って一括で投棄されたと考えられる。また、須恵器片は7世紀から9世紀代の製品が含まれていることから、第44・46号竪穴建物跡などの遺物が混入している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。

第 44 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 331 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	土師器	坏	15.0	4.8	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部下端手持ちの削り 底部回転ヘラ切り後一方向の削り 体部内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土中	90% PL92
2	須恵器	坏	[12.8]	4.0	(7.0)	長石・石英・針状物質	褐 灰	良好	ロクロナデ	覆土中	10% 木葉下窯
3	土師器	高台付坏	[10.9]	5.1	[6.9]	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部内面横位の磨きの後見込みに沿って円状の磨き 底部内面二方向の磨き 高台部貼付 内面黒色処理	覆土中層	50%
4	土師器	高台付坏	14.6	(4.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 「十」字状のヘラ書き 体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土中	50% 体部穿孔。
5	土師器	蓋	[21.7]	(2.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土中	40% 煤付着
6	土師器	甕	[31.3]	(10.0)	-	雲母・赤色粒子・細礫	橙	普通	体部ロクロナデ 口縁部横ナデ 体部外面「十」字状のヘラ書き 体部内面斜位のナデ後横位のナデ	覆土中層	10% PL98 煤付着
7	土師器	甕	[23.0]	(10.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部ロクロナデ 口縁部横ナデ	覆土下層	10% 煤付着
8	土師器	甕	[20.6]	(16.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部ロクロナデ 口縁部横ナデ 体部外面中位以下縦位の削り	覆土中層 覆土下層	40% 煤付着

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 1	砥石	(6.5)	(3.2)	1.2	(3.0)	凝灰岩	端部欠損 砥面 6 か所	覆土中	
Q 2	紡錘車	5.6	5.4	2.3	125.77	緑色変成岩	上・下面一方向の削り調整, 両面からの穿孔 側面横・斜位の削り調整	覆土中層	PL104

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 1	椀形滓	(10.6)	(8.3)	4.2	(247.34)	鉄分・炭素他	全面錆化 一部発泡 ガラス質の滓付着 着磁性なし	覆土下層	

第 51 号竪穴建物跡（第 332 ～ 336 図 PL42・43）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 c5 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 46 ～ 48 号竪穴建物跡, 第 59・801 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺 5.20 m の方形で, 主軸方向は N - 10° - E である。壁は高さ 34 ～ 45cm で, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 四隅部及び壁際の一部を除いて, 踏み固められている。貼床は, 第 10 層を 5 ～ 10cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 竈付近を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 138cm, 燃焼部の幅は 64cm である。燃焼部は床面から 25cm ほど掘りくぼめられ, 第 7・8 層で埋め戻されている。袖部は, 地山面及び第 8 層上面に第 3 ～ 6 層を積み上げて構築されている。火床面は第 7・8 層の上面で, 第 7 層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 40cm ほど掘り込まれ, 第 4 層を貼り付けて構築されている。火床面からは, 内灣している。第 1・2 層には焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることや, Q 1・Q 3・Q 4 が散在していることから, 壊されている。

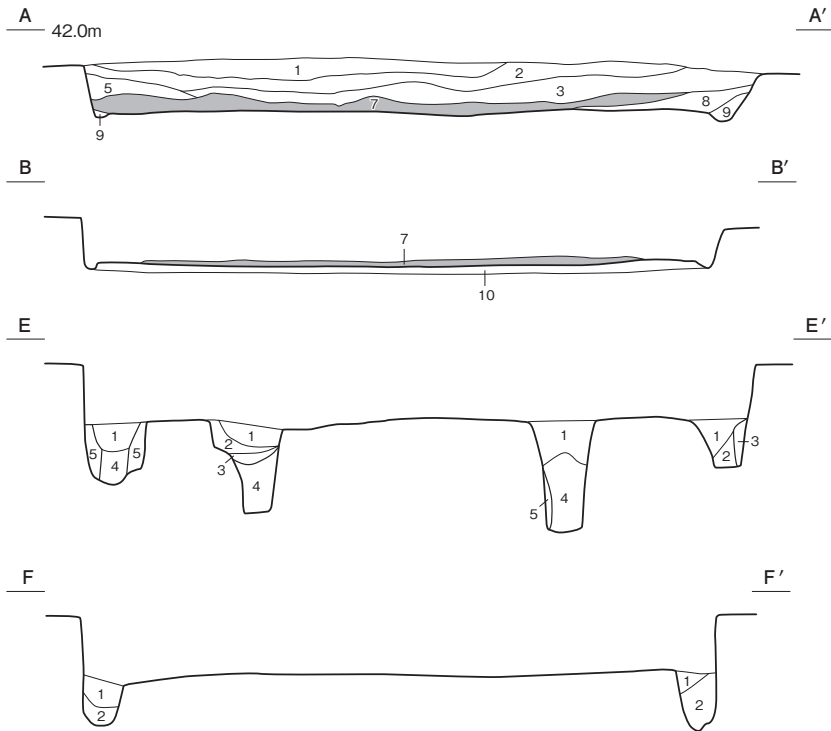
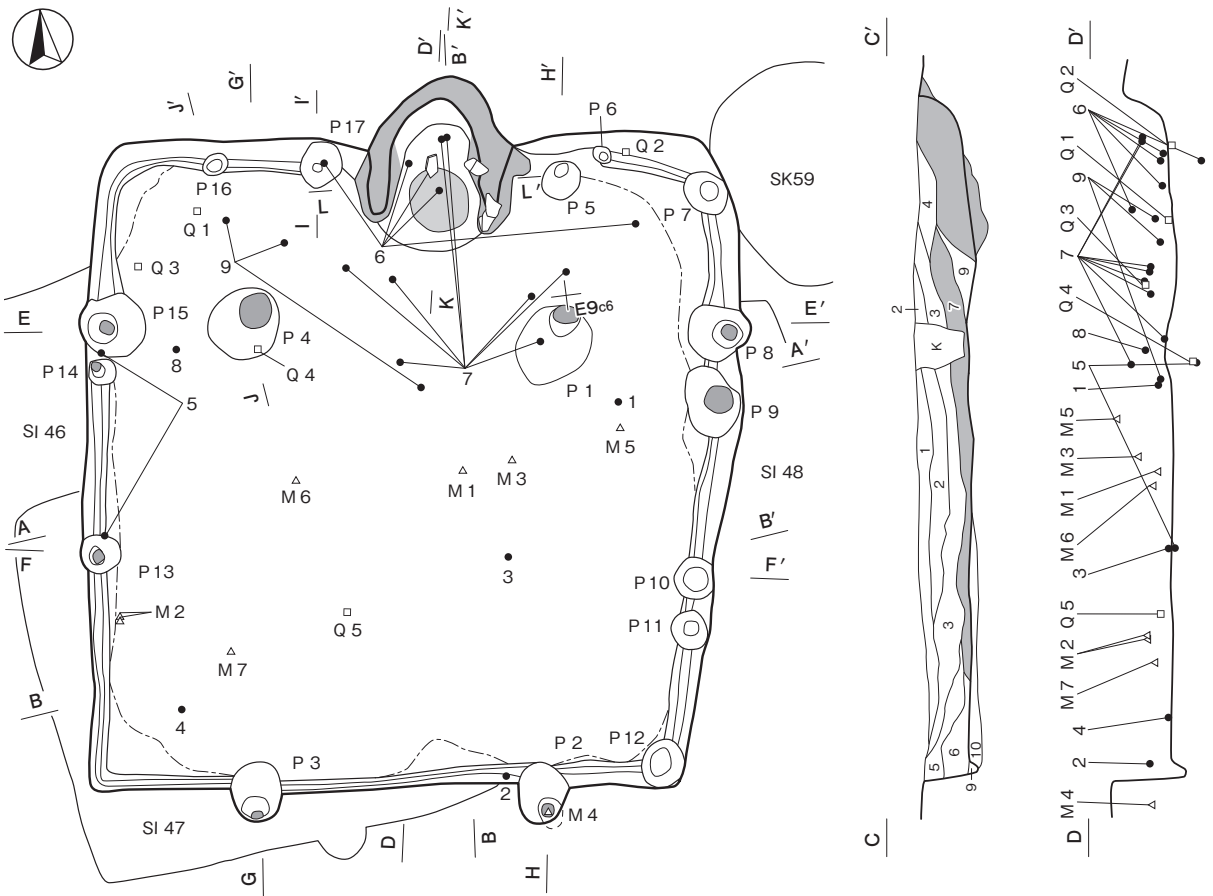
竈土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 浅黄橙色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 | 5 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 2 灰黄橙色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 | 6 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 |
| 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 | 7 明赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック微量 |
| 4 浅黄橙色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |

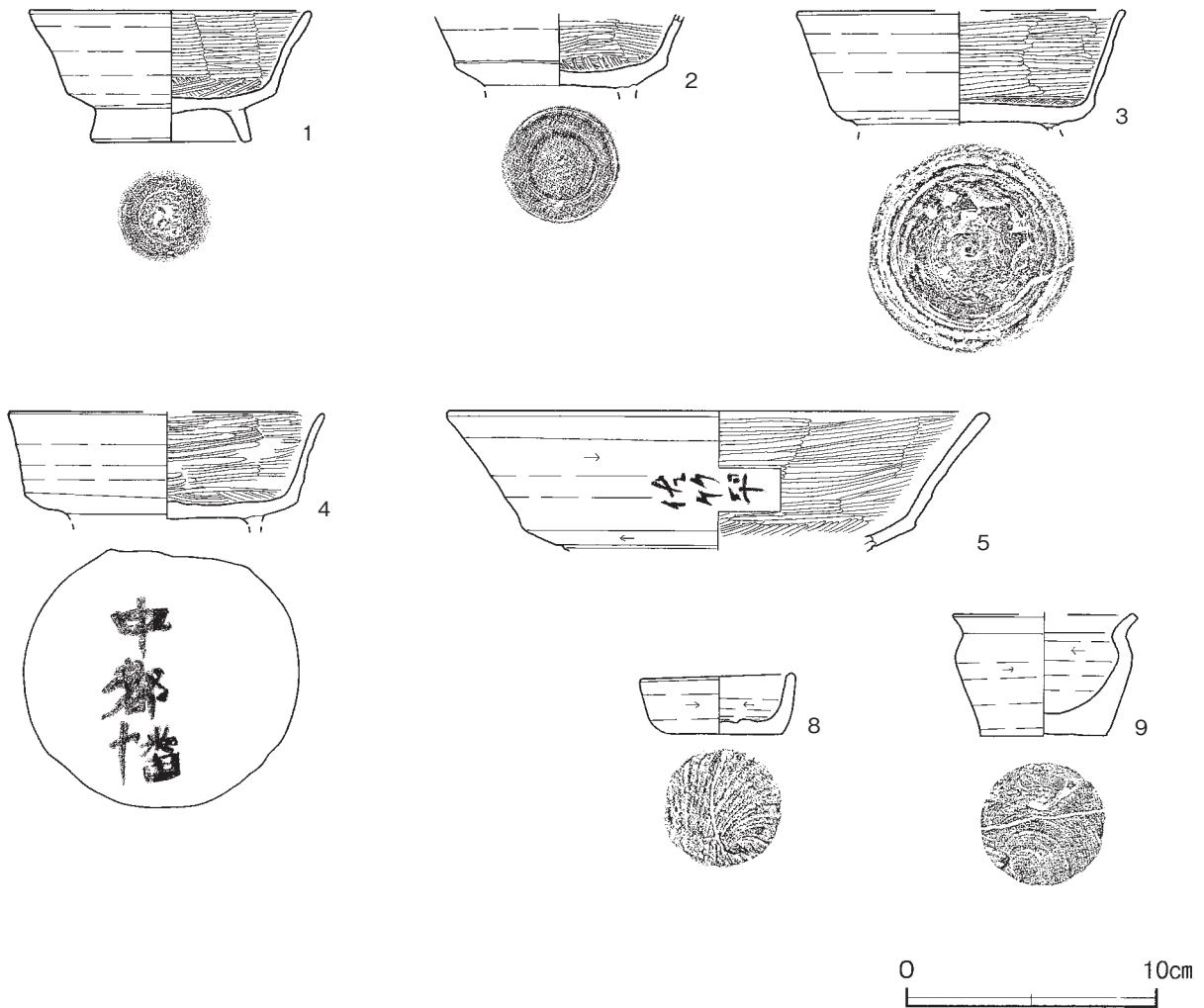
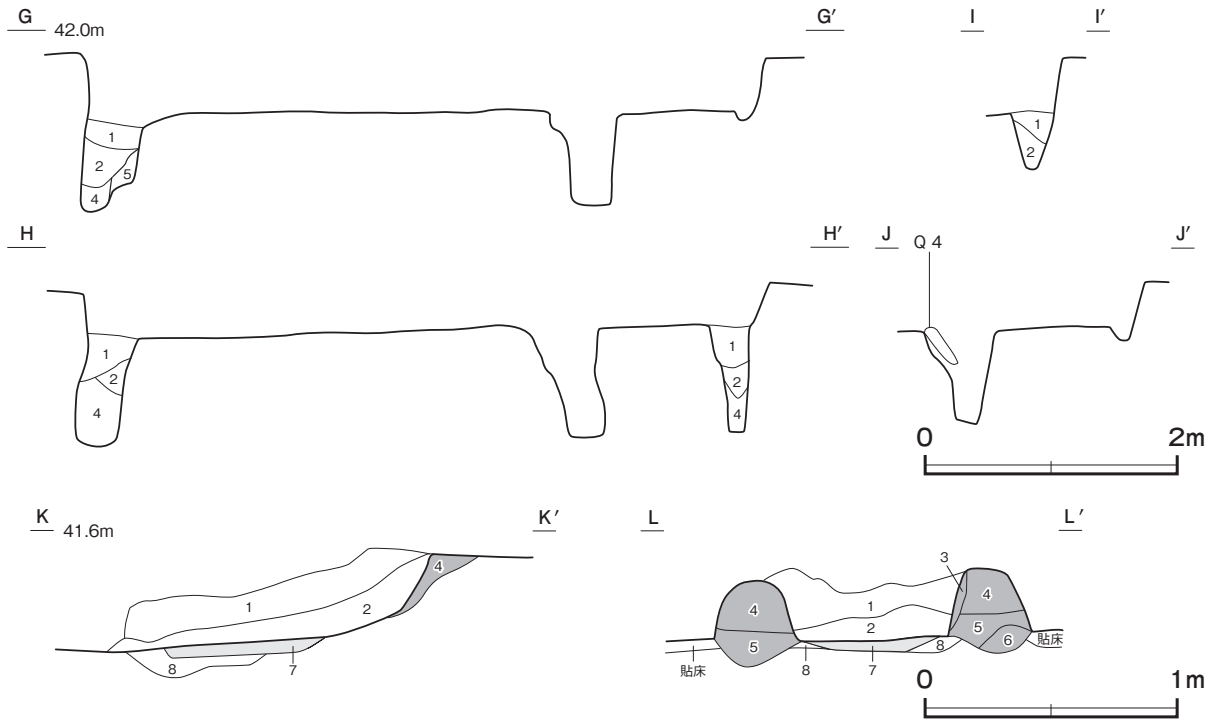
ピット 17 か所。P 1 ～ P 4 は深さ 69 ～ 90cm で, 配置から主柱穴である。P 5 ～ P 17 は深さ 35 ～ 80cm で, 壁柱穴である。第 5 層は埋土, 第 1 ～ 4 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1 ～ P 4・P 8・P 9・P 13 ～ P 15 の底面で, 柱の当たりを確認した。

ピット土層解説（各ピット共通）

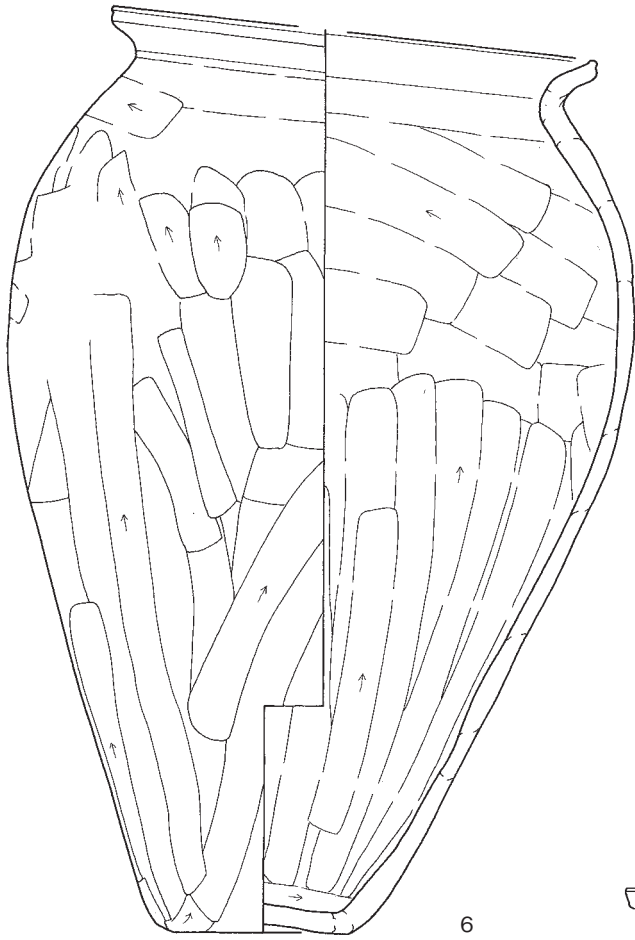
- | | |
|---------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 4 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 5 灰黄褐色 ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量 | |



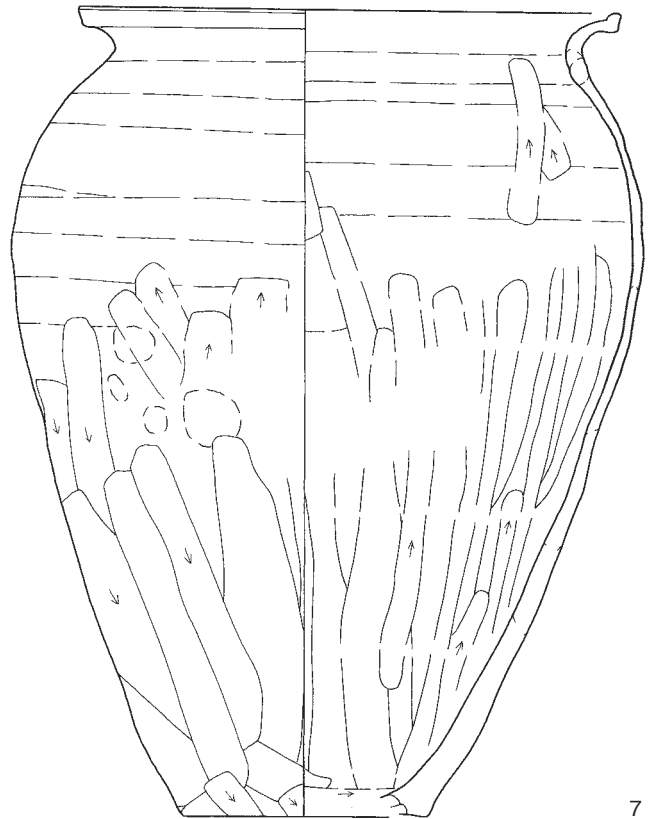
第 332 图 第 51 号竖穴建物迹实测图



第 333 图 第 51 号竖穴建物跡・出土遺物実測図



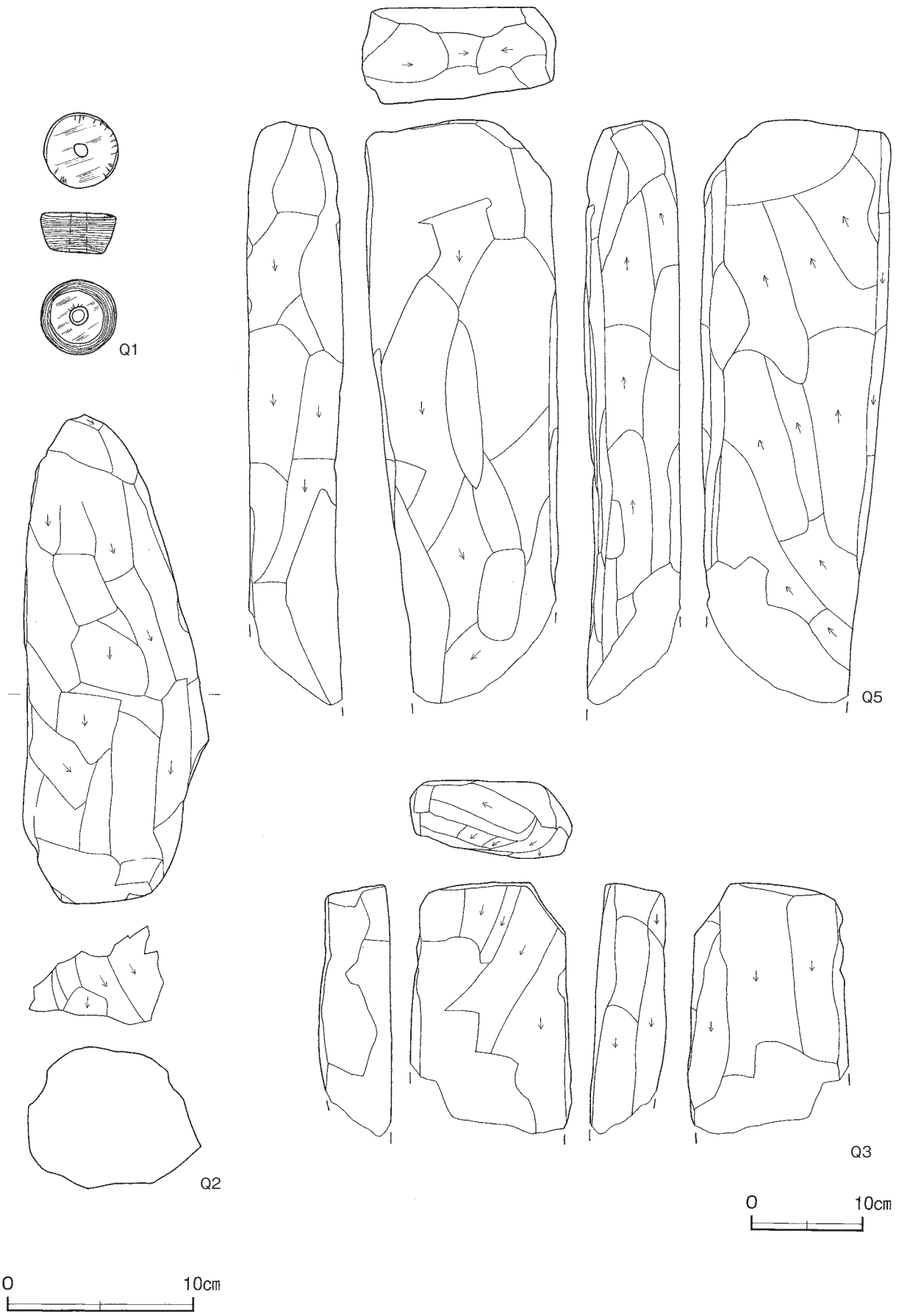
6



7



第 334 図 第 51 号 竖穴建物跡出土遺物実測図(1)

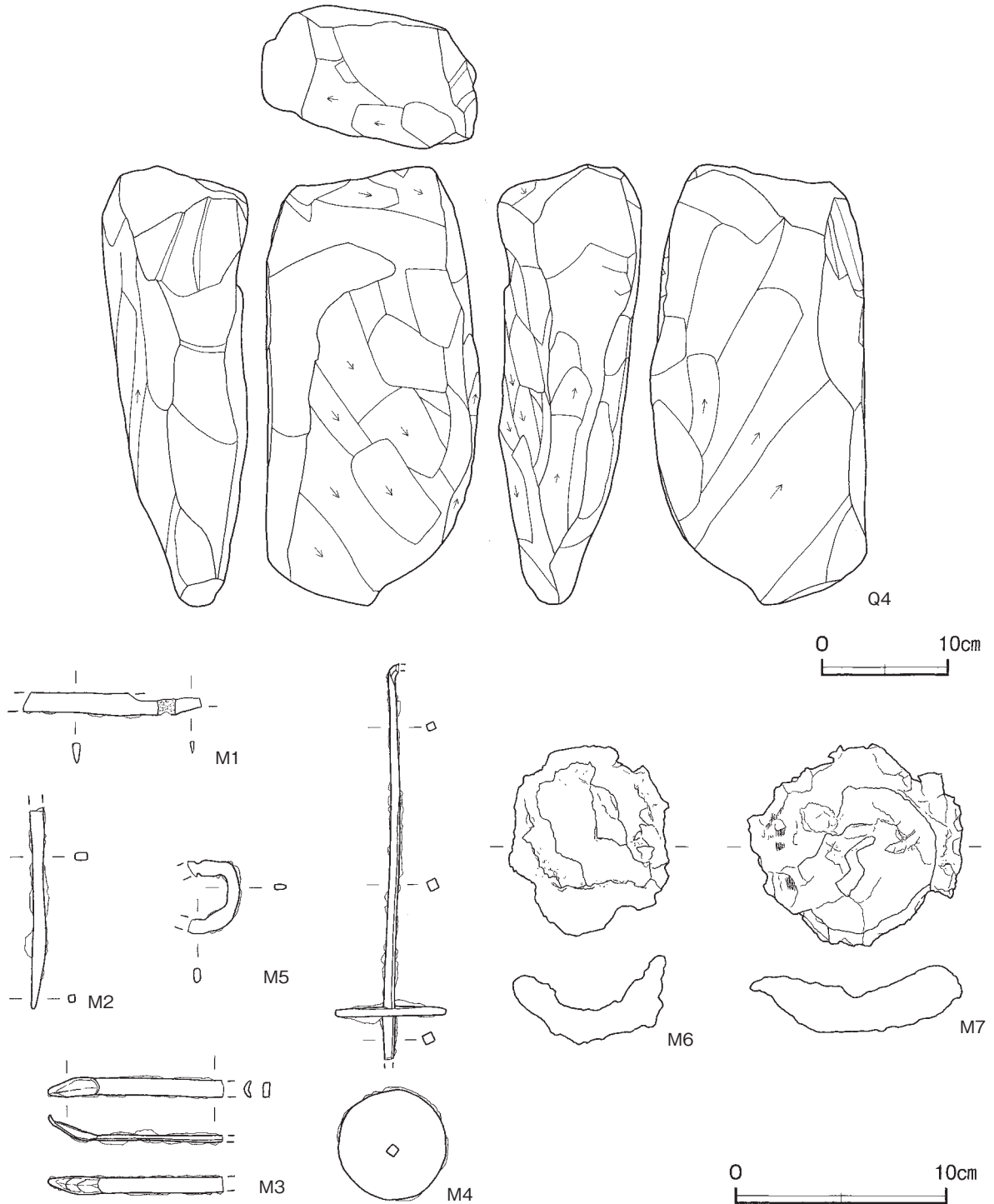


第 335 图 第 51 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

覆土 9層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロックが含まれ、不規則な堆積をしていることから埋め戻されている。第7層は粘土を主体とした締まった層位で、廃絶に伴って意図的に埋め戻されたと考えられるが、性格は不明である。第10層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 7 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック少量, 粘土ブロック微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 9 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 10 褐灰色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 |



第 336 図 第 51 号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

遺物出土状況 土師器片 2,073 点 (坏 152, 高台付坏 31, 蓋 12, 鉢類 4, 甕類 1,868, 甌 4, ミニチュア土器 2), 須恵器片 57 点 (坏 23, 蓋 8, 盤 1, 短頸壺 4, 長頸瓶 1, 瓶類 3, 甕類 16, 不明 1), 石製品 12 点 (紡錘車 1, 支脚 1, 袖部芯材 2, 竈材 8), 金属製品 7 点 (刀子 2, 鎌 1, 槍鉋 1, 紡錘車 1, 鉸具_ホ 1, 不明 1), 椀形滓 2 点 (536.89 g) のほか, 縄文土器片 197 点 (深鉢), 弥生土器片 47 点 (壺類), 土製品 1 点 (耳環) が, 竈周辺を密にして全域に散在している。多くの土器は大型や中型の破片で, 接合関係が良好であることから, 埋め戻しに伴って一括で投棄されたと考えられる。また, 鉄製品や石製品についても, 廃絶に伴う投棄と考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。

第 51 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 333 ~ 336 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	[11.0]	5.2	6.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	60%
2	土師器	高台付坏	-	(2.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	40%
3	土師器	高台付坏	[13.0]	(4.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って凹状の磨き	覆土下層	60%
4	土師器	高台付坏	[12.4]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面二方向の磨き後見込みに沿って凹状の磨き 内面黒色処理	床面直上	60% PL94 [中都橋] 墨書
5	土師器	高台付坏	21.4	(5.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面一方向の磨き 内面黒色処理	P 13・P 15 覆土中	40% PL94 [佐竹□] 墨書
6	土師器	甕	[19.0]	37.6	[7.7]	長石・石英・雲母・砂粒	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面一方向の磨き 内面黒色処理	覆土上層及び竈・P 17 覆土中	40%
7	土師器	甕	21.2	31.8	[9.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面一方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層, 竈覆土中	50%
8	土師器	ミニチュア土器	6.1	2.4	4.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面一方向の磨き 内面黒色処理	覆土中層	90% PL98
9	土師器	ミニチュア土器	7.1	4.8	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部外面回転ヘラ削り後高台部貼付 内面一方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	90% PL98

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	紡錘車	4.0	2.2	0.9	55.00	流紋岩	上・下面一方向の研磨 側面横位の研磨 底面からの一方向の穿孔	床面直上	PL104

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	支脚	26.3	10.0	8.6	885.32	凝灰質泥岩	上・下面一方向の削り調整 側面縦・斜位の削り調整	覆土下層	
Q 3	袖部芯材	(22.7)	14.5	7.0	(1.145)	凝灰質泥岩	上面二方向の削り調整 側面 4 面縦・斜位の削り調整 下端部欠損	覆土中層	
Q 4	袖部芯材	35.0	11.5	11.3	4.695	凝灰質泥岩	上面一方向の削り調整 側面 4 面縦・斜位の削り調整 下端部尖底状	P 4 覆土中	PL106
Q 5	竈材	(52.5)	17.3	8.5	(3.220)	凝灰質泥岩	右端部欠損 全面縦・斜位の削り調整 懸架材。	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(8.5)	(1.2)	0.3	(8.49)	鉄	先端部・柄部欠損 刃部断面三角形	覆土中層	PL108
M 2	鎌	(9.6)	(0.7)	(0.3)	(10.80)	鉄	鎌身部欠損 柄部断面長方形 端部方形	覆土中層	PL108
M 3	槍鉋	(8.4)	0.8	0.3	(8.37)	鉄	刃部反り返り 両刃 断面弧状形 柄部断面長方形	覆土中層	PL108
M 4	紡錘車	(18.9)	5.2	0.4	(49.31)	鉄	強み車の中央部に穿孔の後軸棒差し込み固定 軸棒上部に糸掛け部一部遺存	P 2 覆土中	PL109
M 5	鉸具 _ホ	(3.5)	(2.5)	0.3	(5.22)	鉄	リング状 断面長方形もしくは三角形	覆土上層	PL108
M 6	椀形滓	9.6	10.1	3.1	(341.75)	鉄	全面錆化 一部発泡 ガラス質の滓・炭化物付着 着磁性なし	覆土中層	PL109
M 7	椀形滓	7.6	9.1	4.2	(195.14)	鉄	全面錆化 一部発泡 ガラス質の滓付着 着磁性なし	覆土中層	PL109

第 61 号竪穴建物跡 (第 337 ~ 339 図 PL44)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の E 8 a7 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 62・67 号竪穴建物跡を掘り込んでいます。

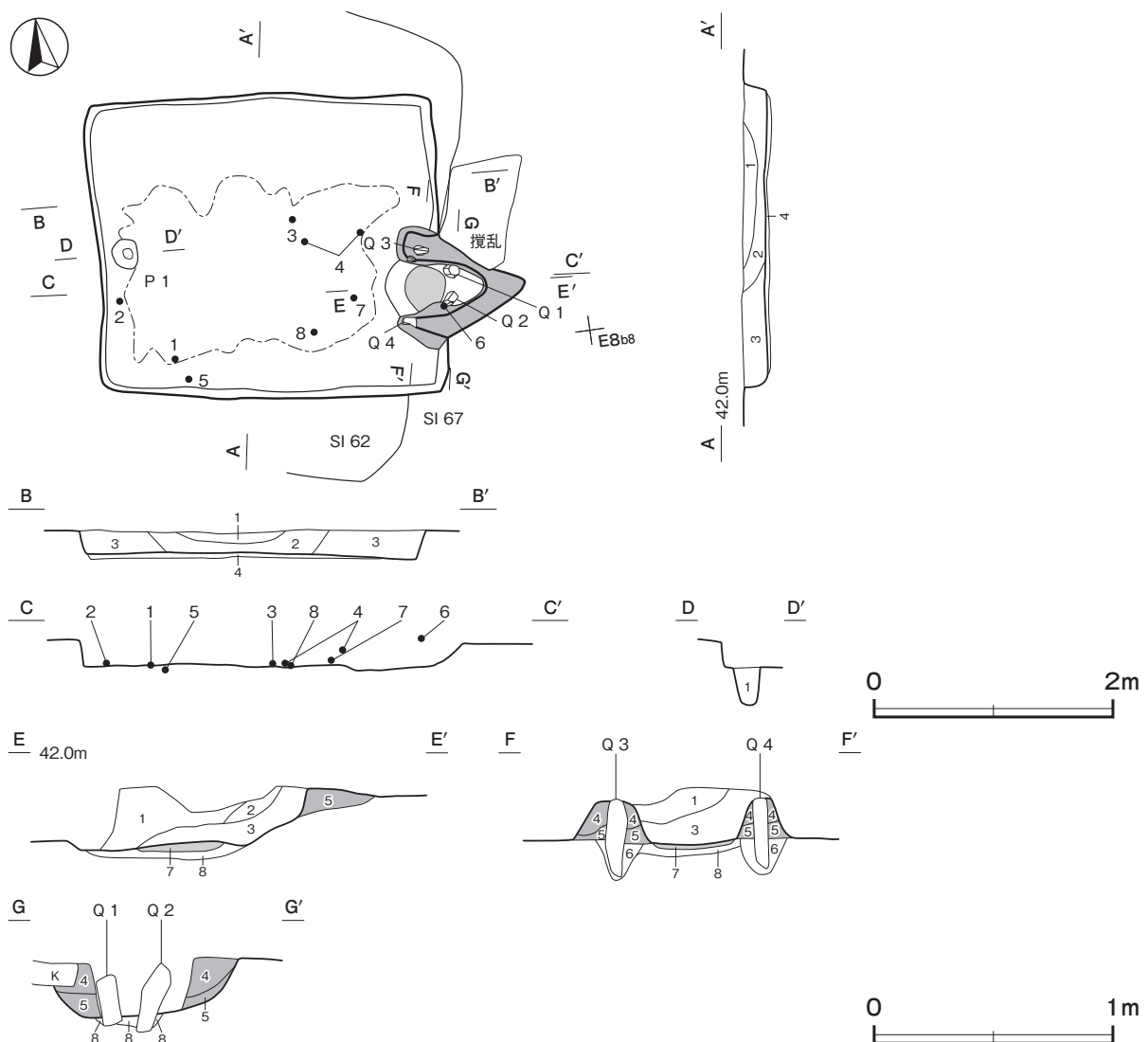
規模と形状 長軸 2.87 m, 短軸 2.54 m の長方形で, 主軸方向は N - 94° - E である。壁は高さ 22cm で, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 中央部が踏み固められている。貼床は, 第 4 層を 5cm ほど埋め戻して構築されている。

竈 東壁中央部の南寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは 114cm, 燃焼部の幅は 30cm である。燃焼部は床面から 15cm ほど掘りくぼめられ, 第 7・8 層で埋め戻されている。袖部は, 芯材として加工された Q 3・Q 4 を深さ 15~20cm のピットに第 6 層で固定した後, 床面及び第 6 層の上面に第 4・5 層を積み上げて構築されている。火床面は第 7・8 層の上面で, 第 7 層は火熱を受けて赤変硬化している。Q 1・Q 2 は下端部が燃焼部に据えつけられていることから, 支脚もしくは天井部の支えと考えられる。煙道部は壁外に 70cm ほど掘り込まれ, 第 5 層が貼り付けられている。火床面からは外傾している。第 1~3 層には焼土ブロックや粘土ブロックが含まれていることから, 壊されている。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------------|--|
| 1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 | 6 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量, ロームブロック少量 | 7 明赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 灰黄褐色 粘土ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |



第 337 図 第 61 号竪穴建物跡実測図

ピット P 1は深さ 30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。覆土は単一層で、柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

覆土 3層に分層できる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・今市軽石粒子微量

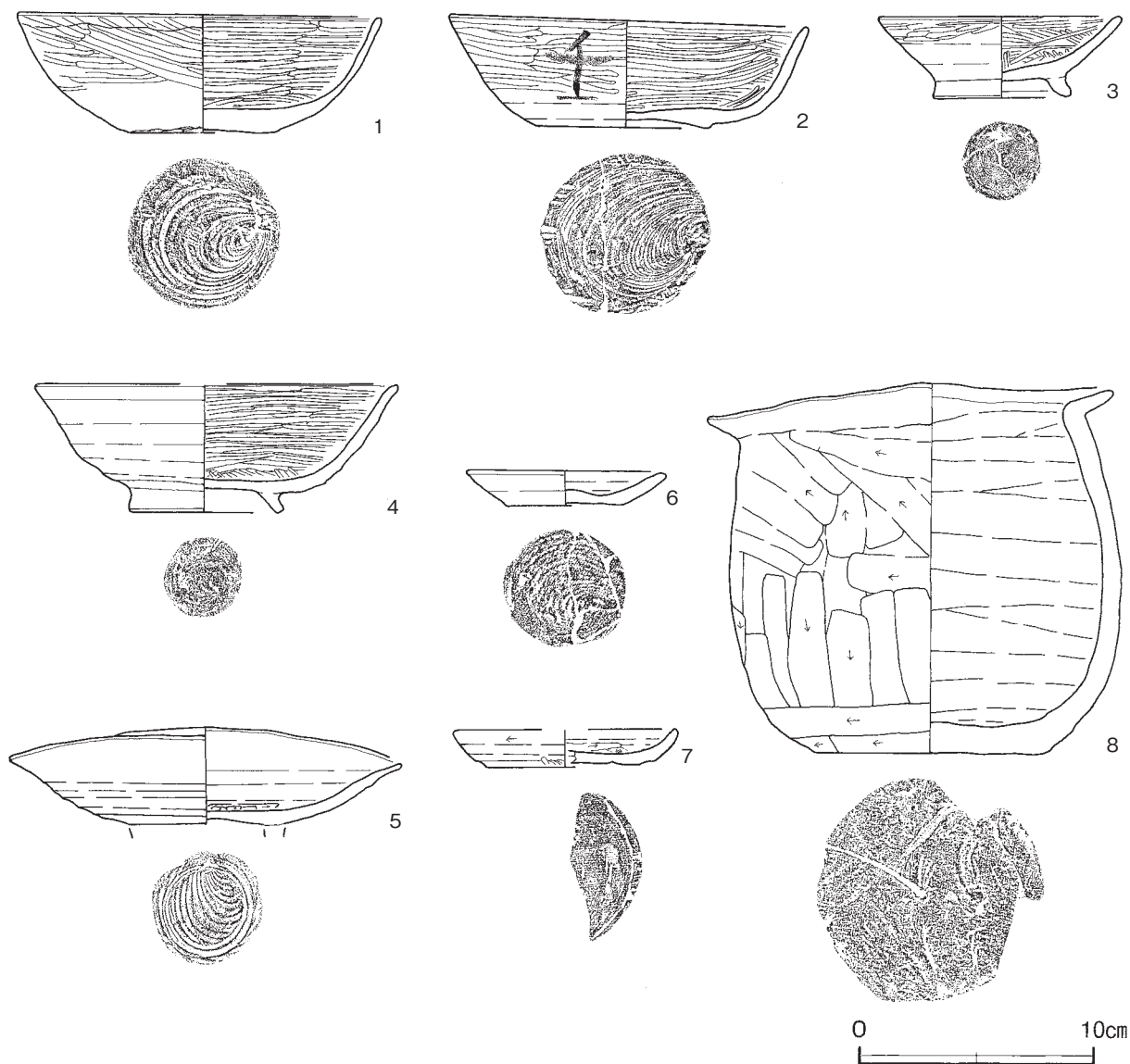
3 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・今市軽石粒子微量

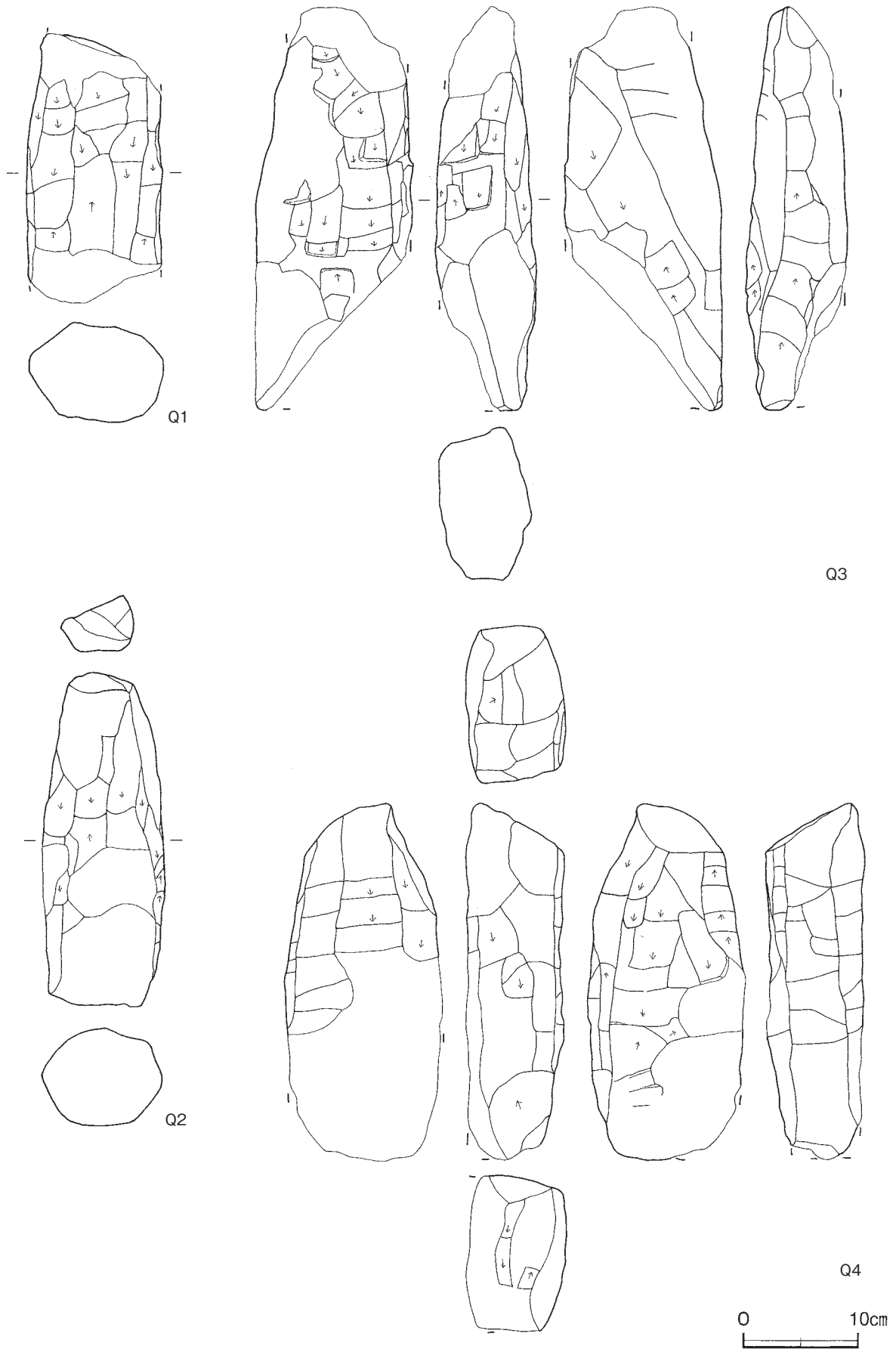
4 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 173 点 (坏 1, 椀 5, 高台付椀 4, 小皿 3, 高台付皿 1, 甕類 159), 須恵器片 1 点 (甕類), 石器 1 点 (台石_カ), 石製品 4 点 (支脚 2, 袖部芯材 2), 金属製品 2 点 (刀子, 不明) のほか、縄文土器片 65 点 (深鉢), 弥生土器片 4 点 (壺類) が、主に竈周辺及び南半部から出土している。多くの土器は大型や中型の破片で、接合関係が良好であることから、埋め戻しに伴って一括で投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀後葉に比定できる。



第 338 図 第 61 号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 339 图 第 61 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 61 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 338・339 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	椀	15.5	5.2	6.5	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部外面横・斜位の磨き 内面横位の磨き 底部外面回転糸切り 内面回転状の磨き 内面 黒色処理	覆土下層	90% PL92
2	土師器	椀	15.0	4.8	7.2	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部外・内面横位の磨き 底部外面回転糸切り 内面凹状の磨き後一方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	100% PL92 「土」の墨書
3	土師器	高台付椀	10.0	3.6	5.6	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横位の磨き 内面横・斜位の磨き 底部へら切り後高台部貼付 内面多方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	95% PL94
4	土師器	高台付椀	[15.2]	5.5	6.2	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	体部内面回転状の磨き 底部外面へら切り後高 台部貼付 内面一方向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	40% PL94
5	土師器	高台付皿	16.8	4.2	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ 底部回転糸切り後高台部貼付 底部内面二方向のナデ	覆土下層	90% PL95
6	土師器	小皿	9.6	1.5	5.0	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土上層	100% PL95
7	土師器	小皿	[9.4]	1.5	[6.2]	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	ロクロナデ 底部外面回転糸切り 内面一方向 のナデ	覆土下層	40%
8	土師器	甕	17.2	15.2	10.0	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦位のナデ後横・斜位 のナデ 中位以下縦位の削り後下部に横位の 削り 内面横位のナデ 底部一方向のナデ 「X」のへら書き	覆土下層	90% PL97 煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	支脚	(23.6)	(11.8)	9.6	(1.340)	凝灰質泥岩	上・下面欠損 側面縦・斜位の削り調整	火床面	
Q2	支脚	(29.2)	10.8	8.8	(1.250)	凝灰質泥岩	上面一方向の削り調整 側面縦位の削り調整 下面欠損	火床面	
Q3	袖部芯材	(35.2)	8.9	13.8	(1.675)	凝灰質泥岩	上面欠損 側面4面縦・斜位の削り調整 下面尖底状	袖部構築土	
Q4	袖部芯材	31.2	13.8	8.4	1.835	凝灰質泥岩	上面一方向の削り調整 側面4面縦位の削り調整 下面二方向 の削り調整	袖部構築土	PL106

第 62 号竪穴建物跡（第 340・341 図）

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の E 8a7 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 67 号竪穴建物跡を掘り込み、第 61 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.00 m、短軸 3.92 m の方形で、主軸方向は N - 25° - E である。壁は高さ 55cm で、ほぼ直立している。

床 縁辺部が平坦な貼床で、P 5 周辺及び壁際を除いて踏み固められている。中央部は地山を踏み固め、壁際では第 9 層を 5 ~ 15cm ほど埋め戻して貼床を構築している。壁溝が、北東隅部、東壁、南壁及び南西隅部壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚き口から煙道部までは 125cm、燃焼部の幅は 60cm である。燃焼部は床面から 10cm ほど掘りくぼめられ、第 6・7 層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第 7 層の上面に第 5 層を積み上げて構築されている。火床面は第 6・7 層の上面で、第 6 層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 30cm ほど掘り込まれ、第 5 層が貼り付けられている。火床面からは外傾している。第 4 層は煙道部からの流入土、第 3 層は天井部内壁の崩落土、第 1・2 層は天井部の崩落土で、自然に崩壊している。

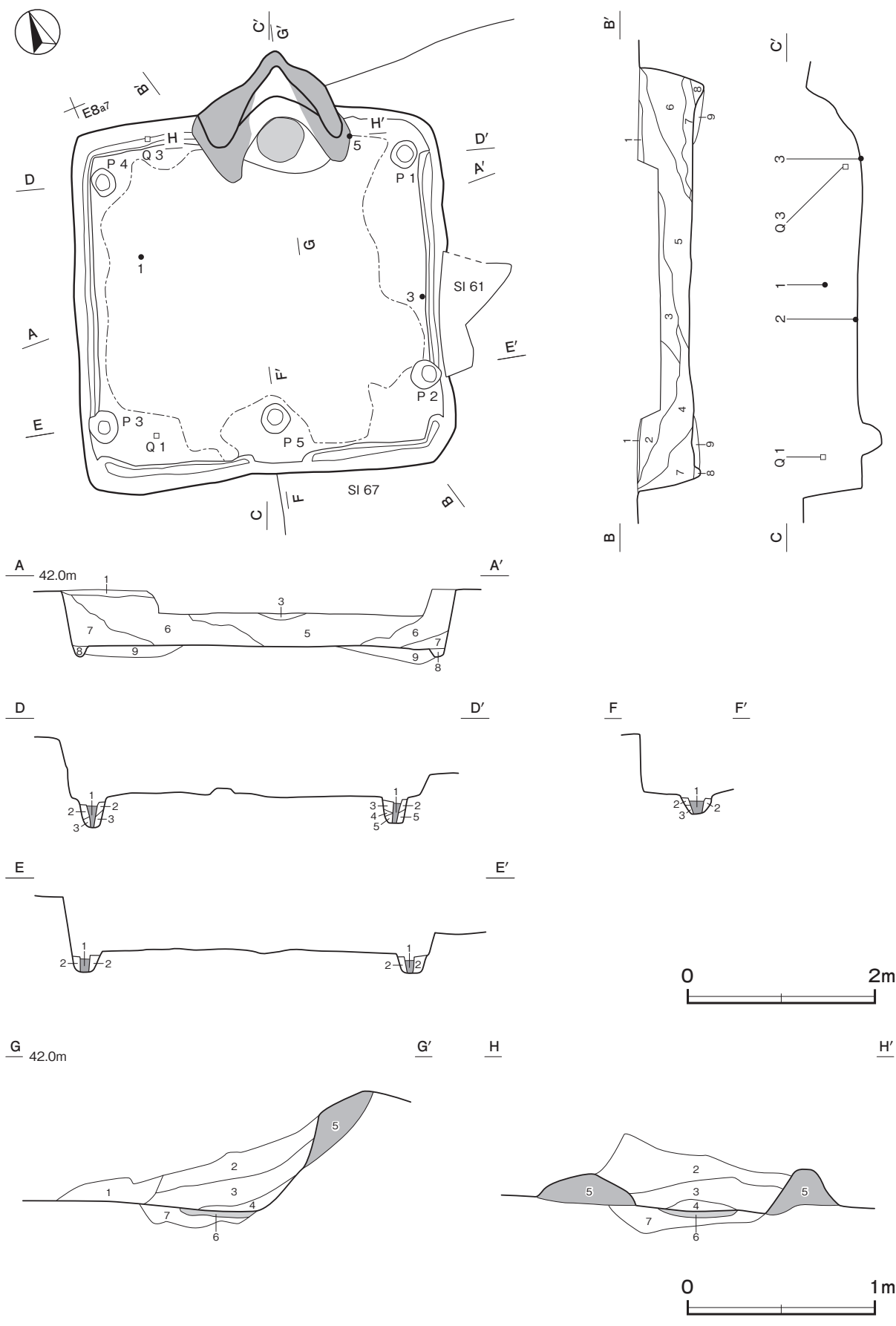
竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|--------|----------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | 炭化粒子少量、粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子・焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 5 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量 | 6 明赤褐色 | ロームブロック・今市軽石ブロック少量 |
| | | 7 黒褐色 | ロームブロック・今市軽石ブロック少量 |

ピット 5 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 20 ~ 28cm で、配置から主柱穴である。P 5 は深さ 22cm で、配置から出入り口施設に伴うピットである。第 2 ~ 5 層は埋土、第 1 層は柱痕跡である。

ピット土層解説（各ピット共通）

- | | | | |
|-------|------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |



第 340 图 第 62 号竖穴建物迹实测图

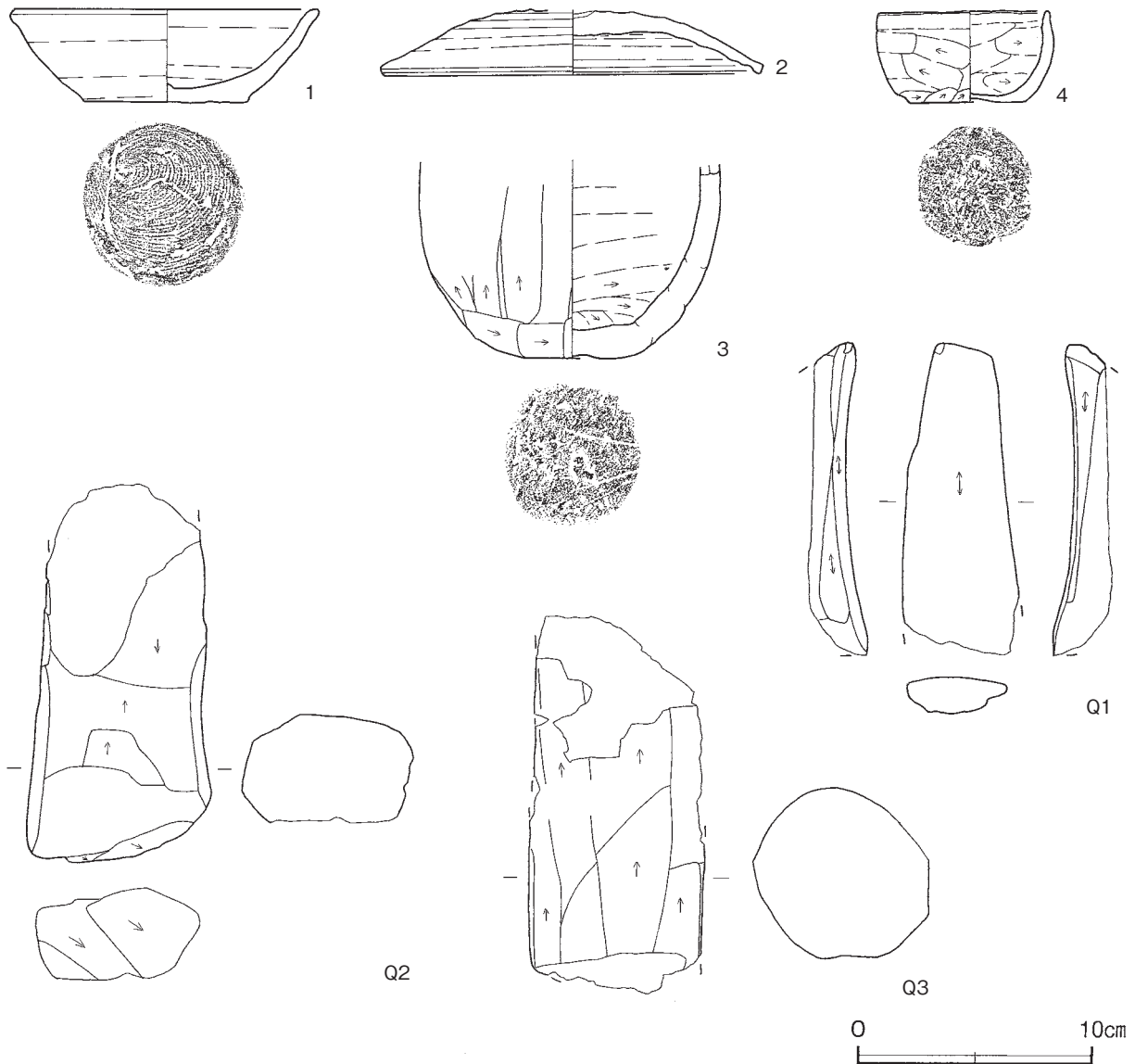
覆土 8層に分層できる。第2～8層はロームブロックが含まれる層が多く、不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第1層は埋め戻された後の流入土である。第9層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 8 黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 9 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 345点 (坏4, 椀1, 鉢1, 甕類338, ミニチュア土器1), 須恵器片9点 (坏2, 高台付坏1, 蓋2, 甕類4), 石器1点 (砥石), 石製品4点 (支脚2, 竈材1, 不明1)のほか, 縄文土器片73点 (深鉢), 弥生土器片15点 (壺類), 石器1点 (石棒)が, 全域に散在している。多くの土器は大型や中型の破片で, 接合関係が良好であることから, 埋め戻しに伴って一括で投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第341図 第62号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 62 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 341 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.8	4.1	6.8	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部クロロナデ 底部回転糸切り	覆土上層	100%
2	須恵器	蓋	16.6	(2.8)	-	長石・石英・黒色粒子	灰	良好	天井部クロロナデ 頂部回転ヘラ削り 自然釉付着	覆土下層	95% PL96 堀ノ内窯
3	土師器	小形甕	-	(8.5)	5.5	長石・石英・赤色粒子・細礫	明赤褐	普通	体部外面縦位の削り後、下端部横位の削り 体部内面横位のナデ 底部二方向のナデ後「一」状のヘラ書き3条 底部内面一方向のナデ	床面直上	20% 二次焼成
4	土師器	ミニチュア土器	7.2	4.0	5.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 口唇部平滑 体部外面横・斜位のナデ 下端部横位の削り 体部内面横・斜位のナデ 底部多方向のナデ	覆土中	95% PL98

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	砥石	(13.3)	5.0	(2.6)	(125.42)	凝灰岩	端部1面・下面欠損 砥面3面	覆土上層	PL104
Q 2	支脚	(16.2)	7.9	(5.6)	(440.74)	凝灰質泥岩	上面欠損 側面縦位の削り調整 下面一方向の削り調整	覆土中	
Q 3	支脚	(16.0)	7.5	7.4	(470.96)	凝灰質泥岩	上面欠損 側面縦位の削り調整 下面劣化のため調整不明	覆土中層	

第 64 号 竪穴建物跡 (第 342 図)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の E 9c1 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 8・9・13 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.68 m、短軸 3.45 m の方形で、主軸方向は N - 85° - E である。壁は高さ 10cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第 4 層を 10cm ほど埋め戻して構築されている。

竈 東壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 100cm、燃焼部の幅は 40cm である。燃焼部は床面から 12cm ほど掘りくぼめられ、第 2 層で埋め戻されている。火床面は第 2 層の上面で、火熱を受けているものの赤変硬化はしていない。煙道部は壁外に 30cm ほど掘り込まれ、火床面から外傾している。竈近辺に竈材が散在していること、第 1 層にはロームブロックや焼土ブロックが含まれることから、壊されている。

竈土層解説

- 1 褐灰色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量 2 黒褐色 ロームブロック・今市軽石ブロック少量

ピット P 1 は、深さ 40cm で、配置から出入り口施設に伴うピットである。第 3・4 層は埋土、第 1・2 層は柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量 3 褐灰色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量 4 褐色 ロームブロック少量

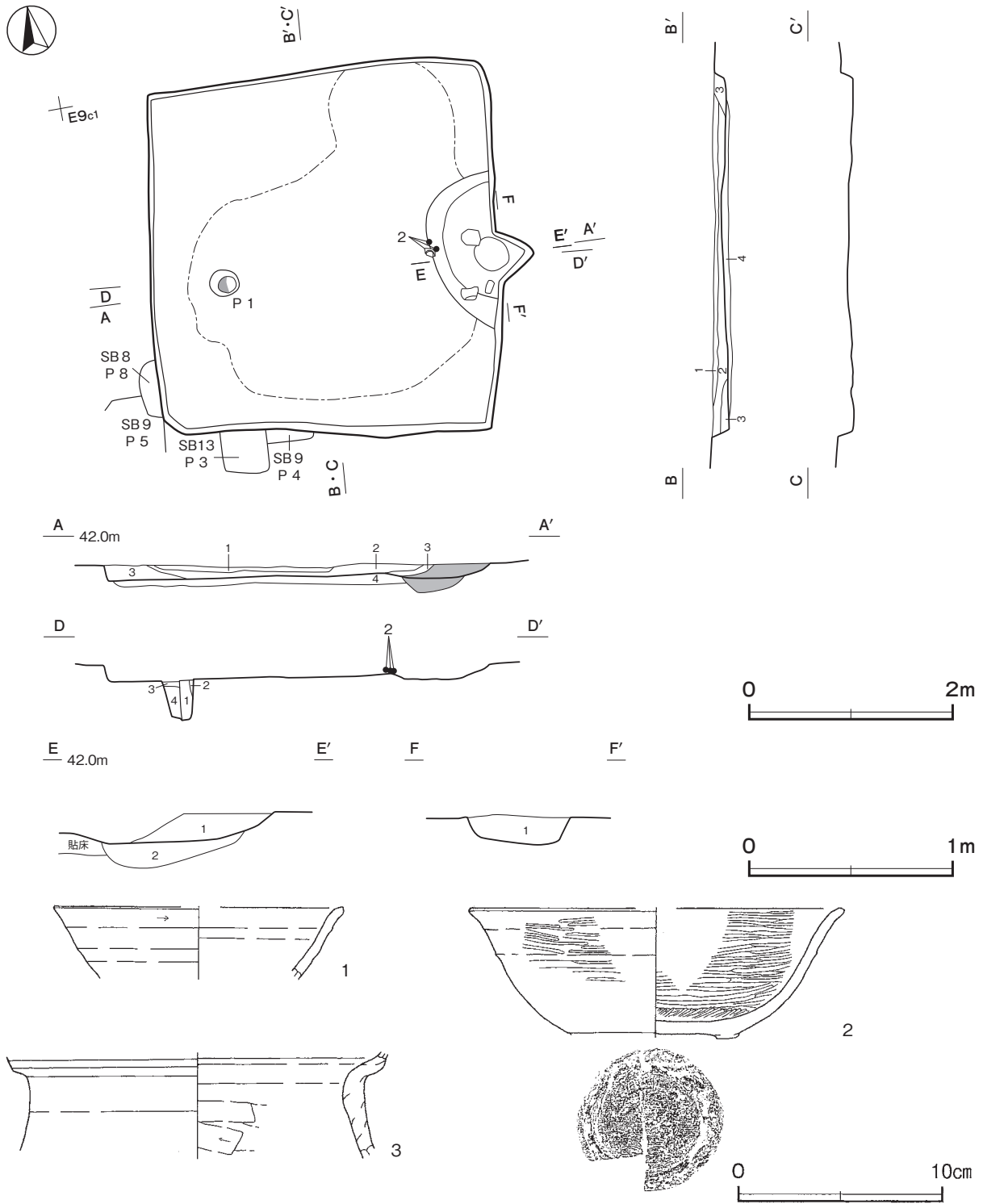
覆土 3 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第 4 層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 灰黄褐色 ローム粒子・白色粒子少量、粘土ブロック微量 3 暗褐色 ローム粒子少量、今市軽石粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・今市軽石粒子少量 4 灰黄褐色 白色粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片 85 点 (坏 3, 椀 14, 高台付椀 2, 高台付皿 1, 甕類 64, ミニチュア土器 1), 須恵器片 6 点 (坏 1, 瓶類 1, 甕類 4) のほか、縄文土器片 16 点 (深鉢), 弥生土器片 4 点 (壺類) が、主に竈周辺から出土している。多くの土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第 342 図 第 64 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 64 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 342 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	椀	[14.0]	(3.5)	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	普通	体部クロロナデ	覆土中	10% 二次焼成
2	土師器	高台付椀	[18.0]	(6.3)	-	長石・石英・針状物質・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面横位の磨き・体部内面回転状の磨き 底部外面ヘラ切り後高台部貼付 底部内面一方 向の磨き 内面黒色処理	覆土下層	30%
3	土師器	甕	-	(5.2)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部外面クロロナデ 体部内面横位のナデ	覆土中	5% 二次焼成

第 69 号 竪穴建物跡 (第 343 図)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 8 f9 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 68 号 竪穴建物跡を掘り込み, 第 75・414・428・429・804 号 土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから, 東西軸は 3.48 m で, 南北軸は 1.99 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき, 主軸方向は不明である。壁は高さ 28cm で, ほぼ直立している。

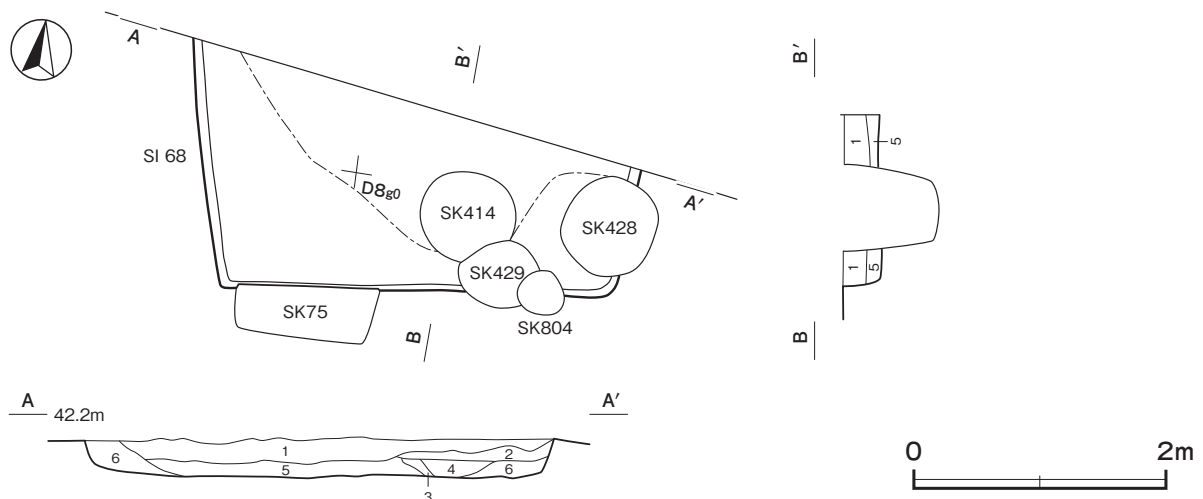
床 平坦で, 中央部及び東壁際の一部が踏み固められている。床は, 第 68 号 竪穴建物跡の覆土である。

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1 におい黄褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, ロームブロック微量 |
| 3 褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量 | 6 におい黄褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |

所見 時期は, 遺物が出土しなかったものの, 第 68 号 竪穴建物跡, 第 75 号 土坑との重複関係から 8 世紀もしくは 9 世紀代と推定できる。



第 343 図 第 69 号 竪穴建物跡実測図

第 70 号 竪穴建物跡 (第 344・345 図 PL45)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 8 i4 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 71 号 竪穴建物跡を掘り込んでいます。

規模と形状 長軸 4.58 m, 短軸 4.33 m の方形で, 主軸方向は N - 3° - E である。壁は高さ 38 ~ 49cm で, ほぼ直立している。

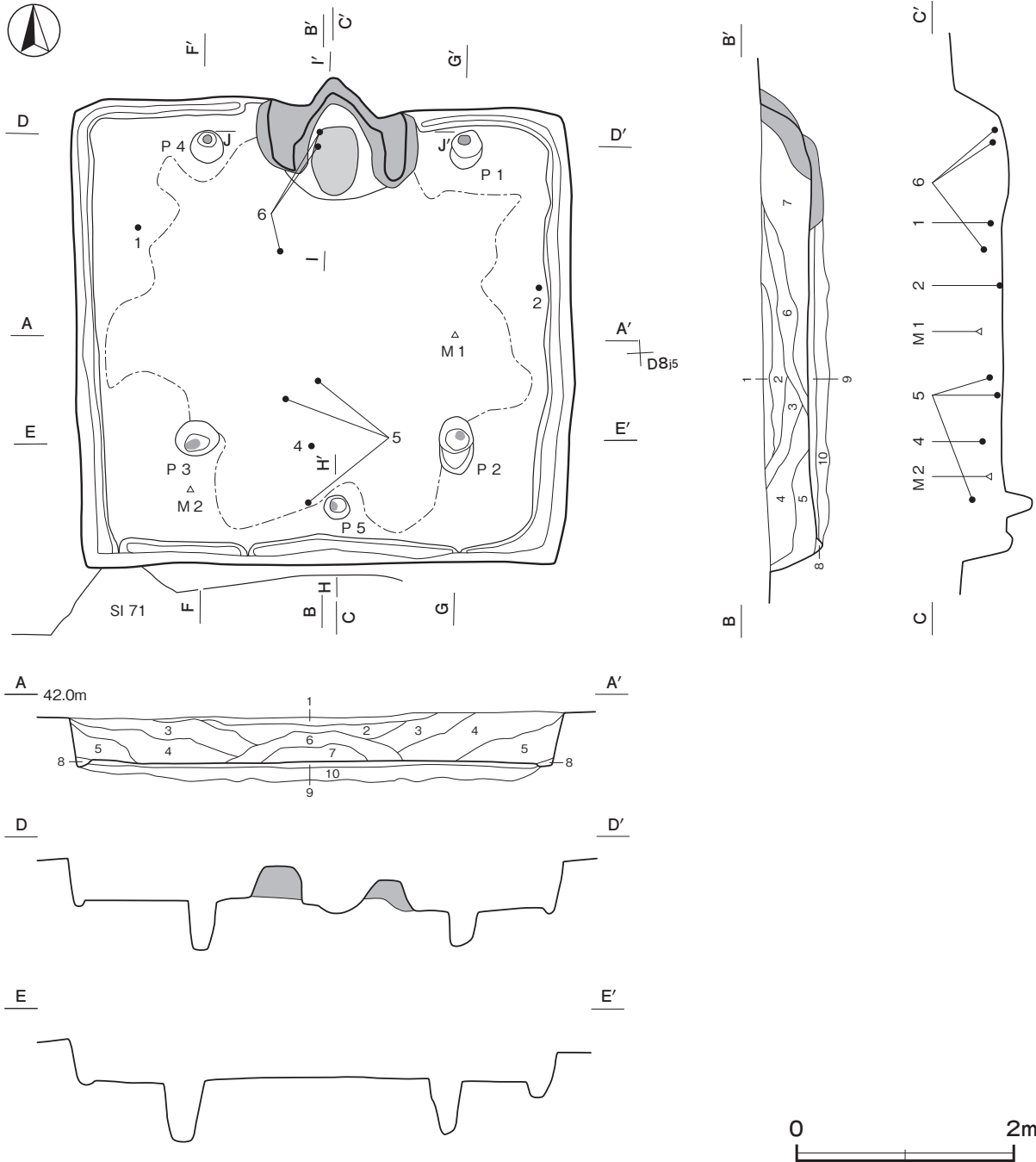
床 平坦な貼床で, 竈の前面及び中央部が踏み固められている。貼床は, 第 9・10 層を 20cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, ほぼ全周している。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 112cm, 燃焼部の幅は 50cm である。燃焼部は床面から 10cm ほど掘りくぼめられ, 第 8 ~ 10 層で埋め戻されている。袖部は, 床面及び第 10 層の上面に第 5 ~ 7 層を積み上げて構築されている。火床面は第 8 ~ 10 層の上面で, 第 8 層は火熱を受けて赤変硬化している。

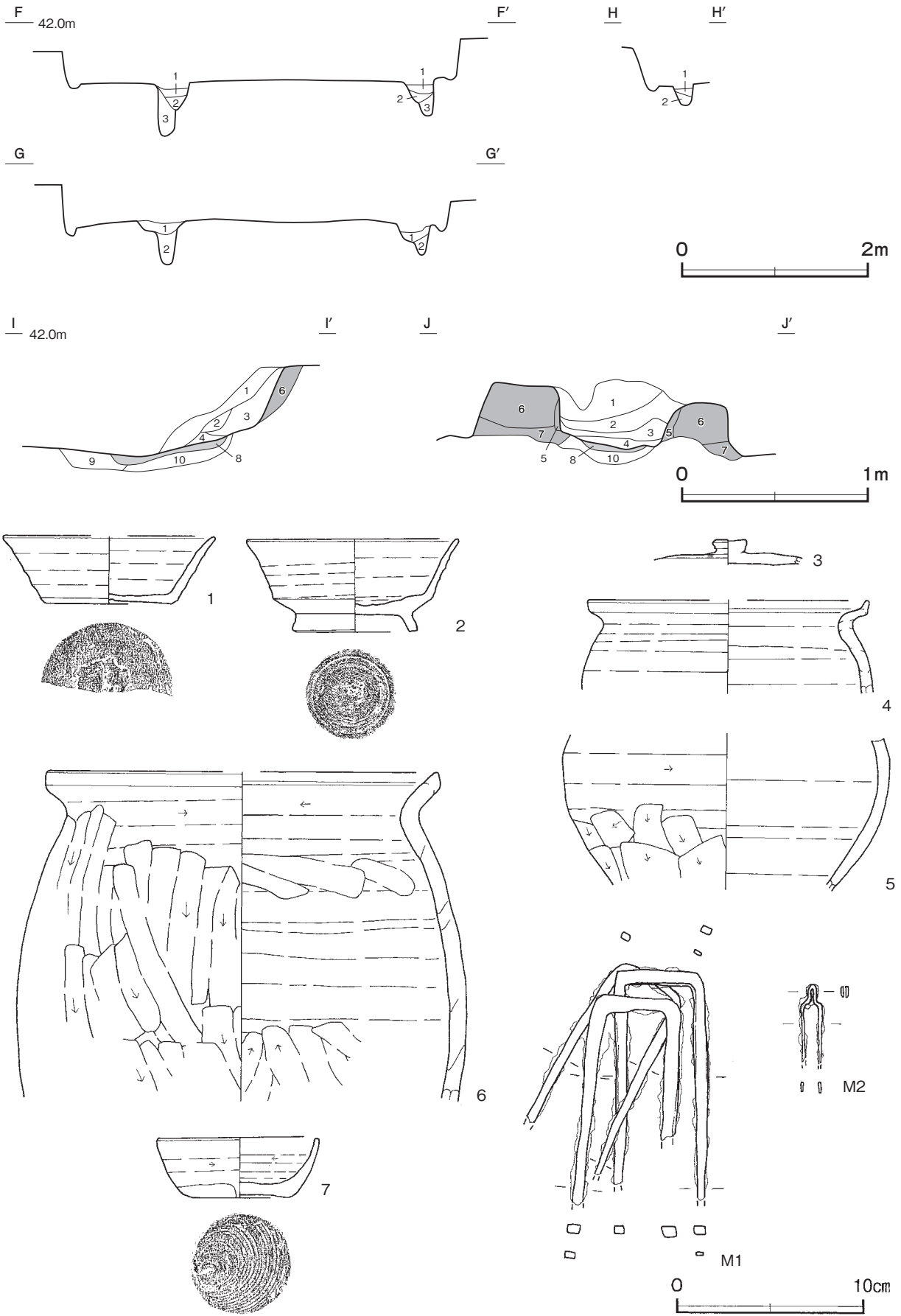
煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれ、第6層が貼り付けられている。火床面からは外傾している。第1～4層にはロームブロックや粘土ブロックなどが含まれていることから、壊されている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量 | 6 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、礫微量 |
| 2 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・今市軽石ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 | 8 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 9 褐色 | ロームブロック・今市軽石ブロック少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量 | 10 灰赤色 | ロームブロック・今市軽石ブロック・焼土ブロック少量 |



第344図 第70号竪穴建物跡実測図



第 345 图 第 70 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ32～50cmで、配置から主柱穴である。第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土である。P5は深さ20cmで、出入り口施設に伴うピットである。第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1～P5の底面で、柱の当たりを確認した。

P1～P4土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

P5土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック微量

覆土 8層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第9・10層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 8 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量
- 9 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 10 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 284点（坏8，高台付坏1，甕類274，ミニチュア土器1），須恵器片 24点（坏5，高台付坏1，蓋7，瓶類1，甕類10），金属製品2点（鏝，鑷子）のほか、縄文土器片 119点（深鉢），弥生土器片 11点（壺類），石器1点（凹石），石製品1点（双孔円盤），剥片2点（瑪瑙）が、全域に散在している。多くの土器は大型や中型の破片で、接合関係が比較的良好であることから、埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第70号竪穴建物跡出土遺物観察表（第345図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	[11.4]	3.6	7.0	長石・石英・雲母・針状物質	褐灰	良好	体部ロクロナデ 底部ヘラ切りを残す一方向の削り	覆土下層	40% 木葉下窯
2	須恵器	高台付坏	11.4	5.0	6.8	長石・石英・雲母・針状物質	灰黄褐	良好	体部ロクロナデ 底部高台部貼付	覆土下層	80% PL96 木葉下窯
3	須恵器	蓋	-	(1.3)	1.8	長石・針状物質・黒色粒子	灰黄	普通	天井部ロクロナデ 天頂部回転ヘラ削り後摘部貼付	覆土中	5% 木葉下窯
4	土師器	小形甕	[15.0]	(5.0)	-	長石・石英・雲母・針状物質	赤褐	普通	体部ロクロナデ	覆土中層	10% 煤付着
5	土師器	小形甕	-	(8.3)	-	長石・石英・細礫	にぶい赤褐	普通	体部ロクロナデ 外面下端縦・斜位の削り	覆土中層 覆土下層	30% 煤付着
6	土師器	甕	[21.0]	(17.7)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ 外面縦位のナデ 内面斜位のナデ 下位縦位のナデ	竈覆土 覆土下層	20% 煤付着
7	土師器	ミニチュア土器	8.5	3.3	5.2	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	100% PL98

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鏝	(11.3～12.4)	4.3～5.6	0.2～0.6	(95.88)	鉄	3本付着 先端部欠損 体部断面方形もしくは長方形 先端部近辺断面長方形	覆土中層	PL108
M2	鑷子	(4.1)	(1.2)	0.6	(2.85)	鉄	折り曲げ加工 先端部欠損 柄部U字状 断面長方形	覆土中層	PL108

第73号竪穴建物跡（第346・347図）

調査年度 平成26年度

位置 調査区中央部のE8a1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第74号竪穴建物跡を掘り込み、第211・233号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南半部が調査区域外に延びていることから、東西軸は3.45mで、南北軸は2.10mしか確認できなかったが、方形もしくは長方形と推定できる。主軸方向はN-5°-Eである。壁は高さ55～66cmで、ほ

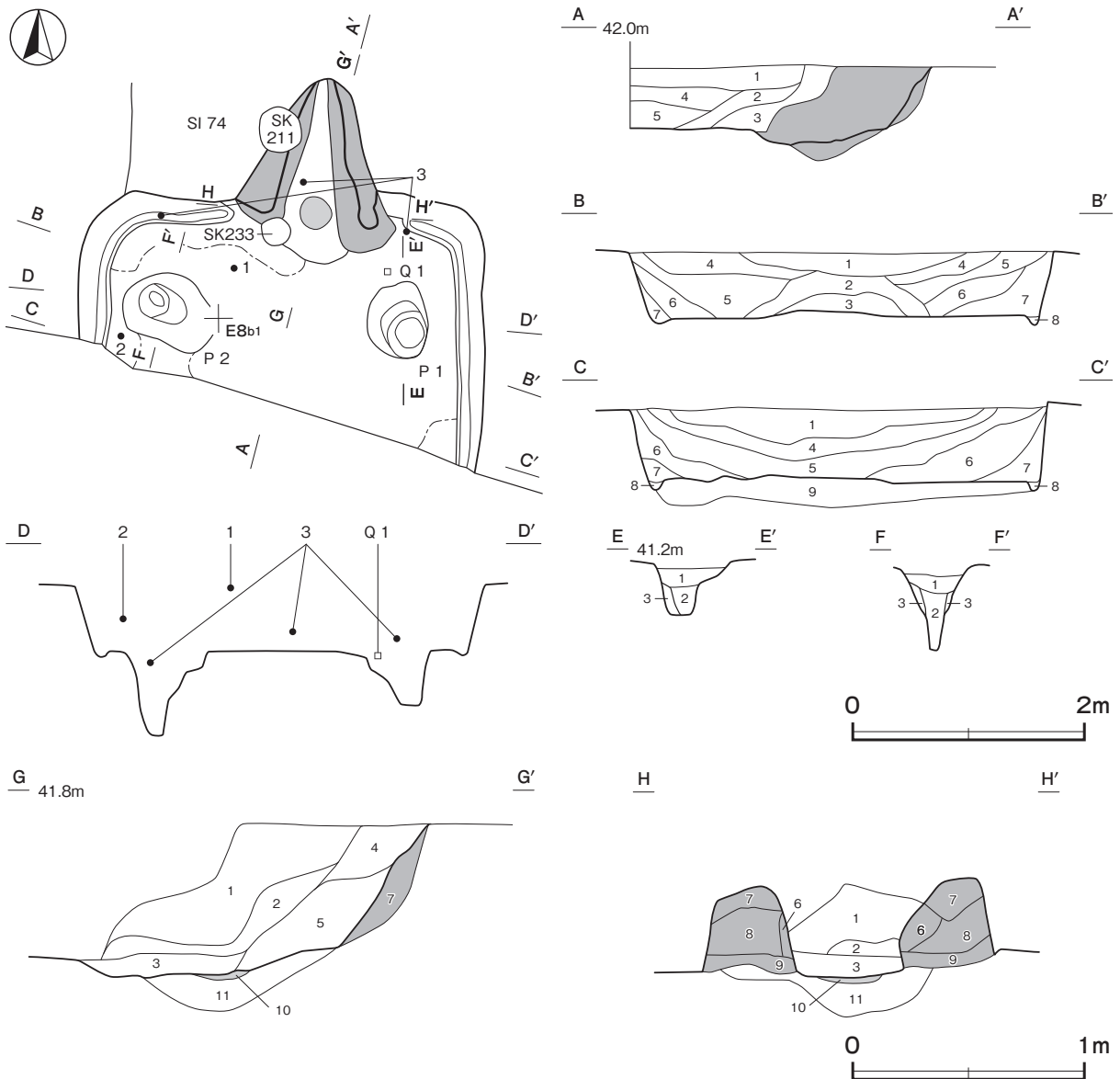
は直立している。

床 平坦な貼床で、P 2の南側及び東壁・北壁際の一部を除いて踏み固められている。貼床は、第9層を10～25cmほど埋め戻して構築されている。壁溝が、竈付近を除いて巡っている。

竈 北壁中央部の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは160cm、燃焼部の幅は45cmである。燃焼部は床面から15cmほど掘りくぼめられ、第10・11層で埋め戻されている。袖部は、地山面及び第11層上面に第6～9層を積み上げて構築されている。火床面は第10・11層の上面で、第10層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に100cmほど掘り込まれ、第7層が貼り付けられている。火床面からは外傾している。第1～5層には粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。

竈土層解説

- | | |
|---|---------------------------|
| 1 暗褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 橙色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック中量 |
| 2 灰黄褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 にぶい黄橙色 粘土ブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子少量, 粘土ブロック・ローム粒子微量 | 8 浅黄橙色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック微量 |
| 4 灰黄褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量 | 9 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量, ロームブロック微量 | 10 明赤褐色 ロームブロック少量 |
| | 11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |



第 346 図 第 73 号 竈 実測図

ピット 2か所。P1・P2は深さ40cm・60cmで、配置から主柱穴である。第3層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

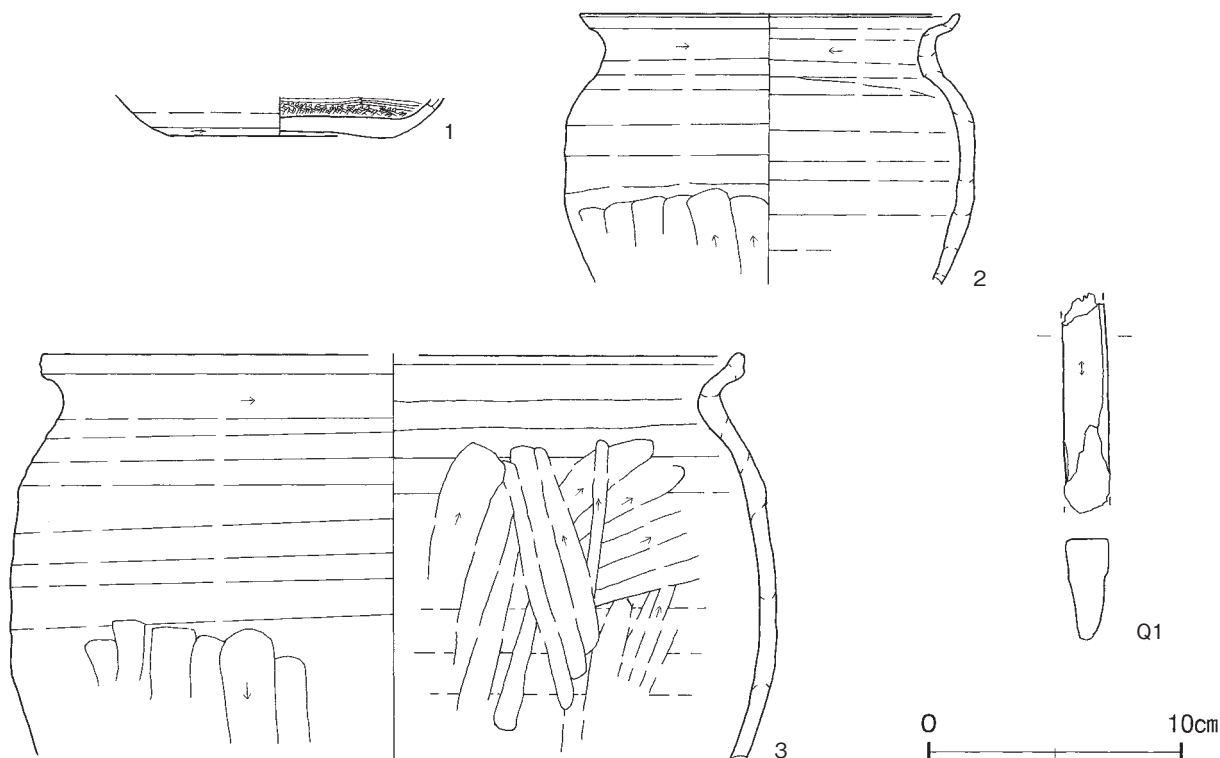
覆土 8層に分層できる。第2～8層はロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第9層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ロームブロック中量
- 9 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片185点(坏8, 蓋1, 甕類176), 須恵器片25点(坏6, 蓋4, 甕類15), 石器1点(砥石), 石製品3点(竈材)のほか, 縄文土器片23点(深鉢), 弥生土器片6点(壺類)が, 北半部に散在している。多くの土器は小片で, 接合関係に乏しいことから, 破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第347図 第73号竪穴建物跡出土遺物実測図

第73号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第347図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(16)	9.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ロクロナデ 体部下端部一方向の削り 内面横位の磨き 底部外面へら切りを残す一方向のナデ 内面多方向の磨き 内面黒色処理	覆土上層	30%
2	土師器	小形甕	[14.8]	(10.7)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部外面下位縦位の削り	覆土中層	20% 煤付着
3	土師器	甕	[27.6]	(17.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部外面下位縦位の削り 内面縦・斜位のナデ	覆土下層	10% 煤付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(8.7)	(1.8)	(4.1)	(97.15)	雲母片岩	端部・側面3面欠損 砥面1面	覆土下層	

第75号竪穴建物跡 (第348・349図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD8g7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 上部を後世の耕作などによって攪乱を受けていることから、南北軸は1.85m、東西軸は2.10mしか確認できなかった。方形もしくは長方形で、主軸方向はN-89°-Eと推定できる。

床 平坦な貼床で、竈の西側が踏み固められている。

竈 東壁に付設されていると推定できるが、詳細な位置は不明である。焚口部から煙道部までは110cm、燃焼部の幅は60cmである。燃焼部は床面から20cmほど掘りくぼめられ、第4・5層で埋め戻されている。袖部は、袖部の芯材を固定したと考えられる深さ20cmほどのピットを第3層で埋め戻した後、床面及び第3層上面に第2層を積み上げて構築されている。火床面は第4・5層の上面で、第4層は火熱を受けて赤変硬化している。第1層はロームブロックや焼土ブロックが含まれ、近辺に竈材と考えられる凝灰質泥岩が飛散していることから、壊されている。

竈土層解説

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 明赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| | 5 褐灰色 ロームブロック微量 |

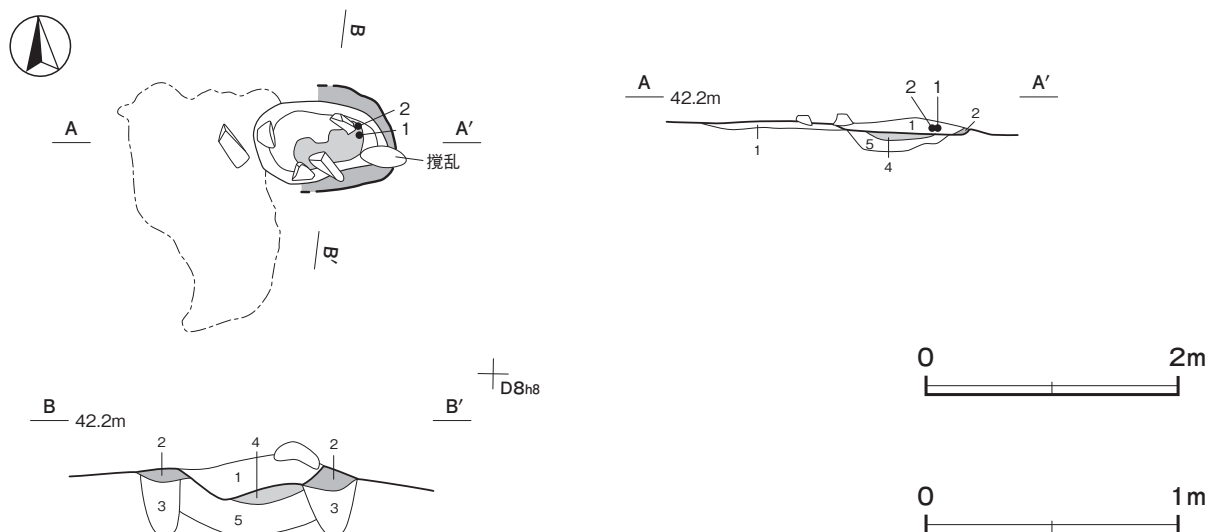
貼床構築土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、床の構築に伴って埋め戻されている。

貼床構築土土層解説

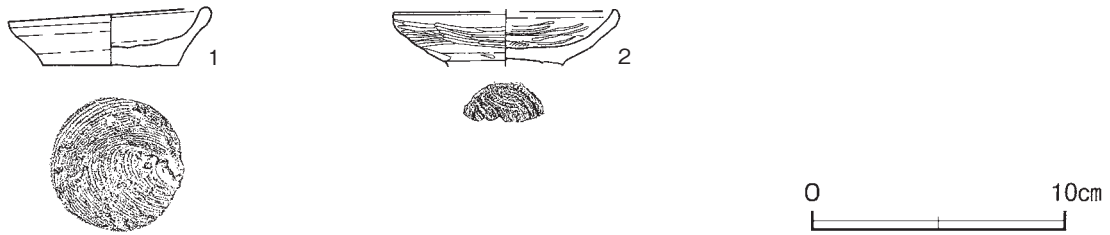
- 1 灰黄褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片10点(坏1, 皿類2, 高台付皿1, 甕類6), 須恵器片1点(坏), 石製品1点(竈材)のほか、縄文土器片2点(深鉢)が、竈から出土している。土器は、大型や中型の破片で接合関係が良好であることや良好な遺存状態で出土していることから、竈の廃絶に伴って廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。



第348図 第75号竪穴建物跡実測図



第 349 図 第 75 号竪穴建物跡出土遺物実測図

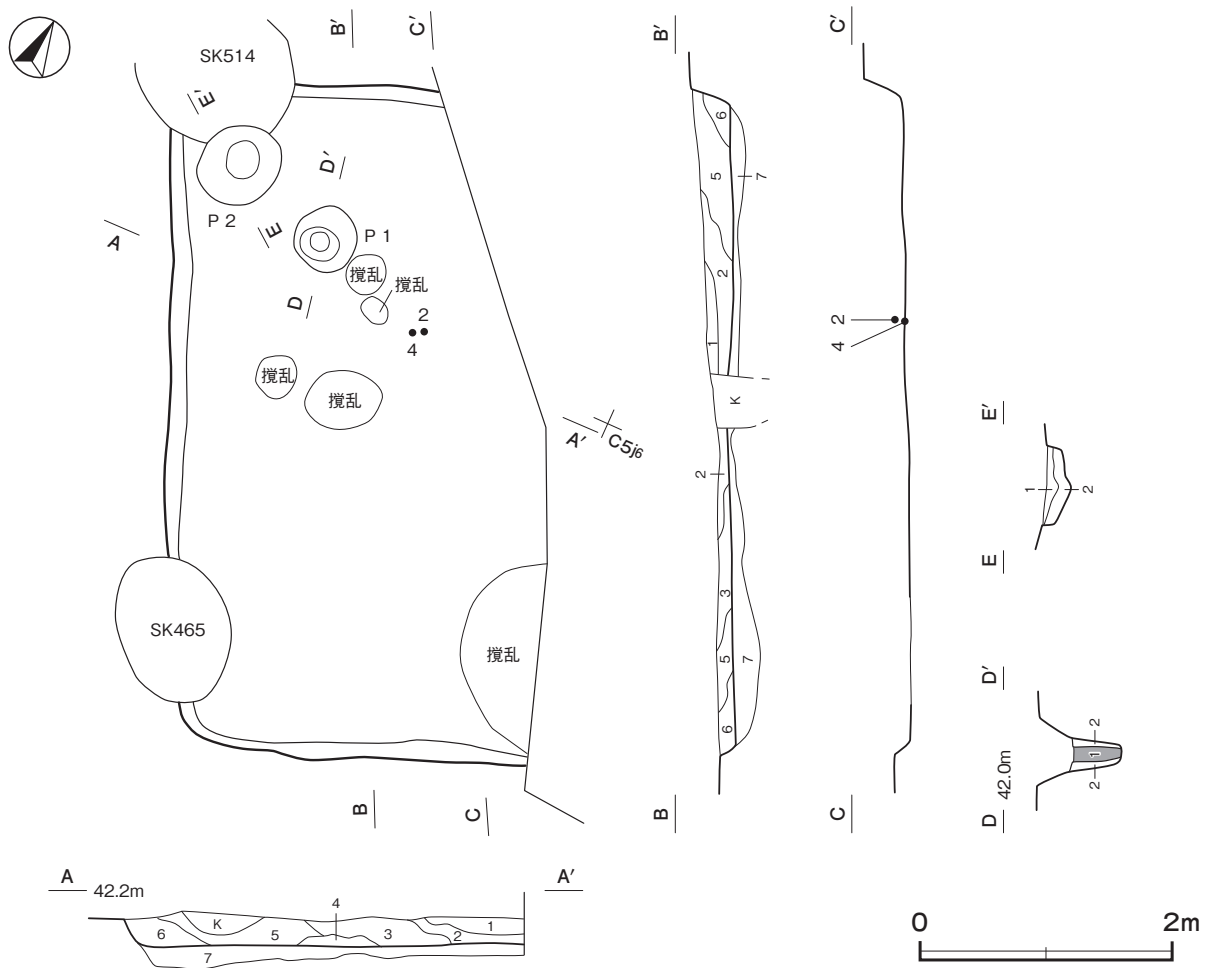
第 75 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 349 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	小皿	7.9	2.3	5.4	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部回転糸切り	竈覆土下層中	100%
2	土師器	高台付皿 [8.7]	[8.7]	2.1	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部外・内面横位の磨き 底部外面回転糸切り後一方のナデ高台部欠損 底部内面一方の磨き	竈覆土下層中	40%

第 106 号竪穴建物跡 (第 350・351 図)

調査年度 平成 27 年度

位置 調査区中央部の C 5 j5 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 350 図 第 106 号竪穴建物跡実測図

重複関係 第465・514号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びていることから、南北軸は5.32mで、東西軸は3.00mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁は高さ13～32cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床である。貼床は、第7層を5～20cmほど埋め戻して構築されている。

ピット 2か所。P1は深さ70cmで、配置から支柱穴である。第2層は埋土、第1層は柱痕跡である。P2は深さ20cmで、性格は不明である。第1・2層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

P1土層解説

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 2 褐色 ロームブロック中量 |
|-----------------|----------------|

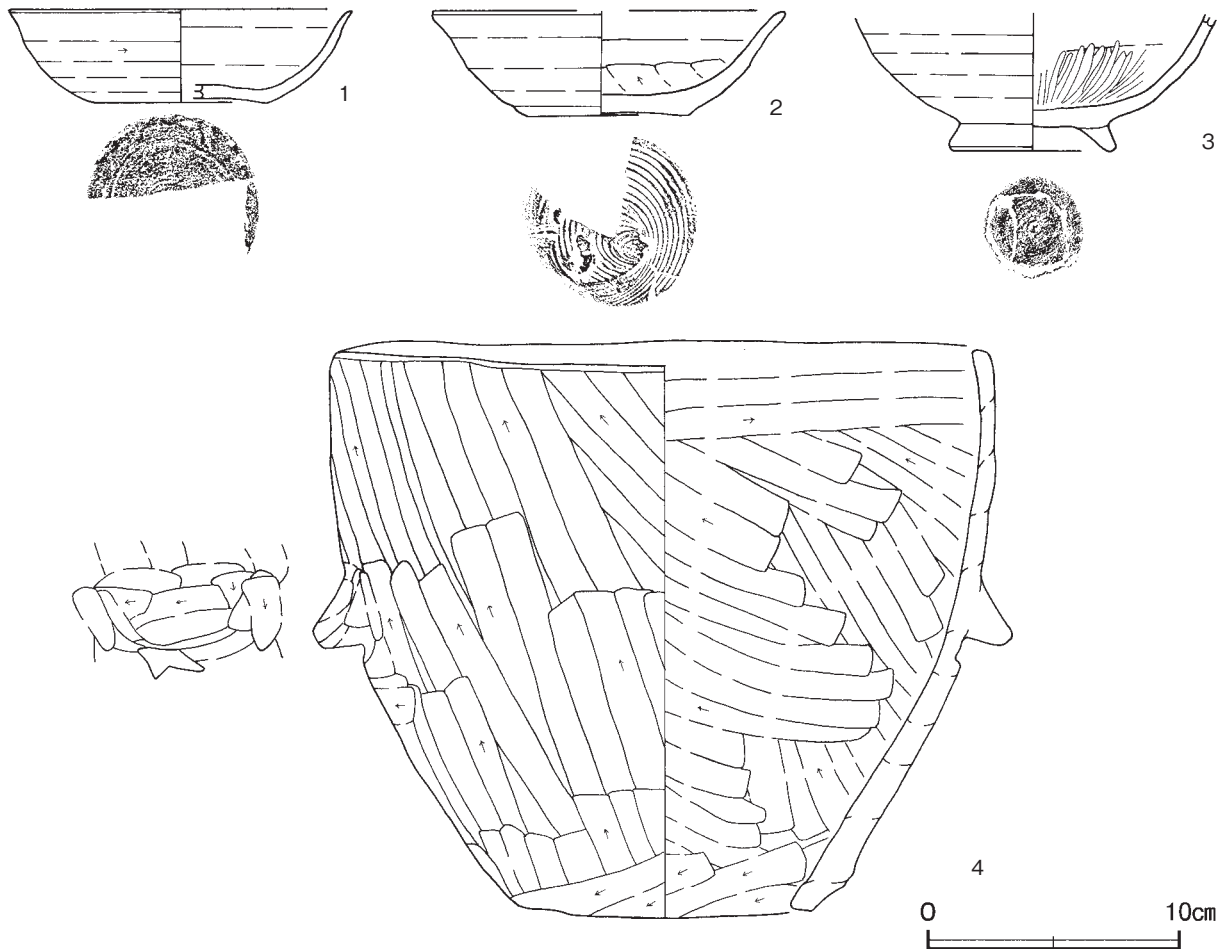
P2土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 2 暗褐色 ロームブロック中量 |
|-----------------|-----------------|

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第7層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 褐色 ロームブロック中量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | |



第351図 第106号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 58 点(坏 2, 椀 10, 高台付椀 1, 甕類 36, 甌 8, 竈罏 1)のほか、縄文土器片 10 点(深鉢), 弥生土器片 2 点(壺類)が、全域に散在している。多くの土器は大型や中型の破片で、接合関係が良好であることから、埋め戻しに伴って投棄されている。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。

第 106 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 351 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.6	3.7	[6.8]	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	60% PL92
2	土師器	坏	[13.9]	4.2	[6.5]	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面回転糸切り 内面一方向のナデ 内面黒色処理	覆土下層	30%
3	土師器	高台付椀	-	(5.5)	6.4	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部内面縦位の磨き 内面黒色処理	覆土中	30% PL94
4	土師器	甌	25.8	22.8	11.8	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部内面横位のナデ 体部外面縦・斜位の削り 後下端部斜位の削り 内面縦・斜位のナデ 把手部貼付	覆土下層	70% PL97 煤付着

第 112 号竪穴建物跡 (第 352・353 図 PL46)

調査年度 平成 27 年度

位置 調査区西部の C 3g1 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 116・121 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 501 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.55 m, 短軸 3.40 m の方形で, 主軸方向は N-3°-W である。壁は高さ 15~28cm で, ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で, 東壁及び西壁際を除いて踏み固められている。貼床は, 第 8 層を 5~20cm ほど埋め戻して構築されている。壁溝が, 竈の付近及び南西隅部, 東壁下を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。焚き口部から煙道部までは 130cm, 燃焼部の幅は 50cm である。燃焼部は床面から 15cm ほど掘りくぼめられ, 第 10・11 層で埋め戻されている。袖部は, 芯材として加工された凝灰質泥岩を第 9 層で固定した後, 第 9・11 層の上面に第 5~8 層を積み上げて構築されている。火床面は第 10・11 層の上面で, 第 10 層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 30cm ほど掘り込まれ, 第 6 層を貼り付けて構築されている。火床面からは, 外傾している。第 1~5 層は天井部の崩落土で, 懸架材として用いられた Q 1 が遺棄された後に崩落していることから, 自然に崩壊している。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|---------|------------------|
| 1 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 7 褐灰色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 | 8 灰褐色 | 粘土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 11 褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | | |

ピット 4 か所。P 1~P 3 は深さ 15~20cm で, 配置から主柱穴である。P 4 は深さ 20cm で, 配置から入り口施設に伴うピットである。第 3~5 層が埋土, 第 2 層が柱痕跡, 第 1 層が柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説 (各ピット共通)

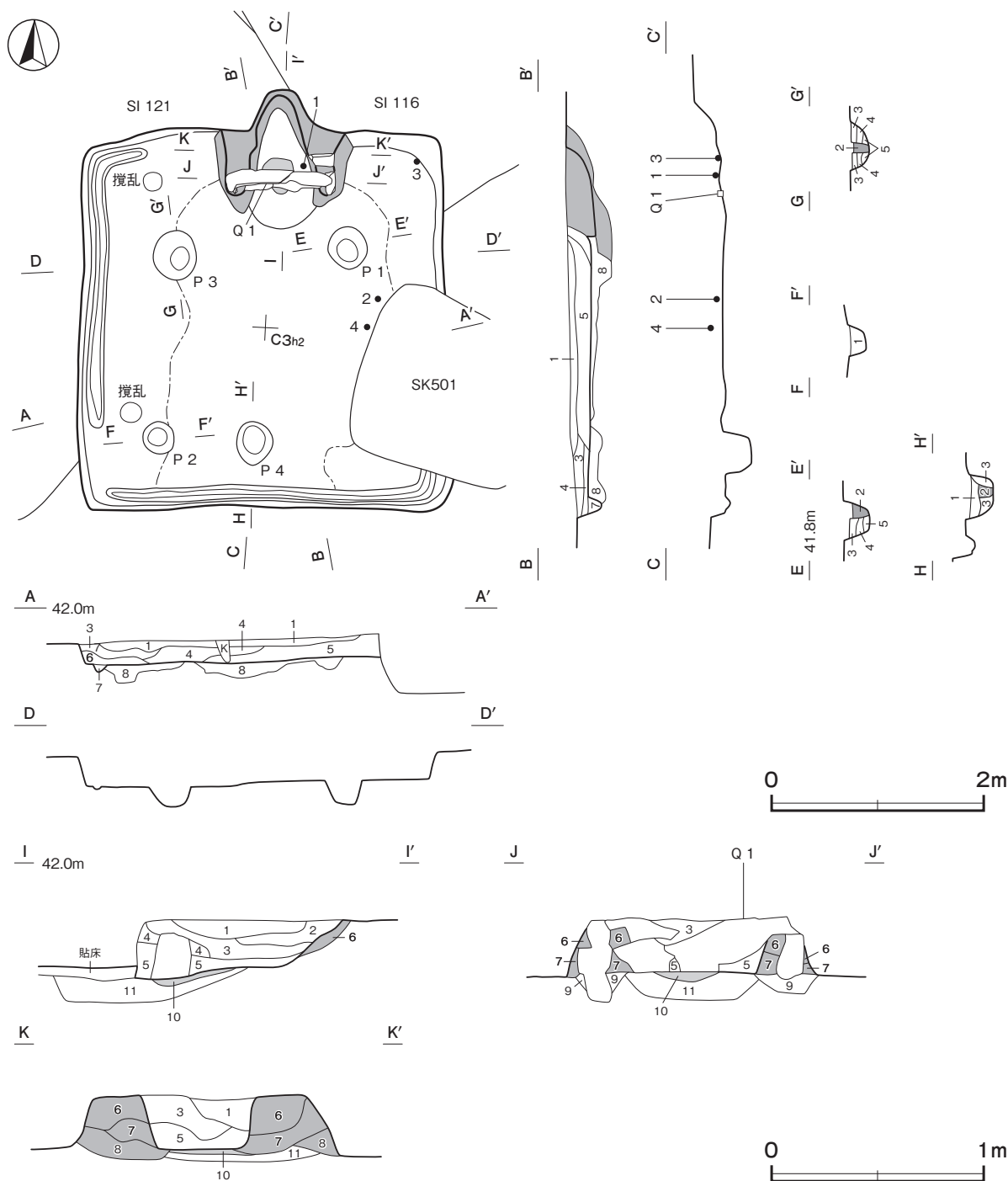
- | | | | |
|-------|-----------|----------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 5 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | | |

覆土 7層に分層できる。第2～7層はロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第1層は、埋め戻された後の自然堆積である。第8層は貼床の構築土である。

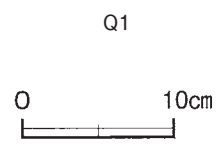
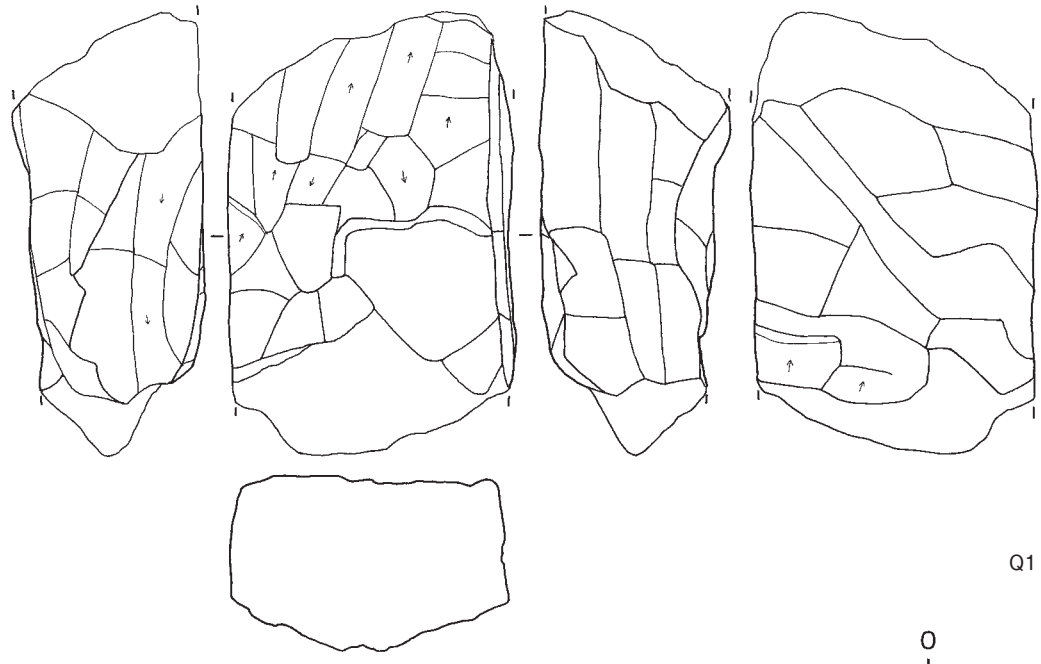
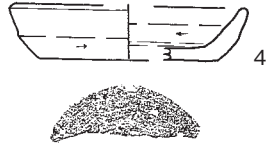
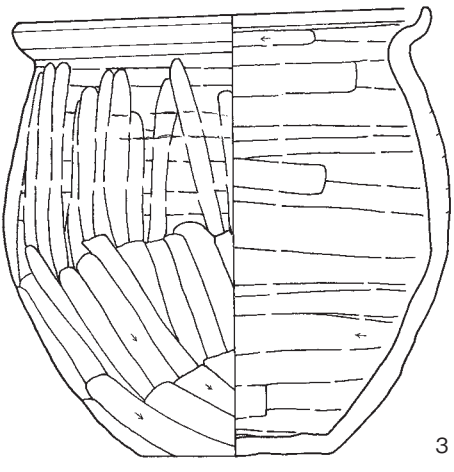
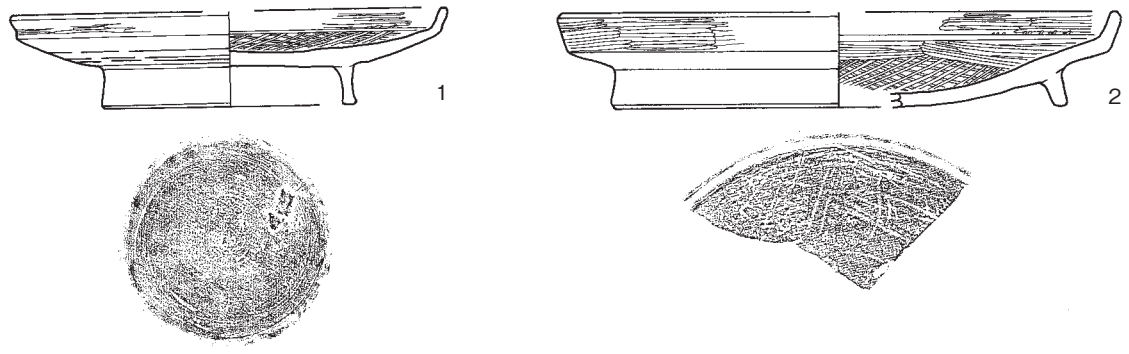
土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 極暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 6 灰褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 | 7 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片 244 点 (坏 8, 蓋 1, 盤 4, 鉢類 1, 甕類 228, ミニチュア土器 2), 須恵器片 1 点 (坏), 石製品 4 点 (袖部芯材 2, 竈材 2), 鉄滓 1 点 (19.28 g) のほか, 縄文土器片 22 点 (深鉢), 弥生土器片 2 点 (壺類) が, 全域に散在している。多くの土器は大型の破片や中型で, 接合関係が良好であることから, 埋め戻し



第 352 図 第 112 号 竪穴建物跡実測図



第 353 图 第 112 号竖穴建物跡出土遺物実測図

に伴って一括で投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉に比定できる。

第112号竪穴建物跡出土遺物観察表（第353図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	盤	17.0	3.8	10.0	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き後口縁に沿った円状の磨き 内面黒色処理	竈覆土中	90%
2	土師器	盤	[22.0]	3.8	[18.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位の磨き 体部内面二方向の磨き後口縁に沿った横位の磨き 内面黒色処理	覆土下層	30%
3	土師器	小形甕	16.1	17.8	7.2	長石・石英・雲母・細礫	にぶい褐	普通	ロクロナデ 体部外面縦位のナデ後縦位の削り 内面横位のナデ 底部一方向のナデ	覆土下層	90% PL97 煤付着
4	土師器	ミニチュア土器	[9.0]	2.1	[7.0]	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部一方向のナデ後外縁部に沿ったナデ	覆土下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	竈材	(29.0)	19.0	12.9	(3.395)	凝灰質泥岩	両端部欠損 側面削り調整 懸架材 劣化のため一部を実測	竈覆土中	二次焼成

第120号竪穴建物跡（第354・355図）

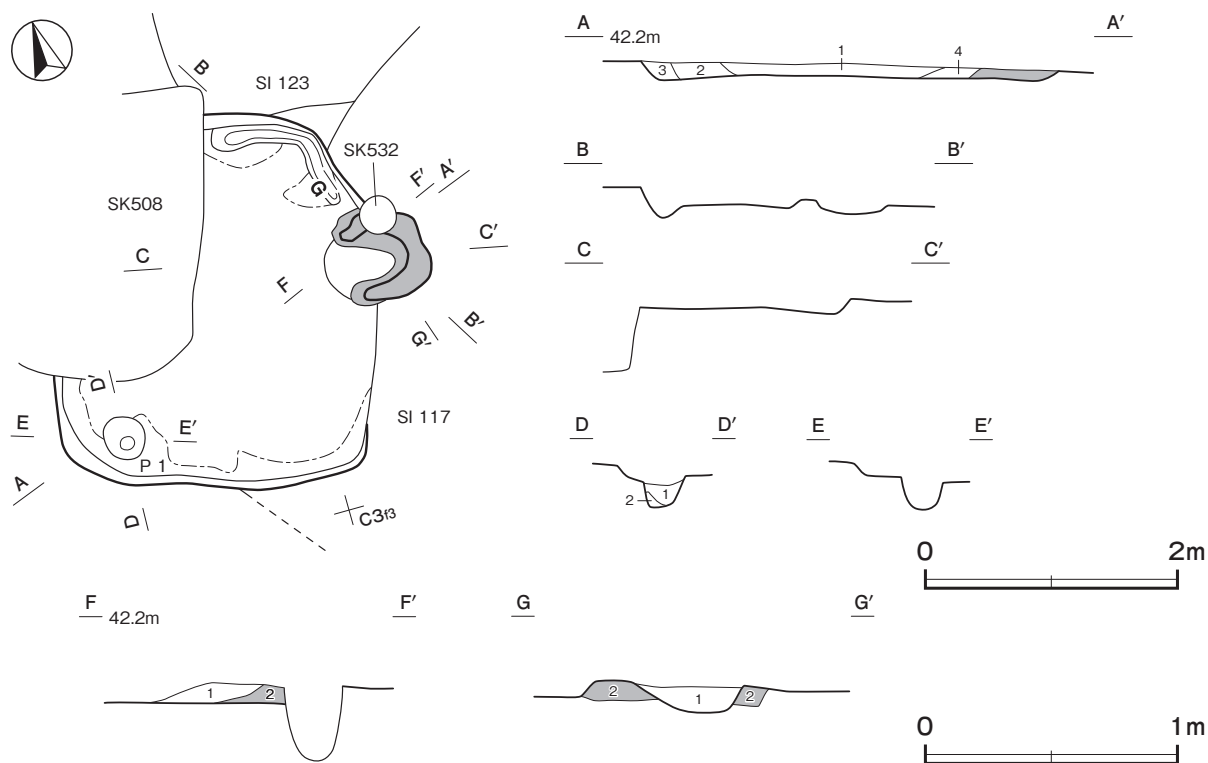
調査年度 平成27年度

位置 調査区西部のC3e2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第117・123号竪穴建物跡、第1号遺物包含層を掘り込み、第508・532号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が削平され、壁が明確に確認できなかったことから、長軸は2.95m、短軸は2.55mである。不整な長方形で、主軸方向はN-112°-Eである。壁は高さ8~15cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部と北壁際の一部が踏み固められている。壁溝が、北東隅部の壁下に巡っている。



第354図 第120号竪穴建物跡実測図

竈 東壁中央部のやや北寄りに付設されている。焚き口部から煙道部までは70cm、燃焼部の幅は30cmである。燃焼部は床面から10cmほど掘りくぼめられ、地山面に構築されている。袖部は、床面の上面に第2層を積み上げて構築されている。火床面は地山の上面で、火熱を受けているものの赤変硬化はしていない。煙道部は壁外に30cmほど掘り込まれ、第2層が貼り付けられている。火床面からは外傾している。第1層には粘土ブロックや焼土ブロックが含まれていることから、壊されている。

竈土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量・焼土ブロック微量 2 灰黄褐色 粘土ブロック多量

ピット P1は深さ20cmで、配置から貯蔵穴の可能性はあるが、不明である。第1・2層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

P1土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量 2 暗褐色 ロームブロック中量

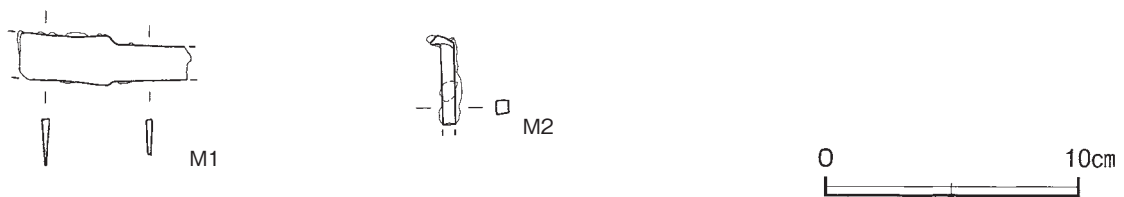
覆土 4層に分層できる。第1～4層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 3 褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量 4 灰黄褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片17点（甕類）、金属製品3点（刀子1、釘2）のほか、縄文土器片6点（深鉢）、弥生土器片4点（壺類）が、全域に散在している。多くの土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器からは明確にできないが、主軸方向から10世紀代に推定できる。



第355図 第120号竪穴建物跡出土遺物実測図

第120号竪穴建物跡出土遺物観察表（第355図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子	(6.8)	(2.1)	0.2～0.3	(14.50)	鉄	刃部先端欠損 刃部断面三角形 柄部端部欠損 柄部両関 柄部断面長方形	覆土中	
M2	釘	(3.6)	0.9	0.5	(5.42)	鉄	釘頭段打痕 身部断面方形	覆土中	

第123号竪穴建物跡（第356図）

調査年度 平成27・28年度

位置 調査区西部のC3d3区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第117号竪穴建物跡、第1号遺物包含層を掘り込み、第120号竪穴建物、第508・524号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから、東西軸は5.86mで、南北軸は3.15mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁は高さ14～34cmで、ほぼ直立もしくは外傾している。

床 平坦な貼床で、全域が踏み固められている。貼床は、第4層を5～10cmほど埋め戻して構築されている。

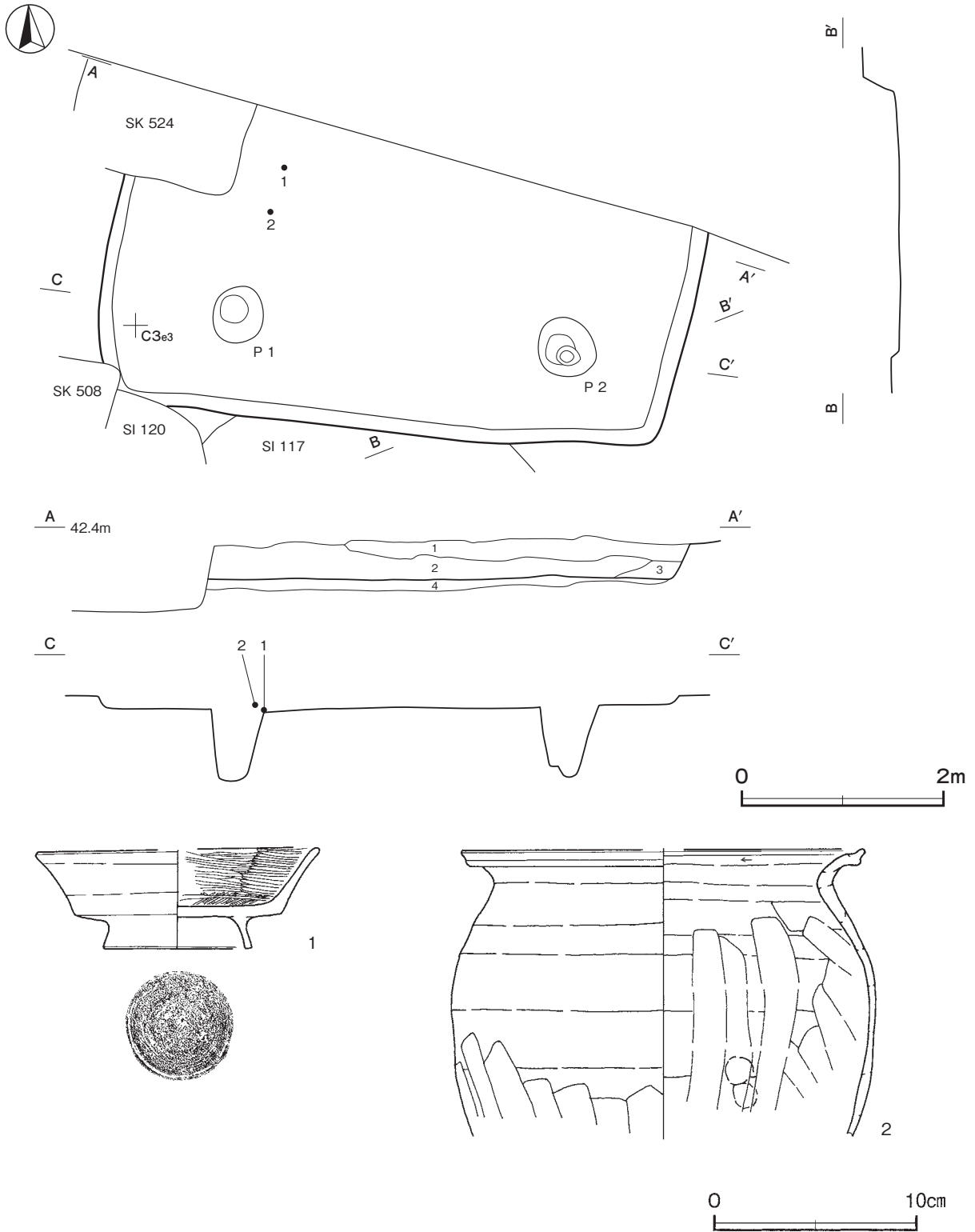
ピット 2か所。P 1・P 2は深さ 65～70cmで、配置から主柱穴である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。

第4層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 黒褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量 |



第 356 図 第 123 号 縦穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 269 点 (坏 24, 高台付坏 1, 甕類 244), 須恵器片 4 点 (坏 2, 蓋 1, 甕類 1), 石製品 1 点 (竈材) のほか, 縄文土器片 85 点 (深鉢), 弥生土器片 5 点 (壺類) が, 全域に散在している。多くの土器は中型の破片や小片で, 接合関係が良好であることから, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に推定できる。

第 123 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 356 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	13.8	5.4	7.4	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	体部内面横位の磨き・底部内面二方向の磨き後見込み沿った円状の磨き	覆土下層	60%
2	土師器	甕	[19.8]	(13.5)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ・体部外面縦位の削り内面縦・斜位のナデ・指頭痕	覆土下層	20% 煤付着

第 126 号 竪穴建物跡 (第 357 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 3 e6 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 1 号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びていることから, 東西軸は 5.25 m, 南北軸は 1.00 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが, 主軸方向は不明である。壁は高さ 25 ~ 30cm で, ほぼ直立している。

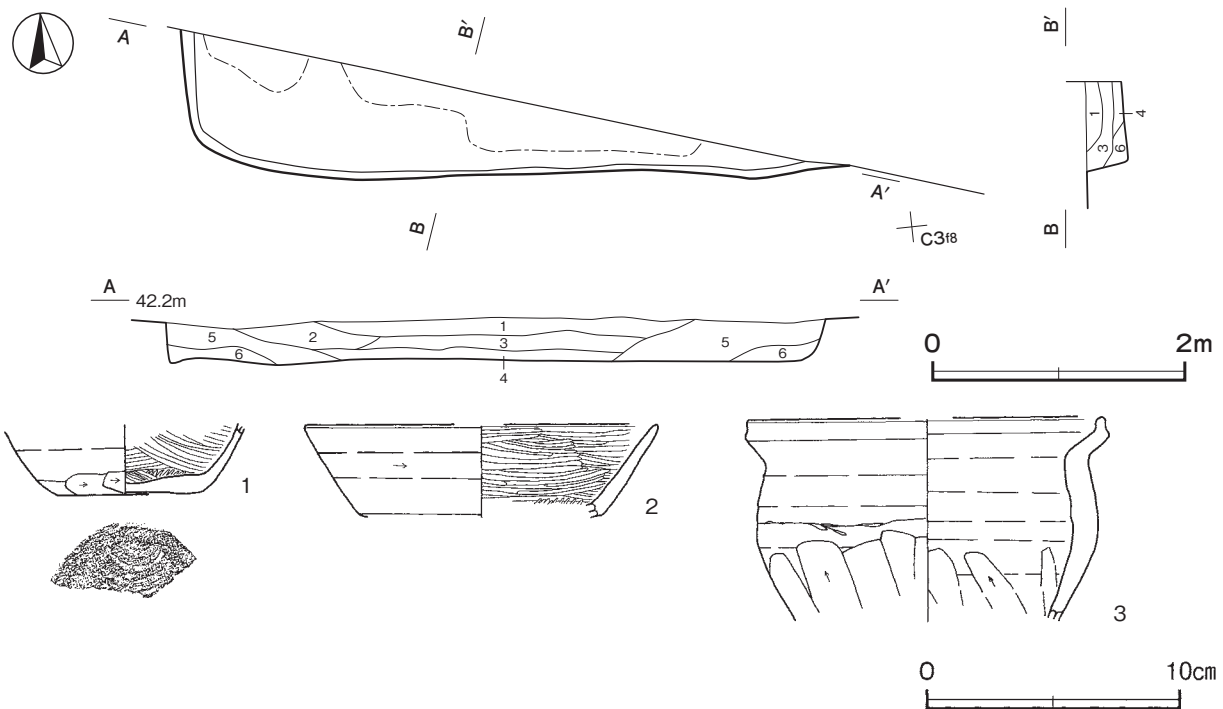
床 平坦で, 南壁際を除いて踏み固められている。

覆土 8 層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 160 点 (坏 2, 高台付坏 1, 甕類 157), 須恵器片 2 点 (甕類) のほか, 縄文土器片 83 点 (深



第 357 図 第 126 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

鉢), 弥生土器片 2 点 (壺類) が, 全域に散在している。多くの土器は中型の破片や小片で, 接合関係に乏しいことから, 破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。

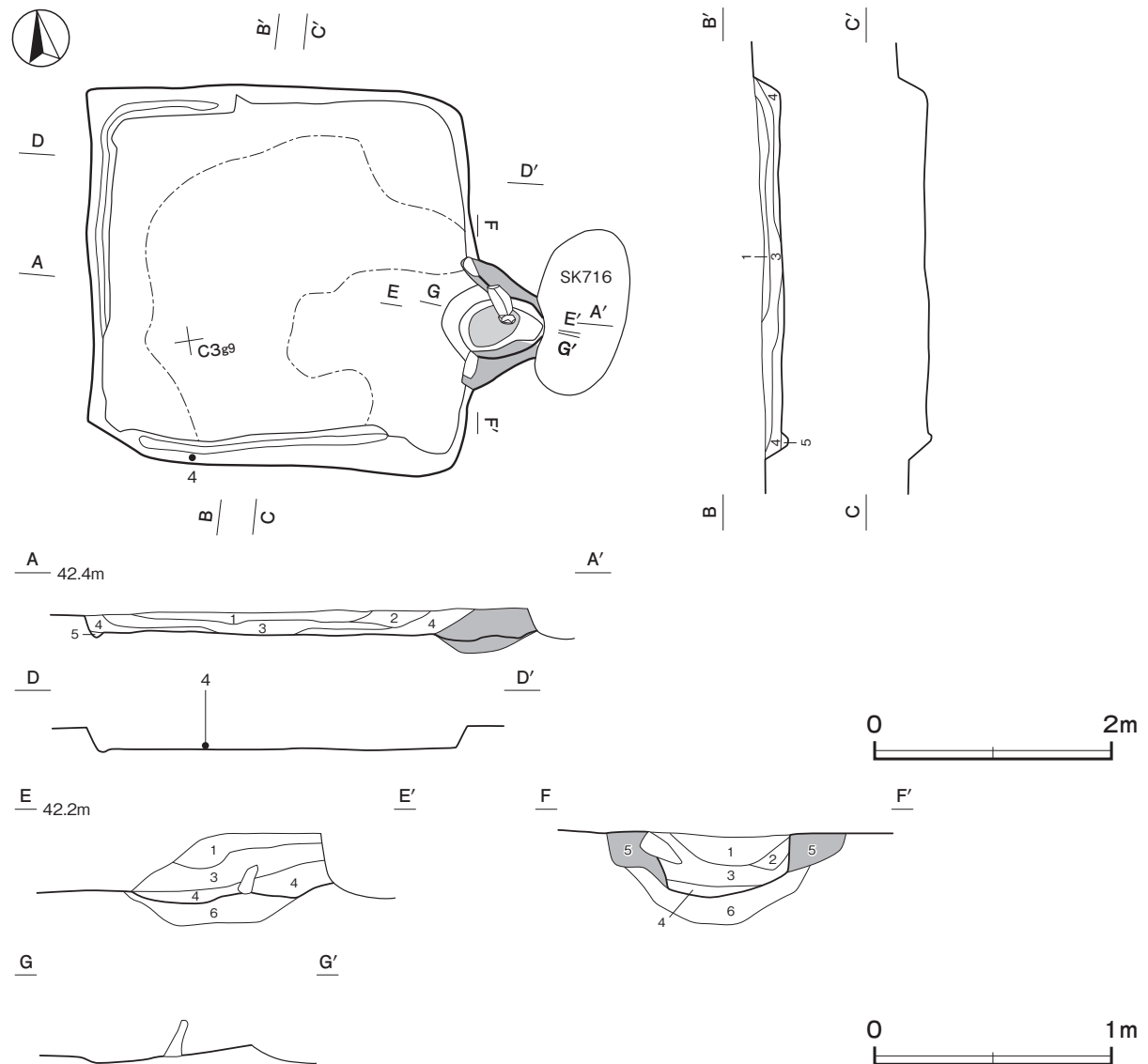
第 126 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 357 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(2.8)	[6.0]	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部下端部斜位の削り 内面横位の磨き 底部外面糸切り後一方向のナデ 内面二方向のヘラ磨き 内面黒色処理	覆土中	20%
2	土師器	高台付坏	[14.0]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面一方向の磨き	覆土中	20%
3	土師器	小形甕	[14.0]	(8.0)	-	長石・石英・雲母・針状物質	赤橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部外面縦位の削り 内面縦位のナデ	覆土中	20% 二次焼成

第 129 号竪穴建物跡 (第 358・359 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 3 f9 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 358 図 第 129 号竪穴建物跡実測図

重複関係 第716号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.28m、短軸3.20mの方形で、主軸方向はN-103°-Eである。壁は高さ18~25cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、北西壁、南壁際の一部を除いて踏み固められている。

竈 東壁中央部のやや南寄りに付設されている。焚き口部から煙道部までは115cmと推定でき、燃焼部の幅は60cmである。燃焼部は床面から20cmほど掘りくぼめられ、第6層で埋め戻されている。袖部は、芯材として加工された凝灰質泥岩が用いられ、床面及び第6層の上面に第5層を積み上げて構築されている。火床面は第6層の上面で、一部が火熱を受けて赤変硬化している。加工された凝灰質泥岩が支脚に用いられ、下端部が第5層の上面に据えつけられている。煙道部は壁外に100cmほど掘り込まれ、火床面からは外傾している。第1~4層はロームブロックや粘土ブロックが含まれ、懸架材の一部が燃焼部に廃棄されていることから、壊されている。

竈土層解説

- 1 におい褐色 粘土ブロック中量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 5 浅黄橙色 粘土ブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量

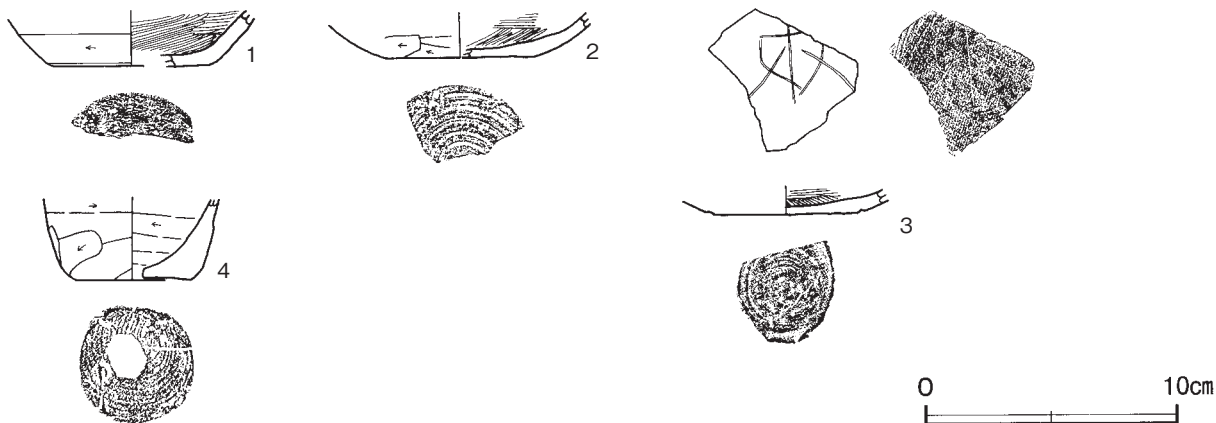
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化物微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片71点(坏6, 皿鉢類1, 甕類62, ミニチュア土器1), 須恵器片1点(甕類)のほか、縄文土器片32点(深鉢)が、全域に散在している。多くの土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。4は、底部が穿孔されてから、投棄されている。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第359図 第129号竪穴建物跡出土遺物実測図

第129号竪穴建物跡出土遺物観察表(第359図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(2.2)	[6.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい黄橙	普通	体部下端部一方向の削り 内面横位の磨き 底部外面一方向の削り 内面体部からの一方向の磨き	覆土中	10%
2	土師器	坏	-	(1.8)	[6.0]	長石・石英・雲母・針状物質	におい橙	普通	体部外面下端斜位の削り 内面横位の磨き 底部外面回転糸切り 内面一方向の磨き	覆土中	10%
3	土師器	皿	-	(0.6)	(5.8)	長石・石英・雲母・針状物質	におい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面一方向の磨き 高台部欠損	覆土中	10% PL96 「丸に木」の刻書
4	土師器	ミニチュア土器	-	(3.2)	4.6	長石・石英・雲母・針状物質	浅黄橙	普通	体部下端部斜位の削り 底部回転糸切り	覆土下層	90% PL98 外面からの穿孔

第 132 号 竪穴建物跡 (第 360 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 3 f8 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 134 号 竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延び, 第 134 号 竪穴建物に掘り込まれていることから, 南北軸は 1.10 m, 東西軸は 1.90 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形で, 主軸方向は不明である。壁は高さ 22 ~ 26 cm で, ほぼ直立している。壁溝が, 南壁下の一部を除いて巡っている。

床 平坦で, 全面が踏み固められている。

ピット P 1 は深さ 20 cm で, 配置から支柱穴の可能性はある。第 2 層は埋土, 第 1 層は柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説

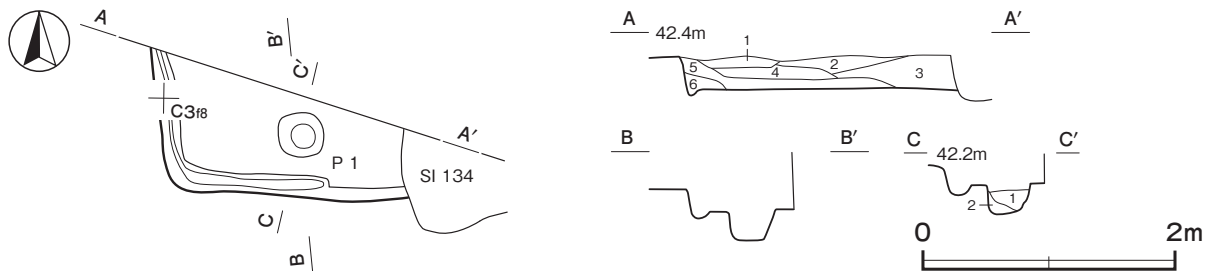
- | | |
|---------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量 | 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
|---------------------|---------------------------|

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 ロームブロック中量 |

所見 時期は, 出土土器がないことから不明であるが, 建物跡の規模や主軸方向から奈良時代もしくは平安時代と推察できる。



第 360 図 第 132 号 竪穴建物跡実測図

第 134 号 竪穴建物跡 (第 361 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 3 f8 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 132 号 竪穴建物跡を掘り込んでいます。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから, 南北軸は 0.90 m, 東西軸は 1.45 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが, 主軸方向は不明である。壁は高さ 25 ~ 35 cm で, ほぼ直立している。

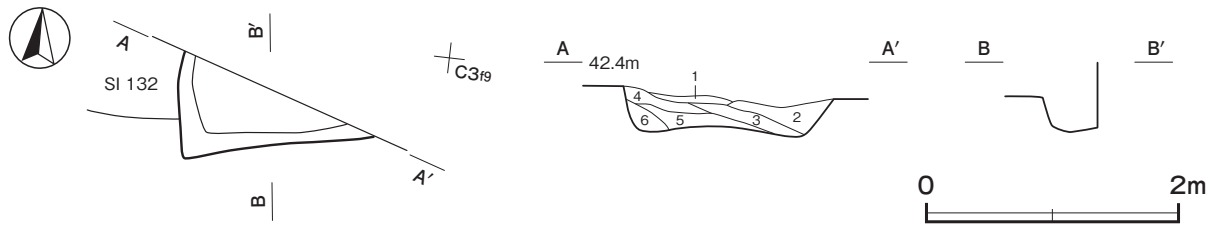
床 平坦で, 全面が硬化している。

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック少量 |

所見 時期は, 出土土器がないことから不明であるが, 建物跡の規模や主軸方向から奈良時代もしくは平安時代と推察できる。



第 361 図 第 134 号竪穴建物跡実測図

第 136 号竪穴建物跡 (第 362・363 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の D 3 a0 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 1 号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 竈の周辺部を除いて調査区域外に延びていることから、南北軸は 0.64 m、東西軸は 2.95 m しか確認できなかったが、方形もしくは長方形と推定できる。主軸方向は不明である。壁は高さ 40cm で、ほぼ直立している。

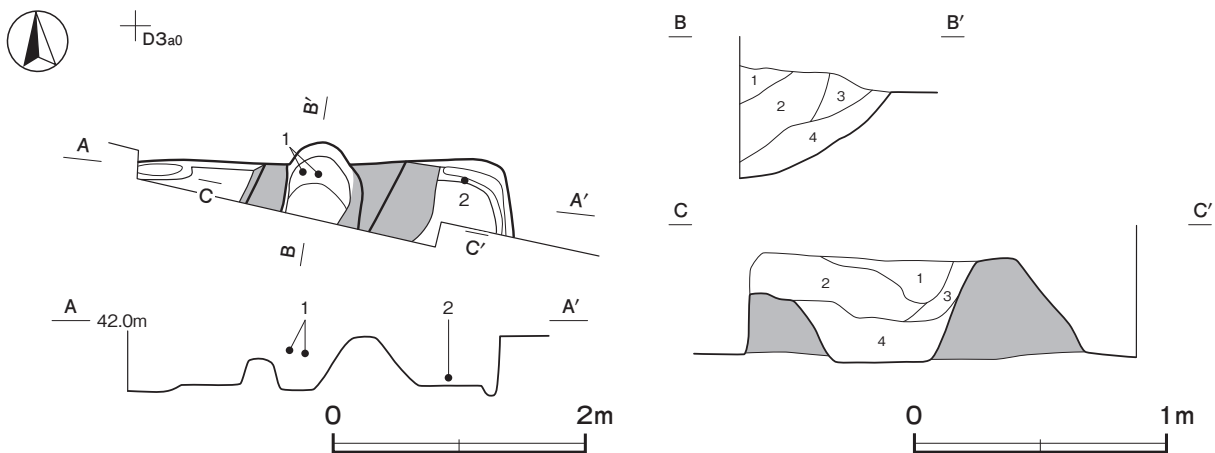
床 平坦である。壁溝が、竈の周辺を除いて巡っている。

竈 北壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。燃烧部の幅は 44cm である。燃烧部は床面から 10cm ほど掘りくぼめられている。袖部は、床面及び地山の上面に粘土を積み上げて構築されている。火床面は掘りくぼめられた地山の上面で、火熱を受けているものの赤変硬化はしていない。煙道部は壁外に 15cm ほど掘り込まれ、火床面から外傾している。第 1～4 層はロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから、壊されている。

竈土層解説

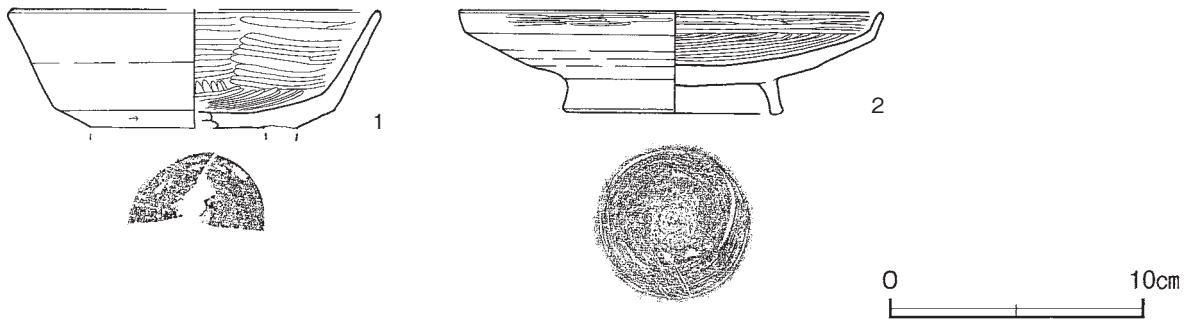
- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 浅黄橙色 粘土ブロック多量 | 3 褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 赤褐色 焼土ブロック中量, 粘土ブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 36 点 (坏 5, 高台付坏 1, 盤 2, 甕類 28) のほか、縄文土器片 2 点 (深鉢) が、竈内及び近辺から出土している。多くの土器は大型や中型の破片で、接合関係が良好であることから、埋め戻しに伴って投棄されたと推定できる。



第 362 図 第 136 号竪穴建物跡実測図

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第 363 図 第 136 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 136 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 363 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付杯	[14.6]	4.6	[8.0]	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面二方向の磨き 内面黒色処理	竈覆土上層	50%
2	土師器	盤	16.7	4.0	8.6	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部横位の磨き 体部内面一方向の磨き後口縁部に沿った円状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	90% PL95

第 139 号竪穴建物跡（第 364・365 図）

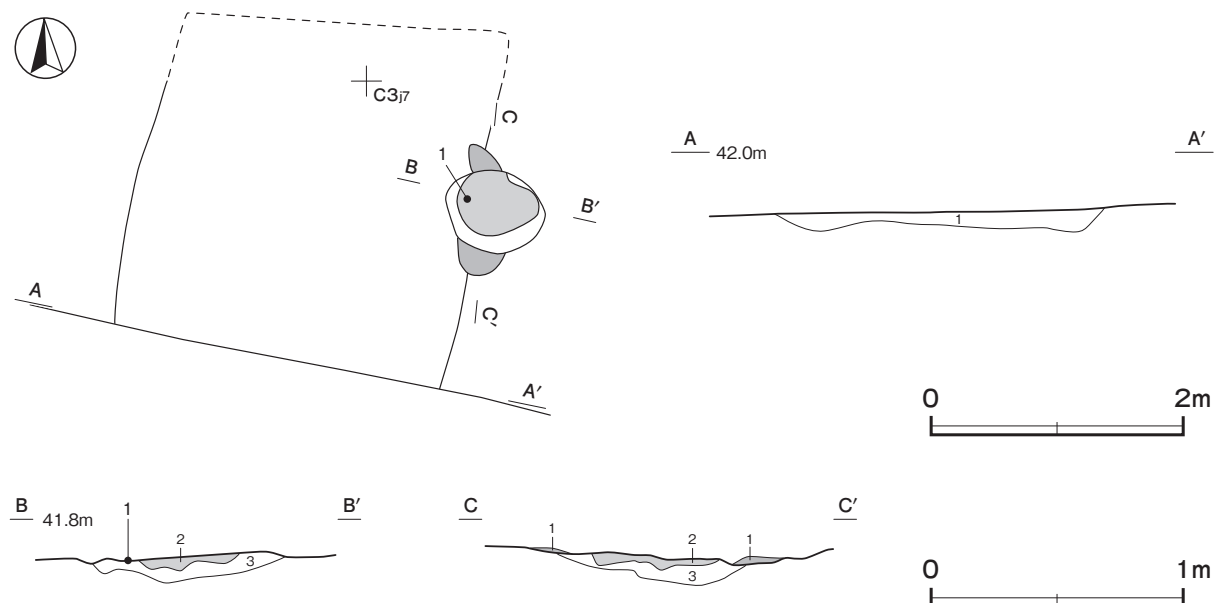
調査年度 平成 25 年度

位置 調査区西部の C 3j6 区，標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 1 号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 上部が削平され，南部が調査区域外に延びていることから，東西軸は 2.78m で，南北軸は 2.70 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき，主軸方向は N - 100° - E である。壁は，確認できなかった。

床 平坦な貼床である。貼床は，第 1 層を 15cm ほど埋め戻して構築されている。



第 364 図 第 139 号竪穴建物跡実測図

竈 東壁に付設されているが、詳細な位置は不明である。焚口部から煙道部までは90cm、燃焼部の幅は62cmである。燃焼部は床面から20cmほど掘りくぼめられ、第2・3層で埋め戻されている。袖部は、床面及び第3層の上面に第1層を積み上げて構築されている。火床面は第2・3層の上面で、第2層は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cmほど掘り込まれているが、火床面からの断面形状は不明である。

竈土層解説

- 1 灰褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量

貼床構築土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されて構築されている。

貼床構築土土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片9点(坏2, 甕類7), 須恵器片1点(蓋), 石器1点(砥石)のほか、縄文土器片25点(深鉢)が、掘方の全域に散在している。多くの土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損したものが床の構築に伴って混入したと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第365図 第139号竪穴建物跡出土遺物実測図

第139号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第365図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	1.7	6.0	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい褐	普通	体部ロクロナテ 外面下端部一方向の削り底 部回転糸切り	竈掘方覆土	10%

第140号竪穴建物跡 (第366図)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC4g2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第2A・B号道路、第613号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから、東西軸は4.02mで、南北軸は3.52mしか確認できなかった。長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁は高さ20～29cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット P1は深さ50cmで、配置から支柱穴や壁柱穴の可能性はあるが、不明である。第3層が埋土、第1・2層が柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

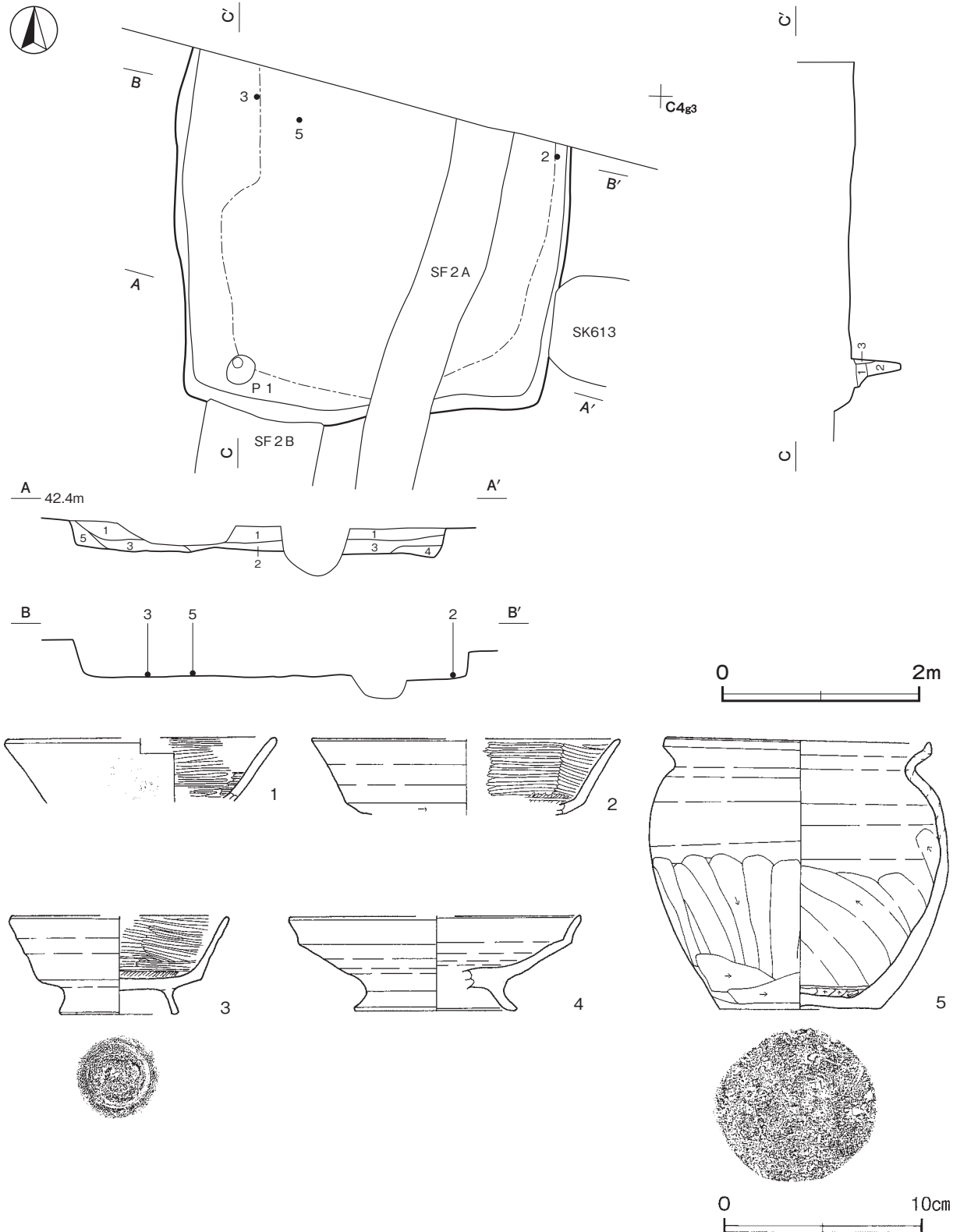
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 219 点（坏 15，高台付坏 14，甕類 189，甑 1），須恵器片 5 点（坏 2，甕 3）が，主に壁際から出土している。多くの土器は大型や中型の破片で，接合関係が良好であることから，埋め戻しの早い段階で投棄されたと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第 366 図 第 140 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

第 140 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 366 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.4]	(3.3)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい黄橙	普通	体部内面横位の磨き 内面黒色処理	覆土中	5% PL96「澁」の墨書
2	土師器	高台付坏	[15.6]	(3.8)	-	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	体部内面横位の磨き 底部内面一方向の磨き後見込みに沿った円状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	20%
3	土師器	高台付坏	[11.0]	5.0	6.0	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい褐	普通	体部内面横位の磨き 底部内面一方向の磨き後見込みに沿った円状の磨き 内面黒色処理	覆土下層	70% 外面煤付着
4	須恵器	盤	[14.8]	(4.8)	[8.2]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黒	良好	口縁部・体部ロクロナデ	覆土中	10%
5	土師器	小形甕	13.3	13.8	8.1	長石・石英・雲母・針状物質	褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ 体部外面縦位の削り 後下端部横位の削り 内面斜位のナデ 底部外・内面二方向のナデ	覆土下層	80%

第 146 号 竪穴建物跡 (第 367 図)

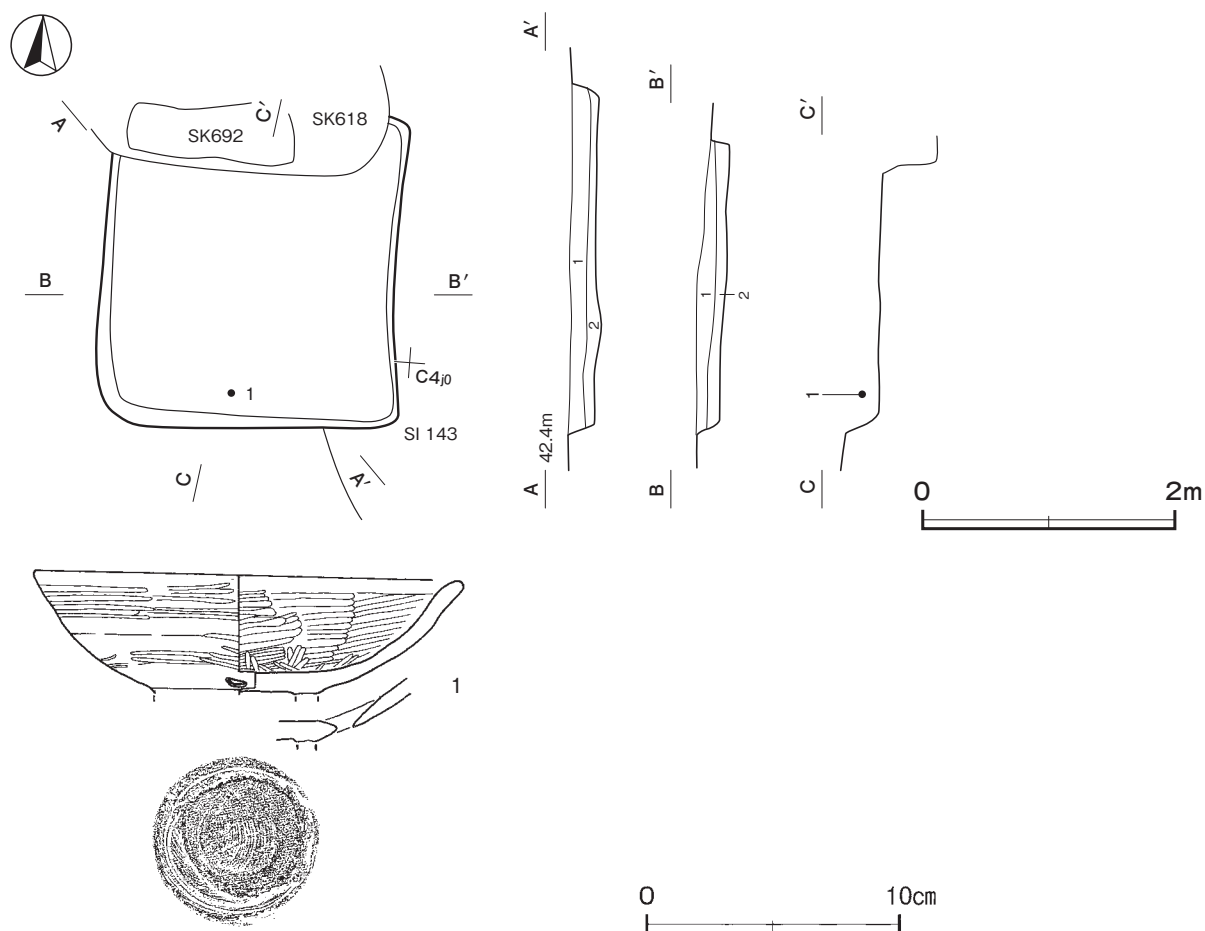
調査年度 平成 28 年度

位置 調査区中央部の C 4 j9 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 143 号 竪穴建物跡, 第 601 号 土坑を掘り込み, 第 618・692 号 土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第 618・692 号 土坑に掘り込まれているが, 東西軸 2.34 m, 南北軸 3.45 m と推定できる。長方形と推定でき, 主軸方向は N-3°-W である。壁は高さ 17~26 cm で, ほぼ直立もしくは外傾している。

床 平坦である。



第 367 図 第 146 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, ロームブロック微量 2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 20点 (坏1, 高台付坏1, 甕類 18) のほか, 縄文土器片 4点 (深鉢) が, 全域に散在している。多くの土器は大型や中型の破片で, 接合関係が良好であることから, 埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉に比定できる。1は, 体部の外面から穿孔されているが, 穿孔後の用途は不明である。

第 146 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 367 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	高台付坏	17.0	4.9	6.4	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部・体部外・内面横位の磨き 底部外面回転糸切りを残す一方向のナデ 内面多方向の磨き 内面黒色処理	覆土中層	95% 外面からの穿孔1か所

第 148 号竪穴建物跡 (第 368 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区中央部の D 4c9 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 1 号円形周溝遺構を掘り込み, 第 15・23 号溝, 第 678 号土坑に掘り込まれている。

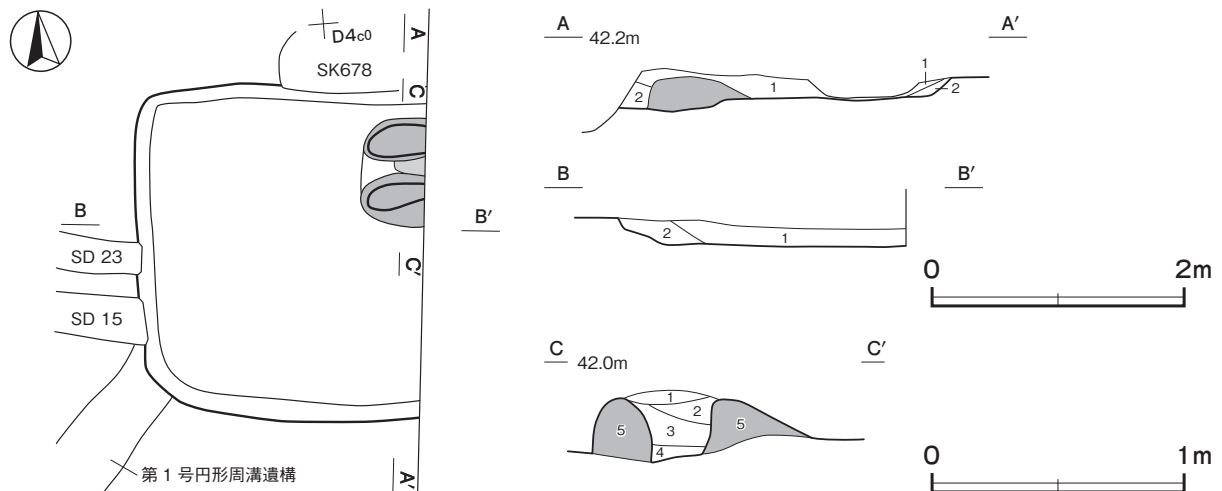
規模と形状 東部が調査区域外に延びていることから, 南北軸は 2.65 m で, 東西軸は 2.30 m しか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定でき, 主軸方向は N - 92° - E である。壁は高さ 27cm で, 外傾している。

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁の北部に付設されている。焚口部から煙道部までは 50cm しか確認できなかったが, 燃烧部の幅は 25 cm である。燃烧部は床面から 10cm ほど掘りくぼめられている。袖部は, 床面に第 5 層を積み上げて構築されている。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。第 1 ~ 4 層はロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから, 壊されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 4 赤褐色 焼土ブロック中量
 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 5 灰褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量
 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量



第 368 図 第 148 号竪穴建物跡実測図

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物少量

2 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片4点(坏3, 甕類1)が、全域に散在している。多くの土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損したものが廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器が細片であることから明確な判断はできないが、建物の主軸方向から第129・139号竪穴建物跡と同時期の9世紀後葉に比定できる。

表 11 平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炬・竈	貯蔵穴					
2	D 9j0	N-5°-W	長方形	4.22 × 3.50	24~39	貼床 平坦	ほぼ 全周	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀後葉	SI 3→本跡	
7	E 9b0	N-3°-E	[方形]	4.05 × 3.82	20~30	貼床 平坦	ほぼ 全周	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石製 土製品	9世紀前葉	SI 4→本跡→SI 8, SK10	
8	E 9c0	N-2°-E	長方形	4.20 × 3.75	40~48	貼床 平坦	ほぼ 全周	-	2	1	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器, 石器・ 石製品, 金属製品	9世紀中葉	SI 7・9・12B→ 本跡	
9	E 9c0	不明	[方形・ 長方形]	3.64 × (1.81)	12~17	貼床 平坦	一部	-	-	-	-	-	人為	土師器, 金属製品	9世紀前葉	本跡→SI 8・ 12B	
10	E 9e0	N-11°-E	方形	4.04 × 4.00	60~65	貼床 平坦	ほぼ 全周	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石製 土製品, 金属製品	9世紀中葉	SI11・15・30→本跡 →第1号段切状遺構	
12A	E 9d0	N-13°-E	長方形	3.44 × 2.84	5~6	貼床 平坦	ほぼ 全周	-	-	-	北壁	-	-	土師器	9世紀前葉 から中葉	本跡→SI12B	
12B	E 9d0	N-7°-E	長方形	4.80 × 4.66	20~26	貼床 平坦	ほぼ 全周	5	2	12	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 石器・ 石製品	9世紀中葉	SI 9・11・12A・ 13・14→本跡 →SI 8	
16	E 9e8	N-10°-E	長方形	5.06 × 4.15	20~40	貼床 平坦	ほぼ 全周	4	-	7	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器・ 石製品	9世紀前葉	SI15→本跡	
18	E10f1	不明	[方形・ 長方形]	3.92 × (1.44)	8~13	平坦	北・ 南壁	-	-	-	-	1	人為	土師器, 須恵器, 石器	9世紀前葉	本跡→SD 1・第 1号段切状遺構	
19	E 9d8	N-6°-E	方形	3.80 × 3.64	22~28	貼床 平坦	南壁 一部	-	-	10	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石製 土製品	9世紀前葉	SI13・25→本跡	
20	D10j3	不明	[方形・ 長方形]	3.75 × (2.20)	-	貼床	-	-	-	-	-	-	-	土師器	9世紀前葉	本跡→第1号段切 状遺構	
21	E10a3	不明	[方形・ 長方形]	2.49 × (1.75)	10	貼床	-	-	-	-	-	-	-	-	9世紀前葉	本跡→第1号段切 状遺構	
26	D 9h6	N-90°-E	[方形・ 長方形]	(2.40) × (2.35)	5	ほぼ 平坦	-	-	-	-	東壁	-	不明	土師器, 石製品, 金属 製品	11世紀前葉	SI27・28・52→ 本跡→SK19	
29	D 9j8	N-18°-E	方形	3.30 × 3.28	22~30	貼床 平坦	ほぼ 全周	-	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器・ 石製品	9世紀中葉	SI 6・23→本跡 →SK28・40	
35	D 9j5	N-72°-E	[方形・ 長方形]	3.38 × (2.70)	4	平坦	-	-	-	-	東壁	-	不明	-	10~11世紀	SI34・36・49→本跡 →SB 2, PG 2	
36	D 9i4	不明	[方形・ 長方形]	(3.82) × (3.42)	4	ほぼ 平坦	-	-	-	-	-	-	不明	-	10~11世紀	SI49→本跡→SI35・ 43, SB 2, SN 2, SK36, PG 2	
42	E 9b4	N-65°-E	[方形・ 長方形]	(1.50) × (1.10)	3	平坦	-	-	-	-	東壁	-	不明	-	10~11世紀	SI46→本跡	
43	D 9j4	N-64°-E	[方形・ 長方形]	(2.20) × (1.40)	3	平坦	-	-	-	-	東壁	-	不明	-	10~11世紀	SI36→本跡→SB 2, PG 2	
44	E 9d4	N-15°-E	方形	3.94 × 3.82	64~80	貼床 平坦	ほぼ 全周	4	1	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器・ 石製品, 金属製品, 鉄滓	9世紀中葉	SI39B・45・46→ 本跡	
51	E 9c5	N-10°-E	方形	5.20 × 5.20	34~45	貼床 平坦	ほぼ 全周	4	-	13	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器・ 石製品, 金属製品, 鉄 滓	9世紀中葉	SI46~48・SK59・ 801→本跡	
61	E 8a7	N-94°-E	長方形	2.87 × 2.54	22	貼床 平坦	-	-	1	-	東壁	-	自然	土師器, 須恵器, 石 器・石製品, 金属製 品	10世紀後葉	SI62・67→本跡	
62	E 8a7	N-25°-E	方形	4.00 × 3.92	55	貼床 平坦	ほぼ 全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石 器・石製品	9世紀中葉	SI67→本跡→SI61	
64	E 9c1	N-85°-E	方形	3.68 × 3.45	10	貼床 平坦	-	-	1	-	東壁	-	自然	土師器, 須恵器	10世紀前葉	SB8・9・13→本 跡	
69	D 8f9	不明	[方形・ 長方形]	3.48 × (1.99)	28	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	-	8・9世紀代	SI68→本跡 →SK75・414・ 428・429・804	
70	D 8i4	N-3°-E	方形	4.58 × 4.33	38~49	貼床 平坦	ほぼ 全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 金属 製品	9世紀前葉	SI71→本跡	
73	E 8a1	N-5°-E	[方形・ 長方形]	3.45 × (2.10)	55~66	平坦 貼床	ほぼ 全周	2	-	-	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器, 石器, 石製品	9世紀中葉	SI74→本跡 →SK211・233	
75	D 8g7	N-89°-E	[方形・ 長方形]	(2.10) × (1.85)	-	貼床 平坦	-	-	-	-	東壁	-	-	土師器, 須恵器, 石製 土製品	10世紀中葉		
106	C 5j5	不明	[方形・ 長方形]	5.32 × (3.00)	13~32	貼床 平坦	-	1	-	1	-	-	人為	土師器	10世紀前葉	本跡→SK465・ 514	
112	C 3g1	N-3°-W	方形	3.55 × 3.40	15~28	貼床 平坦	ほぼ 全周	3	1	-	北壁	-	自然 人為	土師器, 須恵器, 石製 土製品, 鉄滓	9世紀前葉	SI116・121→本 跡→SK501	
120	C 3e2	N-112°-E	長方形	2.95 × 2.55	8~15	平坦	一部	-	-	1	東壁	-	人為	土師器, 金属製品	10世紀代	SI117・123, HG 1→本跡 →SK508・532	
123	C 3d3	不明	[方形・ 長方形]	5.86 × (3.15)	14~34	貼床 平坦	-	2	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器, 石製 土製品	9世紀前葉	SI117, HG 1→ 本跡→SI120, SK508・524	
126	C 3e6	不明	[方形・ 長方形]	(5.25) × (1.00)	25~30	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉	HG 1→本跡	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)				主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
129	C 3 f9	N - 103° - E	方形	3.28 × 3.20	18 ~ 25	平坦	[北西・南壁]	-	-	-	東壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀後葉	本跡→SK716
132	C 3 f8	不明	[方形・長方形]	(1.90) × (1.10)	22 ~ 26	平坦	[西・南壁]	1	-	-	-	-	人為	-	8 ~ 10世紀	本跡→SI134
134	C 3 f8	不明	[方形・長方形]	(1.45) × (0.90)	25 ~ 35	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	-	8 ~ 10世紀	SI132 → 本跡
136	D 3 a0	不明	[方形・長方形]	(2.95) × (0.64)	40	平坦	-	-	-	-	北壁	-	-	土師器	9世紀中葉	HG 1 → 本跡
139	C 3 j6	N - 100° - E	[方形・長方形]	2.78 × (2.70)	-	貼床平坦	-	-	-	-	東壁	-	-	土師器, 須恵器, 石器	9世紀後葉	HG 1 → 本跡
140	C 4 g2	不明	[長方形]	4.02 × (3.52)	20 ~ 29	平坦	-	-	-	1	-	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉	本跡→SF 2 A・B, SK613
146	C 4 i9	N - 3° - W	[長方形]	[2.45] × 2.34	17 ~ 26	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	9世紀後葉	SI143・SK601 → 本跡→SK618・692
148	D 4 c9	N - 92° - E	[方形・長方形]	2.65 × (2.30)	27	平坦	-	-	-	-	東壁	-	人為	土師器	9世紀後葉	第1号円形周溝遺構 → 本跡→SD15・23・SK678

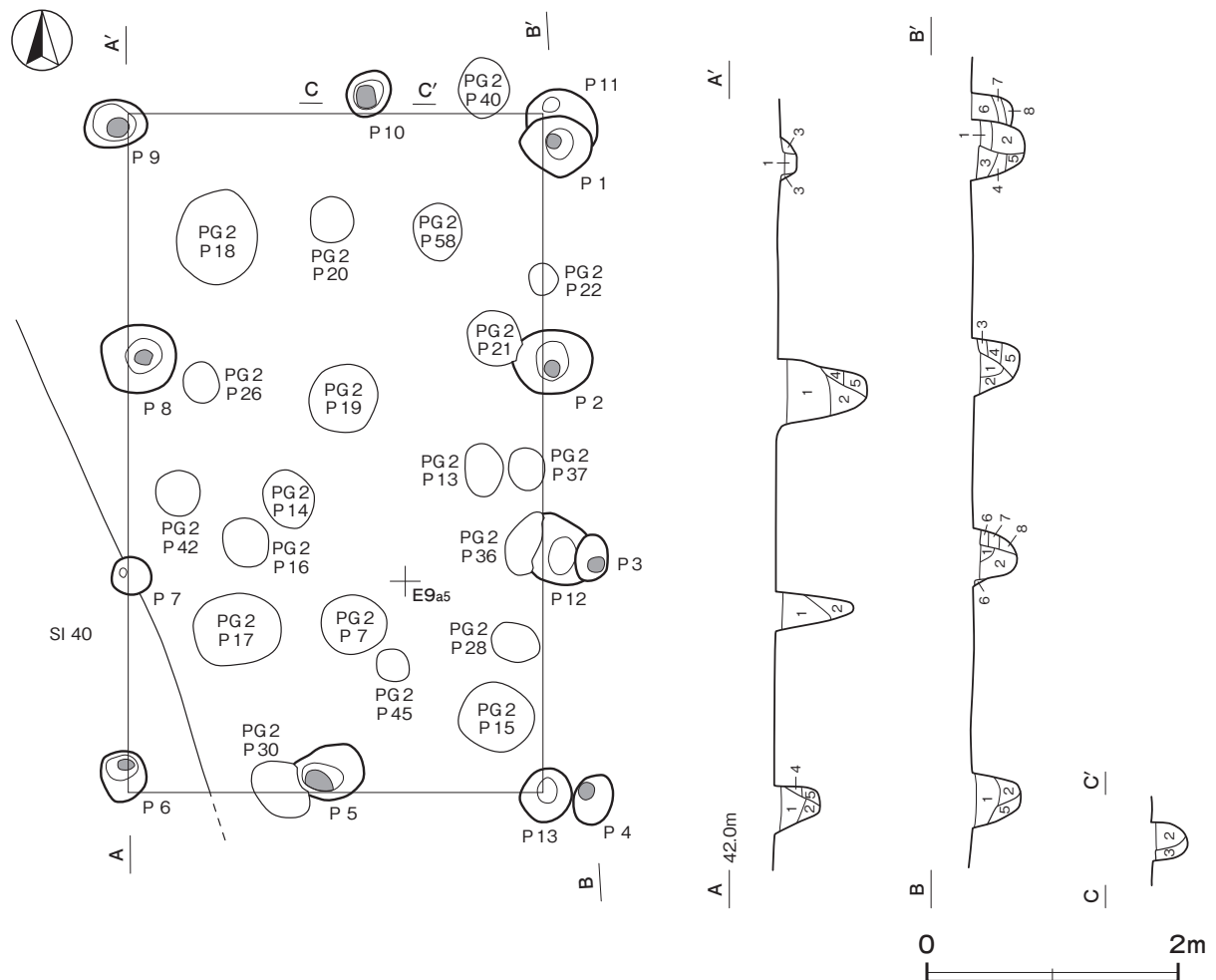
(2) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第369・370図 PL46・47)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD 9j4区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第35・36・40・43・49号竪穴建物跡を掘り込み, 第2号ピット群に掘り込まれている。



第369図 第2号掘立柱建物跡実測図

規模と形状 桁行3間，梁行2間の側柱建物跡で，桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は桁行5.4m，梁行3.3mで，面積は17.82㎡である。柱間寸法は桁行が1.8m（6尺）で，梁行は北平側の東側が1.5m（5尺），西側が1.8m（6尺），南平側の東側が1.8m（6尺），西側が1.5m（5尺）である。柱筋はP3・P4・P10が，ややずれている。

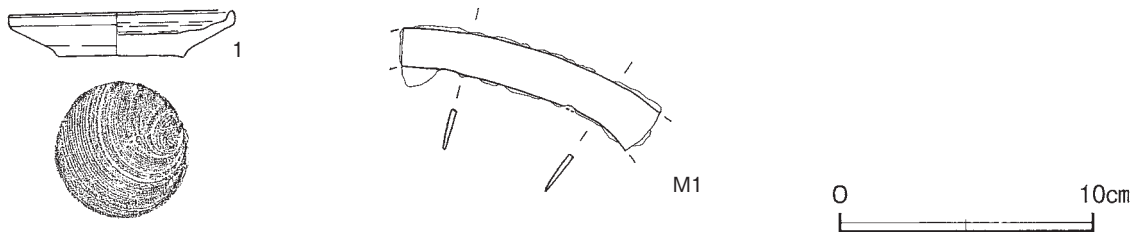
柱穴 13か所。平面形は円形もしくは楕円形で，長径0.36～0.68m，短径0.25～0.55mである。深さは15～70cmで，掘方の壁はほぼ直立もしくは外傾している。P11はP1に，P12はP3に，P13はP4に掘り込まれていることから，それぞれ立て替えられている。第6～8層は柱の立て替え前の埋土，第3～5層は埋土，第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1～P6，P8～P10の底部から，柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から，柱の直径は18～20cmほどと推定できる。

柱穴土層解説（各ピット共通）

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック微量 | 6 褐灰色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 4 褐灰色 ロームブロック中量 | 8 褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片14点（坏6，高台付坏1，小皿1，甕6），須恵器片1点（高台付坏），金属製品1点（鎌）のほか，剥片1点（チャート）が，P1～P3，P7～P9から出土している。多くの土器は細片で，第1・2層から出土していることから，柱材を抜き取った後の混入と考えられる。1・M1は，ほぼ完形品や遺存状態が良好であることから，柱材を抜き取った後に投棄されたと考えられる。

所見 時期は，出土土器から11世紀中葉と考えられる。性格は，「屋」としての機能が考えられる。



第370図 第2号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第370図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	小皿	8.8	1.9	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ 底部回転糸切り	P7 第1・2層	90% PL95
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M1	鎌	(10.5)	5.0	0.2	(21.70)	鉄	刃部両端部欠損 断面三角形		P5 第1・2層	PL108	

第4号掘立柱建物跡（第371・372図 PL47）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD9j2区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第40・80C・82・89号竪穴建物跡，第18号掘立柱建物跡を掘り込み，第5・10号掘立柱建物，第814・816・819号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第5・10号掘立柱建物に掘り込まれていることから、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡もしくは総柱建物跡と考えられ、桁行方向がN-2°-Eの南北棟である。規模は桁行6.3m、梁行4.5mで、面積は28.35㎡である。柱間寸法は桁行が2.1m（7尺）で、梁行は東側が2.1m（7尺）、西側が2.4m（8尺）である。柱筋はほぼ揃っている。

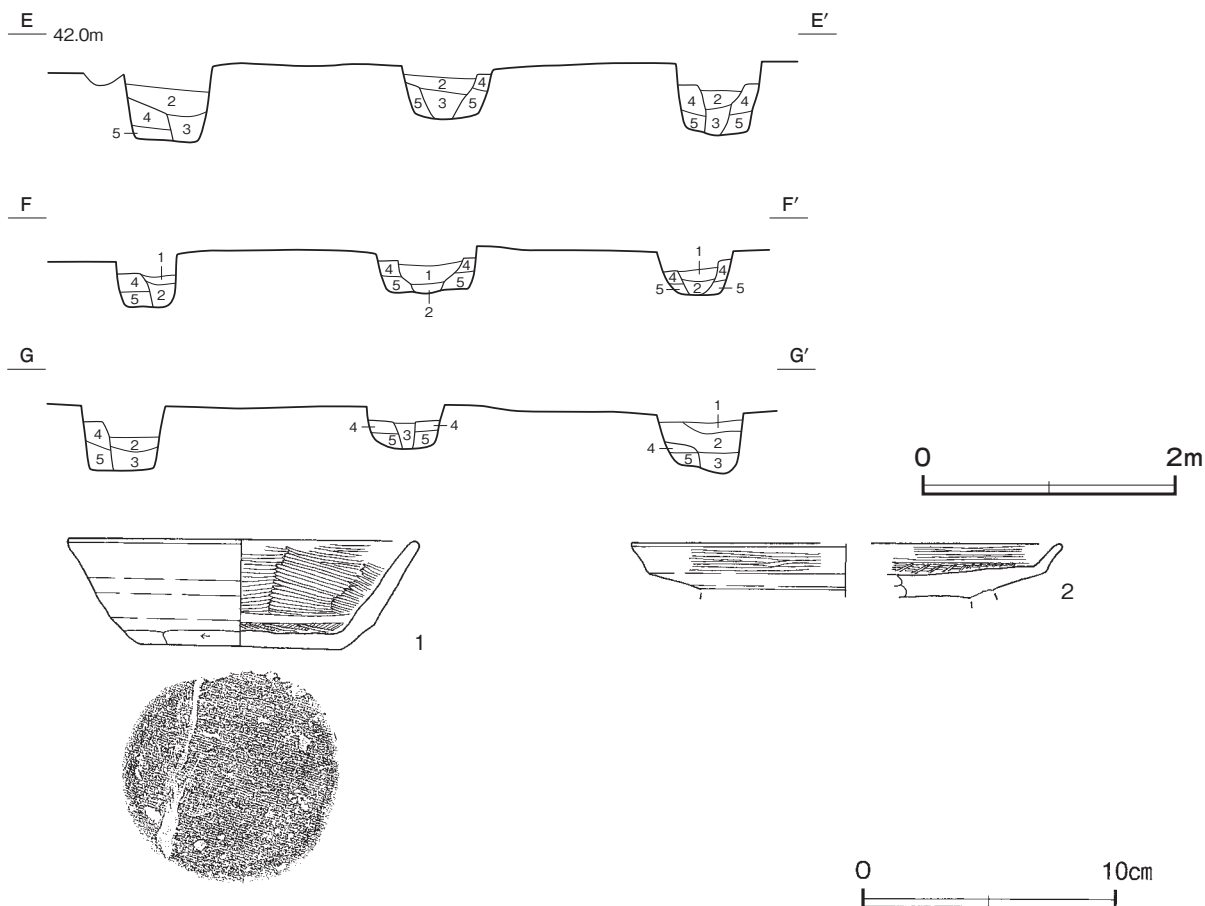
柱穴 10か所。平面形は隅丸長方形で、長軸0.72～1.20m、短軸0.55～0.80mである。深さは27～60cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第3～5層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1～P10の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は20～30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説（各ピット共通）

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 | 4 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 3 褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片5点（坏1、盤2、甕類1、甑1）、須恵器片3点（坏、蓋、甕類）が、P1・P5・P7から出土している。いずれも第1・2層から出土していることから、柱材を抜き取った後に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉の廃絶と考えられることから、9世紀前葉から中葉の建物と推測できる。性格は、「屋」もしくは「倉庫」としての機能が考えられる。



第372図 第5号掘立柱建物跡・第4号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第372図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	13.6	4.3	7.8	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	体部外面下端部一方向の削り 底面二方向の削り 内面二方向の磨き 内面黒色処理 後見 込み部に沿って凹状の磨き 内面黒色処理	P 7 1・2層	70% PL92
2	土師器	盤	[16.8]	(2.1)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい褐	普通	口縁部横位の磨き 体部内面二方向の磨き 後見 込み部に沿った凹状の磨き 内面黒色処理	P 1 1・2層	20%

第5号掘立柱建物跡（第371・372図 PL47）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD 9j2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第40・80C・89号竪穴建物跡、第4・10・18号掘立柱建物跡を掘り込み、第818号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 桁行2間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は桁行4.2m、梁行3.6mで、面積は15.12㎡である。柱間寸法は桁行が2.1m（7尺）で、梁行は1.8m（6尺）である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.57～0.83m、短径軸0.52～0.65mである。深さは34～60cmで、掘方の壁はほぼ直立している。第4・5層は埋土、第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1～P9の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は20～30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説（各ピット共通）

- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片11点（坏1、甕類10）が、P1～P4・P7から出土している。いずれも細片で第1～3層から出土していることから、柱材を抜き取った後の混入と考えられる。

所見 時期は、出土土器に内面が黒色処理されたものを含んでいることや遺構の重複関係から、時期は9世紀後葉と考えられる。性格は、「倉庫」としての機能が考えられる。

第6号掘立柱建物跡（第373図）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE 9e3区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第39A・B号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-15°-Eの南北棟である。規模は桁行3.6m、梁行3.6mで、面積は12.96㎡である。柱間寸法は桁行が1.8m（6尺）で、梁行は北平側の東側が2.1m（7尺）、西側が1.5m（5尺）、南平側の東側が1.5m（5尺）、西側が2.1m（7尺）である。柱筋はほぼ揃っている。

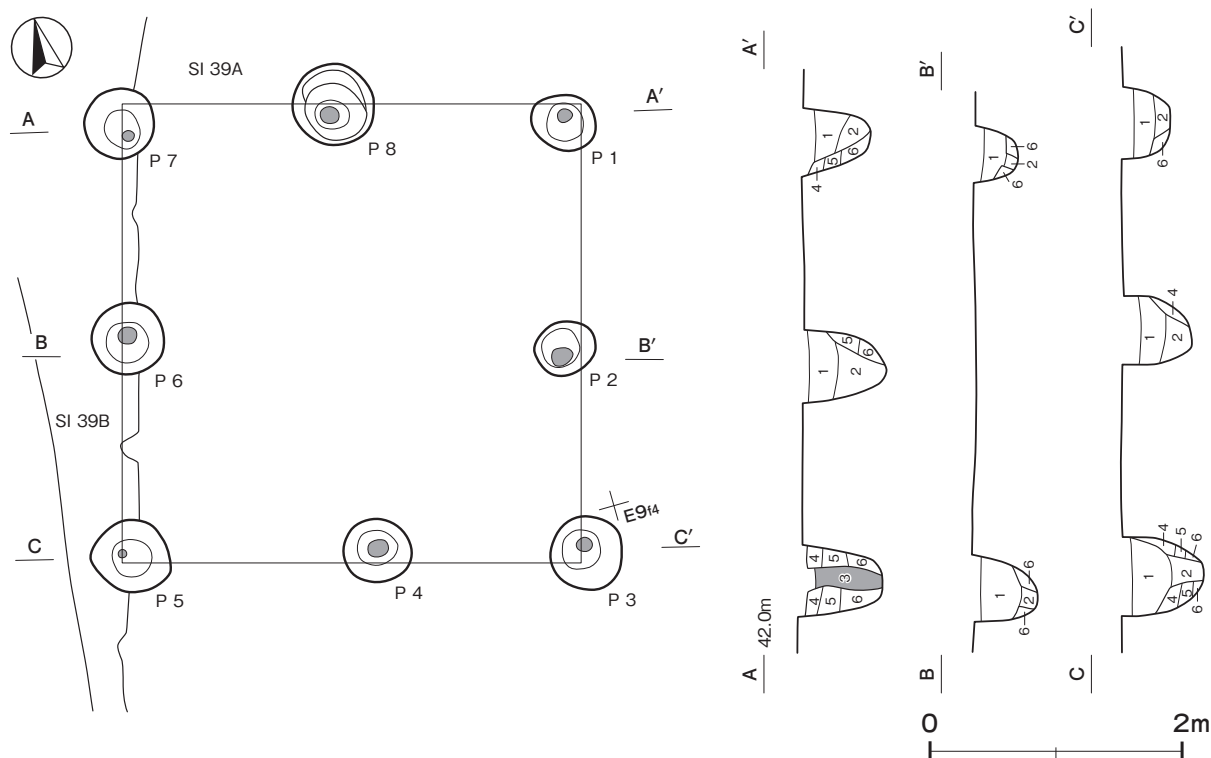
柱穴 8か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径0.46～0.66m、短径0.42～0.62mである。深さは34～64cmで、掘方の壁は直立している。第4～6層は埋土、第3層は柱痕跡、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1～P8の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模や柱痕跡から、柱の直径は10～20cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 褐灰色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片2点(坏)が、P4・P5から出土している。いずれも細片で第1・2層から出土していることから、柱材を抜き取った後の流入や混入と考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。性格は、「倉庫」としての機能が考えられる。



第373図 第6号掘立柱建物跡実測図

第7号掘立柱建物跡 (第374図 PL48)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD9i1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第82・84号竪穴建物跡、第11・16号掘立柱建物跡を掘り込み、第12号掘立柱建物、第817号土坑に掘り込まれている。

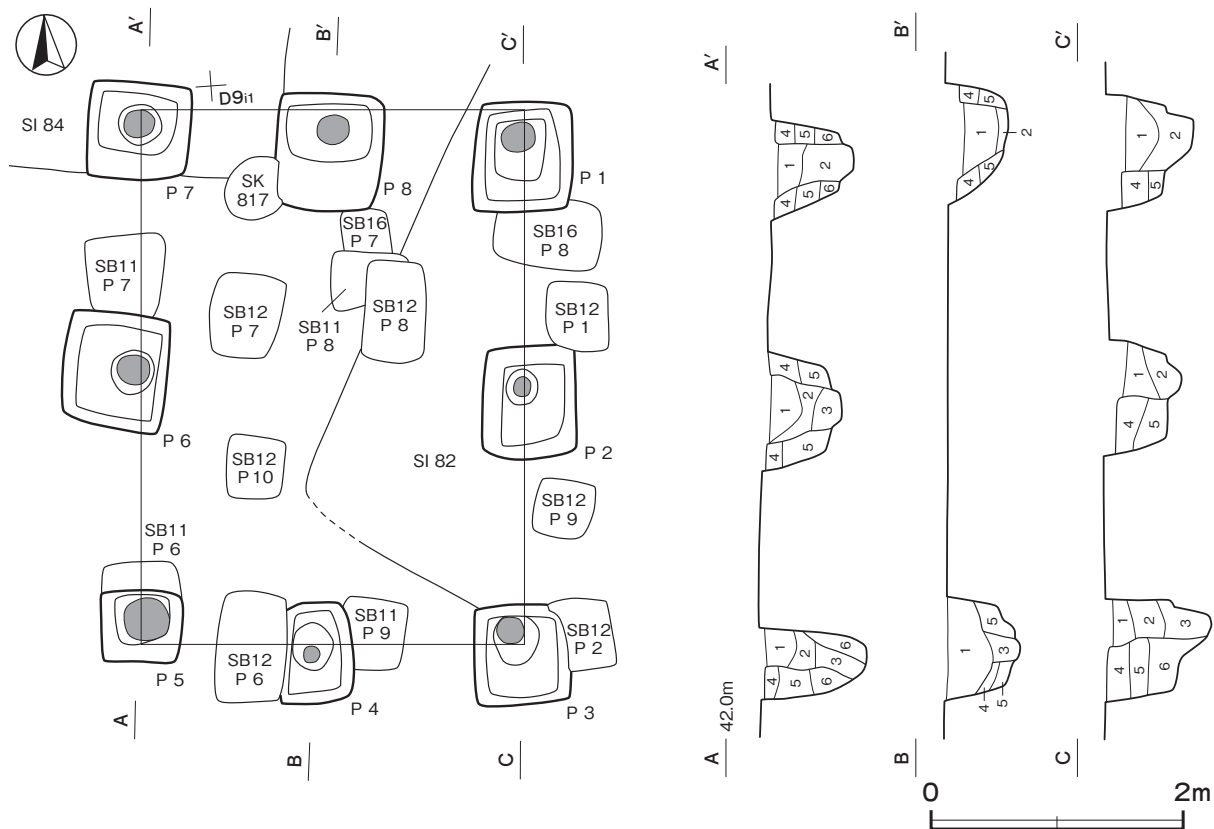
規模と形状 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は桁行4.2m、梁行3.0mで、面積は12.60㎡である。柱間寸法は桁行が2.1m(7尺)で、梁行は1.5m(5尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.63~0.92m、短軸0.82~0.80mである。深さは37~80cmで、掘方の壁は直立している。第4~6層は埋土、第1~3層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1~P8の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は10~30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|------------------------------|--------------------|
| 1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 | 5 黄褐色 ロームブロック多量 |
| 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |

所見 時期は、遺構の重複関係から9世紀中葉と考えられる。性格は、「倉庫」として機能が考えられる。



第 374 図 第 7 号掘立柱建物跡実測図

第 8 号掘立柱建物跡 (第 375 図 PL48)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の E 9c1 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 63 号竪穴建物跡, 第 9・14 号掘立柱建物跡を掘り込み, 第 64 号竪穴建物, 第 13 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 桁行 2 間, 梁行 2 間の総柱建物跡で, 桁行方向が N - 6° - E の南北棟である。規模は桁行 4.2 m, 梁行 3.6 m で, 面積は 15.12m² である。柱間寸法は桁行が 2.1 m (7 尺) で, 梁行は 1.8 m (6 尺) で, 柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8 か所。柱穴の平面形は, 隅丸方形もしくは隅丸長方形で, 長軸 0.50 ~ 0.80 m, 短軸 0.41 ~ 0.61 m である。深さは 30 ~ 75cm で, 掘方の壁は直立している。南妻柱に伴う柱穴は確認できなかったが, 第 5 号掘立柱建物跡などの柱穴の配置から, 存在していたものと推定できる。第 3・4 層は埋土, 第 2 層は柱痕跡, 第 1 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1 ~ P 8 の底部から, 柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模や柱痕跡から, 柱の直径は 10 ~ 30cm ほどと推定できる。

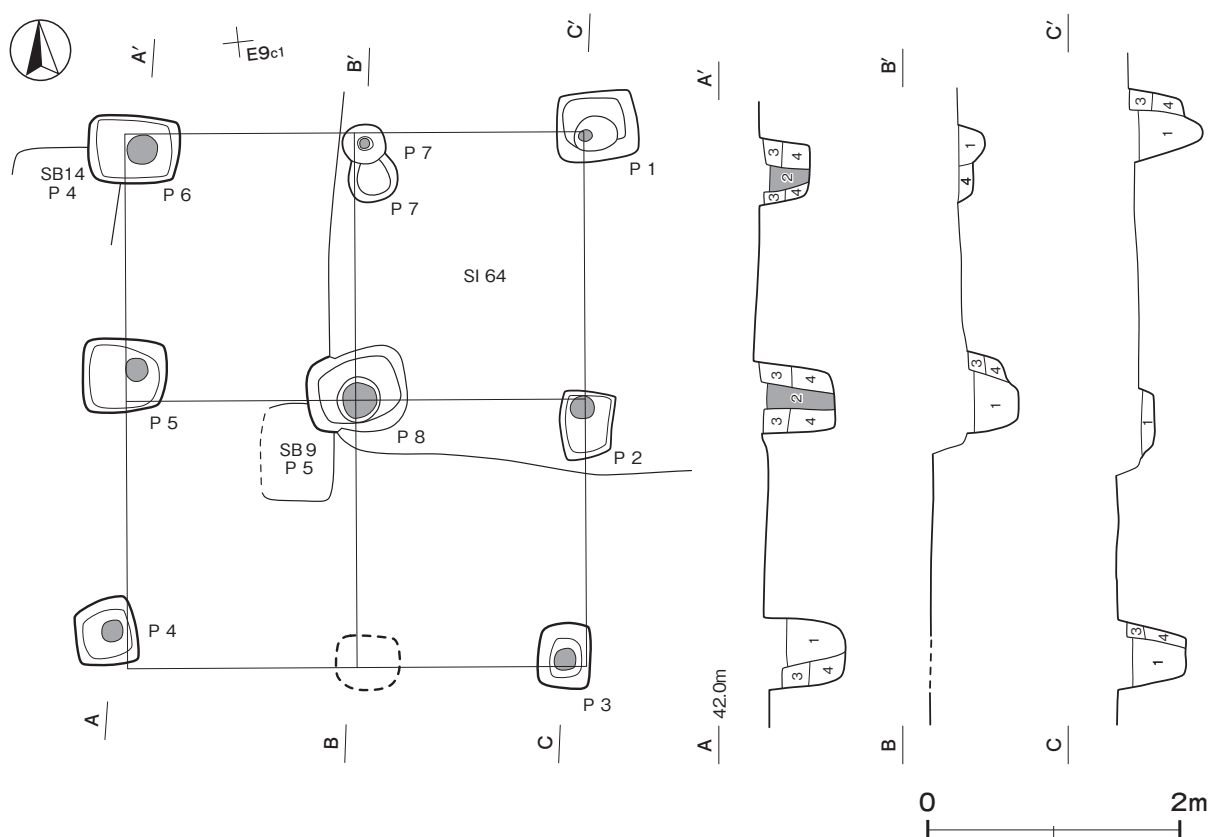
柱穴土層解説 (各ピット共通)

1 褐灰色 ロームブロック・焼土ブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子微量

3 灰黄褐色 ロームブロック中量
4 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片3点(甕)が、P6から出土している。いずれも細片で第2層から出土していることから、柱材が腐食した後の流入と考えられる。

所見 時期は、遺構の重複関係から9世紀中葉と考えられる。性格は、「倉庫」としての機能が考えられる。



第375図 第8号掘立柱建物跡実測図

第9号掘立柱建物跡 (第376図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE9c1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第64号竪穴建物、第8・13号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-6°-Eの南北棟である。規模は桁行4.8m、梁行は北平側が3.3m、南平側が3.0mで、面積は15.36㎡である。柱間寸法は桁行が2.4m(8尺)で、梁行は北平側の東側が1.5m(5尺)、西側が1.8m(6尺)、南平側が1.5m(5尺)である。柱筋はほぼ揃っているが、北妻がやや広がっている。

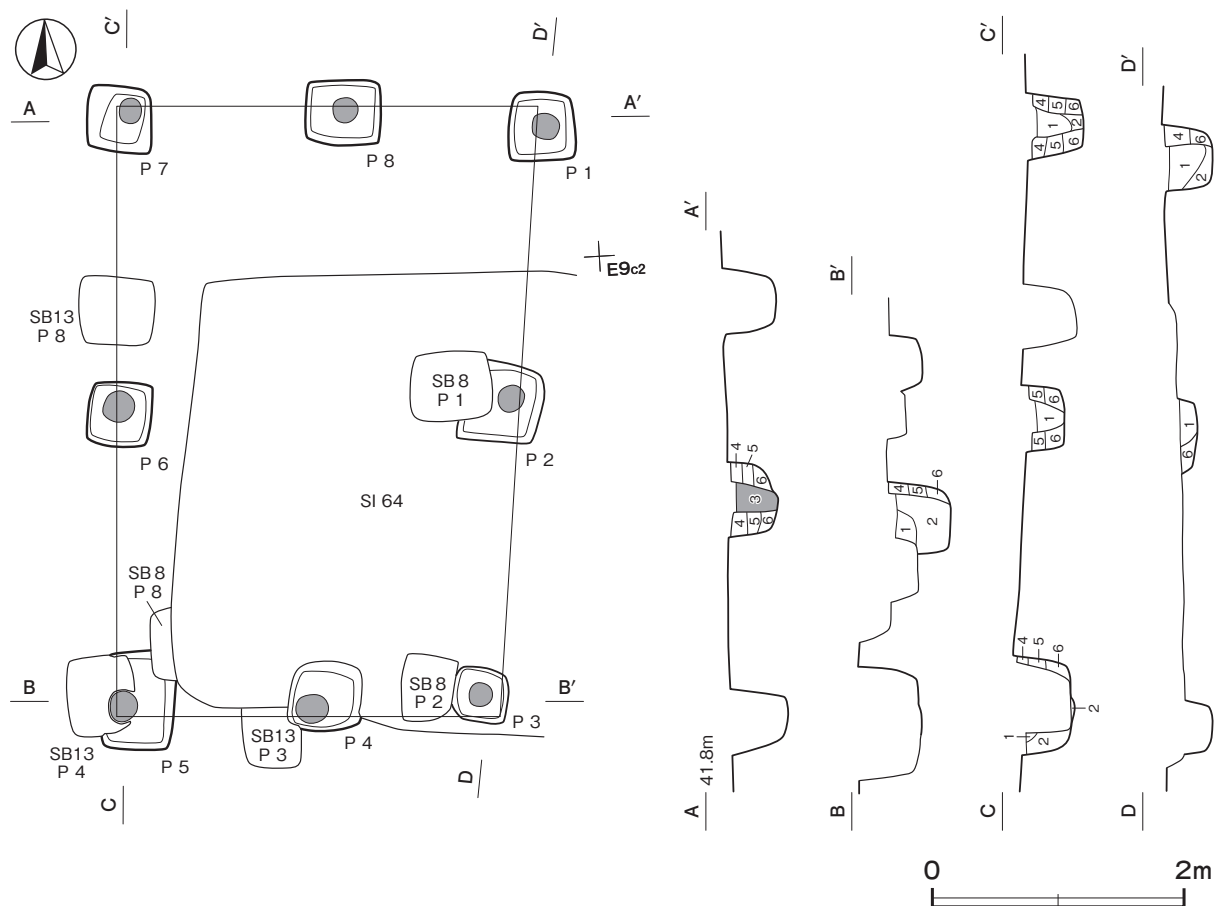
柱穴 8か所。柱穴の平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.52~0.79m、短軸0.43~0.60mである。深さは24~50cmで、掘方の壁は直立している。第4~6層は埋土、第3層は柱痕跡、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1~P8の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模や柱痕跡から、柱の直径は20~30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | | | |
|--------|---------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片3点(甕類), 須恵器片2点(坏, 瓶類)が, P1・P4から出土している。いずれも細片で第4～5層から出土していることから, 構築時の混入と考えられる。

所見 時期は, 出土土器が細片で実測できなかったものの, 重複関係から9世紀前葉から中葉と考えられる。性格は, 「屋」としての機能が考えられる。



第 376 図 第 9 号掘立柱建物跡実測図

第 10 号掘立柱建物跡 (第 377 図)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 9j3 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 40・89 号竪穴建物跡, 第 4・18 号掘立柱建物跡, 第 133 号土坑を掘り込み, 第 5 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 桁行 2 間, 梁行 2 間の総柱建物跡で, 桁行方向が N - 4° - E の南北棟である。規模は桁行 4.2 m, 梁行 3.6 m で, 面積は 15.12㎡ である。柱間寸法は, 桁行 2.1 m (7 尺) で, 梁行は 1.8 m (6 尺) である。柱筋はほぼ揃っているが, 西平がやや広がっている。

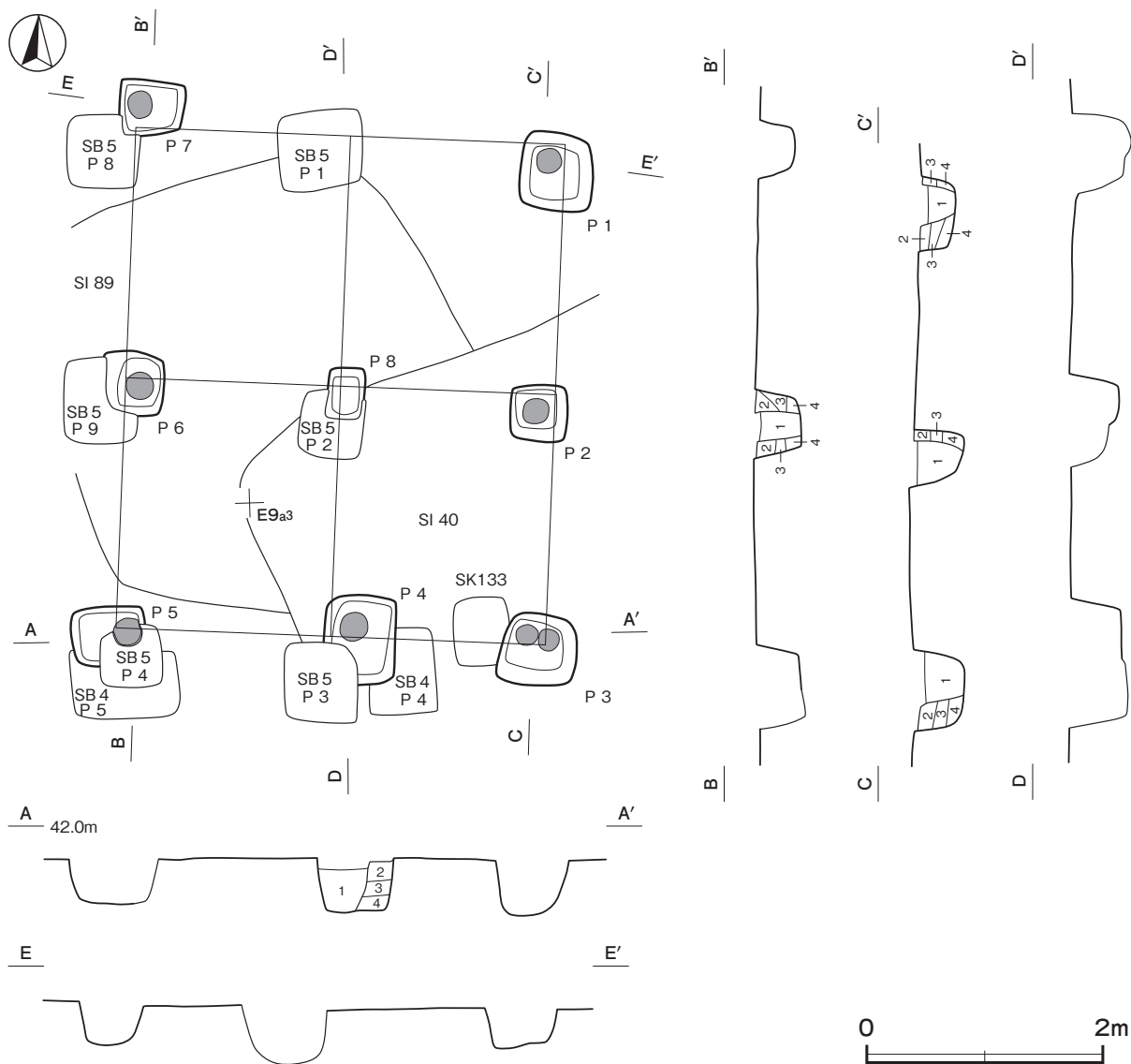
柱穴 8か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.40～0.76 m、短軸0.30～0.62 mである。深さは30～60cmで、掘方の壁は直立もしくはほぼ直立している。第2～4層は埋土、第1層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1～P 7の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は20～30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量 | 3 黒褐色 ロームブロック・今市軽石ブロック微量 |
| 2 灰黄褐色 ロームブロック・今市軽石ブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、今市軽石ブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片4点(坏1, 甕類2, 甗1)が、P 1～P 3・P 8から出土している。いずれも細片で第2～4層から出土していることから、構築時の混入と考えられる。

所見 時期は、出土土器に内面が黒色処理されたものを含んでいることや遺構の重複関係から、9世紀中葉と考えられる。性格は、「倉庫」としての機能が考えられる。P 8は他の柱穴の規模より小型であることから、床束の可能性もある。



第377図 第10号掘立柱建物跡実測図

第 11 号掘立柱建物跡 (第 378 図)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 9il 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

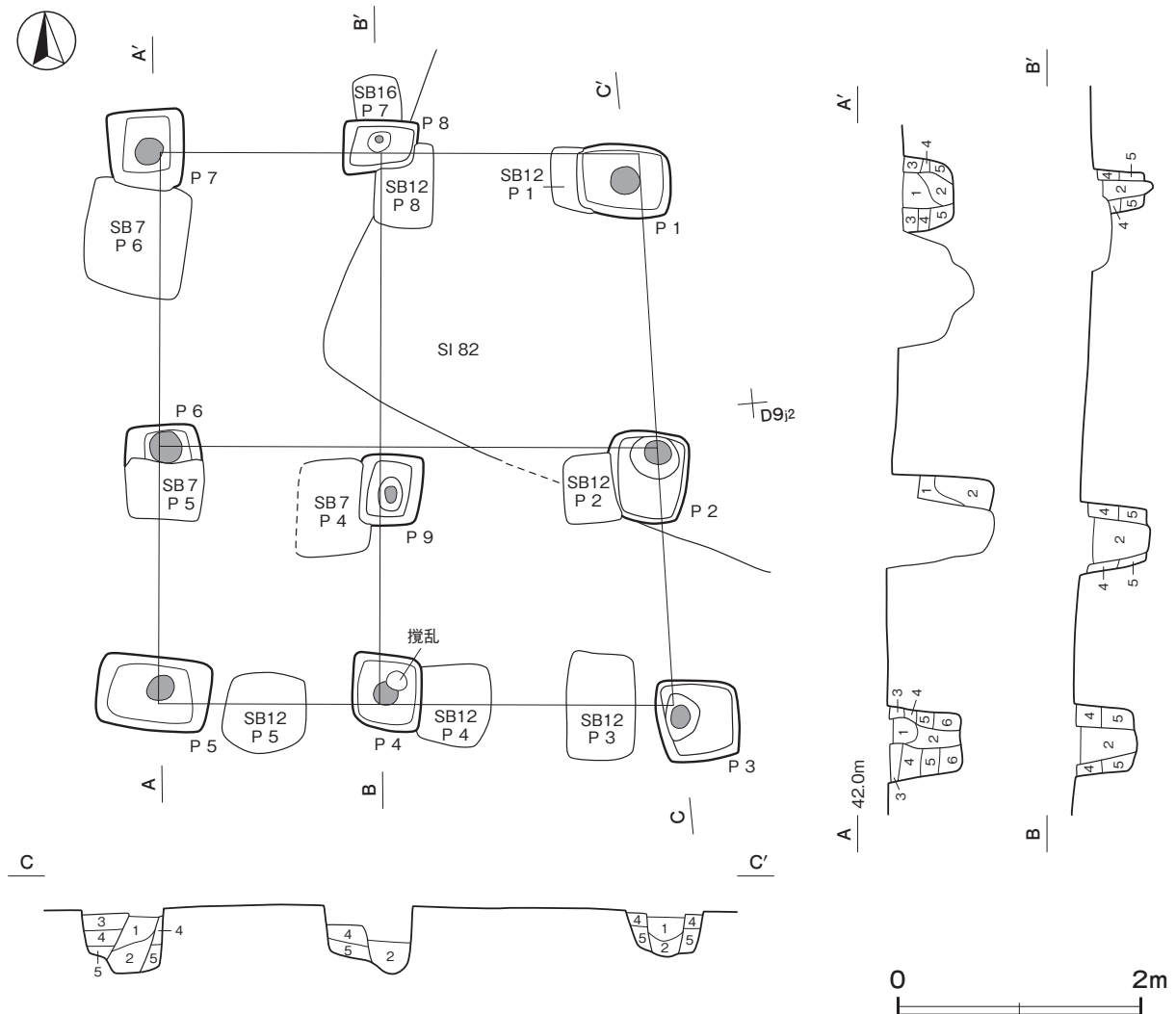
重複関係 第 82 号竪穴建物跡, 第 16 号掘立柱建物跡を掘り込み, 第 7・12 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 桁行 2 間, 梁行 2 間の総柱建物跡で, 桁行方向が $N-5^{\circ}-E$ の南北棟である。規模は桁行 4.5 m, 梁行は北平側が 3.9 m, 南平側が 4.2 m で, 面積は 18.23 m^2 である。柱間寸法は桁行が北妻側から 2.4 m (8 尺), 2.1 m (7 尺) で, 梁行の北平側が東側から 2.1 m (7 尺), 1.8 m (6 尺), 南平側が東側から 2.4 m (8 尺), 1.8 m (6 尺) である。柱筋は P 9 を除いて, ほぼ揃っているが, 南妻がやや広がっている。

柱穴 9 か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で, 長軸 0.40 ~ 0.92 m, 短軸 0.60 ~ 0.68 m である。深さは 30 ~ 86 cm で, 掘方の壁は直立している。第 3 ~ 6 層は埋土, 第 1・2 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1 ~ P 9 の底部から, 柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から, 柱の直径は 5 ~ 30 cm ほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・白色粒子少量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 | 6 にぶい黄褐色 ロームブロック多量 |



第 378 図 第 11 号掘立柱建物跡実測図

所見 時期は、遺構の重複関係から9世紀前葉から中葉と考えられる。性格は、「倉庫」としての機能が考えられる。

第12号掘立柱建物跡 (第379図)

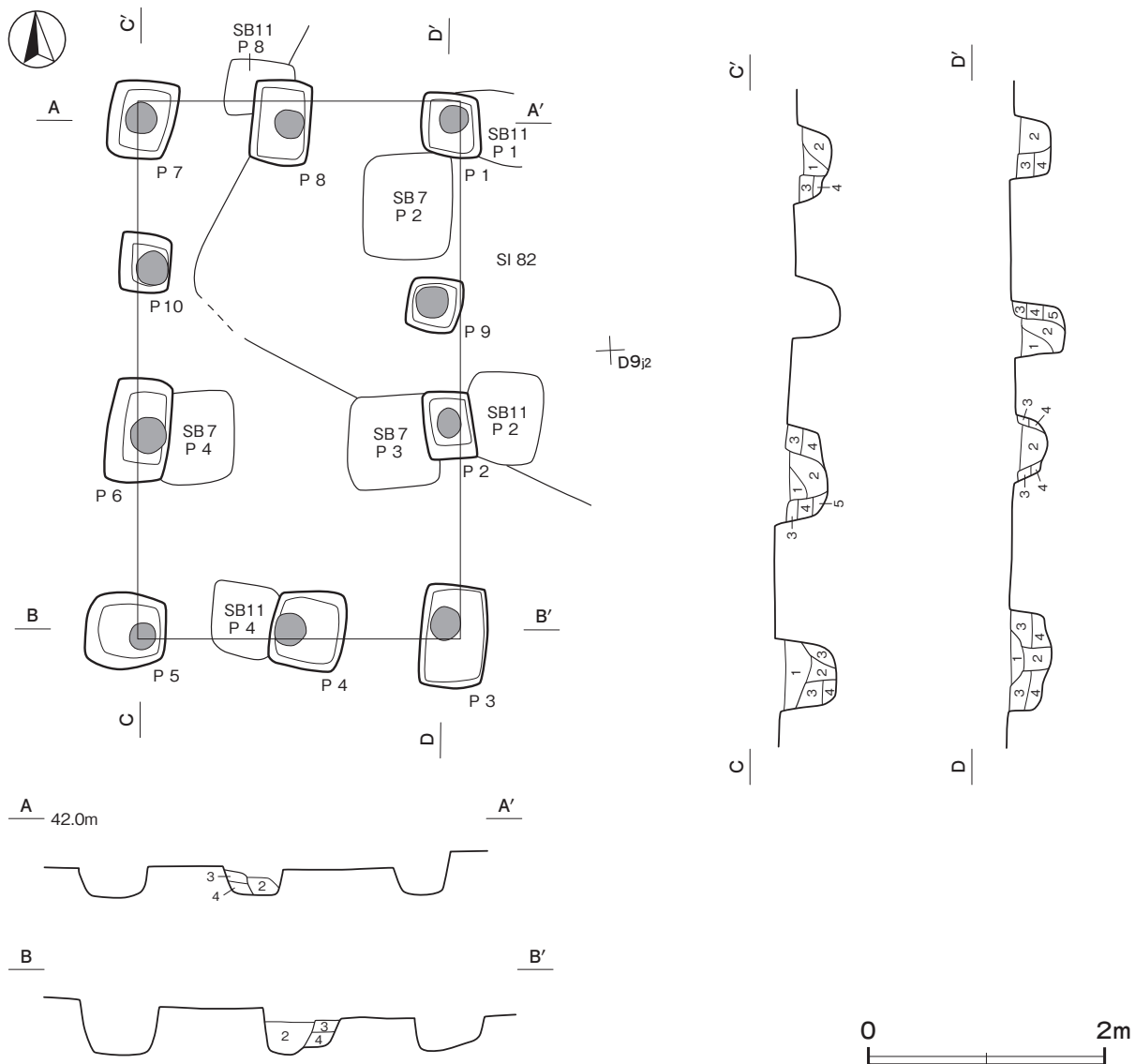
調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD9j1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第82号堅穴建物跡、第7・11・16号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Eの南北棟である。規模は桁行が4.5m、梁行2.7mで、面積は12.15㎡である。柱間寸法は、桁行の北妻側から1.5m(5尺)、1.2m(4尺)、1.8m(6尺)で、梁行は東側が1.5m(5尺)、西側が1.2m(4尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.47~0.89m、短軸0.45~0.65mである。深さは20~45cmで、掘方の壁は直立している。第3~5層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土で



第379図 第12号掘立柱建物跡実測図

ある。P 1～P10の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は20～30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 灰黄褐色 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量 | 4 褐色 ロームブロック少量, 今市軽石ブロック微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック・炭化物少量 | 5 におい黄褐色 ロームブロック中量, 今市軽石ブロック微量 |
| 3 におい黄褐色 ロームブロック中量, 今市軽石ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片1点(高台付坏)が、P 5から出土している。細片で第3～5層から出土していることから、構築時の混入と考えられる。

所見 時期は、遺構の重複関係から出土土器から9世紀後葉と考えられる。性格は、「屋」としての機能が考えられる。

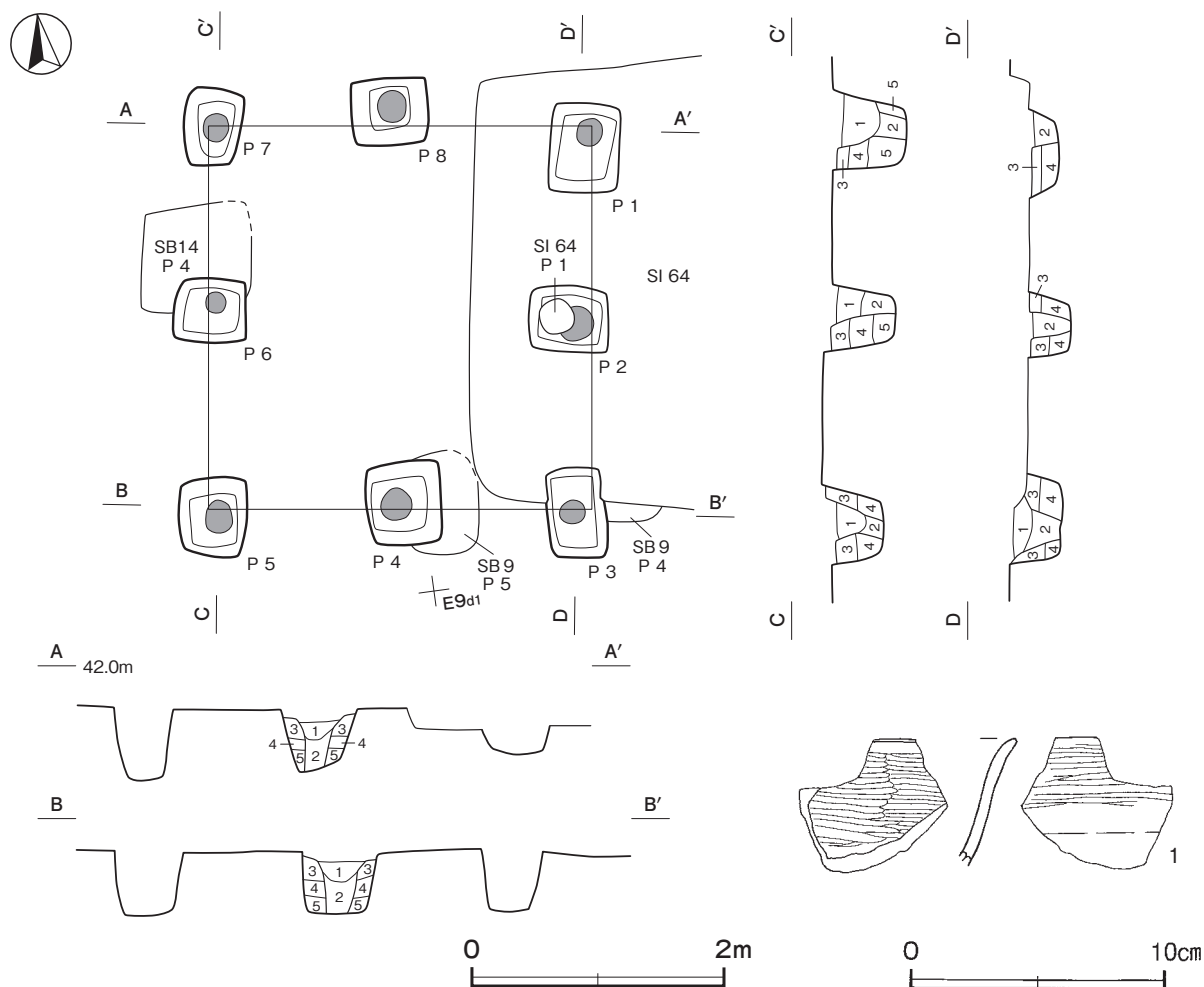
第13号掘立柱建物跡 (第380図 PL48)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE 8c0区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第8・9・14号掘立柱建物跡を掘り込み、第64号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、建物の軸方向はN-8°-EもしくはN-82°-Wである。



第380図 第13号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模は3.0 m四方で、面積は9.00㎡である。柱間寸法は南北間、東西間ともに1.5 m（5尺）である。柱筋はほぼ揃っている

柱穴 8か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.56～0.72 m、短軸0.43～0.60 mである。深さは40～57cmで、掘方の壁は直立している。第3～5層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1～P 8の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は15～25cmほどと推定できる。

柱穴土層解説（各ピット共通）

- | | | | |
|--------|----------------------|----------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、今市軽石ブロック微量 |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック中量 | 5 におい黄褐色 | ロームブロック中量、今市軽石ブロック微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量、今市軽石ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師器片8点（坏1、甕類7）、須恵器片1点（坏）が、P 7・P 8から出土している。いずれも細片で第3～5層から出土していることから、多くは構築時の混入と考えられる。

所見 時期は、出土土器や遺構の重複関係から9世紀後葉と考えられる。性格は、「倉庫」としての機能が考えられる。

第13号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第380図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母・針状物質	におい褐色	普通	口縁部横位の磨き 体部内面横位の磨き 内面黒色処理	P 7 第3～5層	10%

第14号掘立柱建物跡（第381図）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE 8b0区、標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第80C号竪穴建物跡を掘り込み、第8・13号掘立柱建物、第92号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-6°-Eの南北棟である。規模は桁行5.7 m、梁行4.2 mで、面積は23.94㎡である。柱間寸法は、桁行は北妻側と中央間が1.8 m（6尺）、南妻側が2.1 m（7尺）で、梁行は2.1 m（7尺）である。柱筋はほぼ揃っている。

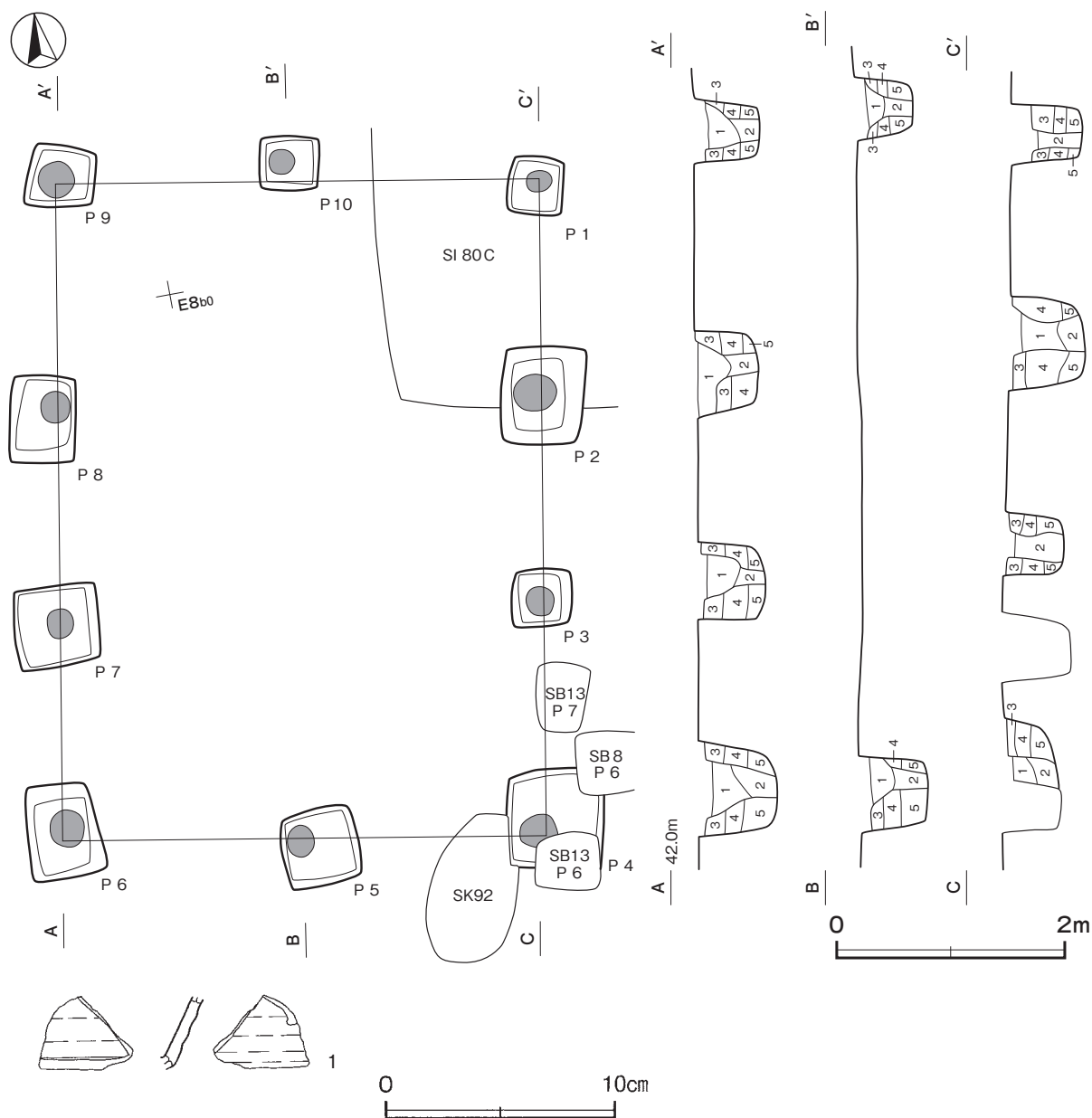
柱穴 10か所。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸0.52～0.87 m、短軸0.48～0.83 mである。深さは50～72cmで、掘方の壁は直立している。第3～5層は埋土、第1・2層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1～P10の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は20～30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説（各ピット共通）

- | | | | |
|----------|--------------------|-------|-----------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 におい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 5 黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片1点（甕類）、須恵器片2点（坏、蓋）が、P 4・P 5から出土している。いずれも細片で第3～5層から出土していることから、構築時の混入と考えられる。

所見 時期は、出土土器や遺構の重複関係から9世紀前葉と考えられる。性格は、「屋」としての機能が考えられる。



第 381 図 第 14 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 14 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 381 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(3.2)	-	長石・石英・針状物質・黒色粒子	黄灰	良好	体部ロクロナデ	P 4 第 3・4 層	5% 木炭下窯。

第 16 号掘立柱建物跡 (第 382 図)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 9j1 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 82 号竪穴建物跡を掘り込み、第 7・11・12 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 桁行 2 間、梁行 2 間の側柱建物跡で、桁行方向が N - 8° - E の南北棟である。規模は桁行 4.2 m、

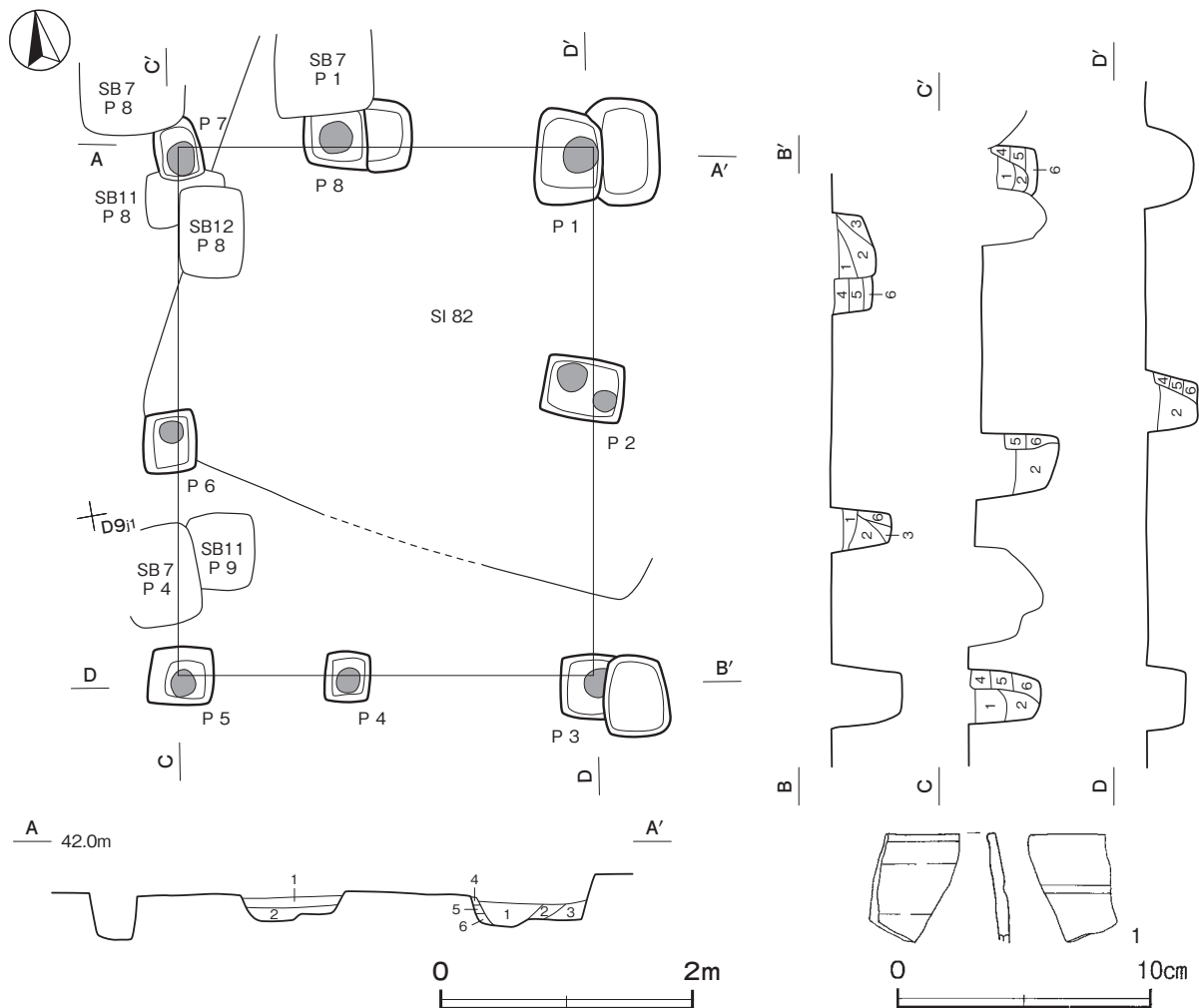
梁行 3.3 m で、面積は 13.86㎡である。柱間寸法は、桁行の東側列が北から 1.8 m (6 尺)、2.4 m (8 尺)、西側列が 2.1 m (7 尺) で、梁行は東側が 2.1 m (7 尺)、西側が 1.2 m (4 尺) である。柱筋はほぼ揃っている。
柱穴 8 か所。平面形は隅丸長方形で、長軸 0.40 ~ 0.74 m、短軸 0.37 ~ 0.56 m である。深さは 20 ~ 61 cm で、掘方の壁は直立している。P 1・P 3・P 8 では、柱材を抜き取るための土坑を確認した。隅丸方形もしくは隅丸長方形で、長軸 0.56 ~ 0.85 m、短軸 0.52 ~ 0.55 m である。深さは 25 ~ 34 cm で、掘方の壁はほぼ直立している。第 4 ~ 6 層は埋土、第 1 ~ 3 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1 ~ P 8 の底部から、柱のあたりを確認した。P 2 の底部からは 2 か所の柱のあたりを確認したことから、立て替えられている。柱のあたりの規模から、柱の直径は 15 ~ 25 cm ほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| 1 灰褐色 粘土ブロック・焼土ブロック少量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック中量 |
| 2 浅黄橙色 ロームブロック・粘土ブロック少量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 6 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 須恵器片 1 点 (コップ形土器_ホ) が、P 4 から出土している。細片で覆土中から出土していることから、投棄もしくは混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器や遺構の重複関係から 9 世紀前葉と考えられる。性格は、「屋」としての機能が考えられる。



第 382 図 第 16 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 16 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 382 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	コップ形土器	-	(4.4)	-	長石・石英・針状物質	灰	良好	体部ロクロナデ 体部外面横位の沈線状のナデ	P 4 覆土中	5%木葉下蓋。

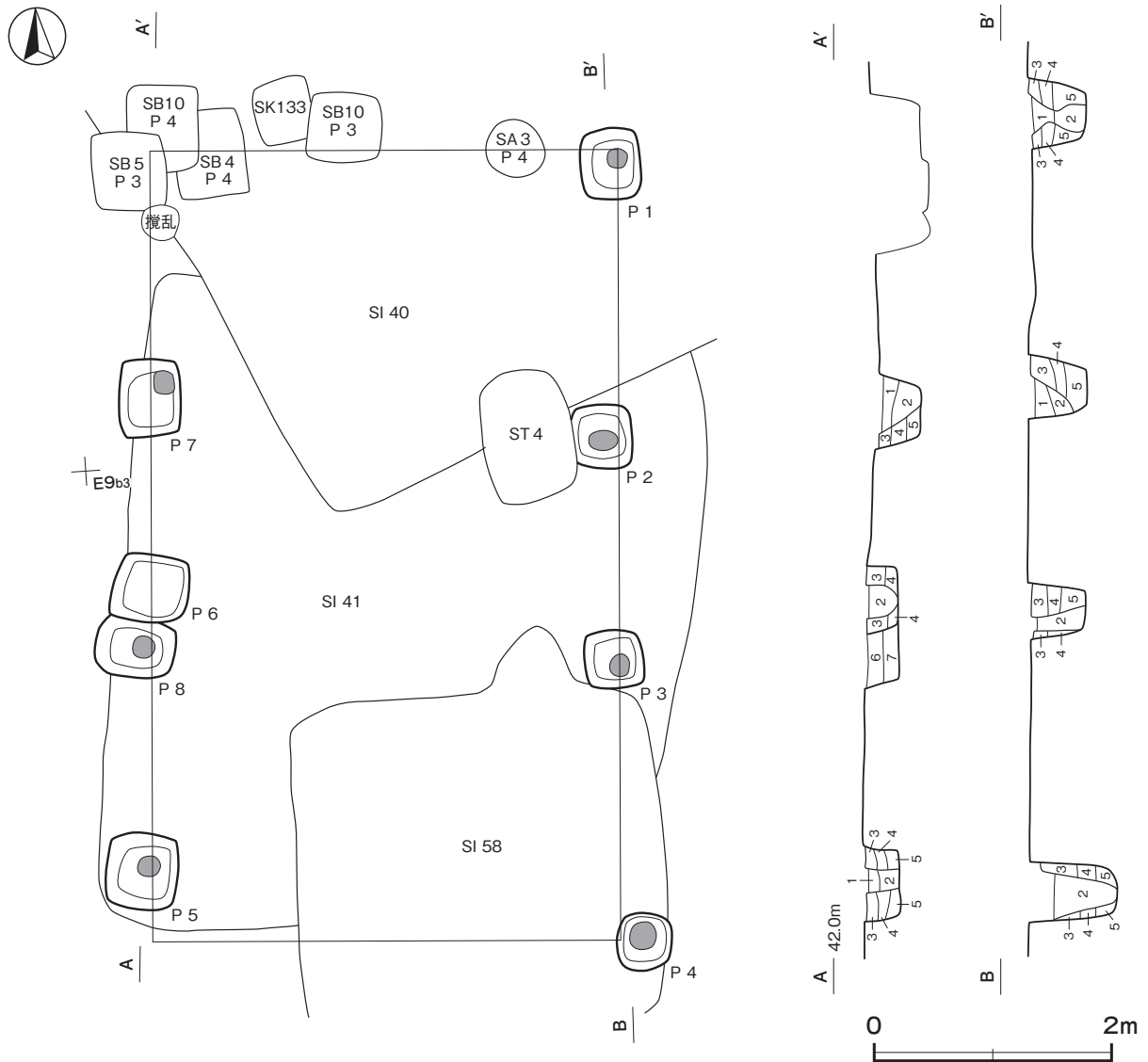
第 18 号掘立柱建物跡 (第 383 図 PL49)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の E 9b3 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 40・41・58 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 4・5・10 号掘立柱建物, 第 4 号墓坑, 第 3 号柱穴列に掘り込まれている。

規模と形状 第 4・5・10 号掘立柱建物などに掘り込まれているが, 桁行 3 間, 梁行 2 間の側柱建物跡で, 桁行方向が N - 5° - E の南北棟である。規模は桁行 6.6 m, 梁行 3.9 m で, 面積は 25.74㎡ である。柱間寸法は, 桁行の東側列が北妻側から 2.4 m (8 尺), 1.8 m (6 尺), 2.4 m (8 尺) で, 西側列が 2.4 m (8 尺), 1.8 m (6



第 383 図 第 18 号掘立柱建物跡実測図

尺), 2.4 m (8 尺) である。梁行は東側が 1.8 m (6 尺), 西側が 2.1 m (7 尺) である。柱筋はほぼ揃っているが, 全体的に歪んでいる。

柱穴 8 か所。第 4・5・10 号掘立柱建物に掘り込まれ, 南妻柱が確認できなかった。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で, 長軸 0.47 ~ 0.66 m, 短軸 0.46 ~ 0.60 m である。深さは 27 ~ 72 cm で, 掘方の壁は直立している。P 8 は P 6 に掘り込まれていることから, 立て替えられている。第 6・7 層は立て替え前の埋土で, 第 3 ~ 5 層は埋土, 第 1・2 層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1 ~ P 5・P 7・P 8 の底部から, 柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から, 柱の直径は 20 ~ 25 cm ほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | | | |
|--------|---------------------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック微量 | 5 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 7 褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

所見 時期は, 遺構の重複関係から 9 世紀前葉と考えられる。性格は, 「屋」としての機能が考えられる。

表 12 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数		面積 (㎡)	柱間寸法		柱 穴				主な出土遺物	時期	備考
			桁×梁(間)	桁×梁 (m)		桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形	深さ(cm)			
2	D 9j4	N - 0°	3 × 2	5.4 × 3.3	17.82	1.8	1.5 ~ 1.8	側柱	13	円形・楕円形	15 ~ 70	土師器・須恵器・金属製品	11 世紀中葉	SI35・36・40・43・49 → 本跡 → PG 2
4	D 9j2	N - 2° - E	3 × 2	6.3 × 4.5	28.35	2.1	2.1 ~ 2.4	側柱・総柱	10	隅丸長方形	27 ~ 60	土師器・須恵器	9 世紀前葉から中葉	SI40・80C・82・89, SB18 → 本跡 → SB 5・10, SK814・816・819
5	D 9j2	N - 4° - E	2 × 2	4.2 × 3.6	15.12	2.1	1.8	総柱	9	隅丸方形・隅丸長方形	34 ~ 60	土師器	9 世紀後葉	SI40・80C・89, SB 4・10・18 → 本跡 → SK818
6	E 9e3	N - 15° - E	2 × 2	3.6 × 3.6	12.96	1.8	1.5 ~ 2.1	側柱	8	円形・楕円形	34 ~ 64	土師器	9 世紀後葉	SI39A・B → 本跡
7	D 9i1	N - 4° - E	2 × 2	4.2 × 3.0	12.60	2.1	1.5	側柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	37 ~ 80	-	9 世紀中葉	SI82・84, SB11・16 → 本跡 → SB12, SK817
8	E 9c1	N - 6° - E	2 × 2	4.2 × 3.6	15.12	2.1	1.8	総柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	30 ~ 75	土師器	9 世紀中葉	SI63, SB 9・14 → 本跡 → SI64・SB13
9	E 9c1	N - 6° - E	2 × 2	4.8 × 3.0 3.3	15.36	2.4	1.5 ~ 1.8	側柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	24 ~ 50	土師器・須恵器	9 世紀前葉から中葉	本跡 → SI64, SB 8・13
10	D 9j3	N - 4° - E	2 × 2	4.2 × 3.6	15.12	2.1	1.8	総柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	30 ~ 60	土師器	9 世紀中葉	SI40・89, SB 4・18, SK133 → 本跡 → SB 5
11	D 9i1	N - 5° - E	2 × 2	4.5 × 3.9 4.2	18.23	2.1 ~ 2.4	1.8 ~ 2.4	総柱	9	隅丸方形・隅丸長方形	30 ~ 86	-	9 世紀前葉から中葉	SI82, SB16 → 本跡 → SB 7・12
12	D 9j1	N - 3° - E	3 × 2	4.5 × 2.7	12.15	1.2 ~ 1.8	1.2 ~ 1.5	側柱	10	隅丸方形・隅丸長方形	20 ~ 45	土師器	9 世紀後葉	SI82, SB 7・11・16 → 本跡
13	E 8c0	N - 8° - E N - 82° - W	2 × 2	3.0 × 3.0	9.00	1.5	1.5	側柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	40 ~ 57	土師器・須恵器	9 世紀後葉	SB 8・9・14 → 本跡 → SI64
14	E 8b0	N - 6° - E	3 × 2	5.7 × 4.2	23.94	1.8 ~ 2.1	2.1	側柱	10	隅丸方形・隅丸長方形	50 ~ 72	土師器・須恵器	9 世紀前葉	SI80C, → 本跡 → SB 8・13, SK92
16	D 9j1	N - 8° - E	2 × 2	4.2 × 3.3	13.86	1.8 ~ 2.4	1.2 ~ 2.1	側柱	8	隅丸長方形	20 ~ 61	須恵器	9 世紀前葉	SI82 → 本跡 → SB 7・11・12
18	E 9b3	N - 5° - E	3 × 2	6.6 × 3.9	25.74	1.8 ~ 2.4	1.8 ~ 2.1	側柱	8	隅丸方形・隅丸長方形	27 ~ 72	-	9 世紀前葉	SI40・41・58 → 本跡 → SB 4・5・10, ST 4, SA 3

(3) 井戸跡

第 2 号井戸跡 (第 384 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 3 e4 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 1 号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 確認面は長径 1.28 m, 短径 1.22 m の円形である。確認面から円筒形に掘り込まれている。壁の中部はフラスコ状に挟り込んでいるが, 堆積状況から壁の崩落によって浸食されたものと考えられる。深さは 245 cm まで掘り下げた段階で, 崩落が想定されたため, 以下の調査を断念した。

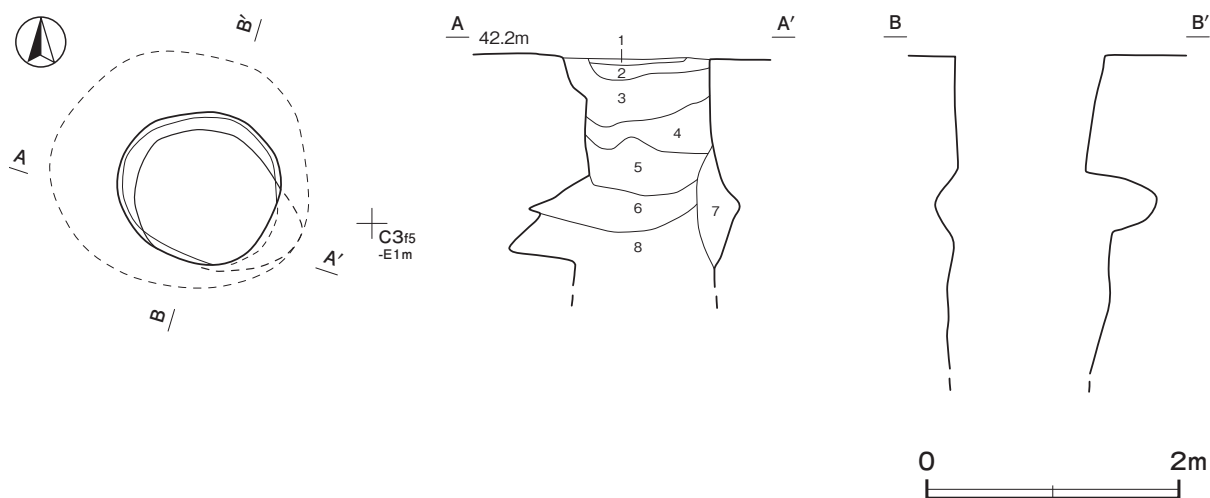
覆土 観察できた部分は、8層に分層できる。第1～6層がロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。第7・8層は、堆積状況から壁の崩落土や流出土と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、礫微量 | 5 黒褐色 ロームブロック・礫少量 |
| 2 暗褐色 礫中量、ロームブロック少量 | 6 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 | 7 灰黄色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 | 8 黄褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック・礫少量 |

遺物出土状況 土師器片3点（坏1，甕類2），須恵器片1点（蓋）のほか、縄文土器片3点（深鉢）が、覆土中から出土している。土器は小片で、接合関係に乏しいことから、破損した土器が廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、実測可能な遺物は出土しなかったものの、出土土器や周辺の竪穴建物跡群から9世紀前半と推定できる。



第384図 第2号井戸跡実測図

(4) 柱穴列

第3号柱穴列（第385図 PL49）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD 9j4～E 9a4区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第40号竪穴建物跡を掘り込んでいます。

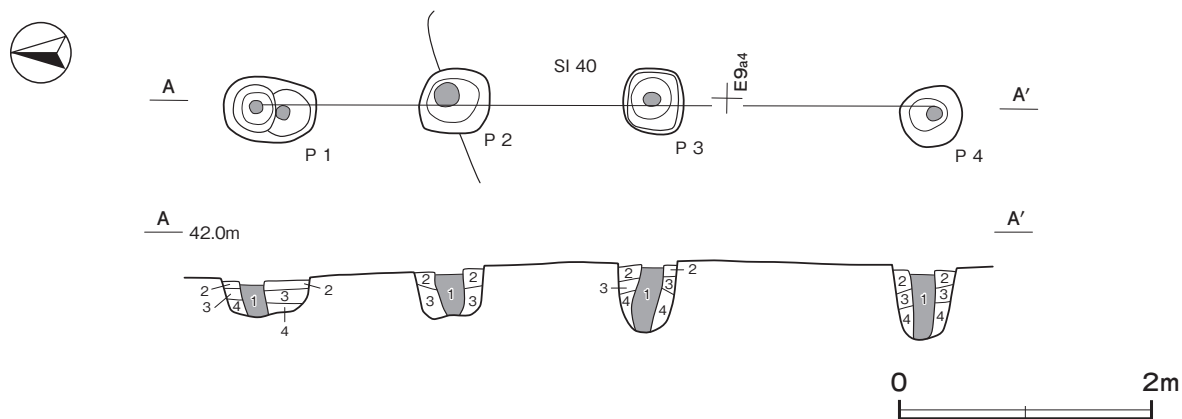
規模と形状 南北方向5.4mの間に4か所の柱穴が配され、配列方向はN-0°である。柱間寸法は、1.5～2.1m（5～7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径0.50～0.72m、短径0.42～0.50mである。深さは34～62cmで、掘方の壁は直立している。第2～4層は埋土、第1層は柱痕跡である。P1～P4の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模や柱痕跡から、柱の直径は20cmほどと推定できる。

柱穴土層解説

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 ぬい黄褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |

所見 時期は、出土遺物がなかったものの、周辺の掘立柱建物跡群の年代や柱穴の形状から9世紀代と考えられる。性格は、掘立柱建物跡もしくは堀跡と考えられる。



第 385 図 第 3 号柱穴列実測図

(5) 土坑

今回の調査で、当時代の土坑 28 基を確認した。形状や遺物出土状況などから特徴的な土坑 5 基については、文章と実測図、遺物観察表で解説する。その他の 23 基については、実測図、一覧表を掲載する。

第 56 号土坑（第 386 図）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 d7 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 25 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.40 m、短径 1.29 m の円形である。深さは 59cm で、壁は直立している。底面は平坦である。

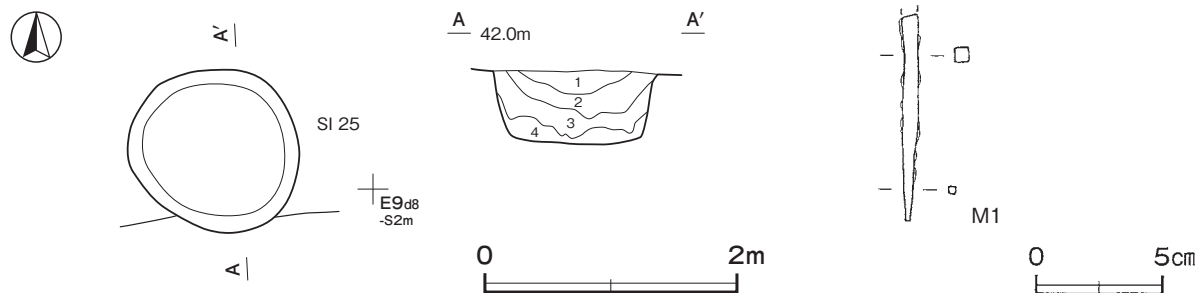
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片 12 点（坏 1、高台付坏 1、甕類 10）、金属製品 1 点（釘）のほか、縄文土器片 2 点（深鉢）、弥生土器片 2 点（壺類）が出土している。覆土中から出土していることから、投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器が細片であることから図化はできなかったが、9 世紀中葉と推定できる。性格は、不明であるが、最終的には廃棄土坑として使用されている。



第 386 図 第 56 号土坑・出土遺物実測図

第 56 号土坑出土遺物観察表（第 386 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	釘	(8.3)	0.7	0.6	(7.06)	鉄	頭部欠損 断面方形	覆土中	PL108

第 184 号土坑（第 387 図）

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の E 7 a0 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径 0.54 m、短径 0.48 m の楕円形で、長径方向は N - 20° - E である。深さは 58cm で、壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

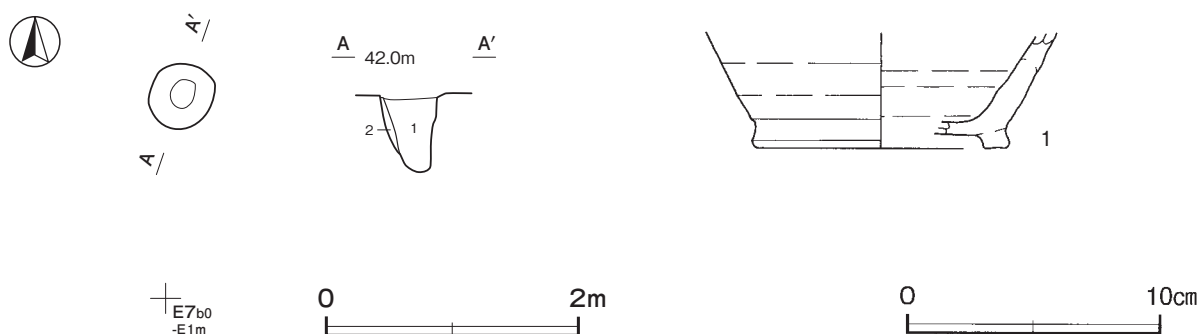
覆土 2 層に分層できる。第 2 層は埋土、第 1 層は柱材を抜き取った後の覆土である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 須恵器片 1 点（長頸瓶）が出土している。第 1 層から出土している。

所見 時期は出土土器から、9 世紀前半に比定できる。性格は柱穴であるが、掘立柱建物跡や柱穴列などの配列は確認できなかった。



第 387 図 第 184 号土坑・出土遺物実測図

第 184 号土坑出土遺物観察表（第 387 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	長頸瓶	-	(4.5)	[10.0]	長石・石英・黒色粒子	褐灰	良好	体部ロクロナデ 高台部貼付	第 1 層	10% 堀ノ内窯。

第 186 号土坑（第 388 図）

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 8 g2 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 421・422 号土坑、第 8 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長径 0.35 m、短径 0.31 m の楕円形で、長径方向は N - 25° - W である。深さは 80cm で、壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

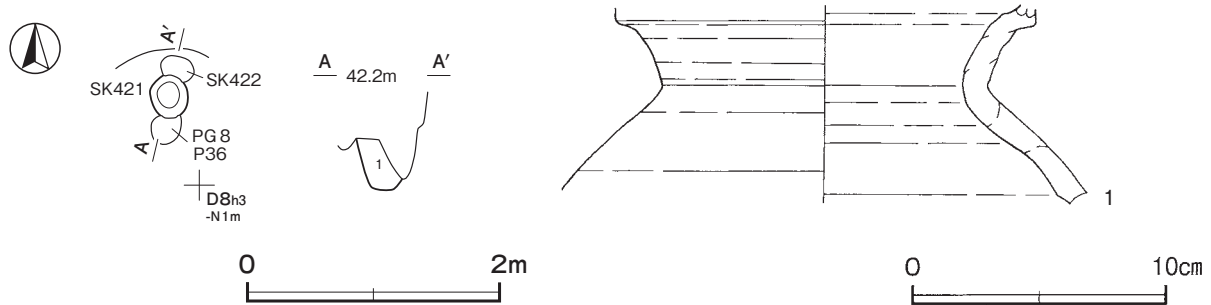
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 須恵器片1点（甕）のほか、縄文土器片7点（深鉢），弥生土器片1点（壺類）が覆土中から出土している。

所見 時期は出土土器から，9世紀前半に比定できる。性格は不明である。



第 388 図 第 186 号土坑・出土遺物実測図

第 186 号土坑出土遺物観察表（第 388 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	甕	-	(7.7)	-	長石・石英・針状物質	暗灰黄	普通	口縁部・体部ロクロナデ	覆土中	10%木葉下窯

第 397 号土坑（第 389 図）

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区中央部の D 6 f 7 区，標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径 0.37 m，短径 0.36 m の円形である。深さは 55cm で，壁は直立している。底面は皿状である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

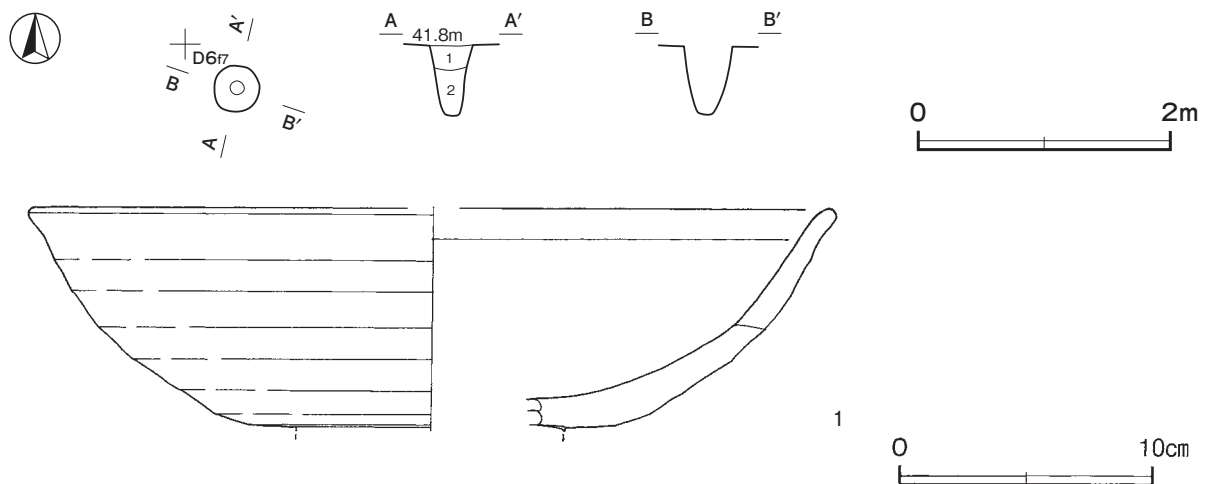
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 にぶい黄褐色 ロームブロック・今市軽石ブロック少量

遺物出土状況 土師器片6点（坏1，皿1，甕類4），須恵器片1点（鉢類）が出土している。覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器から9世紀中葉と考えられる。性格は柱穴の可能性はあるが，掘立柱建物跡や柱穴列



第 389 図 第 397 号土坑・出土遺物実測図

などの配列は確認できなかった。

第 397 号土坑出土遺物観察表 (第 389 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	鉢	[31.4]	(8.7)	-	長石・石英 黒色粒子	灰白	良好	口縁部・体部 削り、内面磨減 体部外面下位回へら 高台部貼付	覆土中	30% 東海産。

第 675 号土坑 (第 390 図)

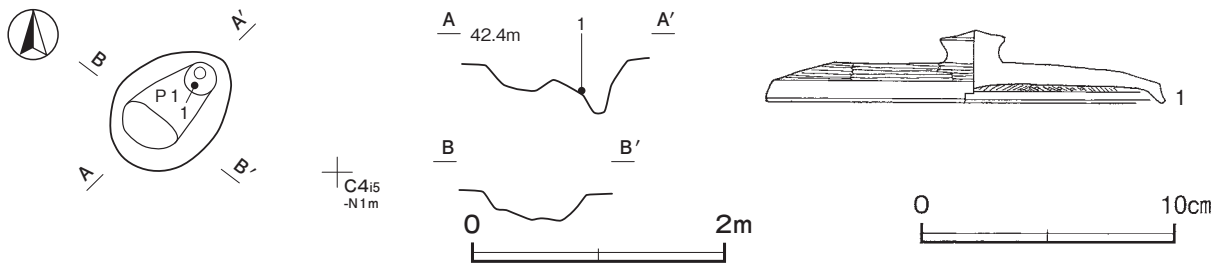
調査年度 平成 28 年度

位置 調査区東部の C 4 h4 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径 1.12 m, 短径 0.81 m の楕円形で, 長径方向は N - 41° - E である。深さは 38 cm で, 壁は外傾している。底面は段を有している。

遺物出土状況 土師器片 6 点 (蓋 1, 甕類 5) が出土している。

所見 時期は出土土器から, 9 世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



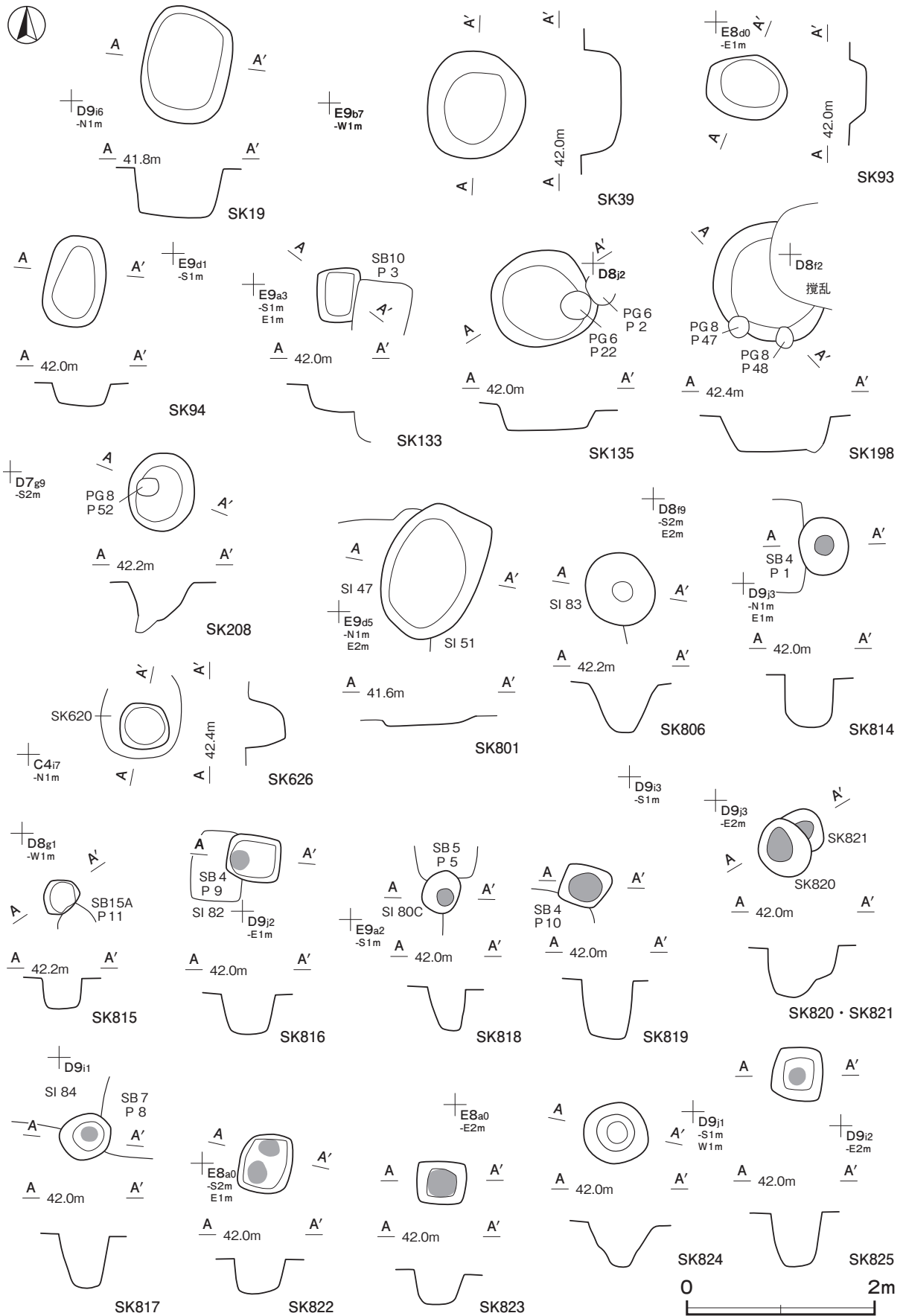
第 390 図 第 675 号土坑・出土遺物実測図

第 675 号土坑出土遺物観察表 (第 390 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	蓋	15.6	2.8	-	長石・石英・雲母・ 針状物質	にぶい 黄橙	普通	天井部回転へら切り 面二方向の磨き、内 面黒色処理	P 1 覆土中	90% PL95

表 13 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
19	D 9 h6	N - 10° - W	楕円形	1.26 × 0.94	53	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	土師器	SI26 → 本跡
39	E 9 b7	-	円形	1.14 × 1.05	40	ほぼ直立	平坦	人為	土師器	
56	E 9 d7	-	円形	1.40 × 1.29	59	直立	平坦	人為	土師器, 金属製品	SI25 → 本跡
93	E 8 d0	N - 62° - W	楕円形	0.88 × 0.70	23	ほぼ直立	平坦	人為	土師器, 須恵器	SI63 → 本跡
94	E 8 d0	N - 8° - E	楕円形	0.95 × 0.54	26	直立	平坦	人為	土師器, 須恵器	SI63 → 本跡
133	E 9 a3	N - 2° - W	長方形	0.58 × 0.47	31	ほぼ直立	ほぼ平坦	採取痕 埋土	-	SI40 → 本跡 → SB10
135	D 8 j1	-	円形	1.10 × 1.08	23	直立 外傾	平坦	人為	金属製品	本跡 → PG 6
184	E 7 a0	N - 20° - E	楕円形	0.54 × 0.48	58	ほぼ直立	ほぼ平坦	採取痕 埋土	須恵器	
186	D 8 g2	N - 25° - W	楕円形	0.35 × 0.31	80	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	須恵器	本跡 → SK421・ 422, PG8



第 391 図 平安時代のその他の土坑実測図

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
198	D 8 f1	-	円形	1.25 × 1.24	38	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→PG 8
208	D 7 g9	N - 8° - E	楕円形	0.85 × 0.72	40	ほぼ直立 外傾	皿状	自然 人為	須恵器	本跡→PG 8
397	D 6 f7	-	円形	0.37 × 0.36	55	直立	皿状	人為	土師器, 須恵器	
626	C 4 h8	-	[円形]	(0.52) × (0.51)	39	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→SK620
675	C 4 h4	N - 41° - E	楕円形	1.12 × 0.81	38	外傾	有段	-	土師器	
801	E 9 c5	N - 34° - E	楕円形	1.44 × 1.02	8	外傾	平坦	人為	-	SI47→本跡 →SI51
806	D 8 f9	-	円形	0.80 × 0.78	52	ほぼ直立	皿状	抜取痕 埋土	-	SI63→本跡
814	D 9 i3	N - 12° - W	楕円形	0.64 × 0.52	54	直立	平坦	抜取痕 埋土	-	SB 4→本跡
815	D 7 g0	N - 56° - E	楕円形	0.36 × 0.33	32	直立	平坦	抜取痕 埋土	-	SB15A→本跡
816	D 9 i2	N - 85° - W	長方形	0.56 × 0.48	43	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	-	SB 4→本跡
817	D 9 i1	N - 50° - E	楕円形	0.53 × 0.47	56	直立	ほぼ平坦	抜取痕 埋土	-	SI84, SB 7→本 跡
818	E 9 a2	N - 24° - E	楕円形	0.47 × 0.40	48	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	-	SI80C, SB 5→ 本跡
819	D 9 i2	N - 71° - W	長方形	0.48 × 0.43	63	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	-	SB 4→本跡
820	D 9 j3	N - 28° - W	楕円形	0.66 × 0.52	52	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	-	SK821→本跡
821	D 9 j3	N - 28° - W	[楕円形]	0.50 × (0.23)	33	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	-	本跡→SK820
822	E 8 a0	N - 15° - E	長方形	0.63 × 0.55	36	直立	平坦	抜取痕 埋土	-	
823	E 8 a0	N - 85° - W	長方形	0.53 × 0.45	34	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	-	
824	D 8 j0	-	円形	0.66 × 0.64	47	外傾	平坦	抜取痕 埋土	-	
825	D 9 h2	N - 13° - E	長方形	0.58 × 0.52	58	直立	平坦	抜取痕 埋土	-	

6 鎌倉・室町時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構5棟、井戸跡1基、墓坑7基、柱穴列1条、道路跡2条、溝跡5条、段切状遺構1条、土坑16基、ピット群8か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第17号掘立柱建物跡 (第392図 PL50)

調査年度 平成27年度

位置 調査区中央部のD 5 d7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第447号土坑に掘り込まれている。

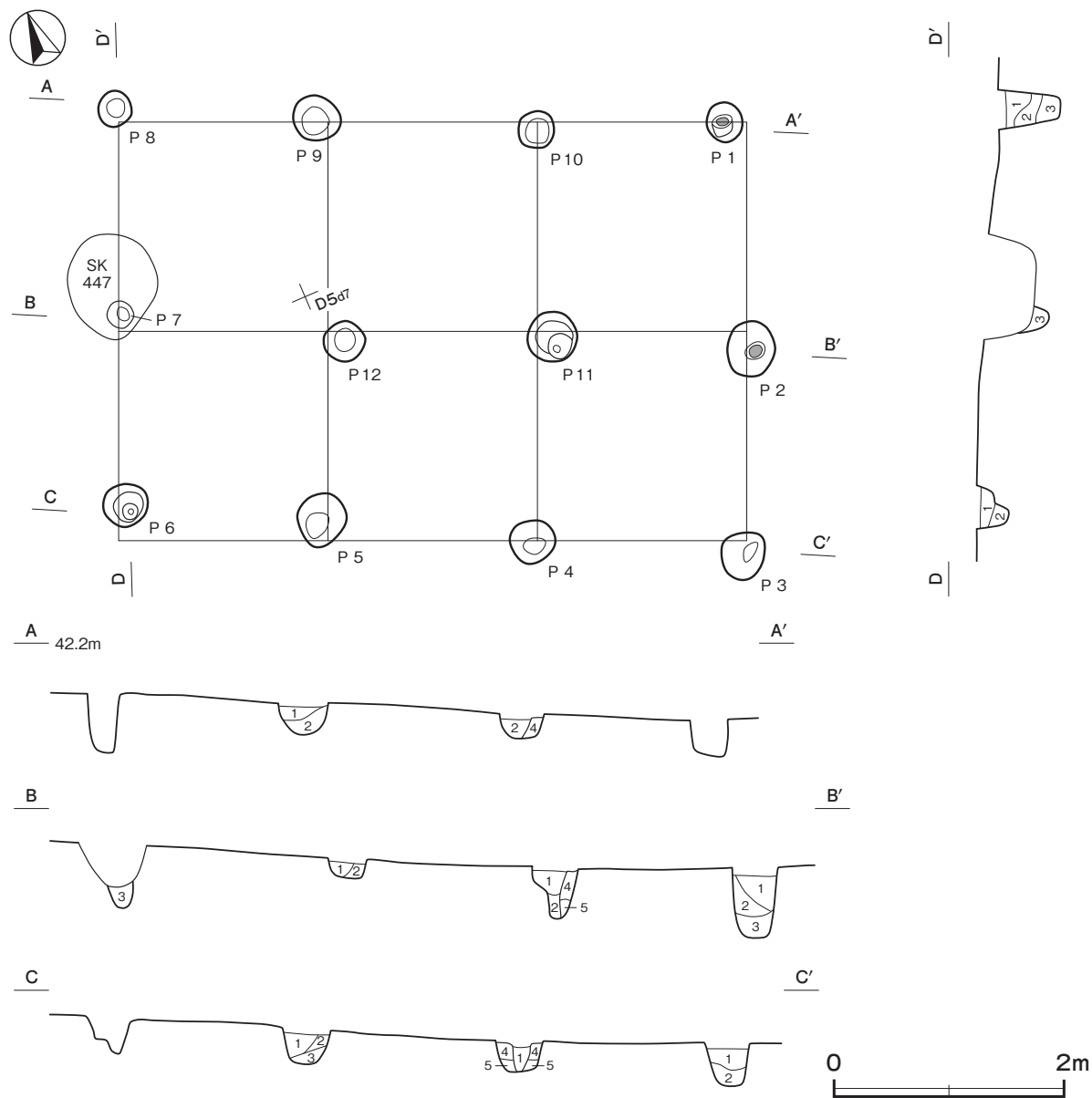
規模と形状 桁行3間、梁行2間の総柱建物跡で、桁行方向がN - 66° - Wの東西棟である。規模は桁行5.4m、梁行3.6mで、面積は19.44㎡である。柱間寸法は、桁行、梁行ともに1.8m(6尺)である。柱筋はP 6を除いて、ほぼ揃っているが、東妻がやや開いている。

柱穴 12か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径0.31～0.46m、短径0.28～0.40mである。深さは15～50cmで、掘方の壁は直立している。第4・5層は埋土、第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土である。P 1・P 2の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の直径は10cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|-----------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量 | 5 褐色 ロームブロック中量 (第2層より締まりが強い) |
| 3 灰褐色 ロームブロック中量 | |

所見 時期は、第2号柱穴列が付随していることから、16世紀後半と考えられる。性格は、家屋や小屋などの機能が考えられる。



第 392 図 第 17 号掘立柱建物跡実測図

(2) 方形竪穴遺構

第 1 号方形竪穴遺構 (第 393 図 PL50)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 3 f2 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 116 号竪穴建物跡を掘り込み、第 498・499 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第 498・499 号土坑に掘り込まれているが、長軸 2.55 m、短軸 1.55 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 56° - W である。壁は高さ 54cm で、直立している。

床 平坦で、全面が硬化している。

ピット 2か所。P 1・P 2は深さ 20cm・30cmで、配置から主柱穴と考えられる。単一層で、柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説（各ピット共通）

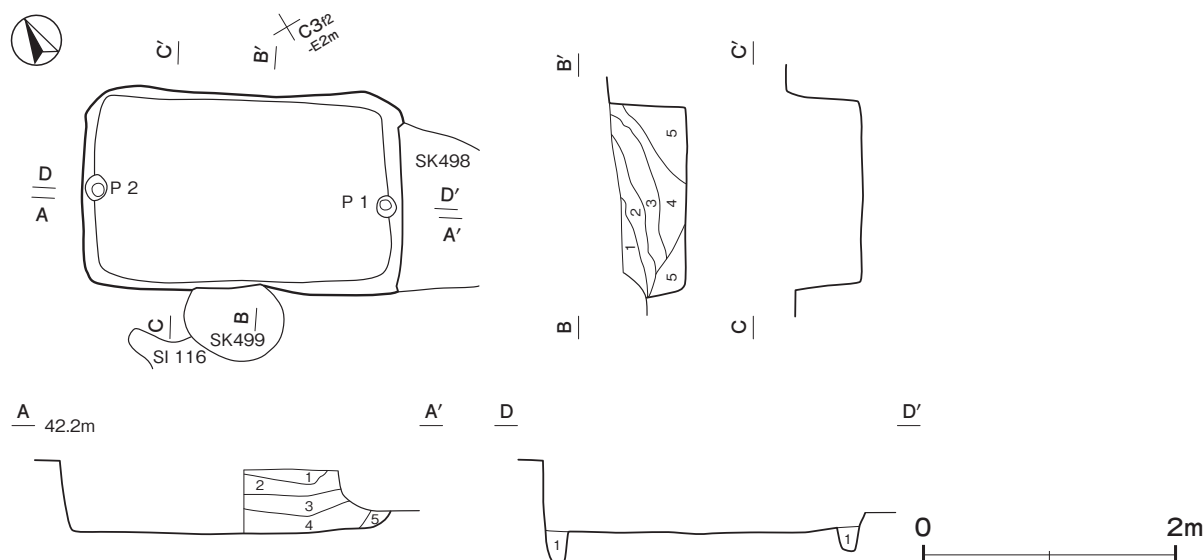
- 1 黒褐色 ロームブロック中量

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、第2号方形竪穴遺構と形状が類似していることから、15世紀代と推定できる。出入り口部は確認できなかったが、これまでの事例から第498号土坑に掘り込まれている東壁に想定できる。性格は、簡易な建物と考えられる。



第 393 図 第 1 号方形竪穴遺構実測図

第 4 号方形竪穴遺構（第 394 図 PL50）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 a7 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 24・31・33・37 号竪穴建物跡を掘り込み、第 4 号粘土貼土坑、第 50 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第 4 号粘土貼土坑などに掘り込まれているが、長軸 3.70 m、短軸 2.49 m の隅丸長方形で、長軸方向は N-1°-W である。壁は高さ 24cm で、直立している。

床 平坦で、全面が硬化している。

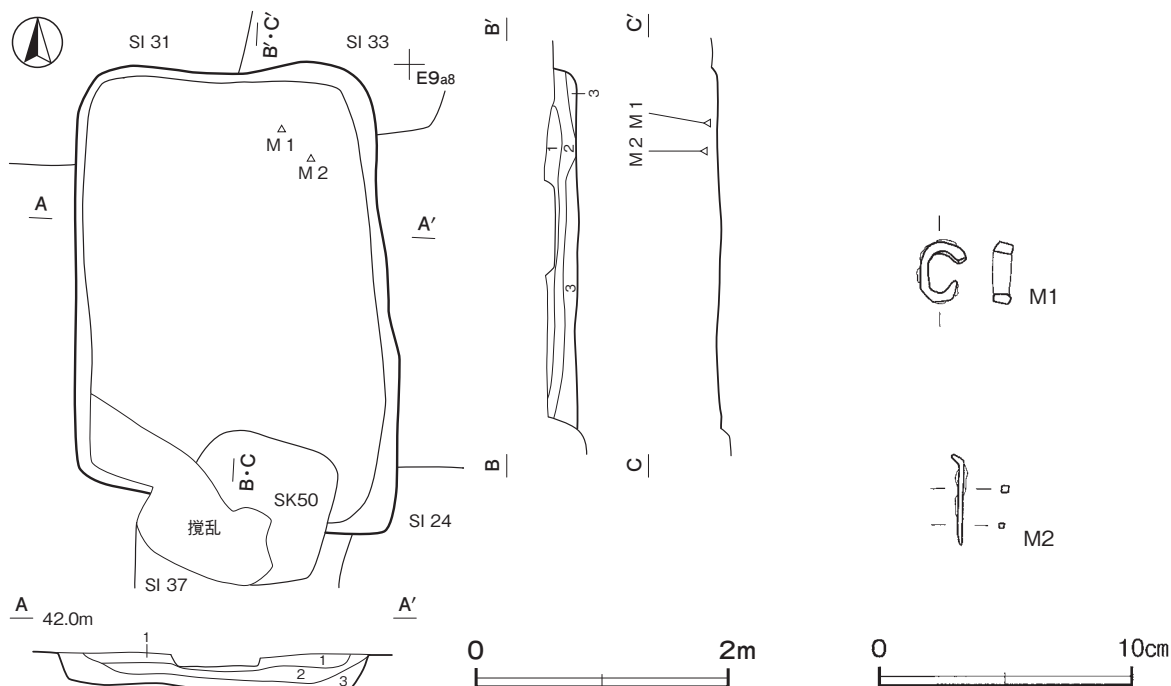
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 金属製品2点（黄金具_ナ, 釘）のほか, 石製品1点（垂飾_ナ）が出土している。覆土中から出土していることから, 廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は, 近接して確認した方形竪穴遺構とほぼ同時期と考えられ, 15世紀代と推定できる。支柱穴は確認できなかったものの, 底面が硬化していることから方形竪穴遺構の可能性はある。性格は, 支柱穴が確認できなかったことから, 不明である。



第394図 第4号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第4号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第394図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	黄金具 _ナ	2.5	(1.9)	0.7	(4.64)	鉄	一枚の鉄板折り曲げ	覆土中層	PL108
M 2	釘	3.2	0.6	0.3	0.80	鉄	頭部屈折 断面方形	覆土中層	PL108

第5号方形竪穴遺構（第395図 PL51）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE9c6区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第25号竪穴建物跡を掘り込み, 第6号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 第6号方形竪穴遺構に掘り込まれているが, 長軸2.51m, 短軸2.32mの東壁がやや歪んだ隅丸方形で, 長軸方向はN-6°-Eである。壁は高さ30cmで, 直立している。南壁の中央部に張出し部を確認した。長さ0.24m, 幅0.80mの台形状で, 確認面から床面へ階段状に下っていることから, 出入口施設と考えられる。

床 平坦で, 全面が硬化している。

ピット 2か所。P1・P2は深さ62cm・70cmで, 配置から支柱穴と考えられる。

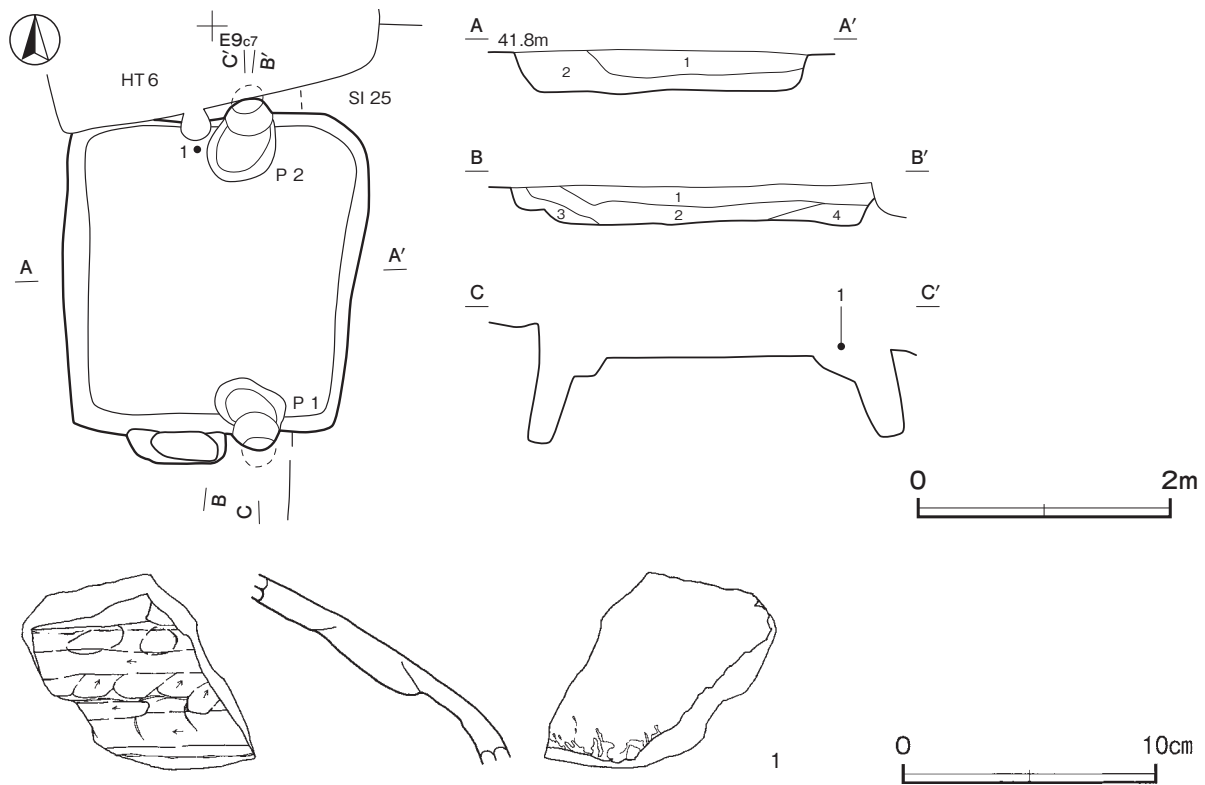
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 3 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 陶器片2点（甕類）のほか、土師器片2点（高坏，甕類）が出土している。1は破損した後に、投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から15世紀前半に比定できる。性格は、簡易な建物と考えられる。



第 395 図 第 5 号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第 5 号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第 395 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	甕	-	(7.5)	-	緻密・におい黄橙	体部ロクロナデ 内面縦・横位のナ デ 指頭痕	-	常滑産	覆土下層	10% 自然釉付着

第 6 号方形竪穴遺構（第 396 図 PL51）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 b6 区，標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 25 号竪穴建物跡，第 5・7 号方形竪穴遺構，第 59 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.10 m，短軸 2.95 m の南壁がやや歪んだ隅丸長方形で，長軸方向は N - 9° - W である。壁は高さ 34cm で，直立もしくは外傾している。

床 平坦で，全面が硬化している。

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さ 24cm・18cm で，配置から支柱穴と考えられる。P 1・P 2 の底面から柱の

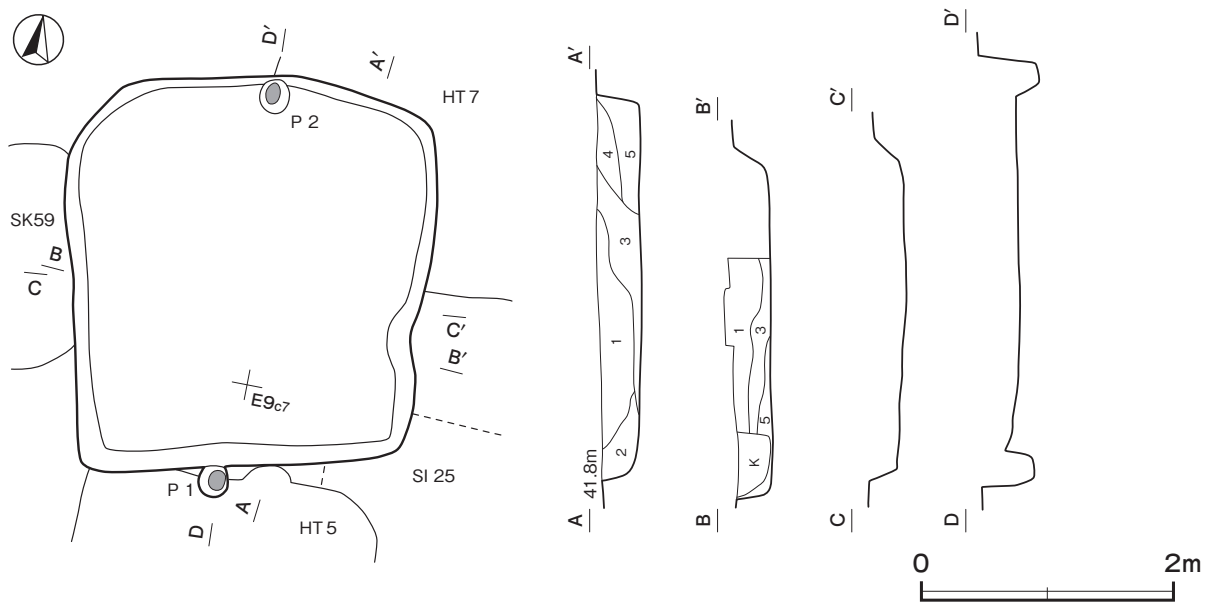
あたりを確認した。柱のあたりの規模から、柱の径は10～15cmと推定できる。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 5 灰黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 | | |

所見 時期は、重複関係から15世紀前半以降の室町時代と推定できる。性格は、簡易な建物と考えられる。



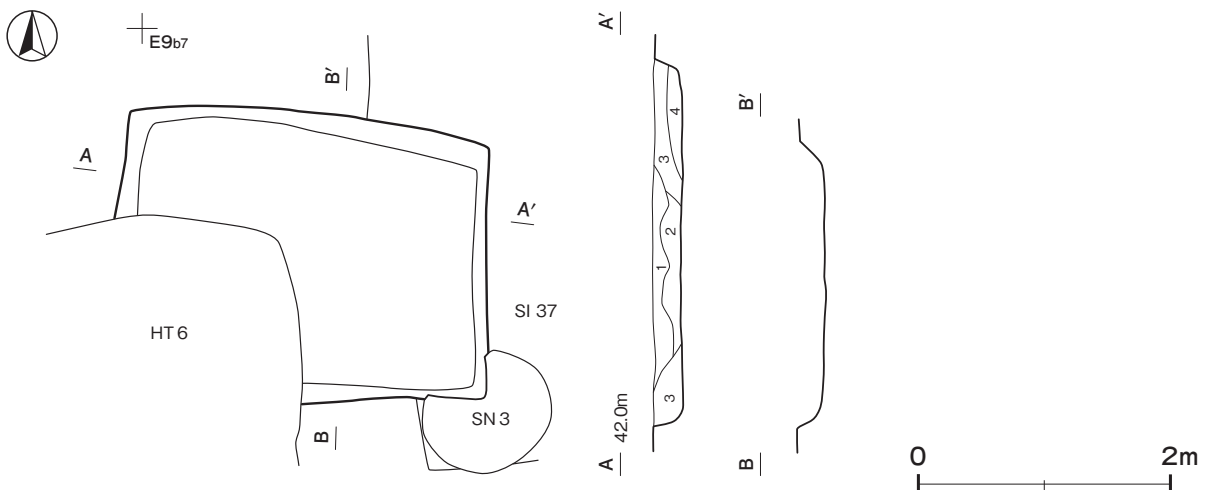
第396図 第6号方形竪穴遺構実測図

第7号方形竪穴遺構 (第397図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE9b7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第37号竪穴建物跡を掘り込み、第6号方形竪穴遺構、第3号粘土貼土坑に掘り込まれている。



第397図 第7号方形竪穴遺構実測図

規模と形状 第6号方形竪穴遺構に掘り込まれているが、長軸2.94 m、短軸2.32 mの方形で、長軸方向はN-85°-Wである。壁は高さ21cmで、直立している。

床 平坦で、全面が硬化している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------|--------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 4 灰黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |

所見 時期は、重複関係から15世紀前半以前の室町時代と推定できる。主柱穴は確認できなかったものの、底面が硬化していることから方形竪穴遺構の可能性はある。性格は、主柱穴が確認できなかったことから、不明である。

表14 鎌倉・室町時代方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)			柱穴	出入口	ビット			
1	C3f2	N-56°-W	隅丸長方形	2.55×1.55	54	平坦	2	-	-	人為	-	SI116→本跡 →SK498・499
4	E9a7	N-1°-W	隅丸長方形	3.70×2.49	24	平坦	-	-	-	人為	金属製品	SI24・31・33・37→ 本跡→SN4、SK50
5	E9c6	N-6°-E	隅丸方形	2.51×2.32	30	平坦	2	-	-	人為	陶器	SI25→本跡→HT6
6	E9b6	N-9°-W	隅丸長方形	3.10×2.95	34	平坦	2	-	-	人為	-	SI25・HT5・7、 SK59→本跡
7	E9b7	N-85°-W	方形	2.94×2.32	21	平坦	-	-	-	人為	-	SI37→本跡→HT6、 SN3

(3) 井戸跡

第4号井戸跡 (第398図 PL51・52)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC4g1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 確認面は長径1.05m、短径1.00mの円形である。確認面から円筒形に掘り込まれている。北壁と南壁の上位と中位で、横穴を4か所確認した。径8~12cmの円形で、奥行は8~16cmである。それぞれが対で掘り込まれていることから、木組みや横木を渡した施設と考えられる。深さは115cmまで掘り下げた段階で、崩落が想定されたため、以下の調査を断念した。

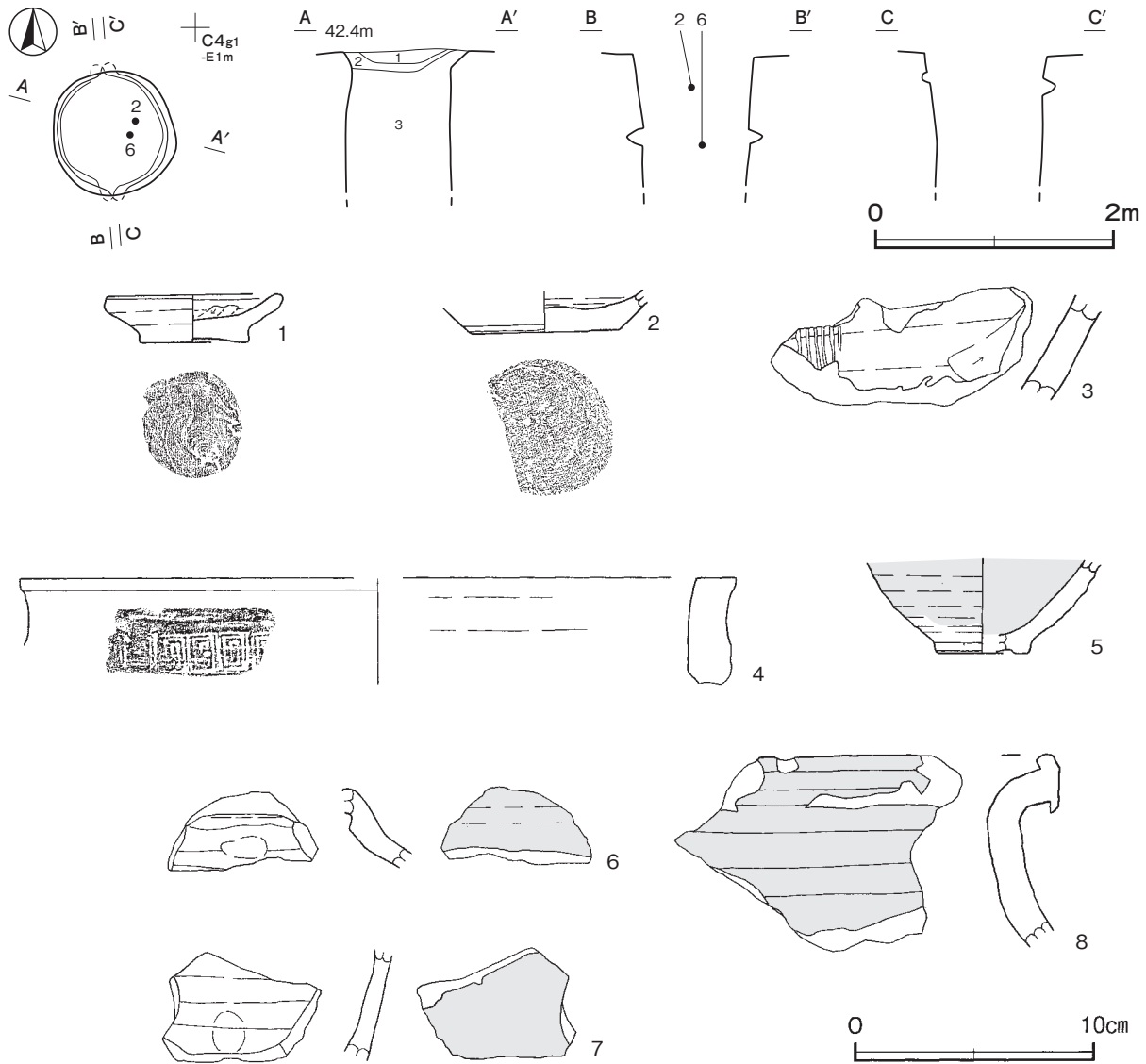
覆土 観察できた部分は、3層に分層できる。ロームブロックや礫が含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|------|---------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・礫少量 | 3 褐色 | ロームブロック中量、礫少量 |
| 2 黒褐色 | 礫多量、ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿2、火鉢1)、瓦質土器片1点(播鉢)、陶器片5点(碗1、瓶類2、甕2)、自然遺物1点(ニホンカモシカ中手骨)のほか、縄文土器片5点(深鉢)が覆土中から出土している。多くの土器は中型の破片や小片で、接合関係に乏しいことから、破損した土器が廃絶に伴って投棄されたと考えられる。1は、少量の油煙が付着した良好な遺存状態で出土していることから、使用頻度が少ない状態で投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から16世紀前葉に比定できる。



第 398 図 第 4 号井戸跡・出土遺物実測図

第 4 号井戸跡出土遺物観察表（第 398 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	7.3	2.1	4.6	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面回転糸切り後ナデ, 内面一方向のナデ	覆土中	90%
2	土師質土器	皿	-	(1.7)	[6.2]	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ 底部回転糸切り後ナデ	覆土上層	30%
3	瓦質土器	搦鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体部ロクロナデ後縦・斜位のナデ, 内面6条の摺目	覆土中	10%
4	土師質土器	火鉢	[30.3]	(4.5)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい褐	普通	口縁部ロクロナデ, 外面雷文の押印文	覆土中	10% PL100
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
5	陶器	碗	-	(4.0)	[4.0]	緻密・灰白	体部ロクロナデ 天目茶碗	鉄釉	瀬戸・美濃産	覆土中	10%
6	陶器	瓶類	-	(3.4)	-	緻密・灰白	体部ロクロナデ	灰釉	瀬戸・美濃産	覆土中層	5% PL100
7	陶器	瓶類	-	(4.8)	-	緻密・灰白	体部ロクロナデ, 内面指頭痕	灰釉	瀬戸・美濃産	覆土中	5% PL100
8	陶器	甕	-	(8.2)	-	緻密・にぶい赤褐	口縁部・体部ロクロナデ	鉄釉	常滑産	覆土中	5% PL100

(4) 墓坑

第1号墓坑 (第399図 PL54)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE10a4区、標高40mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号段切状遺構の下部の平坦面を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.12m、短軸0.93mの長方形で、長軸方向はN-5°-Eである。深さは40cmで、壁は有段もしくは直立している。底面は平坦である。

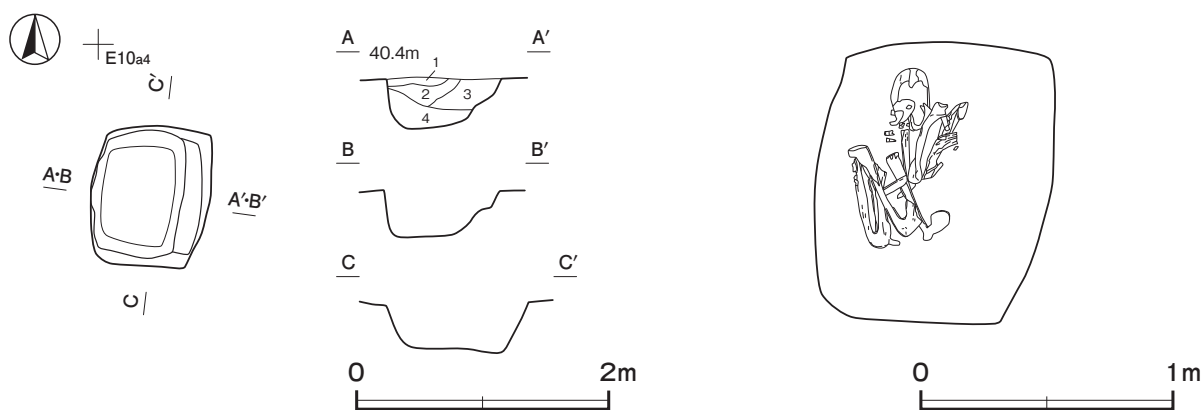
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋葬時に埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 褐色 ロームブロック少量 | 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量 |

埋葬及び遺物出土状況 直葬、横臥屈葬で、中央部の底面に埋葬されている。出土した人骨についての詳細は、付章を参照されたい。

所見 時期は、埋葬状況及び周辺の墓坑の年代から、15世紀代と推定できる。分析の結果、被葬者は壮年後半の男性と推定される。



第399図 第1号墓坑実測図

第2号墓坑 (第400図 PL54)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD9i9区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第22号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.03m、短軸0.60mの隅丸長方形で、長軸方向はN-12°-Wである。深さは39cmで、壁は直立している。底面は段を有している。

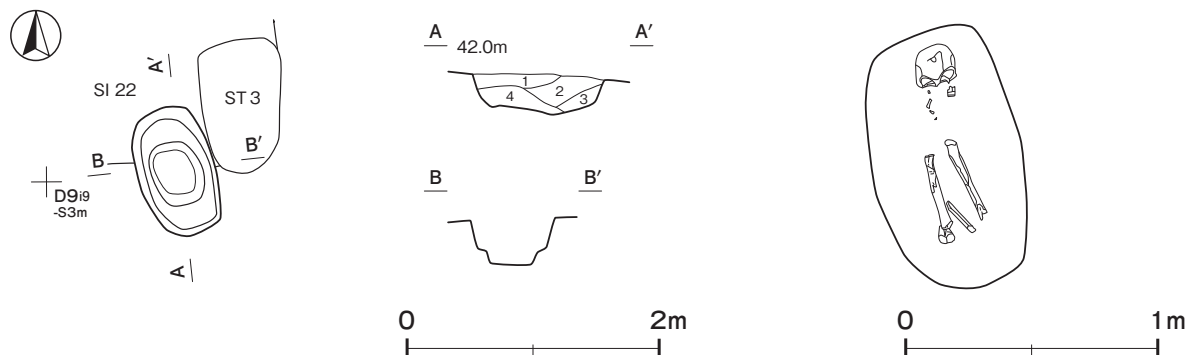
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋葬時に埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量 | 3 にぶい黄褐色 ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック中量 |

埋葬及び遺物出土状況 直葬、仰顔屈葬で、中央部の底面に埋葬されている。出土した人骨についての詳細は、付章を参照されたい。出土遺物は、土師器片6点(坏1、甕類5)で、埋葬時の流入である。

所見 時期は、埋葬状況及び周辺の墓坑の年代から、15世紀代と推定できる。分析の結果、被葬者は壮年後半以降の男性と推定される。



第 400 図 第 2 号墓坑実測図

第 3 号墓坑 (第 401 図 PL54)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の D 9 i 9 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 22 号竪穴建物跡を掘り込んでいます。

規模と形状 長軸 1.07 m、短軸 0.64 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 8° - W である。深さは 28cm で、壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

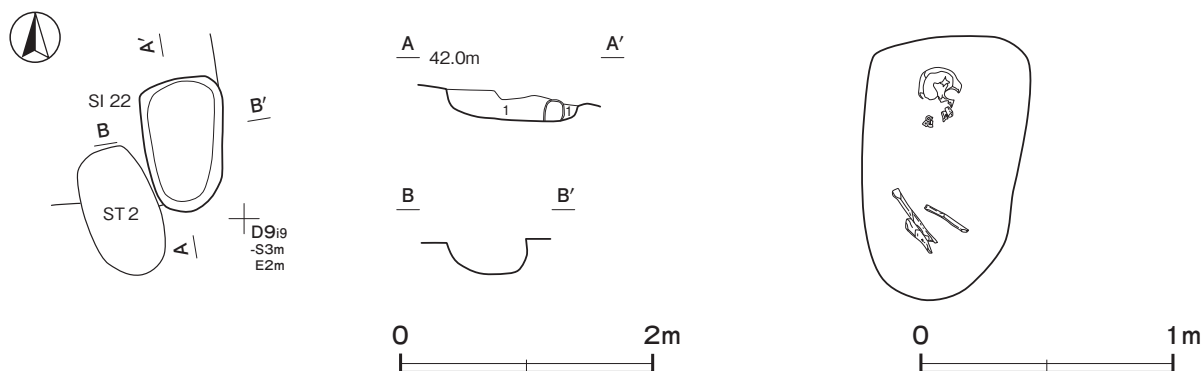
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋葬時に埋め戻されている。

土層解説

1 褐色 ロームブロック中量

埋葬及び遺物出土状況 直葬、横臥屈葬で、中央部東寄りの底面に埋葬されている。出土した人骨についての詳細は、付章を参照されたい。出土遺物は弥生土器片 3 点 (壺類)、土師器片 6 点 (坏 1、甕 5) であるが、埋葬時の流入である。

所見 時期は、埋葬状況や周辺の墓坑の年代から、15 世紀代と推定できる。分析の結果、被葬者は壮年から熟年の女性である。



第 401 図 第 3 号墓坑実測図

第4号墓坑 (第402図 PL54)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE9b3区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第40・41号竪穴建物跡, 第18号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.09m, 短軸0.78mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-9°-Wである。深さは14cmで, 壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋葬時に埋め戻されている。

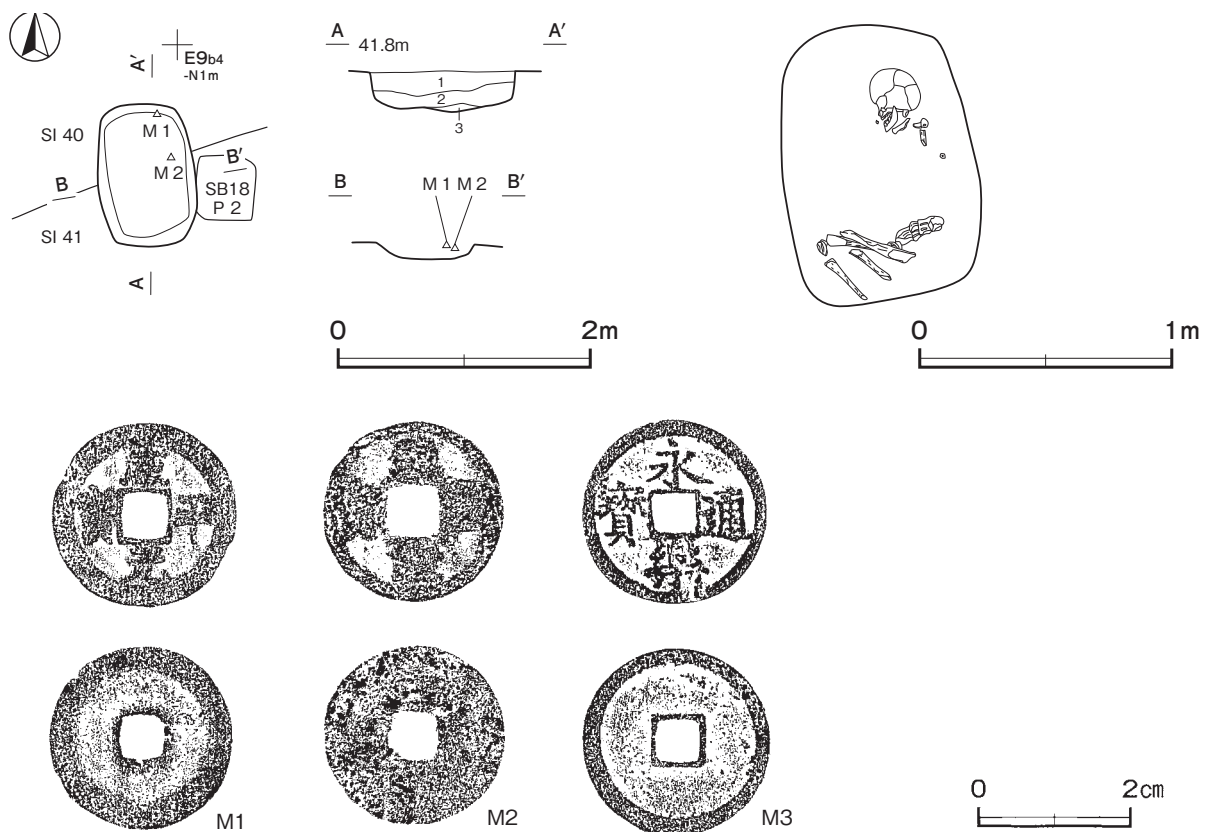
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

- 3 暗褐色 ロームブロック少量

埋葬及び遺物出土状況 直葬, 横臥屈葬で, 東半部の底面に埋葬されている。出土した人骨についての詳細は, 付章を参照されたい。出土遺物は, 銭貨3点(咸平元寶, 永樂通寶, 不明)で, 頭骨付近から出土していることから, 副葬品と考えられる。

所見 時期は, 出土遺物から15世紀代に比定できる。分析の結果, 被葬者は壮年後半の男性と推定される。



第402図 第4号墓坑・出土遺物実測図

第4号墓坑出土遺物観察表 (第402図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	咸平元寶	2.4	0.5	0.1	2.77	銅	998	北宋銭	覆土上層	PL110
M2	不明	2.4	0.5	0.1	2.63	銅	-	北宋銭。	覆土上層	
M3	永樂通寶	2.4	0.5	0.1	2.97	銅	1408	明銭	覆土中	PL110

第5号墓坑（第403図 PL54）

調査年度 平成26年度

位置 調査区中央部のD6c7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径1.14m、短径0.87mの楕円形で、長径方向はN-3°-Eである。深さは20cmで、壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

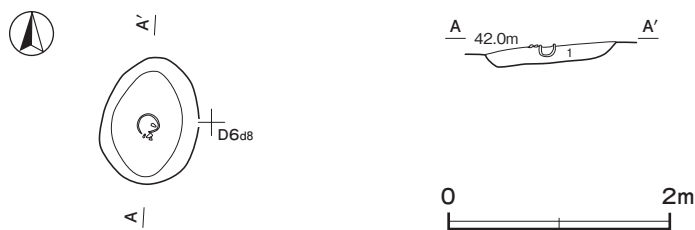
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋葬時に埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

埋葬及び遺物出土状況 中央部の覆土下層から頭骨や歯が出土しているが、埋葬状況は不明である。人骨についての詳細は、付章を参照されたい。

所見 時期は、周辺の遺構配置から、15～16世紀と推定できる。分析の結果、被葬者は少児であるが、性別は不明である。



第403図 第5号墓坑実測図

第6号墓坑（第404図 PL54）

調査年度 平成27年度

位置 調査区中央部のE4b8区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから、短軸は0.80mで、長軸は1.57mしか確認できなかった。東壁が歪んだ長方形と推定でき、長軸方向はN-25°-Wである。深さは54cmで、壁は直立している。底面はほぼ平坦である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋葬時に埋め戻されている。

土層解説

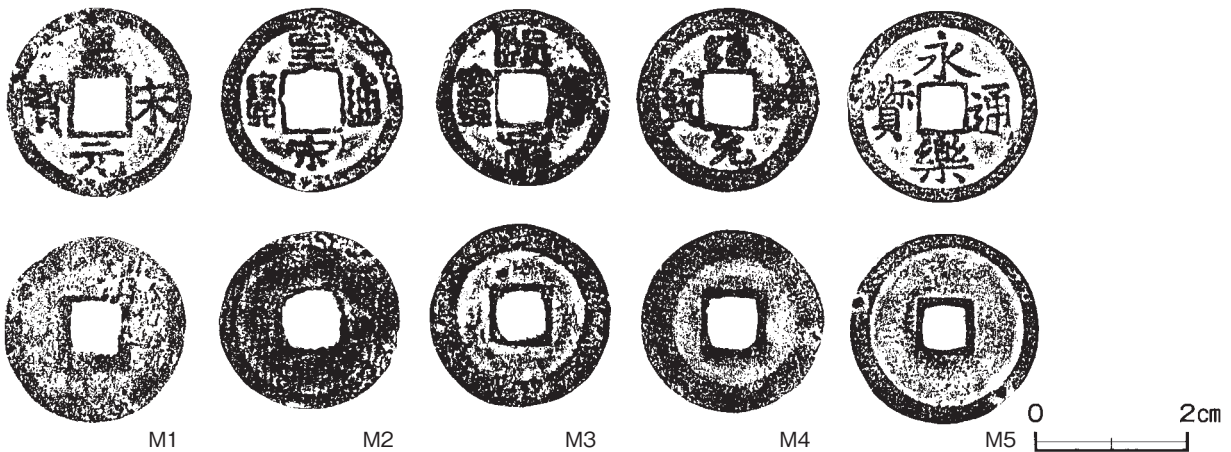
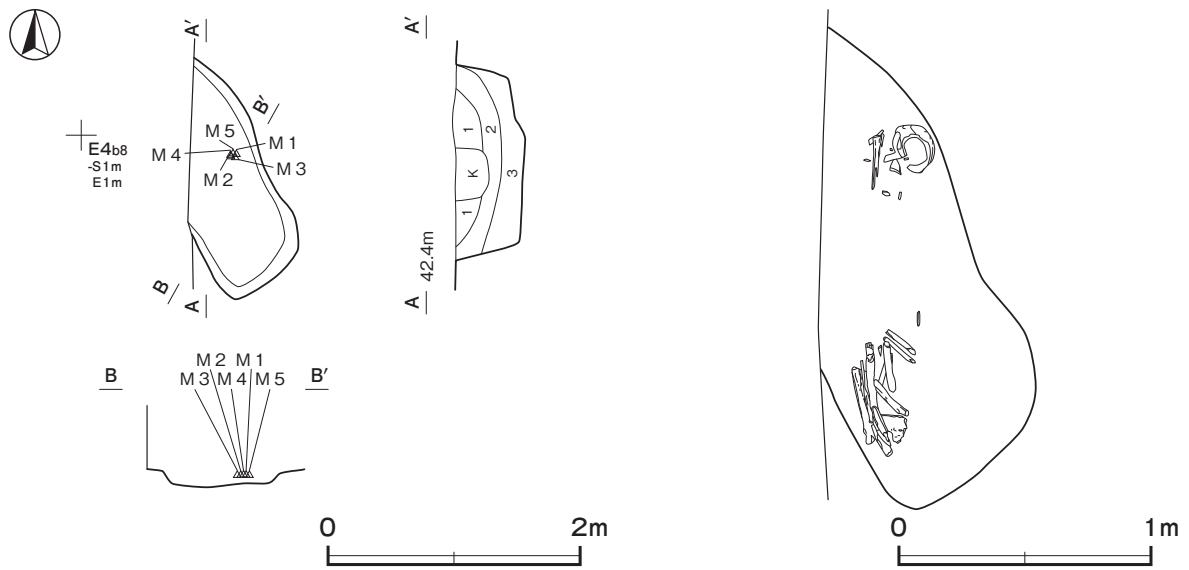
1 黒色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック中量

2 黒褐色 ロームブロック中量

埋葬及び遺物出土状況 頭骨や大腿骨などが、北東部と南西部の底面及び覆土下層から出土しており、出土状況から直葬、横臥屈葬の可能性がある。出土した人骨についての詳細は、付章を参照されたい。出土遺物は、銭貨5点（皇宋元寶、皇宋通寶、熙寧元寶、紹元聖寶、永樂通寶）が頭骨付近にまとまって出土していることから、副葬品と考えられる。

所見 時期は、出土遺物から15世紀代に比定できる。分析の結果、被葬者は青年の男性と推定される。



第 404 図 第 6 号墓坑・出土遺物実測図

第 6 号墓坑出土遺物観察表 (第 404 図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M 1	皇宋元寶	2.4	0.6	0.1	3.63	銅	960	南宋銭	覆土下層	PL110
M 2	皇宋通寶	2.4	0.7	0.1	3.97	銅	1039	南宋銭	覆土下層	PL110
M 3	熙寧元寶	2.4	0.6	0.1	3.03	銅	1068	北宋銭 篆書体	覆土下層	PL110
M 4	紹元聖寶	2.4	0.7	0.1	3.53	銅	1094	北宋銭 行書体	覆土下層	PL110
M 5	永樂通寶	2.5	0.6	0.1	3.30	銅	1408	明銭	覆土下層	

第 7 号墓坑 (第 405 図)

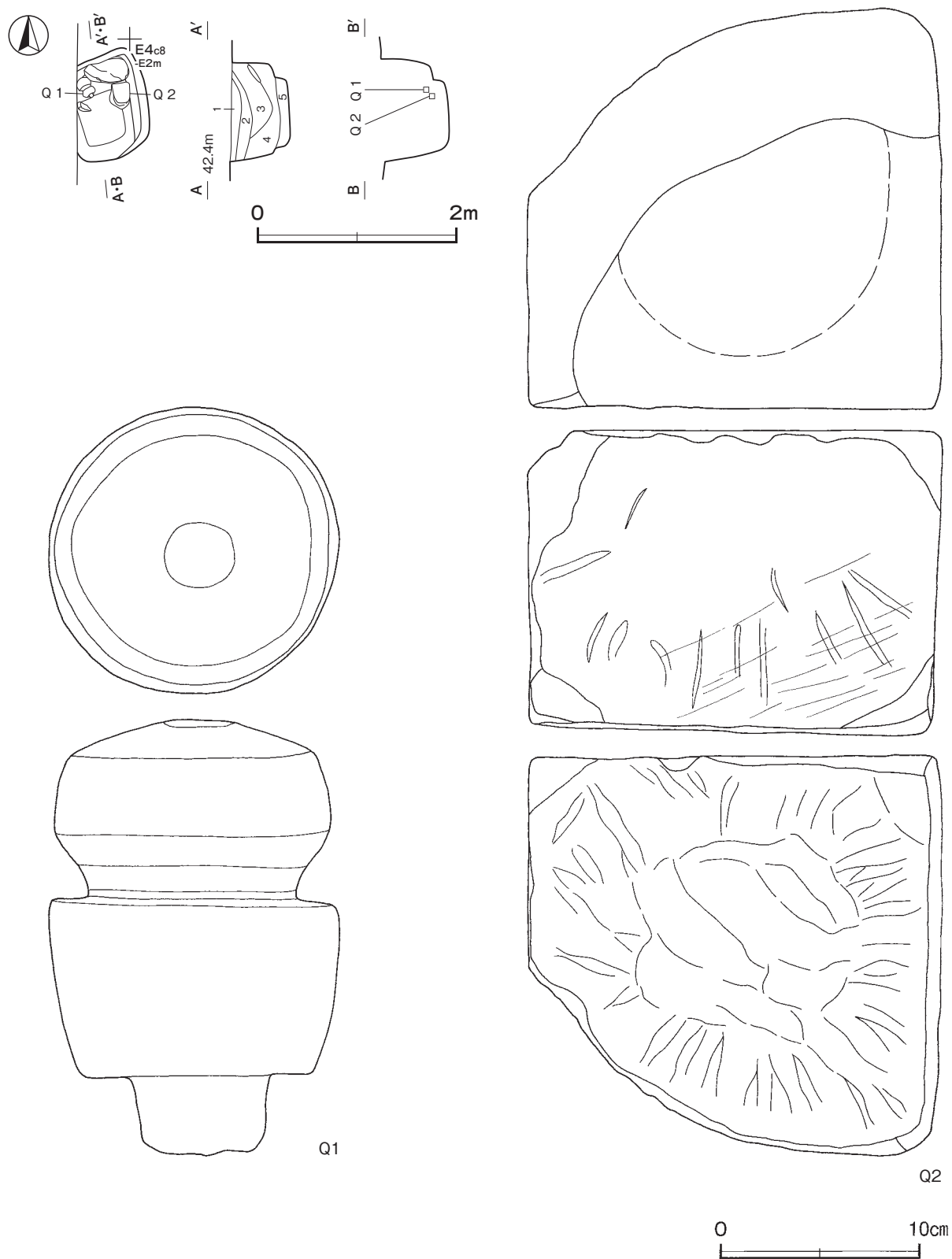
調査年度 平成 27 年度

位置 調査区中央部の E 4 c8 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 1 号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているが, 長軸 0.90 m, 短軸 0.58 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 10° - W である。深さは 52cm で, 壁は直立している。底面は平坦である。当跡と重複して, 一辺が 1.00 m,

深さは50cmの土坑を確認した。壁は直立し、底面はほぼ平坦である。下位から五輪塔の一部が出土したことから、後世に墓坑に伴う構築物を廃棄するために掘り込まれた土坑と考えられる。



第405図 第7号墓坑・出土遺物実測図

覆土 5層に分層できる。第5層はロームブロックが含まれていることから、埋葬時の埋土、第1～4層は、断面形状や堆積状況から、五輪塔を廃棄した際の埋め土と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 | |

埋葬及び遺物出土状況 人骨片が第5層から出土しているが、細片であることから部位や埋葬状況は不明である。石製品2点（五輪塔）が、第1～4層の北部から出土している。

所見 時期は、出土遺物から16世紀後半に比定できる。

第7号墓坑出土遺物観察表（第405図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	五輪塔	(22.0)	14.6	14.3	(4.650)	凝灰岩	空風輪 上部端部 全面削り・研磨調整 風輪部断面台形、くびれ部断面くの字状	第1～4層	PL107
Q2	五輪塔	14.5	23.0	(15.7)	(9.790)	凝灰岩	地輪 隅部一部欠損 上面・側面削り・研磨調整、上面に石材の組み合わせ痕 下面ノミ状工具による加工を残す	第1～4層	PL107

表15 鎌倉・室町時代墓坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	埋葬状況	被葬者の特徴	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)							
1	E 10a4	N - 5° - E	長方形	1.12 × 0.93	40	有段直立	平坦	人為	横臥屈葬直葬	壮年後半の男性	人骨	第1号段切状遺構→本跡
2	D 9i9	N - 12° - W	隅丸長方形	1.03 × 0.60	39	直立	有段	人為	仰顔屈葬直葬	壮年後半以降の男性	人骨	SI22→本跡
3	D 9i9	N - 8° - W	隅丸長方形	1.07 × 0.64	28	ほぼ直立	平坦	人為	横臥屈葬直葬	壮年から熟年の女性	人骨	SI22→本跡
4	E 9b3	N - 9° - W	隅丸長方形	1.09 × 0.78	14	ほぼ直立	平坦	人為	横臥屈葬直葬	壮年後半の男性	銭貨、人骨	SI40・41・SB18→本跡
5	D 6c7	N - 3° - E	楕円形	1.14 × 0.87	20	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	不明	小児性別不明	人骨	
6	E 4b8	N - 25° - W	[長方形]	(1.57) × 0.80	54	直立	ほぼ平坦	人為	横臥屈葬直葬	青年男性	銭貨、人骨	TM 1→本跡
7	E 4c8	N - 10° - W	隅丸長方形	0.90 × (0.58)	52	直立	平坦	人為	不明	-	石製品	TM 1→本跡

(5) 柱穴列

第2号柱穴列（第406図）

調査年度 平成27年度

位置 調査区中央部のD 5 b6～D 5 c7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第12号溝跡を掘り込んでいる。

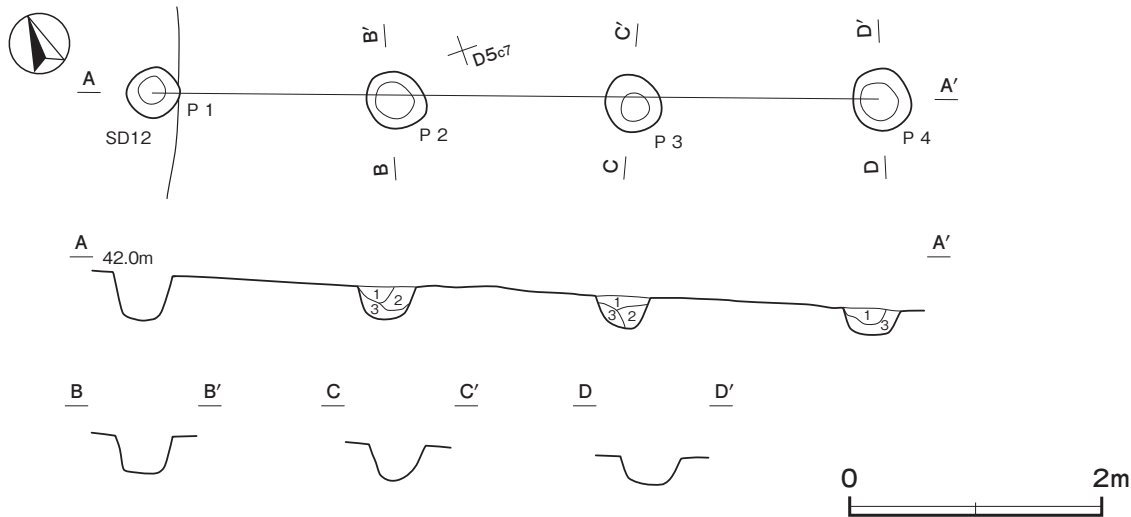
規模と形状 東西方向6.0mの間に4か所の柱穴が配され、配列方向はN - 64° - Wである。柱間寸法は、1.8～2.1m（6～7尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径0.42～0.49m、短径0.40～0.46mである。深さは20～35cmで、掘方の壁は直立もしくはほぼ直立している。第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土である。

柱穴土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 灰褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | |

所見 時期は、第12号溝跡との重複関係から16世紀後半と考えられる。性格は、第17号掘立柱建物跡の桁行方向にほぼ並行していることから、第17号掘立柱建物に付随する堀跡と考えられる。



第 406 図 第 2 号柱穴列実測図

(6) 道路跡

第 1 号道路跡 (第 407 図 PL52)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区中央部の D 7 d2 ~ D 7 g3 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 4 号溝跡を掘り込み, 第 3 号溝, 第 402 号土坑, 第 9 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北端部は調査区域外に延び, 南端部は後世の耕作などによって攪乱を受け消滅していることから, 長さは 14.45 m しか確認できなかった。D 7 g2 区から北方向 (N - 0°) にほぼ直線状に延び, 幅は 0.87 ~ 1.94 m である。硬化面は確認できなかったが, 確認面は南に向かって緩やかに低くなっている。

波板状凹凸 確認した範囲の全域で波板状の凹凸 18 か所を確認した。平面形は, 道路の延長方向と直交する長楕円形で, 長さ 0.78 ~ 1.82 m, 幅 0.40 ~ 0.82 m, 深さは 25cm ほどである。掘り込みは, 5 ~ 20cm ほどの間隔で配置されている。覆土は単一層で, 埋土が突き固められている。性格は, 覆土が固く締まっていることから, 路面の補修や強化が考えられる。また, 掘り込みの間合いはほぼ平坦で, 第 2 層で構築されているが, 第 1 層ほど締まっていないことから, 補修以前の構築土の下層部分にあたるものと考えられる。

波板状凹凸土層解説

- 1 灰黄褐色 ロームブロック少量 (引き締まっている) 2 黄褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量

所見 時期は, 周辺の遺構配置や重複関係から, 15 世紀前半と推定できる。調査区域南側に所在する小野崎城跡に向かって延びていることから, 内郭と外郭を結ぶ道路跡の可能性はある。

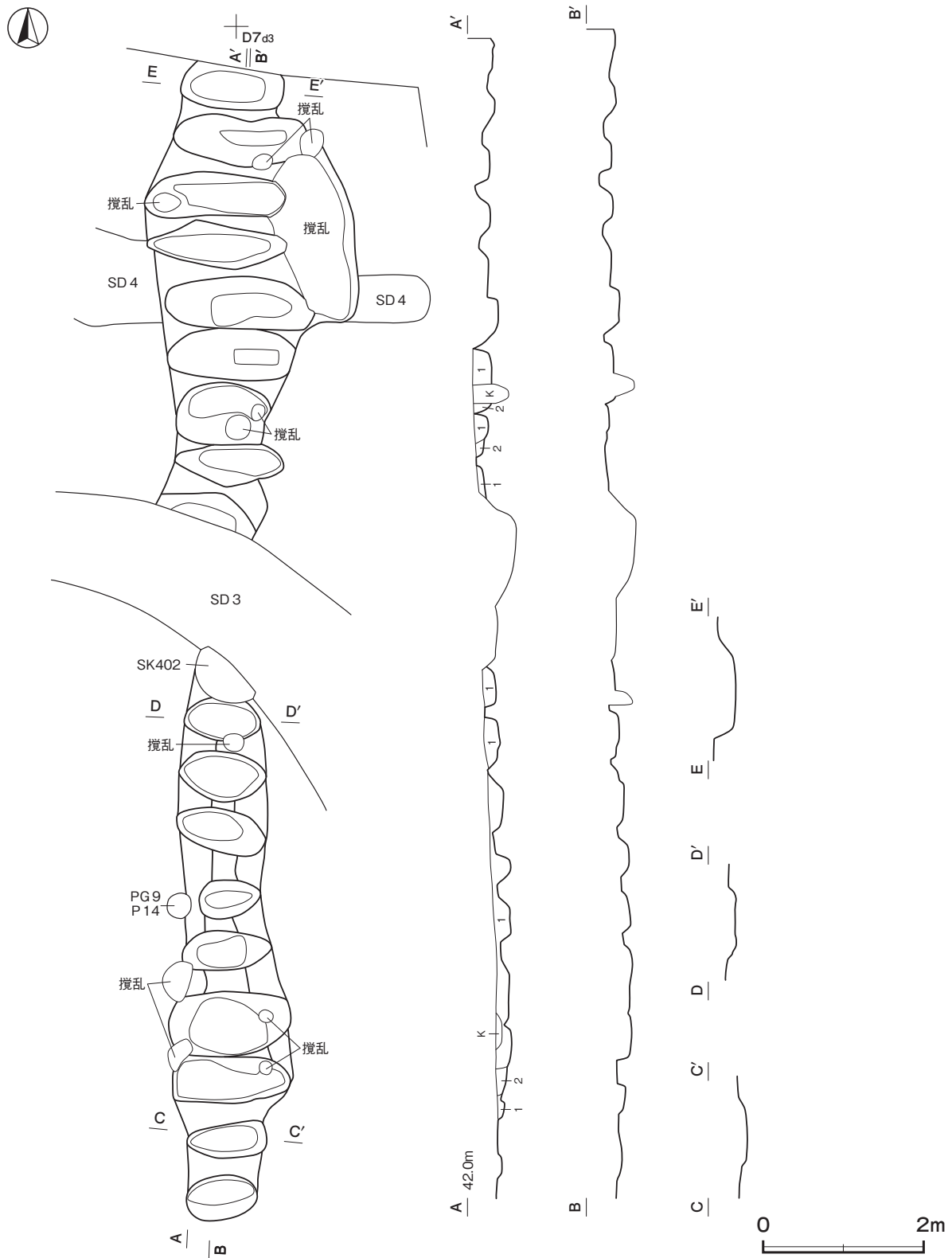
第 3 号道路跡 (第 408 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の E 9 g8 ~ E10h1 区, 標高 42 m ほどの平坦面から緩斜面にかけて位置している。

重複関係 第 1 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東端部及び西端部が後世の耕作などにより消滅していることから, 長さは 7.50 m しか確認でき



第 407 图 第 1 号道路迹实测图

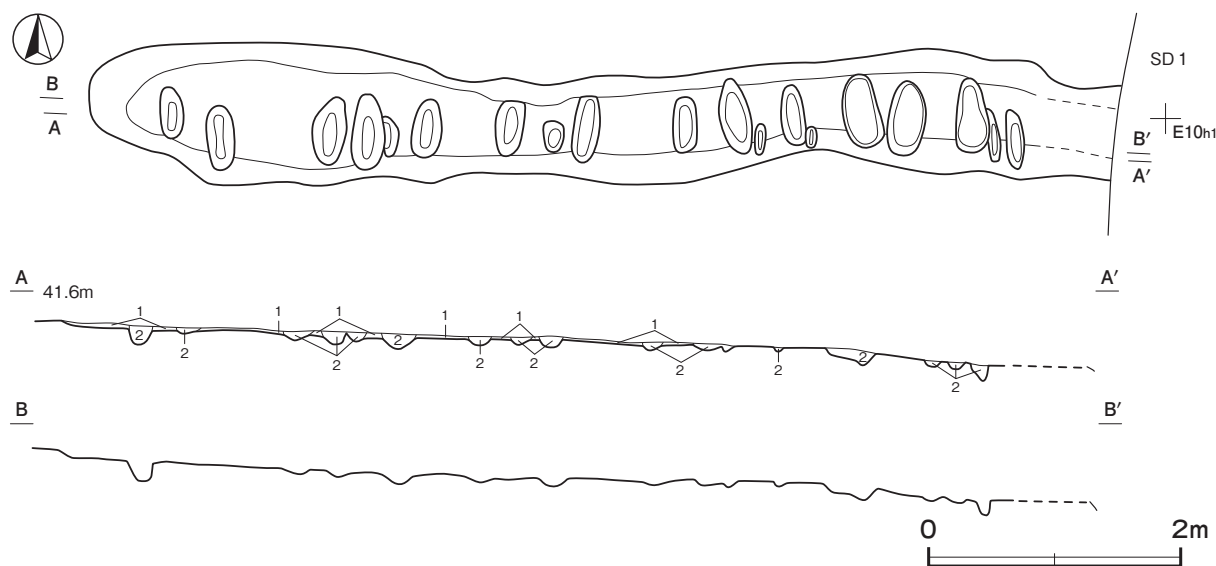
なかった。E 9g8区から東方向（N - 85° - E）にほぼ直線状に延び、幅は0.70～1.12 mである。硬化面は確認できなかったが、確認面は東に向かって緩やかに低くなっている。

波板状凹凸 確認した範囲の全域で波板状の凹凸19か所を確認した。平面形は、道路の延長方向と直交する長楕円形で、長径0.14～0.60 m、短径0.08～0.28 m、深さは10cmほどである。掘り込みは、10～65cmほどの間隔で配置されている。覆土は単一層で、埋土が突き固められている。性格は、覆土が固く締まっていることから、路面の補修や強化が考えられる。また、掘り込みの間合いはほぼ平坦で、第2層で構築されているが、第1層ほど締まっていないことから、補修以前の構築土の下層部分にあたるものと考えられる。

波板状凹凸土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック少量（引き締まっている） 2 黒褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、道路を下った先には段切状遺構の平場や第1号墓坑が位置していることから、15世紀代と推定できる。



第408図 第3号道路跡実測図

表16 鎌倉・室町時代道路跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模		硬化面	波板凹凸			側溝		主な出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)		長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	条数	覆土		
1	D 7d2～D 7g3	N - 0°	直線状	(14.45)	0.87～1.94	-	0.78～1.82	0.40～0.82	25	-	-		SD 4→本跡→SD 3, SK402, PG 9
3	E 9g8～E10h1	N - 85° - E	直線状	(7.50)	0.70～1.12	-	0.14～0.60	0.08～0.28	10	-	-		本跡→SD 1

(7) 溝跡

第3号溝跡（第409図・付図 PL52・53）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD 6d5～D 7j3区、標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号道路跡、第6号溝跡を掘り込み、第9号溝、第274・275・294・296・346・359・360・402号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びていることから、長さ 48.04m しか確認できなかった。D 6 d5 区から東方向（N - 100° - E）へ延び、D 7 e3 区からは南方向（N - 150° - E）に屈曲し、L 字状に延びている。上幅 0.60 ~ 1.60 m、下幅 0.20 ~ 0.50 m、深さ 20 ~ 33cm で、断面形は台形もしくは有段である。壁は外傾し、底面は南部へ向かって低くなっている。

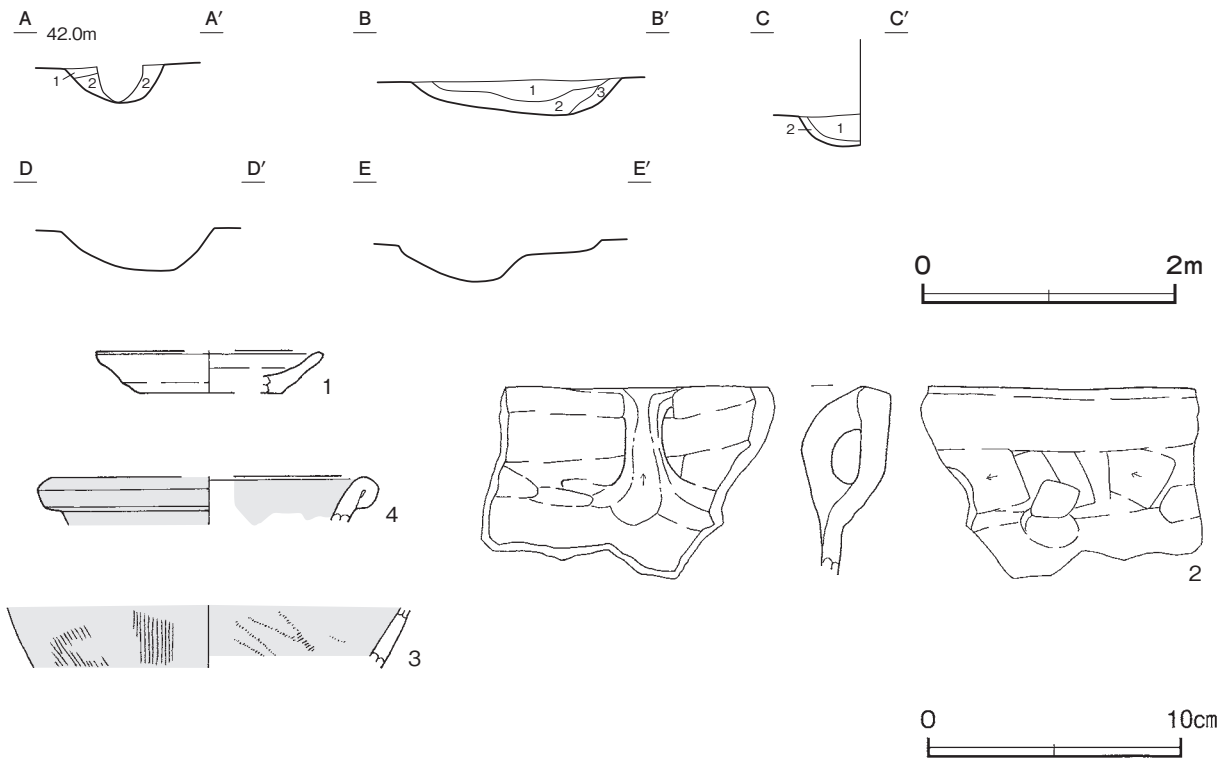
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片 8 点（皿 1、鉢 2、内耳鍋 5）、陶器片 10 点（壺類 1、鉢 3、甕類 6）、磁器片 1 点（碗）が、出土している。全域の覆土中から出土していることから、破損した土器が投棄されたと考えられる。3・4 は 12 世紀後葉から 13 世紀前葉のものであることから、流入や破損した伝世品の投棄と考えられる。

所見 時期は出土土器から、15 世紀後葉に比定できる。性格は、区画と考えられる。



第 409 図 第 3 号溝跡・出土遺物実測図

第 3 号溝跡出土遺物観察表（第 409 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	[9.1]	1.7	[5.7]	長石・石英・雲母・針状物質	灰褐色	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	5% 二次焼成
2	土師質土器	内耳鍋	-	(8.4)	-	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい黄褐色	普通	口縁部ロクロナデ後横・斜位のナデ 内耳部貼付	覆土中	10% 外面煤付着
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
3	磁器	碗	-	(2.5)	-	緻密・灰白	外面縦・斜位の櫛目文 内面篆刻もしくは押型による蓮弁文	青磁釉	同安窯	覆土中	5% PL100
4	陶器	壺類	[12.6]	(1.9)	-	緻密・灰白	口縁部折り返し	灰釉	渥美産	覆土中	5% PL100

第4号溝跡（第410図・付図 PL53）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD6d8～D7d3区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第6号溝跡を掘り込み、第1号道路、第319・345号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東側が調査区域外に延びていることから、長さは21.26mしか確認できなかった。D7d3区から西方向（N-82°-W）へ直線状に延びている。上幅0.58～1.26m、下幅0.26～0.56m、深さ8～16cmで、断面形は浅い台形である。壁は外傾し、底面は平坦である。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

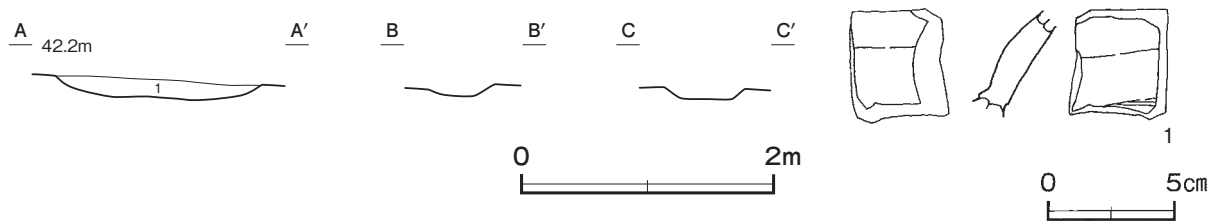
土層解説

1 にぶい黄褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片1点（鉢）のほか、縄文土器片9点（深鉢）、土師器片4点（坏1、甕類3）が出土している。

覆土中から出土していることから、投棄されたと考えられる。

所見 時期は出土土器や重複関係から、15世紀前葉以前の室町時代に比定できる。性格は、区画と考えられる。



第410図 第4号溝跡・出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表（第410図）

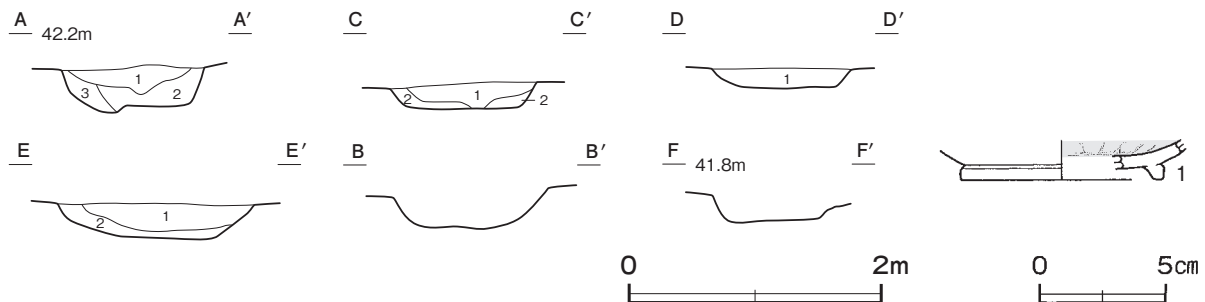
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	鉢	-	(3.8)	-	緻密・灰褐	体部ロクロナデ	-	常滑産	覆土中	10%

第9号溝跡（第411図・付図）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD6b7～D6h7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第3号溝跡を掘り込み、第408号土坑に掘り込まれている。



第411図 第9号溝跡・出土遺物実測図

規模と形状 北端部および南端部が調査区域外に延びていることから、長さは20.42mしか確認できなかった。D 6 h7区から北方向（N - 12° - W）へ直線状に延びている。上幅1.06～1.42 m，下幅0.52～0.80 m，深さは16～35cmで，断面形は台形である。壁は外傾し，底面は平坦で，南方向へ緩やかに低くなっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片1点（皿）が，覆土中から出土している。

所見 時期は出土土器から，16世紀末葉から17世紀初頭に比定できる。性格は，区画と考えられる。

第9号溝跡出土遺物観察表（第411図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	皿	-	(16)	[8.0]	緻密・にぶい黄橙	内面押型による花卉 菊皿	灰釉	瀬戸・美濃産	覆土中	10%

第12号溝跡（第412図・付図）

調査年度 平成27年度

位置 調査区中央部のC 5 j6～D 5 f3区，標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

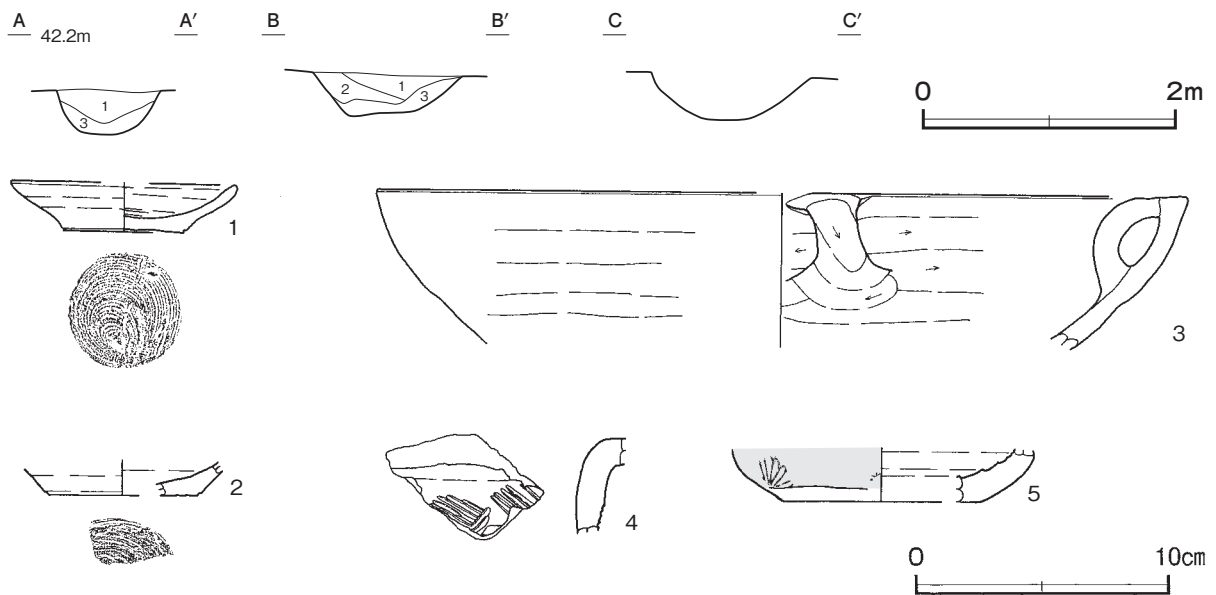
重複関係 第96・110号竪穴建物跡を掘り込み，第2号柱穴列，第459号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端部および南端部が調査区域外に延びていることから，長さは27.06mしか確認できなかった。D 5 f3区から北方向（N - 23° - E）へほぼ直線状に延び，上幅0.90～1.24 m，下幅0.30～0.62 mで，深さは35cmである。断面形は台形である。壁は外傾し，底面は平坦で，南方向へ緩やかに低くなっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれることから，埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量



第412図 第12号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片6点（皿3，鉢類1，内耳鍋2），瓦質土器片2点（鉢類），陶器片1点（香炉_ナ），自然遺物3点（馬骨片）が，全域に散在している。5は15世紀代のものであることから，流入や破損した伝世品の投棄と考えられる。

所見 時期は，出土土器から16世紀前半に比定できる。

第12号溝跡出土遺物観察表（第412図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	[8.8]	1.9	4.7	長石・石英・雲母・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	60% PL99
2	土師質土器	皿	-	(1.3)	[5.8]	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	体部ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	10%
3	土師質土器	内耳鍋	[32.0]	(6.6)	-	長石・石英・雲母・針状物質	明赤褐	普通	体部外面縦・横位のナデ 内面横位のナデ 内耳部貼付	覆土中	10% PL100 煤付着
4	瓦質土器	鉢類	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母・針状物質	黒褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ 外面ヘラ描文	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
5	陶器	香炉 _ナ	-	(2.1)	[7.9]	緻密・にぶい褐	外面下端部菊花文	鉄釉	瀬戸・美濃産	覆土中	10% PL100

第16号溝跡（第413図・付図 PL53）

調査年度 平成28年度

位置 調査区中央部のC4g5～D4c5区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第135・138号竪穴建物跡を掘り込み，第15・21号溝，第600・607・625号土坑に掘り込まれている。

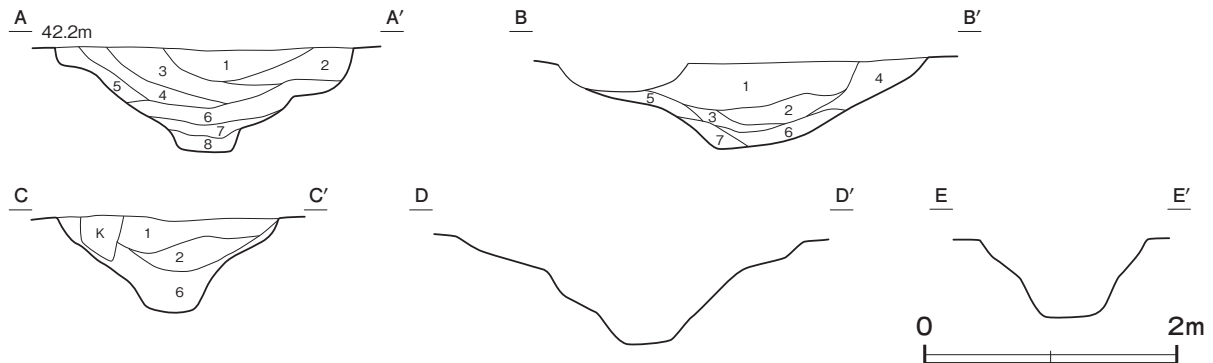
規模と形状 北部及び南部が調査区域外に延びていることから，長さ20.84mしか確認できなかった。D4c5区から北方向（N-2°-E）へ直線状に延びている。上幅1.08～2.75m，下幅0.20～0.60m，深さ65～80cmで，断面形は葉研状である。壁はほぼ直立の後外傾し，底面はほぼ平坦で，南方向へ緩やかに低くなっている。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化物微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量 |

所見 時期は，重複関係や溝跡の断面形状から，15世紀後半から16世紀前半と推定できる。



第413図 第16号溝跡実測図

表 17 鎌倉・室町時代溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
3	D 6 d5 ~ D 7 j3	N - 100° - E N - 150° - E	L字状	(48.04)	0.60~1.60	0.20~0.50	20 ~ 33	台形 有段	外傾	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	SF 1, SD 6 → 本跡 → SD 9, SK274・275・294・296・346・359・360・402
4	D 6 d8 ~ D 7 d3	N - 82° - W	直線状	(21.26)	0.58~1.26	0.26~0.56	8 ~ 16	台形	外傾	人為	陶器	SD 6 → 本跡 → SF 1, SK319・345
9	D 6 b7 ~ D 6 h7	N - 12° - W	直線状	(20.42)	1.06~1.42	0.52~0.80	16~35	台形	外傾	人為	陶器	SD 3 → 本跡 → SK408
12	C 5 j6 ~ D 5 f3	N - 23° - E	直線状	(27.06)	0.90~1.24	0.30~0.62	35	台形	外傾	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器	SI96・110 → 本跡 → SA 2, SK459
16	C 4 g5 ~ D 4 c5	N - 2° - E	直線状	(20.84)	1.08~2.75	0.20~0.60	65~80	薬研状	外傾	人為	-	SI135・138 → 本跡 → SD15・21, SK600・607・625

(8) 段切状遺構

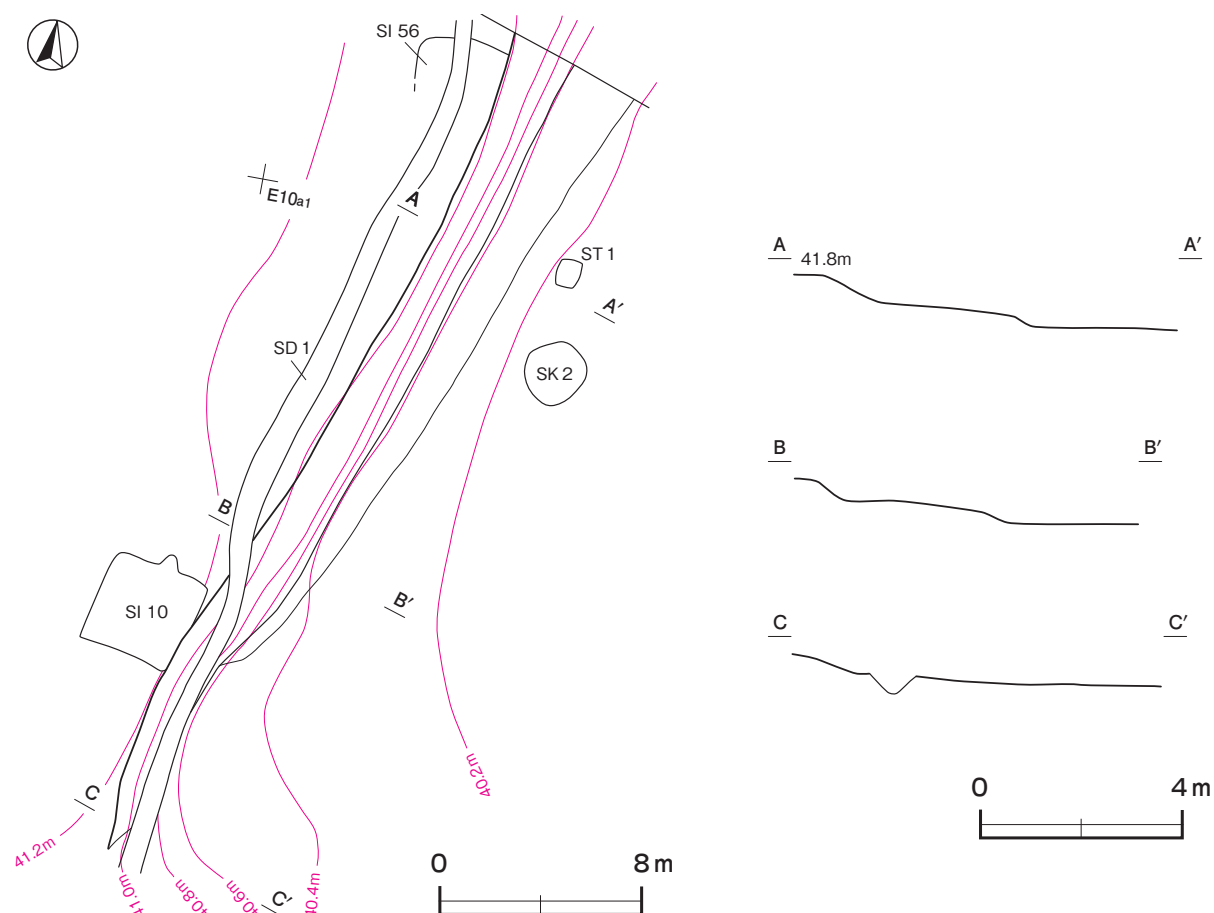
第 1 号段切状遺構 (第 414 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査区東部の D10h3 ~ E 9 g0 区, 標高 42 m ほどの平坦面から緩斜面にかけて位置している。

重複関係 第 10・18・20・21・56 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 1 号溝, 第 1 号墓坑, 第 2 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから, 長さは 36.24 m しか確認できなかった。E 9 g0 区から北方向 (N - 10° - E) にほぼ直線状に延び, E10e1 区からは北東方向 (N - 40° - E) に屈曲し, さらに



第 414 図 第 1 号段切状遺構実測図

E10c2区からは北方向(N-8°-E)にほぼ直線状に延びている。法上から法下までの幅は0.3~3.5mで、法は中位がほぼ平坦、上位と下位は外傾している。法は北部が高く、南部に向かって徐々に低くなっている。法下には平場が形成されているが、調査区域外に延びていることから、南北は34.80m、東西は6.20mしか確認できなかった。確認できた面積は約215㎡で、平場は南西部の第3号道路跡に向かって緩やかに上っている。

所見 時期は、第3号道路跡に向かって法が低くなり、平場が上がっていくことから、第3号道路跡の構築とほぼ同時期の15世紀代と考えられる。

(9) 土坑

今回の調査で、当時代の土坑16基を確認した。形状や遺物出土状況などから特徴的な土坑5基については、文章と実測図、遺物観察表で解説する。その他の11基については、実測図、観察表を掲載する。

第370号土坑 (第415図)

調査年度 平成26年度

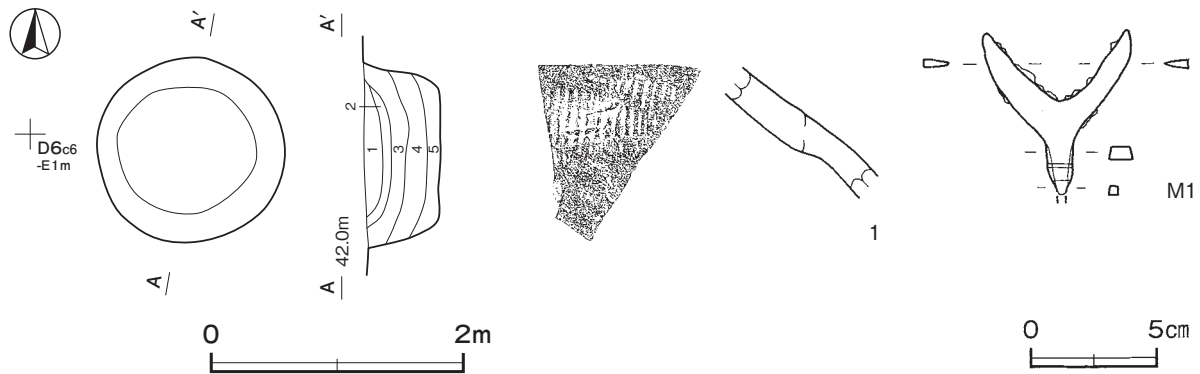
位置 調査区中央部のD6c6区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径1.50m、短径1.48mの円形である。深さは60cmで、壁は外傾している。底面はほぼ平坦である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量
- 2 灰黄褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量



第415図 第370号土坑・出土遺物実測図

第370号土坑出土遺物観察表 (第415図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	甕	-	-	-	緻密・にぶい赤褐	体部ロクロナデ 外面縦位の押印文	長石釉。	常滑産	覆土中	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M1	鐵	(6.5)	5.8	0.3~0.5	(20.41)	鐵	雁股鐵 鐵身部Y字状 鐵先部断面三角形 頸部断面台形 茎部断面四角形		覆土中	PL108	

遺物出土状況 土師質土器片 12 点（皿 11，鉢 1），陶器片 2 点（甕）金属製品 1 点（鎌）のほか，縄文土器片 4 点（深鉢），土師器片 6 点（坏 3，椀 1，鉢類 1，甕類 1）が覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器が細片であることから図化できないが，13 世紀前葉と推定できる。近接する第 371 号土坑と形状は類似するが，性格は不明である。

第 371 号土坑（第 416 図）

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 6 b5 区，標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径 2.05 m，短径 2.02 m の円形と推定される。深さは 65cm で，壁は外傾している。底面はほぼ平坦で，中央部に径 40cm ほどの硬化面を確認したが，性格は不明である。

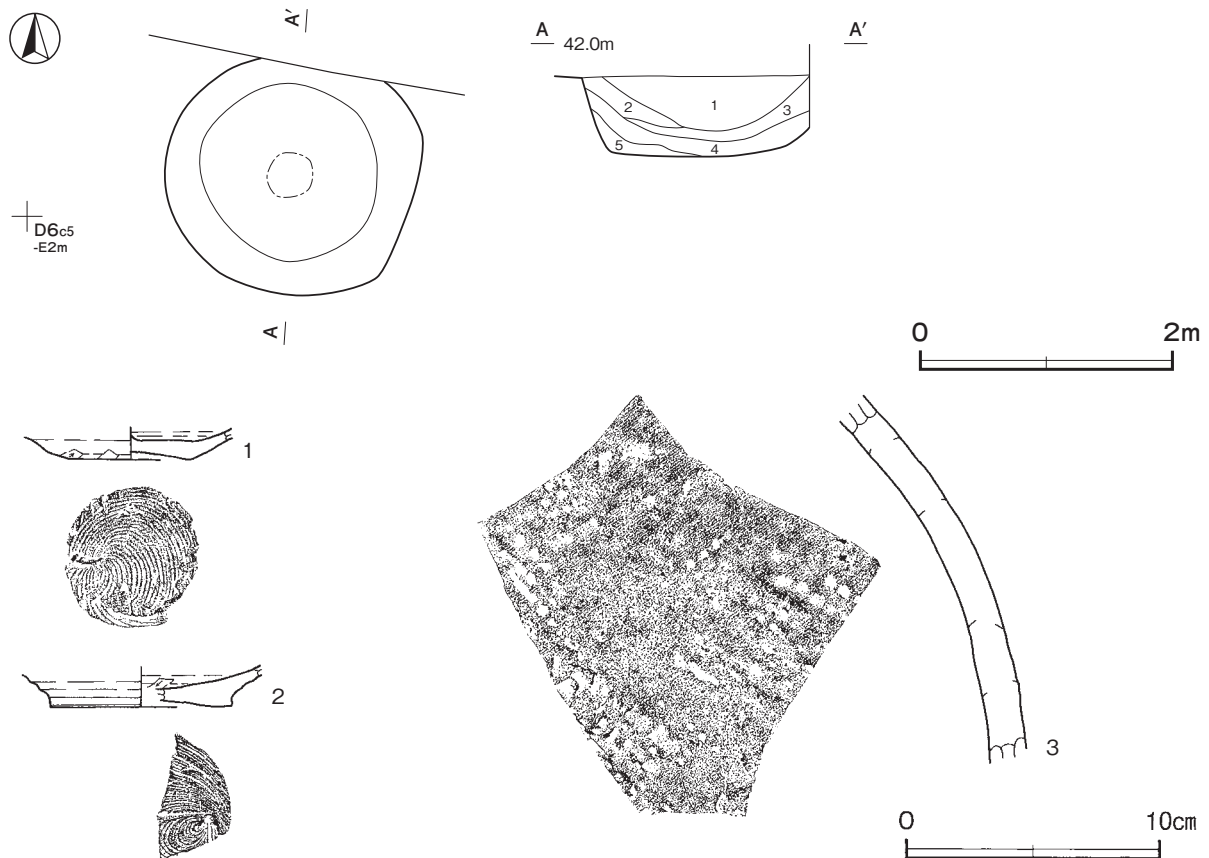
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1 灰黄褐色 焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 灰黄褐色 炭化物少量，ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 土師質土器片 2 点（皿），陶器片 1 点（甕類）のほか，土師器片 2 点（椀）が覆土中から出土している。

所見 時期は出土土器から，13 世紀前葉と考えられる。近接する第 370 号土坑と形状は類似するが，性格や中央部の硬化面については不明である。



第 416 図 第 371 号土坑・出土遺物実測図

第 371 号土坑出土遺物観察表 (第 416 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	-	(13)	5.0	長石・石英・雲母・針状物質	明褐色	普通	体部ロクロナデ 外面下端部斜位のナデ 底部回転糸切り	覆土中	10%
2	土師質土器	皿	-	(16)	[7.2]	長石・石英・針状物質	にぶい橙	普通	体部ロクロナデ 底部外面回転糸切り 内面一方向のナデ	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
3	陶器	甕	-	-	-	緻密・オリーブ黄褐色	体部ロクロナデ 外面格子状の押印文	-	常滑産	覆土中	10% PL100 自然釉付着

第 379 号土坑 (第 417 図)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区中央部の D 6 c1 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径 1.49 m, 短径 1.08 m の不整楕円形で, 長径方向は N - 13° - W である。深さは 32cm で, 壁は外傾している。底面は段を有している。

覆土 2 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

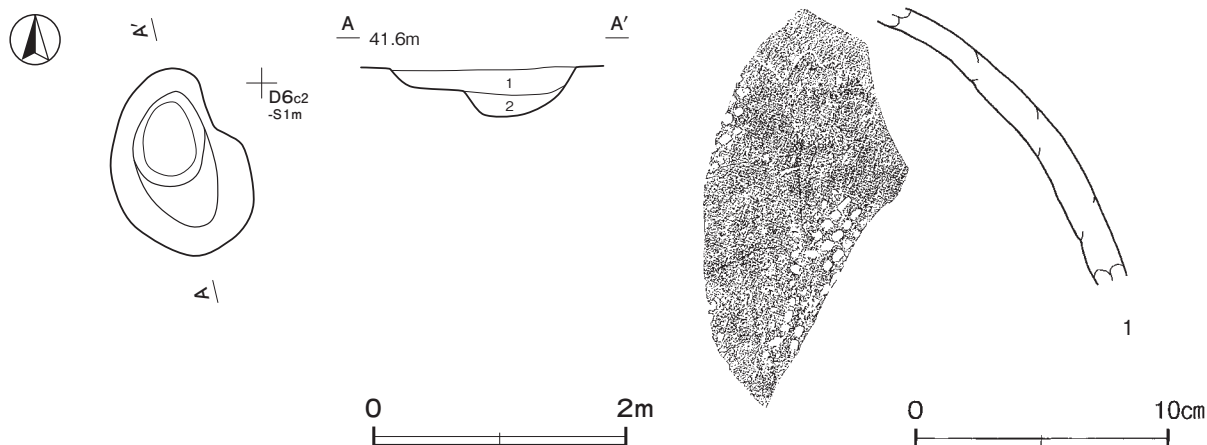
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師質土器片 3 点 (皿), 陶器片 1 点 (甕類) が覆土中から出土している

所見 時期は, 出土遺物から 13 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 417 図 第 379 号土坑・出土遺物実測図

第 379 号土坑出土遺物観察表 (第 417 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様の特征など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	甕	-	(11.0)	-	緻密・灰	体部ロクロナデ 外面格子状の押印文 施文後一部縦位のナデ	-	渥美産。	覆土中	

第 442 号土坑 (第 418 図)

調査年度 平成 27 年度

位置 調査区中央部の D 5 e4 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径 0.40 m, 短径 0.38 m の円形である。深さは 47cm で, 壁は直立および外傾している。底面は

皿状で、中央部に径10cmの柱の当たりを確認した。

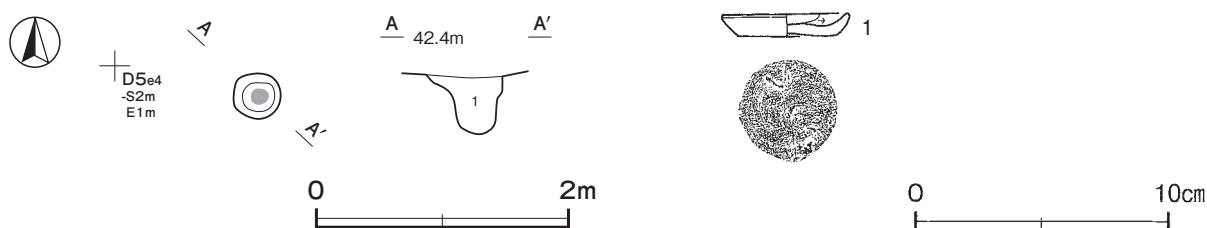
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）のほか、縄文土器片1点（深鉢），土師器片2点（甕類）が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から12世紀後葉と推定できる。性格は柱穴と考えられるが、掘立柱建物跡などの配列は確認できなかった。



第418図 第442号土坑・出土遺物実測図

第442号土坑出土遺物観察表（第418図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	4.9	0.9	4.0	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	90%

第599号土坑（第419図）

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC4g3区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第2B号道路，第603・604・613号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第2B号道路などに掘り込まれているが，長径は1.00mで，短径は0.80mの楕円形と推定できる。長径方向はN-23°-Wである。深さは44cmで，壁は直立している。底面はほぼ平坦である。

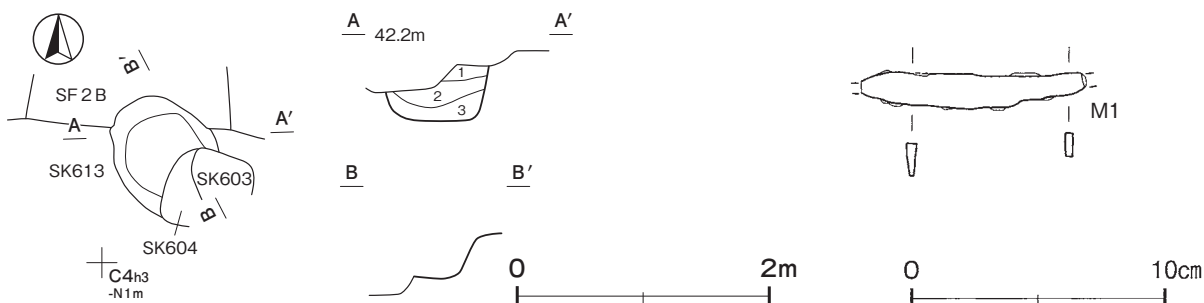
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量 3 暗褐色 ロームブロック少量，炭化物微量

2 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

遺物出土状況 金属製品1点（刀子）が覆土中から出土している。

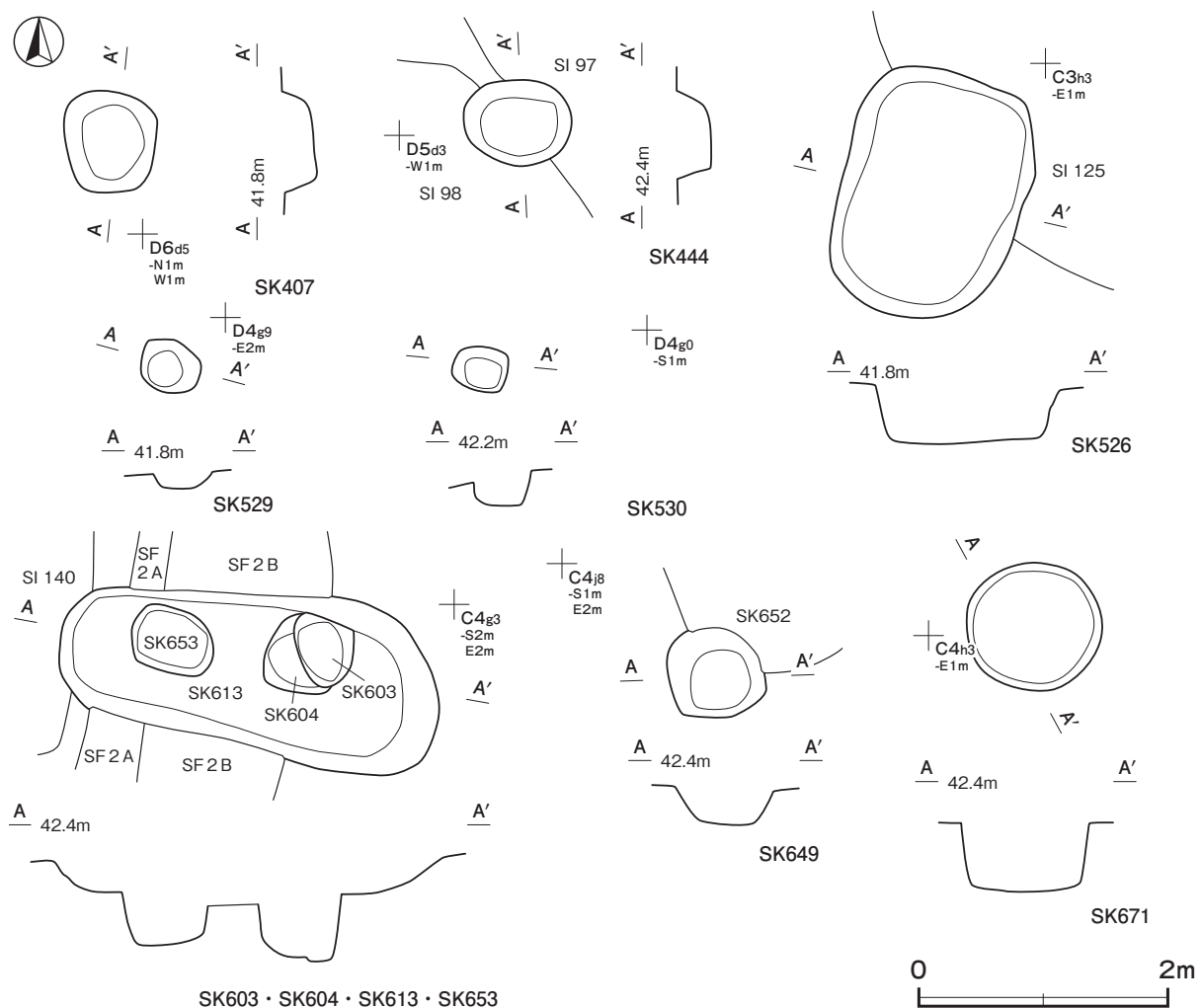


第419図 第599号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は，出土遺物や第 603 号土坑に掘り込まれていることから，16 世紀代と推定できる。性格は不明である。

第 599 号土坑出土遺物観察表（第 419 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴				出土位置	備考
							刃部先端欠損	刃部断面三角形	茎部末端欠損	茎部断面長方形		
M 1	刀子	(8.9)	1.6	0.4	(18.52)	鉄					覆土中	



第 420 図 室町時代のその他の土坑実測図

表 18 鎌倉・室町時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
370	D 6 c6	-	円形	1.50 × 1.48	60	外傾	ほぼ平坦	人為	土師質土器, 陶器, 金属製品	
371	D 6 b5	-	[円形]	2.05 × 2.02	65	外傾	ほぼ平坦	人為	土師質土器, 陶器	
379	D 6 c1	N - 13° - W	不整楕円形	1.49 × 1.08	32	外傾	有段	人為	土師質土器, 陶器	
407	D 6 c4	N - 6° - W	楕円形	0.82 × 0.71	27	外傾	平坦	人為	土師質土器	
442	D 5 e4	-	円形	0.40 × 0.38	47	直立 外傾	皿状	人為	土師質土器	
444	D 5 c3	N - 73° - W	楕円形	0.86 × 0.69	27	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	土師質土器	SI97・98 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
526	C 3 h3	N - 20° - E	楕円形	2.00 × 1.46	45	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	土師質土器	SI125, HG 1 → 本跡
529	D 4 g9	N - 78° - W	楕円形	0.48 × 0.42	15	緩斜	皿状	人為	土師質土器	
530	D 4 g9	N - 82° - W	楕円形	0.45 × 0.36	25	外傾	平坦	人為	土師質土器	
599	C 4 g3	N - 23° - W	[楕円形]	[1.00] × 0.80	44	直立	ほぼ平坦	人為	金属製品	本跡→SF 2 B, SK603・604・613
603	C 4 g3	N - 18° - W	楕円形	0.50 × 0.38	80	直立	平坦	人為	-	SK599・604・613 → 本跡→SF 2 B
604	C 4 g3	N - 15° - E	[楕円形]	0.62 × [0.50]	76	直立	皿状	人為	-	SK599・613 → 本跡→SF 2 B, SK603
613	C 4 g3	N - 78° - W	楕円形	3.10 × 1.44	30	外傾	平坦	人為	-	SI140, SK559 →本 跡→SF 2 A・B, SK603・604・613・653
649	C 4 j8	-	円形	0.84 × 0.79	28	外傾	平坦	人為	土師質土器	本跡→SK652
653	C 4 g2	N - 73° - W	楕円形	0.70 × 0.50	28	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	-	SK613 →本跡→SF 2 A・B
671	C 4 g3	-	円形	1.08 × 1.07	61	直立	平坦	人為	土師質土器	

(10) ピット群

第2号ピット群 (第421図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD 9 i4 ~ E 9 b6区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

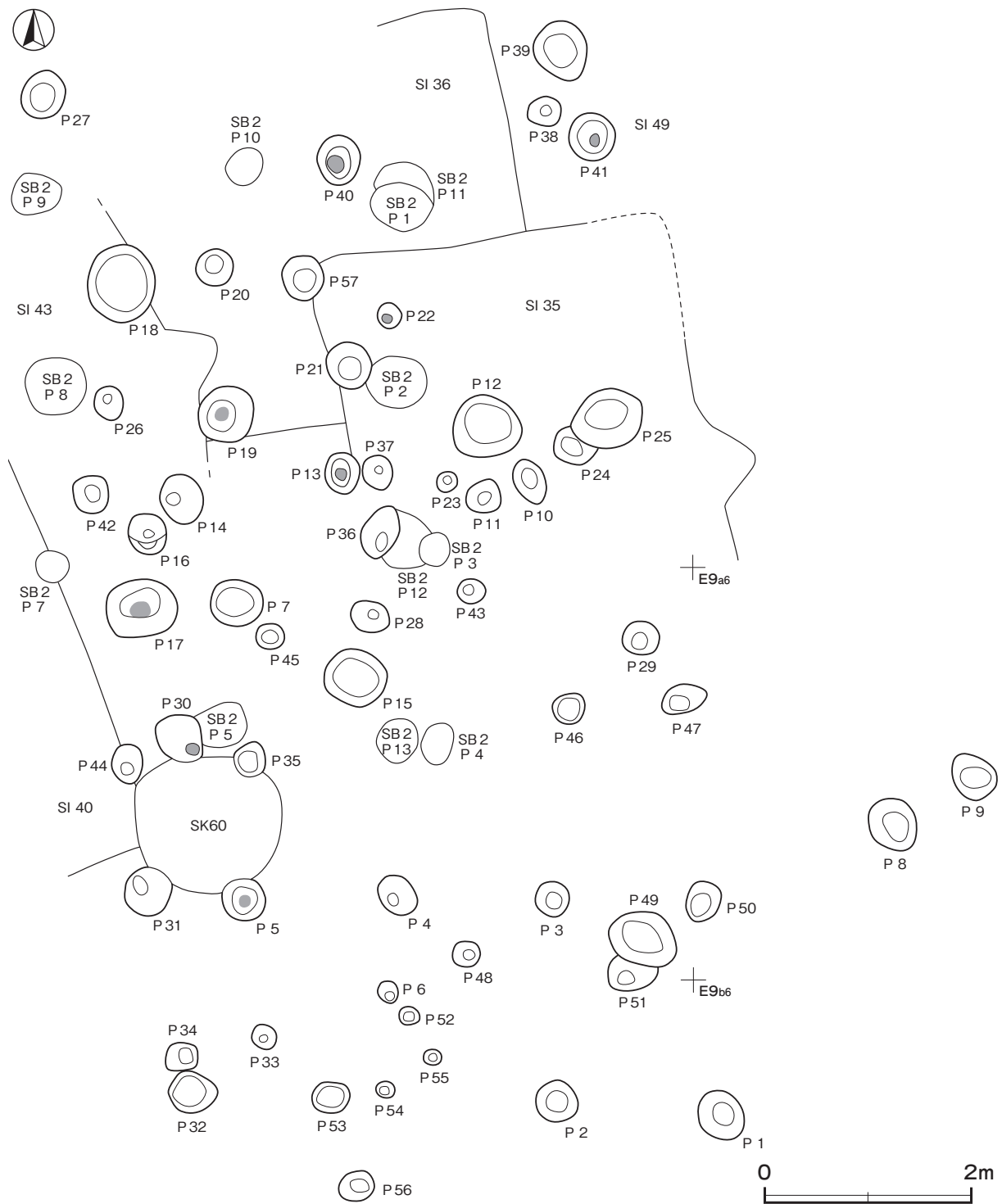
重複関係 第35・36・40・43・49号竪穴建物跡, 第2号掘立柱建物跡を掘り込み, 第60号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北14.2m, 東西9.0mの範囲に, ピット57か所を確認した。個々の形状, 計測値については, 一覧表に記載する。

所見 時期は, 第4~7号方形竪穴遺構などの周辺の遺構配置から, 15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡は想定できず, 性格は不明である。

表19 第2号ピット群計測表

番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	E 9 b6	隅丸長方形	50	42	34	21	D 9 j5	円形	45	41	32	41	D 9 i5	円形	48	46	30
2	E 9 b5	円形	42	40	13	22	D 9 j5	楕円形	26	23	63	42	D 9 j4	楕円形	36	34	10
3	E 9 a5	円形	36	34	22	23	D 9 j5	円形	20	19	26	43	E 9 a5	楕円形	26	23	31
4	E 9 a5	楕円形	41	32	28	24	D 9 j5	[楕円形]	40	(29)	13	44	E 9 a4	[楕円形]	38	(20)	28
5	E 9 a4	円形	42	41	32	25	D 9 j5	楕円形	70	57	32	45	E 9 a4	円形	35	34	16
6	E 9 b5	円形	22	21	29	26	D 9 j4	楕円形	33	29	33	46	E 9 a5	円形	41	38	19
7	E 9 a4	楕円形	50	48	29	27	D 9 i4	楕円形	48	40	50	47	E 9 a5	不整楕円形	44	28	17
8	E 9 a6	楕円形	52	44	25	28	E 9 a5	楕円形	40	30	61	48	E 9 a5	円形	38	37	39
9	E 9 a6	楕円形	48	40	25	29	E 9 a5	円形	32	31	43	49	E 9 a5	楕円形	70	54	21
10	D 9 j5	楕円形	46	30	20	30	E 9 a4	楕円形	52	40	62	50	E 9 a6	楕円形	40	32	11
11	D 9 j5	楕円形	34	30	40	31	E 9 a4	円形	48	48	42	51	E 9 a5	[楕円形]	44	(36)	23
12	D 9 j5	不整楕円形	64	60	30	32	E 9 b4	楕円形	48	37	26	52	E 9 b5	円形	20	19	31
13	D 9 j5	楕円形	40	33	28	33	E 9 b4	楕円形	37	24	47	53	E 9 b5	楕円形	38	32	15
14	D 9 j4	楕円形	49	42	34	34	E 9 b4	円形	36	34	36	54	E 9 b5	円形	19	18	15
15	E 9 a5	楕円形	58	52	50	35	E 9 a4	円形	32	30	35	55	E 9 b5	円形	17	16	15
16	D 9 j4	楕円形	40	38	68	36	D 9 j5	楕円形	52	34	70	56	E 9 b5	楕円形	35	28	27
17	E 9 a4	楕円形	70	56	31	37	D 9 j5	楕円形	33	29	13	57	D 9 j5	楕円形	45	39	32
18	D 9 j4	楕円形	76	66	13	38	D 9 i5	楕円形	33	30	21						
19	D 9 j4	円形	53	52	60	39	D 9 i5	楕円形	60	51	29						
20	D 9 j4	円形	36	36	38	40	D 9 j5	楕円形	48	42	12						



第421図 第2号ピット群実測図

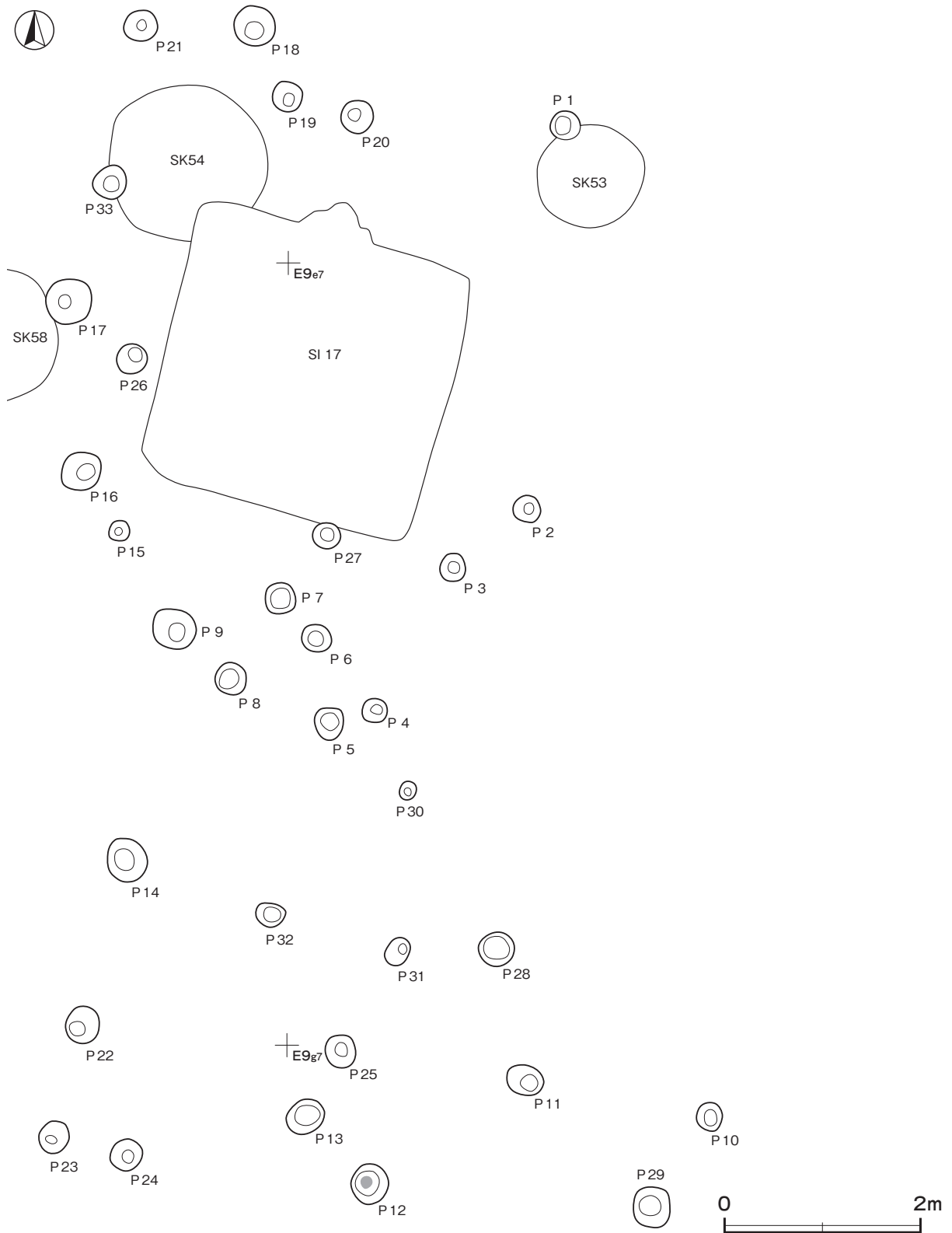
第3号ピット群 (第422図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のE9d6～E9g8区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第17号竪穴建物跡，第54・58号土坑を掘り込み，第53号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北13.6m，東西7.4mの範囲に，ピット33か所を確認した。個々の形状，計測値については，一覧表に記載する。



第422図 第3号ピット群実測図

所見 時期は、第4～7号方形竪穴遺構などの周辺の遺構配置から、15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡は想定できず、性格は不明である。

表20 第3号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	E 9 d7	円形	33	31	26	12	E 9 g7	楕円形	40	36	19	23	E 9 g6	円形	32	30	21
2	E 9 e7	円形	28	26	34	13	E 9 g7	楕円形	40	33	25	24	E 9 g6	円形	33	32	16
3	E 9 e7	円形	28	27	32	14	E 9 f6	円形	43	41	14	25	E 9 g7	円形	34	32	39
4	E 9 f7	円形	26	25	36	15	E 9 e6	円形	22	21	35	26	E 9 e6	円形	31	29	28
5	E 9 f7	楕円形	32	28	18	16	E 9 f6	楕円形	45	40	26	27	E 9 e7	円形	29	27	35
6	E 9 e7	円形	31	30	37	17	E 9 e6	円形	46	45	32	28	E 9 f7	円形	35	35	22
7	E 9 e6	円形	32	31	28	18	E 9 d6	円形	42	41	35	29	E 9 g7	楕円形	42	37	19
8	E 9 f6	円形	35	33	26	19	E 9 d6	円形	33	31	31	30	E 9 f7	円形	18	17	27
9	E 9 e6	楕円形	45	40	49	20	E 9 d7	円形	34	32	54	31	E 9 f7	楕円形	30	22	26
10	E 9 g8	円形	29	27	25	21	E 9 d6	円形	35	33	38	32	E 9 f6	不整形円形	28	23	64
11	E 9 g7	楕円形	39	30	51	22	E 9 f6	円形	37	34	15	33	E 9 d6	円形	34	33	39

第5号ピット群 (第423図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD 8 g6～E 8 a5区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第111・112号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北14.8m、東西10.0mの範囲に、ピット28か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

所見 時期は、第6・8号ピット群に近接していることから、15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡は想定できず、性格は不明である。

表21 第5号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 8 h6	円形	32	32	21	11	D 8 h5	楕円形	30	24	22	21	D 8 j5	円形	28	26	20
2	D 8 i6	円形	34	32	18	12	D 8 h5	楕円形	30	26	24	22	D 8 i5	楕円形	42	38	18
3	D 8 h6	楕円形	32	28	22	13	D 8 h5	楕円形	40	32	23	23	D 8 i4	円形	38	36	20
4	D 8 h6	円形	24	22	20	14	D 8 h5	円形	32	30	22	24	D 8 h5	楕円形	30	24	32
5	D 8 i6	円形	28	26	18	15	D 8 i5	不整形楕円形	34	24	33	25	D 8 h5	円形	22	20	18
6	D 8 i6	不整形円形	36	34	14	16	D 8 i5	楕円形	30	28	18	26	D 8 h5	楕円形	32	28	23
7	D 8 h6	円形	32	29	16	17	D 8 i5	楕円形	36	33	20	27	D 8 g6	楕円形	40	38	16
8	D 8 h6	楕円形	42	33	26	18	D 8 j5	隅丸方形	42	40	14	28	D 8 g6	不整形楕円形	30	20	28
9	D 8 h6	不整形円形	32	30	16	19	D 8 j5	円形	36	36	16						
10	D 8 h6	楕円形	32	28	16	20	E 8 a5	楕円形	39	38	16						

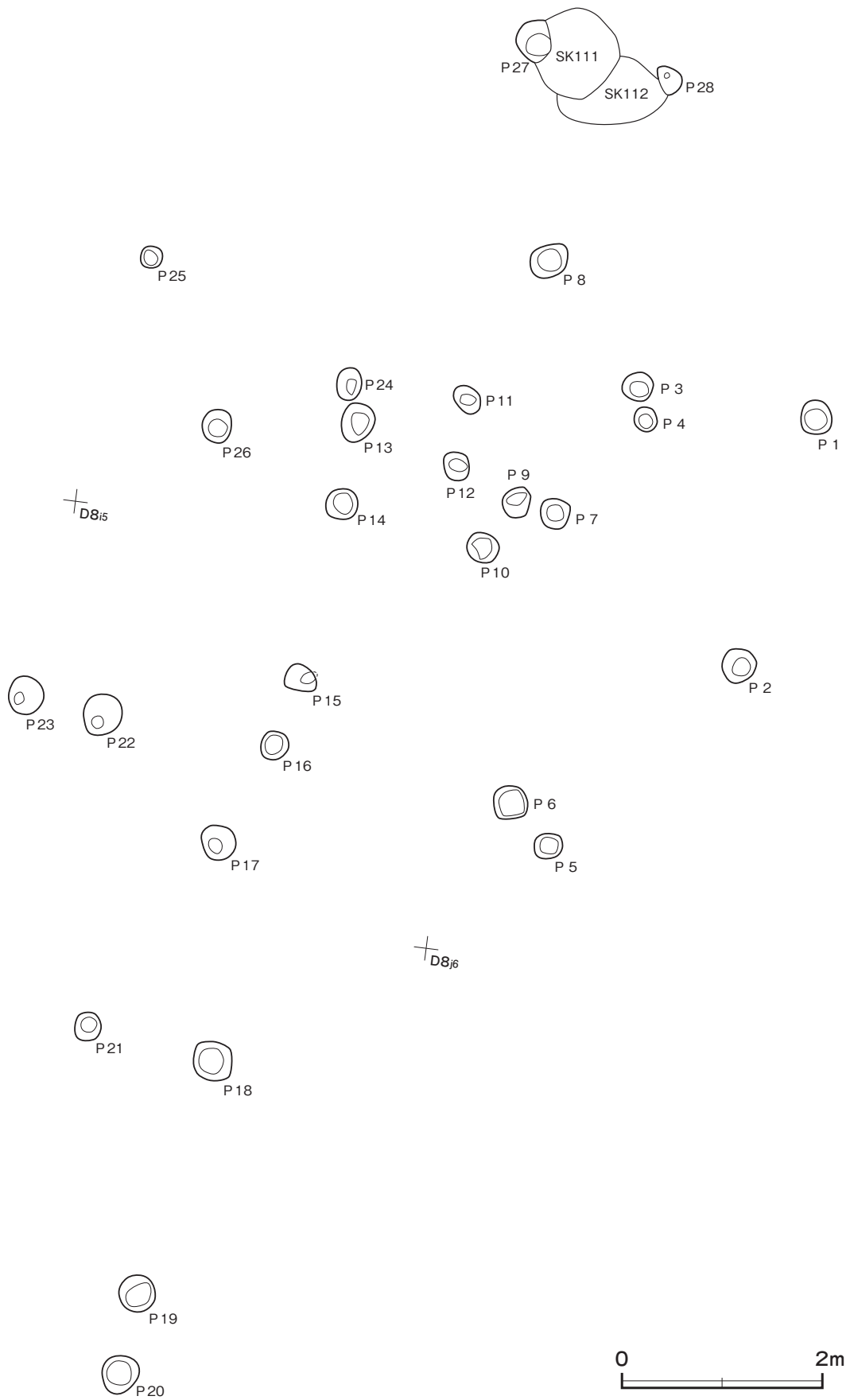
第6号ピット群 (第424図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD 7 h7～E 8 a2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第135・173号土坑を掘り込み、第102・171・180・194号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北12.5m、東西24.4mの範囲に、ピット53か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。



第 423 図 第 5 号ピット群実測図



第 424 図 第 6 号ピット群実測図

所見 時期は、第3・4号溝跡や第1号道路跡に近接していることから、15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡は想定できず、性格は不明である。

表22 第6号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	E 8 a2	円形	26	24	85	19	D 8 j1	楕円形	33	24	30	37	D 7 i9	楕円形	25	20	44
2	D 8 j2	楕円形	38	30	29	20	D 7 j0	楕円形	28	22	15	38	D 7 j9	楕円形	48	41	45
3	E 8 a1	[楕円形]	34	(18)	45	21	D 8 j1	円形	24	24	25	39	D 7 j9	円形	24	22	25
4	D 8 i1	円形	35	34	21	22	D 8 j1	円形	33	32	43	40	D 7 j9	不定形	30	24	40
5	D 8 j1	円形	26	25	20	23	D 8 j2	[楕円形]	(25)	23	45	41	D 7 i9	円形	22	21	18
6	D 8 j1	円形	39	38	32	24	E 7 a9	楕円形	32	26	24	42	D 7 i9	円形	22	20	36
7	D 8 j1	円形	35	33	15	25	D 7 j9	円形	36	34	29	43	D 7 i9	円形	24	22	35
8	D 8 j1	楕円形	32	25	42	26	D 7 j9	円形	26	24	25	44	D 7 h9	楕円形	40	32	34
9	D 8 j1	円形	24	24	29	27	E 7 a9	円形	34	32	14	45	D 7 i9	円形	27	25	38
10	D 7 j0	円形	26	25	40	28	E 7 a9	楕円形	49	39	14	46	D 7 i8	円形	32	32	32
11	D 7 j0	円形	32	29	28	29	E 7 a8	楕円形	38	30	26	47	E 7 a9	楕円形	32	24	6
12	D 8 i1	楕円形	45	36	18	30	E 7 a8	不定型	27	26	16	48	D 7 i9	[楕円形]	(29)	25	31
13	D 7 i0	楕円形	32	25	19	31	D 7 i0	楕円形	30	25	28	49	D 7 h7	円形	36	32	43
14	D 7 i0	楕円形	26	21	30	32	D 7 i0	楕円形	26	22	22	50	D 7 h7	円形	33	32	48
15	D 7 j0	円形	32	31	18	33	D 7 j0	円形	47	44	16	51	D 7 h7	楕円形	24	21	41
16	D 7 j0	楕円形	27	20	42	34	D 7 i0	楕円形	26	22	22	52	D 7 h7	円形	33	28	54
17	D 7 j0	円形	25	23	20	35	D 7 i0	円形	22	21	19	53	D 7 i7	楕円形	48	31	59
18	E 7 a0	円形	28	26	28	36	D 7 i0	[楕円形]	30	28	21						

第8号ピット群 (第425図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD 7 e5～D 8 g3区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

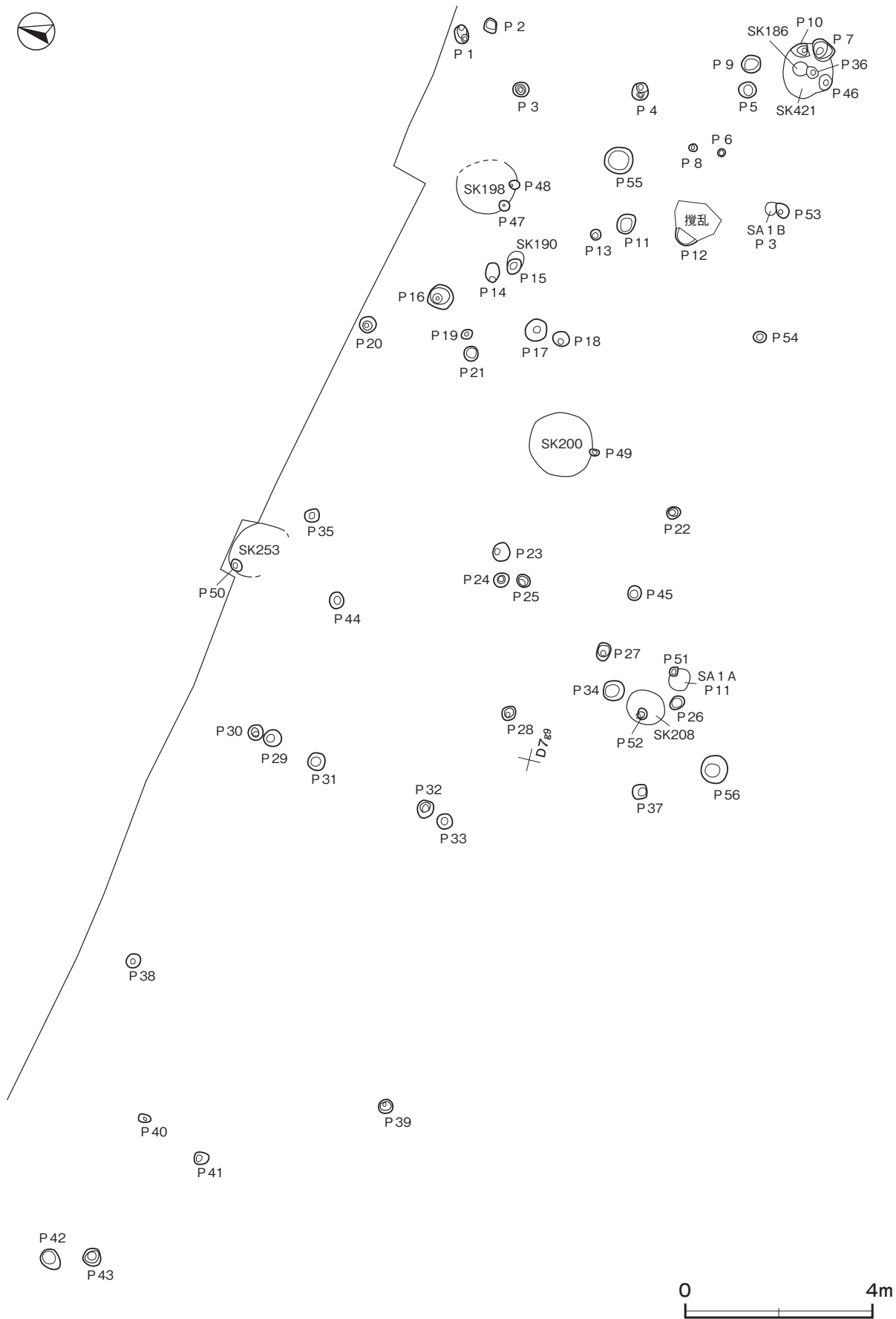
重複関係 第15A・B号掘立柱建物跡、第1A・B号柱穴列、第198・199・200・208・253・421号土坑を掘り込んでいます。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから、南北は14.4m、東西28.5mの範囲に、ピット56か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

所見 時期は、第3・4号溝跡や第1号道路跡に近接していることから、15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡は想定できず、性格は不明である。

表23 第8号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 8 e2	楕円形	39	28	33	14	D 8 f1	楕円形	51	28	41	27	D 7 g9	楕円形	38	26	28
2	D 8 e2	不整形	28	26	28	15	D 8 f1	楕円形	36	27	34	28	D 7 f9	楕円形	33	29	24
3	D 8 f2	円形	33	32	24	16	D 8 e1	不整形	56	53	27	29	D 7 e8	円形	33	32	41
4	D 8 f2	楕円形	38	30	42	17	D 8 f1	円形	42	39	42	30	D 7 e8	円形	38	36	47
5	D 8 g2	楕円形	37	32	35	18	D 8 f1	楕円形	37	30	53	31	D 7 e8	円形	39	36	22
6	D 8 g2	円形	15	15	36	19	D 8 f1	楕円形	36	20	32	32	D 7 f8	円形	37	34	35
7	D 8 g3	[不整形楕円形]	50	(42)	56	20	D 8 e1	円形	35	34	35	33	D 7 f8	円形	36	34	38
8	D 8 g2	楕円形	18	15	31	21	D 8 f1	円形	31	30	24	34	D 7 g9	円形	47	45	28
9	D 8 g2	楕円形	42	37	38	22	D 7 g0	楕円形	32	25	31	35	D 7 e0	楕円形	33	28	35
10	D 8 g3	[不定形]	34	(30)	54	23	D 7 f0	円形	39	36	35	36	D 8 g2	[楕円形]	25	(22)	42
11	D 8 f1	楕円形	46	38	28	24	D 7 f9	楕円形	34	30	29	37	D 7 g8	楕円形	38	32	32
12	D 8 g1	[円形]	48	(25)	25	25	D 7 f9	円形	38	36	34	38	D 7 e7	楕円形	43	38	51
13	D 8 f1	円形	24	23	34	26	D 7 g9	楕円形	34	25	37	39	D 7 f7	楕円形	33	28	24



第 425 図 第 8 号ピット群実測図

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
40	D 7 e6	楕円形	28	15	24
41	D 7 e6	楕円形	37	25	36
42	D 7 e5	楕円形	49	38	30
43	D 7 e5	円形	39	38	34
44	D 7 e9	円形	34	32	45
45	D 7 g0	円形	32	30	34

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
46	D 8 e2	[楕円形]	(34)	(29)	42
47	D 8 f1	円形	22	21	35
48	D 8 f1	楕円形	24	18	33
49	D 7 f0	楕円形	22	13	17
50	D 7 e9	円形	24	22	31
51	D 7 g9	楕円形	34	28	50

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
52	D 7 g9	楕円形	22	19	53
53	D 8 g2	[楕円形]	(32)	25	47
54	D 8 g1	円形	27	25	60
55	D 8 f2	楕円形	63	56	不明
56	D 7 g9	円形	65	48	30

第9号ピット群 (第426図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区中央部のD 6 d9～D 7 i1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第3・4・6号溝跡、第1号道路跡、第319・323号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北部が調査区域外に延びていることから、南北は22.4m、東西11.4mの範囲に、ピット38か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)、瓦質土器片1点(鉢)のほか、縄文土器片5点(深鉢)、土師器片1点(器台)が、P 34・P 35・P 38・P 39から出土している。

所見 時期は、土師質土器や瓦質土器は細片で図化できないが、第3・4号溝跡や第1号道路跡に近接していることから、15世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡は想定できず、性格は不明である。

表24 第9号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 7 i1	楕円形	24	26	26
2	D 7 i1	楕円形	46	28	25
3	D 7 i1	楕円形	26	22	32
4	D 7 h1	楕円形	66	50	22
5	D 7 f2	楕円形	38	28	29
6	D 7 g1	[楕円形]	38	(26)	29
7	D 7 e2	楕円形	40	36	20
8	D 7 f2	円形	36	34	18
9	D 7 f2	楕円形	40	36	20
10	D 7 f2	楕円形	30	26	18
11	D 7 i1	楕円形	50	32	16
12	D 7 g2	円形	28	27	18
13	D 7 g2	楕円形	52	44	20

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
14	D 7 g2	楕円形	35	28	23
15	D 7 g1	円形	26	26	32
16	D 7 f1	楕円形	46	40	21
17	D 7 f1	不整楕円形	28	22	22
18	D 7 g1	楕円形	56	52	20
19	D 7 g1	楕円形	30	28	22
20	D 7 f1	不整楕円形	50	31	30
21	D 7 e1	楕円形	20	18	14
22	D 7 f1	楕円形	28	22	31
23	D 7 f1	不整楕円形	42	30	42
24	D 7 f1	楕円形	26	22	30
25	D 7 e1	楕円形	18	16	28
26	D 7 f1	円形	24	22	30

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
27	D 6 h0	円形	34	32	32
28	D 6 h0	楕円形	38	30	20
29	D 7 d1	不整楕円形	40	29	40
30	D 6 e0	円形	34	34	17
31	D 7 d2	楕円形	27	22	60
32	D 6 e9	楕円形	30	26	20
33	D 6 e9	楕円形	28	22	23
34	D 6 d9	楕円形	30	24	20
35	D 6 d9	楕円形	26	24	22
36	D 6 d9	円形	22	20	28
37	D 7 d2	楕円形	32	28	18
38	D 6 e9	楕円形	45	40	35

第10号ピット群 (第427図)

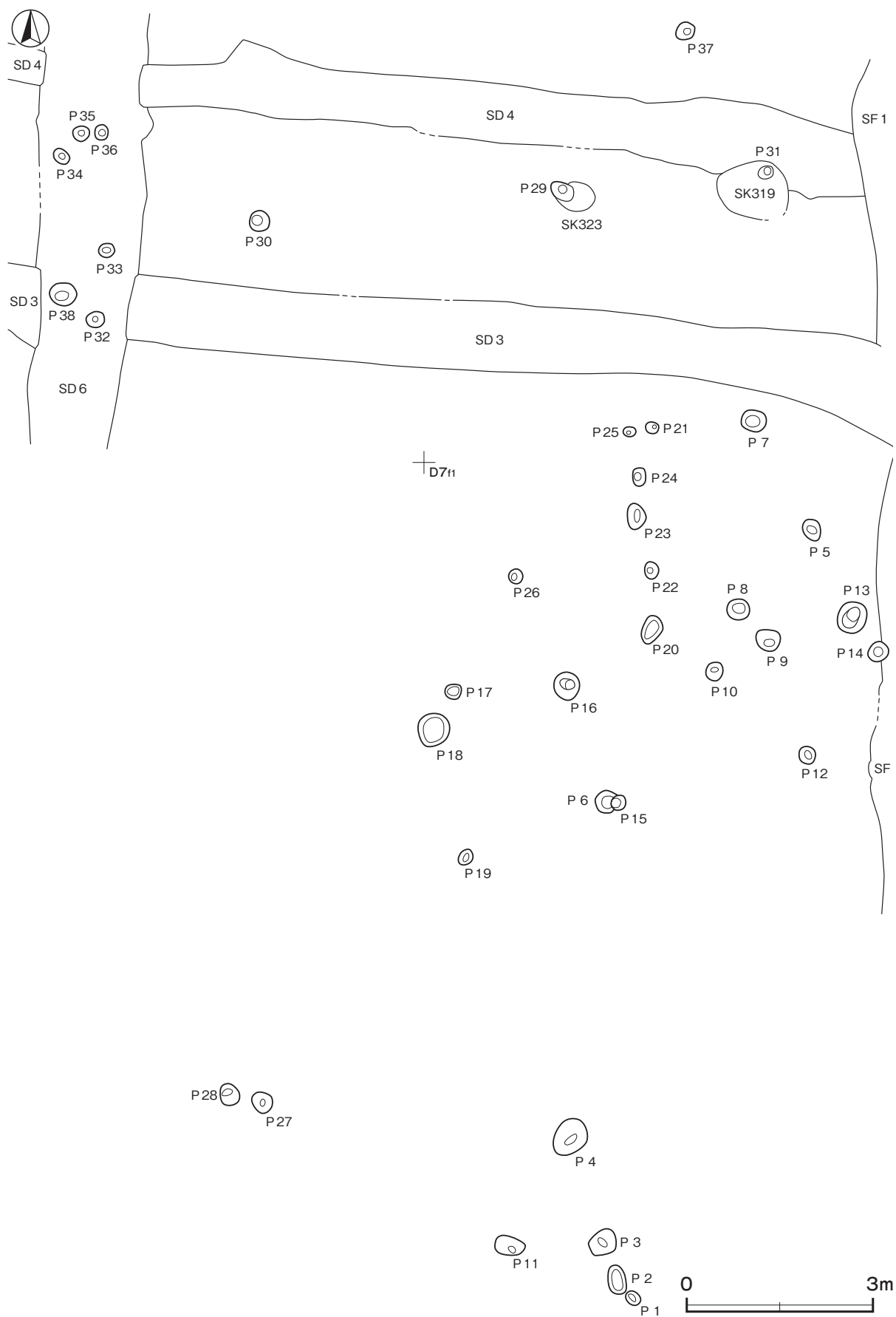
調査年度 平成26年度

位置 調査区中央部のD 6 c1～D 6 d6区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第386号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南北11.5m、東西21.8mの範囲に、ピット21か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢)、弥生土器片1点(広口壺)、土師器片1点(甕類)、須恵器片1点(甕類)がP 6・P 7・P 9から出土している。

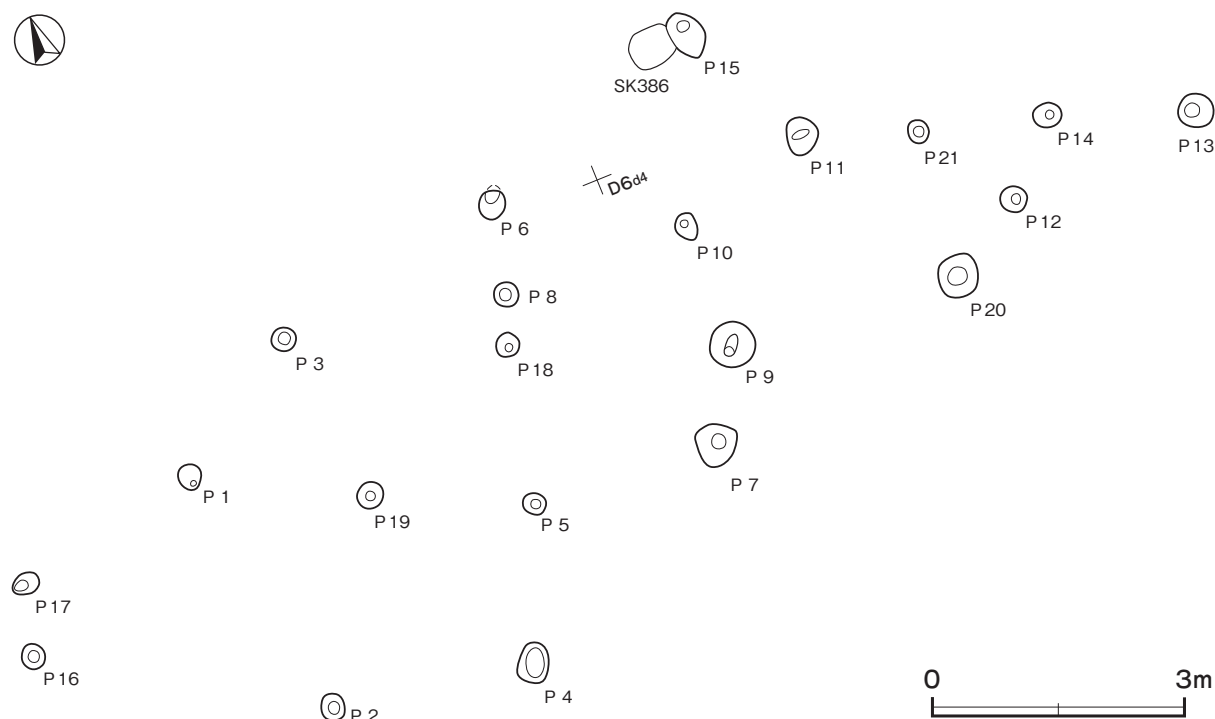


第 426 図 第 9 号ピット群実測図

所見 時期は、出土遺物に縄文土器片や弥生土器片などが出土しているものの、第9号溝跡に近接していることから、16世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡などは想定できず、性格は不明である。

表 25 第10号ピット群一覧表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 6 d2	円形	30	29	25	8	D 6 d3	円形	40	39	21	15	D 6 c4	不整楕円形	61	[39]	36
2	D 6 e2	楕円形	32	26	10	9	D 6 d4	円形	55	54	27	16	D 6 d1	楕円形	28	26	10
3	D 6 d2	円形	30	28	23	10	D 6 d4	不整楕円形	32	24	19	17	D 6 d1	楕円形	35	26	16
4	D 6 e3	楕円形	46	35	39	11	D 6 d4	不整楕円形	43	36	14	18	D 6 d3	円形	38	37	25
5	D 6 d3	円形	38	36	22	12	D 6 d5	円形	32	32	38	19	D 6 d3	円形	32	30	12
6	D 6 c3	不整楕円形	42	32	31	13	D 6 d5	円形	41	40	8	20	D 6 d4	円形	52	49	11
7	D 6 d4	不整楕円形	50	48	15	14	D 6 d5	楕円形	35	30	46	21	D 6 d4	楕円形	31	25	37



第 427 図 第10号ピット群実測図

第20号ピット群 (第428図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区中央部のD 6 e5～D 6 g6区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

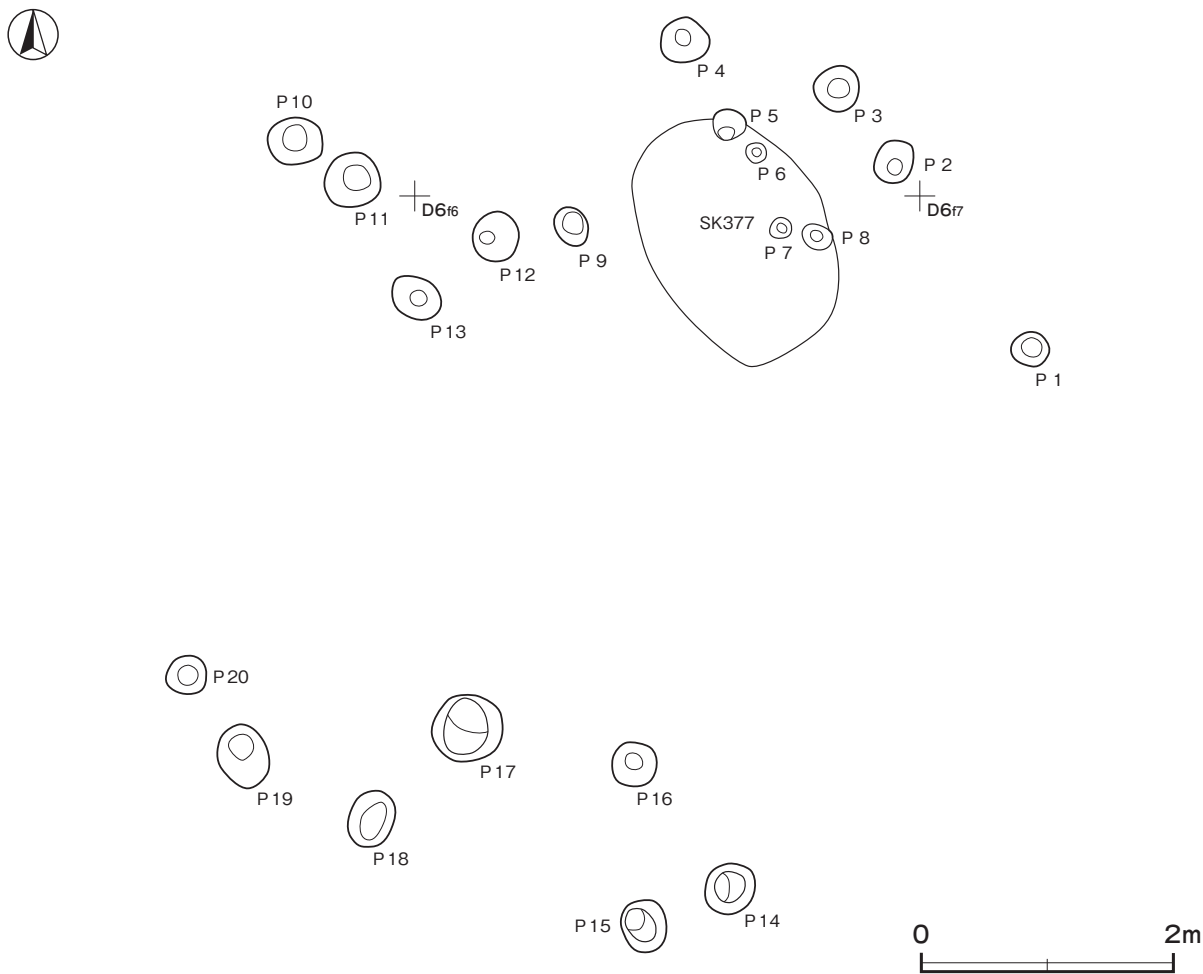
重複関係 第377号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南北7.8m、東西6.4mの範囲に、ピット20か所を確認した。個々の形状、計測値については、一覧表に記載する。

所見 時期は、遺物が出土しなかったものの、第9号溝跡に近接していることから、16世紀代と推定できる。ピットの分布状況から建物跡などは想定できず、性格は不明である。

表 26 第 20 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 6 f7	円形	30	28	30	8	D 6 f6	楕円形	27	20	43	15	D 6 g6	楕円形	40	35	25
2	D 6 e6	楕円形	34	29	64	9	D 6 f6	楕円形	32	25	30	16	D 6 g6	円形	36	36	23
3	D 6 e6	円形	35	35	25	10	D 6 e5	楕円形	43	37	36	17	D 6 g6	円形	54	53	50
4	D 6 e6	円形	40	37	51	11	D 6 e5	円形	44	42	31	18	D 6 g5	楕円形	47	37	19
5	D 6 e6	楕円形	26	23	42	12	D 6 f6	円形	40	37	37	19	D 6 g5	楕円形	49	39	41
6	D 6 e6	円形	18	18	36	13	D 6 f6	楕円形	42	32	46	20	D 6 f5	円形	31	30	23
7	D 6 f6	円形	18	18	30	14	D 6 g6	円形	42	39	38						



第 428 図 第 20 号ピット群実測図

表 27 鎌倉・室町時代ピット群一覧表

番号	位置	規模		ピット数	主な出土遺物	備考
		南北	東西			
2	D 9 i4 ~ E 9 b6	14.2	9.0	57	-	SI35・36・40・43・49, SB 2, SK60 → 本跡
3	E 9 d6 ~ E 9 g8	13.6	7.4	33	-	SI17, SK54・58 → 本跡 → SK53
5	D 8 g6 ~ E 8 a5	14.8	10.0	28	-	SK111・112 号 → 本跡
6	D 7 h7 ~ E 8 a2	12.5	24.4	53	-	SK135・173 → 本跡 → SK102・171・180・194
8	D 7 e5 ~ D 8 g3	(14.4)	28.5	56	-	SB15 A・B, SA 1 A・B, SK198・199・200・208・253・421 → 本跡
9	D 6 d9 ~ D 7 i1	(22.4)	11.4	38	土師質土器, 瓦質土器	SD 3・4・6, SF 1, SK319・323 → 本跡
10	D 6 c1 ~ D 6 d6	11.5	21.8	21	-	SK386 → 本跡
20	D 6 e5 ~ D 6 g6	7.8	6.4	20	-	SK377 → 本跡

7 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構2棟、粘土貼土坑29基、墓坑3基、道路跡2条、溝跡2条、土坑37基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

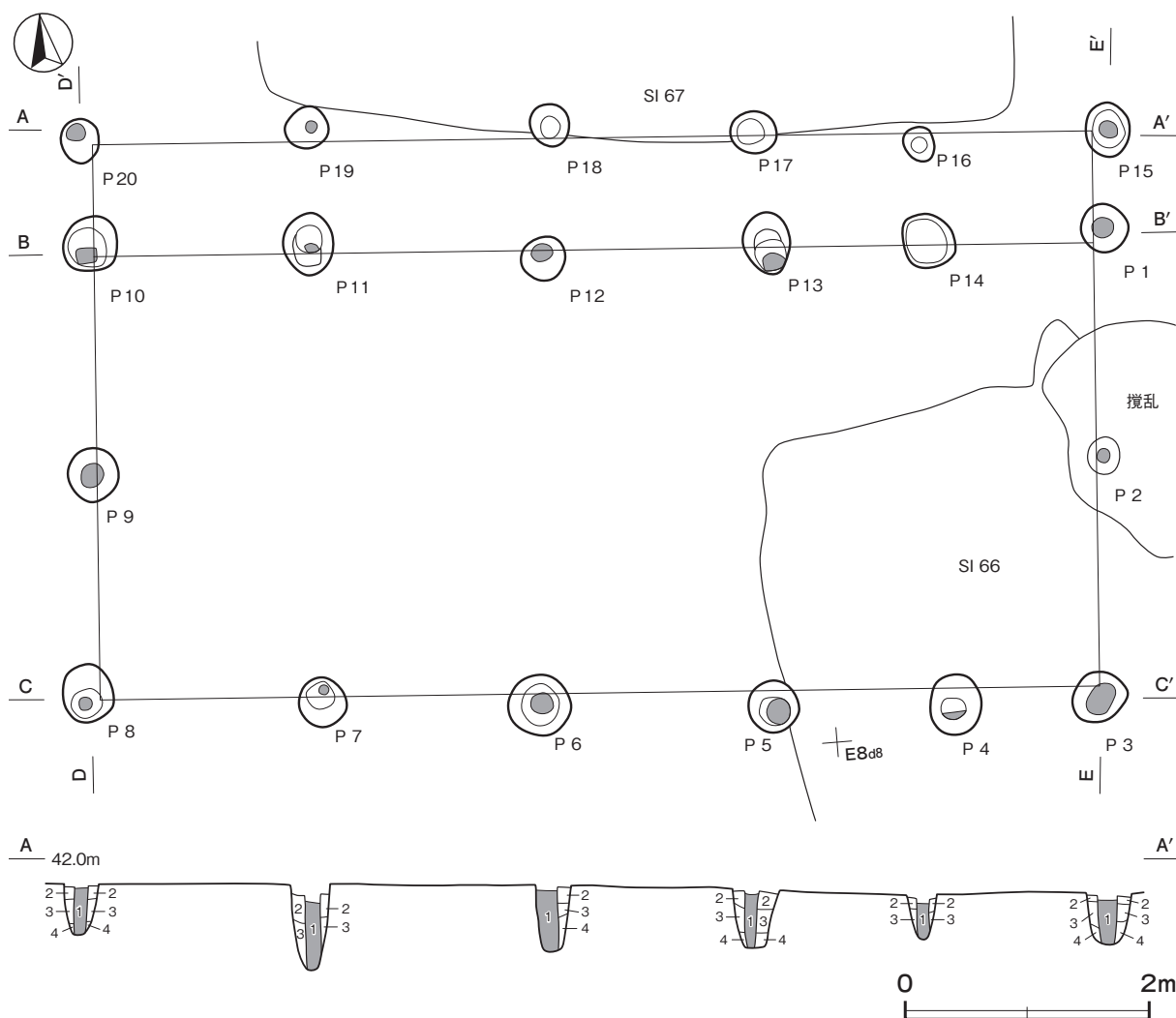
第3号掘立柱建物跡（第429・430図 PL55）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE 8c7区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第66・67号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行5間、梁行2間の身舎に北廂が付く側柱建物跡で、桁行方向がN-85°-Wの東西棟である。規模は身舎が桁行8.1m、梁行3.6mで、面積は29.16㎡である。廂の出は0.9mで、廂を含めると梁行は、4.5mで、面積は36.45㎡である。身舎の柱間寸法は桁行が東妻側から1.5m（5尺）、1.2m（4尺）、他は1.8m（6尺）で、梁行は1.8m（6尺）である。柱筋はほぼ揃っている。廂の柱間寸法は、桁行の柱間の寸法と同じで、柱筋はほぼ揃っている。



第429図 第3号掘立柱建物跡実測図(1)

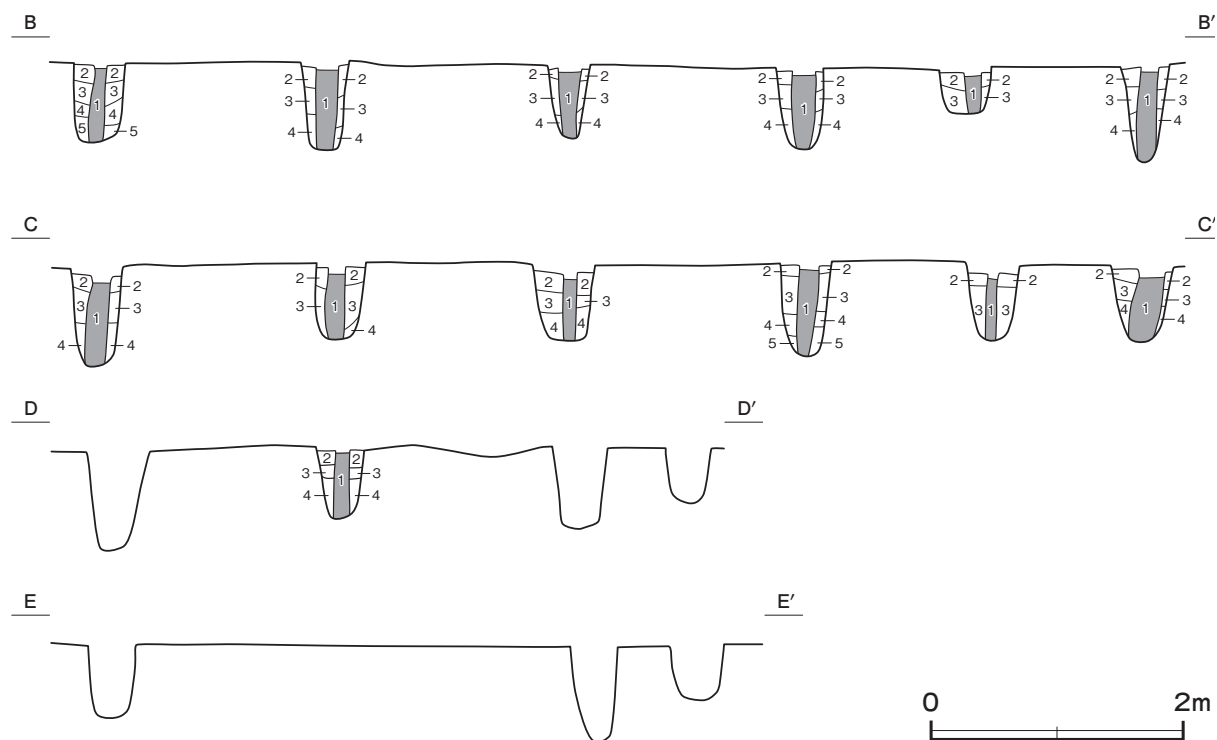
柱穴 20か所。身舎柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、長径0.28～0.25m、短径0.35～0.48mである。深さは30～78cmで、掘方の壁は直立している。廂柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形で、長径0.28～0.46m、短径0.24～0.35mである。深さは40～68cmで、掘方の壁は直立している。第2～5層は埋土、第1層は柱痕跡である。P1～P13・P15・P19・P20の底部から、柱のあたりを確認した。柱のあたりの規模や柱痕跡から、柱の直径は10～30cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 4 褐灰色 ロームブロック中量 |
| 2 褐灰色 ロームブロック少量 | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 磁器片1点(瓶類)が、P9から出土している。細片で第2～5層から出土していることから、構築時に混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器が細片で実測できなかったものの、磁器の年代から18世紀代と考えられる。性格は、家屋や小屋などの機能が考えられる。



第430図 第3号掘立柱建物跡実測図(2)

(2) 方形竪穴遺構

第2号方形竪穴遺構 (第431図)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC3f5区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号遺物包含層を掘り込み、第623号土坑、第16号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 第623号土坑などに掘り込まれているが、長軸2.20m、短軸1.67mの隅丸長方形で、長軸方向はN-15°-Eである。壁は高さ83cmで、直立している。底面は、ほぼ平坦である。

ピット 7か所。P 1～P 7は深さ12～44cmで、配置から壁柱穴と考えられる。P 1・P 2・P 4～P 7は単一層で、柱材を抜き取った後の覆土である。

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

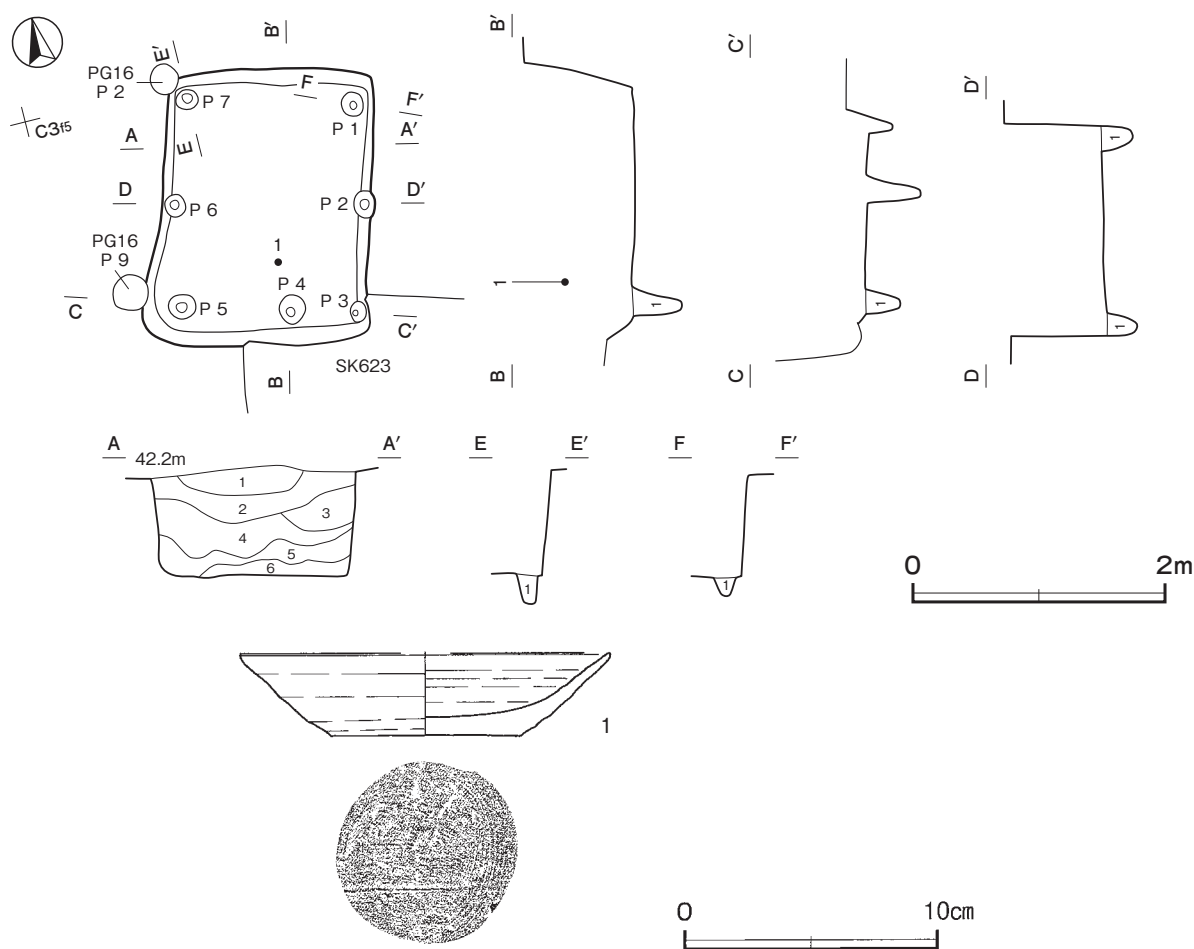
覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
 2 暗褐色 ロームブロック中量
 3 黒色 ロームブロック中量
 4 黒褐色 ロームブロック多量
 5 暗褐色 ロームブロック少量
 6 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)が、出土している。覆土中層から出土していることから、廃絶に伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は、形状が第3号方形竪穴遺構と類似することから、18世紀前半と推定できる。性格は、壁柱穴があることから、板囲いの簡易な建物が考えられる。



第 431 図 第 2 号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第 2 号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第 431 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	[14.6]	3.3	7.5	雲母・針状物質・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 底部外面回転系切り後ナデ、内面一方向のナデ	覆土中層	80% PL99

第3号方形竪穴遺構 (第432図 PL55)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC5g3区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第100・105号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.57m, 短軸1.25mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-86°-Wである。壁は高さ32cmで, 直立もしくは外傾している。底面は, ほぼ平坦である。

ピット 7か所。深さ15~28cmで, 配置から壁柱穴と考えられる。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

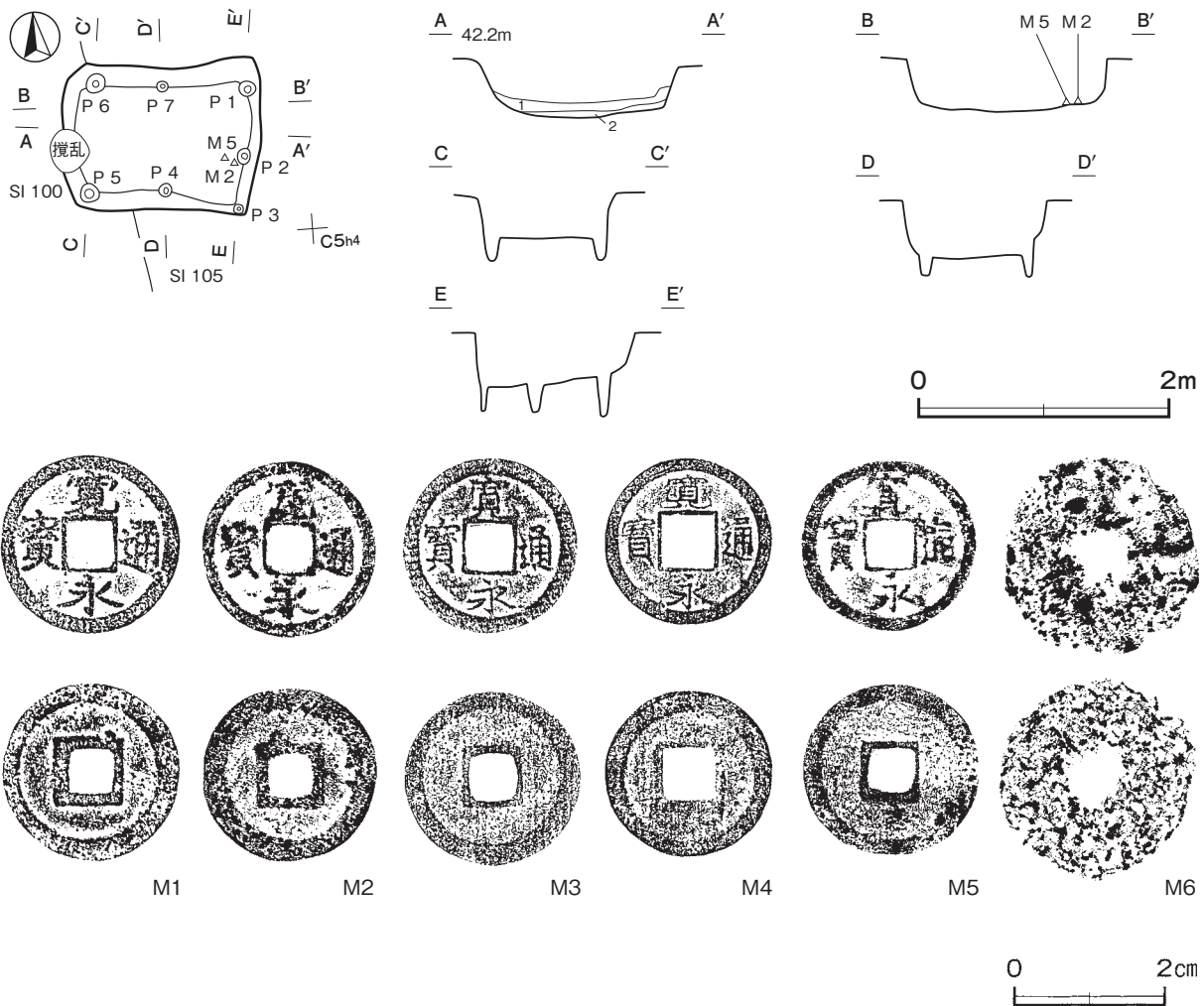
土層解説

1 褐色 ロームブロック中量

2 灰黄褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 陶器片2点(碗, 皿), 金属製品5点(釘), 銭貨7点(寛永通寶)が出土している。覆土下層から出土しているが, 投棄か遺棄かは不明である。

所見 時期は, 陶器片は実測できない細片であるが, 出土遺物から18世紀前半に比定できる。性格は, 壁柱穴があることから, 板囲いの簡易な建物が考えられる。



第432図 第3号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第3号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第432図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	3.43	銅	1636	古寛永（Ⅱ期）	覆土下層	PL110
M2	寛永通寶	2.3~2.4	0.6	0.1	2.13	銅	1636	古寛永（Ⅱ期）	覆土下層	
M3	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	2.30	銅	1697	新寛永（Ⅳ期）	覆土下層	
M4	寛永通寶	2.2	0.7	0.1	2.13	銅	1697	新寛永（Ⅳ期）	覆土下層	PL110
M5	寛永通寶	2.4	0.6	0.1	2.63	銅	1697	新寛永（Ⅳ期）	覆土下層	
M6	寛永通寶	2.6	0.7	0.2	3.99	鉄	1739	寛永鉄銭（Ⅴ期）	覆土下層	PL110

表28 江戸時代方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	底面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸 (m)			柱穴	出入口	ピット			
2	C3f5	N-15°-E	隅丸長方形	2.20×1.67	83	ほぼ平坦	-	-	7	人為	土師質土器	HG1→本跡→SK623, PG16
3	C5g3	N-86°-W	隅丸長方形	1.57×1.25	32	ほぼ平坦	-	-	7	人為	陶器・金属製品・銭貨	SI100・105→本跡

(3) 粘土貼土坑

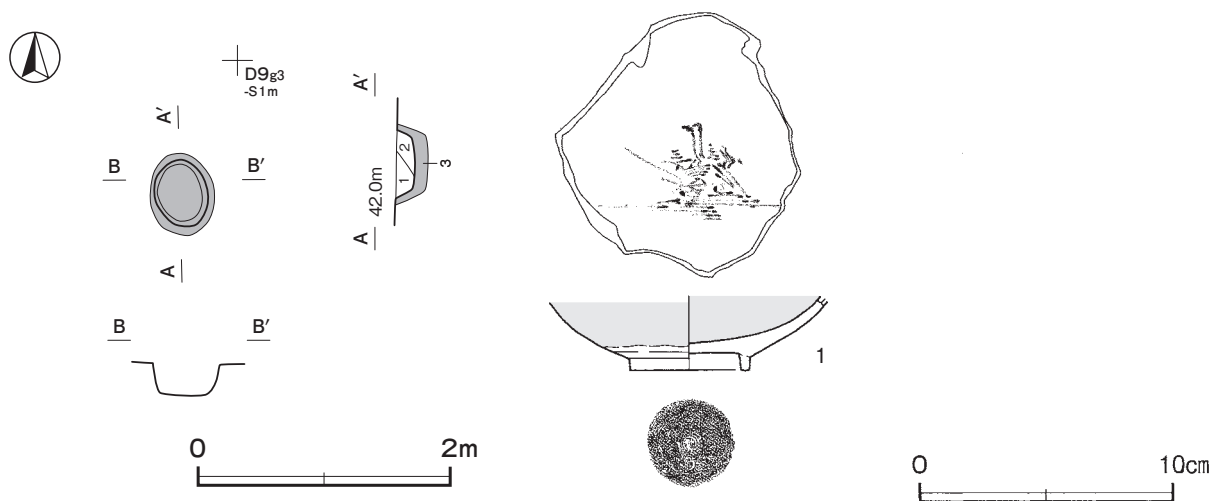
今回の調査で、当時代の粘土貼土坑29基を確認した。形状や遺物出土状況などから特徴的な13基については、文章と実測図、遺物観察表で解説する。その他の16基については、実測図、土層解説、観察表を掲載する。

第1号粘土貼土坑（第433図）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD9g2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 掘方の規模は長径0.62m、短径0.50mの楕円形で、長径方向はN-15°-Wである。深さは24



第433図 第1号粘土貼土坑・出土遺物実測図

cmで、円筒形に掘り込まれている。掘方の底面及び壁面には、厚さ5～10cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は長径0.50m、径0.44mの楕円形で、深さは14cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

覆土 2層に分層できる。第1・2層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第3層は、貼り付けられた粘土で埋土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 灰白色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 陶器片1点(碗)のほか、土師器片5点(甕類)が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀前葉に比定できる。性格は、第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられていることから、水槽などの貯水施設が考えられる。

第1号粘土貼土坑出土遺物観察表(第433図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	-	(29)	46	緻密・浅黄	見込み部に楼閣山水文 底部「清水」の刻印	灰釉	京焼系	覆土中	

第5号粘土貼土坑(第434図 PL57)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD9g2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第79号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は径1.05mほどの円形である。深さは13cmで、円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の底面及び壁面には、厚さ10cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は径0.80mの円形で、深さは4cmである。壁はほぼ直立し、底面は皿状で、径80cmほどの樽を据え置いた痕跡を確認した。

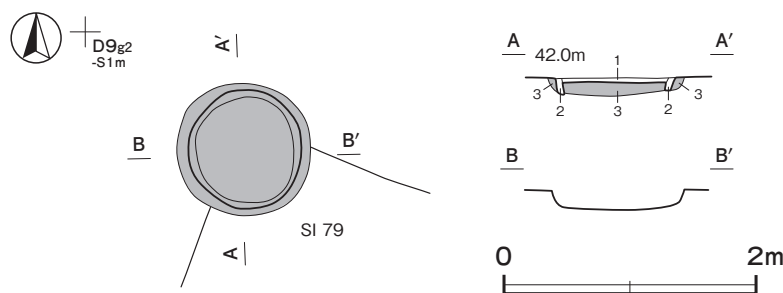
覆土 2層に分層できる。第1層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第2層は樽の腐食土、第3層は貼り付けられた粘土で、樽を固定した埋土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 3 灰白色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 陶器片1点(碗)、銭貨1点(寛永通寶)が、覆土中から出土している。銭貨は溶着物が多く図化できないが、「文」の文字が確認でき、寛永通寶と推察できる。

所見 時期は、出土遺物から18世紀中葉以降に比定できる。性格は、第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられていることから、水槽などの貯水施設が考えられる。



第434図 第5号粘土貼土坑実測図

第8号粘土貼土坑 (第435図 PL57)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD8i9区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第85号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は長径1.00m, 短径0.92mの円形である。深さは20cmで, 円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の底面及び壁面には, 厚さ5~10cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は径0.90mの円形で, 深さは5cmである。壁はほぼ直立し, 底面は皿状で, 径90cmほどの樽を据え置いた痕跡を確認した。

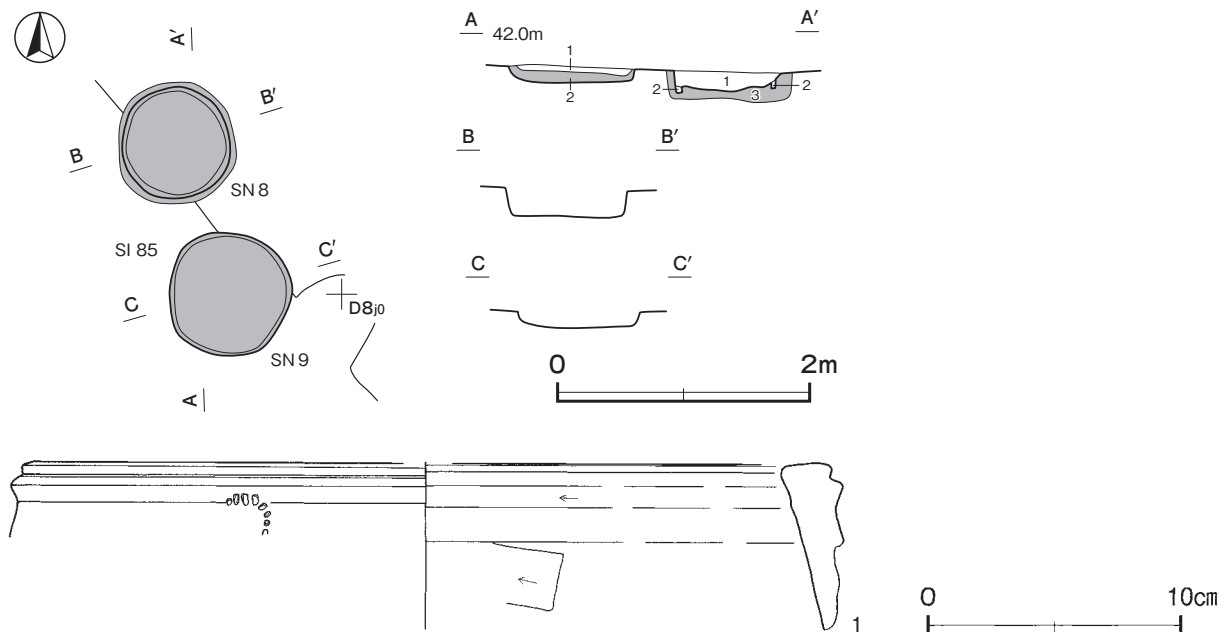
覆土 2層に分層できる。第1層はロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。第2層は樽の腐食土, 第3層は貼り付けられた粘土で, 樽を固定した埋土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化材少量
- 3 灰黄褐色 粘土ブロック中量

遺物出土状況 瓦質土器片1点(火鉢), 陶器片1点(碗)のほか, 縄文土器片5点(深鉢)が, 覆土から出土している。

所見 時期は, 出土遺物からは断定できないが, 周辺の粘土貼土坑と同年代の18世紀前半の可能性はある。性格は, 第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く, 粘土が貼り付けられ樽を据え置いた痕跡があることから, 水槽などの貯水施設が考えられる。



第435図 第8・9号粘土貼土坑・第8号粘土貼土坑出土遺物実測図

第8号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第435図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	瓦質土器	火鉢	[32.0]	(6.5)	-	長石・石英・砂粒	灰	普通	口縁部外面円状斑文の押印文, 内面横位のナデ	覆土中	5%

第9号粘土貼土坑 (第435図)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD8i9区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第85号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は径1.00mほどの円形である。深さは15cmで、円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の底面及び壁面には、厚さ5～10cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は径0.90mの円形で、深さは5cmである。壁は外傾し、底面は皿状である。

覆土 単一層である。第1層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第2層は貼り付けられた粘土で、樽を固定した埋土である。

土層解説

1 にぶい横褐色 ロームブロック中量

2 灰褐色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)のほか、土師器片7点(甕類)が、覆土中から出土している。

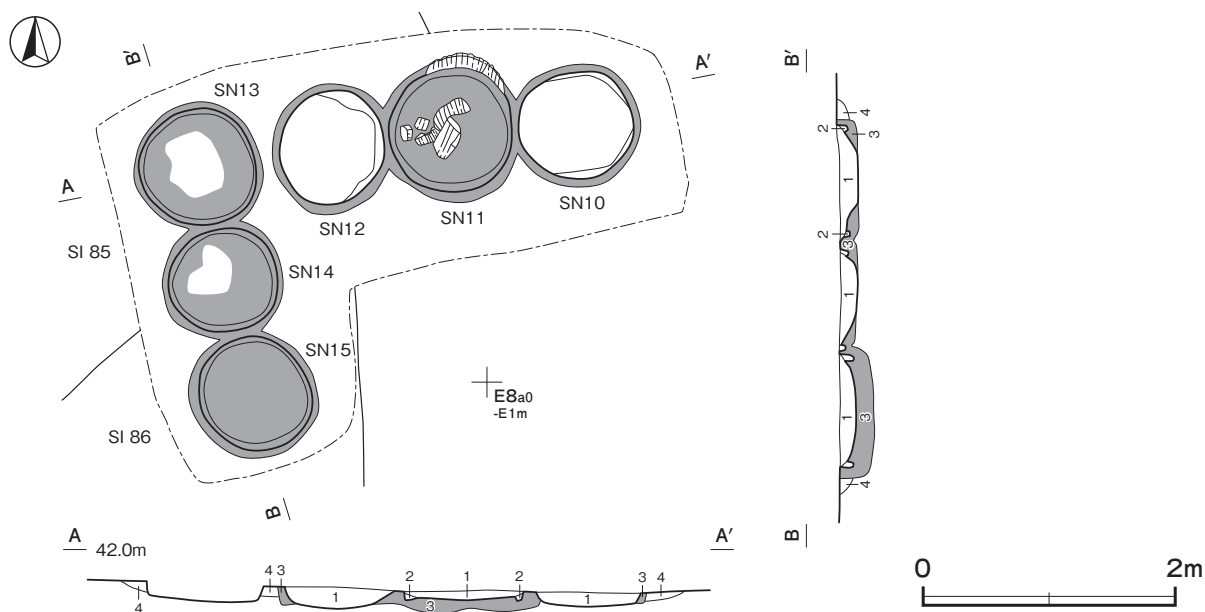
所見 時期は、第8号粘土貼土坑と併設されていることから、18世紀前半の可能性はある。性格は、第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられていることから、水槽などの貯水施設が考えられる。

第10号粘土貼土坑 (第436図 PL57)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD8j0区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 掘方の規模は径1.00mほどの円形である。深さは12cmで、円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の壁面には厚さ5cmほどの粘土が貼り付けられているが、底面には確認できなかった。粘土の内側は径0.92mの円形で、深さは12cmである。壁は外傾もしくは直立し、底面は皿状である。第10～15号粘土貼土坑をL字状に囲む硬化面を確認した。長さは長軸方向4.50m、短軸方向3.15m、幅1.50～1.90mで、



第436図 第10～15号粘土貼土坑実測図

確認面からの深さは10cmほどである。壁は外傾しているが、底面の形状は、粘土貼土坑に掘り込まれていることから、不明である。

覆土 第10～15号粘土貼土坑の覆土は、単一層もしくは2層に分層できる。第1層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第2層は樽の腐食土、第3層は貼り付けられた粘土で樽を固定した埋土である。第4層は硬化面の構築土である。

土層解説 (第10～15号粘土貼土坑共通)

- | | | | |
|------|---------------|-------|-----------|
| 1 黒色 | ロームブロック少量 | 3 灰白色 | 粘土ブロック多量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 4 褐色 | ロームブロック微量 |

所見 時期は、第10～12号及び第13～15号粘土貼土坑が配列を組み、共通する硬化面を掘り込んでいる関連施設と考えられることから、第14号粘土貼土坑と同時期の18世紀後半の可能性はある。性格は、第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられていることから、水槽などの貯水施設が考えられる。

第11号粘土貼土坑 (第436・437図 PL57)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD8j0区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第85号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は、径1.10mほどの円形である。深さは15cmで、円筒形に掘り込まれている。掘方の底面及び壁面には、厚さ10cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は径0.95mの円形で、深さは8～10cmである。壁は直立し、底面は皿状で、径90cmほどの樽を据え置いた痕跡や樽の側板一部が残存していた。本跡を囲む硬化面は、第10号粘土貼土坑などと共通である。

覆土 第10号粘土貼土坑を参照されたい。覆土の自然科学分析については、付章を参照されたい。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)、陶器片1点(碗)、銭貨1点(寛永通寶)が、覆土中から出土している。

所見 時期は、第10～12号及び第13～15号粘土貼土坑が配列を組み、共通する硬化面を掘り込んでいることから、第14号粘土貼土坑と同時期の18世紀後半の可能性はある。性格は、本跡及び第16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられ、樽の一部を確認したことから、水槽などの貯水施設が考えられる。

第11号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第437図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通寶	2.8	0.6	0.1	3.22	銅	1636	古寛永(Ⅱ期)	覆土中	

第12号粘土貼土坑 (第436図 PL57)

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD8j9区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第85・86号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は長径 1.05 m, 短径 0.95 m の楕円形で, 長径方向は N - 15° - E ある。深さは 18cm で, 円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の壁面には厚さ 10cm ほどの粘土が貼り付けられているが, 底面には確認できなかった。粘土の内側は径 0.92 m の円形で, 深さは 15cm ある。壁は外傾し, 底面は皿状である。本跡を囲む硬化面は, 第 10 号粘土貼土坑などと共通である。

覆土 第 10 号粘土貼土坑を参照されたい。

遺物出土状況 陶器片 1 点 (皿), 金属製品 1 点 (釘), 銭貨 1 点 (寛永通寶) が, 覆土から出土している。

所見 時期は, 出土陶器は細片で図化できないが, 第 10 ~ 12 号及び第 13 ~ 15 号粘土貼土坑が配列を組み, 共通する硬化面を掘り込んでいる関連施設と考えられることから, 第 14 号粘土貼土坑と同時期の 18 世紀後半の可能性はある。性格は, 第 11・16 号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く, 粘土が貼り付けられていることから, 水槽などの貯水施設が考えられる。

第 13 号粘土貼土坑 (第 436 図 PL57)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 8 j9 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 85 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は径 1.05 m ほどの円形である。深さは 13cm で, 円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の底面及び壁面には, 厚さ 10cm ほどの粘土が貼り付けられているが, 底面中央部には確認できなかった。粘土の内側は径 0.90 m の円形で, 深さは 2 ~ 13cm である。壁は直立し, 底面は皿状で, 径 90cm ほどの樽を据え置いた痕跡を確認した。本跡を囲む硬化面は, 第 10 号粘土貼土坑などと共通である。

覆土 第 10 号粘土貼土坑を参照されたい。

所見 時期は, 第 10 ~ 12 号及び第 13 ~ 15 号粘土貼土坑が配列を組み, 共通する硬化面を掘り込んでいる関連施設と考えられることから, 第 14 号粘土貼土坑と同時期の 18 世紀後半の可能性はある。性格は, 第 11・16 号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く, 粘土が貼り付けられていることから, 水槽などの貯水施設が考えられる。

第 14 号粘土貼土坑 (第 436・437 図 PL57)

調査年度 平成 26 年度

位置 調査区東部の D 8 j9 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 85・86 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

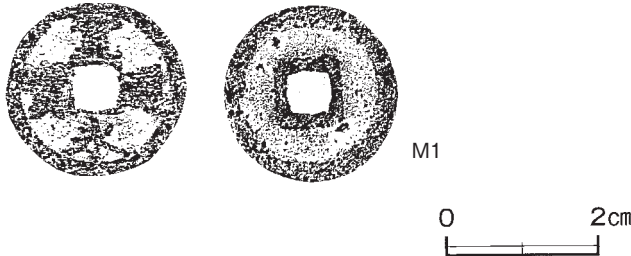
規模と形状 掘方の規模は径 0.95 m ほどの円形である。深さは 12cm で, 円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の底面及び壁面には, 厚さ 10cm ほどの粘土が貼り付けられているが, 底面中央部には確認できなかった。粘土の内側は径 0.80 m の円形で, 深さは 2 ~ 12cm である。壁は外傾し, 底面は皿状で, 径 80cm ほどの樽を据え置いた痕跡を確認した。本跡を囲む硬化面については, 第 10 号粘土貼土坑などと共通である。

覆土 第 10 号粘土貼土坑を参照されたい。

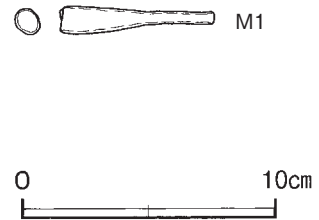
遺物出土状況 陶器片 1 点 (杯), 金属製品 1 点 (煙管) が, 覆土中から出土している。

所見 時期は，出土遺物から18世紀後半に比定できる。性格は，第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く，粘土が貼り付けられていることから水槽などの貯水施設が考えられる。

第11号粘土貼土坑



第14号粘土貼土坑



第437図 第11・14号粘土貼土坑出土遺物実測図

第14号粘土貼土坑出土遺物観察表（第437図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	煙管	6.1	1.1	1.0	5.40	銅	吸口部 銅板折り曲げ貼り合わせ加工 口付部径0.6cm	覆土中	PL109

第15号粘土貼土坑（第436図 PL57）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE8a9区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第86号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は長径1.05m，短径0.98mの円形である。深さは26cmで，円筒形に掘り込まれている。掘方の底面及び壁面には，厚さ10～15cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は径0.90mの円形で，深さは10cmである。壁はほぼ直立し，底面は皿状で，径90cmほどの樽を据え置いた痕跡を確認した。本跡を囲む硬化面については，第10号粘土貼土坑などと共通である。

覆土 第10号粘土貼土坑を参照されたい。

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿）のほか，縄文土器片1点（深鉢），弥生土器片1点（壺類）が，覆土中から出土している。

所見 時期は，第10～12号及び第13～15号粘土貼土坑が配列を組み，共通する硬化面を掘り込んでいる関連施設と考えられることから，第14号粘土貼土坑と同時期の18世紀後半の可能性がある。性格は，第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く，粘土が貼り付けられていることから，水槽などの貯水施設が考えられる。

第16号粘土貼土坑（第438図 PL57）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のD9h2区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第79号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘方の規模は径1.25mほどの円形である。深さは54cmで，円筒形に掘り込まれている。掘方の

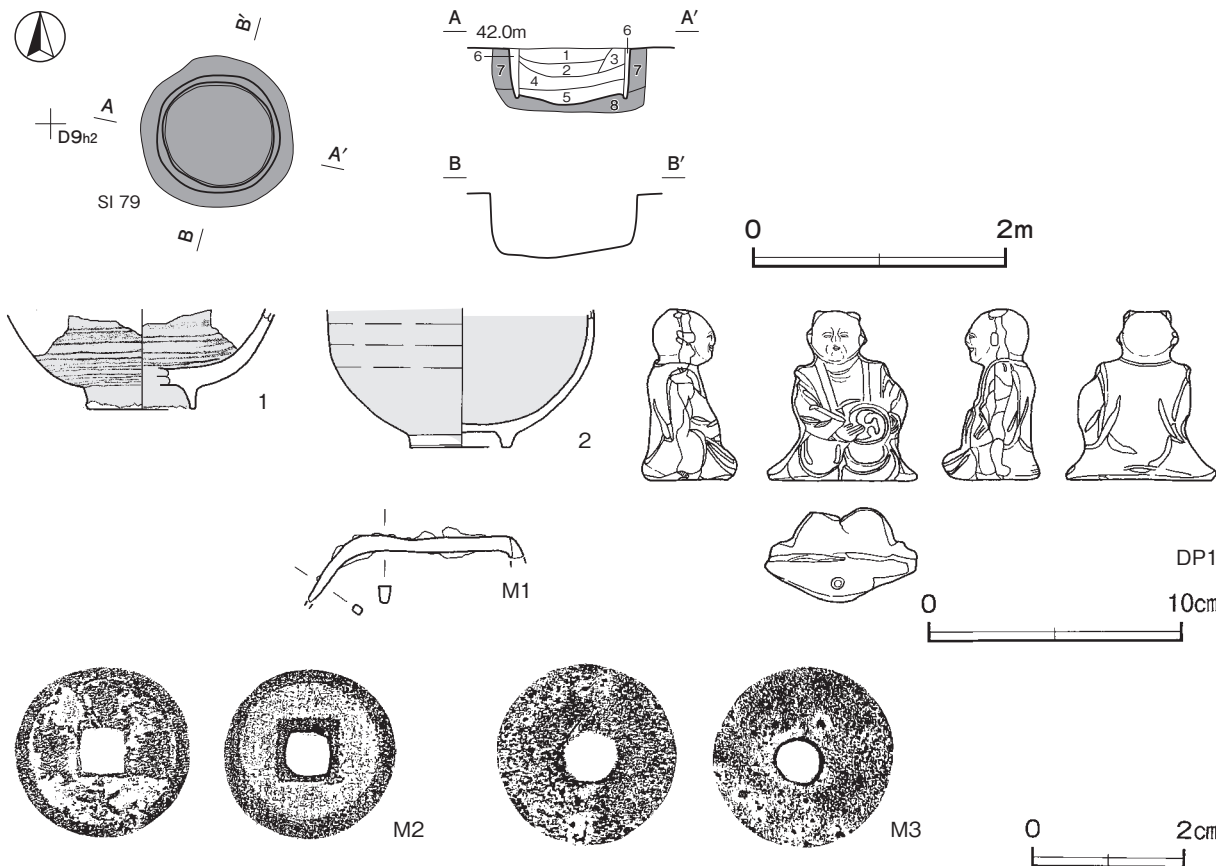
底面及び壁面には、厚さ 10cmほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は径 0.92 m の円形で、深さは 48 cm である。壁は直立し、底面は皿状で、径 90cmほどの樽を据え置いた痕跡を確認した。

覆土 6層に分層できる。第1～5層はロームブロックが含まれていることから埋め戻されているが、第5層は、樽内に貯められた液体の沈澱物と混合している可能性がある。第6層は樽の腐食土、第7・8層は樽を固定した埋土である。覆土の自然科学分析については、付章を参照されたい。

土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------|--------|--------------------|
| 1 にぶい黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 5 褐灰色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 | 6 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 7 灰黄褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 8 灰白色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片 2点 (皿), 瓦質土器片 2点 (鉢), 陶器片 3点 (碗 2, 甕類 1), 磁器片 5点 (碗), 土製品 1点 (土人形), 金属製品 2点 (鎌, 銚子), 銭貨 2点 (寛永通寶, 雁首銭) が、覆土中から出土している。
所見 時期は、出土遺物から 18 世紀前葉に比定できる。性格は、第 11・16 号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられていることから、水槽などの貯水施設が考えられる。



第 438 図 第 16 号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第 16 号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第 438 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	-	(4.0)	[4.2]	緻密・灰褐	体部外・内面ロクロ刷毛目	鉄釉, 白泥釉	唐津系	覆土中	30% PL99
2	陶器	碗	-	(5.5)	4.0	緻密・灰白	-	灰釉	大堀相馬産	覆土中	50% PL99

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴		出土位置	備考
DP 1	土人形	6.7	6.0	3.7	41.67	赤色粒子	にぶい橙	表・裏面型押し後貼り付け 孔 雲母装飾 鼓と唐子	底面一方向からの穿	覆土中	PL100

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M 1	鏝	(8.5)	(2.7)	0.5～ 0.3	(7.62)	鉄	先端部欠損 方形	体部断面方形もしくは長方形	先端部近辺断面長	覆土中	

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴		出土位置	備考
M 2	寛永通寶	2.8	0.6	0.1	4.09	銅	1636	古寛永（Ⅱ期）		覆土中	
M 3	雁首銭	2.8	0.6	0.1	1.41	銅	-	煙管受け部を押圧による加工		覆土中	

第 23 号粘土貼土坑（第 439 図）

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 4i7 区，標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 18 号ピット群との重複は不明である。

規模と形状 掘方の規模は径 1.30 m ほどの円形である。深さは 50cm で，円筒形に掘り込まれている。掘方の底面には厚さ 10cm ほどの粘土が貼り付けられているが，北半部及び南部は確認できなかった。内径 1.20 m の円形で，深さは 40～50cm である。壁はほぼ直立し，底面は皿状である。

覆土 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第 4 層は樽などを固定した埋土で，第 5 層は貼り付けられた粘土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 4 褐灰色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 5 灰白色 | 粘土ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | 炭化物少量，ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 磁器片 1 点（小碗），銭貨 1 点（寛永通寶），瓦片 1 点（棧瓦）が，覆土中から出土している。

所見 時期は，出土遺物から 18 世紀後葉に比定できる。性格は，第 11・16 号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く，粘土が貼り付けられていることから，水槽などの貯水施設が考えられる。

第 23 号粘土貼土坑出土遺物観察表（第 439 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	磁器	小碗	-	(1.9)	[4.0]	緻密・灰白	体部外面菊散らし文。見込み部圏線文に五弁花文。	透明釉 呉須染付	肥前系	覆土中	10%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか		出土位置	備考
T 1	瓦	平瓦	(27.0)	(19.7)	2.0	長石・石英・ 白色粒子	灰白/灰	普通	表・裏面横位のナデ	側面面取り 雲母装飾	覆土中	40%

第 24 号粘土貼土坑（第 439 図 PL58）

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 4i7 区，標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 掘方の規模は径 1.15 m ほどの円形である。深さは 12cm で，円筒形に掘り込まれていたものと推定できる。掘方の底面には厚さ 5～10cm ほどの粘土が貼り付けられている。粘土の内側は遺存状態が悪いことから規模は不明であるが，深さは 2～7cm である。壁はほぼ直立していたものと推定でき，底面は凹凸である。

覆土 単一層である。第1層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第2層は貼り付けられた粘土である。

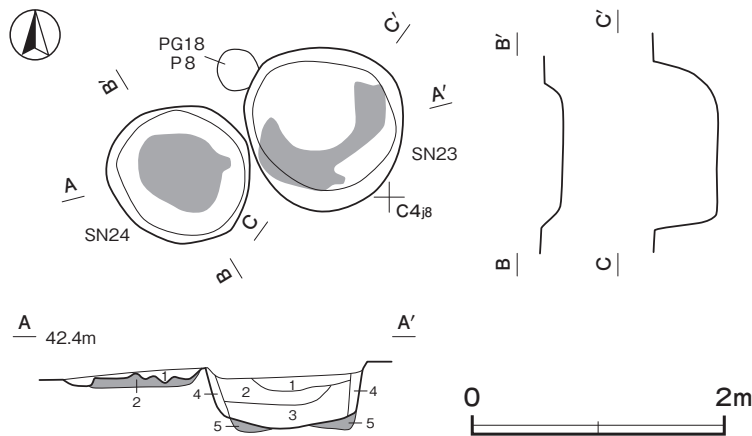
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量

2 灰白色 粘土ブロック中量

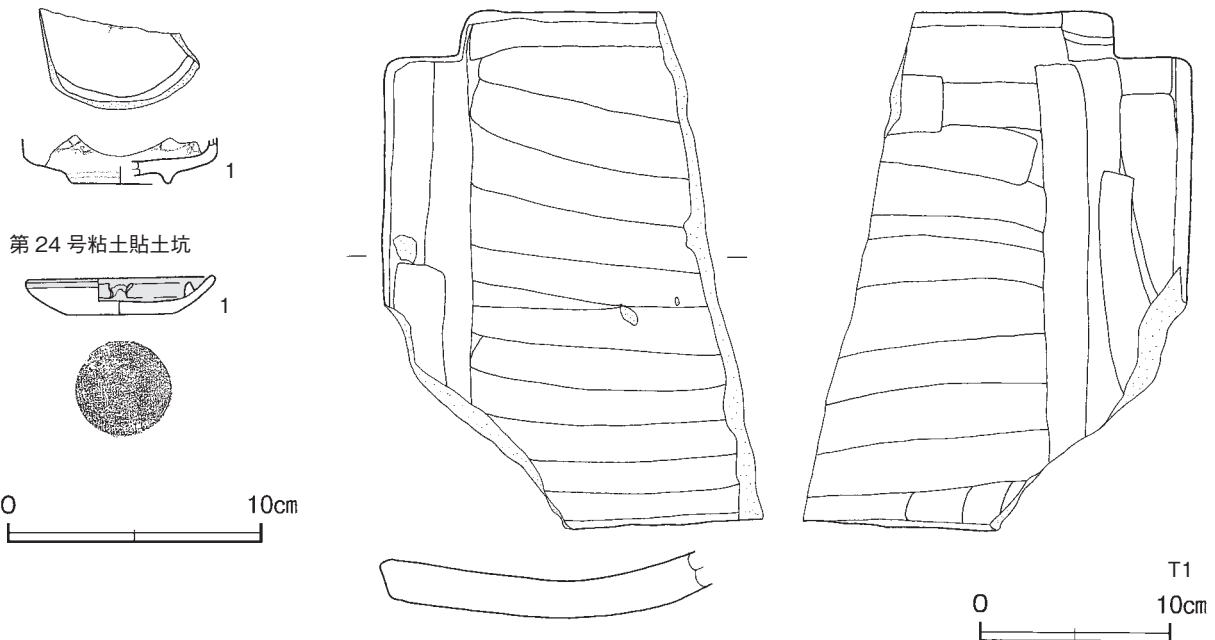
遺物出土状況 陶器片1点（灯明受皿）、銭貨1点（寛永通寶）が、覆土から出土している。

所見 時期は、出土遺物は17世紀後半から19世紀前半の所産であるが、第23号粘土貼土坑と併設されていることから、18世紀後葉に比定できる。性格は、第11・16号粘土貼土坑の自然化学分析から肥溜めなどの可能性は低く、粘土が貼り付けられていることから、水槽などの貯水施設が考えられる。



第23号粘土貼土坑

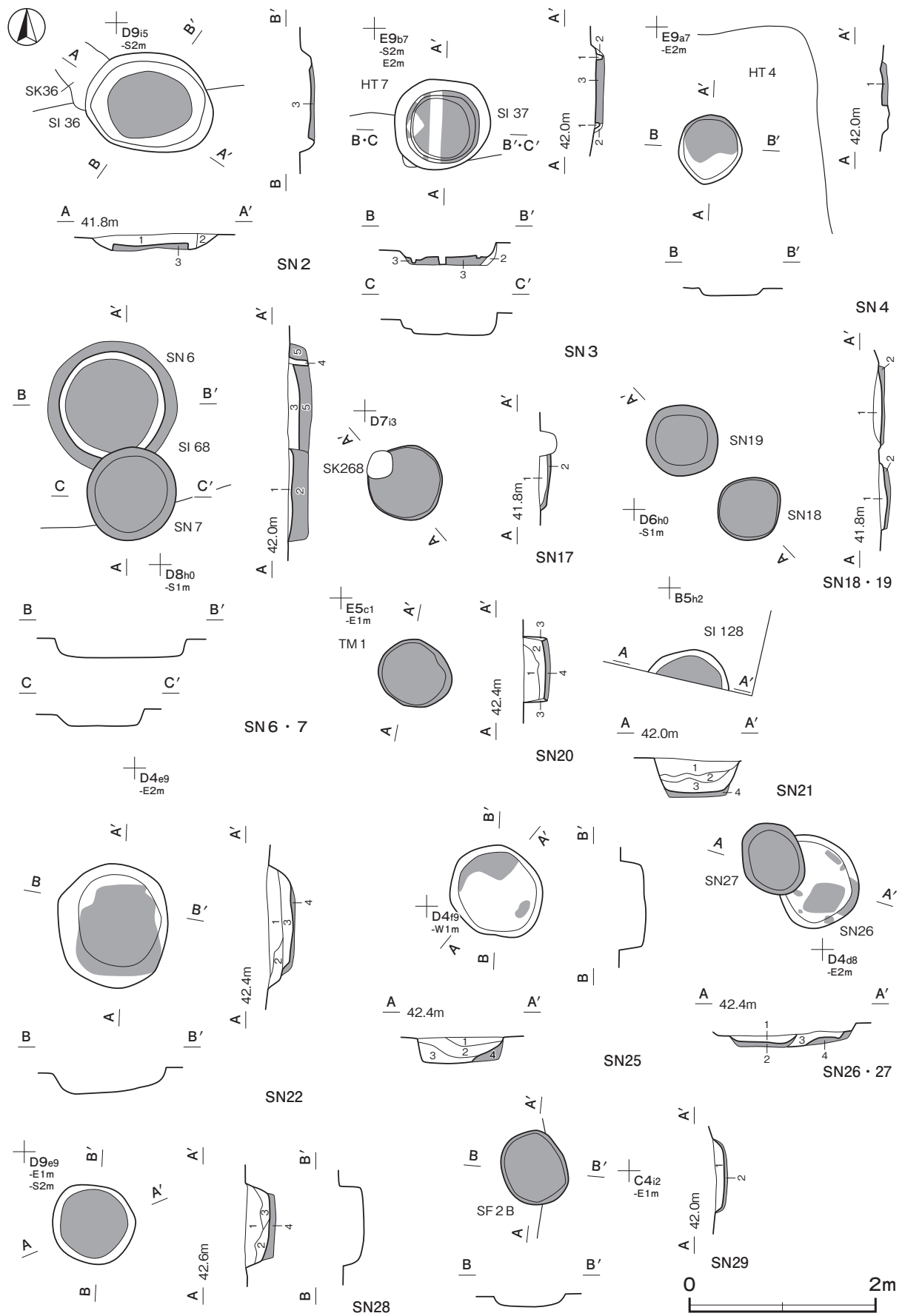
第23号粘土貼土坑



第439図 第23・24号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第24号粘土貼土坑出土遺物観察表（第439図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	手法・文様など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	灯明受皿	7.1	1.4	3.8	緻密・明褐	油切溝切立状	鉄釉	瀬戸・美濃系	覆土中	100% PL99



第 440 図 江戸時代のその他の粘土貼土坑実測図

第2号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

- 3 灰白色 粘土ブロック多量

第3号粘土貼土坑土層解説

- 1 浅黄橙色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化物微量

- 3 灰黄褐色 粘土ブロック中量

第4号粘土貼土坑土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土ブロック多量

第6・7号粘土貼土坑土層解説

- 1 褐灰色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 灰オリーブ色 粘土ブロック中量
- 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物微量

- 4 暗褐色 炭化材・ロームブロック少量
- 5 灰黄褐色 粘土ブロック中量

第17号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

- 2 灰白色 粘土ブロック多量

第18・19号粘土貼土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

- 2 灰白色 粘土ブロック中量

第20号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量

- 3 暗褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック微量
- 4 灰白色 粘土ブロック多量

第21号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・礫少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

- 3 黒褐色 炭化材・礫微量
- 4 浅黄橙色 粘土ブロック多量

第22号粘土貼土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 灰白色 粘土ブロック多量

第25号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量

- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 灰黄色 粘土ブロック中量

第26・27号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量
- 2 灰白色 ロームブロック中量

- 3 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 4 褐灰色 粘土ブロック中量

第28号粘土貼土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

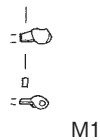
- 3 黒褐色 ロームブロック中量
- 4 灰黄色 粘土ブロック多量

第29号粘土貼土坑土層解説

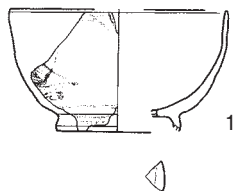
- 1 黒褐色 ローム粒子微量

- 2 褐色 粘土ブロック中量

第6号粘土貼土坑



第18号粘土貼土坑



第441図 第6・18号粘土貼土坑出土遺物実測図

第6号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第441図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	壺金 _カ	(1.2)	(0.6)	(0.5)	(0.81)	銅	軸部先端部尖頭状, 断面長方形 受部円筒形	覆土中	

第18号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第441図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	磁器	碗	[8.5]	4.8	[4.7]	緻密・灰白	体部外面草花文, 高台部に二重線文	透明釉 呉須染付	肥前系	覆土中	10%

表29 江戸時代粘土貼土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	粘土の内側			掘方			覆土	主な出土遺物	備考	
				長径×短径 (m)	深さ (cm)	壁面	底面	長径×短径 (m)	深さ (cm)				断面
1	D 9g2	N - 15° - W	楕円形	0.50 × 0.44	14	ほぼ直立	平坦	0.62 × 0.50	24	円筒形	人為	陶器	
2	D 9i5	N - 64° - W	楕円形	不明	10	ほぼ直立	平坦	1.33 × 1.10	14	[円筒形]	人為	-	SI36 → 本跡 → SK36
3	E 9b7	-	円形	0.82 × 0.82	8	直立	平坦	1.04 × 0.98	24	円筒形	人為	-	SI137, HT 7 → 本跡 PL57
4	E 9a7	N - 10° - E	楕円形	不明	2	外傾	皿状	0.74 × 0.63	10	[円筒形]	-	-	HT 4 → 本跡
5	D 9g2	-	円形	0.80 × 0.80	4	ほぼ直立	皿状	1.05 × 1.05	13	[円筒形]	人為	陶器, 銭貨	SI79 → 本跡
6	D 8g9	-	円形	1.00 × 1.00	11	外傾	皿状	1.40 × 1.36	25	円筒形	人為	金属製品	SI67 → 本跡 → SN 7
7	D 8h9	-	円形	0.80 × 0.80	5	外傾	皿状	1.00 × 1.00	21	円筒形	人為	-	SI68・84 SN 6 → 本跡
8	D 8i9	-	円形	0.90 × 0.90	5	ほぼ直立	皿状	1.00 × 0.92	20	[円筒形]	人為	瓦質土器 陶器	SI85 → 本跡
9	D 8i9	-	円形	0.90 × 0.90	5	外傾	皿状	1.00 × 1.00	15	[円筒形]	人為	土師質土器	SI85 → 本跡
10	D 8j0	-	円形	0.92 × 0.92	12	外傾直立	皿状	1.00 × 1.00	12	[円筒形]	人為	-	
11	D 8j0	-	円形	0.95 × 0.95	8~10	直立	皿状	1.10 × 1.10	15	円筒形	人為	土師質土器, 陶器, 銭貨	SI85 → 本跡
12	D 8j9	N - 15° - E	円形	0.92 × 0.92	15	外傾	皿状	1.05 × 0.95	18	[円筒形]	人為	陶器, 金属製品, 銭貨	SI85・86 → 本跡
13	D 8j9	-	円形	0.90 × 0.90	2~13	直立	皿状	1.05 × 1.05	13	[円筒形]	人為	-	SI85 → 本跡
14	D 8j9	-	円形	0.80 × 0.80	2~12	外傾	皿状	0.95 × 0.95	12	[円筒形]	人為	陶器, 金属製品	SI85・86 → 本跡
15	E 8a9	-	円形	0.90 × 0.90	10	ほぼ直立	皿状	1.05 × 0.98	26	円筒形	人為	土師質土器	SI86 → 本跡
16	D 9h2	-	円形	0.92 × 0.92	48	直立	皿状	1.25 × 1.25	54	円筒形	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 磁器, 土製品, 金属製品, 銭貨	SI79 → 本跡
17	D 7i3	-	円形	不明	8	外傾	皿状	0.82 × 0.82	10	[円筒形]	人為	-	本跡 → SK268
18	D 6h0	-	円形	不明	8	直立	皿状	0.73 × 0.68	12	[円筒形]	人為	磁器	PL57
19	D 6h0	-	円形	不明	10	直立	皿状	0.76 × 0.75	12	[円筒形]	人為	-	PL57
20	E 5c1	N - 45° - W	楕円形	0.74 × 0.66	22	直立	平坦	0.80 × 0.70	28	円筒形	人為 自然	-	TM 1 → 本跡
21	B 5h2	不明	[円形・楕円形]	不明	34	外傾	平坦	0.90 × (0.32)	38	[円筒形]	人為	-	SI128 → 本跡
22	D 4e9	N - 4° - E	楕円形	不明	24	外傾	皿状	(1.34) × 1.25	30	円筒形	人為	銭貨	
23	C 4i7	-	円形	1.20 × 1.20	40~50	ほぼ直立	皿状	1.30 × 1.30	50	円筒形	人為	磁器, 銭貨, 瓦	PG18 との重複不明
24	C 4i7	-	-	不明	2~7	[ほぼ直立]	凹凸	1.15 × 1.15	12	[円筒形]	人為	陶器, 銭貨	
25	D 4e8	N - 44° - W	楕円形	1.06 × 0.92	28	直立	平坦	1.06 × 0.92	23	円筒形	人為	煙管	
26	D 4c8	N - 30° - W	楕円形	1.00 × 0.90	[10]	ほぼ直立	凹凸	1.00 × [0.90]	14	[円筒形]	自然	-	本跡 → SN27
27	D 4c8	N - 20° - W	楕円形	0.80 × 0.65	8	ほぼ直立	皿状	0.80 × 0.68	12	円筒形	自然	-	SN26 → 本跡
28	D 4e9	-	円形	不明	24	外傾	皿状	0.90 × 0.88	28	円筒形	自然	-	
29	C 4h1	N - 20° - W	楕円形	不明	8	ほぼ直立	皿状	0.82 × 0.68	12	円筒形	自然	-	SF 2B → 本跡

(4) 墓坑

第8号墓坑 (第442図)

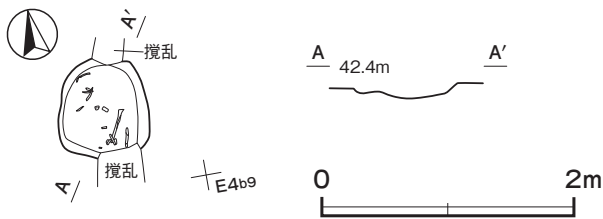
調査年度 平成27年度

位置 調査区西部のE4a8区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長軸0.73m, 短軸0.71mの隅丸方形で, 長軸方向はN-15°-Eである。深さは12cmで, 壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

埋葬及び遺物出土状況 人骨片が底面付近から少量出土しているが, 部位や埋葬状況は不明である。

所見 時期は, 遺構の形状や周辺の墓坑の年代から17世紀以降の江戸時代と考えられる。

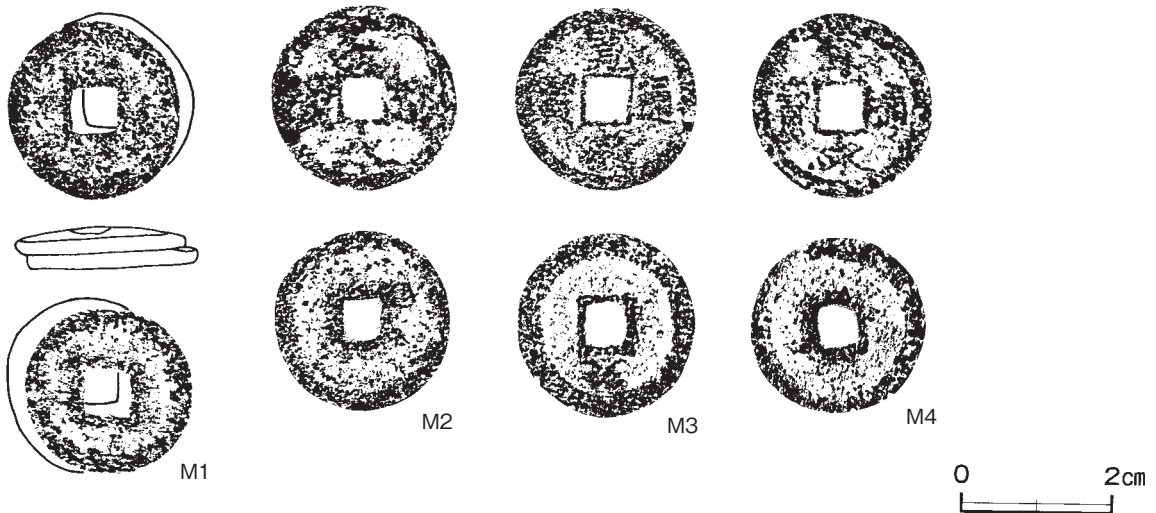
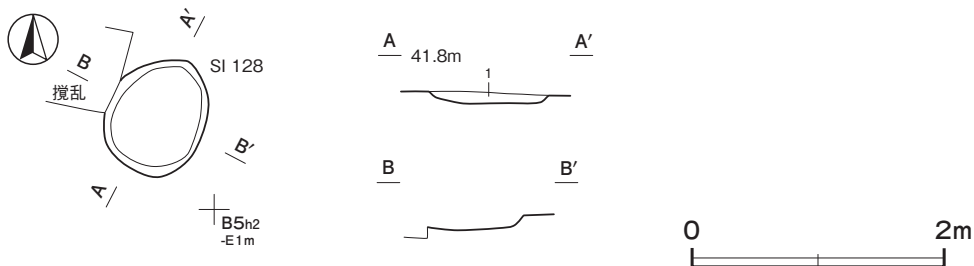


第442図 第8号墓坑実測図

第9号墓坑 (第443図 PL58)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のB5g2区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。



第443図 第9号墓坑・出土遺物実測図

重複関係 第128号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西壁に攪乱を受けているが、長径は0.94 mで、短径は0.78 mの楕円形と推定でき、長径方向はN - 33° - Eである。深さは10cmで、壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋葬時に埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

埋葬及び遺物出土状況 人骨片が底面付近から少量出土しているが、部位や埋葬状況は不明である。出土遺物は銭貨6点（寛永通寶）が、覆土中から出土していることから、副葬品と考えられる。

所見 時期は、出土遺物から、18世紀前葉以降の江戸時代に比定できる。

第9号墓坑出土遺物観察表（第443図）

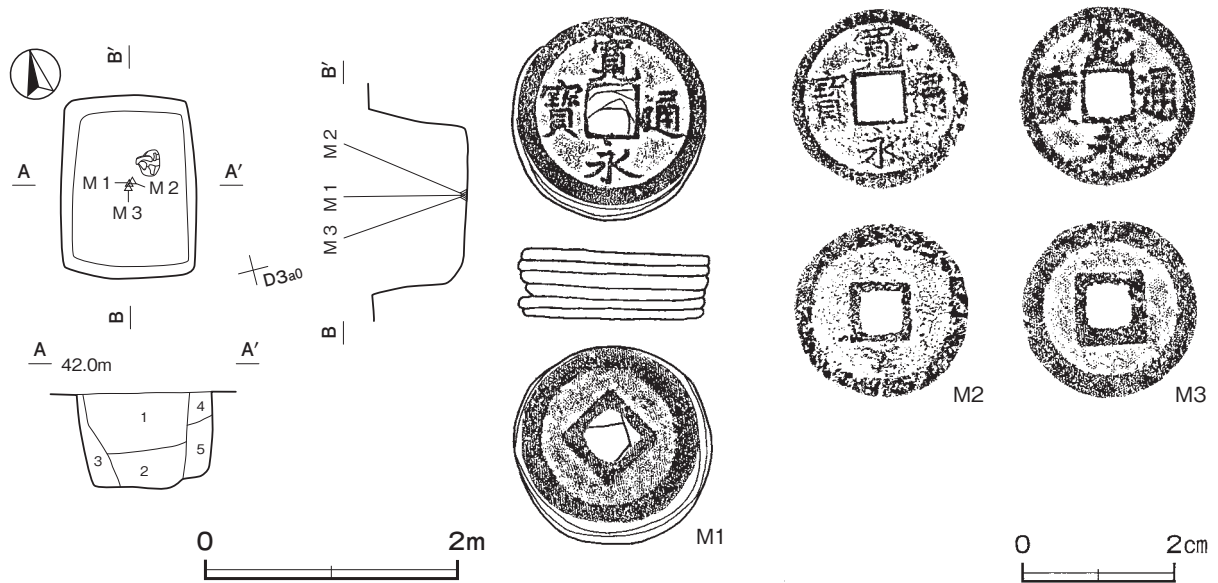
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M 1	不明	23~24	0.5	0.1 × 2	5.41	銅	不明	2枚溶着	覆土下層	
M 2	寛永通寶	2.3	0.5	0.1	3.41	銅	1636	古寛永。(Ⅱ期)	覆土下層	
M 3	寛永通寶	2.4	0.5	0.1	3.35	銅	1636	新寛永(Ⅲ期) 背文	覆土下層	
M 4	寛永通寶	2.3	0.5	0.1	3.31	銅	1697	新寛永(Ⅳ期)	覆土下層	

第10号墓坑（第444図 PL58）

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC3j9区、標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長軸1.46 m、短軸1.08 mの長方形で、長軸方向はN - 12° - Eである。深さは74cmで、壁はほぼ直立している。底面は平坦である。



第444図 第10号墓坑・出土遺物実測図

覆土 5層に分層できる。第3～5層は、埋葬時に棺を安置した際の埋土、第1～3層は棺の内部への崩落及び流入土と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|----------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |

埋葬及び遺物出土状況 頭骨が、中央部北東寄りの覆土下層から出土している。また出土遺物は金属製品2点（釘）、銭貨8点（寛永通寶）で、釘が出土していることから、木棺を用いた座葬の可能性はある。人骨についての詳細は、付章を参照されたい。銭貨は溶着した状態のものが出土していることから、緡銭として副葬品に用いたと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後半以降に比定できる。分析の結果、被葬者は壮年の女性と推定される。

第10号墓坑出土遺物観察表（第444図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 1	寛永通寶	2.3～2.4	0.5	0.1×6	2391	銅	1697	上面新寛永（Ⅳ期）6枚溶着	底面	PL109
M 2	寛永通寶	2.4	0.5	0.1	3.11	銅	1668	新寛永（Ⅲ期）背文	底面	PL110
M 3	寛永通寶	2.3	0.5	0.1	3.21	銅	1636	古寛永（Ⅱ期）	底面	

表30 江戸時代墓坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	埋葬状況	被葬者の特徴	主な出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)							
8	E 4 a8	N - 15° - E	隅丸方形	0.73 × 0.71	12	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	不明	-	人骨	
9	B 5 g2	N - 33° - E	[楕円形]	0.94 × (0.78)	10	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	不明	-	銭貨、人骨	SI128 → 本跡
10	C 3 j9	N - 12° - E	長方形	1.46 × 1.08	74	ほぼ直立	平坦	人為	座葬。木棺。	壮年の女性	金属製品、銭貨、人骨	

(5) 道路跡

第2A号道路跡（第445図 PL56）

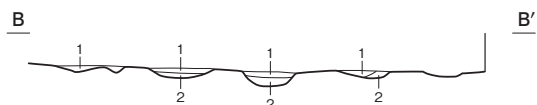
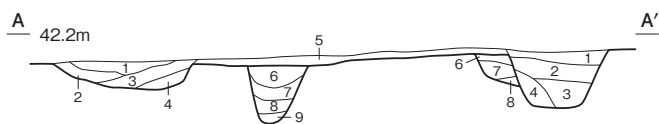
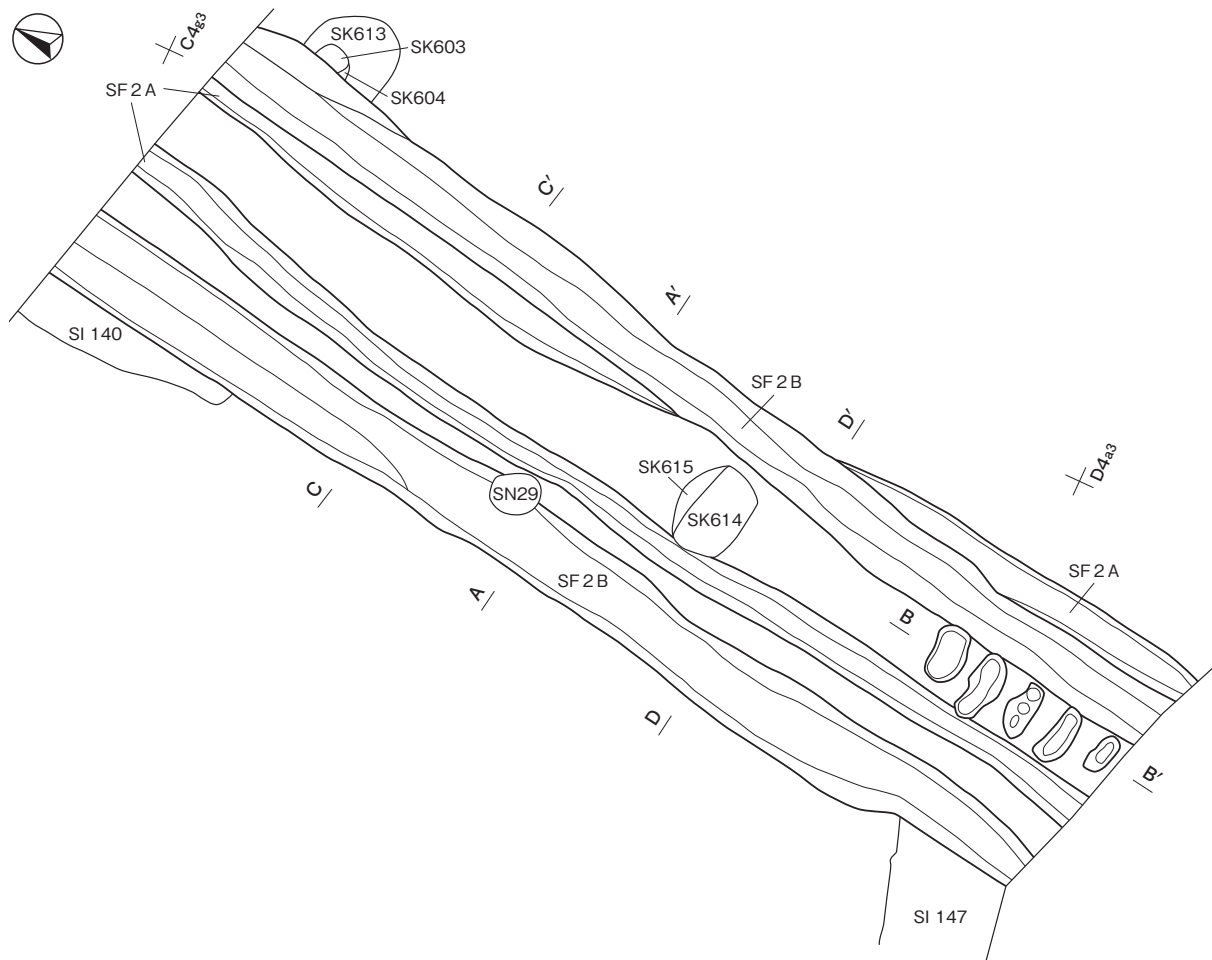
調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC 4 g2～D 4 a2区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第140・147号堅穴建物跡、第613・653号土坑を掘り込み、第2B号道路、第614・615号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端部及び南端部が調査区域外に延びていることから、長さは18.00mしか確認できなかった。D 4 a2区から北方向（N - 12° - E）にほぼ直線状に延び、幅は1.10～1.19mである。硬化面は1面で、地山面が路面として使用され踏み固められている。北端部から中央部の路面はほぼ平坦で、中央部から南に向かって緩やかに低くなっている。

波板状凹凸 南端部に長さ3.60m、幅1.10～1.90mの範囲で波板状凹凸5か所を確認した。第2B号道路跡に掘り込まれているが、平面形は道路の延長方向と直交する長楕円形と推定でき、規模は短径が0.32～0.56mで、長径は0.68～1.16mしか確認できなかった。深さ5～12cmほどである。掘り込みは、0.2～0.3mの間隔で配置されている。覆土は2層で、埋め戻されて突き固められている。また、掘り込みの間合いは平坦で、



第 445 图 第 2 A · B 号道路迹实测图 · 第 2 号出土遗物实测图

上面が固く締まっている。性格は、覆土が固く締まっていることから、路面の補修や強化が考えられる。

波板状凹凸土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 2 暗 褐 色 ロームブロック少量

側溝 2条。側溝1は調査区域外に延びていることから、長さは18.40 mしか確認できなかった。第2号B道路の側溝3に掘り込まれていることから、上幅は0.60 m, 下幅は0.40 mしか確認できなかったが、深さは27～40cmである。断面形は台形で、南方向に緩やかに低くなっている。側溝2は調査区域外に延びていることから、長さは18.00 mしか確認できなかった。第2号B道路の側溝4に掘り込まれていることから、上幅0.40～0.62 m, 下幅は0.16～0.56 mしか確認できなかったが、深さは30～42cmである。断面形は台形もしくはU字状、南方向に緩やかに低くなっている。覆土は4層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。性格は、道路の区画と排水機能を兼ね備えていたと考えられる。

土層解説 (側溝1・2共通)

- 6 暗 褐 色 ロームブロック・炭化物少量 8 暗 褐 色 ロームブロック中量
7 暗 褐 色 ロームブロック少量 9 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 陶器片5点(碗2, 瓶類1, 行平鍋₁, 甕類1)のほか縄文土器片3点(深鉢)が、側溝1・2から出土している。覆土中から出土していることから、投棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土陶器から18世紀後葉の廃絶と考えられる。

第2A号道路跡跡出土遺物観察表 (第445図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	-	(47)	4.7	緻密・浅黄	丸形	灰釉	瀬戸・美濃系	側溝覆土中	60% PL99
2	陶器	行平鍋 ₁	-	(34)	[7.8]	緻密・浅黄	脚部貼付	鉄釉	不明	側溝覆土中	10%

第2B号道路跡 (第445図 PL55)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC4g2～D4a2区, 標高42 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第140・147号竪穴建物跡, 第2A号道路跡, 第599・603・604・613・653号土坑を掘り込み, 第29号粘土貼土坑, 第614・615号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北端部及び南端部が調査区域外に延びていることから、長さは18.20 mしか確認できなかった。D4a2区から北方向(N-10°-E)にほぼ直線状に延び、幅は2.30～2.40 mである。路面は地山面に第5層を構築し、踏み固められている。路面は平坦で、南方向に緩やかに低くなっている。

土層解説 (路面構築土)

- 5 褐 灰 色 ロームブロック中量, 細礫微量

側溝 2条。側溝3は調査区域外に延びていることから、長さ18.00 mしか確認できなかった。上幅0.80～1.24 m, 下幅0.20～0.44 mで、深さ46～60cmである。断面形は台形で、南方向に緩やかに低くなっている。側溝4は調査区域外に延びていることから、長さ18.00 mしか確認できなかった。上幅0.84～1.24 m, 下幅0.40～0.82 mで、深さ20～34cmである。断面形は不整な台形で、南方向に緩やかに低くなっている。覆土は4層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。性格は、道路の区画と排水機能を兼ね備えていると考えられる。

土層解説 (側溝3・4共通)

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量 3 暗 褐 色 ロームブロック中量
2 褐 色 ロームブロック中量 4 褐 灰 色 ロームブロック多量

遺物出土状況 陶器片2点(碗, 甕類)のほか, 縄文土器片4点(深鉢)が, 側溝3・4から出土している。覆土中から出土していることから, 投棄されたと考えられる。

所見 時期は重複関係から, 19世紀前葉以降の廃絶と推定できる。第2号A道路跡より道幅を広げていることから, 当台地上の主要路の可能性はある。

表 31 江戸時代道路跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模		硬化面	波板状凹凸			側溝		主な出土遺物	備考
				長さ(m)	幅(m)		長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	条数	覆土		
2A	C 4 g2 ~ D 4 a2	N - 12° - E	直線状	(18.00)	1.10 ~ 1.19	1面	(0.68) ~ (1.16)	0.32 ~ 0.56	5 ~ 12	2	人為	陶器	SI140・147, SK613・653 → 本跡 → SF 2 B, SK614・615
2B	C 4 g2 ~ D 4 a2	N - 10° - E	直線状	(18.20)	2.30 ~ 2.40	1面	-	-	-	2	人為	陶器	SI140・147, SF 2 A, SK599・603・604・613・653 → 本跡 → SN29, SK614・615

(6) 溝跡

第1号溝跡 (第446図・付図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD10h2 ~ E10h1区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1・18・56号竪穴建物跡, 第3号道路跡, 第3・9号土坑を掘り込み, 第4・6号を土坑に掘り込まれている。

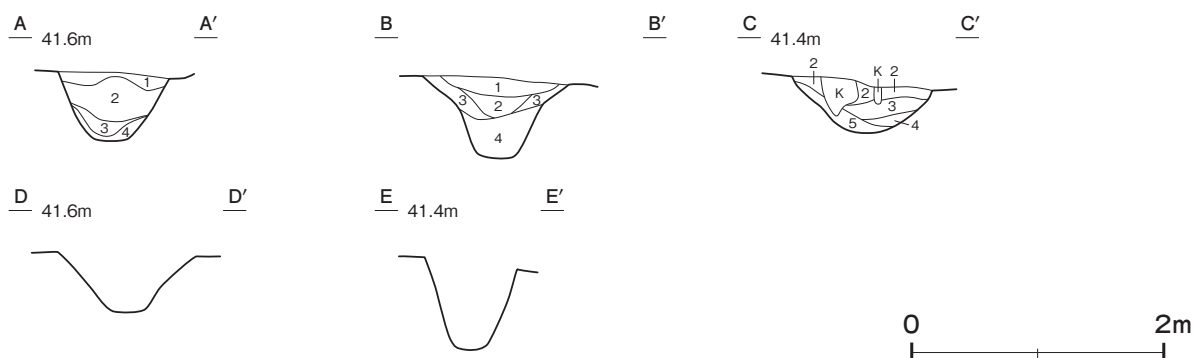
規模と形状 北端部及び南端部が調査区域外に延びていることから, 長さは41.20mしか確認できなかった。E10h1区から北方向(N - 10° - E)へ直線状に延び, 上幅0.60 ~ 1.20m, 下幅0.16 ~ 0.50m, 深さ34 ~ 76cmで, 断面形はU字状もしくは台形状である。壁はほぼ直立もしくは外傾し, 底面は鋤先状の工具痕を残す凹凸で, 中央付近が低くなっている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|--------|-----------|
| 1 褐色 | ロームブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 灰黄褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック少量 | | |

所見 時期は, 遺構に伴う遺物が出土しなかったことから詳細は不明であるが, 第3号道路跡を掘り込んでいることから, 江戸時代以降と推定できる。性格は, 根切り溝が想定できる。



第446図 第1号溝跡実測図

第 15 号溝跡 (第 447 図・付図 PL56)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区中央部の D 4 a2～D 4 c0 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 135・137・148 号竪穴建物跡, 第 1 号円形周溝遺構, 第 16 号溝跡, 第 657 号土坑を掘り込み, 第 23 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東端部および西端部が調査区域外に延びていることから, 長さは 31.00m しか確認できなかった。D 4 c9 区から西方向 (N - 78° - W) へ直線状に延びている。上幅 0.22～0.60 m, 下幅 0.10～0.32 m, 深さ 20～30cm で, 断面形は U 字状である。壁はほぼ直立し, 底面は平坦で西へ向かって低くなっている。

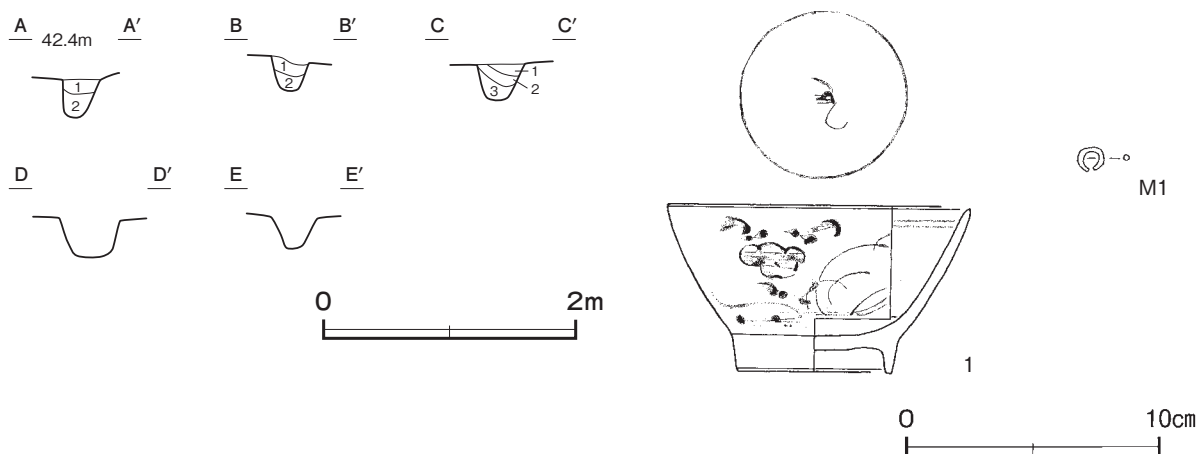
覆土 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 陶器片 3 点 (碗 1, 皿 2), 磁器片 3 点 (碗 2, 花瓶 1), 金属製品 2 点 (釘, 装飾鎖) のほか, 縄文土器片 6 点 (深鉢), 土師器片 4 点 (坏 1, 甕類 3), 須恵器片 1 点 (甕類) が, 主に全域に散在している。

所見 時期は, 出土土器から 18 世紀前葉から中葉に比定できる。



第 447 図 第 15 号溝跡・出土遺物実測図

第 15 号溝跡出土遺物観察表 (第 447 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
仮 1	磁器	碗	11.9	6.6	6.2	緻密・灰白	広東形 口縁部内面二重圏線文 体部草花文 見込み部圏線文に草花文	透明釉 呉須染付	波佐見・平戸系	覆土中	90% PL99
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M 1	装飾鎖	1.0	1.0	0.2	0.47	銅	C 字状 断面円形		覆土中		

表 32 江戸時代溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	D10h2～E10h1	N - 10° - E	直線状	(41.20)	0.60～1.20	0.16～0.50	34～76	U 字状 台形状	ほぼ直立 外傾	人為	-	SI1・18・56, SF 3, SK 3・9→本跡 →SK 4・6
15	D 4 a2～D 4 c0	N - 78° - W	直線状	(31.00)	0.22～0.60	0.10～0.32	20～30	U 字状	ほぼ直立	人為	陶器, 磁器, 金属製品	SI135・137・148, 第 1 号 円形周溝遺構, SD16, SK657→本跡→SD23

(7) 土坑

今回の調査で、当時代の土坑 37 基を確認した。形状や遺物出土状況などから特徴的な土坑 11 基については、文章と実測図、遺物観察表で解説する。その他の 26 基については、実測図、一覧表を掲載する。

第7号土坑（第448図 PL58）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD 10j1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号竪穴建物跡、第5号土坑を掘り込み、第8号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.05m、短軸2.02mの方形である。深さは80cmで、壁は直立している。底面はほぼ平坦である。

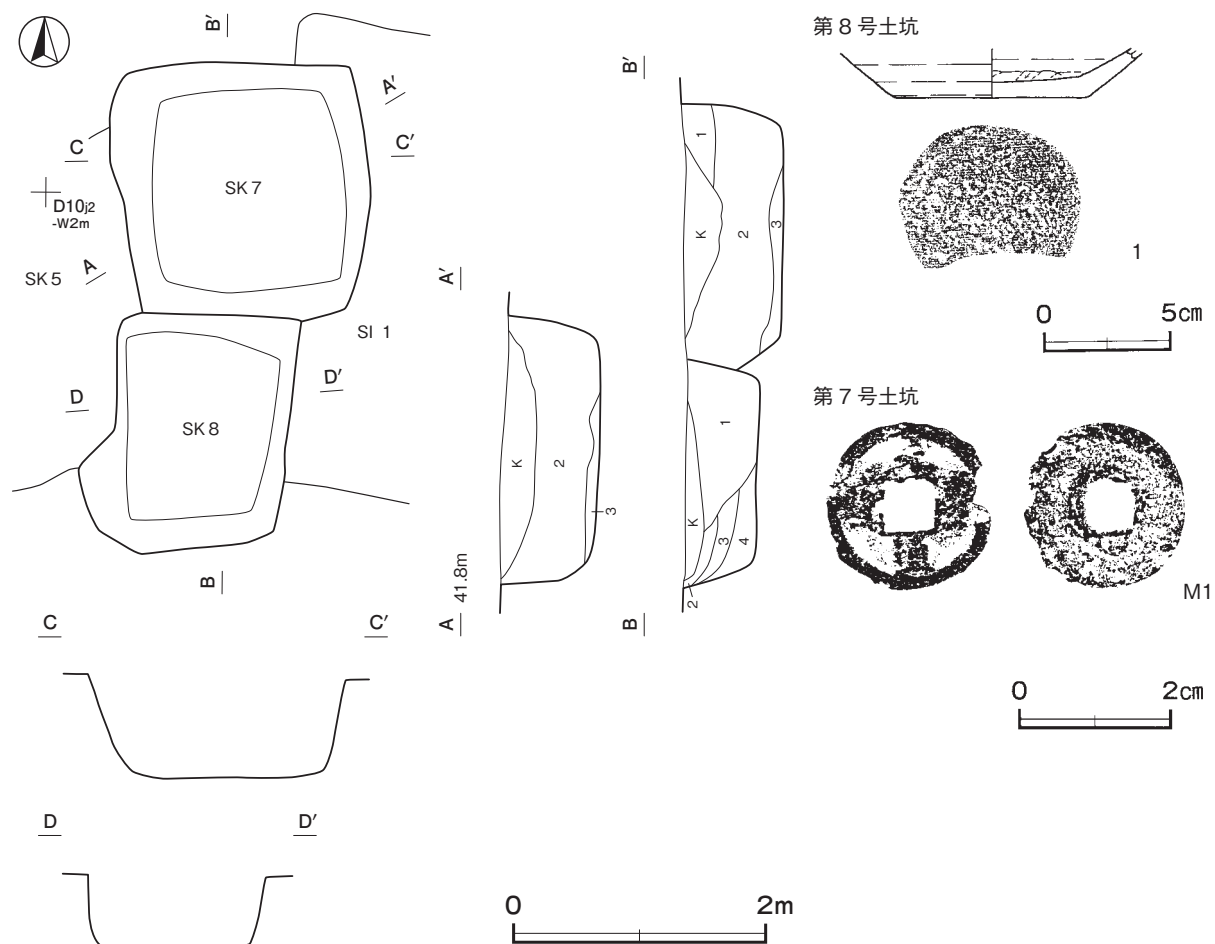
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 におい黄褐色 ロームブロック多量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 銭貨1点（元豊通寶）のほか、縄文土器片2点（深鉢）、土師器片8点（坏1、甕類7）が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物からは明確にできないが、重複関係から17世紀中葉から18世紀前半以前と考えられる。性格は不明である。



第448図 第7・8号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表（第448図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 1	元豊通寶	2.2	0.6	0.1	1.77	銅	1659	行書体 北宋銭模倣の私鑄銭。	覆土中	

第8号土坑（第448図 PL58）

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD 10j1区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号竪穴建物跡、第5・7号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.90m、短軸1.64mの長方形で、長軸方向はN-2°-Eである。深さは55cmで、壁は直立している。底面はほぼ平坦である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐灰色 ロームブロック多量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿）が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀前半に比定できる。性格は不明である。

第8号土坑出土遺物観察表（第448図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	-	(19)	[7.6]	雲母・針状物質・白色粒子	にぶい橙	普通	体部ロクロナデ 底部外面回転糸切り後ナデ、内面一方向のナデ	覆土中	40% PL99

第91号土坑（第449図）

調査年度 平成26年度

位置 調査区東部のE 8a0区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

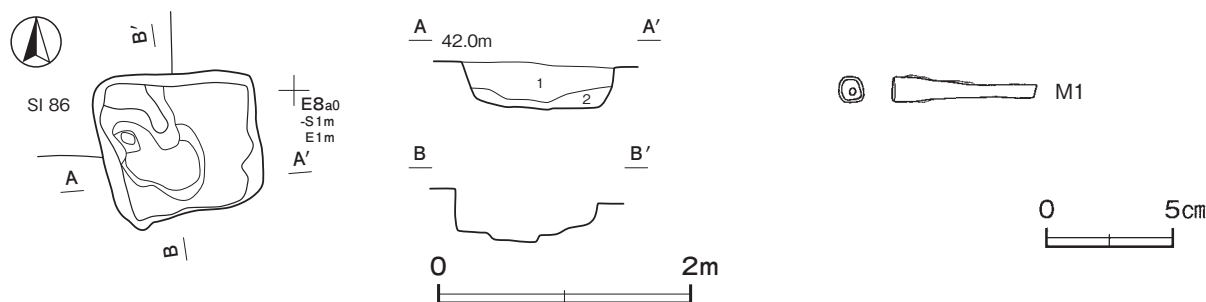
重複関係 第86号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.25m、短軸1.10mの長方形で、長軸方向はN-82°-Eである。深さは34cmで、壁は直立している。底面は凹凸である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐灰色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量



第449図 第91号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿），金属製品1点（煙管）が，覆土中から出土している。

所見 時期は，出土遺物から18世紀後葉と推定できる。性格は不明である。

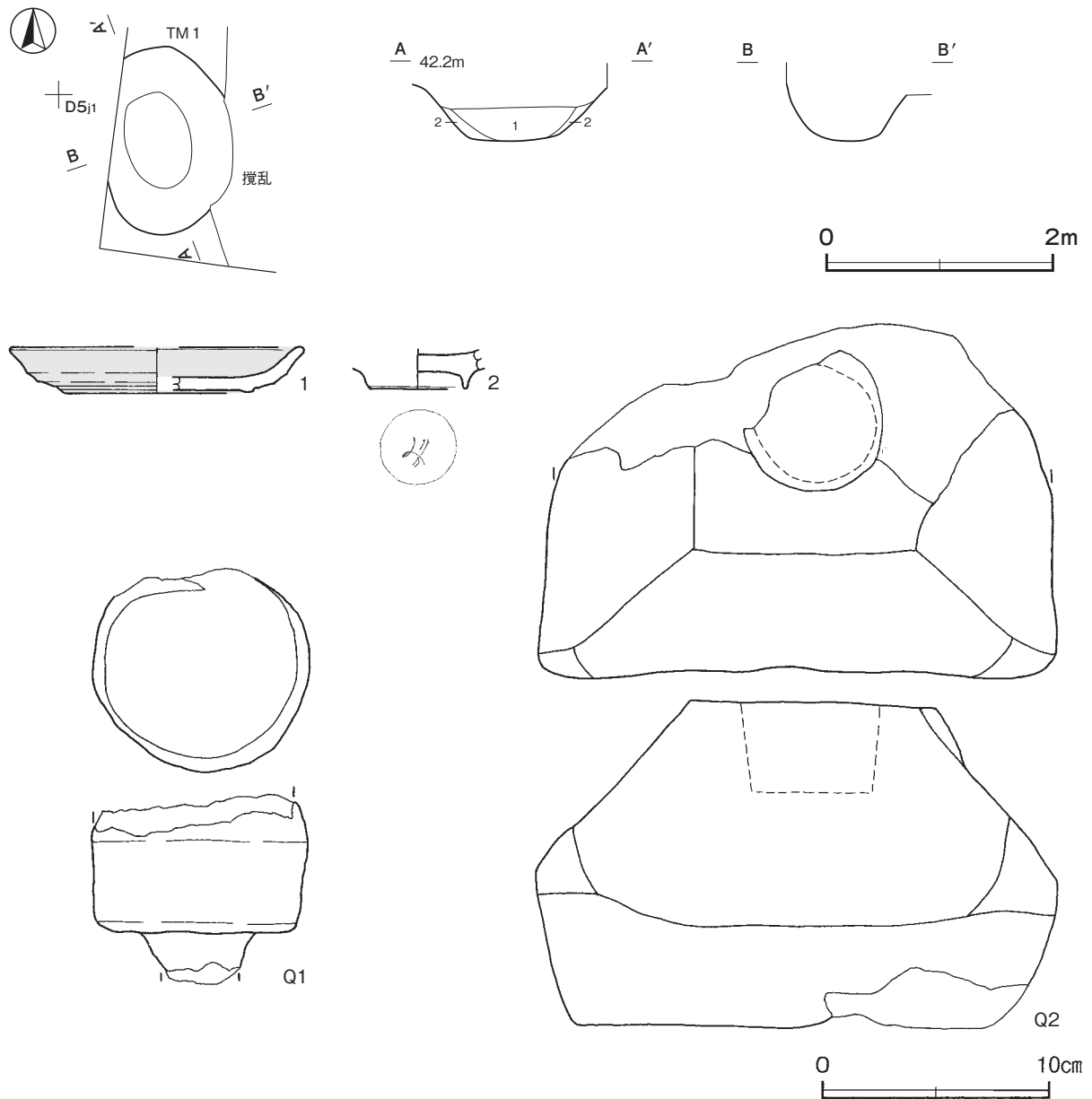
第91号土坑出土遺物観察表（第449図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	煙管	(5.7)	1.0	0.3	(4.11)	銅	吸口部 銅板折り曲げ貼り付け加工	覆土中	

第433号土坑（第450図）

調査年度 平成27年度

位置 調査区中央部のD5j1区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。



第450図 第433号土坑・出土遺物実測図

重複関係 第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が攪乱を受け、西部が調査区域外に延びているが、長径1.64 m、短径は1.24 mの楕円形と推定できる。長径方向はN-13°-Wである。深さは50cmで、壁は外傾している。底面は皿状である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 陶器片3点（碗1、皿2）、磁器片1点（碗）、石製品2点（五輪塔）のほか、土師器片1点（高台付坏）が、覆土中から出土している。出土遺物の多くは、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後葉と考えられる。性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑として使われたと考えられる。

第433号土坑出土遺物観察表（第450図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	皿	[13.0]	2.0	[8.0]	緻密・浅黄	漬掛釉	灰釉	瀬戸・美濃系	覆土中	10%
2	磁器	碗	-	(1.7)	4.3	緻・灰白	高台部外面二重線文、内面草花文に圈線文	透明釉 呉須染付	波佐見・平戸系	覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	五輪塔	(9.0)	9.4	9.0	(652.33)	凝灰岩	空風輪 上部・下部欠損 全面削り後研磨調整	覆土中	
Q2	五輪塔	14.5	23.0	(15.7)	(5.400)	砂岩	火輪 半部欠損 上面・側面削り後研磨調整 上面凹部径6.3cm、深さ4.0cm 下面削り調整を残す	覆土中	PL107

第459号土坑（第451図 PL58）

調査年度 平成27年度

位置 調査区中央部のD5a6区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第96号竪穴建物跡、第12号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.31 m、短径1.60 mの楕円形で、長径方向はN-87°-Wである。深さは78cmで、壁はほぼ直立している。底面はほぼ平坦である。

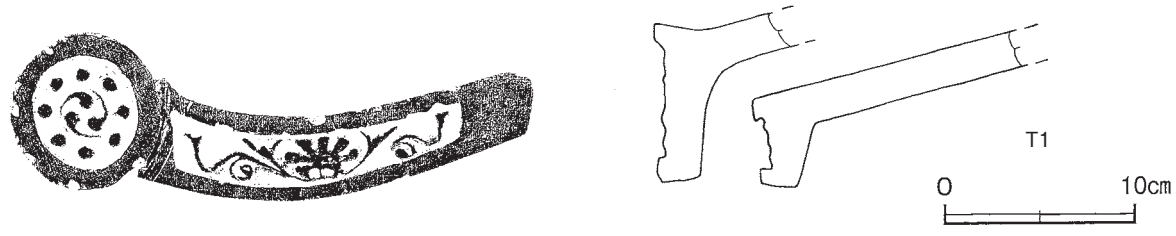
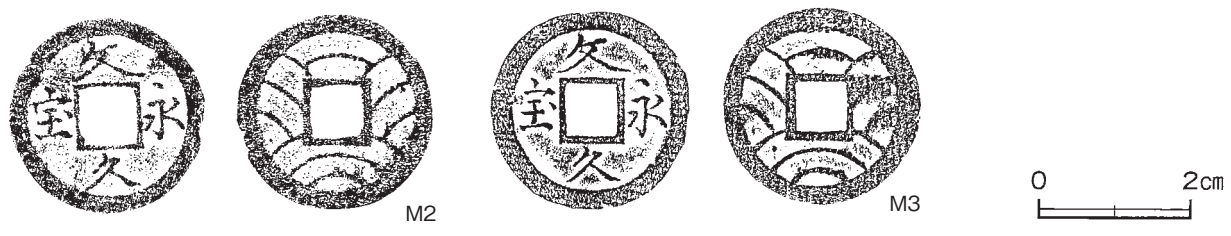
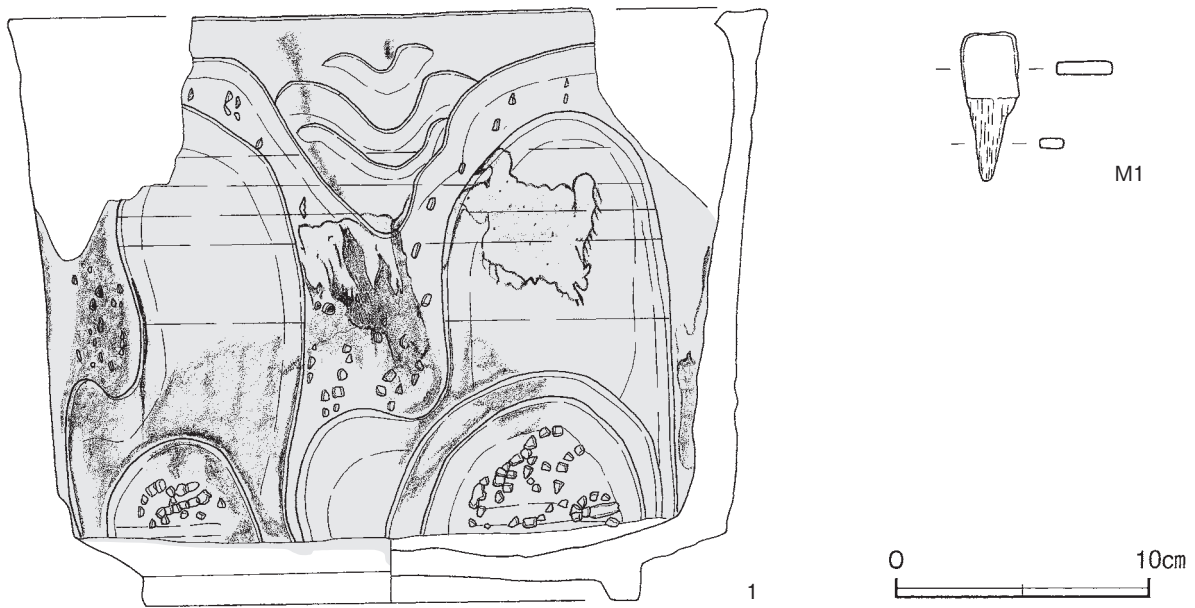
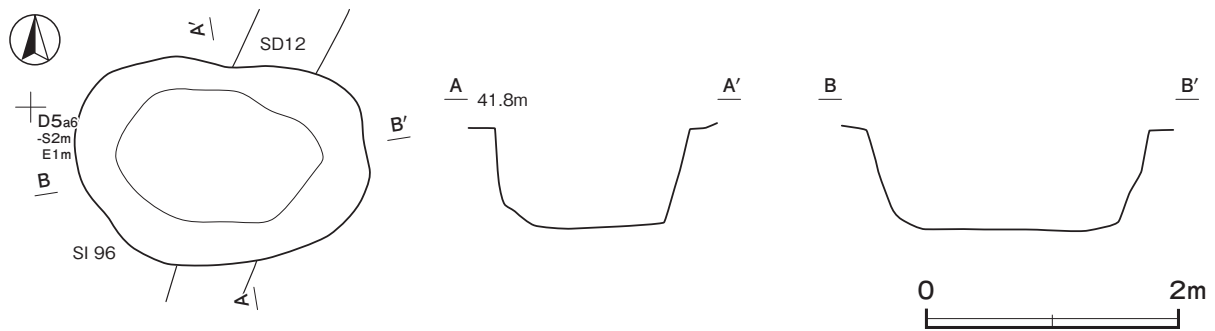
遺物出土状況 土師質土器片1点（甕類）、瓦質土器片1点（鉢類）、陶器片2点（鉢類）、金属製品1点（鏝₉）、銭貨2点（文久永宝）、瓦2点（軒棧瓦）のほか、縄文土器片3点（深鉢）、弥生土器片1点（壺類）が、覆土中から出土している。出土遺物の多くは、埋め戻しに伴って投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から19世紀中葉と推定できる。性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑として使われたと考えられる。

第459号土坑出土遺物観察表（第451図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	水鉢	[30.1]	23.4	[19.6]	緻密・灰オリーブ	ヘラ削り・串穴による流水文	灰釉 鉄釉	瀬戸・美濃系	覆土中	70% PL99

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鏝 ₉	(5.9)	2.3	0.5	(13.62)	鉄	身部先端欠損、断面長方形 柄部木材一部残存、断面長方形	覆土中	



第 451 図 第 459 号土坑・出土遺物実測図

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 2	文久永宝	2.8	0.6	0.1	3.03	銅	1863	四文銭 背面 11 波	覆土中	
M 3	文久永宝	2.8	0.5	0.1	3.57	銅	1863	四文銭 背面 11 波	覆土中	PL110

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T 1	瓦	軒棧瓦	(9.1)	28.8	1.9～8.0	長石・石英・針状物質	灰白/灰	良好	丸区八連珠に左三巴 平区唐草文 雲母装飾	覆土中	PL107

第 555 号土坑 (第 452 図)

調査年度 平成 27 年度

位置 調査区西部の C 4 g0 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 径 1.60 m ほどの円形である。深さは 62cm で, 壁は外傾している。底面はほぼ平坦である。

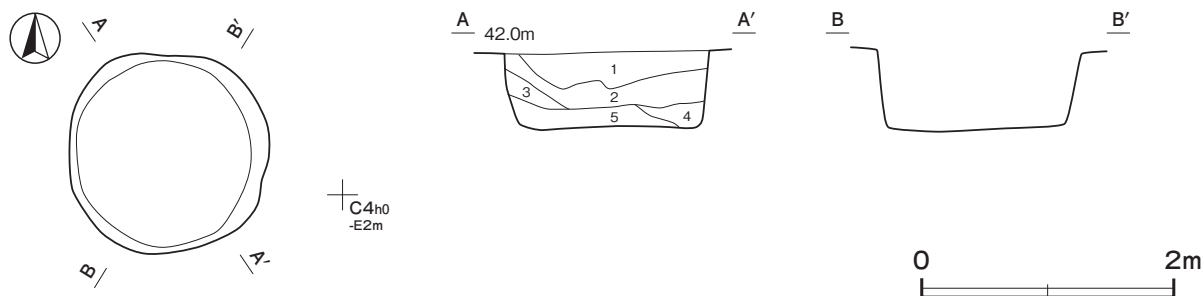
覆土 5 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | | |

遺物出土状況 金属製品 1 点 (不明), 銭貨 2 点 (寛永通寶) のほか, 縄文土器片 27 点 (深鉢), 弥生土器片 1 点 (壺類) が, 出土している。

所見 時期は, 破損している銭貨の 1 枚は古段階の寛永通寶の特徴がみられることから, 18 世紀前葉以降と考えられる。性格は不明である。



第 452 図 第 555 号土坑実測図

第 560 号土坑 (第 453 図 PL58)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 4 f0 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 558・559・573・582 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.60 m, 短軸 2.20 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 15° - E である。深さは 78cm で, 壁は直立している。底面はほぼ平坦である。

覆土 5 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

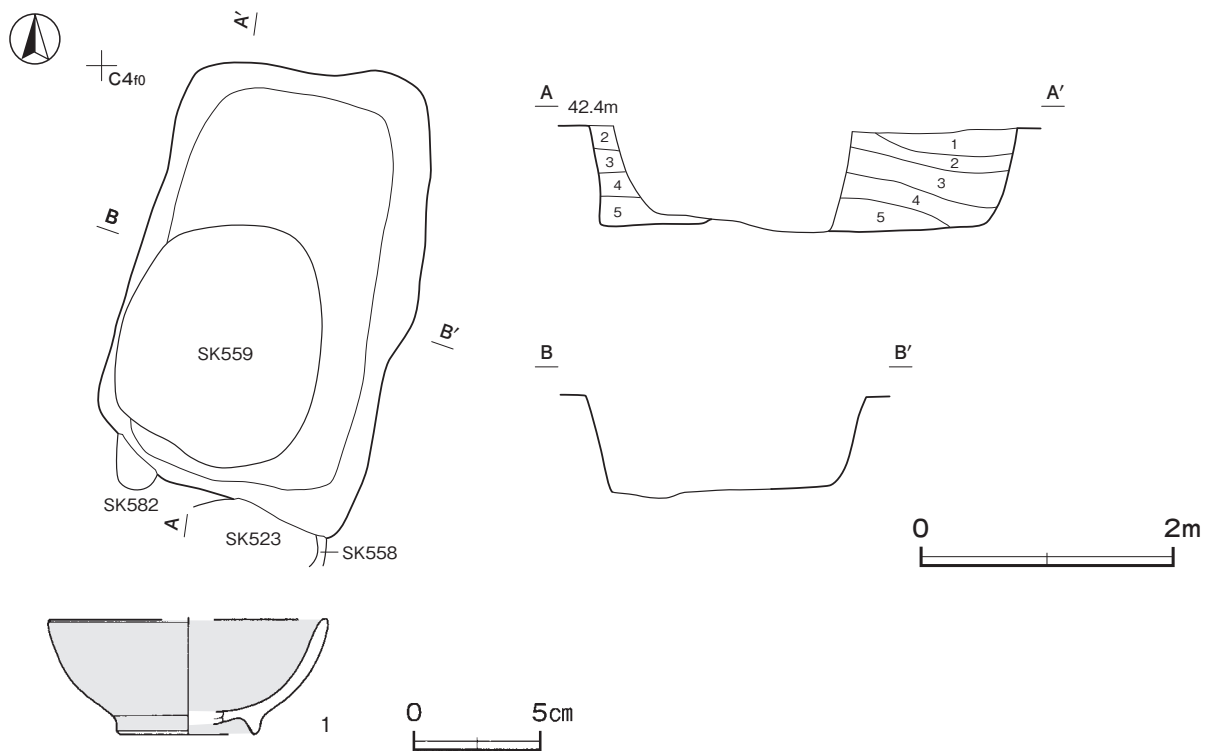
土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 瓦質土器片 1 点 (鉢), 陶器片 2 点 (碗, 瓶類), 磁器片 1 点 (猪口) のほか, 土師器片 1 点 (甕類), 須恵器片 1 点 (甕類) が, 覆土中から出土している。出土土器の多くは, 埋め戻しに伴って投棄されたものと

考えられる。

所見 時期は、出土遺物から18世紀前葉と考えられる。性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑として使われたと考えられる。



第 453 図 第 560 号土坑・出土遺物実測図

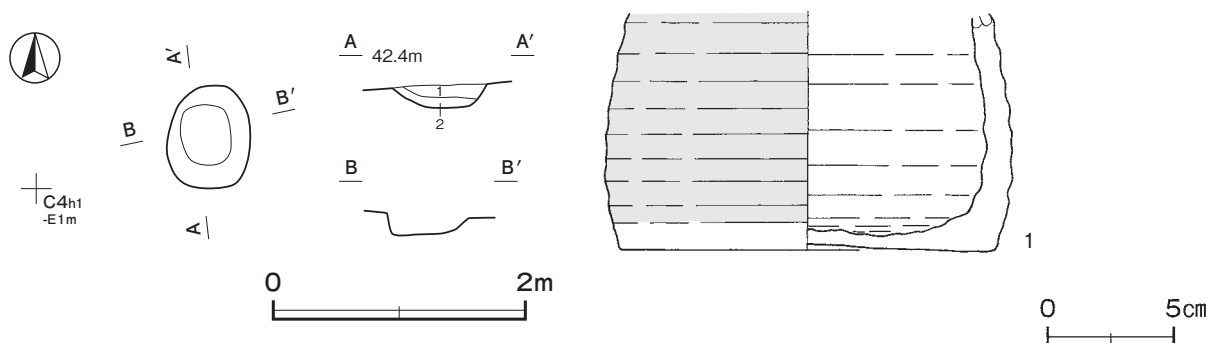
第 560 号土坑出土遺物観察表 (第 453 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	[11.0]	4.6	[5.6]	緻密・にぶい橙	漬掛釉	鉄釉	肥前系	覆土中	40% 二次焼成

第 611 号土坑 (第 454 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 4g1 区、標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 454 図 第 611 号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径 0.80 m, 短径 0.68 m の楕円形で, 長径方向は N - 10° - E である。深さは 15cm で, 壁は直立もしくは外傾している。底面はほぼ平坦である。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

1 褐灰色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片 1 点 (徳利) が, 覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土遺物から 17 世紀後葉に比定できる。性格は不明である。

第 611 号土坑出土遺物観察表 (第 454 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	徳利	-	(9.4)	[14.9]	緻密・浅黄	漬掛釉 舟徳利	鉄釉	瀬戸・美濃系	覆土中	40% PL99

第 614 号土坑 (第 455 図)

調査年度 平成 28 年度

位置 調査区西部の C 4 i2 区, 標高 42 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 2 A・B 号道路跡, 第 615 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 1.46 m, 短軸 0.85 m の隅丸長方形で, 長軸方向は N - 75° - W である。深さは 44cm で, 壁は外傾している。底面はほぼ平坦である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

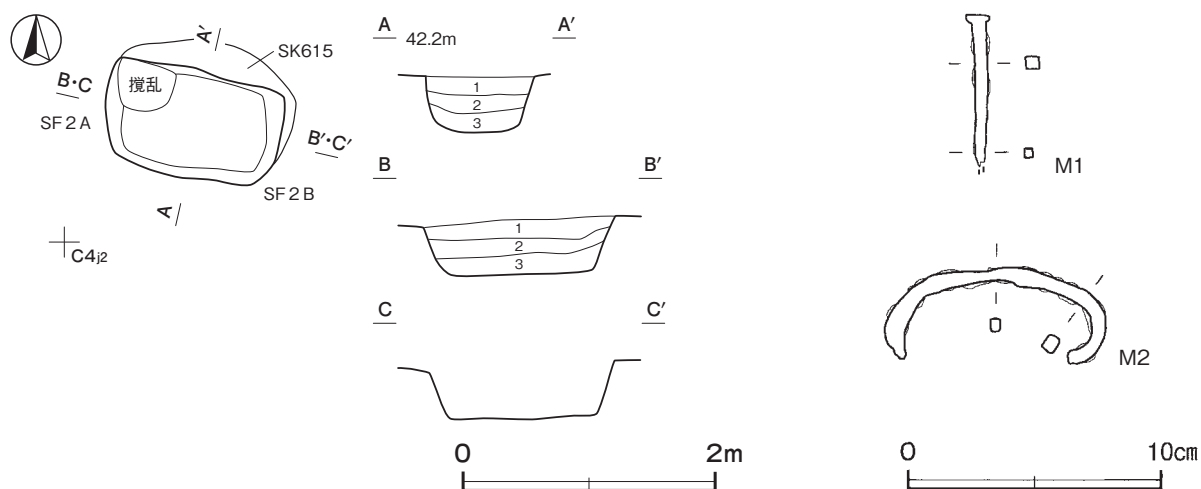
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量

3 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 瓦質土器片 1 点 (鉢), 金属製品 4 点 (釘 3, 取手_カ 1) ほか, 土師器片 1 点 (甕類) が覆土中から出土している。



第 455 図 第 614 号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土遺物からは明確にできないが、重複関係から19世紀前葉以降に比定できる。性格は不明である。

第614号土坑出土遺物観察表（第455図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	釘	(6.1)	1.0	0.5	(5.58)	鉄	先端部欠損 頭頂面長方形 身部断面方形	覆土中	
M2	取手	8.8	3.9	0.6	(13.52)	鉄	先端部一方欠損 体部断面方形もしくは長方形 先端部断面長方形	覆土中	

第652号土坑（第456図）

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC4j8区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第649号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.94m、短径1.82mの不定形で、長径方向はN-44°-Wである。深さは34cmで、壁は外傾している。底面は皿状である。

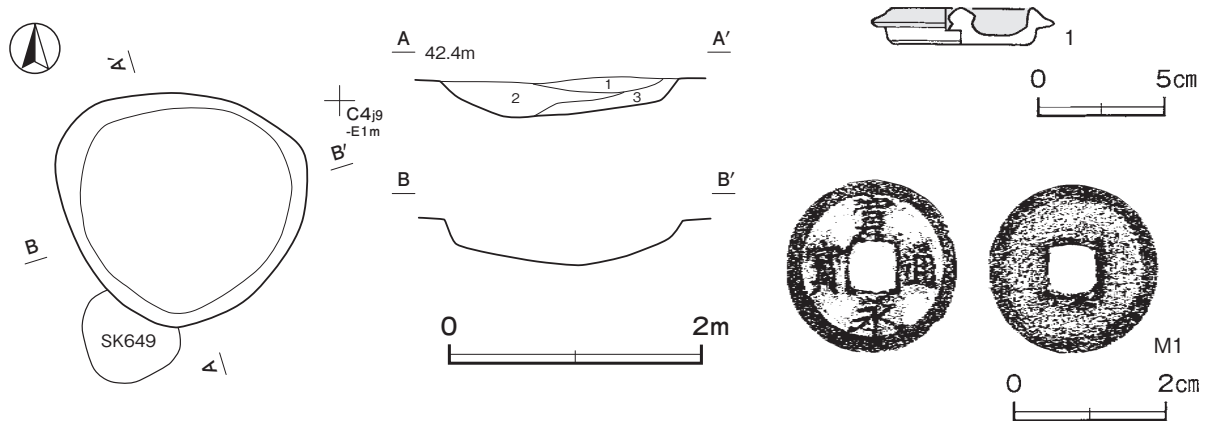
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、細礫微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 陶器片1点（蓋）、銭貨1点（寛永通寶）、瓦1点（平瓦）が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から19世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第456図 第652号土坑・出土遺物実測図

第652号土坑出土遺物観察表（第456図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴など	釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	蓋	7.1	2.0	5.2	緻密・にぶい黄褐色	摘部貼付	鉄釉	瀬戸・美濃系	覆土中	90%

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通寶	2.5	0.5	0.1	2.36	銅	1697	新寛永（IV期）	覆土中	

第716号土坑（第457図 PL58）

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC3g9区，標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第129号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.45m，短径0.78mの楕円形で，長径方向はN-19°-Eである。深さは50cmで，壁は直立している。底面は段を有している。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

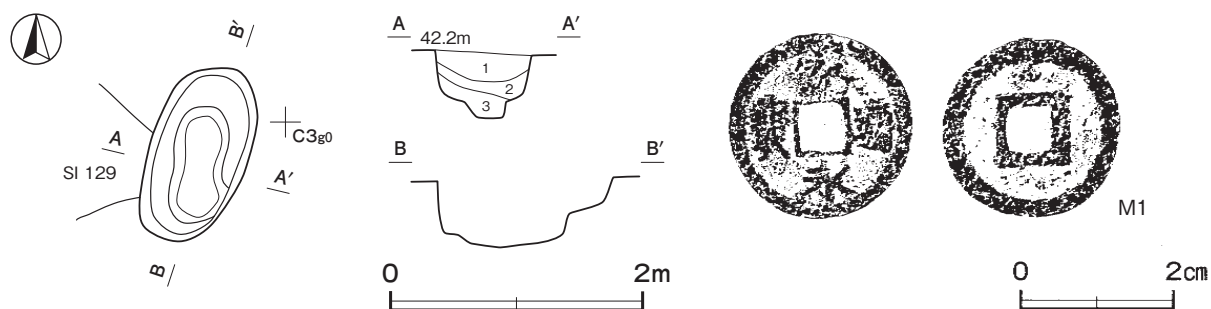
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量

3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 銭貨2点（寛永通寶）のほか，縄文土器片8点（深鉢）が，覆土中から出土している。埋め戻しに伴って投棄されたと考えられる。

所見 時期は，出土遺物から17世紀中葉以降に比定できる。性格は不明である。



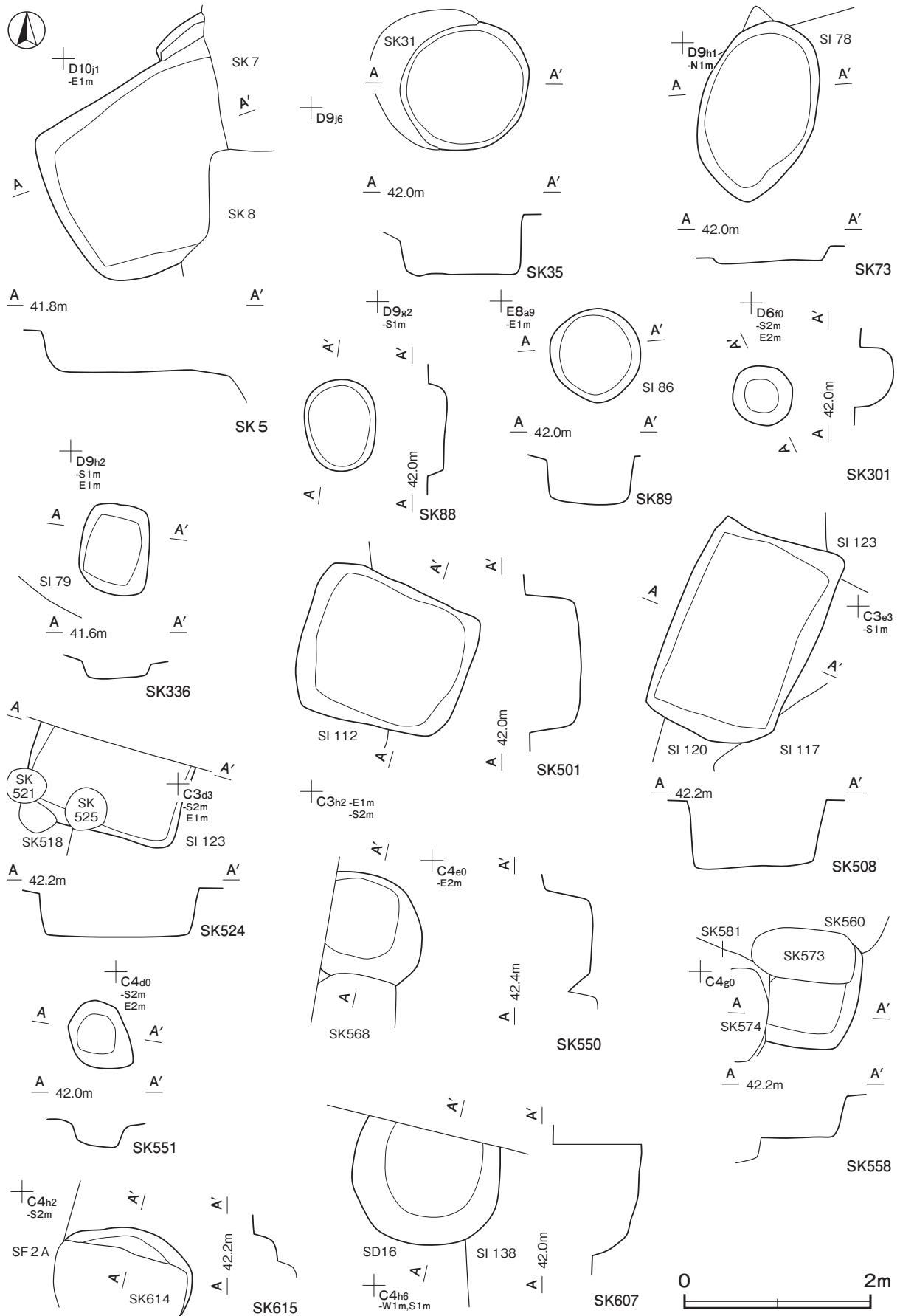
第457図 第716号土坑・出土遺物実測図

第716号土坑出土遺物観察表（第457図）

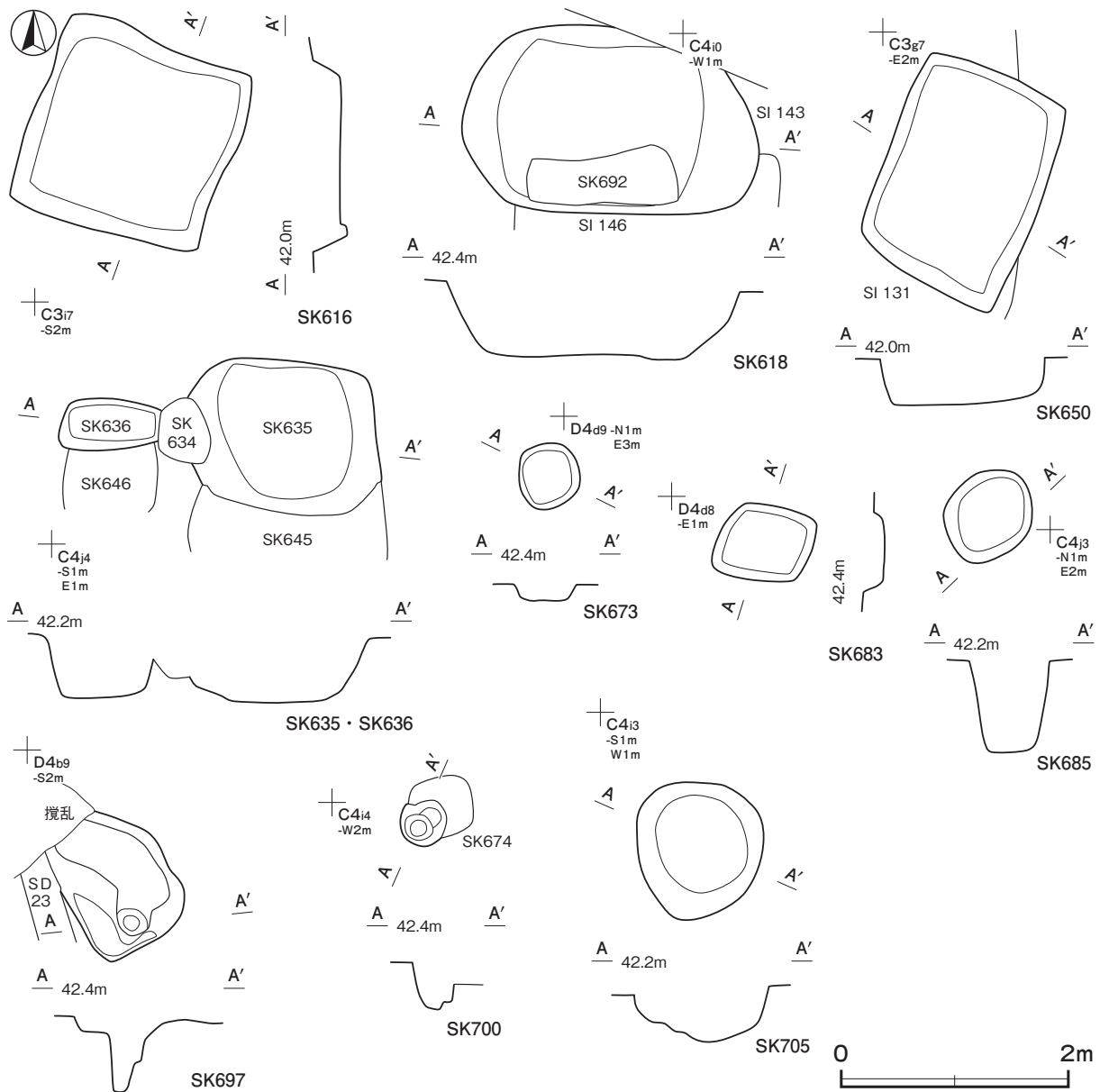
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通寶	2.5	0.5	0.1	4.27	銅	1636	古寛永（Ⅱ期）	覆土中	

表33 江戸時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
5	D10j1	N-56°-E	[長方形]	(2.18) × (1.97)	80	ほぼ直立	平坦	人為	-	本跡→SK7・8 PL58
7	D10j1	-	方形	2.05 × 2.02	80	直立	ほぼ平坦	人為	銭貨	SI1, SK5→本跡→SK8
8	D10j1	N-2°-E	長方形	1.90 × 1.64	55	直立	ほぼ平坦	人為	土師質土器	SI1, SK5・7→本跡
35	D9i6	-	円形	1.36 × 1.35	63	ほぼ直立	平坦	自然 人為	陶器, 磁器	本跡→SK31
73	D9g1	N-10°-E	楕円形	1.97 × 1.24	38	ほぼ直立	平坦	-	陶器	SI78→本跡
88	D9g1	N-3°-E	楕円形	0.99 × 0.73	20	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	-	
89	E8a9	-	円形	1.00 × 0.97	51	直立	平坦	人為	陶器, 銭貨	SI86→本跡
91	E8a0	N-82°-E	長方形	1.25 × 1.10	34	直立	凹凸	人為	土師質土器, 金属製品	SI86→本跡
301	D6f0	-	円形	0.62 × 0.62	37	ほぼ直立	皿状	人為	瓦質土器, 陶器, 磁器	
336	D9h2	N-10°-E	長方形	0.97 × 0.74	16	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI79→本跡
433	D5j1	N-13°-W	[楕円形]	1.64 × [1.24]	50	外傾	皿状	人為	陶器, 磁器, 石製品	TM1→本跡



第 458 図 江戸時代のその他の土坑実測図(1)



第 459 図 江戸時代のその他の土坑実測図(2)

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
459	D 5 a6	N - 87° - W	楕円形	2.31 × 1.60	78	ほぼ直立	ほぼ平坦	-	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 金属製品, 銭貨, 瓦	SI96, SD12 → 本跡
501	C 3 h2	N - 75° - W	長方形	1.82 × 1.66	55	ほぼ直立	平坦	人為	土師質土器	SI112 → 本跡
508	C 3 e2	N - 18° - E	長方形	2.30 × 1.52	71	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI117・120・123, HG 1 → 本跡
524	C 3 d3	N - 74° - W	(長方形)	1.73 × (0.95)	29	外傾	平坦	人為	-	SI23, HG 1 → 本跡 → SK518・521・525
550	C 4 e0	-	[円形]	(1.10) × (1.02)	52	ほぼ直立	平坦	人為	陶器, 磁器	本跡 → SK568
551	C 4 d0	N - 23° - W	不定形	0.80 × 0.56	25	外傾	平坦	人為	陶器	
555	C 4 g0	-	円形	1.60 × 1.60	62	外傾	ほぼ平坦	人為	金属製品, 銭貨	
558	C 4 g0	N - 14° - E	[方形・長方形]	(1.70) × (1.45)	45	ほぼ直立	平坦	人為	土師質土器, 陶器, 磁器	SK560 → 本跡 → SK573・574・581
560	C 4 f0	N - 15° - E	隅丸長方形	3.60 × 2.20	78	直立	ほぼ平坦	人為	瓦質土器, 陶器, 磁器	本跡 → SK558・559・573・582
607	C 4 g5	N - 80° - W	[円・楕円形]	1.61 × (1.22)	53	外傾	皿状	人為	土師質土器	SI138, SD16 → 本跡
611	C 4 g1	N - 10° - E	楕円形	0.80 × 0.68	15	直立 外傾	ほぼ平坦	人為	陶器	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
614	C 4 i2	N - 75° - W	隅丸長方形	1.46 × 0.85	44	外傾	ほぼ平坦	人為	瓦質土器, 金属製品	SF 2 A・B, SK615 → 本跡
615	C 4 i2	N - 75° - W	[楕円形]	(1.38) × (0.27)	22	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SF 2 A・B → 本跡 → SK614
616	C 3 i7	-	方形	1.76 × 1.72	22	外傾	平坦	人為	-	HG 1 → 本跡
618	C 4 i9	N - 88° - W	隅丸長方形	2.60 × 1.66	61	外傾	平坦	人為	磁器, 金属製品, 銭貨	SI143・146, SK601 → 本跡 → SK692
635	C 4 i4	N - 82° - W	[楕円形]	1.64 × (1.04)	54	外傾	平坦	人為	陶器, 磁器	本跡 → SK634・645
636	C 4 i4	N - 83° - W	[隅丸長方形]	(0.88) × (0.46)	52	外傾	平坦	人為	瓦質土器, 陶器, 磁器, 金属製品	本跡 → SK634・646
650	C 3 g7	N - 20° - E	長方形	2.00 × 1.41	40	外傾	平坦	人為	-	SI131, HG 1 → 本跡
652	C 4 j8	N - 44° - W	不定形	1.94 × 1.82	34	外傾	皿状	人為	陶器, 銭貨, 瓦	SK649 → 本跡
673	D 4 c9	-	円形	0.60 × 0.56	14	外傾	平坦	-	金属製品	
683	D 4 d8	N - 77° - W	隅丸長方形	0.82 × 0.70	12	外傾	平坦	-	磁器, 銭貨	
685	C 4 i3	N - 52° - E	楕円形	0.82 × (0.73)	80	ほぼ直立	平坦	人為	磁器, 金属製品	
697	D 4 d9	N - 28° - W	[不定形]	(1.21) × 0.93	33	外傾	有段	-	磁器	本跡 → SD23
700	C 4 i3	-	[円形]	0.43 × (0.40)	38	外傾	有段	-	磁器	本跡 → SK674
705	C 4 i2	-	円形	1.28 × 1.14	48	外傾	凹凸	人為	磁器, 瓦	
716	C 3 g9	N - 19° - E	楕円形	1.45 × 0.78	50	直立	有段	人為	銭貨	SI129 → 本跡

8 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期が明確にできなかった竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡6条、土坑416基、ピット群11か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第150号竪穴建物跡（第460図）

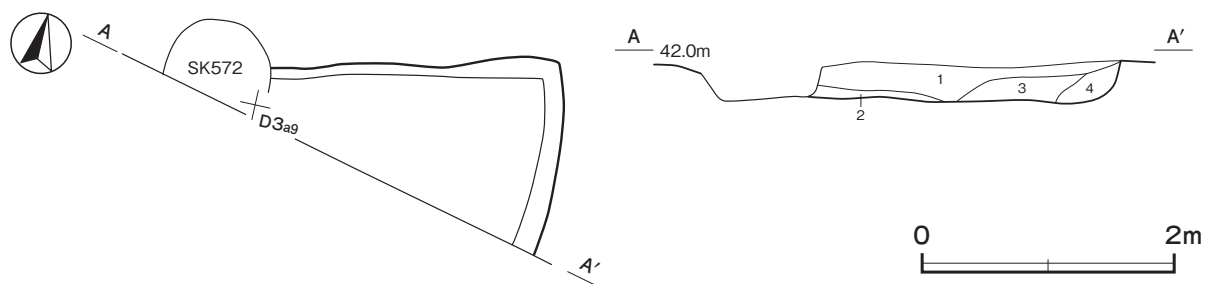
調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のD3a9区、標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号遺物包含層を掘り込み、第572号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びていること、第572号土坑に掘り込まれていることから、南北軸は1.42m、東西軸は2.35mしか確認できなかった。方形もしくは長方形と推定できるが、主軸方向は不明である。壁は高さ28cmで、ほぼ直立している。

床 平坦である。



第460図 第150号竪穴建物跡実測図

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |

所見 時期は、出土土器がないことから、不明である。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第461図)

調査年度 平成25年度

位置 調査区東部のD9g4区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第28号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

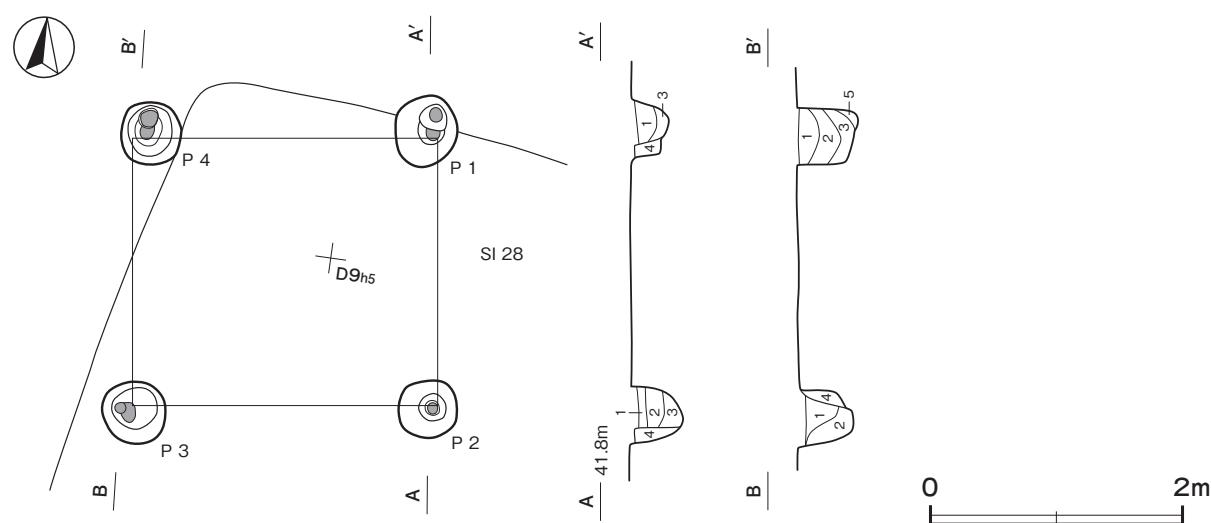
規模と形状 桁行1間, 梁行1間の側柱建物跡で, 桁行方向がN-82°-Eの東西棟である。規模は桁行2.40m, 梁行2.10mで, 面積は5.04㎡である。

柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で, 長径0.47~0.57m, 短径0.46~0.47mである。深さは30~45cmで, 掘方の壁は直立している。第5層は柱の立て替え前の覆土の可能性がある。第4層は埋土, 第1~3層は柱材を抜き取った後の覆土である。P1~P4の底部から, 柱のあたりを確認した。P1・P3・P4は柱のあたりを2か所で確認したことから, 立て替えられている。柱のあたりの規模から, 柱の直径は10~20cmほどと推定できる。

柱穴土層解説 (各ピット共通)

- | | | | |
|-------|------------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黄褐色 | ロームブロック少量 | 5 灰黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

所見 時期は、出土遺物がなかったものの遺構の重複関係から、4世紀中葉以降であるが、明確な時期は不明である。性格は、竪穴建物跡の支柱穴の可能性はあるが、明確にはできなかった。



第461図 第1号掘立柱建物跡実測図

(3) 井戸跡

第3号井戸跡 (第462図)

調査年度 平成28年度

位置 調査区西部のC2f8区, 標高42mほどの台地平坦面に位置している。

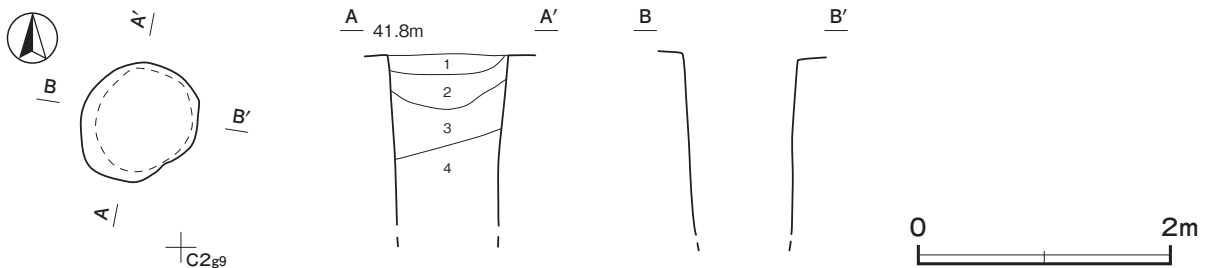
規模と形状 確認面は長径0.98m, 短径0.85mの楕円形で, 長径方向はN-40°-Eである。確認面から円筒形に掘り込まれている。深さ145cmまで掘り下げた段階で, 崩落が想定されたため, 以下の調査を断念した。

覆土 観察できた部分は, 4層に分層できる。ロームブロックが含まれる不規則な堆積をしていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量, 礫微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・礫少量 | 4 灰黄褐色 ロームブロック・礫中量 |

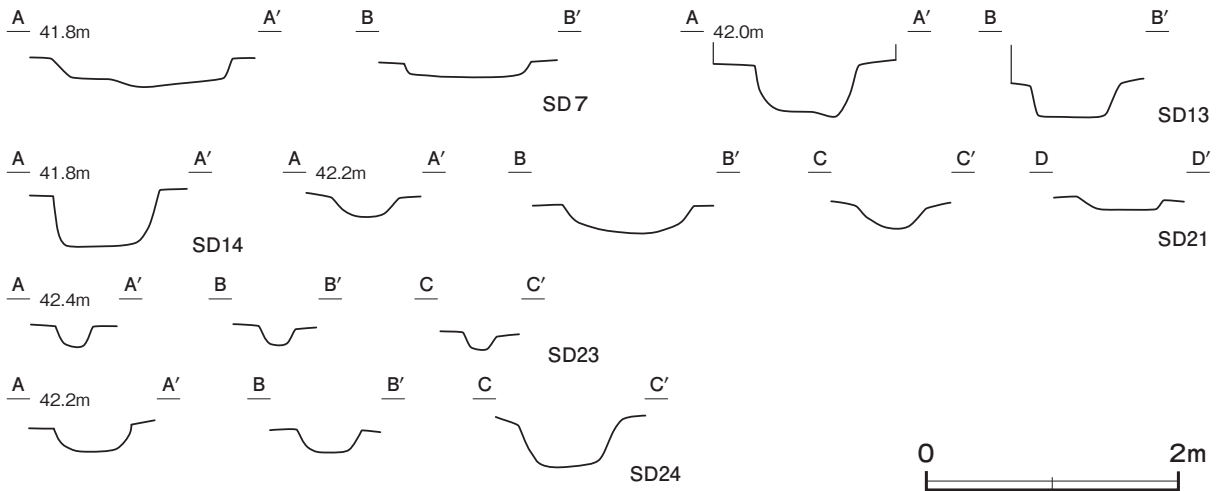
所見 時期は, 遺物が出土しなかったことから不明である。



第462図 第3号井戸跡実測図

(4) 溝跡 (第463図, 付図)

時期不明の溝跡については, 実測図及び一覧表を掲載する。



第463図 第7・13・14・21・23・24号溝跡実測図

表 34 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
7	D 6i0 ~ D 7h1	N - 40° - E	直線状	(6.40)	0.74~1.40	0.64~1.22	15~24	逆台形	ほぼ直立 外傾	人為	-	本跡→SK279・ 291・305
13	C 2c7 ~ C 2b8	N - 63° - E	直線状	(3.04)	0.64~0.90	0.52~0.60	58~68	逆台形	ほぼ直立	人為	縄文土器, 土師器	
14	C 3i1	N - 4° - E	直線状	(3.23)	0.86~0.96	0.43~0.62	40	逆台形	ほぼ直立 外傾	人為	縄文土器, 土師器	SI114 →本跡
21	C 4i4 ~ C 4i6	N - 78° - W	直線状	(7.14)	0.54~0.70	0.22~0.42	8~20	逆台形	ほぼ直立 外傾	人為	縄文土器, 土師器	SI145, SD16 →本 跡→SK679
23	D 4b9 ~ D 4c0	N - 77° - W	曲線状	(3.50)	0.28~0.32	0.10~0.16	17~19	逆台形	外傾	人為	縄文土器	SI148, SD15, SK697 →本跡
24	C 4h6 ~ C 4i6	N - 4° - W N - 28° - W	直線状	(4.30)	0.40~0.78	0.25~0.50	13~32	逆台形	ほぼ直立 外傾	人為	縄文土器, 土師器	SI145・SK605・ 628 →本跡 →SK693

(5) 土坑(付図)

時期不明の土坑については、一覧表を掲載する。

表 35 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	E 10b4	N - 35° - E	楕円形	2.48 × 2.32	21	外傾	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 鉄製品	第1号段切状遺 構→本跡
3	E 10c2	N - 86° - E	楕円形	0.66 × 0.57	27	ほぼ直立	有段	-	-	SD 1 →本跡
4	D 10j2	N - 56° - E	楕円形	0.56 × 0.44	48	直立 外傾	平坦	人為	土師器	SD 1 →本跡
6	E 10c1	N - 70° - W	楕円形	1.48 × 0.71	67	外傾	平坦	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器	SD 1 →本跡→ SK 9
9	E 10c2	-	円形	0.44 × 0.43	85	ほぼ直立	平坦	-	-	SK 6 →本跡
10	E 9a0	N - 43° - E	楕円形	0.67 × 0.46	30	外傾	平坦	人為	土師器	SI 6・7 →本跡
11	D 9h0	-	円形	1.03 × 0.99	52	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
12	E 10a1	-	円形	0.52 × 0.48	49	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
13	D 10j1	N - 85° - W	楕円形	0.59 × 0.48	60	直立	皿状	人為	-	
14	D 10j1	N - 86° - W	楕円形	0.68 × 0.56	78	直立	有段	人為	-	
15	D 10j1	N - 46° - E	楕円形	0.37 × 0.30	44	直立	皿状	人為	土師器	
16	D 9j0	-	円形	1.20 × 1.17	24	外傾	ほぼ平坦	人為	土師器	
17	E 9a0	N - 10° - W	楕円形	1.44 × 1.29	42	内彎	ほぼ平坦	人為	-	
20	E 10b2	N - 2° - E	楕円形	0.75 × 0.65	32	ほぼ直立	平坦	人為	土師器, 銭貨	本跡→SK21
21	E 10b2	N - 2° - W	円形	0.98 × 0.89	91	直立	ほぼ平坦	人為	-	SK20 →本跡
23	E 9b9	N - 45° - W	楕円形	0.71 × 0.62	34	直立	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器	
24	E 9b9	N - 43° - W	楕円形	0.63 × 0.52	37	直立	平坦	人為	-	
25	E 9b9	N - 1° - W	楕円形	0.60 × 0.47	35	外傾	平坦	人為	-	
26	E 9a9	-	円形	0.32 × 0.30	45	直立	有段	-	-	
27	E 9a9	-	円形	0.27 × 0.25	60	直立	平坦	-	-	
28	E 9a9	N - 61° - W	楕円形	0.48 × 0.33	35	直立	有段	-	土師器, 須恵器	SI29 →本跡
30	E 9a8	N - 68° - E	楕円形	0.30 × 0.25	36	直立	平坦	-	-	
31	D 9i6	N - 87° - W	楕円形	1.67 × 1.50	30	外傾	皿状	人為	-	SK35 →本跡
34	D 9j7	N - 85° - E	楕円形	0.27 × 0.24	20	直立	平坦	-	-	
36	D 9i4	N - 30° - W	不定形	0.76 × 0.52	46	直立	有段	-	縄文土器, 土師器	SI36, SN 2 →本 跡
37	E 9b7	-	円形	0.94 × 0.93	17	ほぼ直立	凹凸	人為	縄文土器, 土師器	SI25・37 →本跡
38	E 9b8	N - 34° - E	楕円形	1.13 × 0.86	30	ほぼ直立	有段	人為	-	SI37 →本跡
40	D 9j9	-	円形	0.53 × 0.53	46	外傾	平坦	人為	-	SI29 →本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
41	E 9 b8	N - 10° - E	隅丸長方形	0.65 × 0.48	25	ほぼ直立	平坦	人為	-	
44	D 9 h4	-	円形	0.60 × 0.55	32	直立	皿状	抜取痕埋土	-	
46	E 10 a1	-	円形	1.23 × 1.14	21	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SI 5 → 本跡
50	E 9 a7	-	[方形]	1.13 × 1.13	37	外傾	平坦	人為	-	SI37, HT 2 → 本跡
53	E 9 d7	-	円形	1.09 × 1.05	22	直立	凹凸	人為	-	PG 3 → 本跡
55	E 9 c7	N - 78° - W	楕円形	0.80 × 0.68	42	ほぼ直立	皿状	人為	-	SI25 → 本跡
60	E 9 a4	-	円形	1.45 × 1.32	50	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SI40, PG 2 → 本跡
61	D 9 h2	N - 14° - W	楕円形	2.59 × 1.08	10	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI79 → 本跡
62	E 9 e5	N - 15° - E	楕円形	0.86 × 0.68	30	外傾	平坦	人為	-	
63	E 9 g8	-	円形	0.34 × 0.34	38	直立 外傾	皿状	-	-	
65	E 9 h0	-	円形	0.46 × 0.42	50	直立 内彎	皿状	-	-	SK66 → 本跡
66	E 9 h0	N - 4° - E	長方形	0.90 × 0.80	28	直立	平坦	人為	-	本跡 → SK66
67	E 9 g7	N - 47° - E	楕円形	0.92 × 0.78	30	直立	平坦	人為	-	
70	E 9 e4	N - 48° - E	楕円形	0.70 × 0.62	30	ほぼ直立 外傾	平坦	-	-	SI38・39A・B → 本跡
71	E 9 f4	N - 39° - E	楕円形	0.49 × 0.44	22	外傾	皿状	人為	-	SI39B → 本跡
72	E 9 g7	N - 73° - E	不定形	1.85 × 1.17	35	外傾	皿状	人為	-	
74	D 8 g8	-	円形	0.44 × 0.41	61	ほぼ直立	皿状	-	弥生土器, 土師器	SI87 → 本跡
75	D 8 g9	N - 87° - E	長方形	1.14 × 0.86	25	直立	平坦	人為	-	SI68・69 → 本跡
76	E 9 e3	N - 55° - W	楕円形	0.68 × 0.52	23	外傾	ほぼ平坦	-	-	
90	E 8 a9	N - 8° - W	[長方形]	0.82 × (0.74)	14	直立	平坦	人為	土師器	SI86 → 本跡
92	E 8 c0	N - 25° - E	楕円形	1.39 × 0.58	26	直立	平坦	人為	土師器	SI57, SB14 → 本跡
95	E 9 d1	-	[円形・楕円形]	0.62 × (0.58)	22	外傾	平坦	人為	-	SK174 → 本跡
101	D 8 j2	N - 81° - E	楕円形	0.62 × 0.43	30	直立	ほぼ平坦	人為	-	
102	D 8 j2	N - 83° - E	楕円形	0.60 × 0.36	18	直立 外傾	ほぼ平坦	人為	-	PG 6 → 本跡
103	E 8 a2	N - 27° - E	楕円形	0.42 × 0.36	36	直立	平坦	人為	-	
105	D 8 j2	N - 50° - E	楕円形	0.72 × 0.48	22	直立	ほぼ平坦	人為	-	
106	D 8 j2	N - 16° - E	楕円形	0.52 × 0.44	24	直立	有段	抜取痕埋土	-	
107	D 8 i3	-	円形	0.42 × 0.40	38	直立	平坦	抜取痕埋土	-	
108	E 8 a1	-	円形	0.40 × 0.38	56	直立	皿状	人為	-	
109	E 8 a1	-	方形	0.46 × 0.46	48	ほぼ直立	平坦	-	-	
110	D 8 i1	N - 87° - W	楕円形	0.59 × 0.52	30	外傾	皿状	人為	-	
111	D 8 g6	-	円形	0.89 × 0.84	45	直立	凹凸	人為	-	SK112, PG 5 → 本跡
112	D 8 g6	N - 83° - E	楕円形	1.10 × 0.68	50	ほぼ直立	平坦	人為	-	PG 5 → 本跡 → SK111
113	D 8 h6	-	円形	0.53 × 0.51	39	ほぼ直立	平坦	抜取痕埋土	-	
114	D 8 i6	N - 20° - W	楕円形	0.80 × 0.70	36	外傾	平坦	人為	-	
115	D 8 i7	N - 67° - W	楕円形	0.74 × 0.57	50	直立	有段	人為	-	
116	D 8 i6	N - 57° - E	楕円形	0.65 × 0.56	37	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
117	D 8 i6	-	円形	0.37 × 0.35	40	ほぼ直立	平坦	人為	-	
118	D 8 i6	-	円形	0.45 × 0.41	37	ほぼ直立	平坦	人為	-	
119	D 8 i6	-	円形	0.36 × 0.34	38	ほぼ直立	平坦	抜取痕埋土	-	
120	D 8 i6	N - 54° - W	楕円形	0.35 × 0.29	51	直立	平坦	抜取痕埋土	-	
121	D 8 h4	-	円形	0.42 × 0.40	51	直立	平坦	抜取痕埋土	-	
122	D 8 h4	-	円形	0.59 × 0.56	43	ほぼ直立	平坦	抜取痕埋土	-	
123	D 8 h4	N - 23° - E	楕円形	0.35 × 0.31	45	直立	皿状	抜取痕埋土	-	
125	D 8 h5	-	円形	0.67 × 0.64	45	ほぼ直立	有段	人為	-	
126	D 8 h4	N - 45° - W	楕円形	0.64 × 0.56	56	ほぼ直立	平坦	人為	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
127	D 8 h4	-	円形	0.28 × 0.27	12	ほぼ直立	平坦	採取痕埋土	-	
128	D 8 h4	N - 57° - W	楕円形	0.36 × 0.31	36	直立 ほぼ直立	平坦	採取痕	-	
129	D 8 h4	-	円形	0.38 × 0.34	21	平坦	皿状	採取痕埋土	-	
131	D 8 h4	N - 30° - E	楕円形	0.36 × 0.30	50	ほぼ直立	平坦	採取痕埋土	-	
137	D 7 j0	N - 14° - E	楕円形	0.52 × 0.45	22	ほぼ直立	平坦	-	-	
138	E 7 a0	N - 20° - E	楕円形	0.40 × 0.33	56	直立	平坦	-	土師器	
139	E 7 a0	N - 73° - W	不整楕円形	0.88 × 0.83	65	ほぼ直立	皿状	人為	-	本跡→SK140
140	E 7 a0	N - 71° - W	[楕円形]	[0.60] × 0.45	50	ほぼ直立	有段	人為	-	SK139 →本跡
141	E 7 a0	N - 32° - W	楕円形	0.60 × 0.40	51	ほぼ直立 外傾	有段	人為	-	
142	E 7 a9	N - 35° - E	不整楕円形	0.53 × 0.33	41	ほぼ直立 外傾	平坦	-	土師器	
143	D 7 j0	N - 13° - W	楕円形	0.39 × 0.34	52	直立	有段	-	-	
144	D 8 j9	-	円形	0.40 × 0.40	28	直立	平坦	採取痕埋土	-	
145	D 7 j0	N - 25° - W	楕円形	0.53 × 0.48	19	外傾	ほぼ平坦	-	-	
146	D 7 j0	N - 87° - W	楕円形	0.48 × 0.36	39	直立	有段	-	-	
147	E 7 a0	N - 64° - E	楕円形	0.82 × 0.32	14	直立	皿状	-	-	
148	D 7 j0	N - 72° - W	楕円形	1.00 × 0.76	34	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器	
149	D 7 j0	-	円形	0.40 × 0.38	24	直立	平坦	-	-	
150	D 7 j9	N - 32° - W	楕円形	0.28 × 0.24	58	直立	皿状	-	-	
151	E 7 a9	-	円形	0.55 × 0.52	22	直立	平坦	-	-	
152	D 7 j9	N - 76° - W	楕円形	0.58 × 0.50	39	外傾	皿状	-	-	
155	D 9 i4	N - 5° - W	楕円形	0.55 × 0.40	40	直立	平坦	-	縄文土器, 土師器	
156	D 9 i4	-	円形	0.58 × 0.55	50	ほぼ直立	ほぼ平坦	-	-	
158	E 7 a9	N - 29° - E	楕円形	0.57 × 0.46	62	ほぼ直立	皿状	-	-	
159	D 7 j9	-	円形	0.37 × 0.35	22	外傾	平坦	-	-	
160	D 7 j9	-	円形	0.48 × 0.48	43	ほぼ直立	平坦	-	-	
162	D 8 i8	-	円形	0.48 × 0.45	34	ほぼ直立	平坦	-	-	
163	D 7 i9	N - 75° - E	楕円形	0.45 × 0.35	38	ほぼ直立	皿状	-	-	
164	D 7 j8	-	円形	0.48 × 0.45	30	ほぼ直立	平坦	-	土師器	
165	D 7 j9	-	円形	0.45 × 0.42	40	直立	有段	-	-	
166	D 7 j9	-	円形	0.64 × 0.64	38	ほぼ直立	平坦	-	-	
167	D 7 i8	-	円形	0.48 × 0.48	22	ほぼ直立	平坦	-	縄文土器	
170	E 7 a9	N - 68° - W	楕円形	0.62 × 0.53	52	ほぼ直立	皿状	人為	縄文土器, 土師器	SK257 →本跡
171	D 7 i0	-	円形	0.56 × 0.52	18	ほぼ直立	平坦	人為	-	PG 6 →本跡 →SK262
174	E 9 d1	N - 3° - E	楕円形	0.40 × 0.31	48	ほぼ直立	平坦	採取痕埋土	-	SI57 →本跡 →SK95
175	E 9 d1	N - 20° - E	楕円形	0.37 × 0.30	73	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI57・63 →本跡
177	E 7 a8	N - 61° - E	[楕円形]	1.10 × 0.98	28	ほぼ直立	凹凸	人為	-	
178	E 8 a1	N - 1° - W	楕円形	0.58 × 0.40	62	直立	平坦	-	縄文土器, 土師器	
180	D 8 j2	N - 80° - E	楕円形	0.32 × 0.22	90	直立	平坦	-	縄文土器, 土師器	PG 6 →本跡
181	D 8 f6	-	円形	0.54 × 0.50	36	外傾	平坦	自然	-	
182	D 8 f6	N - 33° - E	楕円形	0.48 × 0.38	24	外傾	皿状	自然	-	
183	D 8 f5	-	円形	0.32 × 0.30	33	ほぼ直立	平坦	-	-	
185	D 7 g8	N - 46° - W	楕円形	0.62 × 0.52	48	ほぼ直立	平坦	人為	-	
190	D 8 f1	N - 72° - E	[楕円形]	0.52 × 0.42	18	直立	ほぼ平坦	-	-	PG 8 →本跡
191	D 7 j8	-	円形	0.52 × 0.52	28	外傾	ほぼ平坦	-	-	
194	D 7 i9	N - 16° - W	楕円形	0.57 × 0.50	43	ほぼ直立 外傾	皿状	-	-	PG 6 →本跡
195	D 7 i9	-	円形	0.46 × 0.42	42	直立 ほぼ直立	有段	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
196	D 7 h9	N - 63° - E	楕円形	0.76 × 0.60	36	ほぼ直立	平坦	-	-	
203	D 8 g3	N - 77° - E	楕円形	1.28 × 0.80	25	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
206	D 9 h4	-	円形	0.54 × 0.54	72	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器	
209	D 7 f9	-	円形	0.63 × 0.62	38	ほぼ直立	有段	人為	-	
211	E 8 a1	-	円形	0.39 × 0.36	14	外傾	皿状	-	縄文土器, 土師器	SI73・74→本跡
212	D 9 h3	-	円形	0.50 × 0.48	56	直立 ほぼ直立	皿状	-	-	SI79→本跡
220	D 8 h8	-	円形	0.30 × 0.29	19	直立 内彎	皿状	-	-	SI76→本跡
221	D 8 h7	N - 50° - W	楕円形	0.38 × 0.32	30	直立	皿状	-	-	SI76→本跡
224	D 7 f0	-	円形	0.40 × 0.40	66	直立	皿状	-	土師器	SK200→本跡
227	D 8 f1	-	円形	0.83 × 0.76	32	ほぼ直立	平坦	-	縄文土器, 石製品	
230	D 7 e7	-	円形	1.10 × 1.01	50	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
233	E 8 a1	-	円形	0.23 × 0.21	26	外傾	皿状	-	-	SI73・74→本跡
241	D 7 f1	-	円形	0.44 × 0.44	41	ほぼ直立	平坦	-	-	
242	D 7 f9	-	円形	0.42 × 0.40	66	直立	皿状	-	-	
243	D 7 f9	-	円形	0.43 × 0.41	48	ほぼ直立	平坦	-	-	
244	D 8 g2	N - 44° - W	楕円形	0.56 × 0.42	43	ほぼ直立	皿状	-	-	SK427, SA 1 B→本跡
245	D 8 f1	-	円形	0.77 × 0.77	24	外傾	平坦	-	縄文土器	
246	D 7 g0	-	円形	0.45 × 0.45	52	直立	平坦	-	縄文土器, 土師器	
248	D 7 g9	N - 35° - E	楕円形	0.46 × 0.38	38	直立 外傾	皿状	-	-	
249	D 7 g0	-	円形	0.52 × 0.48	46	直立	皿状	-	-	
250	D 7 g8	-	円形	0.82 × 0.76	45	ほぼ直立	平坦	人為	-	
256	D 7 g0	-	円形	0.34 × 0.32	38	ほぼ直立	平坦	-	-	SB15・SK358→ 本跡
257	E 7 a9	N - 3° - E	楕円形	0.96 × 0.68	38	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK170
262	D 7 i0	N - 42° - W	楕円形	0.40 × 0.32	48	ほぼ直立	平坦	-	-	SK171→本跡
266	D 7 i3	N - 0° - E	隅丸長方形	0.59 × 0.51	16	直立	皿状	人為	-	
268	D 7 i3	N - 45° - E	楕円形	0.32 × 0.26	18	直立	平坦	-	-	SN17→本跡
271	D 7 i2	N - 25° - E	不整楕円形	1.08 × 0.86	28	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
273	D 7 i2	N - 0° - E	楕円形	0.62 × 0.52	28	外傾	皿状	人為	-	
274	D 7 e2	N - 83° - W	楕円形	1.10 × 0.62	56	外傾	有段	人為	-	SD 3→本跡
275	D 7 f2	N - 64° - E	楕円形	1.02 × 0.80	22	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
276	D 6 d9	N - 52° - W	不整楕円形	1.35 × 0.92	42	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SD 6→本跡
278	D 7 i3	N - 40° - W	隅丸長方形	0.68 × 0.54	12	外傾	ほぼ平坦	-	-	SK277→本跡
279	D 6 i0	-	隅丸方形	0.62 × 0.58	10	ほぼ直立 外傾	ほぼ平坦	-	-	SD 7→本跡
282	D 7 g2	-	円形	0.45 × 0.45	43	直立	皿状	人為	-	
283	D 7 g2	N - 50° - E	楕円形	0.61 × 0.38	30	直立	平坦	人為	-	
285	D 7 g1	-	円形	0.58 × 0.52	28	直立	ほぼ平坦	人為	-	
286	D 7 g2	N - 10° - W	楕円形	0.72 × 0.54	28	直立 ほぼ直立	有段	人為	土師器, 陶器	
287	D 7 g2	-	円形	0.30 × 0.30	30	直立	皿状	人為	-	
288	D 7 g1	-	円形	0.57 × 0.54	39	直立	ほぼ平坦	人為	-	
289	D 7 f1	N - 56° - W	楕円形	0.40 × 0.21	30	直立	皿状	人為	-	
290	D 7 g1	-	円形	0.63 × 0.63	37	ほぼ直立	平坦	抜取痕 埋土	土師器	
291	D 7 h1	N - 79° - E	楕円形	1.00 × 0.63	10	外傾	平坦	-	-	SD 7, SK305 →本跡
292	D 7 g1	-	隅丸方形	0.66 × 0.64	14	外傾	平坦	人為	-	
294	D 6 d8	N - 75° - E	[楕円形]	1.25 × (0.84)	56	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SK295, SD 3→ 本跡
295	D 6 d8	N - 72° - E	[楕円形]	1.52 × (0.80)	36	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK294
296	D 6 e0	N - 60° - E	楕円形	0.30 × 0.26	28	ほぼ直立	皿状	人為	-	SD 3→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
297	D 7 h1	N - 34° - E	楕円形	0.86 × 0.60	25	ほぼ直立	平坦	人為	-	
300	D 6 f0	-	円形	1.16 × 1.16	49	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
302	D 6 f0	-	円形	0.30 × 0.29	32	ほぼ直立	皿状	採取痕埋土	-	
303	D 6 g0	-	隅丸方形	0.43 × 0.39	56	ほぼ直立	皿状	人為	-	
304	D 7 f0	-	[円形]	[0.58] × 0.55	45	直立	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 土師器	SK207 → 本跡
305	D 6 i0	[N - 20° - E]	[隅丸長方形]	(0.68) × 0.68	14	外傾	有段	-	-	SD 7 → 本跡 → SK291
306	D 6 e0	N - 25° - W	楕円形	0.37 × 0.27	22	ほぼ直立	皿状	-	-	
307	D 6 h9	N - 35° - E	楕円形	0.42 × 0.37	28	ほぼ直立	皿状	人為	-	
308	D 6 i9	N - 20° - W	楕円形	0.64 × 0.50	62	ほぼ直立	平坦	採取痕埋土	-	
309	D 6 h9	-	円形	0.48 × 0.44	42	ほぼ直立	平坦	人為	-	
310	D 7 g1	-	円形	0.44 × 0.42	36	直立	皿状	人為	-	
313	D 7 e2	N - 76° - E	[楕円形]	(0.38) × 0.34	44	ほぼ直立 外傾	平坦	-	-	本跡 → SK314
314	D 7 e2	N - 60° - W	楕円形	0.34 × 0.28	64	ほぼ直立	平坦	-	-	SK313・319・321 → 本跡
315	D 6 f0	-	円形	0.44 × 0.41	30	直立 ほぼ直立	皿状	採取痕埋土	-	
318	D 7 d2	-	円形	0.95 × 0.94	54	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK322 → 本跡
319	D 7 d2	N - 87° - W	楕円形	1.10 × 0.92	50	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SD4, PG 9 → 本跡 → SK314・321
321	D 7 e2	N - 23° - W	楕円形	1.21 × 0.72	55	外傾	有段	人為	-	SK319 → 本跡 → SK314
322	D 7 d2	-	[円形]	0.34 × (0.22)	22	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK318
323	D 7 d1	N - 88° - E	楕円形	0.63 × 0.44	48	ほぼ直立	皿状	人為	-	PG 9 → 本跡
324	D 7 d1	N - 83° - E	楕円形	0.60 × 0.50	24	外傾	皿状	人為	土師器, 須恵器	
325	D 6 d0	N - 50° - W	楕円形	0.98 × 0.88	34	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
326	D 7 d1	N - 81° - W	楕円形	1.00 × 0.85	32	外傾	平坦	人為	-	
327	D 6 e0	-	円形	0.38 × 0.38	35	直立	皿状	-	-	
328	D 6 d0	N - 33° - W	楕円形	0.58 × 0.40	30	ほぼ直立	平坦	人為	-	
332	D 7 e1	N - 22° - E	楕円形	0.54 × 0.42	56	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK333 → 本跡
333	D 7 e1	N - 5° - W	[楕円形]	(0.65) × 0.58	43	外傾	ほぼ平坦	人為	-	本跡 → SK332
334	D 9 h2	N - 30° - E	楕円形	0.48 × 0.40	32	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI79 → 本跡
335	D 9 h2	N - 50° - E	楕円形	0.54 × 0.48	56	ほぼ直立	皿状	採取痕埋土	縄文土器, 弥生土器, 土師器	SI79 → 本跡
337	E 8 b1	N - 0°	楕円形	1.02 × 0.87	4	外傾	皿状	人為	-	SI74 → 本跡
338	D 9 i2	N - 4° - E	楕円形	0.80 × 0.63	28	外傾	有段	-	-	SI82 → 本跡
339	D 9 h1	-	円形	0.62 × 0.62	24	外傾	皿状	-	縄文土器, 土師器	SI78 → 本跡 → SK340
340	D 9 h1	N - 47° - W	楕円形	0.45 × 0.40	18	外傾	ほぼ平坦	-	-	SI78, SK339 → 本跡
341	D 8 f4	N - 15° - E	楕円形	0.57 × 0.40	-	-	-	-	-	SI77 → 本跡
343	D 8 f4	N - 80° - E	楕円形	0.37 × 0.31	23	ほぼ直立	平坦	-	-	SI77 → 本跡
344	D 6 c9	-	円形	1.17 × 1.15	20	外傾	ほぼ平坦	自然	-	
345	D 6 d8	N - 5° - E	楕円形	1.07 × 0.80	26	ほぼ直立	平坦	人為	-	SD 4 → 本跡
346	D 7 e1	N - 18° - E	楕円形	0.34 × 0.18	30	ほぼ直立	皿状	-	-	SD 3 → 本跡
347	D 6 d2	N - 41° - E	楕円形	0.85 × 0.73	29	外傾	皿状	人為	-	
348	D 6 c4	N - 61° - W	楕円形	0.66 × 0.59	20	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
349	D 6 c3	N - 9° - E	楕円形	0.64 × 0.46	20	ほぼ直立	皿状	自然	-	
350	D 6 c3	-	円形	0.70 × 0.70	29	ほぼ直立	平坦	人為	-	
351	D 8 j9	N - 32° - W	楕円形	0.62 × 0.56	26	ほぼ直立	皿状	-	-	SI85・86 → 本跡 → SK84
352	D 8 j9	-	円形	0.72 × 0.72	94	直立	皿状	-	-	SI85 → 本跡
353	D 8 j9	N - 82° - W	楕円形	0.85 × 0.54	80	直立	平坦	-	-	SI85 → 本跡
355	E 5 a1	N - 77° - W	楕円形	0.58 × 0.50	54	ほぼ直立	皿状	-	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
356	E 5 a1	N - 9° - E	楕円形	0.46 × 0.37	45	直立	平坦	-	-	
358	D 7 g0	N - 1° - E	不整楕円形	0.44 × (0.25)	49	ほぼ直立	皿状	採取痕埋土	-	SK252 → 本跡 → SK256
359	D 6 d6	N - 60° - W	楕円形	0.68 × 0.60	38	直立	皿状	採取痕埋土	-	SD 3 → 本跡
360	D 6 d5	N - 10° - E	円形	0.55 × 0.50	28	直立	皿状	採取痕埋土	-	SD 3 → 本跡
361	D 6 c3	N - 7° - E	楕円形	0.84 × 0.74	18	外傾	平坦	人為	-	
362	D 6 e4	N - 24° - E	楕円形	0.70 × 0.59	33	ほぼ直立 外傾	皿状	人為	-	
363	D 6 d4	N - 0°	不定形	0.70 × 0.43	52	ほぼ直立	有段	人為	-	
364	D 6 c4	-	円形	0.56 × 0.52	50	ほぼ直立	平坦	-	-	
365	D 6 d3	N - 78° - W	隅丸長方形	0.70 × 0.64	28	外傾	皿状	人為	-	
368	D 6 c6	N - 42° - E	楕円形	0.44 × 0.37	48	ほぼ直立	有段	人為	-	
369	D 6 c6	N - 15° - W	楕円形	0.53 × 0.45	41	外傾	皿状	採取痕埋土	-	
372	D 6 d6	N - 30° - E	楕円形	0.57 × 0.39	41	ほぼ直立	平坦	人為	-	
373	D 6 d6	N - 6° - E	楕円形	0.39 × 0.27	12	緩斜	皿状	-	-	
374	D 6 d6	N - 71° - E	楕円形	0.29 × 0.22	18	ほぼ直立 外傾	平坦	-	-	
375	D 6 d6	N - 30° - W	楕円形	0.49 × 0.39	42	外傾	皿状	-	-	SK376 → 本跡
376	D 6 d6	N - 87° - W	楕円形	1.12 × 0.67	38	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK375
377	D 6 f6	N - 32° - W	楕円形	2.01 × 1.43	22	外傾	凹凸	人為	-	PG20 → 本跡
378	D 6 d4	-	円形	0.44 × 0.41	33	直立	皿状	人為	-	
380	D 6 c4	-	円形	0.45 × 0.41	25	外傾	皿状	人為	-	SK381 → 本跡
381	D 6 c4	N - 14° - E	[楕円形]	(0.36) × 0.31	40	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	本跡 → SK380・ 382
382	D 6 c4	N - 85° - E	隅丸長方形	0.45 × 0.33	34	外傾	皿状	人為	-	SK381 → 本跡
383	D 6 c4	N - 17° - E	楕円形	0.45 × 0.38	40	ほぼ直立	皿状	人為	-	
384	D 6 c4	N - 80° - W	楕円形	0.45 × 0.38	44	ほぼ直立	皿状	人為	-	
385	D 6 c4	-	円形	0.42 × 0.40	26	ほぼ直立	皿状	人為	-	
386	D 6 c4	N - 84° - E	楕円形	0.60 × 0.52	32	ほぼ直立	皿状	人為	-	PG10 → 本跡
387	D 6 c3	N - 77° - W	楕円形	0.57 × 0.50	43	ほぼ直立	皿状	人為	-	
388	D 6 d3	N - 29° - E	楕円形	0.90 × 0.78	20	緩斜	皿状	人為	-	SK389 → 本跡
389	D 6 d3	N - 20° - E	楕円形	1.19 × 0.89	19	外傾	凹凸	人為	-	本跡 → SK388
398	D 6 f9	N - 71° - E	楕円形	0.32 × 0.28	20	外傾	平坦	人為	-	
399	D 6 f8	N - 61° - E	楕円形	0.36 × 0.32	16	ほぼ直立 外傾	皿状	人為	-	
400	D 8 h9	N - 77° - W	楕円形	0.72 × 0.60	22	外傾	皿状	人為	-	SI84 → 本跡
402	D 7 f2	-	[円形]	0.88 × [0.88]	22	外傾	平坦	人為	-	SD 3, SF 1 → 本跡 →
403	D 6 d1	-	円形	0.34 × 0.32	36	直立	皿状	人為	-	
404	D 6 c2	-	円形	0.56 × 0.52	12	緩斜	有段	自然	-	
405	D 6 d2	N - 35° - E	楕円形	0.45 × 0.41	25	外傾	平坦	人為	-	
406	D 6 e4	N - 15° - W	楕円形	0.53 × 0.45	36	外傾	皿状	人為	-	
408	D 6 d7	N - 80° - E	楕円形	0.92 × 0.63	55	ほぼ直立 外傾	平坦	-	-	SD 9 → 本跡
409	D 6 d1	N - 13° - E	楕円形	0.53 × 0.42	23	外傾	平坦	人為	-	
411	D 6 c3	N - 46° - W	楕円形	0.58 × 0.31	26	外傾	有段	人為	-	
412	D 6 d2	N - 40° - E	楕円形	0.62 × 0.40	37	緩斜	皿状	人為	-	
413	D 6 b3	-	円形	0.48 × 0.46	33	外傾	平坦	人為	-	
414	D 8 g0	-	円形	0.76 × 0.72	60	直立	平坦	-	縄文土器, 土師器	SI68・69 → 本跡 → SK429
421	D 8 g2	N - 46° - W	不整楕円形	1.15 × (1.07)	20	外傾	平坦	-	-	SK186・PG8 → 本跡 → SK422
422	D 8 g2	N - 35° - W	[楕円形]	0.27 × (0.19)	63	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK186・421 → 本跡
423	D 7 d1	-	円形	0.32 × 0.32	48	ほぼ直立	皿状	-	-	
424	D 6 d0	N - 0°	楕円形	0.47 × 0.35	38	ほぼ直立	皿状	人為	-	

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
425	D 6 d5	N - 40° - E	楕円形	0.58 × 0.52	36	ほぼ直立	有段	人為	-	
426	D 6 d5	N - 59° - E	楕円形	0.53 × 0.38	48	ほぼ直立	皿状	人為	-	
428	D 8 g0	-	円形	0.79 × 0.75	70	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI68・69→本跡
429	D 8 g0	N - 78° - E	[楕円形]	(0.80) × 0.53	55	直立	平坦	-	-	SI68・69・SK414→本跡→SK804
430	D 6 c2	N - 45° - E	不整楕円形	1.25 × 0.94	20	外傾	ほぼ平坦	-	-	
432	E 9 f4	-	円形	1.20 × 1.10	45	外傾	皿状	-	-	SI39B→本跡
434	E 5 g1	N - 0° - E	楕円形	0.39 × 0.28	46	ほぼ直立	皿状	-	-	
435	E 4 f0	N - 36° - E	楕円形	0.66 × 0.58	76	ほぼ直立	皿状	-	-	SI92→本跡
436	E 5 g1	-	[円形]	2.58 × (1.14)	25	緩斜	平坦	-	-	SI92, SK437・438→本跡→SK443
437	E 5 g1	-	[円形]	[0.22] × (0.20)	42	直立	皿状	人為	-	SK438→本跡→SK436
438	E 5 g1	N - 10° - E	[楕円形]	1.20 × (0.20)	28	外傾	ほぼ平坦	人為	-	本跡→SK436・437
439	D 5 e4	N - 47° - W	不整楕円形	1.52 × 1.39	44	外傾	平坦	人為	-	
440	D 5 e3	N - 43° - W	楕円形	1.54 × 1.30	30	外傾	凹凸	人為	-	
441	C 5 f3	N - 20° - W	楕円形	1.42 × 1.08	32	直立	平坦	人為	-	
443	E 5 g1	-	円形	(0.65) × (0.18)	75	ほぼ直立	平坦	-	-	SK436→本跡
445	D 5 e4	N - 27° - W	楕円形	0.69 × 0.55	58	外傾	平坦	-	-	
447	D 5 c6	N - 17° - E	楕円形	0.93 × 0.80	31	直立	平坦	-	-	SB17→本跡
450	C 5 b4	N - 26° - W	楕円形	0.51 × 0.38	49	直立	平坦	-	-	SK451→本跡
454	E 5 f1	N - 79° - W	[不定形]	(0.56) × 0.46	12	直立	平坦	-	-	SI92→本跡
455	C 5 h3	N - 5° - E	楕円形	0.71 × 0.62	71	直立	皿状	-	銭貨	SI101, SK466→本跡
457	D 5 d8	N - 20° - E	楕円形	0.40 × 0.36	16	外傾	平坦	人為	-	SI93→本跡
460	B 5 c4	N - 10° - E	不整楕円形	0.48 × 0.42	12	外傾	平坦	-	-	
463	B 5 a5	-	円形	1.25 × 1.19	49	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	
464	D 5 a7	-	円形	1.23 × 1.12	40	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SI96→本跡
465	C 5 j5	N - 38° - W	楕円形	1.18 × 0.86	48	直立	平坦	人為	-	SI106→本跡
466	C 5 h3	N - 3° - W	[楕円形]	0.62 × (0.32)	20	ほぼ直立	ほぼ平坦	-	-	SI101本跡 SK455→SK455
468	D 5 b0	-	円形	0.38 × 0.35	24	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI94→本跡
469	D 5 b0	-	円形	0.56 × 0.54	42	直立	平坦	-	-	SI94→本跡
471	D 5 b0	N - 46° - W	楕円形	0.61 × 0.52	36	直立	平坦	-	-	
474	B 5 d5	-	円形	0.32 × 0.26	24	ほぼ直立	皿状	-	-	
476	C 2 e8	N - 58° - W	楕円形	1.25 × 0.88	25	外傾	平坦	人為	-	
478	C 5 i4	N - 78° - E	楕円形	1.25 × 0.92	75	直立	凹凸	人為	-	
487	C 2 h0	-	円形	0.40 × 0.38	58	直立	ほぼ平坦	-	-	
488	C 3 i1	N - 59° - E	楕円形	0.40 × 0.33	28	ほぼ直立	皿状	-	-	
489	C 2 d8	-	円形	1.51 × 1.46	49	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
495	C 2 g9	-	不整円形	2.84 × 2.75	35	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SI103→本跡
497	C 3 h9	N - 77° - W	楕円形	1.77 × 1.48	26	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	-	SI114→本跡
498	C 3 f2	N - 53° - W	[長方形]	1.30 × (1.04)	30	ほぼ直立	平坦	人為	-	SI116, HT 1→本跡
499	C 3 f2	-	円形	0.79 × 0.76	18	ほぼ直立	平坦	-	-	SI116, HT 1→本跡
502	C 2 h9	N - 69° - E	楕円形	0.74 × 0.63	55	ほぼ直立	平坦	採取痕 埋土	-	SI104→本跡
503	C 2 h9	-	円形	0.40 × 0.40	42	ほぼ直立	有段	-	-	SI104→本跡
504	C 2 h9	N - 58° - W	楕円形	0.67 × 0.63	15	外傾	平坦	-	-	SI104→本跡
507	C 3 f2	N - 76° - W	楕円形	2.01 × 1.30	52	外傾	平坦	人為	-	SI117, SK506→本跡
509	C 2 g0	-	円形	0.29 × 0.29	33	直立	皿状	-	-	SK505→本跡
510	C 2 h8	-	円形	0.34 × 0.31	12	外傾	平坦	-	-	SI104→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
511	C 2 h9	-	円形	0.43 × 0.40	66	ほぼ直立	平坦	-	-	SI104 →本跡
513	C 3 d2	-	[楕円形]	(0.20) × 0.20	30	直立	皿状	-	-	SK522, HG 1 →本跡
514	C 5 i5	-	円形	1.24 × 1.15	30	ほぼ直立外傾	平坦	人為	-	SI106 →本跡 → SK515
515	C 5 i5	N - 30° - E	楕円形	0.40 × 0.36	42	ほぼ直立	皿状	-	-	SK514 →本跡
516	C 5 i4	-	円形	0.57 × 0.52	31	ほぼ直立外傾	皿状	-	-	
518	C 3 d2	-	[円形]	(0.29) × (0.28)	32	外傾	平坦	人為	-	SK522・524, HG 1 →本跡 → SK521
521	C 3 d2	N - 84° - W	楕円形	0.45 × 0.37	58	直立	平坦	-	-	SK518・522, HG 1 →本跡
525	C 3 d3	-	円形	0.45 × 0.45	40	直立	有段	人為	-	SI123, SK524 →本跡
528	D 4 g9	N - 83° - W	楕円形	0.67 × 0.60	10	外傾	平坦	-	-	
532	C 3 e3	-	円形	0.31 × 0.31	28	ほぼ直立	平坦	-	-	SI117・120, HG 1 →本跡
533	C 2 f0	-	円形	1.69 × 1.66	45	直立	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 土師器	
535	C 3 f2	N - 19° - E	隅丸長方形	1.09 × 0.65	57	直立	平坦	人為	-	SI117, HG 1 →本跡
536	C 3 f3	N - 33° - W	楕円形	0.60 × 0.53	40	直立	平坦	-	-	SI117, HG 1 →本跡
538	B 5 c2	-	[不整楕円形]	(1.55) × (0.48)	32	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
539	B 5 c2	-	[楕円形]	(1.06) × (0.54)	28	ほぼ直立	平坦	人為	-	
540	B 5 d2	-	[円形・楕円形]	0.68 × (0.40)	18	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SK541 →本跡
541	B 5 d2	-	[円形・楕円形]	0.67 × (0.40)	23	外傾	ほぼ平坦	人為	-	本跡 → SK540
542	B 5 c2	N - 43° - E	[楕円形]	(1.31) × 0.89	17	外傾	ほぼ平坦	人為	-	
545	C 5 a1	N - 10° - E	楕円形	1.32 × 1.16	13	外傾	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 土師器	
546	C 4 b0	-	[円形・楕円形]	(1.09) × (0.50)	34	ほぼ直立	平坦	人為	-	
547	C 4 b0	-	[円形・楕円形]	(1.44) × (0.74)	30	ほぼ直立	凹凸	人為	-	
548	C 5 a1	-	[円形・楕円形]	(0.83) × 0.72	30	ほぼ直立	ほぼ平坦	自然人為	-	
549	B 5 f1	N - 12° - E	[楕円形]	1.76 × (0.60)	26	外傾	皿状	人為	縄文土器, 土師器	SI128 →本跡
552	B 5 j1	-	円形	0.74 × 0.72	54	ほぼ直立外傾	皿状	-	-	
553	C 4 g9	N - 50° - W	楕円形	0.64 × 0.48	42	ほぼ直立	ほぼ平坦	-	-	
554	B 5 j1	N - 8° - E	楕円形	(1.38) × 0.86	68	ほぼ直立	有段	人為	-	
556	C 4 d0	N - 3° - W	楕円形	1.96 × 1.20	52	ほぼ直立外傾	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 土師器	
557	C 3 e5	N - 67° - W	楕円形	0.64 × 0.56	22	ほぼ直立外傾	皿状	-	弥生土器, 土師器	HG 1 →本跡
559	C 4 f0	N - 15° - E	楕円形	1.89 × 1.60	74	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SK560 →本跡
561	C 4 g9	N - 33° - W	[円形・楕円形]	1.00 × (0.62)	44	ほぼ直立	有段	人為	-	
562	B 5 g2	N - 8° - E	[円形・楕円形]	(0.44) × (0.16)	24	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
563	C 3 h4	N - 31° - W	楕円形	1.53 × 1.30	53	ほぼ直立	平坦	人為	銭貨	SK564・567 →本跡
564	C 3 h4	N - 48° - E	[長方形]	(2.32) × 0.95	30	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK567, HG 1 →本跡 → SK563
565	C 3 h3	N - 26° - W	楕円形	0.82 × 0.62	31	外傾	皿状	-	縄文土器	SK566 →本跡
566	C 3 h3	-	[円形]	0.35 × (0.32)	38	外傾	平坦	-	土師器	本跡 → SK565
567	C 3 h4	N - 48° - E	隅丸長方形	3.23 × 1.10	13	ほぼ直立	平坦	人為	-	HG 1 →本跡 → SK563・564
568	C 4 e0	N - 14° - E	[不整形]	(1.08) × (0.88)	58	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK550 →本跡
569	C 3 j9	-	円形	0.41 × 0.40	32	外傾	平坦	-	-	HG 1 →本跡
570	B 5 i1	N - 73° - W	[楕円形]	0.32 × (0.26)	40	ほぼ直立	平坦	-	-	
571	C 3 i9	N - 6° - W	楕円形	1.28 × 0.91	21	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SI130, HG 1 →本跡
572	C 3 j8	-	[楕円形]	0.84 × (0.58)	28	外傾	有段	人為	-	SI150, HG 1 →本跡
573	C 4 g0	N - 84° - W	隅丸長方形	1.12 × 0.58	65	直立	平坦	人為	-	SK558 →本跡
574	C 4 g0	N - 2° - W	隅丸長方形	1.00 × 0.53	67	外傾	平坦	人為	-	SK558・575・580・581 →本跡
575	C 4 g0	N - 8° - E	[隅丸長方形]	1.18 × (0.48)	58	外傾	平坦	人為	-	SK578・580・581 →本跡 → SK574
576	C 4 f9	N - 3° - E	[長方形]	0.52 × (0.25)	38	ほぼ直立	平坦	人為	-	本跡 → SK581
577	C 4 g9	N - 9° - E	[長方形]	0.38 × (0.23)	35	ほぼ直立	平坦	人為	-	本跡 → SK581

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
578	C 4 g9	N - 7° - W	楕円形	0.68 × 0.58	62	外傾 内彎	平坦	人為	-	SK580・581・ 812 → 本跡 → SK575
579	C 4 g9	-	[楕円形]	(0.59) × 0.58	38	外傾	平坦	人為	-	SK580・812 → 本跡
580	C 4 g9	-	[方形]	1.02 × (0.58)	35	ほぼ直立	平坦	人為	-	本跡 → SK574・ 575・578・579・ 581・812
581	C 4 g9	N - 80° - E	長方形	1.42 × 1.27	54	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK558・576・577・ 580 → 本跡 → SK574・ 575・578
582	C 4 fo	N - 6° - E	[楕円形]	(0.45) × 0.28	42	ほぼ直立 外傾	皿状	人為	-	SK560 → 本跡
583	C 4 f9	N - 14° - E	長方形	0.64 × 0.45	52	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK811 → 本跡
584	C 3 f9	N - 77° - W	楕円形	0.88 × 0.78	35	ほぼ直立	皿状	人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器	SK586 → 本跡
587	C 3 j8	N - 16° - E	楕円形	0.85 × 0.74	17	外傾	皿状	人為	-	HG 1 → 本跡
589	C 4 j1	N - 17° - E	[隅丸方形]	1.18 × (0.55)	8	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
600	C 4 j5	N - 80° - W	隅丸長方形	2.78 × 1.00	42	ほぼ直立	平坦	人為	-	SD16 → 本跡
606	C 4 h6	N - 47° - W	[楕円形]	(0.25) × 0.20	59	直立	平坦	-	縄文土器, 土師器	SK605 との重複 不明
608	C 3 f7	-	[楕円形]	(0.64) × (0.62)	56	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器	HG 1 → 本跡
609	C 3 e5	N - 73° - W	[楕円形]	0.70 × (0.44)	38	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	HG 1 → 本跡
617	C 3 f4	-	円形	1.38 × 1.32	22	外傾	平坦	自然	土師器	HG 1 → 本跡
619	C 4 h8	-	方形	0.75 × 0.70	39	ほぼ直立	平坦	人為	-	SK713 → 本跡
620	C 4 h7	N - 3° - W	楕円形	0.99 × 0.85	25	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SK626 → 本跡
621	C 4 i8	N - 48° - E	楕円形	1.82 × 1.52	31	外傾	ほぼ平坦	人為	縄文土器, 土師器	SK622 → 本跡
622	C 4 i8	N - 20° - E	隅丸長方形	1.26 × 0.85	18	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	本跡 → SK621
623	C 3 f5	N - 76° - W	長方形	2.54 × 1.16	62	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	HT 2, HG 1 → 本跡 → PG16
624	C 4 h6	N - 52° - E	楕円形	0.47 × 0.42	75	直立	皿状	-	-	
625	C 4 j5	N - 49° - E	[楕円形]	(0.82) × 0.65	34	ほぼ直立	平坦	-	-	SD16 → 本跡
627	D 4 a4	-	円形	0.42 × 0.42	38	ほぼ直立	皿状	-	縄文土器, 土師器	
629	C 4 j4	N - 41° - E	円形	0.48 × (0.38)	54	ほぼ直立	平坦	-	-	SK630 → 本跡
634	C 4 i4	N - 13° - E	不整楕円形	0.58 × 0.42	29	外傾	皿状	-	-	SK635・636 → 本跡
638	C 4 j8	-	円形	0.59 × 0.55	27	外傾	皿状	-	縄文土器, 土師器	
639	C 4 j9	-	円形	0.68 × 0.67	10	外傾	ほぼ平坦	-	-	
641	C 3 f4	-	円形	0.67 × 0.63	36	ほぼ直立	皿状	-	-	HG 1 → 本跡 → PG16
644	C 4 j9	N - 10° - E	楕円形	2.12 × 1.68	60	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器	
645	C 4 j4	N - 77° - W	[円形]	1.76 × 1.38	56	外傾	平坦	人為	-	SK635 → 本跡
646	C 4 j4	N - 5° - E	隅丸長方形	0.82 × 0.63	40	外傾	平坦	人為	-	SK636 → 本跡
648	C 4 j5	-	円形	1.10 × 1.02	88	ほぼ直立	有段	人為	縄文土器, 瓦	SK637 → 本跡
654	C 4 b4	N - 73° - E	不整長方形	1.94 × 0.55	12	ほぼ直立	平坦	-	-	
658	D 4 a9	-	円形	0.45 × 0.43	24	外傾	皿状	-	-	
659	C 4 h8	N - 44° - W	[楕円形]	1.01 × (0.41)	52	直立	平坦	-	-	
662	C 4 i8	N - 9° - W	楕円形	1.86 × 1.42	54	外傾	平坦	人為	-	SK667 → 本跡
663	D 4 b8	N - 55° - W	楕円形	1.34 × 0.90	42	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	-	SI144 → 本跡
667	C 4 i8	N - 65° - W	[楕円形]	1.70 × (1.26)	52	外傾	ほぼ平坦	人為	-	本跡 → SK662, PG18
674	C 4 h3	N - 40° - E	楕円形	1.21 × 0.93	33	外傾	ほぼ平坦	-	縄文土器, 土師器	SK700 → 本跡
676	D 4 d9	N - 39° - E	楕円形	1.54 × 1.16	30	外傾	平坦	人為	-	第1号円形周溝 遺構 → 本跡
677	C 4 i3	N - 75° - W	楕円形	0.68 × 0.48	22	外傾	平坦	人為	-	
678	D 4 c0	N - 80° - W	[不整楕円形]	(1.20) × 0.76	50	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	-	SI148 → 本跡
679	C 4 i4	-	円形	0.65 × 0.64	28	外傾	皿状	-	-	SD21 → 本跡
681	D 4 d9	N - 43° - E	楕円形	1.14 × 0.90	17	外傾	有段	人為	縄文土器, 土師器	第1号円形周溝 遺構, PG19 本跡 → SK682
682	D 4 d9	N - 21° - W	楕円形	0.52 × 0.40	18	外傾	皿状	人為	-	第1号円形周溝 遺構, SK681 → 本跡
689	C 3 g0	N - 35° - E	楕円形	0.93 × 0.74	43	外傾	ほぼ平坦	人為	-	SK690 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
690	C 3 g0	N - 39° - W	[楕円形]	0.86 × (0.70)	32	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK689
692	C 4 i9	N - 88° - E	長方形	1.34 × 0.53	10	外傾	平坦	-	鉄滓	SI146, SK618 → 本跡
693	C 4 i6	-	円形	1.42 × 1.33	17	直立	平坦	人為	縄文土器, 土師器	SI145・SD24 → 本跡
696	D 4 d9	-	[円形・楕円形]	1.90 × 0.58	56	直立	平坦	人為	鉄滓	第1号円形周溝遺構, PG19 → 本跡
698	D 4 i6	-	[隅丸長方形]	(1.36) × (0.56)	41	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	SI149 → 本跡
699	C 4 i3	N - 70° - W	[楕円形]	0.48 × (0.40)	54	ほぼ直立	平坦	採取痕埋土	-	
701	C 4 h3	N - 26° - W	不整楕円形	0.88 × 0.61	62	ほぼ直立	皿状	-	-	
702	C 3 h9	N - 85° - W	隅丸長方形	1.66 × 0.96	27	ほぼ直立	平坦	人為	-	
703	C 3 i0	N - 4° - W	楕円形	0.59 × 0.50	38 ~ 42	直立	平坦	採取痕埋土	-	
704	C 3 j0	-	円形	0.88 × 0.86	16	直立	平坦	-	-	
713	C 4 h7	-	円形	1.18 × 1.15	32	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	PG18 → 本跡 → SK619
714	C 4 j8	N - 42° - W	楕円形	1.52 × 1.28	66	ほぼ直立	平坦	人為	-	→ PG18 → 本跡
718	C 4 h6	N - 16° - E	[楕円形]	(1.84) × 1.62	44	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	SK719 との重複不明
719	C 4 i6	N - 60° - E	[楕円形]	1.50 × (1.30)	54	直立	ほぼ平坦	人為	-	SK718 との重複不明
800	E 9 b6	N - 39° - W	楕円形	1.74 × 1.33	30	外傾	皿状	人為	-	
802	E 4 h0	N - 35° - W	楕円形	0.38 × 0.34	25	外傾	有段	人為	-	
803	E 4 h0	-	円形	0.38 × 0.37	25	ほぼ直立	平坦	-	-	
804	D 8 g0	-	円形	0.38 × 0.36	78	ほぼ直立	平坦	-	-	SI68・69・SK429 → 本跡
807	E 9 g6	N - 76° - W	楕円形	0.86 × 0.74	32	ほぼ直立	ほぼ平坦	-	-	SK68 → 本跡
808	E 5 b1	N - 60° - W	楕円形	0.72 × 0.65	47	ほぼ直立	ほぼ平坦	人為	-	
809	D 7 i3	-	円形	0.48 × 0.45	14	外傾	平坦	-	-	
811	C 4 f9	N - 20° - E	楕円形	0.57 × 0.45	30	外傾	皿状	人為	-	本跡→SK583
812	C 4 g9	N - 43° - E	楕円形	0.40 × 0.27	48	外傾内彎	平坦	人為	-	SK580 → 本跡 → SK578・579

(6) ピット群 (付図)

時期不明のピット群については、計測表と一覧表を掲載する。

表 36 第1号ピット群計測表

番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	E 9 d5	楕円形	44	40	18	5	E 9 e5	楕円形	57	30	43	9	E 9 e5	楕円形	53	46	22
2	E 9 d5	楕円形	36	32	29	6	E 9 e5	楕円形	48	37	28	10	E 9 e4	円形	55	52	58
3	E 9 d5	楕円形	48	40	39	7	E 9 e5	楕円形	42	38	24	11	E 9 e4	円形	76	70	63
4	E 9 e5	円形	40	40	40	8	E 9 e5	円形	30	29	36						

表 37 第4号ピット群計測表

番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)			番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 9 i9	円形	31	29	27	4	D 9 i0	円形	28	27	26	7	D 9 h0	楕円形	52	42	38
2	D 9 i9	楕円形	35	30	29	5	D 10 i1	円形	37	36	27						
3	D 9 h0	楕円形	36	31	28	6	D 10 i1	楕円形	38	31	30						

表 38 第 11 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	E 5a2	[楕円形]	39	(32)	44
2	E 5a1	不整形	49	48	36
3	E 5b1	楕円形	77	38	39

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
4	E 5a1	楕円形	40	30	27
5	E 5b1	楕円形	46	40	19
6	E 5a1	楕円形	46	40	19

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
7	E 5a1	楕円形	40	34	40
8	E 5b1	楕円形	34	30	40

表 39 第 12 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 3h1	円形	29	28	20
2	C 3h1	円形	22	20	26
3	C 3i1	楕円形	32	28	17
4	C 2h0	円形	32	30	18

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
5	C 2h0	円形	27	26	19
6	C 2h0	楕円形	44	34	11
7	C 2g0	楕円形	38	34	20
8	C 2h0	楕円形	32	29	16

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
9	C 2h0	円形	23	23	19
10	C 2h0	円形	40	38	13
11	C 2h0	円形	18	17	30

表 40 第 13 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 4a4	円形	44	40	42
2	D 4a4	円形	28	28	22
3	D 4a4	円形	30	30	24
4	D 4a4	円形	36	34	40

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
5	D 4a4	円形	32	32	16
6	D 4a4	円形	30	30	43
7	D 4a4	円形	20	19	30
8	D 4b4	円形	34	32	22

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
9	D 4a4	円形	41	39	40
10	D 4a3	円形	22	20	38

表 41 第 14 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 3g3	円形	49	49	46
2	C 3g3	円形	31	30	22
3	C 3h3	円形	24	22	26
4	C 3h3	円形	26	24	33
5	C 3g3	隅丸方形	9	8	30
6	C 3h5	円形	30	30	34
7	C 3h5	円形	32	32	12
8	C 3h5	円形	7	6	11
9	C 3h5	円形	8	7	29
10	C 3h5	円形	30	30	20
11	C 3h6	円形	30	30	19

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
12	C 3h6	楕円形	28	24	18
13	C 3h6	円形	30	30	33
14	C 3h6	楕円形	28	24	20
15	C 3h8	楕円形	29	26	32
16	C 3h6	楕円形	34	30	47
17	C 3h6	円形	18	18	44
18	C 3h6	楕円形	20	16	43
19	C 3g7	楕円形	44	38	45
20	C 3g7	円形	41	40	20
21	C 3h7	円形	40	40	46
22	C 3h7	円形	20	19	33

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
23	C 3h7	円形	20	20	53
24	C 3h7	円形	31	30	66
25	C 3g6	円形	40	40	38
26	C 3h7	円形	22	22	33
27	C 3h8	楕円形	24	20	54
28	C 3g5	円形	30	30	26
29	C 3g5	円形	30	30	31
30	C 3g5	円形	28	26	32
31	C 3g4	円形	20	20	35

表 42 第 15 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 3j9	円形	39	39	38
2	C 3j9	円形	16	15	22
3	C 3j9	円形	34	33	15

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
4	C 3j9	円形	39	38	17
5	C 3j8	楕円形	25	21	28
6	C 3j8	円形	40	39	28

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
7	C 3i9	円形	40	38	42
8	C 3i9	円形	50	48	19
9	C 3i0	円形	32	30	31

表 43 第 16 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 3e5	円形	22	22	24
2	C 3e5	円形	22	21	50
3	C 3f5	円形	28	28	54
4	C 3f4	楕円形	34	31	38
5	C 3f4	円形	29	29	37
6	C 3f4	円形	36	34	32
7	C 3f4	円形	20	20	27

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
8	C 3f4	円形	20	19	32
9	C 3f5	円形	28	28	20
10	C 3f5	円形	28	28	22
11	C 3f5	円形	25	24	34
12	C 3f6	円形	40	40	44
13	C 3f4	円形	32	31	28
14	C 3f4	円形	30	30	24

番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ
15	C 3f4	円形	21	20	51
16	C 3g4	楕円形	30	26	50
17	C 3g4	楕円形	26	23	30
18	C 3f7	円形	12	11	32
19	C 3f6	円形	19	18	10
20	C 3f4	円形	24	23	42

表 44 第 17 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 4 g5	円形	20	20	26	7	C 4 g4	円形	23	22	18	13	C 4 g4	円形	15	14	25
2	C 4 g4	円形	23	22	21	8	C 4 g4	円形	19	18	34	14	C 4 g4	[円形]	25	(16)	25
3	C 4 g5	円形	18	18	24	9	C 4 g4	円形	20	19	18	15	C 4 g3	楕円形	22	17	42
4	C 4 h4	円形	21	20	25	10	C 4 g4	円形	19	19	21	16	C 4 h3	円形	20	20	44
5	C 4 h4	円形	20	19	23	11	C 4 g4	楕円形	12	9	12	17	C 4 h4	円形	22	20	36
6	C 4 g4	円形	19	19	21	12	C 4 g4	円形	14	14	24						

表 45 第 18 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	C 4 i7	円形	22	21	13	6	C 4 i8	円形	20	19	8	11	C 4 i8	円形	24	23	25
2	C 4 i7	円形	19	18	8	7	C 4 i7	円形	25	24	10	12	C 4 i7	円形	23	23	8
3	C 4 i7	円形	19	18	9	8	C 4 i7	円形	32	30	34	13	C 4 i7	円形	24	23	15
4	C 4 h7	円形	32	30	14	9	C 4 i8	円形	28	26	11						
5	C 4 i7	円形	20	20	16	10	C 4 i8	円形	24	22	21						

表 46 第 19 号ピット群計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ				長径(軸)	短径(軸)	深さ
1	D 4 c9	円形	30	30	48	4	D 4 c9	円形	30	29	43	7	D 4 e9	円形	41	40	23
2	D 4 d9	円形	28	26	24	5	D 4 c8	円形	28	27	34	8	D 4 e9	円形	32	30	27
3	D 4 d9	円形	25	24	37	6	D 4 f9	円形	25	24	48	9	D 4 d0	円形	32	(26)	35

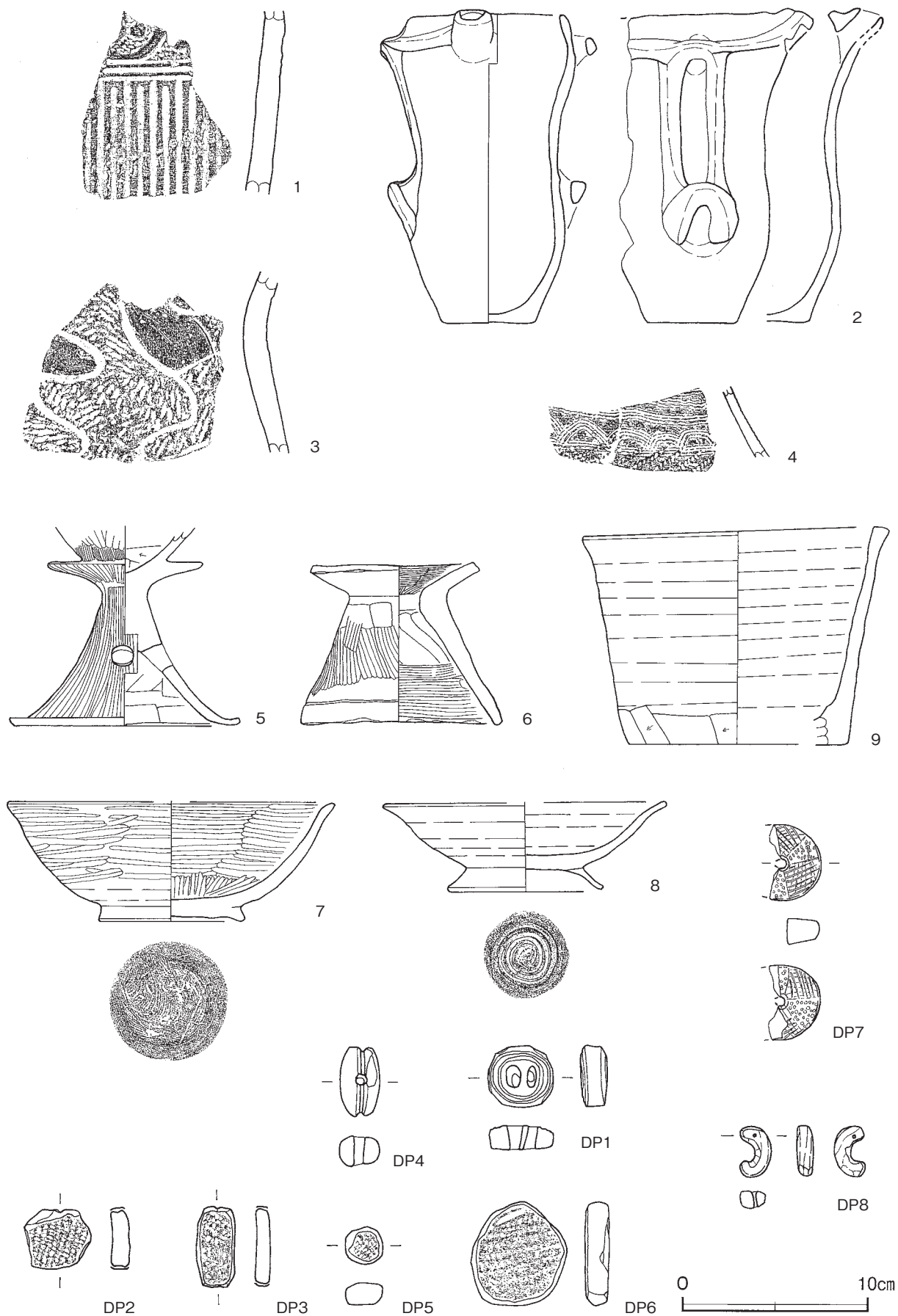
表 47 その他ピット群一覧表

番号	位置	規模		ピット数	主な出土遺物	備考
		南北	東西			
1	E 9 d5 ~ E 9 e5	5.8	5.0	11	縄文土器, 弥生土器, 土師器	SI38・39A・B →本跡
4	D 9 h0 ~ D 10 i1	(3.8)	9.8	7	-	-
11	E 5 a2 ~ E 5 b1	(4.6)	3.8	8	-	-
12	C 2 g0 ~ C 3 i1	5.4	6.6	11	縄文土器, 土師器	-
13	D 4 a3 ~ D 4 b4	3.8	5.4	10	-	SI135・137, SK708 →本跡
14	C 3 g3 ~ C 3 h8	6.8	9.6	31	縄文土器, 土師器	SI125, HG 1 →本跡
15	C 3 j8 ~ C 3 i0	4.1	8.0	9	-	SI130, HG 1 →本跡
16	C 3 e5 ~ C 3 f7	6.9	7.6	20	縄文土器, 土師器	HT 2, SK623, 641, HG 1 →本跡
17	C 4 g5 ~ C 4 h4	(2.6)	4.2	17	-	-
18	C 4 h7 ~ C 4 i8	4.1	6.5	13	-	SI145, SK667・714 →本跡 → SK713・714 SN23 との重複不明
19	D 4 c8 ~ D 4 f9	6.7	4.1	9	-	第 1 号円形周溝遺構 →本跡 → SK681・696

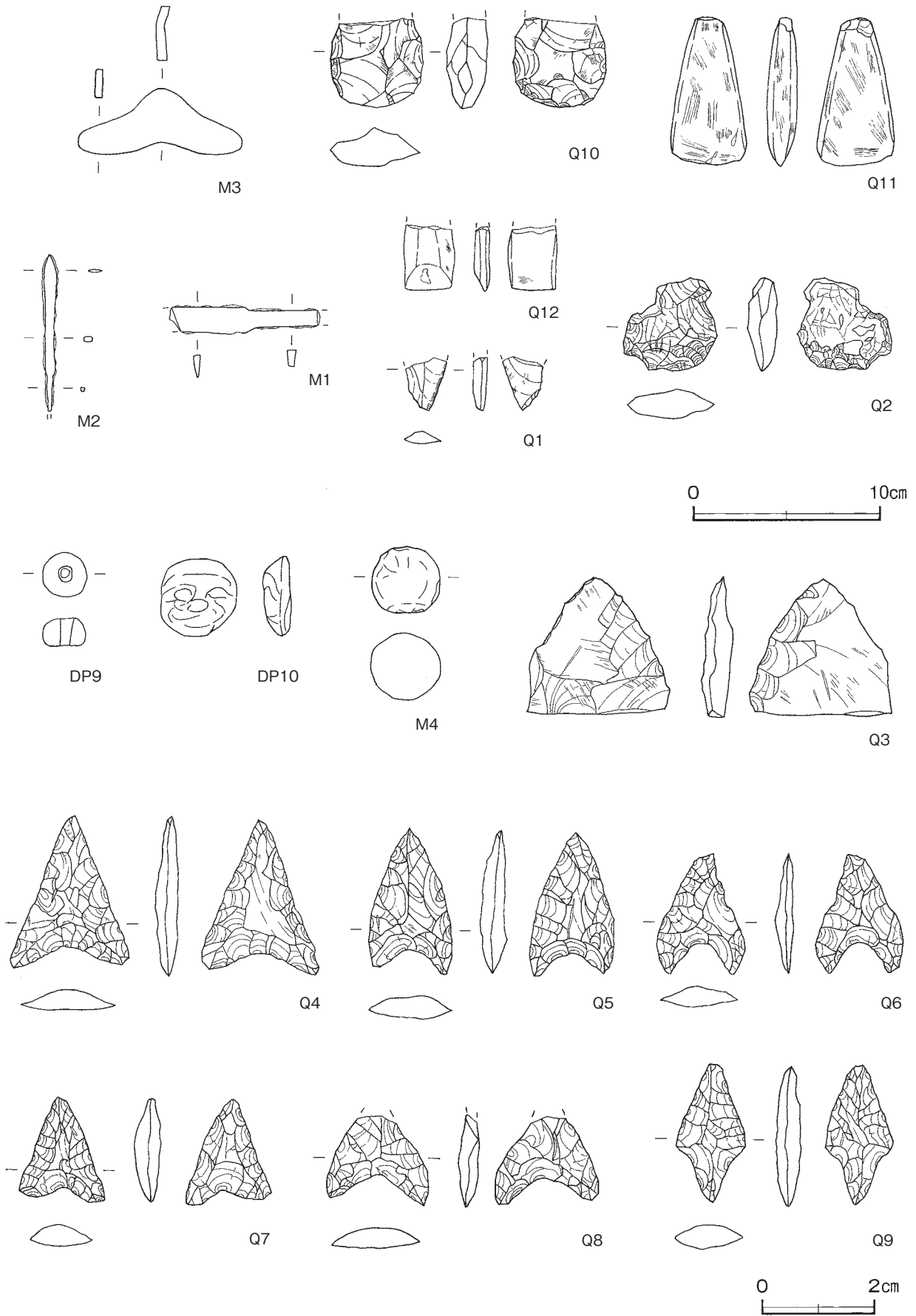
(7) 遺構外出土遺物 (第 464 ~ 466 図)

今回の調査で確認した遺構に伴わない遺物については、実測図及び遺物観察表を掲載する。

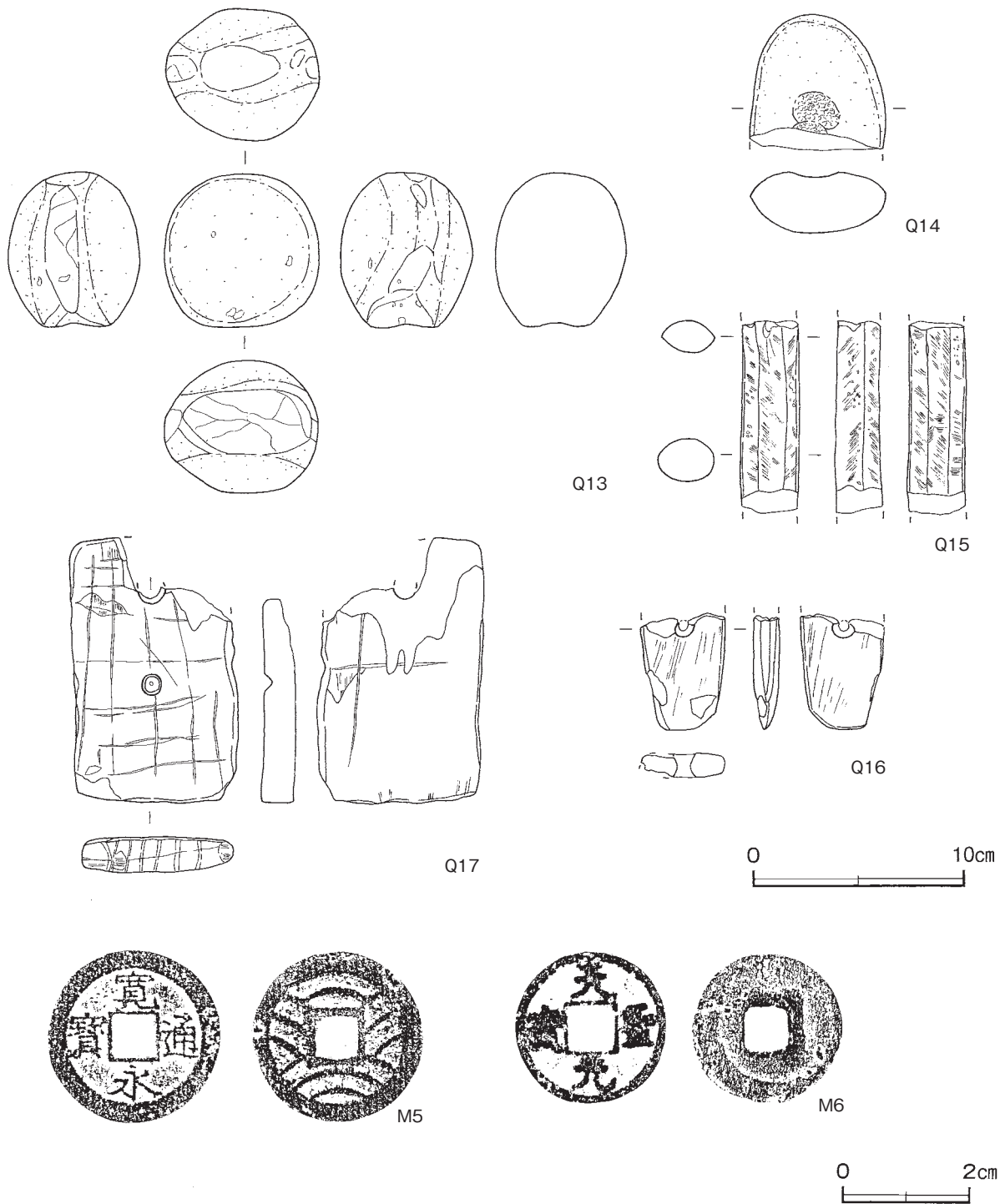
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(10.0)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	横位の隆帯・沈線下にU字状の縦隆帯	調査区西部	10% PL66
2	縄文土器	注口土器	[8.0]	17.0	4.7	長石・石英・針状物質	橙	普通	口縁部隆起線周回 胴部隆起線垂下 上下1対の把手	調査区東部	50% PL60
3	弥生土器	壺型土器	-	(8.2)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	地紋 rℓ 無節縄文羽状構成 波状沈線区画内一部磨消	調査区東部	10% PL61



第464图 遺構外出土遺物実測図(1)



第 465 図 遺構外出土遺物実測図(2)



第466図 遺構外出土遺物実測図(3)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	弥生土器	壺型土器	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	横位波状文下に連弧紋	調査区東部	10% PL61
5	土師器	器台	-	(10.7)	11.6	長石・石英・針状物質	明赤褐	普通	受け部外面ハケ目調整後縦位の磨き、内面横・斜位のナデ、台部外面縦位の磨き、内面横斜位のナデ、穿孔4か所	調査区東部	80% PL74
6	土師器	器台	8.6	8.8	10.5	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	受け部内面横位のハケ目調整、台部外面縦位のハケ目調整、内面縦位のナデ後横位のハケ目調整、輪積痕	調査区東部	100% PL74
7	土師器	椀	[17.5]	6.4	7.7	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外・内面横位の磨き、底部外面回転糸切り後縁辺部のナデ、内面三方向の磨き、内面黒色処理	調査区東部	50% PL94
8	土師器	高台付皿	[14.9]	4.8	8.1	長石・石英・雲母・針状物質	橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ 高台部貼付	調査区西部	60% PL94
9	瓦質土器	鉢	15.6	11.8	11.8	長石・石英・細礫	黒褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ、体部下端部ヘラ削り	調査区西部	90% PL99

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	環状耳飾。	3.5	3.3	1.4	19.06	雲母・白色粒子	にぶい赤褐	上面二重沈線内に2か所の孔	調査区西部	PL101
DP 2	土器片鏃	3.3	3.6	1.1	13.13	長石・石英	にぶい黄橙	側面削り調整 長辺の側面に1対の刻み LR単節縄文	調査区東部	
DP 3	土器片鏃	4.4	2.1	0.9	9.79	長石・石英 白色粒子	にぶい黄橙	側面削り調整 短辺の側面二対の刻み RL単節縄文磨消	調査区東部	PL101
DP 4	土鏃	3.8	2.1	1.7	13.44	長石・石英 白色粒子	橙	中央部に縦位の沈線 中心部に穿孔1か所	調査区西部	PL101
DP 5	土器片円盤	2.0	2.0	1.1	5.35	長石・針状物質・ 白色粒子	橙	側面削り調整 LR単節縄文	調査区東部	PL101
DP 6	土器片円盤	5.5	5.2	1.3	38.13	長石・石英・ 針状物質	にぶい黄橙	側面削り調整 RL単節縄文	調査区東部	PL101
DP 7	紡錘車	4.1	1.5	0.5	16.59	長石・石英 白色粒子	橙	半部欠損 放射状の細沈線区画 区画内格子状の刻みと刺突による文様 中心部穿孔	調査区東部	PL101
DP 8	勾玉	2.7	1.6	0.9	3.67	長石・石英・ 針状物質	黒褐	全面ナデ調整 両面からの穿孔1か所	調査区西部	PL101
DP 9	小玉	0.8	0.8	0.5	0.30	針状物質・ 白色粒子	黒褐	全面ナデ調整 中心部穿孔	調査区西部	PL101
DP10	泥面子	1.4	1.4	0.6	1.04	赤色粒子	橙	型押し 人面。	調査区中央部	PL101

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	剥片	(2.9)	2.1	0.7	(3.58)	頁岩	縦長剥片 片面の側面に調整	調査区東部	PL103
Q 2	搔器	4.9	5.1	1.6	33.01	瑪瑙	両面縁辺部に剥離調整 被熱のため白濁化・網目状の亀裂	調査区東部	PL103
Q 3	鏃	(2.5)	2.5	0.5	(2.50)	頁岩	未成品 半部欠損 左側縁部に微細な剥離痕	調査区東部	PL103
Q 4	鏃	2.3	2.1	0.4	1.58	瑪瑙	凹基 両面に押圧剥離	調査区西部	PL103
Q 5	鏃	2.6	1.5	0.5	1.52	チャート	凹基 両面に押圧剥離	調査区東部	PL103
Q 6	鏃	2.1	1.6	0.4	0.74	石英	凹基 両面に押圧剥離	調査区東部	PL103
Q 7	鏃	1.9	1.5	0.4	0.79	チャート	凹基 両面に押圧剥離	調査区東部	PL103
Q 8	鏃	1.5	1.4	0.4	0.80	チャート	凹基 両面に押圧剥離	調査区西部	PL103
Q 9	鏃	2.5	1.2	0.5	0.98	瑪瑙	有基 両面に押圧剥離	調査区東部	PL103
Q 10	打製石斧	(5.0)	4.8	2.1	(43.24)	頁岩	上部欠損 両側縁辺部に剥離調整	調査区東部	PL103
Q 11	磨製石斧	8.0	4.2	1.1	91.00	蛇紋岩	全面研磨 基部一部破損	調査区東部	
Q 12	磨製石斧	(3.5)	2.7	0.9	(13.50)	蛇紋岩	半部欠損 全面研磨 刃部裏面研ぎ足し片刃状	調査区東部	
Q 13	磨石	7.3	7.3	6.3	481.32	砂岩	上・下面自然面 側面研磨痕	調査区東部	PL102
Q 14	敲石	(6.5)	6.5	3.0	(218.03)	安山岩	半部欠損 表面に凹部2か所	調査区東部	PL102
Q 15	石剣	(9.2)	2.8	2.2	(90.60)	粘板岩	上・下部欠損 全面研磨加工 一部段打痕	調査区東部	PL103
Q 16	垂飾。	(5.5)	4.0	1.2	(37.04)	粘板岩	端部欠損 全面研磨加工 両面からの穿孔1か所	調査区東部	PL107
Q 17	温石	12.6	8.0	1.6	(300.97)	雲母片岩	一部欠損 上・下面平滑、穿孔1か所、格子状の線刻 上面穿孔途中の凹部1か所 側面ノミ状工具による削り調整後平滑	調査区西部	PL104

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(7.9)	1.9	0.5	(18.25)	鉄	両端部欠損 刃部断面三角形 柄部断面長方形	調査区東部	PL108
M 2	鏃	(8.5)	0.7	0.4	(6.27)	鉄	鏃身部柳葉状、断面楕円形・長方形 両側 基部一部欠損、断面方形	調査区東部	PL108
M 3	火打金	8.8	3.5	5	35.46	鉄	断面長方形	調査区東部	PL108
M 4	鉄砲玉	1.3	1.2	1.2	10.63	鉛	鑄造 全面研磨調整 断面円形	調査区西部	PL109

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初铸年	特徴	出土位置	備考
M 5	寛永通寶	2.8	0.8	0.1	2.98	銅	1769	四文銭 裏面11波	調査区西部	PL110
M 6	天聖元寶	2.4	0.7	0.1	4.28	銅	1023	北宋銭	調査区西部	

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査によって、竪穴建物跡 151 棟、掘立柱建物跡 19 棟、方形竪穴遺構 7 基、古墳 1 基、円形周溝遺構 1 基、井戸跡 4 基、粘土貼土坑 29 基、墓坑 10 基、埋甕 5 基、柱穴列 4 条、道路跡 4 条、溝跡 14 条、段切状遺構 1 条、土坑 594 基、ピット群 19 か所、遺物包含層 1 か所を確認した。これらは時期不明の遺構を除けば、縄文時代から江戸時代にかけての遺構で、当台地上に断続的な人々の生活が営まれてきたことを物語っている。

また、遺構外の出土遺物にはわずかながら、搔器などの石器類が出土していることから、当遺跡やその周辺には旧石器時代の狩り場が想定できる。しかし、旧石器時代の出土遺物は乏しく、時期や調査区域内での遺物の密度を明確に示すことは不可能である。

このことから以下、縄文時代から江戸時代までの当遺跡の様相や特筆される遺構や遺物について記述する。

2 縄文時代の様相（第 467 図）

当時代の遺構は、竪穴建物跡 4 棟、埋甕 5 基、土坑 67 基、遺物包含層 1 か所を確認した。遺構の分布状況から A～E 群に分けられ、A・D 群は竪穴建物跡と土坑群、B・C 群は埋甕と土坑群、E 群は竪穴建物跡で構成されている。

A 群は調査区の東部に位置し、北側に第 49・89 号竪穴建物跡の 2 棟と中央から南側にかけての第 59 号土坑を含む土坑 4 基で構成されている。D 群は調査区の西部に位置し、東側に第 125 号竪穴建物跡の 1 棟と中央から西側にかけての第 448 号土坑を含む 5 基で構成されている。A・D 群の遺構の確認面は主に基本層序第 4～6 層の上面で、今市軽石層や関東ローム層の上面で確認されている。

B 群は、調査区の東部から中央部にかけて位置し、第 1～3 号埋甕の 3 基と第 124 号土坑を含む 29 基で構成されている。C 群は調査区の中央部から西部にかけて位置し、第 4・5 号埋甕の 2 基と第 451 号土坑を含む 29 基で構成されている。B・C 群の遺構の確認面は主に基本層序第 2～4 層の上面で、埋没谷への流入土や今市軽石層の上面で確認されている。

これらの A～D 群の間には埋没谷が位置している。埋没谷の調査は、調査区西部の第 1 号遺物包含層でおこなっており、中期後葉から後期前葉の土器資料を主としながらも、早期の撚糸文系の土器、前期の田戸下層式、黒浜式土器、後期中葉の加曾利 B 式土器が少数出土していることから、台地上の支谷が埋没した時期は概ね後期中葉段階と想定できる。このことから A～D 群は、支谷が完全に埋没していない段階の集落と考えられ、集落が台地上の支谷で区切られた小台地の縁辺部から谷頭部分に展開していたと思われる。遺構確認面の状況から、A・D 群は支谷を上りきった比較的高い場所に、B・C 群は谷頭部付近の傾斜面に展開していたと考えられる。また B・C 群については、調査区北側に延びている可能性があり、A・D 群と同様に居住群の空間は、調査区外の支谷を上りきった比較的高い場所に展開していたことが想定でき、竪穴建物群とその外側に土坑群が配される集落の形態であったことが考えられる。

E 群の第 151 号竪穴建物跡は第 1 号遺物包含層を掘り込んでいることから、後期中葉以降の集落の縁辺部に位置していると推定できる。また、D 群の中には諸磯 C 式の土器片が出土した第 448 号土坑が含まれていることから、調査区域西部の南側に縄文前期の集落が存在した可能性がある。

遺構から出土した土器は加曾利EⅣ式、称名寺、堀之内、大木10式、綱取式が主体で、中期末～後期前葉段階が主体であり、南関東系や西日本系、東北系の土器の系譜が交わる地域に位置づけられる。併せて遺構外出土ではあるが、火炎土器系（第464図1）の破片1点が表採されていることから、北陸地域とも交流や交易があった可能性がある。また石器については、頁岩を加工した打製石斧（第465図Q10）が表採されており、東北地方から石材が搬入された可能性がある。これらのことから、直接的・間接的かは不明ながらも、各地域との交流や交易がおこなわれていたと考えられる。

当遺跡から出土した土製品や石器は、鏃、磨石、敲石、凹石、石皿、錘などがあり、狩猟や採集、漁猟を糧に集落が営まれていたと考えられる。当遺跡の南東約3kmに所在する森東遺跡や築崎遺跡では、縄文前期の貝塚が確認されており、ヤマトシジミやアカニシ・ハマグリ・カキなどが出土している。台地麓下の沖積地から久慈川流域や支流の里川流域が、中期段階においても汽水域や入り江など水辺であったかは不明であるが、出土した土製品や石器に錘が含まれていることから、こうした環境下で当集落が営まれていた可能性がある。

3 弥生時代の様相（第467図）

当時代の遺構は、竪穴建物跡2棟を確認した。調査区域の東部に第56号竪穴建物跡、西部に第90号竪穴建物跡を1棟ずつ確認した。出土遺物は後期後葉の十王台式土器が出土しているが、調査区東部からは弥生時代中期の猪式土器の破片（第464図3）が表採されていることから、中期以降の集落が当台地上に営まれていた可能性がある。調査区域内においても、おそらくは縄文時代の集落跡と同様に、古墳時代以降の集落が形成された段階で、建物跡などの生活の痕跡は攪乱を受け、失われたと考えられる。各遺構に混入した弥生土器が比較的多いことから、弥生時代の集落が存在し、人々の営みが繰り返し広げられていたものと思われる。

4 古墳時代の様相（第468～470図）

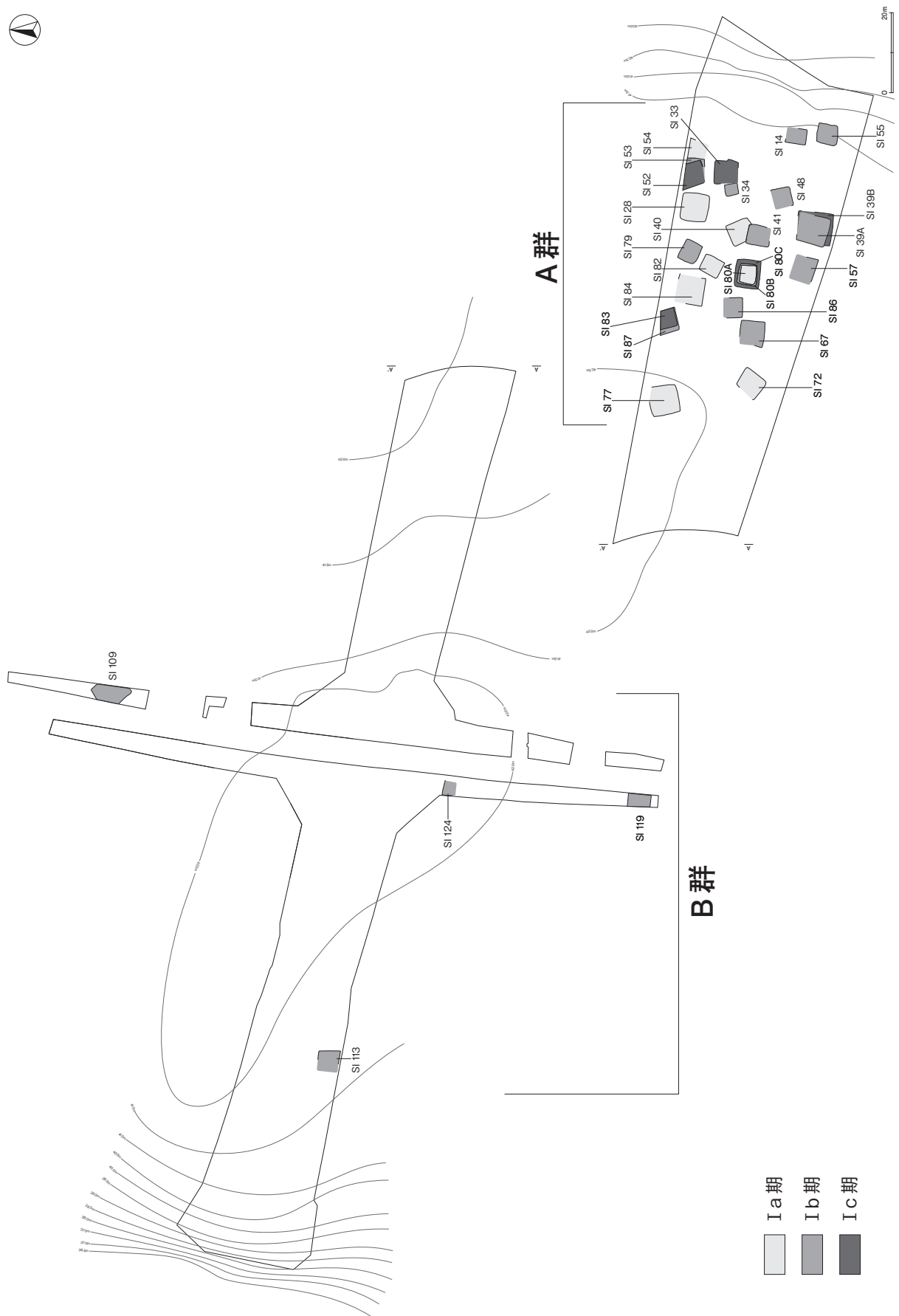
当時代の遺構は、竪穴建物跡77棟、掘立柱建物跡2棟、古墳1基、円形周溝遺構1基、井戸跡1基、柱穴列2条、溝跡1条、土坑30基を確認した。遺構の分布状況や出土遺物からは、4世紀中葉から5世紀前葉、6世紀中葉から後葉、6世紀後葉から7世紀後葉に分けられることから、大きく3時期に区分して集落の様相を述べる。

第Ⅰ期（第468図）

4世紀中葉から5世紀前葉にかけての主な遺構は、竪穴建物跡30棟で、第109・118・119・124号竪穴建物跡の4棟を除いた竪穴建物跡は、調査区の東部に位置している。これらは遺構の配置や重複関係、出土遺物から第Ⅰa期が4世紀中葉、第Ⅰb期が4世紀後葉、第Ⅰc期が5世紀前葉に時期を細分することができる。

第Ⅰa期

当期の竪穴建物跡は、第28・40・54・72・77・80A・82・84号竪穴建物跡の8棟で、竪穴建物跡はすべて調査区域東部のA群に位置している。竪穴建物跡の主軸方向は、不明な第54・57号竪穴建物跡を除くと、第28・80A・84号竪穴建物跡がN-10°～15°-E、第40・77号竪穴建物跡がN-10°～14°-W、第72号竪穴建物跡がN-40°-E、第82号竪穴建物跡がN-27°-Eであり、A群内での統一性はみられない。また、第28号竪穴建物跡から出土した3（第73図）や第40号竪穴建物跡の1・2（第86図）は、弥生土器の体部下位を輪積みに沿って打ち欠き、器台などに転用した可能性がある製品で、これらが出土



第 468 図 古墳時代（第 I 期）の主な遺構配置図

した2棟の竪穴建物跡は、比較的時期に近い建物であったと考えられる。このことから、竪穴建物の主軸方向と時期との関係性は認められず、主軸方向が異なった竪穴建物群で集落が構成されていたと考えられる。こうした背景には、出土遺物の中に東海系の土器（第73図14など）や南関東系の土器（第77図4など）、房総系の土器（第121図18など）などの特徴を残す土器がみられることから、様々な地域からの人と物の動きがあり、在地化していく中で、多様性をもつ人々で集落が構成されていたためと考えられる。

第77号竪穴建物跡P1の覆土からは羽口片（第129図DP1）が出土している。弥生時代の鉄製品は、ひたちなか市の半分山遺跡¹⁾や茨城町の矢倉遺跡²⁾、大畑遺跡³⁾で出土しているが、搬入品と推定できる。一方、土浦市の八幡脇遺跡⁴⁾や3世紀後半の東国最古の本格的鍛冶工房を確認した千葉県八千代市の沖塚遺跡⁵⁾などでは、鍛冶工房に伴う羽口が確認されている。これらをはじめとした弥生時代後期から古墳時代前期の関東地方各地の遺跡で出土した羽口の断面形は円形で、当遺跡出土の羽口の断面形とは異なっている。しかし、福岡県博多市の博多遺跡群（59・65次）や奈良県桜井市の纏向遺跡（57・80・102次）、新潟県長岡市の五千石遺跡では断面形が蒲鉾型の羽口が出土しており⁶⁾、当遺跡出土の羽口と類似している。また第40号竪穴建物跡から出土した砥石（第87図Q1・Q2）などには複数の線刻が確認でき、金属製品を使用した結果、傷がついた可能性がある。当代における金属製品の出土や鍛冶炉は確認できなかったものの、出土遺物から当集落の周辺で生産された金属製品を、当遺跡で加工していた可能性は十分に考えられる。

第I b期

4世紀後葉の竪穴建物跡は、第14・34・39A・41・48・53・55・57・67・79・80B・86・87・109・113・119・124号竪穴建物跡の17棟である。第109・113・119・124号竪穴建物跡の4棟は調査区西部のB群に、これらを除いた13棟の竪穴建物跡は調査区東部のA群に位置している。A群に含まれる竪穴建物跡の主軸方向はN-27°-EからN-20°-Wで、統一性は認められない。またB群に含まれる竪穴建物跡群は、第109号竪穴建物跡がN-45°-E、主軸方向が不明である第113・119・124号竪穴建物跡の壁の方向は比較的近似しているものの、第109号竪穴建物跡とは異なっている。

A群の第39A号竪穴建物跡は、壁柱穴を有していることから、壁立ちの建物であった可能性があり、A群の中でも際立った特徴がみられる。次代では第39B号竪穴建物に建て替えられていることから、集落内では移動できない重要な建物と考えられ、あるいは集落の中心的な建物であった可能性がある。またA群に位置する竪穴建物跡から出土した砥石の点数は11点を数え、前代と同様の出土遺物の特徴がみられることから、前代から継続して金属製品の生産・加工に携わった可能性がある。

一方B群は、竪穴建物跡からの砥石の出土は1点もなく、また竪穴建物の間隔は比較的密集したA群よりも広域である。第113号竪穴建物跡からはA群内からは出土していない脚付盥（第194図2）が出土しており、当世の威信財の一つであった可能性がある。これらのことから、A・B群は性格が異なった集落であったと考えられる。

当遺跡の北方約600mの地点には瑞龍古墳群が位置しており、4世紀前半の方形周溝墓14基、5世紀代の円墳1基、6世紀前葉の円墳2基を確認している。墓域は、遺構の配置状況から調査区外の台地縁辺部に向かって広がっていると考えられている⁷⁾。瑞龍古墳群の方形周溝墓群は、主軸方向や形態の特徴から4群に分けられ、集団ごとに順次方形周溝墓が造築されたと考えられている。また周溝内から出土した葬送儀礼に関わる遺物の分布状況から、周溝墓群を造築した集落が、南北各地点に複数が存在していたことが想定されている。これらのことは、4世紀後半以降の墓制については不明であるものの、当遺跡の前

代と瑞龍古墳群の方形周溝墓群の年代が一致していることや性格が異なった A・B 群の集落が確認できたことから、当台地上に複数存在した集落は、方形周溝墓群を集落間の中心に造築することで、連帯意識を高めた共立する集落の集合体であったと考えられる。

第 I c 期

5 世紀前葉の竪穴建物跡は、第 33・39B・52・80C・83 号竪穴建物跡の 5 棟で、竪穴建物跡はすべて調査区東部の A 群に位置している。主軸方向は、第 33・39B・80C 竪穴建物跡が N - 7° - 20° - E、第 52 号竪穴建物跡が N - 70° - W、第 83 号竪穴建物跡は N - 15° - W で、統一性は認められない。竪穴建物跡から出土した砥石は 3 点と少なく、確認した竪穴建物跡との比率においても減少している。

第 80C 号竪穴建物跡は、4 世紀中葉の第 80A 号竪穴建物跡、4 世紀後葉の第 80B 号竪穴建物跡から建て替えや拡張をし、当代に至っている。このことから、A 群が 4 世紀中葉から 5 世紀前葉まで継続していたと考えられる。また、第 80C 号竪穴建物跡からは、土器の破片などを含めると 2,800 点を超える遺物が出土しており、単なる生活不要品の一括投棄とは考えにくい一面があり、集落内で何らかのマツリがおこなわれ、投棄された結果と考えられる。

第 80C 号竪穴建物跡から出土した土器の組成は、甕類が 2,087 点と非常に多く、出土土器の 73% を占めている。このことは、供献具に当たる椀 15 点、埴 371 点、高坏 349 点などと比較しても圧倒的で、多くの食物が調理されたことが考えられるとともに、調理に対して清浄さを保つため、甕を一度のみ使用して廃棄した可能性がある。こうしたことから、神々に供えるために集った人々のマツリが終焉した後、土器が投棄されたと考えられ、第 80A ~ C 号竪穴建物跡が集落の継続期間に一定の場から移動していないことから、マツリに関わる重要な建物であったことが想定できる。

今回調査した 4 世紀中葉から 5 世紀前葉にかけての集落は、瑞龍古墳群の考察にみられるように、東海地域や東京湾周辺、房総地域との交流・交易に加え、北陸方面からの影響を背景に成立したものと考えられる⁸⁾。瑞龍古墳群や当遺跡における竪穴建物跡が密集する A 群の立地は、当台地の東部から東端部で、里川を望む地点に位置している。このことから、里川に対する意識性を読み取ることができ、各地との交流・交易が里川を介して展開していたと考えられる。

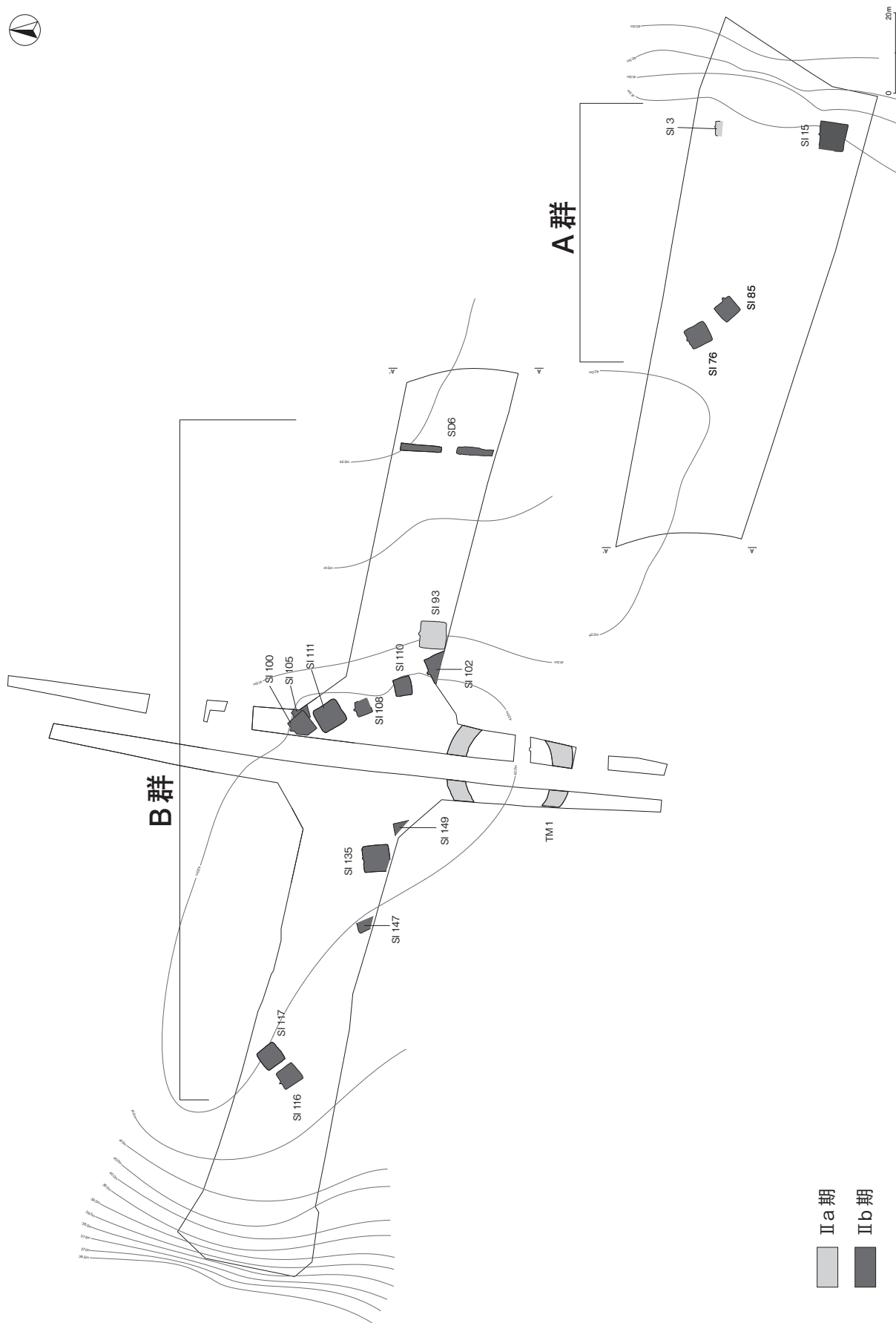
第 II 期 (第 469 図)

6 世紀中葉から 6 世紀後葉にかけての主な遺構は、竪穴建物跡 14 棟、古墳 1 基、円形周溝遺構 1 基、溝跡 1 条などである。これらは遺構の分布状況や重複関係、出土遺物から、第 II a 期が 6 世紀中葉、第 II b 期が 6 世紀後葉に時期を細分することができる。

第 II a 期

当期の竪穴建物跡は、第 3・93 号竪穴建物跡で、調査区東部の A 群と調査区西部の B 群に各 1 棟ずつ位置している。主軸方向は、第 3 号竪穴建物跡、第 93 号竪穴建物跡ともに N - 5° - E ほどで、ほぼ揃っている。A 群の第 3 号竪穴建物跡は、球体型の甕が出土しており当期の建物と考えられるが、大半が第 2 号竪穴建物に掘り込まれていることから、構造などは不明な部分が多い。竈は凝灰質泥岩を用いて構築されており、当遺跡の調査区域では、この頃から石材を用いた竈が出現したものと考えられ、このことから石材を採掘したり、加工したりする石工などの工人集団の存在が想定できる。

B 群の第 93 号竪穴建物跡は、第 3 号竪穴建物跡と同様に、竈に凝灰質泥岩を用いて構築されている。出土遺物は、土器片だけでも 2,000 点を超え、坏の口唇部が高いもの (第 158 図 14・15) や球体型の甕 (第



第 469 図 古墳時代（第Ⅱ期）の主な遺構配置図

159・160 図 22～28) と長胴型の甕 (第 160 図 29～31) が共出する特徴から、6 世紀中葉か、下っても 6 世紀後葉早い段階と考えられる。また、外面に赤彩を施した大型の器台 (第 158 図 17) は房総地域にみられる土器であり、こうした地域との交流が想定できる。

第 93 号竪穴建物跡と共通した遺物がみられる遺構は、第 1 号墳の周溝で、出土土器には口唇部が高い坏 (第 224 図 6・7)、球体型の甕 (第 225～227 図 24～26・29)、長胴型の甕 (第 226・227 図 27・28・30)、外面に赤彩を施した大型の器台 (第 224 図 15) が周溝から出土している。このことから、第 93 号竪穴建物と第 1 号墳とは、第 1 号墳の造築や古墳祭祀の後の投棄など、何らかの関連性があるものと考えられる。また第 93 号竪穴建物から出土した鉄斧 (第 161 図 M 1) は刃部の欠損がなく、遺存状態も良好であることから、実用品というよりは祭祀の用具として用いられた可能性がある。

第 1 号墳の南方には白鷺古墳群が位置しており、本跡が古墳群の北辺部に位置する可能性がある。B 群の当期の竪穴建物は第 93 号竪穴建物のみで、第 1 号墳と近接していることから、白鷺古墳群の周辺に集落が展開していた可能性がある。

第 II b 期

当期の竪穴建物跡は、第 15・76・85・100・102・105・108・110・111・116・117・135・147・149 号竪穴建物跡の 14 棟である。第 15・76・85 号竪穴建物跡の 3 棟は調査区東部の A 群に位置し、これらを除いた 11 棟の建物跡は調査区西部の B 群に位置している。主軸方向は、A 群には統一性が認められないのに対し、B 群の 14 棟は N-5°～36°-W で、主軸が北西方向に偏る比較的統一性がとれた竪穴建物群である。このことは、B 群内には集団内を統治・統制した家父長が存在していたと考えられる一方で、A 群内には統制する者が存在しない状況であったと推察できる。

A 群と B 群との間には第 6 号溝が存在し、両群を区切っている。本跡の性格は区画であるが、地山を掘り残して構築された土橋状の施設があることから、両群は往来が可能な状況であったと考えられる。

竪穴建物跡から出土した須恵器片の平均値は、両群ともに 1 棟当たり 1.5 点ほどと少なく、須恵器の流通はあったにせよ、入手が困難な製品であったことが伺われる。またこのことは、須恵器が家父長の所在する地点から同心円状に拡散していると考えられ、前代に推定できた白鷺古墳群周辺の集落に家父長の存在が推測でき、A 群・B 群ともにその影響下にあった集団と考えられる。それでも竪穴建物の主軸方向から、B 群は家父長の影響力が強く、直接的な統制が及んだ集団、A 群は従属しながらも、家父長の影響力が弱い集団であったと考えられる。

6 世紀後葉から 7 世紀にかけての東国は、中央や東海地方から先進的な技術が伝播し、土木技術や手工業、生業などが向上することで経済的発展がもたらされた時期である。こうした背景のもと、伝統的な在地首長の経済基盤であった家父長を中心とした世帯共同体は、自立性をもつ世帯共同体へ変貌を遂げ、やがては群集墳を築造する階層へと成長していった⁹⁾。こうした社会背景から、家父長に求心性を求められる B 群とその経済基盤を支えた生業を司る専門集団である A 群と考えることもできるが、A 群からは第 76 号竪穴建物跡から砥石と紡錘車が出土したのみで、明確な根拠を示すことはできない。しかし遺構の配置からは、家父長を中心とした世帯共同体と家父長と個々に何らかの関係性をもつ人々で構成された重層的な秩序をもつ集落であることが考えられ、東国にもたらされた技術の導入や経済的成長を基に自立していく新興的な地域集落であったと考えられる。

第Ⅲ期（第470図）

6世紀後葉から7世紀後葉の主な遺構は、竪穴建物跡33棟、井戸跡1基などである。第Ⅱ期に構築された第1号墳の周溝や第6号溝跡からは、7世紀前葉の遺物も出土していることから、6世紀後葉以降の埋没や埋め戻しと考えられ、7世紀前葉までは存続していたと思われる。これらは遺構の分布状況や出土遺物から、第Ⅲa期が6世紀後葉から7世紀前葉、第Ⅲb期が7世紀中葉から7世紀後葉に時期を細分することができる。

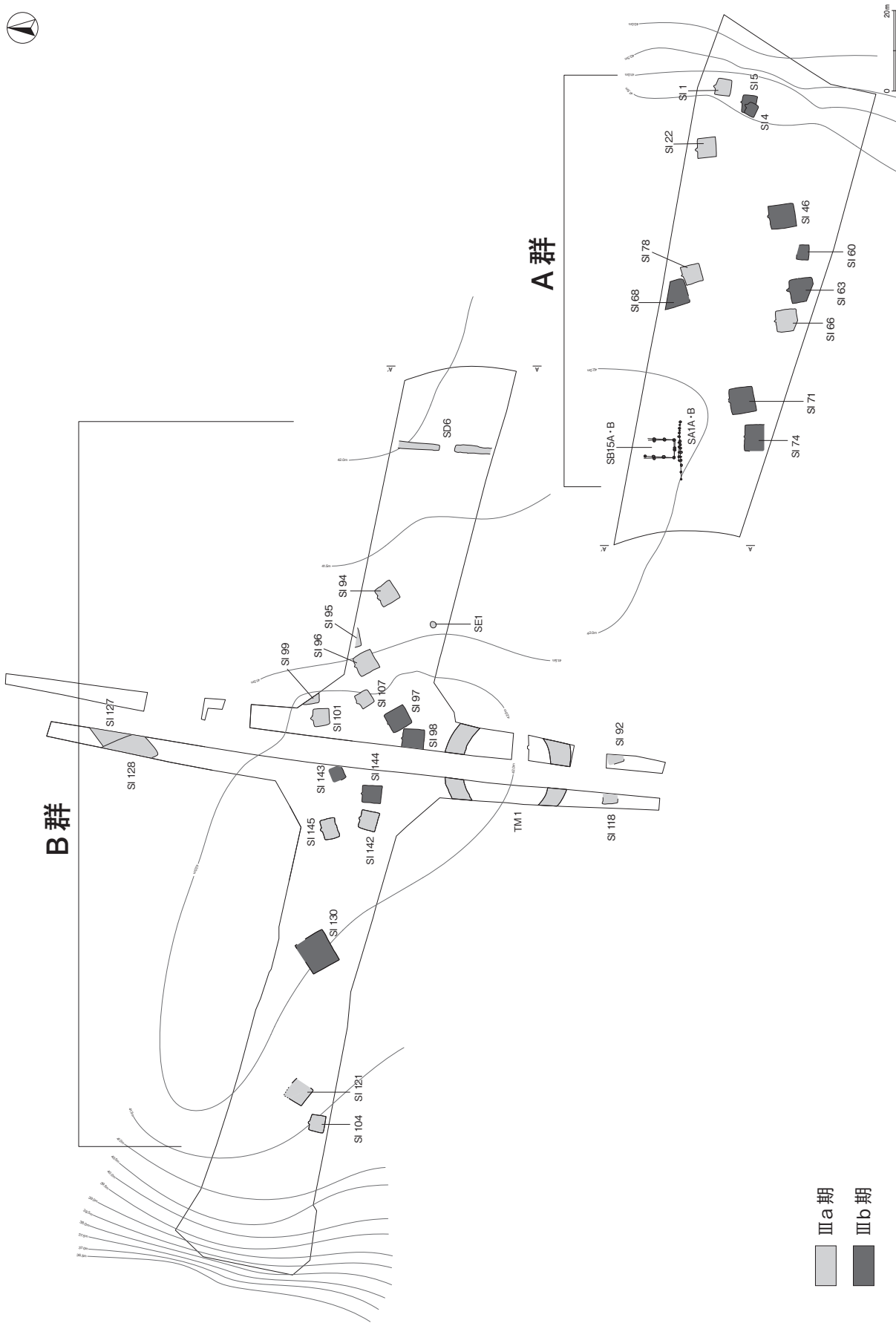
第Ⅲa期

当期の主な遺構は、第1・22・66・78・92・94～96・99・101・104・107・118・121・127・128・142・145号竪穴建物跡の18棟と第1号井戸跡である。竪穴建物跡は、第1・22・66・78号竪穴建物跡の4棟は調査区東部のA群に位置し、これらを除いた14棟の建物跡と第1号井戸跡は調査区西部のB群に位置している。主軸方向は第1・121・142号竪穴建物跡を除けば、N-6°～37°-Wで、前代と同様に主軸が北西方向に偏る比較的統一的な竪穴建物群である。

A群の竪穴建物は4棟と少なく、大多数の竪穴建物がB群に位置していることから、集落の中心は当台地の西側に存在していたものと考えられる。竪穴建物跡の分布状況は6世紀後葉と同様であり、集落は前代から継承されていると考えられる。しかし6世紀後葉との相違は、竪穴建物の主軸方向がほぼ同軸であり、統制された軸線で建物が建てられていることである。前代にA・Bを区画していた第6号溝跡からは、7世紀前葉の遺物も出土しており、7世紀前葉のある時期まで存続していたものと考えられる。このことから、第6号溝が廃絶された以降、B群が東へと拡張した可能性があり、家父長を中心とした世帯共同体が拡大したと考えられる。6世紀後葉にA群に所属していた居住者が、世帯共同体の拡大に伴い別の場所に移住したのか、吸収されたのかは不明であるが、第6号溝が廃絶された後も、A・B群の間には、竪穴建物が存在しない空白地帯があり、身分や階層的な秩序が保たれていたと考えられる。これをB群の拡大と解釈すれば、B群内の身分や階層の細分化と捉えられるし、A群の吸収と解釈すれば、世帯共同体にB群が取り込まれたこととなり、B群の居住者の地位が向上したことも指摘できるが、出土遺物からは判断できない。

一方B群には、当期の大型の建物と想定できる第127・128号竪穴建物跡が位置している。両者は接近していることから、若干の時間差を持って建て替えられている可能性がある。またこれらの周辺には、建物が存在しない空白地帯が存在し、その外側に第94号竪穴建物などの一回り小型の建物群が分布している。このことは、6世紀後葉の家父長を中心とした世帯共同体を象徴した配置と考えられ、第127・128号竪穴建物跡が家父長に関わる建物であった可能性がある。調査区域外に延びていることや上面が削平されていることから、集落の中心者に関わる威信財などの遺物を確認することはできなかったが、その周辺の竪穴建物群からは、第142号竪穴建物跡で湖西・東海産と思われる坏や蓋（第214図3・6）、第101号竪穴建物跡で東海産の横瓶（第175図8）などの搬入された須恵器が出土している。またA・B群の竪穴建物跡から出土した須恵器片の平均値は1棟当たり4点ほどと、前代に比べて増加している。このことは、当遺跡から南東方向約2kmの里川を挟んだ台地斜面部に幡山窯が開設され、当遺跡にも製品が搬入されたためと考えられる。

第1号墳の周溝からは、第6号溝跡と同様に7世紀前葉の遺物が出土している。中層から出土した甕（第225図23）は底部が穿孔されており、祭祀に用いられた可能性がある。この甕は体部の下端部が急激に窄まる形状で、栃木県東部の那珂川流域にみられる7世紀前葉の甕に酷似している¹⁰⁾。周溝の上層は、6



第 470 図 古墳時代（第Ⅲ期）の主な遺構配置図

世紀後葉から7世紀前葉の土師器や須恵器の破片が多く出土し、集落で使用され破損した土器が投棄されたと考えられる。このことから、第1号墳は遅くとも7世紀前葉には古墳の埋葬や追葬を停止し、異なった墓制に変化したものと考えられる。

横穴墓は、中央政権が各地の有力家族や新興層を取り込み、吸収を図った墓制であり、多くの横穴墓群は6世紀末葉以降の須恵器窯や後の官衙などの遺跡の近辺に展開する特徴がみられる¹¹⁾。先述の幡山窯をはじめに、当台地から南西方向約500m地点の断崖には白鷺横穴墓群、北東約500m地点には瑞龍A・B横穴墓群が所在しており注視できる。これらのことから、6世紀後葉以降、経済的成長を背景に自立性を有した家父長を中心とした世帯共同体は、地域の新興勢力として中央政権と結びつき、集落を拡大させていったと考えられ、横穴墓への墓制の転換がなされたと考えられる。

第Ⅲb期

当期の主な遺構は、第4・5・46・60・63・68・71・74・97・98・130・143・144号竪穴建物跡の13棟と第15A・B掘立柱建物跡、第1A・B号柱穴列である。第97・98・130・143・144号竪穴建物跡の5棟は調査区西部のB群に位置し、これらを除いた9棟の竪穴建物跡と2棟の掘立柱建物跡、2条の柱穴列は調査区東部のA群に位置している。

主な遺構の主軸方向は、第5・74・144号竪穴建物跡がN-1°~14°-Eで、北東に偏る主軸であるが、それ以外の建物は、N-0°~30°-Eで、北西に偏る主軸である。第130号竪穴建物跡は長軸方向がN-60°-Eであるが、当初の竪穴建物に付帯する竈は北壁に構築されていることから、N-30°-Wが主軸方向と推定できる。また第1A・B号柱穴列は、N-86°-WやN-88°-Wに偏る配列方向で、第15A・B号掘立柱建物跡の梁行にはほぼ並行であることから、第15A・B号掘立柱建物跡に伴う堀跡と考えられる。

調査区東部に位置するA群は、第4・5・46・60・63・68・71・74号竪穴建物跡の8棟と第15A・B掘立柱建物跡、第1A・B号柱穴列で構成されている。前代と比べて竪穴建物の棟数が増加し、竪穴建物群から堀で仕切った掘立柱建物が建てられている空間構造がみられる。これらの建物跡から出土した須恵器片は132点を数え、1棟当たりの平均値は約17点と前代を大きく上回っており、物流が集約される場に成長と考えられる。また、出土数は少ないながらも土製紡錘車、鉄鏃、砥石、鉄滓が出土しており、A群の周辺で製糸や金属製品の生産・加工がおこなわれていた可能性がある。これらのことから、第15A号掘立柱建物跡は、交易や生産で得られた物資を保管する機能、もしくは執務に関わる施設であったことが想定できる。

B群は第97・130・143・144号竪穴建物跡で構成されている。これらの中で規模の大きい第130号竪穴建物を中心として空白地帯が存在し、その周辺に第97号竪穴建物などが位置する構造は、前代と変わらないことから、家父長を中心とした世帯共同体の領域であったと考えられる。これらの建物跡から出土した須恵器片は54点を数え、1棟当たり平均値は約14点であり、B群と大きな差はみられない。しかしB群からは紡錘車や鉄滓などの生産に関わる遺物は出土しておらず、砥石のみが出土している。砥石は金属製品の加工にも使用されるが、生業や生産に関わる遺物が出土していないことから、所有していた製品の維持や整備に用いられたと考えられる。こうしたA・B群の特徴は、前代以前から世帯共同体が家父長を中心とした統治下にあったことから、B群は私的に管轄する領域、A群は家父長の地域統治機関として変貌を遂げたと考えられる。

6世紀後半以降、東国には多くの部民が編成され、中央王権に服属した地方豪族が地方の伴造として部

民を掌握し、こうした伴造の中から国造が任命された¹²⁾。当遺跡の眼下に広がる里川流域の中井川遺跡は、条里制に関わる遺跡として知られ、太田部によって開発・耕作された屯倉との関係が深い遺跡と考えられている¹³⁾。屯倉の管理は国造の重要な役割の一つで、7世紀後半以降、評が設置されると実質的に在地を管理した国造は評司や後の郡司に任命され、国家の統治機構に取り込まれていった¹⁴⁾。また屯倉は単に農業拠点だけではなく、交通の要衝や鉱山、塩の生産など、中央王権が要求した機能を有している指摘もなされている¹⁵⁾。

しかし、当代における当遺跡からは文字資料や識字者の存在を想定させられる出土品はなく、また郡家やその出先機関にみられるコの字形の建物跡の配列を確認することはできなかった。このことから家父長を中心とした世帯共同体は、当該地域を統治した地方の伴造に比定できる地方豪族の集落と推察され、後の郡家に比定されている長者屋敷遺跡周辺に拠点を有した地方豪族の統治下に組み込まれたことが、推定できる。

5 奈良時代の様相（第471図）

当時代の遺構は、堅穴建物跡27棟を確認した。これらは遺構の分布状況や重複関係、出土遺物から、第IV a期が7世紀末葉から8世紀前葉、第IV b期が8世紀前葉から中葉、第IV c期が8世紀後葉に時期を細分することができる。

第IV a期

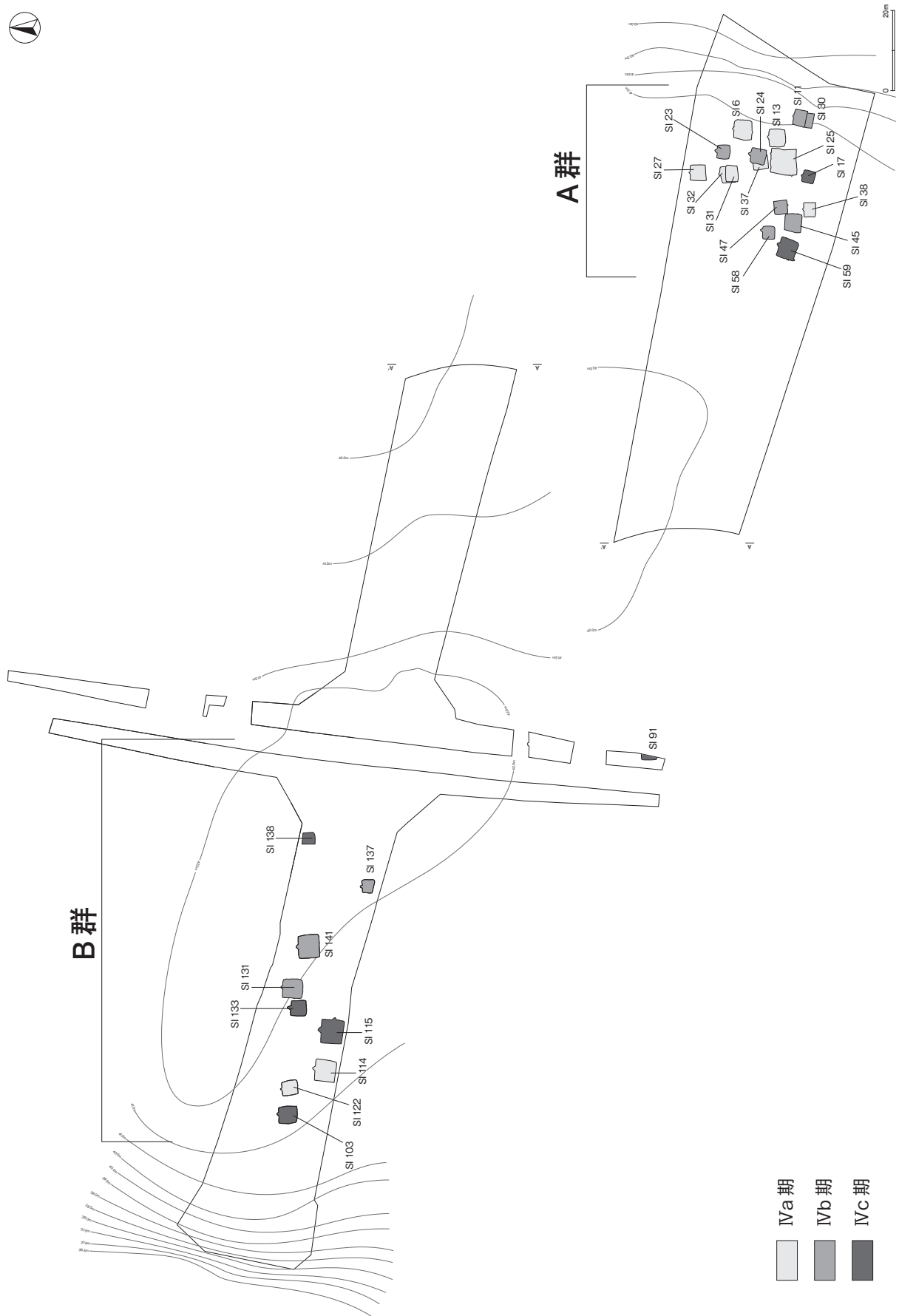
当期の堅穴建物跡は、第6・13・25・27・31・32・37・38・114・122号堅穴建物跡の10棟である。第114・122号堅穴建物跡の2棟は調査区西区のB群に位置し、これらを除いた8棟の堅穴建物跡は調査区東部のA群に位置している。主軸方向はN-6°~9°-Wで、ほぼ一定である。

A群の堅穴建物群は、台地の東側縁辺部に密集している。これらのうち、第31・32号堅穴建物跡は重複しており、第32号堅穴建物跡は7世紀末葉から8世紀初頭、32号堅穴建物跡は8世紀前葉で、若干の時期差がある。また重複がなくても、第13・25・38号堅穴建物跡からは7世紀後葉から8世紀初頭の遺物が出土していることから、A群は前時期から継続して営まれていたものと考えられる。特に、第25号堅穴建物は一辺が6.00mで、A群の中では壁柱穴を有した一際大きな建物である。出土した遺物には、威信財としての東海産の須恵器長頸瓶（第258図5）が含まれており、A群の中心的な建物であった可能性がある。また第27号堅穴建物跡からは刀子と思われる製品や、第31号堅穴建物跡からは円面硯（第264図3）が出土していることから、識字者の存在が伺われる。このほかにも砥石7点、鏝2点が、A群に属する堅穴建物跡から出土している。

B群の堅穴建物群は、台地の西側縁辺部から台地の内側に入った部分に位置している。出土遺物は土師器と須恵器のみで、金属製品などは確認できなかったことから、A群との優劣は明確である。

7世紀中葉までの当集落は拡大を続けていたにも関わらず、7世紀後葉の建物跡は、第4・63・98号堅穴建物跡及び第15B号掘立柱建物跡とそれに付随する第1B号柱穴列で、激減している状況がみられる。また当代のA・B群の間には、広い空白地帯が存在しており、着目できる。

白村江の戦い以降、中央政権は、滅亡した百済の人々を受け入れ、統一新羅との国交が改善した後は新羅系の渡来人を積極的に東国へ移住させている¹⁷⁾。また『常陸国風土記』には、白雉4（653）年に茨城国造小乙下壬生連麿と那珂国造大建壬生直夫子らが惣領高向大夫の中臣幡織田大夫らに請いて、茨城の地の八里と那珂の地の七里を割き行方郡家を新設したことが記されている。上野国の「多胡碑」文には弁官局の命で、



第471図 奈良時代（第IV期）の主な遺構配置図

片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡の中から三百戸を分けて和銅4（711）年に多胡郡を創設したことが記されている。これは、7世紀後葉から8世紀前葉にかけて国家が東国への開発に積極的に着手するとともに、国家や国府・郡家の地方機関が主導して、人々の移住や里を割り、土地の開発に従事した一面がみられる。こうした時勢から、あるいは当集落においても新天地の開発のために、7世紀中葉以降に拡大した集落を分割・割譲した可能性がある。

7世紀代の久慈評は、強大な伝統首長が存在したわけではなく、中小の首長が連立した地域であった。中央集権化が進むと、地方豪族は地方権力を掌握するため、一族の子弟や子女を舍人や采女として天皇や中央豪族に奉仕させ、結びつきの強化を図った¹⁸⁾。その結果、中小の首長間の主導権の争いが起き¹⁹⁾、国家の地方官である郡家に組み込まれる一族とその基に編成される一族が存在したと考えられている。こうしたことから、7世紀後半から8世紀前葉の里や集落の分割・割譲については、評司や郡司層の政治的な地域統治の意向が強く、かつての並立的関係から統治者と統治される者間に明確な区別をするための政策の一面も考えられる。しかしこうした地域権力の構造については、同様の状況にある評や郡の資料の再検討や今後の発掘調査から得られる資料との比較をおこなわなければならない、課題と言えよう。

第Ⅳb期

当期の竪穴建物跡は、第11・23・24・30・45・47・58・131・137・141号竪穴建物跡の10棟である。第131・137・141号竪穴建物跡の3棟は調査区西部のB群に、残る8棟の竪穴建物跡は、調査区東部のA群に位置している。主軸方向は、不明な竪穴建物跡や第24号竪穴建物跡のN-16°-Eを除くと、N-8°~7°-Wで、ほぼ一定である。また、主軸方向は第Ⅳa期とほぼ変わらないことから、集落は前代を継承していると考えられる。

土師器・須恵器以外の製品は、A群が第11号竪穴建物跡の砥石片、第24号竪穴建物跡の砥石・鎌（第256図Q1・M1）、第58号竪穴建物跡の砥石片で、B群は第131号竪穴建物跡の砥石片、第141号竪穴建物跡の砥石や鎌・鎌であり、A・B群の所有した製品には大差がない。また、A群には前代のような壁柱穴を有する竪穴建物は存在せず、両群の大きな格差がなくなったことを示している。出土した須恵器の産地は、前代までは第31・37・114号竪穴建物跡で新治産や堀ノ内産が若干みられるものの、木葉下窯の製品が優勢であったが、当代では第11・137号竪穴建物跡を除く竪穴建物跡で新治産や堀ノ内産、酸化炎焼成の特徴をもつ産地不明の須恵器などが出土し、多くの地域から供給がされている。このことは、生産地と当集落とを結ぶ道路や海上・河川を利用した交通網が整備され、物流が活性化したためと考えられる。

7世紀後葉以降、国家が東国に政治機関を設置し、生産技術などを向上させたことが結実し、当該地域が中央政権の下に編成された地方機構や流通圏に取り込まれたことを意味している。そして、中央政権は東国経営を足がかりに、さらに東北経営に触手を延ばし、7世紀後半以降は太平洋側の東北経営を重視している。わずかながら出土した鉄鎌は、いずれも鎌身部に欠損していることから、転用や再製などを目的として持ち込まれた可能性があるが、一方で当集落が鉄鎌を入手できる環境下にあったことが考えられ、当代の世情を知る上で重要な遺物である可能性がある。

第Ⅳc期

当期の竪穴建物跡は、第17・59・91・103・115・133・138号竪穴建物跡の7棟である。調査区東部のA群に位置する第17・59号竪穴建物跡を除く5棟の竪穴建物跡は、調査区西部のB群に位置している。主軸方向はA群がN-18°~21°-E、B群がN-5°-EからN-4°-Wで、ほぼ一定である。第115号竪穴建物跡は、竈が北壁から東壁に造り替えられており、竈が造り替えられた段階の主軸方向はN-94°-Eで

あることから、当初はN-4°-W前後であったと推定できる。

A群に位置する竪穴建物跡は2棟で、前代からは竪穴建物が減少している。竪穴建物の規模も一辺3m未満で、当代の竪穴建物と比較しても小型であり、出土遺物は土師器・須恵器のほかは出土していない。

B群に位置する竪穴建物跡は5棟で、前代とほぼ同数である。第115・133号竪穴建物跡からは須恵器片がそれぞれ46点・48点が出土したほか、砥石や土製紡錘車が出土している。一方、第115・133号竪穴建物跡の周辺に位置する第91・103・138号竪穴建物跡は、須恵器片がそれぞれ10点未満の出土であることから、第115・133号竪穴建物を中心とした重層的な構造がみられる。また第115号竪穴建物は、北壁から東壁に竈が造り替えられており、B群の中でも特異性があり、第115号竪穴建物もしくは調査区域外を含んだ第115・133号竪穴建物周辺にB群の中心部が想定できる。

東北地方では6世紀後半から大溝で囲まれた区画集落や7世紀後半から8世紀初頭にかけて大溝と柵で囲まれた囲郭集落が出現し、集落跡からは関東系の土器が出土していることから、坂東地域からの移住政策がその背景にあると考えられている²⁰⁾。また囲郭集落は、多賀城の前身の陸奥国府に推定されている宮城県仙台市の郡山遺跡の周辺にみられることや、その後の官衙や城柵に重複もしくは隣接する場所に位置していることから、坂東の移民を介して中央政権が東北地方に拠点を築いたことが考えられている²¹⁾。一方で、東北地方の栗田式土器などに影響を受けた土器が坂東にもたらされ、東北地方と坂東地域との交易や交流などの密接な関係がみられる。当遺跡においても7世紀代の第60号竪穴建物跡出土の坏(第104図1)や第97号竪穴建物跡出土の坏(第169図1・2)などが定量確認できるほか、9世紀中葉頃までみられる体部上位にロクロナデを残し、下位に縦位の削りを施した土師器の甕は、東北地方の影響を部分的に受けた土器と考えられる。

宝亀2(771)年に武蔵国が東山道から東海道に編入され、東北への主要路が東海道に変更された直後には、宝亀5(774)年から弘仁2(811)年までの三十八年戦争とも呼ばれる蝦夷との戦闘が開始され、坂東諸国が甚だしく疲弊した時期であった。県下においても石岡市の鹿の子C遺跡にみられる武器や武具類などを製作した国衙に関わる工房群が創設され²²⁾、東北への鎮兵の動員や兵糧の供出が増加するなどし、各郡下の集落で負担が増大した時期と考えられる。

当遺跡の調査区域におけるA群の減少化は、均一的に広がる疫病などの自然事象とは考えにくく、当代の東北政策を背景とした政治的要素を介して起きた現象の可能性もある。A・B群がそれぞれ、台地の東部と西部に分かれ、調査区域外にも延びている可能性があることからすれば、実際にはA群でのみ減少しているのかどうかは不明である。B群については集落の中心部付近に想定でき、集落の中心からの鎮兵や移住者の動員は、その集落の解体に直結する問題と考えられることから、調査区においては減少の傾向が認められなかった可能性がある。

6 平安時代の様相(第472・473図)

当時代の遺構は、竪穴建物跡40棟、掘立柱建物跡14棟、井戸跡1基、柱穴列1条、土坑28基を確認した。これらは遺構の配置や重複関係、出土遺物から第V期が9世紀、第VI期が10世紀、第VII期が11世紀に時期を大分することができる。詳細な年代が判断できなかった第69・132・134号については、割愛する。

第V期(第742図)

9世紀の主な遺構は、第2・7～10・12A・12B・16・18～21・29・44・51・62・70・73・112・123・126・129・136・139・140・146・148号竪穴建物跡の27棟と第4～14・16・18号掘立柱建物跡の13棟で、

第112・123・126・136・140号竪穴建物跡を除いたすべての建物跡は、調査区東部に位置している。これらは、遺構の分布状況や重複関係、出土遺物から、第V a期が9世紀前葉、第V b期が9世紀前葉から中葉、第IV c期が9世紀後葉に細分することができる。

第V a期

当期の主な遺構は、第7・9・16・18～21・70・112・123・126・140号竪穴建物跡の12棟と第14・16・18号掘立柱建物跡の3棟である。竪穴建物跡は第112・123・126・140号竪穴建物跡の4棟は調査区域西側のB群に位置し、これらを除いた竪穴建物跡8棟と掘立柱建物跡3棟は、調査区域東部のA群に位置している。主軸方向は、第16号竪穴建物跡がN-10°-Eと若干東に偏っているものの、ほかはN-8°-EからN-3°-Wで、概ね一定である。

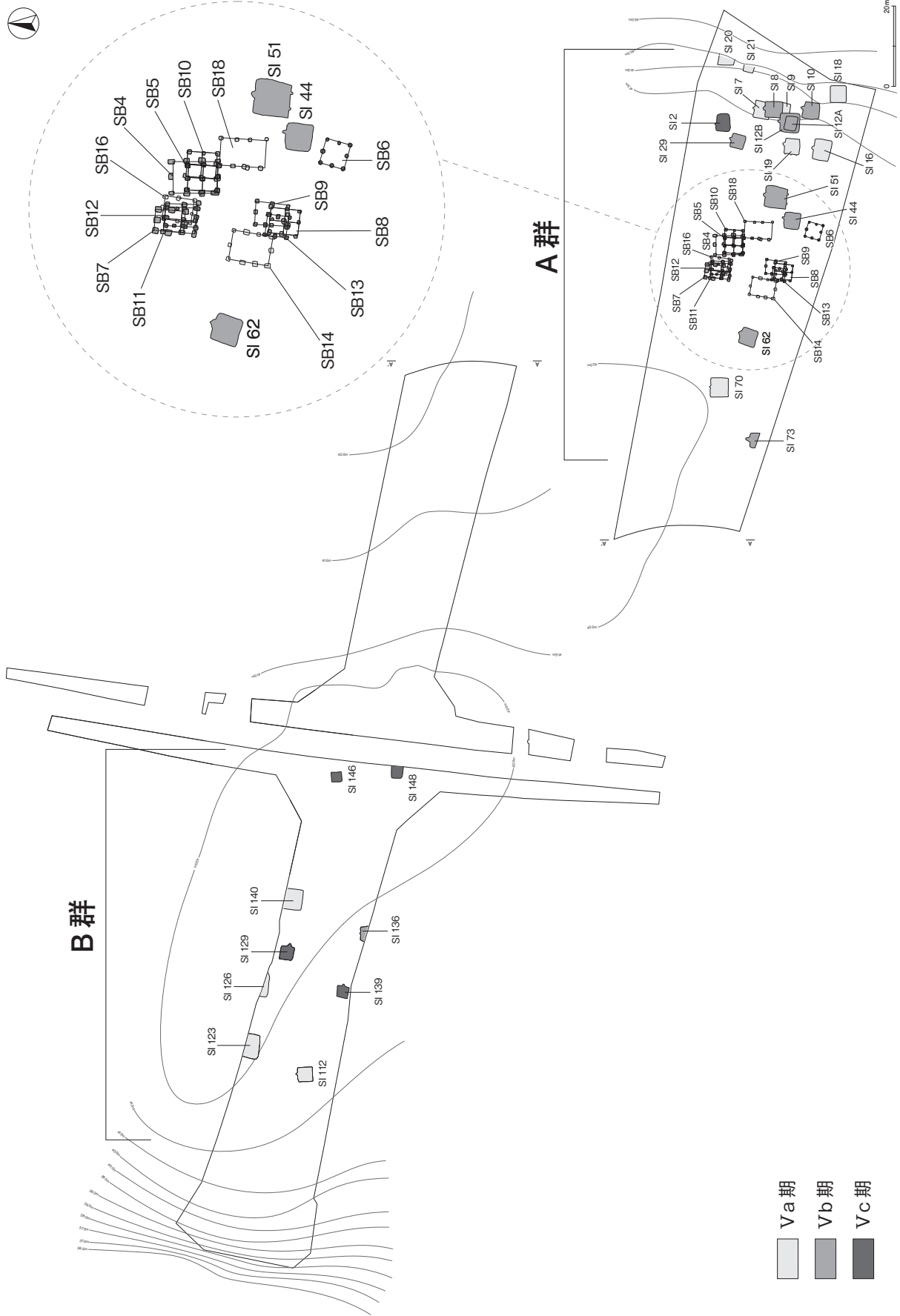
A群の竪穴建物跡で特徴的なものに、第19号竪穴建物跡がある。本跡の規模は、周辺の竪穴建物と比較しても大差はないが、壁際に10か所のピットが確認でき、壁立ちの建物であった可能性がある。出土遺物には「河内」の墨書が記された須恵器の坏(第320図1)があり、里川上流域に河内の地名がみられることから、里川上流域との関係が考えられる。また小片ではあるが、計量に使用されると考えられている須恵器のコップ形土器(第320図6)が出土しており、本跡の西側で確認できた3棟の掘立柱建物跡との関係性が考えられる。特に桁行2間、梁行2間の第16号掘立柱建物跡は、他の遺構との重複が激しく、柱穴は側柱建物の配列でしか確認できなかったものの、次代以降の桁行2間、梁行2間の掘立柱建物のなかには、第8・10・11号掘立柱建物のように総柱建物が認められることから、あるいは総柱建物であった可能性がある。この他にも、第9号竪穴建物跡からは鋤先(第307図M1)、第70号竪穴建物跡からは鋌や鑿子(第345図M1・M2)が出土するなど、多様な製品が認められる。こうしたことからA群は、周辺から物資が集約する地域の拠点であり、品々を倉庫に収め管理した集落であったと考えられる。

一方B群の出土遺物は、土師器・須恵器の供膳具や煮沸具がほとんどで、わずかに第112号竪穴建物跡から鉄滓(19.28g)が出土したのみである。これらの出土遺物は、人々の生活に密接に関わっていたことを物語っており、B群が居住区域であったことが考えられ、あるいはA群に出仕する人々の生活の場であった可能性がある。さらに、鉄滓の出土から周辺に工房が存在した可能性もある。

第V b期

当期の主な遺構は、第8・10・12A・12B・29・44・51・62・73・136号竪穴建物跡の10棟と第4・7～11号掘立柱建物跡の6棟である。このうち第4・9・11号掘立柱建物跡の3棟は重複関係から、明確には第V a期と第V b期の間に位置づけられるが、便宜上、当代に含めた。竪穴建物跡及び掘立柱建物跡のほとんどが、調査区東部のA群に位置している。主軸方向は、第62号竪穴建物跡がN-25°-Eと東へ偏っているが、ほかはN-2°～18°-Eと概ね一定である。B群の第136号竪穴建物跡の主軸方向は不明である。

A群は前代と共通する遺構群で構成されていることから、継続している。壁柱穴が確認できたことから、壁立ちの可能性のある竪穴建物跡は、第12B・51号竪穴建物跡である。この2棟の竪穴建物と前代の第19号竪穴建物跡の配置は、東西方向にほぼ一列に並び、一定の場所に位置していることから、集落内で他に移すことができない機能を有していたものと考えられる。同じように掘立柱建物群についても、第14号掘立柱建物跡の後身にあたる第8・9号掘立柱建物、第16号竪穴建物跡の後身にあたる第7・11号掘立柱建物、第18号掘立柱建物跡の後身にあたる第4・10号掘立柱建物は、ほぼ同じ場所に建て替えられている。これらの配置関係から、収蔵とその管理の中心施設であったことが考えられる。



第472図 平安時代（第V期）の主な遺構配置図

出土遺物には刀子や砥石をはじめ、石製・鉄製の紡錘車・鉄鎌・槍鉋など多様であり、墨書資料では第8号竪穴建物跡出土の「望万呂」(第304図3)、第10号竪穴建物跡の「牟都刀自」(第309図1)の人名に加え、第51号竪穴建物跡からは「中都幡」・「佐竹□」(第333図4・5)が出土している。中都幡は当遺跡の南方に所在する幡地区のいずれかに、佐竹は西方に位置する佐竹郷に関わる地名と考えられ、前代の「河内」の墨書資料と合わせ、郡内各所との関係性が認められる。また、第51号竪穴建物跡からは椀形滓が出土しており、周辺に工房の存在が考えられ、前代のB群付近に想定された機能が、A群付近に移動している可能性がある。このことから前代のB群に想定できた居住区も同様に、A群付近に移動している可能性がある。

蝦夷との抗争が終了した後、疲弊した東国では俘囚の反乱や盗賊の横行する混乱期に入る。官寺や正倉院などの官衙関連施設が「神火」によって焼失する事態を少なからずみることができ、神火は落雷による火災の可能性のほかに盗賊による放火との指摘もある²³⁾。こうした襲撃から治世の維持に携わったのが地域を直接的に統治する郡家であったと思われる。当遺跡で確認した掘立柱建物跡に伴う柱穴の掘方は、隅丸方形もしくは隅丸長方形の形状が多く、官衙関連の掘立柱の柱穴とは規模こそ違いますが、形状は酷似している。また、少ないながらも鉄鎌が出土していることや後世に小野崎城が築かれる要害の地形であること、里川などを利用した古来からの交通の要所であったことを踏まえれば、当代の世情下に各集落からの物資を一点に集約し、管理するための機関が郡家の統率のもと、設置された可能性は十分に考えられる。

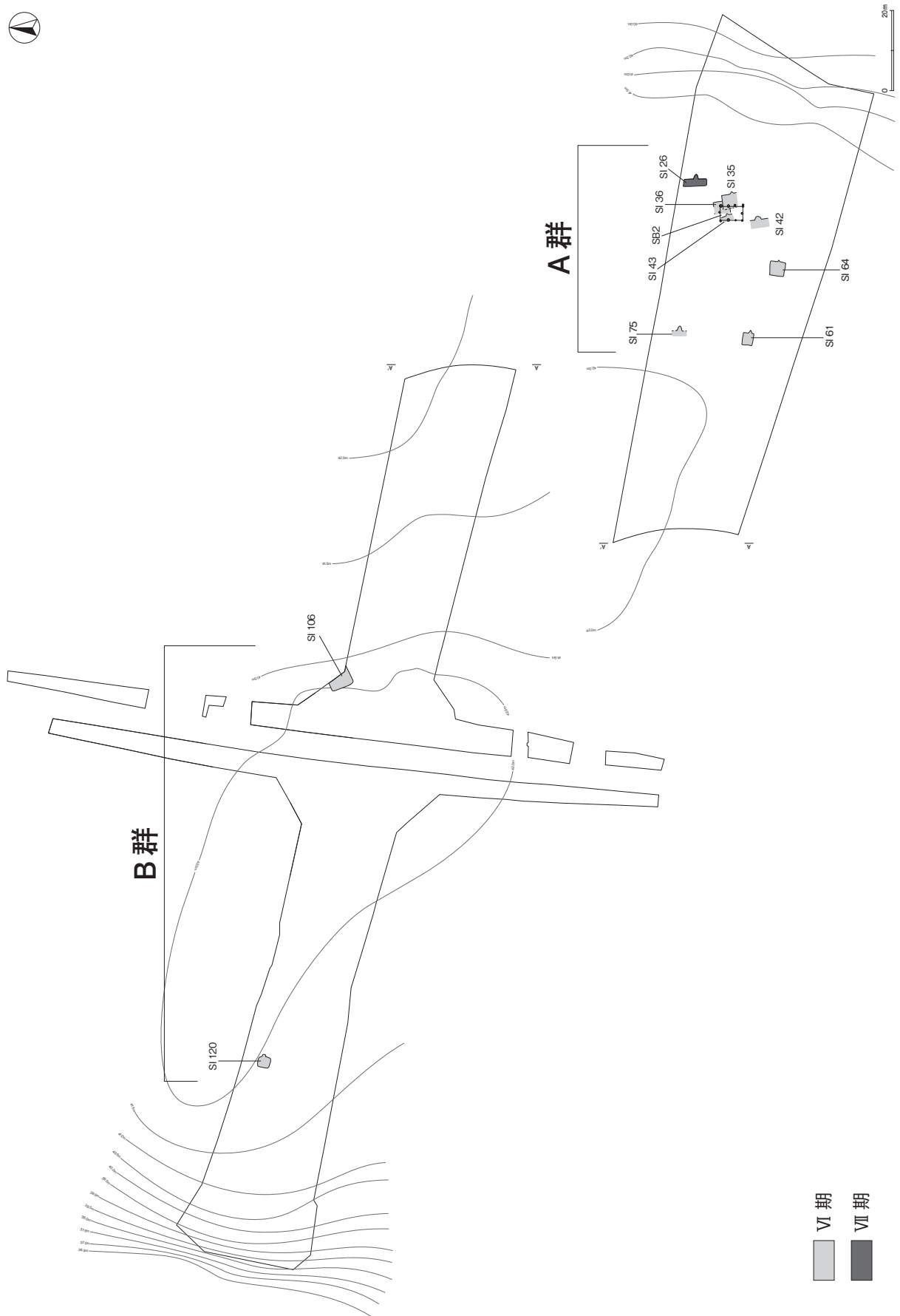
第Vc期

当期の竪穴建物跡は、第2・129・139・146・148竪穴建物跡の5棟と第5・6・12・13号掘立柱建物跡の4棟である。竪穴建物跡は、調査区東部のA群に位置する第2号竪穴建物跡の1棟を除いた4棟の竪穴建物跡が、調査区西部のB群に位置している。掘立柱建物跡は、3棟すべてが調査区東部のA群に位置している。主軸方向はA群がN-0°~8°-Eで、ほぼ一定である。B群は第146号竪穴建物跡がN-3°-Wと比較的A群に近い主軸方向であるのに対し、残る3棟は主軸方向はN-92°~102°-Eで、ほぼ一定である。第129・139・148竪穴建物跡は東壁に竈が構築されていることから、次代の第VI期以降の竪穴建物跡と類似しており、概ね北方向に主軸をもつ竪穴建物跡や掘立柱建物跡とは若干の時期差があるものと考えられ、第VIb期に近い時期の遺構である可能性がある。このことから、A群は前代のA群の最終形態と考えられ、B群は第VI期以降に続く新しい集落の形態が始まった段階と考えられる。

第VI期 (第473図)

10世紀代の竪穴建物跡は、第61・64・75・106・120号竪穴建物跡の5棟である。第61・64・75号竪穴建物跡の3棟は、調査区域東部のA群に、第106・120号竪穴建物跡の2棟は調査区域西部のB群に位置している。主軸方向は、不明である第106号竪穴建物跡を除くと、A群の3棟がN-85°~94°-Eでほぼ一定であるのに対し、B群の120号竪穴建物跡はN-112°-Eと若干南東に傾いている。当代の5棟の竪穴建物は、前葉から後葉の3区分に細分した場合、A・B群共に各時期に精々1棟程度しか存在していないこととなり、それまでの建物が密集した集落とは異なり、閑散化している特徴がみられ、集落の在り方が変化したと考えられる。

9世紀後葉から10世紀にかけては、三世一身法や墾田永年私財法の施行以降、崩れていく公地公民への税制を改善するため、中央権力は民へ附加する律令的な税制から中世的土地への税制に徐々に移行していく。特に、国司・郡司の形態をとる地方権力は、受領への権限が強められることで、受領が直接的に田堵や開発



第 473 図 平安時代（第VI・VII期）の主な遺構配置図

領主の所有する土地から徴税する権利が認められ、郡家が衰退していくことになった²⁴⁾。

9世紀中葉から後葉にかけて、壁柱穴を伴う竪穴建物と掘立柱建物群を中心とした集落が解体する背景には、郡家の地域権力の衰退が考えられ、代わって極少数単位の竪穴建物のみで構成されている集落の背景には、田堵などが管理する名を細分し、下人や所従などに耕作させることで、耕作地と耕作人の結びつきが強まったことが考えられる。集村から散村へ徐々に移行していく様子が伺われる。

第Ⅶ期（第473図）

11世紀代の主な遺構は、第26号竪穴建物跡と第2号掘立柱建物跡である。第35・36・42・43号竪穴建物跡については、時期を決定する遺物が出土しなかったものの、第26号竪穴建物跡の付近に位置することや掘方の深さが似ていることから、第26号竪穴建物跡に近い年代が推定できる。前代の竪穴建物跡と同様に東竈の痕跡をもつ竪穴建物跡が認められることから、10～11世紀と考えられる。主軸方向は、第26号竪穴建物跡がN-90°-E、第2号掘立柱建物跡がN-0°である。

10世紀から11世紀にかけては、中央の下向した貴族の土着や在庁官人、田堵が在地の開墾に着手し、中には立荘した開墾地を有力な中央貴族や寺社に寄進し、国衙の介入を阻止する者も現れた。当該地においても、藤原秀郷の末裔にあたる小野崎氏や清和源氏の流れをくむ佐竹氏が土着化し、在地領主として成長した。特に小野崎氏は里川流域に勢力を伸ばし、当該地にも小野崎城を築くなど、深く関わった一族である。11世紀前葉の第26号竪穴建物跡は、竈が東壁に構築された前代からの特徴を持つ建物である。こうした閑散化していた当該地に、11世紀中葉以降、突如として第2号掘立柱建物が出現したことに、在地領主の成長を伺わせ、当該地と深く関わる小野崎氏の存在が推測できる。

7 「𪛗女□」の文字について（第300図3 巻頭写真下段）

第2号竪穴建物跡から出土した坏の底部には、一風変わった文字「𪛗」が記されている。𪛗は国字で、ヘラ書きで記されたその文字は、墨書や刻書とは異なり、工人の基で焼成される以前に記されていることから、おそらくは発注者が記したものと考えられる。『法華三大部難字記²⁵⁾』には「ひるめまき」「ひるくながい」と読み、男女の交わりを意味する文字と記されている。12世紀に書かれた藤原忠実の日記『殿暦』の永久五年十一月十九日には「院姫君（藤原璋子）入内云々、件人備〔後脱_ろ〕季通𪛗」と記されているが、第2号竪穴建物跡は9世紀後葉の廃絶であることから、字体が約200年ほど遡ることになる。国字は奈良時代ごろから使用され、漢字に似せて旁や偏に意味をもった文字や音の響きを組み合わせて作られている。「峠」「榊」「働」「畑」「糸」「鯛」などは国字であり、一部は常用漢字として現在でも使用されている。

こうした文字を組み合わせる行為は、陰陽師や僧侶などの呪術者が「日」「月」「鬼」「口」などを組み合わせ、呪符に用いたり、天皇や貴族などの識字者においても漢字を組み合わせ、饗宴や祭文などに用いることが知られている。平城宮内裏の北西隅部の土坑からは、「我君念」と記されていた土師器の杯が出土している。「我君を念い、君我を念う」と解釈される一方で、この組み合わせ文字が反語の意義を有し、夫婦離別の呪符に使われていたことが、藤沢一夫氏によって明らかにされている²⁶⁾。文字を組み合わせる行為は、中国から受容されたものであり²⁷⁾、奥義で記された呪符などは解読できずとも、「我君念」のような漢字の組み合わせ文字であるならば、「念」「思」「想」「偲」を使用した場合で意味が異なり、ある程度の意味をみいだすことが可能ではないかと思われる。

『殿暦』では、院姫君（藤原璋子）を「奇恠不可思議女御」と記しており、作者の子息である忠通との婚

儀に難色を示す忠実の姿がある。「贖」は婚姻の意味も含まれ、「くなく」とも読むことができるが、日記には「婚ぐ」が用いられず、あえて「贖」を使用している点に忠実の院姫君に対する心境が現れていると思われる。このことから、当遺跡出土の「贖女□」は「婚ぐ」とは反語の意義で用いられたと考えられ、女性との婚姻や情の纏れに難色を示す発注者の意思が表現されているものと思われる。

8 鎌倉・室町時代の様相（第 474 図）

当時代の遺構は、掘立柱建物跡 1 棟、方形竪穴遺構 5 基、井戸跡 1 基、墓坑 7 基、柱穴列 1 条、道路跡 2 条、溝跡 6 条、段切状遺構 1 条、土坑 16 基、ピット群 8 か所を確認した。これらは遺構の分布状況や重複関係、出土遺物から、第Ⅷ a 期が 12 世紀後葉、第Ⅷ b 期が 15～16 世紀に細分することができる。

第Ⅷ a 期

当期の遺構は、第 370・371 号土坑で、調査区中央部に位置している。このほかの遺構は、確認できなかったが、第 370 号土坑からは鉄鏝が出土している。

現在の常陸太田市街が所在する鯨ヶ岡台地に拠点置いていた小野崎氏は、台頭してきた佐竹氏に 12 世紀ごろ、鯨ヶ岡の地を譲り、臣下として当台地に小野崎城を築いて拠点を移したとされている²⁸⁾。昭和 39 (1964) 年におこなわれた瑞龍中学校の校庭整備事業に伴う小野崎城の発掘調査では、大型の掘立柱建物跡や堀跡などが確認されており、12 世紀以降、小野崎城を拠点に台地上の開発や整備がおこなわれたものと推測できる。調査区域は小野崎城跡から北方約 200 m の地点であることから、第 370・371 号土坑は開発や整備などの土地利用に伴う何らかの痕跡であった可能性がある。

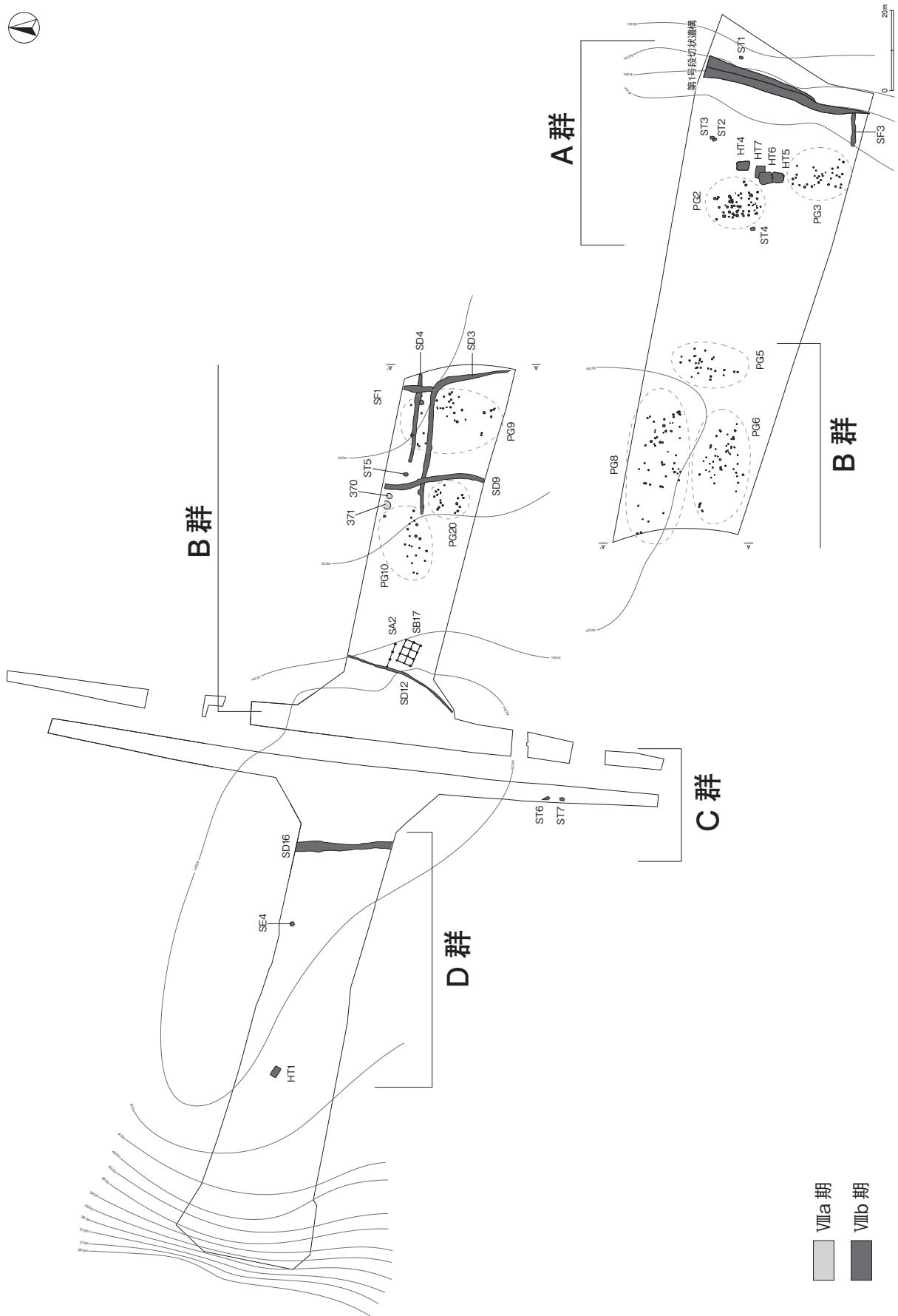
第Ⅷ b 期

当期の主な遺構は、第 17 号掘立柱建物跡、第 1・4～7 号方形竪穴遺構、第 4 号井戸跡、第 1～7 号墓坑、第 1・3 号道路跡、第 3・4・9・12・16 号溝跡、第 1 号段切状遺構、第 2・3・5・6・8～10・20 号ピット群である。これらの遺構は遺構の配置から A～D 群で構成されていたと考えられる。

A 群は調査区東部の東端域で、第 4～7 号方形竪穴遺構、第 1～4 号墓坑、第 3 号道路跡、第 1 号段切状遺構、第 2・3 号ピット群で構成されている。第 1 号段切状遺構は北端部で法が低くなり、第 3 号道路と近接している。南側は調査区域外に延び、部分的に鍵状に屈曲しながら台地の縁辺部に沿って北方向へと延びている。第 3 号道路は第 1 号段切状遺構の法下の平坦面に向かって下っているが、南側の調査区域外には段切状遺構の法下に沿って道路が認められ、やがては山肌を縫って麓へと続いていることから、この道路に接続しているものと考えられる。周辺には「北坂」の地名が残っている。

第 4～7 号方形竪穴遺構は、ほぼ一定の場所にまとまっており、その周辺には第 1～4 号墓坑や第 2・3 号ピット群がその周辺に配置されている。ピット群の性格は不明ながらも、方形竪穴遺構を中心とした墓域の一形態と考えられる。第 1～4 号墓坑の埋葬状況は、横臥屈葬もしくは仰顔屈葬である。

B 群は調査区域東部の西端域から西部の東域で、第 17 号掘立柱建物跡、第 5 号墓坑、第 2 号柱穴列、第 1 号道路跡、第 3・4・9・12 号溝跡、第 5・6・8～10・20 号ピット群で構成される。これらのうち、比較的年代が明確になる遺構は、第 1 号道路跡、第 3・4・9・12 号溝跡で、B 群の中では東半部の区域に位置する第 1 号道路跡、第 3・4 号溝跡は 15 世紀代、西半部に位置する第 9・12 号溝跡は 16～17 世紀初頭に廃絶された区画にわけることができ、南北方向の区画が新しく、16 世紀代に区画の再編がおこなわれたと考えられる。第 1 号道路跡は南北方向に走る道路であり、南側延長には小野崎城が位置している。第 3 号溝跡によって掘り込まれていることから、第 1 号道路跡とほぼ並行して小野崎城跡に続いている調査区



第 474 図 鎌倉・室町時代（第Ⅷ期）の主な遺構配置図

東部と中央部との間にある市道の位置に改編されたと考えられる。

第17号掘立柱建物跡は、第2号柱穴列で区画される建物跡で、家屋や小屋と考えられる。小野崎城跡から確認された掘立柱建物跡の柱穴の規模からすれば小型の建物で、身分的な差異があるものと考えられる。「宿畑東」の地名が残ることから、周辺に宿の形成が考えられる。

C群は調査区域中央部から西部にかけの区域で、第1号墳周辺に第6・7号墓坑が位置している。栃木県足利市の叶花古墳²⁹⁾や那珂川町の仲の内遺跡³⁰⁾などでは、塚や古墳の周辺に墓坑群が形成される事例があり、C群も同様の墓域と考えられる。「薬師東」の地名が残り、関係性が考えられる。

D群は第1号方形堅穴遺構、第4号井戸跡、第16号溝跡で構成される。第16号溝は、深さ65～80cm、断面形が葉研状の区画で、他の溝跡とは異なり、深く堅固である。A～C群では確認できなかった井戸跡を確認し、第1号方形堅穴遺構もA群の密集した状況とは異なり、単独で存在する。当台地の西側縁辺にはD群と近接して「南屋敷前」や「北屋敷前」の地名が残っていることから、屋敷群が想定でき、確認できた遺構が少ないことから、その縁辺部に位置しているものと推定できる。

14世紀以降、小野崎氏は山尾城へ配置がえとなり、代わって佐竹氏庶系の家臣や譜代などが入部している。当台地には小野崎城跡のほか、今宮館跡・小野館跡が所在し、加えて八百岐館跡の存在が一部で報じられている。これらの城館跡は当遺跡周辺を囲むように配されており、城館群の保護下に置かれた重要な地点であったと考えられる。こうした地点には地域で生活する多様な人々が集まる町場で、政治・経済の中心である「宿」が置かれた³¹⁾。当遺跡ではA・C群の墓域やB群の武士とは異なる身分の人々に関わる建物が存在する区域、D群の屋敷跡が想定でき、多様な性格を含んだ区域が、宿としてまとめられ、機能していたと考えられる。

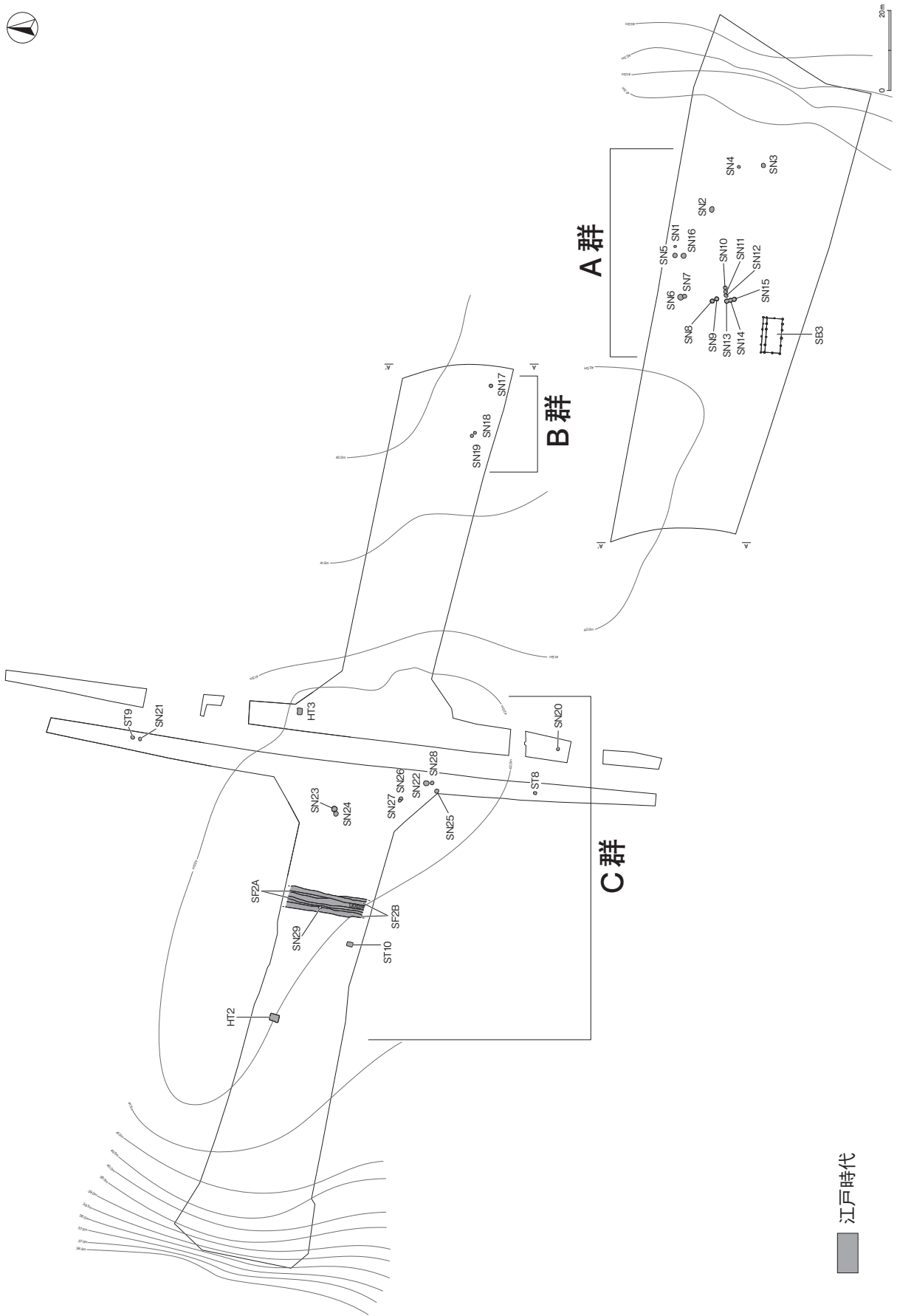
9 江戸時代の様相（第475図）

当時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟、方形堅穴遺構2基、粘土貼土坑29基、墓坑3基、道路跡2条、溝2条、土坑37基を確認した。第Ⅷ期に位置づけられるこれらの遺構は分布状況から、A群からC群に大別できる。

A群は調査区東部の東寄りの区域に、第3号掘立柱建物跡、第1～16号粘土貼土坑で構成される。第3号掘立柱建物跡は、家屋や小屋などが想定できる建物跡である。この建物跡より北域には、単体もしくは複数のまとめりで粘土貼土坑を確認している。表土除去以前の現況はほとんどが畑地であったものの、第3号掘立柱建物の存在から、居住地であった可能性がある。また粘土貼土坑群は、第2～4号粘土貼土坑と第1・5～16号粘土貼土坑の間には、同様の土坑が確認できていない。この粘土貼土坑を確認していない一帯は、表土除去以前には南北に延びる農道が存在しており、この道路を挟んで東西に粘土貼土坑が位置している状況がみられる。このことから、この道路は江戸時代から存在していた可能性があり、道路の近辺に粘土貼土坑が設置されている状況が伺われる。

B群は調査区中央部の東端部の区域に、第17～19号粘土貼土坑で構成されている。調査区中央部と東部の間には、現在の市道が延びており、室町時代以降、継続して使用されていたと推定できる。表土除去以前の現況や当代の遺構が少ないことから、農地であった可能性がある。

C群は調査区域中央部の西端部から西部の区域に、第2・3号方形堅穴遺構、第20～29号粘土貼土坑、第8～10号墓坑、第2号A・B道路跡などで構成されている。第2・3号方形堅穴遺構の長軸方向は、第2号方形堅穴遺構が南北軸、第3号方形堅穴遺構が東西軸と異なっているものの、壁柱穴の配置は共通している。壁柱穴を有する方形堅穴遺構は、東北地方の城館跡や屋敷跡などで顕著に確認されている。高橋與右



第 475 図 江戸時代の主な遺構配置図

衛門氏による分類では、I類に該当する17世紀代の建物跡に酷似している。方形竪穴遺構は、11世紀から17世紀ごろまで、多様な柱穴の配列が認められ、倉庫・工房・作業場など、遺跡の性格によって多種多様な機能が考えられている³²⁾。

墓坑は、点在する3基を確認した。第9号墓坑については不明であるが、第8号墓坑は第1号墳に近接していることから、前代からの墓域を継承していると考えられる。第10号墓の埋葬状況は木棺を使用した座葬であり、埋葬状況が不明な墓坑を除くと、前代からは変化している。

第23～29号粘土貼土坑は、第29号粘土貼土坑を除いて、第2A・B号道路の近辺に設置されている。第2A・B号道路跡は両側に側溝を有し、AからBへ拡張されていることから、当地上の主要路と考えられる。A・B群の粘土貼土坑は、江戸時代や室町時代から継承される推定道路の近辺に設置されており、C群についても同様の状況が伺われる。

室町時代後葉以降に、郷や村の拠点となった城館と結びついた宿の多くは、江戸時代以降、在郷町として継承される³³⁾。在郷町とは、農村域にありながら町としての活動が認められた農商混在の「在方の町」である。在郷町では米麦栽培のほか、養蚕・煙草などの商品作物の生産や農閑期の行商など、農商業の兼任による生業が多様化することで発達し、その商業的な一面性から街道沿いに発達する傾向がある。こうしたことから、C群は、倉庫・工房・作業場などが考えられる方形竪穴遺構や主要道が位置することから、在郷町の主要部、A・B群は耕作者の居住区や農地が広がる縁辺部と考えられる。

10 墓坑と粘土貼土坑について

当遺跡では、室町時代の墓坑7基、江戸時代の墓坑3基を確認した。埋葬状況が分かる墓坑は6基で、横臥屈葬もしくは想定できる墓坑は第1・3・4・6号墓坑で、仰顔屈葬のものは第2号墓坑である。いずれも15世紀代の墓坑で、屈葬で埋葬されている特徴がみられる。一方、座葬で埋葬されているものは第10号墓坑で、時期は17世紀後半以降である。座葬を用いた墓坑は、江戸市中で17世紀前葉³⁴⁾、隣県の栃木県では17世紀後半ごろから認められる³⁵⁾ことから、ほぼ同時期に座葬の風習が広まったと推定できる。

人骨の鑑定結果にみる被葬者の特徴は、どの個体も年齢の割に歯の咬耗が進行していることと骨体が細く華奢である二点が挙げられる。このことは繊維質が多く、固い食物を日常的に摂取していた一方で、過酷な労働とは無関係な人々であったことが指摘されている。

第Ⅷb期の墓域はA群とC群の2か所である。A群の墓域は、屋敷群が想定できるD群とは離れた地点に位置しており、方形竪穴遺構の性格から職人との関わりが指摘できる。室町時代後期の「茂木家臣給分注文」には、在地領主茂木氏の家臣に職人層が組み込まれ、給付がされている記述がみられる。これらのことから、A群は周辺の城館主と主従関係を結び、手工業を生業として宿に居住した職人層の墓域であることが考えられる。またC群はD群に近接しており、第7号墓坑からは廃棄された五輪塔が出土していることに着目できる。このことからA群同様、周辺の城館主と主従関係を結びつつも、A群の被葬者よりも上位者に位置づけられ、推定できる屋敷地に近接していることから、宿内を取りまとめた有力者の可能性がある。こうした宿内の構造は江戸時代の在郷町にも継承され、第Ⅷb期のD群部分に主要路が開設されることで、より中心的な区域へと成長したと考えられる。江戸時代のC群に位置する第10号墓坑の被葬者に、前代と同じような身体的特徴がみられることから、被葬者が在郷町の有力者であった可能性がある。

江戸時代の遺構群からは、29基の粘土貼土坑を確認した。これらの多くは樽を据え置いた痕跡がみられ、内容物の浸透防止のために粘土を貼り付け、樽を固定していたものと考えられる。また底面は、皿状のもの

が多く、中には中央部の粘土が磨滅するほど頻繁に使用していたことが伺われるものもみられる。こうしたことから、周辺が畑地であったことを踏まえ、肥溜めと考えたものの、自然化学分析の結果からは寄生虫卵が1個体も確認できず、肥溜めの可能性は考えにくいものとなった。

粘土貼土坑の配置は、道路やその推定される近辺に多くが位置しており、また掘立柱建物跡を確認したA群や在郷町の中心域が推定できるC群に多くが分布している。

調査区では、調査面積や遺構数の割りに井戸跡の確認数が4基と少なく、比較的高い台地上に位置する地理的条件から、井戸を掘削することが重労働であったことが伺われる。第1号井戸跡は7世紀前葉の家父長の権限が強く反映される領域に位置し、第4号井戸跡は15～16世紀代の屋敷地が推定できる位置に掘り込まれていることから、井戸の存在に一種の権威性をみることができる。

これらのことから、当代においても水が貴重な資源であったことが伺われ、主に居住区域に天水桶などの貯水施設として設置されたものと推察できる。こうした貯水施設は、遺構の底面の状況から、飲料水以外の生活用水や農業用水として頻繁に活用され、水漏れなどで使用できなくなった後は、自然化学分析の結果などから、ゴミ溜めなどの廃棄土坑として使用されたと考えられる。

11 おわりに

以上、縄文時代から江戸時代までの当遺跡の様相についてまとめた。縄文時代中期後葉から後期前葉には竪穴建物跡とそれを囲む土坑群からなる集落の形態が推定でき、4世紀中葉から5世紀前葉は台地上に多様な集落が共立する状況、15～16世紀にかけては城館との関係の基に多機能な区画がまとまって営まれていた宿が、江戸時代には在郷町として成長する姿を概観することができた。特に6世紀中葉から11世紀までの集落は、一地方豪族が律令国家成立の過程で国家に取り込まれていく姿やその後の政治や政策によって集落が衰勢し、さらには集落の形態の変化していく様子を見ることができ、貴重な成果になったと思われる。

今回の成果が、地域の歴史を解明する上で、一助となれば幸いである。

註

- 1) 稲田建一 『半分山遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財報告第30集 2004年3月
- 2) 飯島一生 『北関東自動車道(友部～水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 矢倉遺跡・後口原遺跡』茨城県教育財団埋蔵文化財報告第135集 1998年3月
- 3) 長谷川聡 『北関東自動車道(友部～水戸)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡 大畑遺跡』茨城県教育財団埋蔵文化財報告第136集 1998年3月
- 4) 塩谷修ほか 『八幡協遺跡』田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 土浦市教育委員会 2009年3月
- 5) 大鷹依子 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』千葉県文化財センター調査報告第245集 財団法人千葉県文化財センター 1994年3月
- 6) 穴澤義功 『我が国の製鉄遺跡の歴史 - 東日本を中心とした古代から中世まで -』新潟市古津八幡山弥生の丘展示館企画展2関連講演会資料 2017年8月
- 7) 奥沢哲也 『瑞龍古墳群 県立常陸太田特別支援学校施設整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団埋蔵文化財報告第415集 2016年3月
- 8) 註7に同じ
- 9) 野坂和信 『古墳時代の土器と社会構造』雄山閣 2007年5月
- 10) 池田敏宏 「栃木県における6・7世紀の土器の様相 - 地域間交流を中心視座にいれて -」『古代社会と地域間交流 - 土師

器からみた関東と東北の様相』六一書房 2009年6月

- 11) a 内山敏行・菊地芳朗 「第21回東北・関東前方後円墳研究会 検討記録」『東北・関東前方後円墳研究会連絡誌』第41号 東北・関東前方後円墳研究会 2006年
b 菊地芳朗 「古墳時代の東北と北関東－福島と栃木の比較を中心に－」『栃木県考古学会誌』第39号 栃木県考古学会 2018年3月
- 12) 川尻秋生 『坂東の成立』古代の東国2 吉川弘文館 2017年2月
- 13) 常陸太田市史編さん委員会 『常陸太田市史 通史編 上巻』常陸太田市教育委員会 1984年3月
- 14) 佐藤信 『古代の地方官衙と社会』日本史リブレット8 山川出版 2007年2月
- 15) 館野和己 「屯倉の成立－その本質と時期」『日本史研究』190 日本史研究会 1978年6月
- 16) 註12に同じ
- 17) 註12に同じ
- 18) 註14に同じ
- 19) 若狭徹 『前方後円墳と東国社会』古代の東国1 吉川弘文館 2017年1月
- 20) 荒井秀規 『覚醒する関東』古代の東国3 吉川弘文館 2017年6月
- 21) 村田晃一 「図版の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』東北の古代史3 吉川弘文館 2015年11月
- 22) 川井正一ほか 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡』茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告第22集 財団法人茨城県教育財団 1983年3月
- 23) 佐伯有清 「神火と国分寺焼失」『新撰姓氏録の研究 研究編』吉川弘文館 1963年
- 24) 註14に同じ
- 25) 大正大学天台学研究室編 『法華三大部難字記』隆文館 1967年12月
- 26) a 水野正好 「招福・除災－その考古学－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985年3月
b 辰淳一郎 「我念君、君念我の組み合わせ文字」『なぶんけんブログ』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2008年1月
- 27) 註24に同じ
- 28) 註13に同じ
- 29) 斎藤弘 「足利市小侯所在の叶花古墳について」『唐澤考古』第16号 唐沢考古会 1997年5月
- 30) 大川清・新井潔ほか 『仲の内遺跡』日本窯業史研究所報告第32冊 小川町教育委員会 1990年3月
- 31) 茨城大学中世史研究会・常陸大宮市歴史民俗資料館 『館と宿－常陸大宮市の城館とその周辺－』常陸大宮市 2009年10月
- 32) 高橋與右衛門 「中世の建物跡」『戦国時代の考古学』高志書房 2003年6月
- 33) 註31に同じ
- 34) 小泉弘 「埋葬施設の変遷」『図解 江戸考古学事典』柏書房 2001年4月
- 35) 田村雅樹 「栃木県における近世墓壇の様相」『野州考古学論攷－中村紀男先生追悼論集－』中村紀男先生追悼論集刊行会 2009年5月

付 章 1

瑞龍遺跡出土人骨について

国立科学博物館人類研究部

梶ヶ山 真里

1 はじめに

瑞龍遺跡は、茨城県常陸太田市瑞龍町に所在する遺跡である。平成 25～28 年度に茨城県教育財団によって発掘調査が行われ、室町時代と江戸時代の 7 基の墓坑から人骨 7 体が検出された（表 1）。被葬者は、土坑墓にそのまま直埋葬、あるいは木棺に埋葬されている。全体的に保存状態は良好とは言えない。なかでも比較的保存状態が良好な 2 個体について記載する。

7 体の人骨を対象に、クリーニングおよび接着復元の後、残存部位の同定、死亡年齢推定と性別判定、そして形態学的観察を実施した。通常、死亡年齢は、腸骨耳状面の形態変化¹⁾や骨端の癒合状況、骨棘形成の有無などから総合的に推定する。しかし、当該遺跡では寛骨が保存されておらず、主に歯が保存されているので、歯の咬耗を参考にした。性別判定は、主に寛骨形態の観察による方法²⁾に基づくが、今回は頭蓋形態や四肢骨の太さを参考とし、総合的に判断した。頭蓋と四肢骨の計測はマルチン式に従って行い³⁾求めた。さらにこれらの計測値を江戸市中の甕棺墓集団（主に中・下級武士）と早桶集団（主に町人）の頭蓋計測値⁴⁾、江戸市中の東京都崇源寺跡（1 次）出土人骨の四肢骨計測値⁵⁾と、龍ヶ崎市庚申塚遺跡⁶⁾とも比較した。

2 出土人骨一覧

当該遺跡から検出された人骨の一覧表である。第 1 号墓坑、第 10 号墓坑に関しては、人骨所見にて記載する。

検出された人骨は合計 7 体で、内訳は成人 5 体、未成年 2 体（青年 1 体、小児 1 体）である。成人 5 体のうち男性 3 体、女性 2 体である（表 1）。

第 2 号墓坑は、【壮年後半以降の男性_♂】の判断基準は、年齢推定は縫合の癒合状態のみの判断である。性別は、大腿骨の太さは男性平均だが、粗線の発達が弱いので男性と推察した。

第 4 号墓坑は、【壮年後半、男性_♂】の判断基準は、年齢推定は歯の咬耗程度である。性別は、下顎骨の形態と頑丈さである。しかし、大腿骨が男性としては細く、華奢な男性と推察した。

第 6 号墓坑は、【青年、男性_♂】の判断基準は、寛骨が保存されておらず、後頭骨の形態から判断したものである。なお、咬耗の強い乳臼歯 2 点が保存されていることから、未成年個体と判断した。後頭骨は滑らかで女性的ではあるが、未成年個体は性差を断定できない。しかし、大腿骨周が男性平均値に匹敵することから男性と推察した。

なお、第 4 号井戸跡から出土した資料は、人骨ではなくニホンシカの中手骨である。

3 人骨所見

(1) 第 1 号墓坑（人骨保存部位・第 1 図）

頭蓋は、前頭骨、頭頂骨の一部、左右錐体、ラムダ縫合周辺の後頭骨が保存されている。縫合は内板で癒合消失し、外板では一部で癒合が始まっている。板間層が非常に厚く、それを挟む緻密質は薄い。骨表面の

表1 出土人骨観察一覧

遺構番号	個体数	性別	年齢	特記事項	歯式
第1号墓坑	1	壮年後半	男性	所見	本文中に記載
第2号墓坑	1	壮年後半 ～	男性	頭蓋冠：頭頂骨～後頭骨残存 左側頭部錐体の一部乳様突起形態不明 冠状縫合，矢状縫合，内板では閉鎖，外板では消失 歯冠片のみ保存 左右大腿骨骨体保存 骨体周（80）は男性平均 骨体後面素線発達弱い 骨質脆い	
第3号墓坑	1	壮年～ 熟年	女性	頭蓋骨（頭頂部，後頭部，左側頭部：左外耳孔は小さい円形 左顎関節狭い 左脛骨骨体片 歯の咬耗はエナメル質磨り減り，象牙質大きく露出	$\begin{array}{cccccccccccc} 8 & 7 & 6 & 5 & 4 & - & 2 & - & - & - & - & 5 & 6 & 7 & - \\ - & 7 & 6 & - & 4 & - & - & - & - & 1 & - & 3 & - & - & 6 & 7 & 8 \end{array}$
第4号墓坑	1	壮年後半	男性	下顎骨 歯咬耗プロカII 骨表面傷み強い オトガイ隆起不明 下顎体高い 頭蓋冠：骨壁断面薄い 錐体中程度 左大腿骨骨体上半 細い	$\begin{array}{cccccccccccc} 8 & - & - & 5 & 4 & 3 & - & 1 & - & - & - & 4 & 5 & - & - & - \\ 8 & 7 & 6 & 5 & 4 & - & 2 & 1 & 1 & 2 & 3 & - & - & - & - & - \end{array}$
第5号墓坑	1	小児 （6・7 歳）	不明	永久歯と乳歯（アラビア数字） 太字斜文字は未萌出 未萌出江臼歯は歯根部は未完成 右錐体	$\begin{array}{cccccccccccc} - & - & 6 & v & iv & - & - & - & - & - & - & - & - & - & - & - \\ - & - & 6 & - & iv & - & - & - & - & - & - & - & v & 6 & - & - \end{array}$
第6号墓坑	1	青年	男性	頭蓋骨片：後頭骨骨表面滑らか 永久歯の磨り減り弱い 下顎左右第2乳臼歯。乳臼歯のエナメル質の磨り減り強い 左右大腿骨体片	$\begin{array}{cccccccccccc} - & - & - & 5 & - & - & - & - & 1 & - & - & - & - & 6 & 7 & - \\ - & 7 & 6 & - & - & - & - & - & - & - & - & 4 & - & 6 & 7 & - \end{array}$
第10号墓坑	1	壮年	女性	所見	本文中に記載
第4号井戸跡	シカ	-	-	ニホンジカ 中手骨	

風化による傷みが強く，詳細な観察は不可能である。

歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

4	3	○	○	○	○	4									
×	×	×	×	4	3	2	1	○	2	3	4	5	×	7	8

○は，歯根のみが保存されている。死後破損したものと思われる。×は，生前に歯が脱落し，歯槽が閉鎖している状態である。下顎左第3大臼歯にはカリエスが認められる。歯の咬耗は，エナメル質が大きく磨り減り，象牙質が露出している。プロカのII～IIIに相当する。咬耗が進行しており，年齢は熟年期の様相である。しかし，歯槽の退縮はそれほど強くなく，加齢による下顎骨の形態とは言いがたい。

四肢骨では，左右上腕骨骨体が保存されている。最小周66はやや太く（表2），江戸時代男性平均に近い。三角筋粗面は概ね発達し，外側に突出する。左右大腿骨の骨体が保存されている。左大腿骨骨体周（78）は，江戸時男性平均よりやや細い。骨頭窩は完全に骨増殖で埋る。したがって40才以上と推測される。右脛骨体はやや細く，骨体断面は扁平である。左距骨は部分的に破損箇所がある。蹲踞面の延長はなく，蹲踞姿勢の常習性は認められない。

第1号墓坑の出土人骨は，保存されている頭蓋骨の形態から，男性の可能性が高い。年齢は，歯の咬耗が強く，年齢が進行しているように感じられる。しかし，骨粗鬆症などのスカスカ感がなく，下顎骨もそれほど年齢の進んだ形態とはいえない。したがって，壮年後半と思われる。

(2) 第10号墓坑（人骨保存部位・第1図）

前頭骨，頭頂骨，側頭骨の頭蓋冠が保存されている。頭蓋最大長は182 mm，頭蓋最大幅は136 mmである。頭示数74.7で長頭に属する。頭蓋の三主縫合は，内板では完全に閉鎖し，外板では矢状縫合が閉鎖している。前頭部の眉間と眉弓の隆起はそれほど強くない。眼窩上縁は丸みを帯びている。

歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

／は，歯槽が崩壊している。歯の咬耗はエナメル質が磨り減り，象牙質が大きく露出している。プロカの

／	／	6	／	／	○	○	○		1	2	3	4	5	6	7	8
×	×	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	×

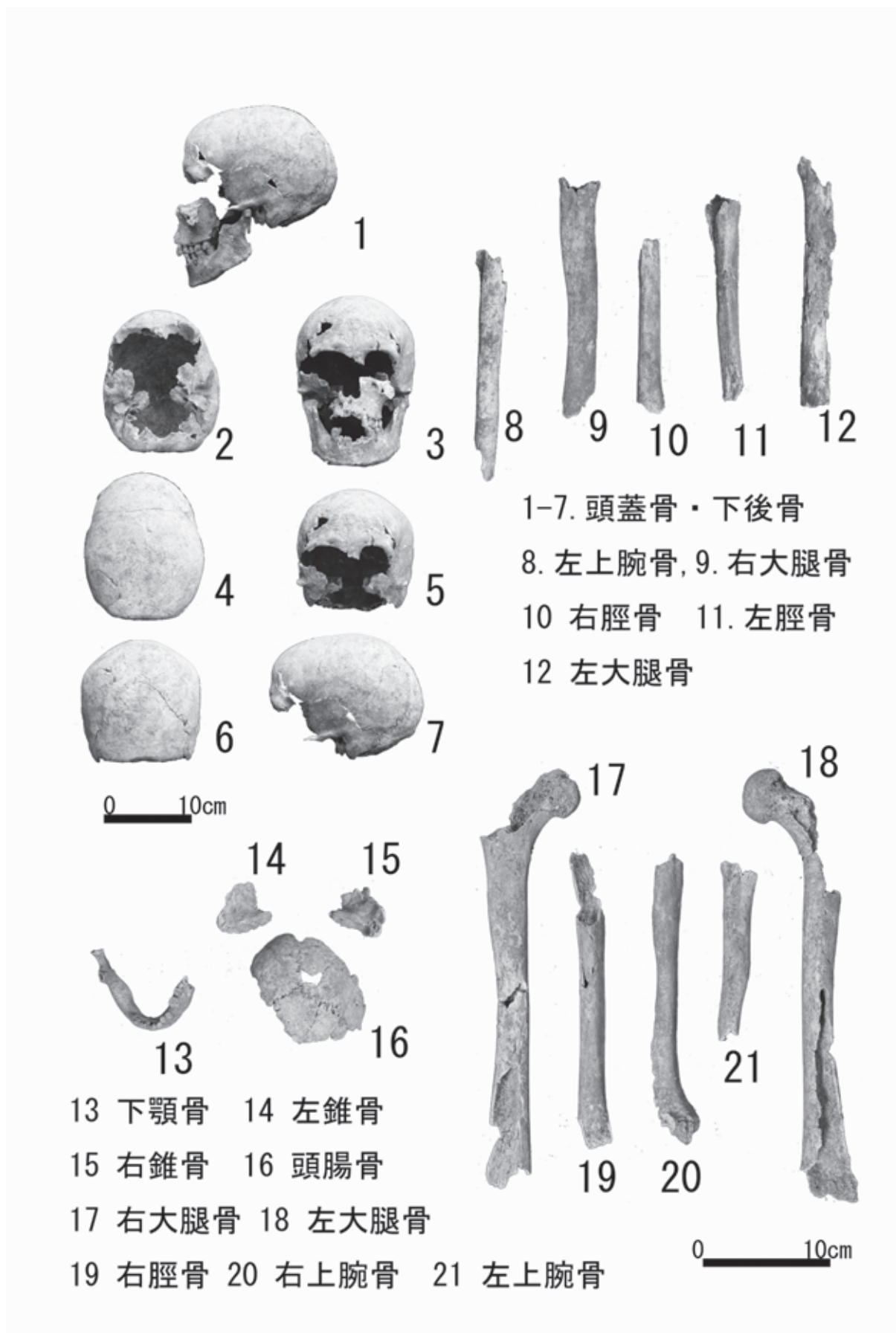
Ⅱ～Ⅲに相当する。歯石の付着はない。下顎骨、歯槽部は頑丈で、下顎枝は広い。

右上腕骨骨体は細い（60）。三角筋左右大腿骨の骨体上部はやや扁平である。骨体の後面粗線は隆起していない。大腿骨体周（78）は、江戸時代女性平均に近い。左右膝蓋骨は小さく、骨粗鬆症が確認できる。脛骨骨体は扁平であり、細く華奢である。

表2 出土人骨比較一覧

計測項目	瑞龍遺跡				与曾内遺跡						江戸 崇源寺跡（1次）					
	第1号 墓坑	第2号 墓坑	第4号 墓坑	第6号 墓坑	SK-1		SK-2		SK-3		男性		女性			
	男性 ₁	男性 ₂	男性 ₄	男性 ₆	不明		男性		男性		平均	N	平均	N		
					R	L	R	L	R	L						
上腕骨																
1. 最大長												296	41	260	35	
5. 中央最大径	23.3											22.4	42	19.3	36	
6. 中央最小径	16.8											17.8	42	15.2	36	
6/5. 骨体横断示数	72.1											74.2	42	78.8	36	
7a. 中央周	66															
橈骨																
1. 最大長						[230]						220	51	199	37	
4. 骨体横径						16.2						17.0	16.9	51	14.8	37
5. 骨体矢状径						11.4						12.5	11.9	51	10.1	37
5/4. 骨体断面示数						70.4						73.5	70.4	51	68.2	37
5(5). 中央周径						45						47	45.9	51	39.9	37
尺骨																
1. 最大長												237	49	230	37	
11. 骨体矢状径						[12.8]						12.4	11.8	50	11.6	37
12. 骨体横径						[16.8]						17.7	16.1	50	14.9	37
11/12. 骨体横断示数						[76.2]						70.1	70.4	50	77.8	37
3(a). 中央周												48.4	50	40.5	37	
大腿骨																
1. 最大長								[380]				364	403	47	371	39
6. 骨体中央矢状径	25.9	25.2	26.2	23.3		29.5	24.5	25.1	26.0	24.6	26.7	48	23	40		
7. 骨体中央横径	26.3	26.3	27.2	27.5		27.0	27.5	28.8	27.3	26.0	26.3	48	23.5	40		
6/7. 骨体中央断面示数	98.5	95.8	96.3	84.7		109.3	89.1	87.2	95.2	94.6	102	48	97.8	40		
8. 骨体中央周	78	80	83	81		91	83	84	84.5	82	84.3	48	73.9	40		
脛骨																
1a. 最大長																
8. 中央最大矢状径	29.8											28.9	34	23.7	22	
9. 中央横径	19.8											21.2	34	19.1	22	
9/8. 中央横断示数	66.4											73.3	34	80.5	22	
10. 骨体中央周												77.8	34	67.9	22	
8a. 栄養孔位最大径								32.8	32.0	31.2	31.6					
9a. 栄養孔位横径								19.5	19.5	24.5	22.1					
9a/8a. 脛（扁平）示数								59.5	60.9	78.5	69.9					
10a. 栄養孔位周								85	84	88	86					
腓骨																
1. 最大長												324	33	298	15	
2. 中央最大径												14.1	34	12.5	15	
3. 中央最小径												10.4	34	9	15	
3/2. 体断面示数												73.7	34	72	15	
4. 中央周												41.3	34	35.9	15	
推定身長																
大腿骨								[1485.6]				1446	155	81	147	63

[] 内の数値は、推定値を表す。また崇源寺（1次）の計測値は註5より引用。



第1図 人骨保存部位 (第1号墓坑・第10号墓坑)

以上のことから、第10号墓坑の人骨は、頭蓋骨の全体的な大きさは男性の値に一致するが、頭蓋骨形態の詳細が不明であるので、男女の明確な判断が困難である。しかし、四肢骨の太さから判断して、骨体が細く、華奢であることから、女性である可能性が高い。年齢は、歯の咬耗が進行していることから、年齢が進んでいるように思われる。しかし、下顎骨体の頑丈さ、歯槽の退縮がほとんどないことを総合的に判断して、壮年であろう。

3 まとめ・考察

瑞龍遺跡から検出された7体の人骨の保存状態は、あまり良好な状態ではない。しかし、歯の状態は比較的良好な保存状態で、概ね詳細な観察ができた。つまり、どの個体の歯も咬耗が進行し、ほとんどの象牙質が露出していた。これは、江戸市中から検出されるほぼ同年齢と思われる人骨の歯の咬耗ではあまりみられない状況である。保存されている人骨に、顕著な加齢傾向が見られないことから判断すると、食生活による強い磨耗によるものが原因と思われる。少なくとも、かれらの食生活は、江戸市中の人々に比べて、繊維質が多く、堅いものを日常的に食していたと推測できよう。また、四肢骨の保存状態は全体として不良である。筋付着部の観察は出来ない。それでも保存されている四肢骨は、骨体が細く華奢で、生前に過酷な労働を推測させるような形態ではない。どちらかという、第1号墓坑、第10号墓坑の人骨は重労働とは関連のない個体であったと思われる。

江戸市中から離れた集落の人々の人骨はあまり検出例が無く、検出されても非常に断片的である。今後、室町時代や江戸時代の人の生活を考える上で、江戸市中の人々だけではなく、茨城県など周辺地域の人々のデータの収集・蓄積が必要である。

註

- 1) Buckberry JL and Chamberlain AT Age estimation from the auricular surface of the ilium: a revised method
American journal of physical anthropology 119・231～239頁 2002年
- 2) Bruzek JA method for visual determination of sex, using the human hip bone. American journal of physical
- anthropology 117・157～168頁 2002年
- 3) 馬場悠男 「人体計測法」『人類学講座 別館1 人体計測法』雄山閣 1991年
- 4) Sakaue K Craniofacial variation among the common people of the Edo Period. Bulletin of the National Museum of
Nature and Science. Series D. 38, 39～49頁 2012年
- 5) 梶ヶ山真里・白波瀬由実・大谷江里・小沢素子・馬場悠男 「崇源寺・正見寺出土人骨」『東京都新宿区崇源寺・正見
寺跡一南元町複合施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宗教法人明治神宮・大成エンジニアリング株式会社
編 2005年
- 6) 中山なな・梶ヶ山真里・坂上和弘 「茨城県与曾内遺跡出土人骨」茨城県教育財団 2018年3月校了

参考文献

- Smith BH Patterns of molar wear in hunter-gatherers and agriculturalists. American Journal of Physical Anthropology.
63・39～56頁 1984年
- 藤井 明 「四肢長骨の長さとの関係に就いて」『順天堂大学体育学部紀要』3 49～61頁 1960年

付 章 2

瑞龍遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

瑞龍遺跡は、茨城県常陸太田市瑞龍町に所在し、里川右岸の標高約42mの台地上に立地する。本遺跡は、縄文時代中期から江戸時代までの集落跡や墓域で、調査区からは竪穴建物跡などが検出されている。

本報告では、瑞龍遺跡より検出された粘土貼土坑の使用用途を検討するために、寄生虫卵分析、土壤理化学分析を実施する。

(1) 試料

分析対象遺構は、調査区域の東部で確認された第11号粘土貼土坑、第16号粘土貼土坑である。いずれも粘土貼土坑であり、出土状況から肥溜めとして利用されていた可能性が想定されている。

分析対象試料は、第11号粘土貼土坑の沈殿物層、下層、および第16号粘土貼土坑の上層、下層の計4点である。この4点について、寄生虫卵分析、土壤理化学分析（リン酸・カルシウム分析、全炭素分析）を実施する。

2 分析方法

(1) 寄生虫卵分析

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、寄生虫卵は佐伯ほか¹⁾、齊藤・田中²⁾等を、花粉化石は島倉³⁾、中村⁴⁾、藤木・小澤⁵⁾、三好ほか⁶⁾等を参考にする。

結果は、寄生虫卵については堆積物1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数を一覧表として、花粉・胞子化石については1ccあたりの個数、同定および計数結果の一覧表として表示する。1ccあたりの個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。また、100個未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。

(2) 土壤理化学分析

全炭素含量は乾式燃焼法、リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法⁷⁾に従う。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 全炭素含量

粉碎土試料を 0.1000g ~ 2.0000g を石英ボートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製 CN コーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量を (T-C 乾土 %) 求める。

3) リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO₃) 約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO₄) 約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P₂O₅mg/g) とカルシウム含量 (CaOmg/g) を求める。

3 結果

(1) 寄生虫卵分析

結果を表 1 に示す。第 11 号粘土貼土坑の沈殿物層、下層、および第 16 号粘土貼土坑の上層、下層のいずれからも、寄生虫卵は 1 個体も検出されなかった。花粉化石、シダ類胞子の産出も少なく、第 16 号粘土貼土坑の上層から約 100 個/cc、それ以外の 3 試料は 100 個体未満/cc であった。検出された花粉化石には、花粉外膜が破損・溶解しているものも含まれており、保存状態は普通～やや悪い。

検出された花粉化石群集についてみると、木本花粉ではマツ属が多く産出し、スギ属、ニレ属-ケヤキ属などが認められる。なお、第 16 号粘土貼土坑の下層からは、第三紀消滅種であるフウ属が確認されたことから、本層には古い時代の堆積物からの再堆積花粉も含まれている

表 1. 寄生虫卵分析結果

種 類	第 11 号 粘土貼土坑 沈殿物層		第 16 号 粘土貼土坑	
	上層	下層	上層	下層
寄生虫卵 (個/cc)	0	0	0	0
花粉・胞子数 (個/cc)	<100	<100	100	<100
モミ属	-	-	-	1
ツガ属	-	-	1	5
トウヒ属	-	-	-	3
マツ属複雑管束亜属	3	23	20	4
マツ属 (不明)	10	30	25	10
スギ属	3	-	1	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	1
ハンノキ属	1	-	-	-
ブナ属	-	-	-	2
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	2
コナラ属アカガシ亜属	-	-	2	-
クリ属	-	-	-	1
シイ属	1	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	8	2	-	2
フウ属	-	-	-	1
モチノキ属	-	-	-	2
カキノキ属	-	1	-	-
草本花粉				
ガマ属	1	-	-	1
イネ科	15	51	56	12
カヤツリグサ科	1	4	1	1
クワ科	1	-	-	-
ソバ属	-	4	7	1
アカザ科	-	-	6	1
ナデシコ科	2	11	-	-
バラ科	1	-	-	-
ミツガシワ属	1	-	-	-
ヨモギ属	-	-	3	2
キク亜科	1	1	1	-
不明花粉	-	-	-	-
不明花粉	3	-	3	4
シダ類胞子	-	-	-	-
シダ類胞子	15	22	32	56
合 計	-	-	-	-
木本花粉	26	56	50	34
草本花粉	23	71	74	18
不明花粉	3	0	3	4
シダ類胞子	15	22	32	56
合計 (不明を除く)	64	149	156	108

1) 寄生虫卵、花粉・胞子数については、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸めている。

2) <100 : 100 個未満。

と推測され、比較的保存の悪いモミ属、ツガ属、トウヒ属なども同様の可能性がある。

草本花粉ではイネ科が多く、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属などを伴う。わずかではあるが、水湿地生植物のガマ属、ミツガシワ属などが認められるほか、栽培の可能性がある種類ではカキノキ属、ソバ属なども確認された。

(2) 土壤理化学分析

結果を表2に示す。第11号粘土貼土坑の2試料についてみると、野外土性⁸⁾は、沈殿物層でSL(砂壤土)、下層でLiC(埴壤土)とやや差異がある。土色は10YR2/1黒と黒色に富む土壤である。全炭素は1.58-1.60%と同様である。リン酸含量は沈殿物層で19.1mg/g、下層で13.0mg/gと多い。カルシウム含量は3.12-4.08mg/gとリン酸に比較し少ない。

第16号粘土貼土坑の2試料についてみると、野外土性は両試料でCL(埴壤土)である。土色も両試料で10YR2/2黒褐と同様である。全炭素は上層で1.12%、下層で1.69%とやや差異がある。リン酸含量は16.5-18.6mg/gと多い。カルシウム含量は11.2-13.5mg/gと第11号粘土貼土坑と比較すると多い。

表2. 土壤理化学分析結果

試料名		土色	土性	全炭素 (%)	全リン酸 (mg/g)	全カルシウム (mg/g)	備考
第11号 粘土貼土坑	沈殿物層	10YR2/1 黒	SL	1.58	19.1	4.08	
	下層	10YR2/1 黒	LiC	1.60	13.0	3.12	
第16号 粘土貼土坑	上層	10YR2/2 黒褐	CL	1.12	18.6	11.2	
	下層	10YR2/2 黒褐	CL	1.69	16.5	13.5	

1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖⁹⁾による。

2) 土性：土壤調査ハンドブック¹⁰⁾の野外土性による。

SL…砂壤土(粘土0～15%, シルト0～35%, 砂65～85%)

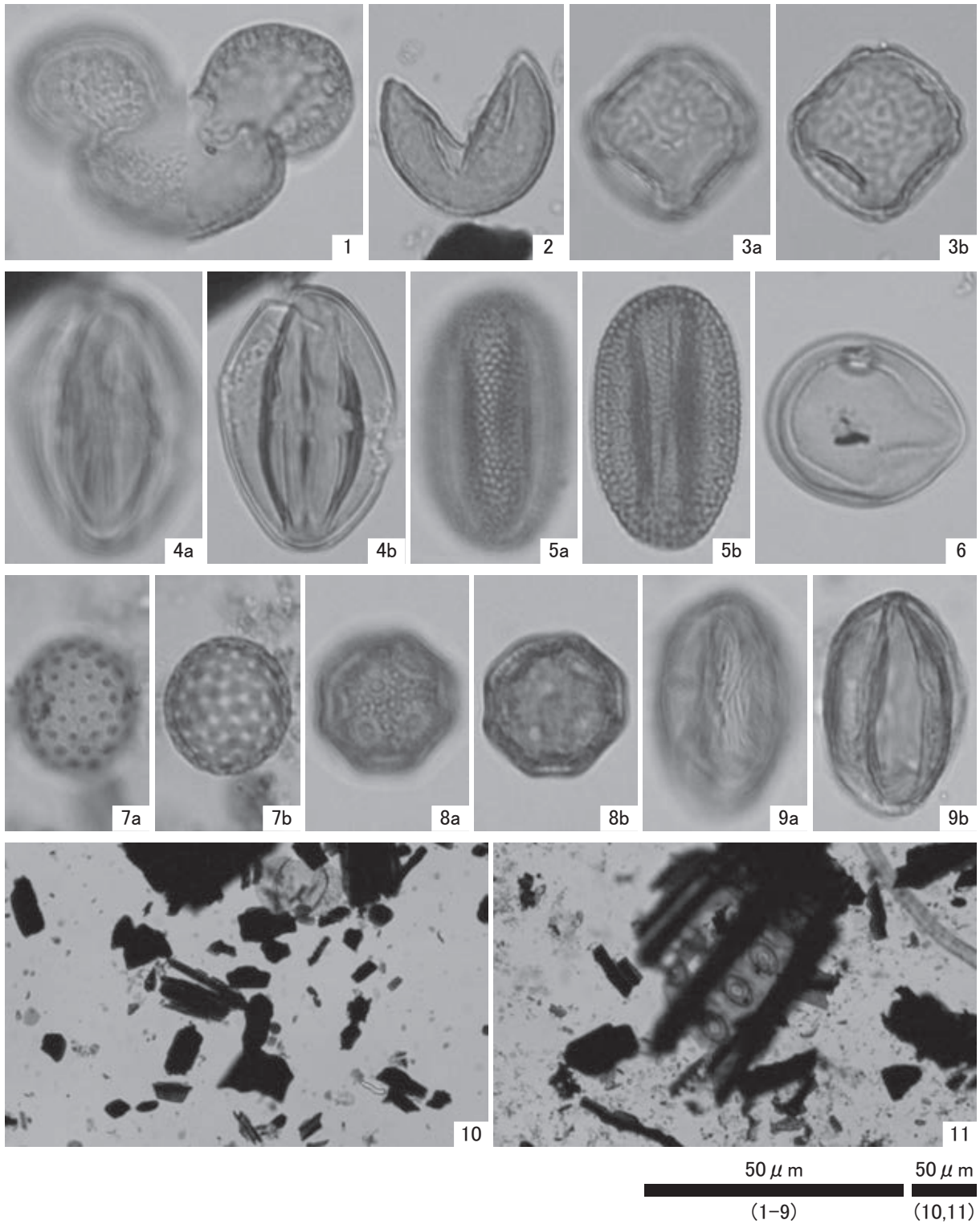
CL…埴壤土(粘土15～25%, シルト20～45%, 砂30～65%)

LiC…軽埴土(粘土25～45%, シルト0～45%, 砂10～55%)

4 考察

分析対象とした第11号粘土貼土坑、第16号粘土貼土坑は、肥溜めとして利用されていた可能性が想定されていた。トイレ遺構などにみられる糞便堆積物には、寄生虫卵が多産する調査事例が報告されている。当社にて分析を実施した岩手県平泉町の柳之御所のトイレ遺構からは、回虫卵、鞭虫卵、ウエステルマン肺吸虫卵、宮崎肺吸虫卵、槍形吸虫卵、日本海裂頭条虫卵など、多くの種類の寄生虫卵が検出されており、寄生虫卵の総数は最も多い遺構で約14,800個/ccを示す¹¹⁾。今回も、同様の寄生虫卵の多産が期待されたが、分析した第11号粘土貼土坑の沈殿物層、下層、および第16号粘土貼土坑の上層、下層のいずれからも、寄生虫卵は1個体も確認されなかった。寄生虫卵の分解に対する抵抗性は花粉化石と同程度とされている¹²⁾。分析した各試料からは花粉化石が産出するものの、その含量は豊富といえず、一番多い試料でも約100個/cc、残りはいずれも100個未満/ccであった。保存状態も、花粉外膜が破損・溶解しているものも確認されたことから、堆積物中に寄生虫卵や花粉化石が取り込まれにくかった、あるいは堆積後の風化作用で分解・消失した可能性などが想定される。

次に土壤特性についてみる。土坑の内容物を推定するために、全炭素含量、リン酸含量、カルシウム含量について分析を実施した。一般的に炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えているとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。



- | | |
|---------------------------------------|-------------------------|
| 1. マツ属 (第11号粘土貼土坑;下層) | 2. スギ属 (第11号粘土貼土坑;下層) |
| 3. ニレ属-ケヤキ属 (第11号粘土貼土坑;沈澱物層) | 4. カキノキ属 (第11号粘土貼土坑;下層) |
| 5. ソバ属 (第11号粘土貼土坑;下層) | 6. イネ科 (第11号粘土貼土坑;下層) |
| 7. アカザ科 (第16号粘土張土坑;上層) | 8. ナデシコ科 (第11号粘土貼土坑;下層) |
| 9. ミツガシワ属 (第11号粘土貼土坑;沈澱物層) | |
| 10. 寄生虫卵分析プレパラート内の状況 (第11号粘土貼土坑;沈澱物層) | |
| 11. 寄生虫卵分析プレパラート内の状況 (第16号粘土張土坑;上層) | |

図版1 花粉化石・寄生虫卵分析プレパラートの内の状況

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壤や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

土壤中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが¹³⁾、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g¹⁴⁾ という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壤では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1～50mg/g¹⁵⁾ といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壤中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壤中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回分析した第 11 号粘土貼土坑、第 16 号粘土貼土坑の試料では、リン酸含量が 13.0～19.1mg/g と、いずれも天然賦存量である 3.0mg/g を大きく超える特徴的な値である。それに比べて炭素含量は少ないことから、リン酸は植物遺体由来以外により供給されている可能性が高い。カルシウム含量はいずれの土坑においても賦存量の範囲内である。ただし、土坑毎を比べると、第 16 号粘土貼土坑でカルシウムが約 3 倍多いことが示された。

以上の結果から、第 11 号粘土貼土坑および第 16 号粘土貼土坑は、リン酸が多く供給される環境であったと考えられることから、肥溜めやゴミ溜めとしての使用された可能性が想定されるが、寄生虫卵の産状を考慮すると糞便の混入が少なかった可能性も考えられる。前出の柳之御所のトイレ遺構では、微細物分析の結果からサルナシ近似種、マタタビ近似種、キイチゴ属、アキグミ、メロン類、シソ属、エゴマ、ナス近似種など、種ごと食する種類・個数が非常に多く確認されている¹⁶⁾。今後、微細物分析や脂肪酸分析などを実施し、糞便や生活残渣の痕跡を検証することが望まれる。

なお、検出された花粉化石から、周囲にマツ属やスギ属などの針葉樹、コナラ属アカガシ亜属やシイ属などの常緑広葉樹が生育していたことが窺える。また、ハンノキ属やニレ属-ケヤキ属などは、河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成することから、里川などの周辺河川沿いに生育していた可能性がある。草本類は、イネ科が多く、カヤツリグサ科やアカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属など、開けた明るい場所に生育する種類が認められる。よって、これらが土坑周辺の草地植生を形成していたと考えられる。また、抽水植物のガマ属やミツガシワ属などが確認されたことから、周囲にこれらが生育する水湿地の存在が窺える。さらに、カキノキ属やソバ属などは、当時栽培・利用されていた可能性もある。

註

- 1) 佐伯秀治・升 秀夫・早川典之 『臨床検査シリーズ 寄生虫鑑別アトラス-オールカラー版-』 162 頁 株式会社メディカルサイエンス社 1998 年
- 2) 斉藤崇人・田中義文 「寄生虫卵殻の形態分類」『徳永重元博士献呈論集』 407～416 頁 バリノ・サーヴェイ株式会社 2007 年
- 3) 島倉巳三郎 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』 第 5 集 60 頁 1973 年 - anthropology - 117・157～168 頁 2002 年

- 4) 中村 純 『日本産花粉の標徴』Ⅰ・Ⅱ (図版) 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12・13集 91頁 1980年
- 5) 藤木利之・小澤智生 『琉球列島産植物花粉図鑑』155頁 アクアコーラル企画 2007年
- 6) 三好教夫・藤木利之・木村裕子 『日本産花粉図鑑』824頁 北海道大学出版会 2011年
- 7) 土壤標準分析・測定法委員会編 『土壤標準分析・測定法』354p 博友社 1986年
土壤環境分析法編集委員会編 『土壤環境分析法』427頁 博友社 1997年
- 8) ベドロジー学会編 『土壤調査ハンドブック改訂版』169頁 博友社 1997年
- 9) 小山正忠・竹原秀雄編著 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社 1967年
- 10) 註8に同じ
- 11) パリノ・サーヴェイ株式会社 「自然科学分析」『岩手県文化財調査報告書』第133集 平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡-第70次発掘調査概報- 50～74頁 岩手県教育委員会生涯学習文化課 2011年
- 12) 黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子 「糞便堆積物の分析-特に寄生虫卵分析について-」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』115～115頁 日本文化財科学会 1993年
- 13) a Bowen, H. J. M. 『環境無機化学-元素の循環と生化学-』浅見輝男・茅野充男訳 297頁 博友社 1983年
b Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M 『土壤の化学』岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳 309頁 学会出版センター 1980年
c 藤貫 正 「カルシウム」『地質調査所化学分析法』52・57～61頁 1979年
d 川崎 弘・吉田 滂・井上恒久 「九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量」23～27頁 『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省 農林水産技術会議事務局編 1991年
e 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 「中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』28～36頁 農林水産省農林水産技術会議事務局編 1991年
- 14) 註13 dに同じ
- 15) 註13 cに同じ
- 16) 註11に同じ

写 真 图 版



東部調査区全景（平成25年度）



東部調査区全景（平成26年度）

PL2



中央部調査区全景（平成26年度）



中央部調査区全景（平成27年度）

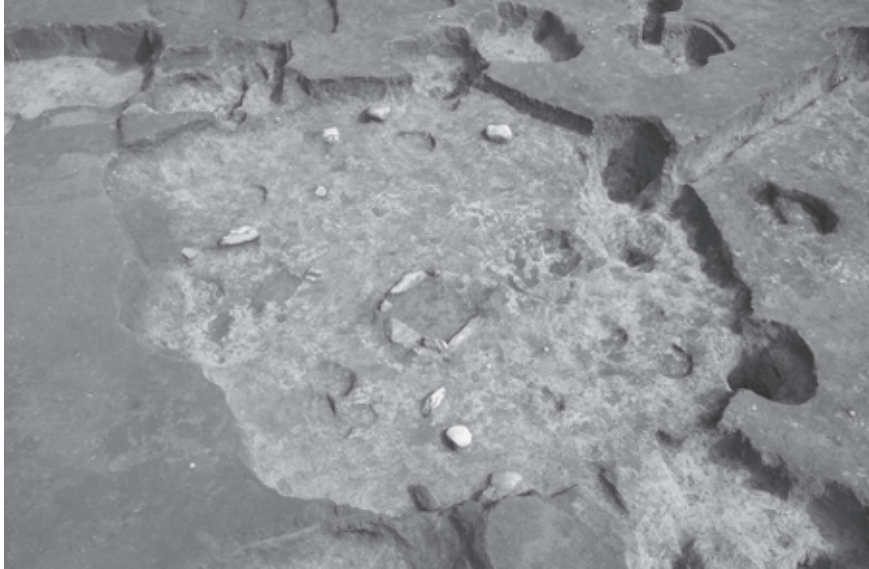


第1号墳全景（平成27年度）

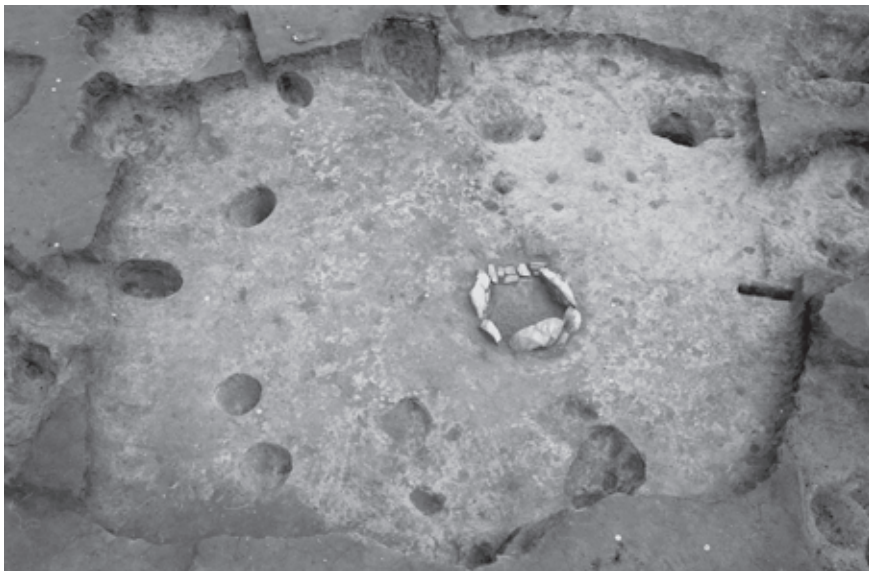


西部調査区全景（平成28年度）

PL4



第89号竖穴建物跡
遺物出土状況



第89号竖穴建物跡



第89号竖穴建物跡
炉

第125号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第125号豎穴建物跡



第125号豎穴建物跡
炉



PL6



第1号埋甕



第1号埋甕掘方土层断面



第2号埋甕確認状況



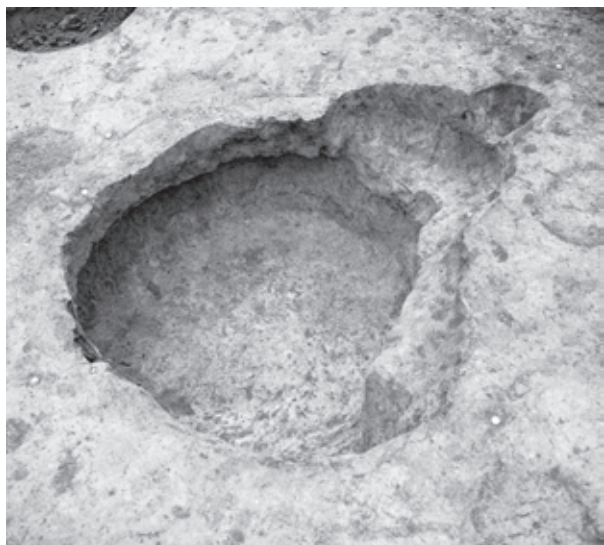
第2号埋甕



第4号埋甕遺物出土状況



第4号埋甕掘方



第68号土坑



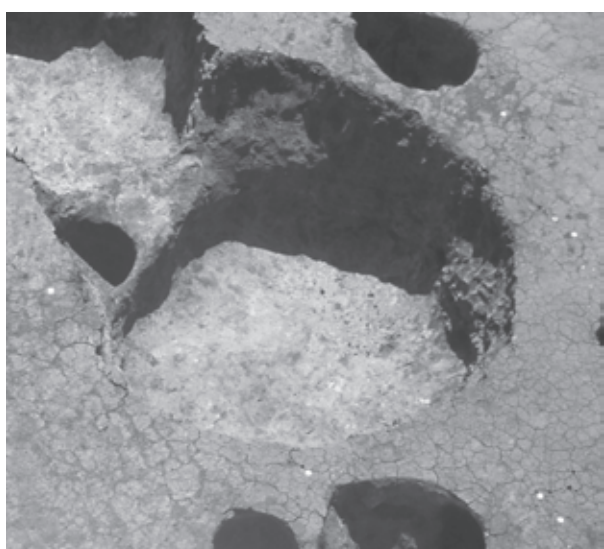
第200号土坑遺物出土狀況



第202号土坑



第210号土坑遺物出土狀況



第210号土坑



第228号土坑

PL8



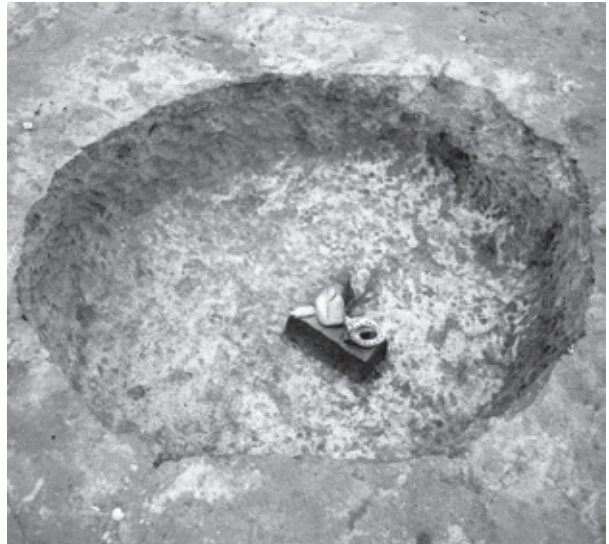
第261・272号土坑



第481号土坑遺物出土狀況



第506号土坑遺物出土狀況



第631号土坑遺物出土狀況



第656号土坑遺物出土狀況



第709号土坑遺物出土狀況



第56号豎穴建物跡
遺物出土狀況①



第56号豎穴建物跡
遺物出土狀況②



第56号豎穴建物跡

PL10



第28号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第28号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第28号竖穴建物跡
遺物出土状況③



第28号豎穴建物跡



第34号豎穴建物跡



第34号豎穴建物跡
炉



第39A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第39A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第39A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況③



第39A・B号竖穴建物跡



第52号竖穴建物跡
P3遺物出土状況



第52号竖穴建物跡

PL14



第67号竖穴建物跡



第77号竖穴建物跡



第79号竖穴建物跡

第80A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第80A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第80A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況③



PL16



第80A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況④



第80A・B号竖穴建物跡
遺物出土状況⑤



第80A・B・C号竖穴建物跡



第82号豎穴建物跡



第84号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第84号豎穴建物跡

PL18



第46号竖穴建物跡



第46号竖穴建物跡
竈



第46号竖穴建物跡
竈掘方土層断面

第63号竖穴建物跡
竈



第63号竖穴建物跡
竈掘方土層断面



第76号竖穴建物跡



PL20



第78号竖穴建物跡



第85号竖穴建物跡



第93号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第93号豎穴建物跡
遺物出土狀況②



第93号豎穴建物跡
竈遺物出土狀況



第93号豎穴建物跡

PL22



第105号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第105号豎穴建物跡
竈遺物出土狀況



第105号豎穴建物跡



第110号竖穴建物跡



第117号竖穴建物跡
竈遺物出土狀況



第117号竖穴建物跡

PL24



第142号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第142号豎穴建物跡
竈遺物出土狀況



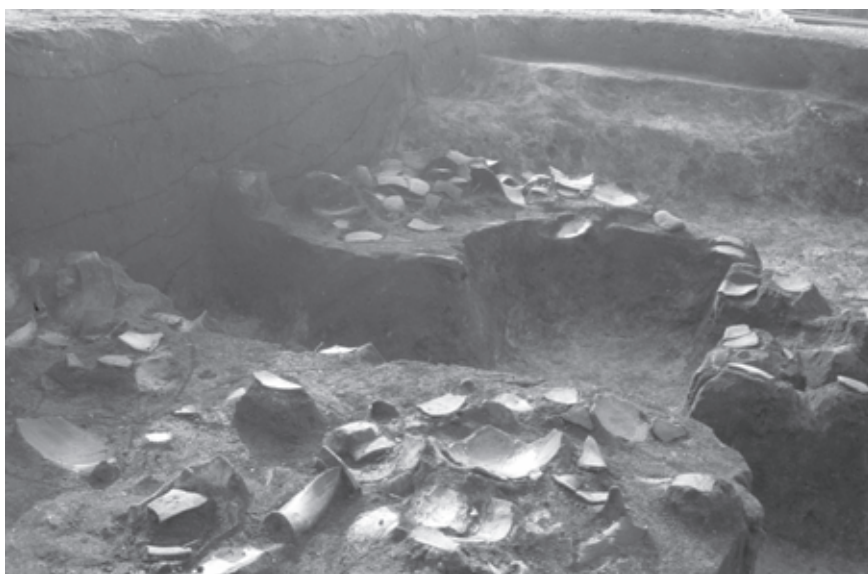
第142号豎穴建物跡



第15A号掘立柱建物跡
確認状況



第1号墳
遺物出土状況①

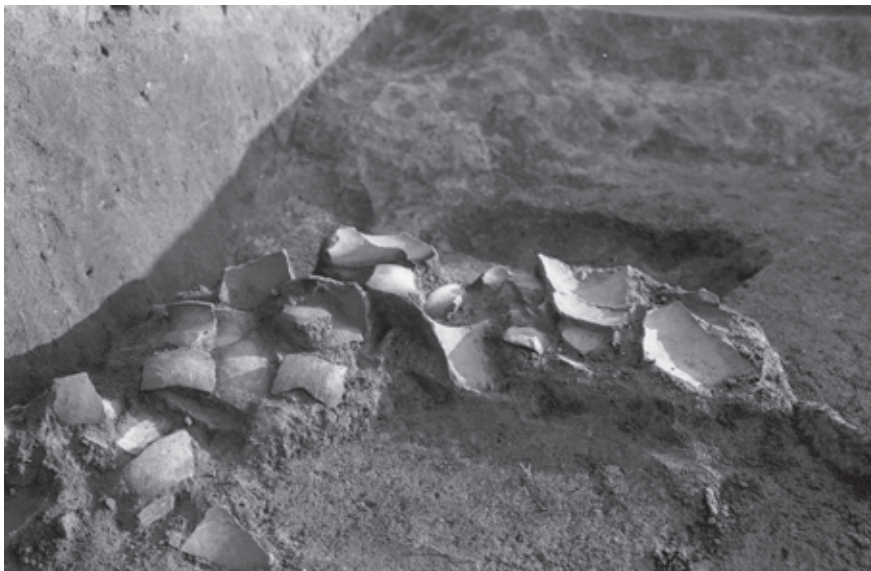


第1号墳
遺物出土状況②

PL26



第 1 号 墳
遺物出土状況③



第 1 号 墳
遺物出土状況④



第 1 号 墳



第6号溝跡遺物出土状況①



第6号溝跡遺物出土状況②



第6号溝跡（南から）



第6号溝跡（北から）

PL28



第1号円形周溝遺構



第1号井戸跡遺物出土状況



第1号井戸跡



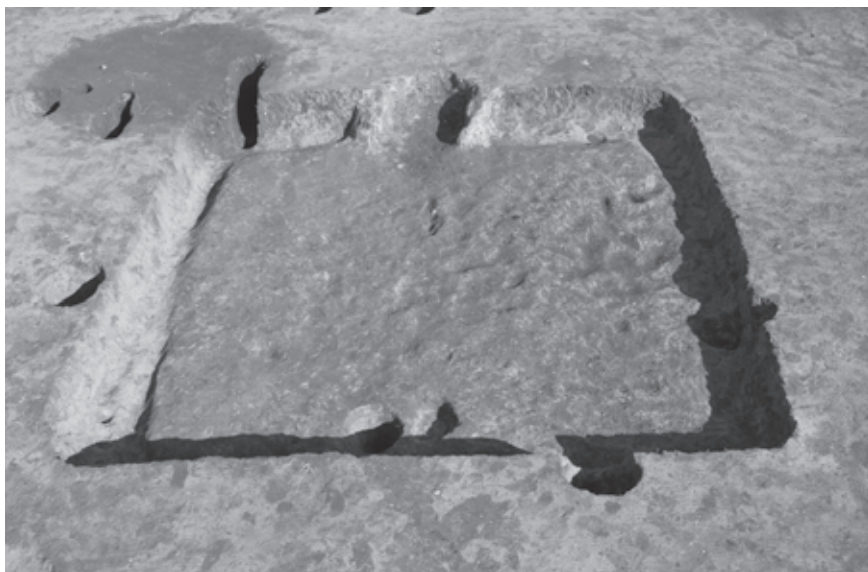
第54号土坑遺物出土状況



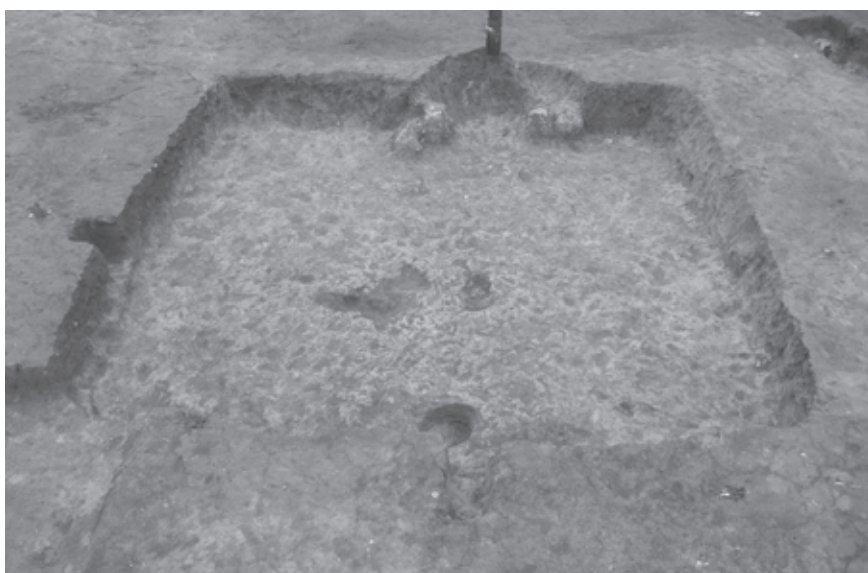
第534号土坑遺物出土状況



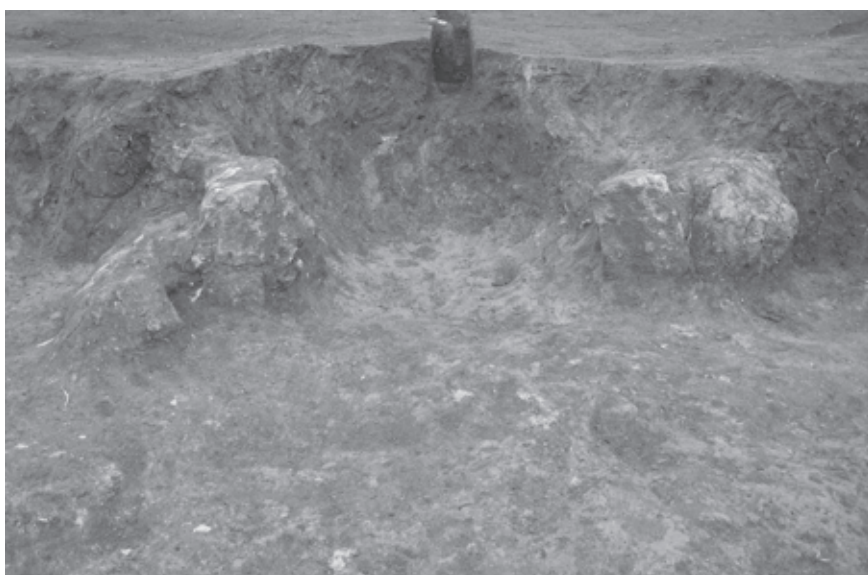
第605号土坑遺物出土状況



第17号竖穴建物跡



第23号竖穴建物跡

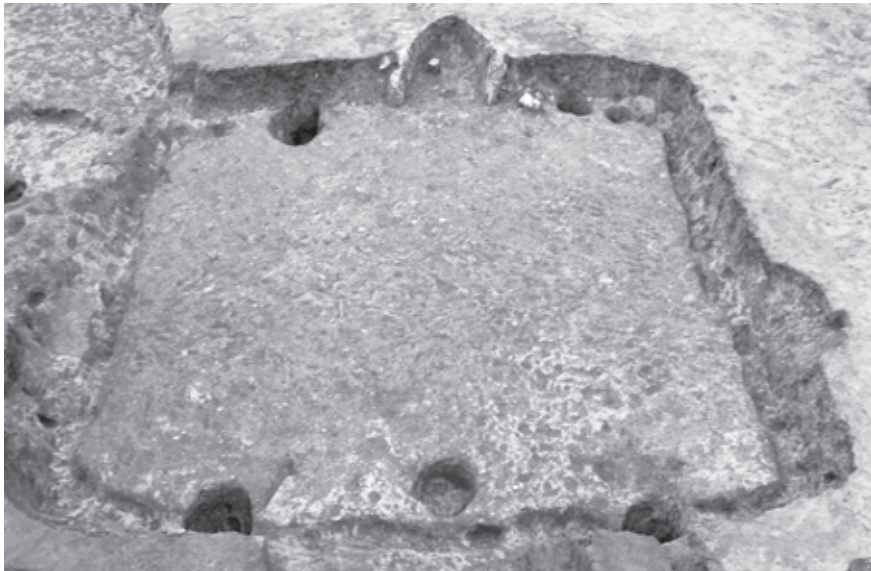


第23号竖穴建物跡
竈

PL30



第23号 竖穴建物跡
竈掘方土層堆積状況



第24号 竖穴建物跡



第24号 竖穴建物跡
竈

第25号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第25号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第25号竖穴建物跡
竈



PL32



第45号竖穴建物跡
遺物出土狀況
第44号竖穴建物跡



第45号竖穴建物跡
遺物出土狀況



第44・45号竖穴建物跡

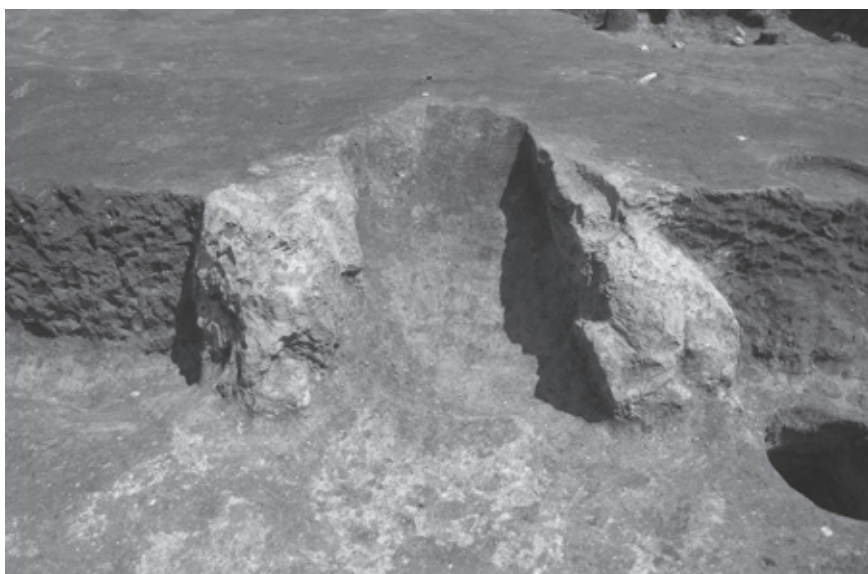
第59号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第59号豎穴建物跡



第59号豎穴建物跡
竈



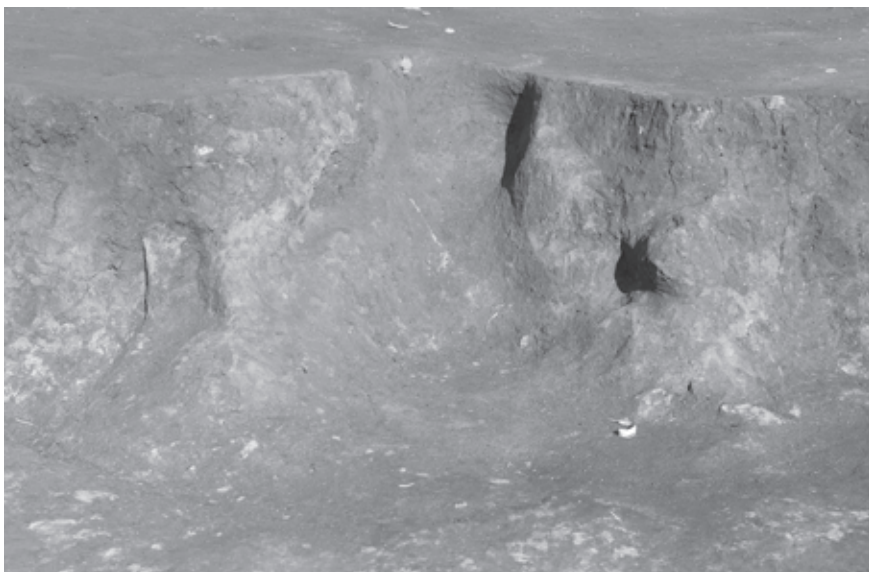
PL34



第115号竖穴建物跡
遺物出土状況



第115号竖穴建物跡

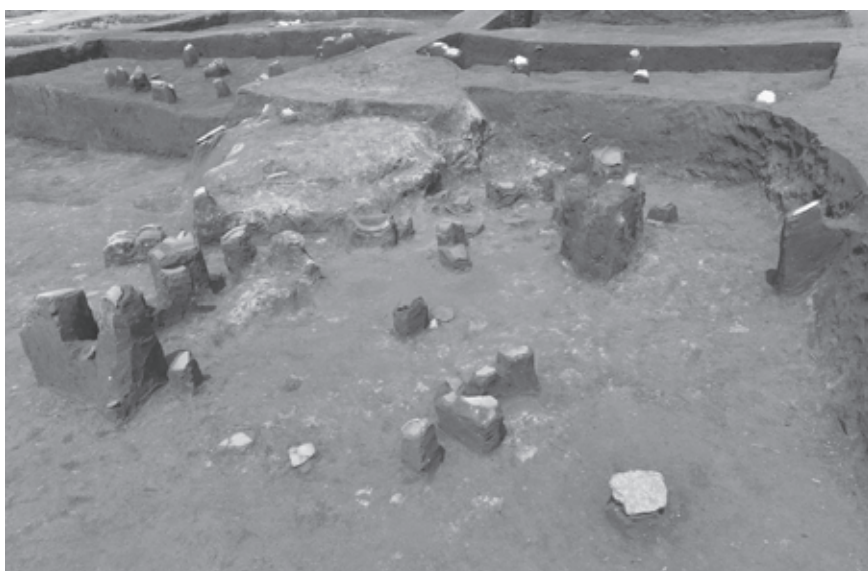


第115号竖穴建物跡
竈 1

第115号竖穴建物跡
竈2



第131号竖穴建物跡
遺物出土狀況



第131号竖穴建物跡



PL36



第131号竖穴建物跡
竈



第133号竖穴建物跡
遺物出土状況



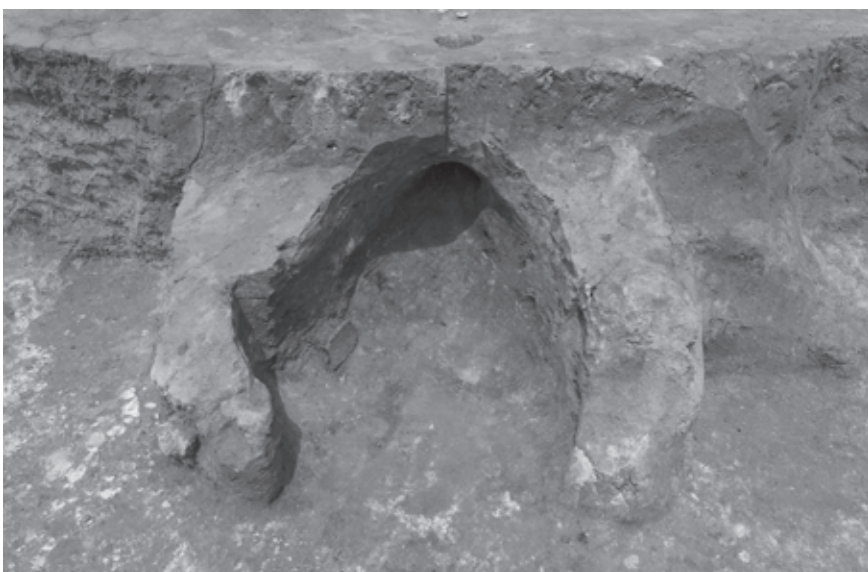
第133号竖穴建物跡
竈遺物出土状況



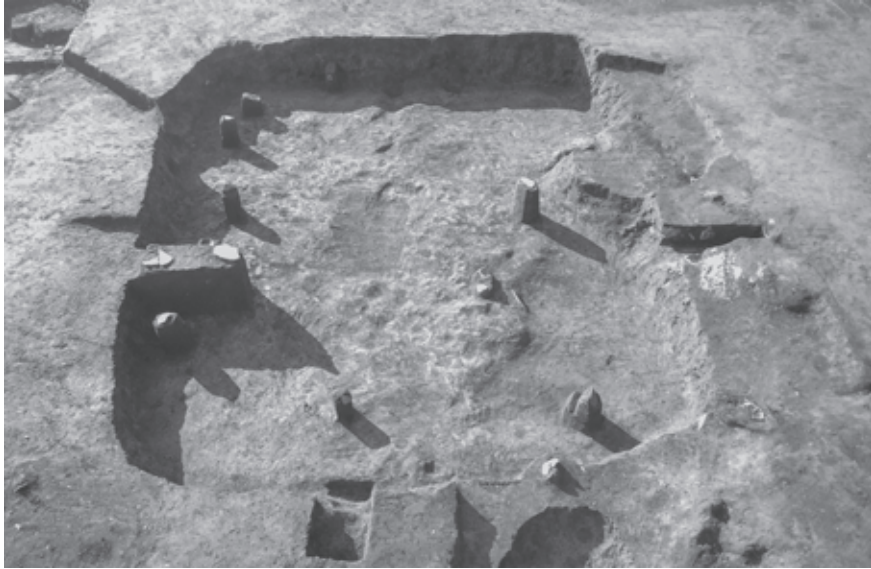
第133号竖穴建物跡



第141号竖穴建物跡



第141号竖穴建物跡
竈



第2号竖穴建物跡
遺物出土状況



第2号竖穴建物跡

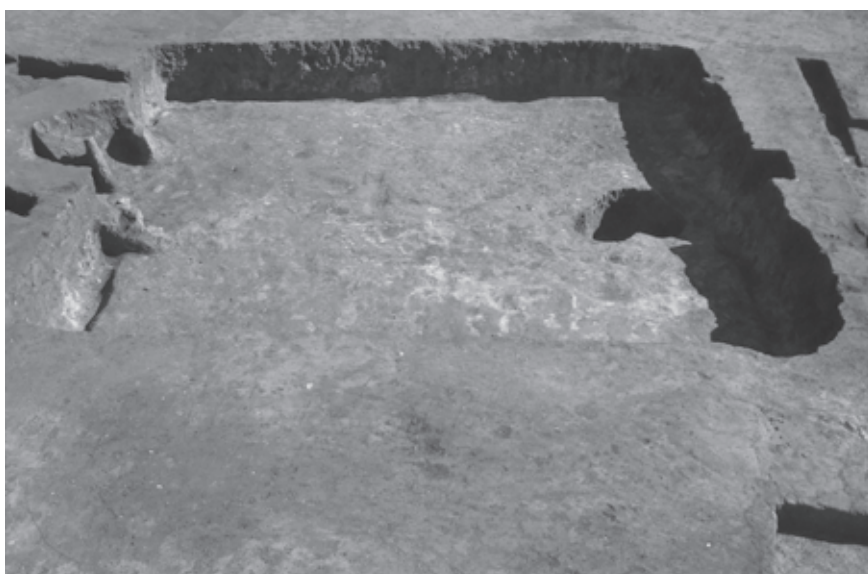


第8号竖穴建物跡
遺物出土状況①

第8号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第8号竖穴建物跡



第8号竖穴建物跡
竈



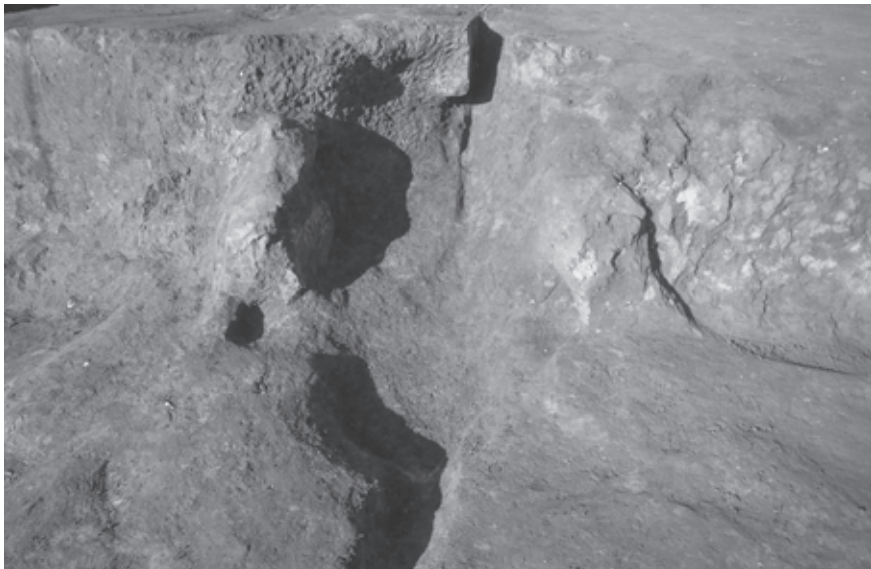
PL40



第10号竖穴建物跡
遺物出土状況



第10号竖穴建物跡



第10号竖穴建物跡
竈

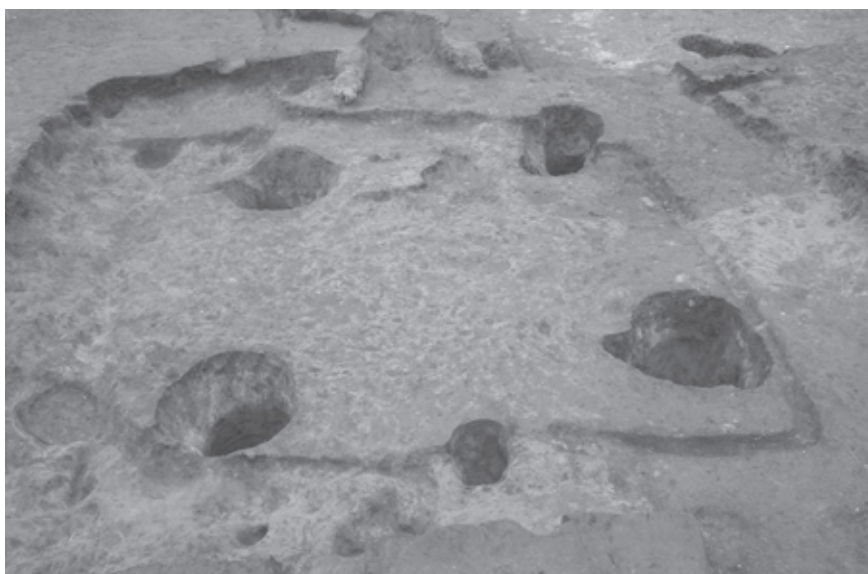
第12B号竖穴建物跡
遺物出土狀況



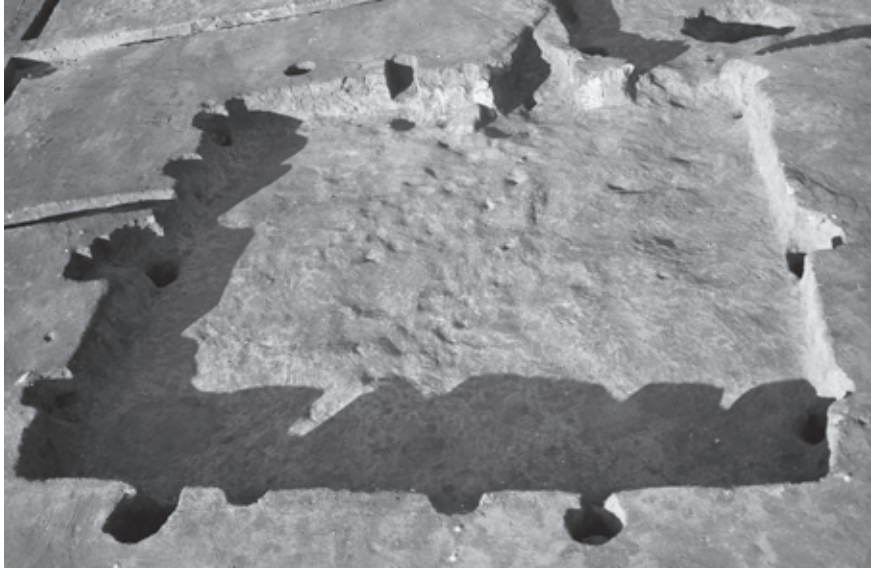
第12B号竖穴建物跡



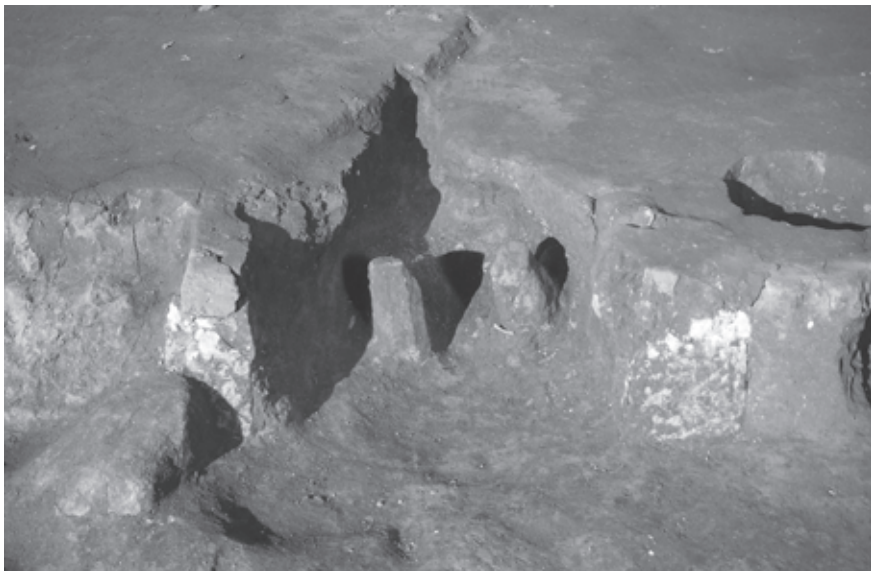
第12A号竖穴建物跡



PL42



第19号竖穴建物跡



第19号竖穴建物跡
竈



第51号竖穴建物跡
遺物出土状況

第51号豎穴建物跡
墨書土器出土狀況



第51号豎穴建物跡
P 2 遺物出土狀況



第51号豎穴建物跡



PL44



第61号竖穴建物跡
遺物出土状況



第61号竖穴建物跡



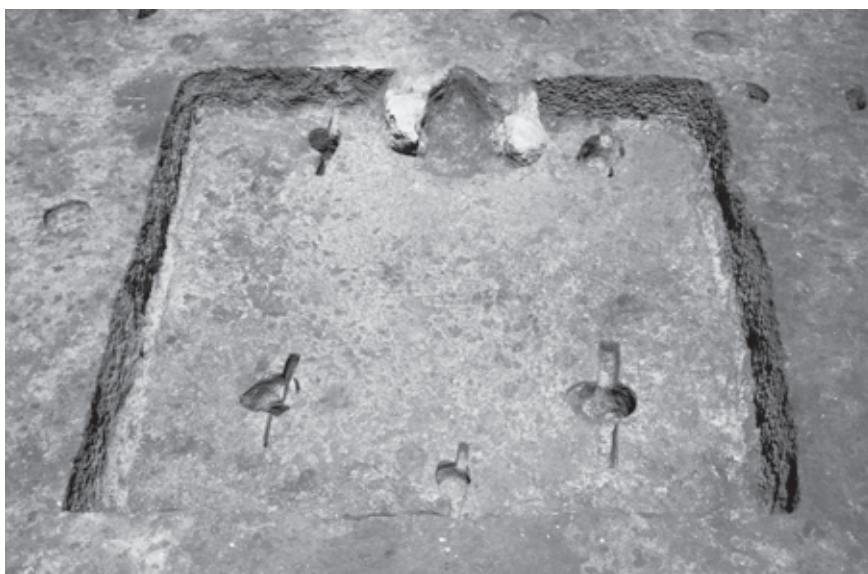
第61号竖穴建物跡
竈掘方土層堆積状況



第70号豎穴建物跡
遺物出土狀況



第70号豎穴建物跡
礎出土狀況



第70号豎穴建物跡

PL46



第112号豎穴建物跡
竈遺物出土狀況



第112号豎穴建物跡



第2号掘立柱建物跡
確認狀況



第2号掘立柱建物跡



第4・5号掘立柱建物跡



第4・5号掘立柱建物跡
掘方

PL48



第7号掘立柱建物跡
掘方



第8号掘立柱建物跡
掘方



第13号掘立柱建物跡



第18号掘立柱建物跡

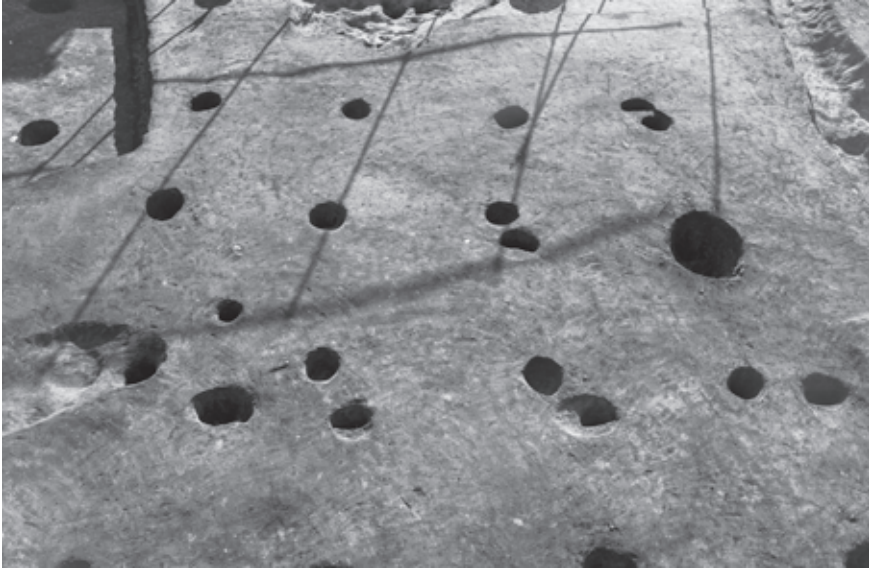


第18号掘立柱建物跡
掘方



第 3 号 柱 穴 列

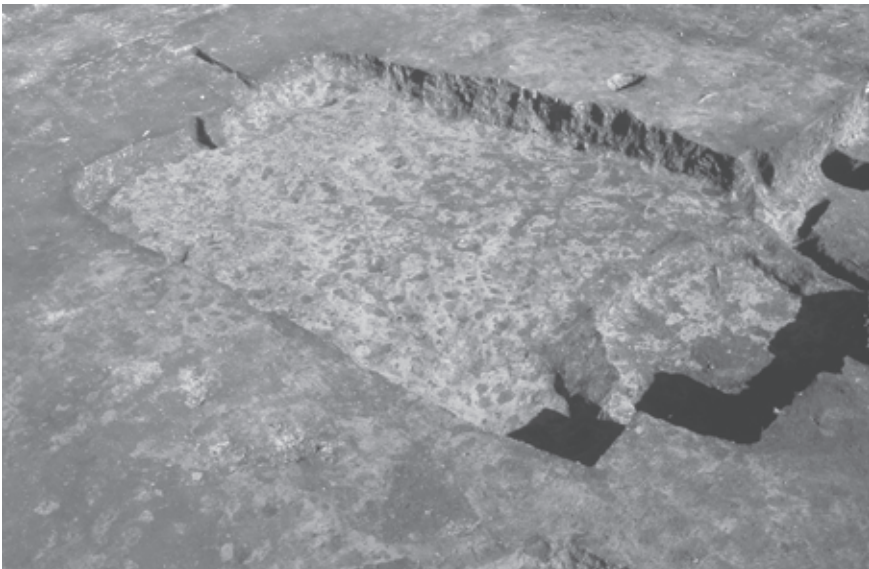
PL50



第17号掘立柱建物跡



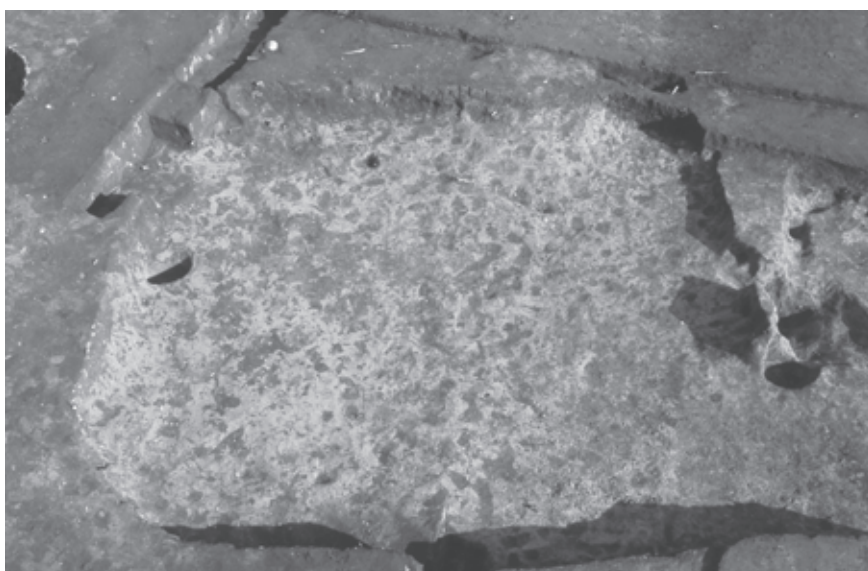
第1号方形竪穴遺構



第4号方形竪穴遺構



第5号方形竖穴遺構



第6号方形竖穴遺構



第4号井戸跡
確認状況

PL52



第 4 号 井 戸 跡
調 査 終 了 状 況



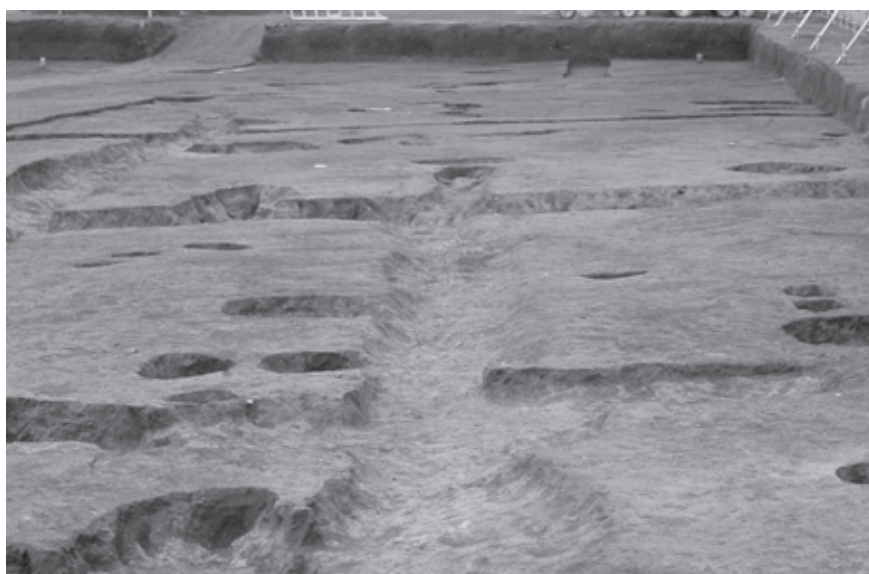
第 1 号 道 路 跡
第 3 号 溝 跡



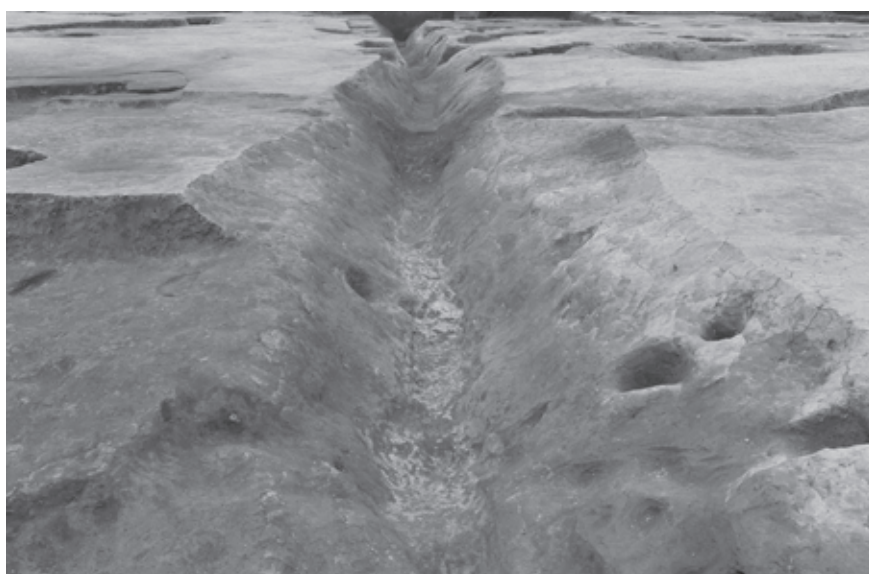
第 1 号 道 路 跡
波 板 状 凹 凸 確 認 状 況



第 3 号 沟 迹



第 4 号 沟 迹



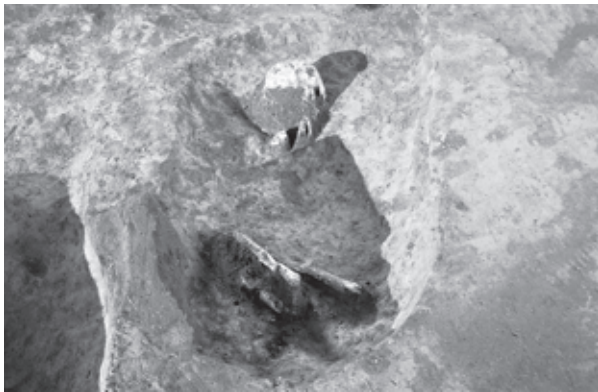
第 16 号 沟 迹



第1号墓坑人骨出土状况



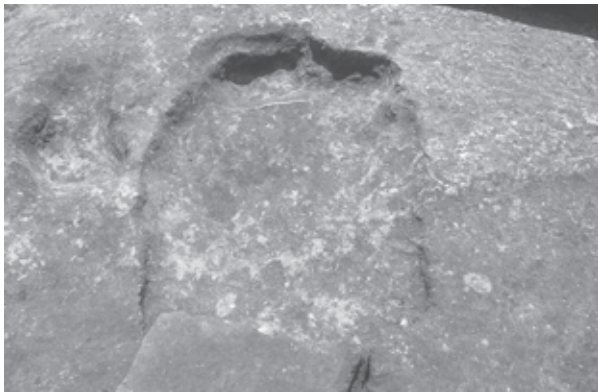
第2号墓坑人骨出土状况



第3号墓坑人骨出土状况



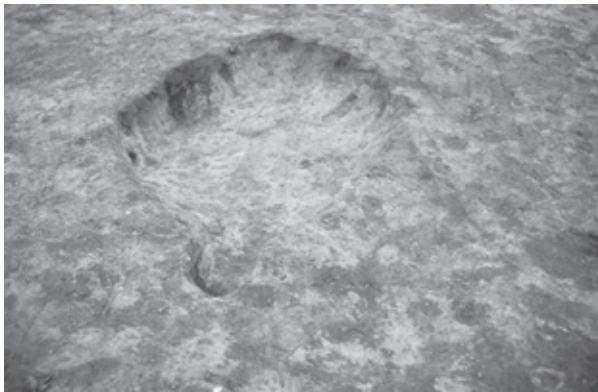
第4号墓坑人骨出土状况



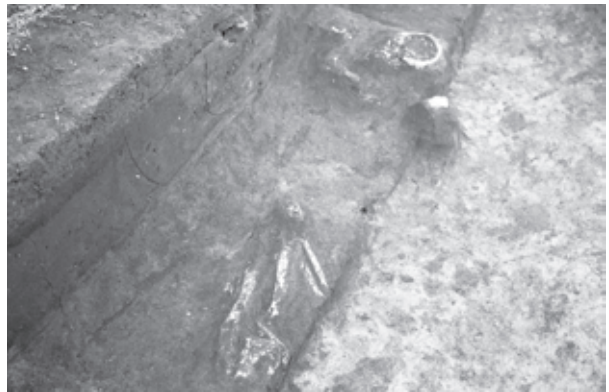
第4号墓坑



第5号墓坑人骨出土状况



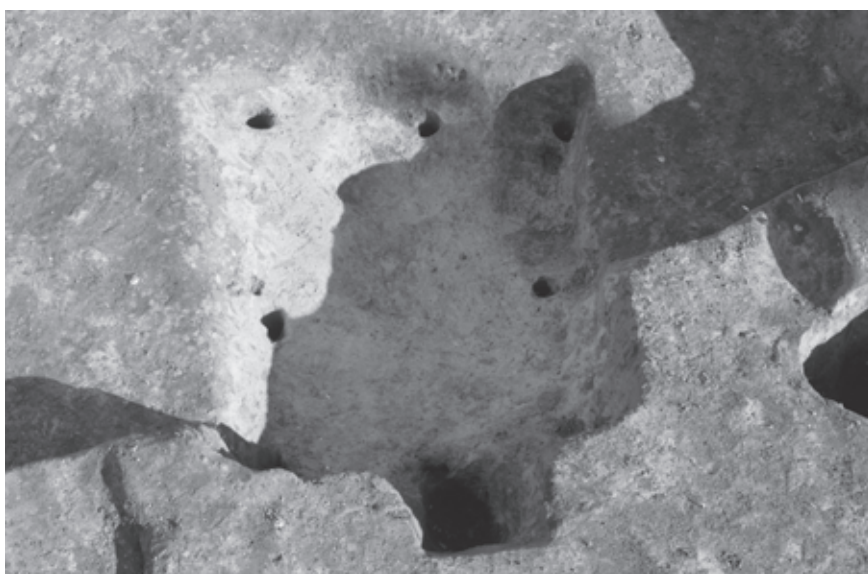
第5号墓坑



第6号墓坑人骨出土状况



第3号掘立柱建物跡



第3号方形竪穴遺構



第2B号道路跡

PL56



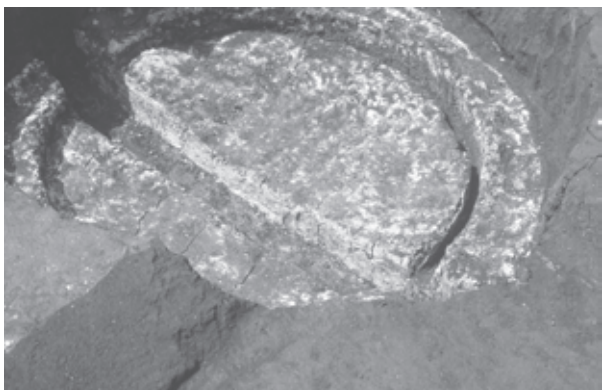
第 2 A 号道路跡



第 2 A 号道路跡
波板状凹凸確認状況



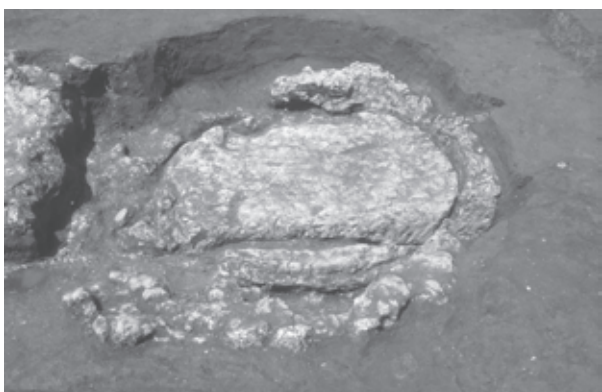
第 15 号 溝 跡



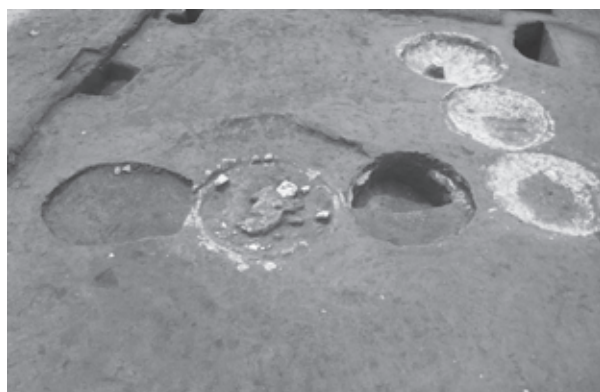
第3号粘土貼土坑掘方土層断面



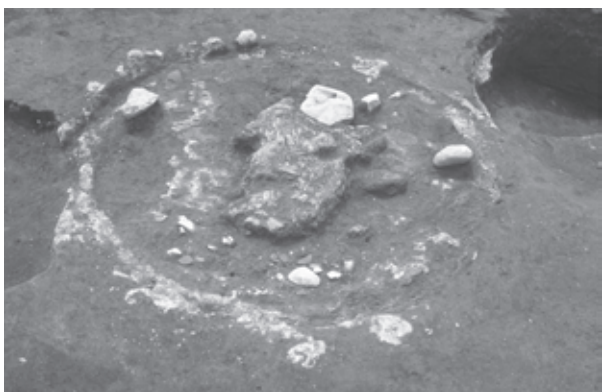
第5号粘土貼土坑



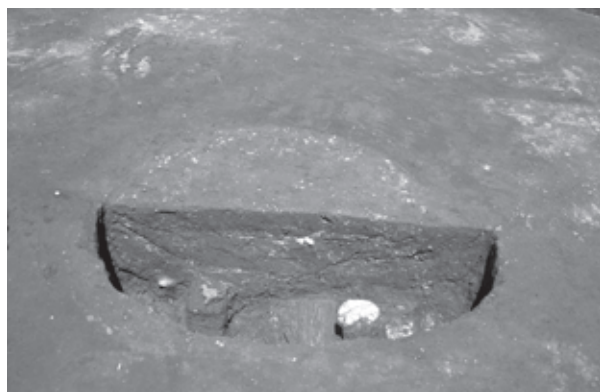
第8号粘土貼土坑



第10~15号粘土貼土坑



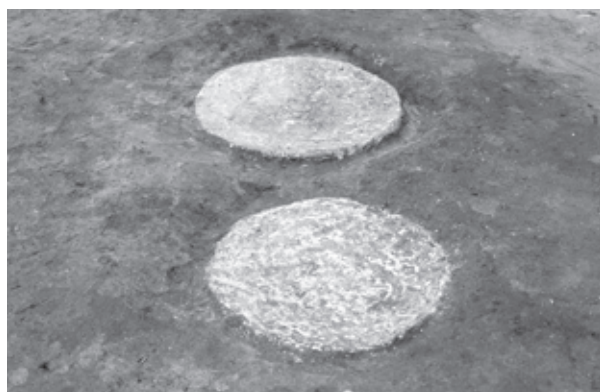
第11号粘土貼土坑



第16号粘土貼土坑土層断面



第16号粘土貼土坑遺物出土狀況



第18・19号粘土貼土坑



第24号粘土貼土坑遺物出土狀況



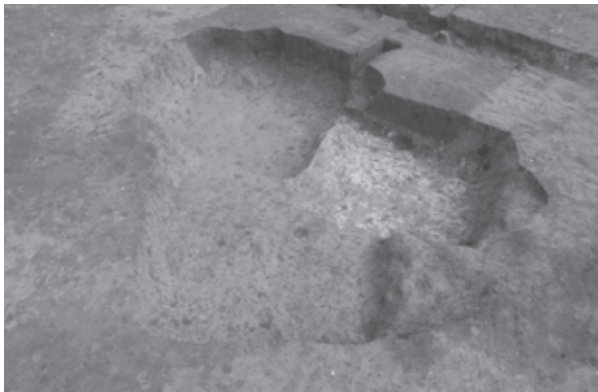
第9号墓坑遺物出土狀況



第10号墓坑遺物出土狀況



第10号墓坑



第5・7・8号土坑



第459号土坑遺物出土狀況



第560号土坑



第716号土坑

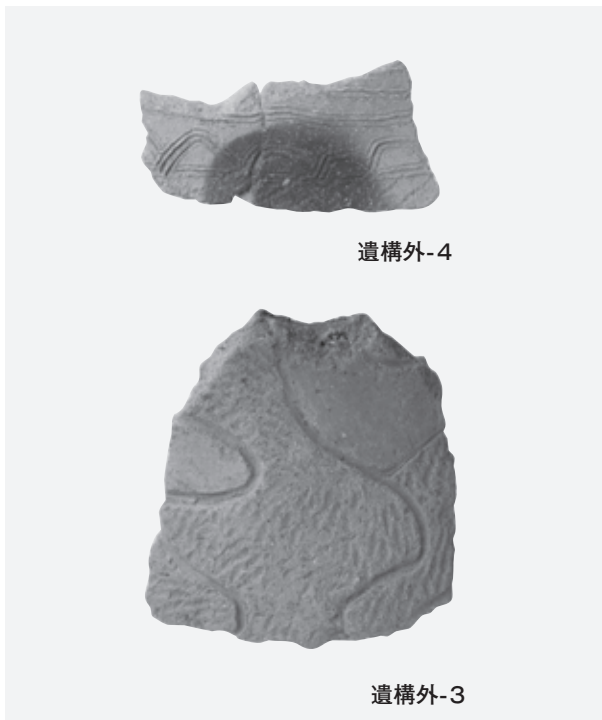


第125号竖穴建物跡，第4・5埋甕出土土器

PL60

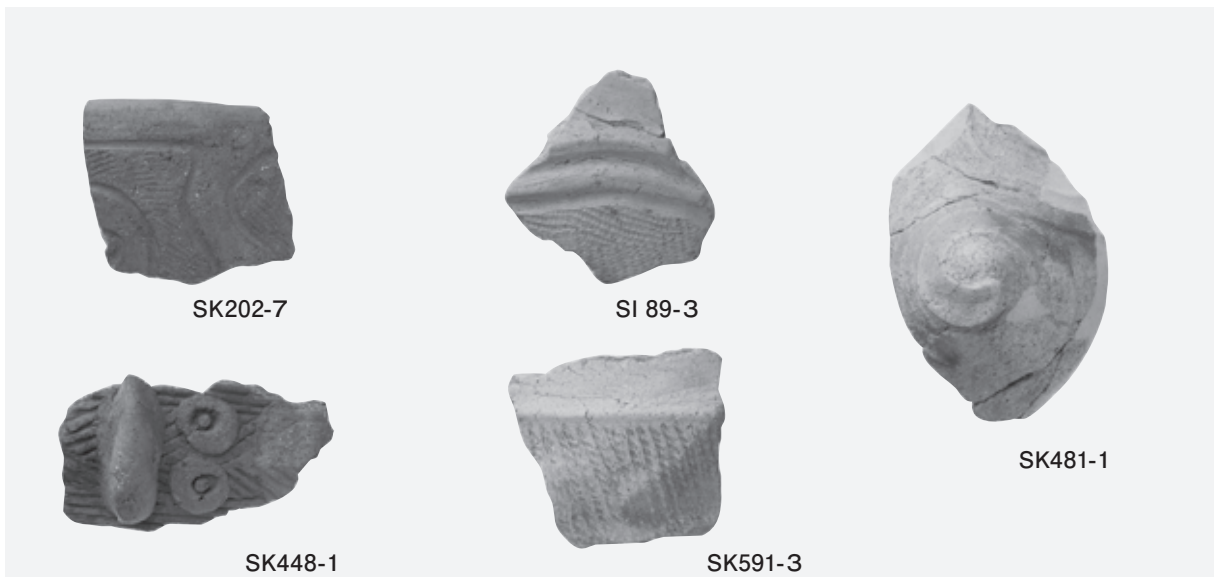
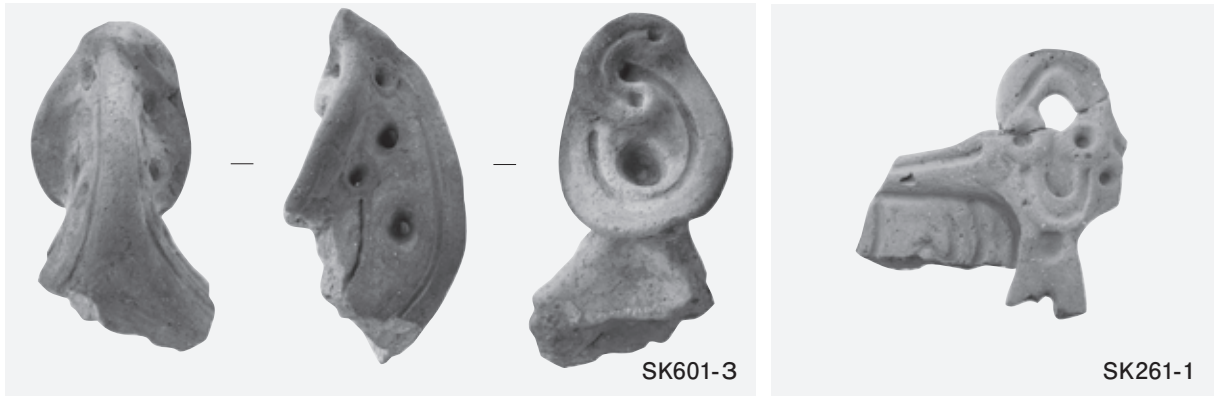


第200・506・656・709・715号土坑，遺構外出土土器

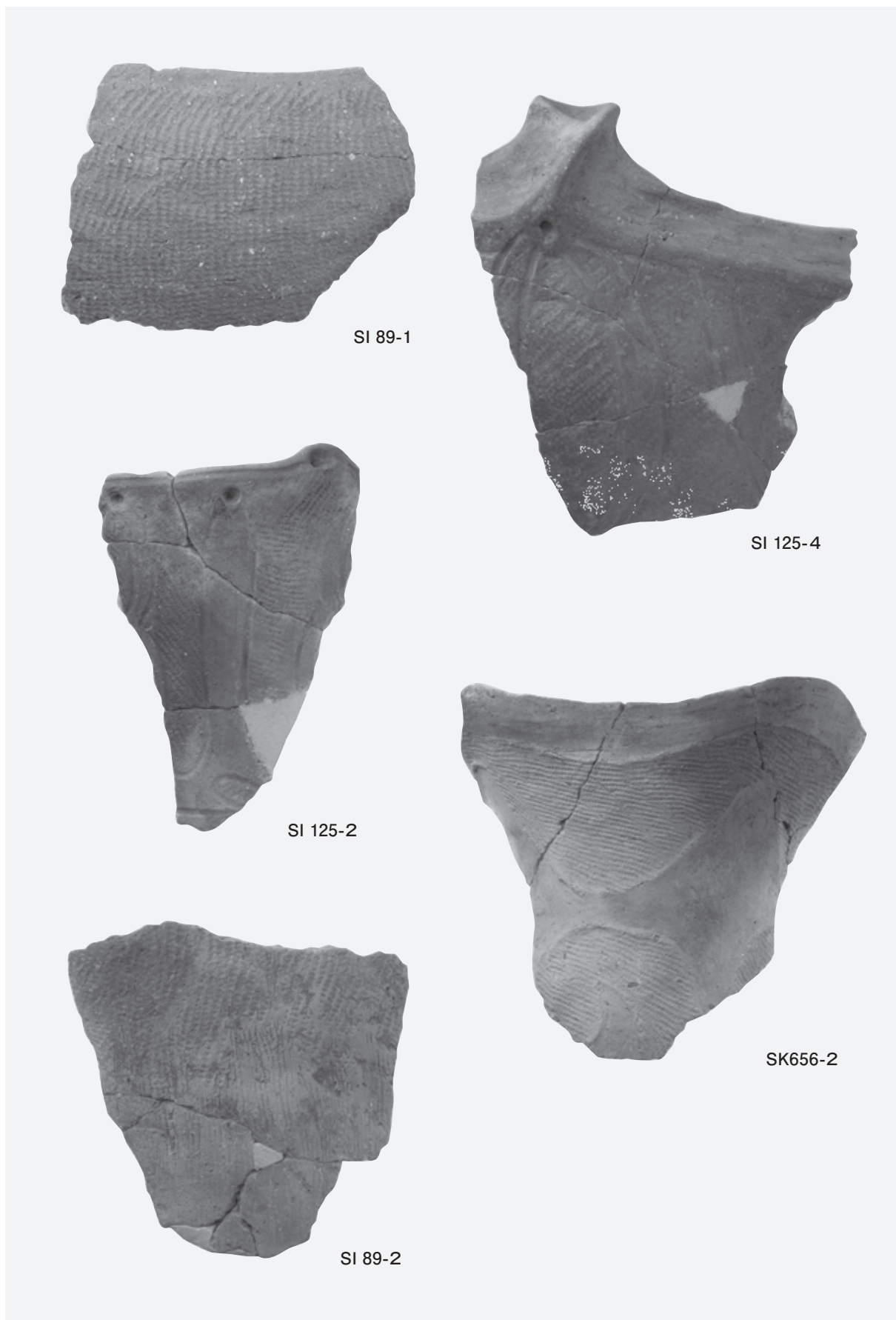


第40・56・90号竖穴建物跡，遺構外出土土器

PL62

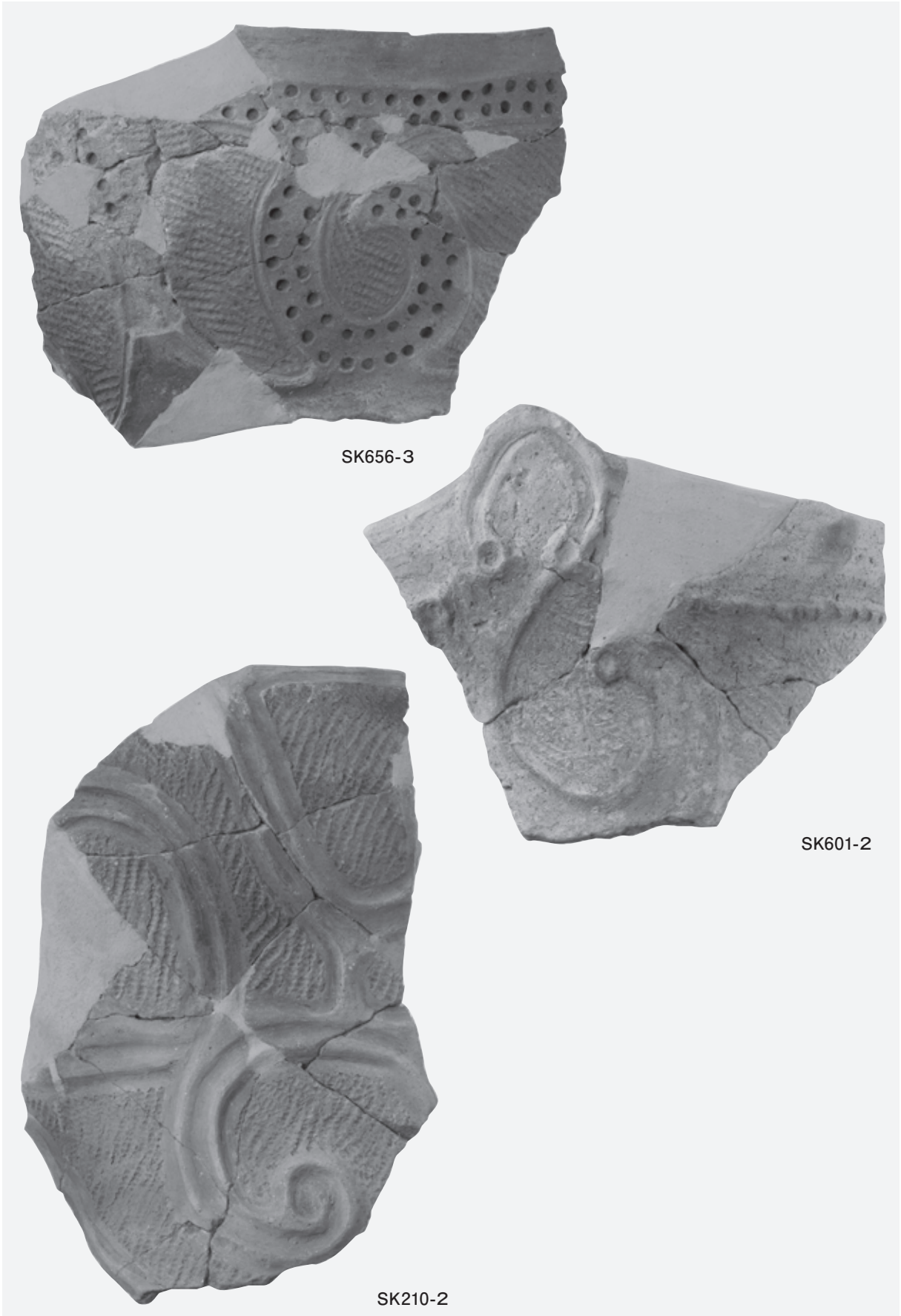


第89号竖穴建物跡，第168・202・210・261・448・481・591・601・631号土坑出土土器



第89・125号豎穴建物跡，第656号土坑出土土器

PL64

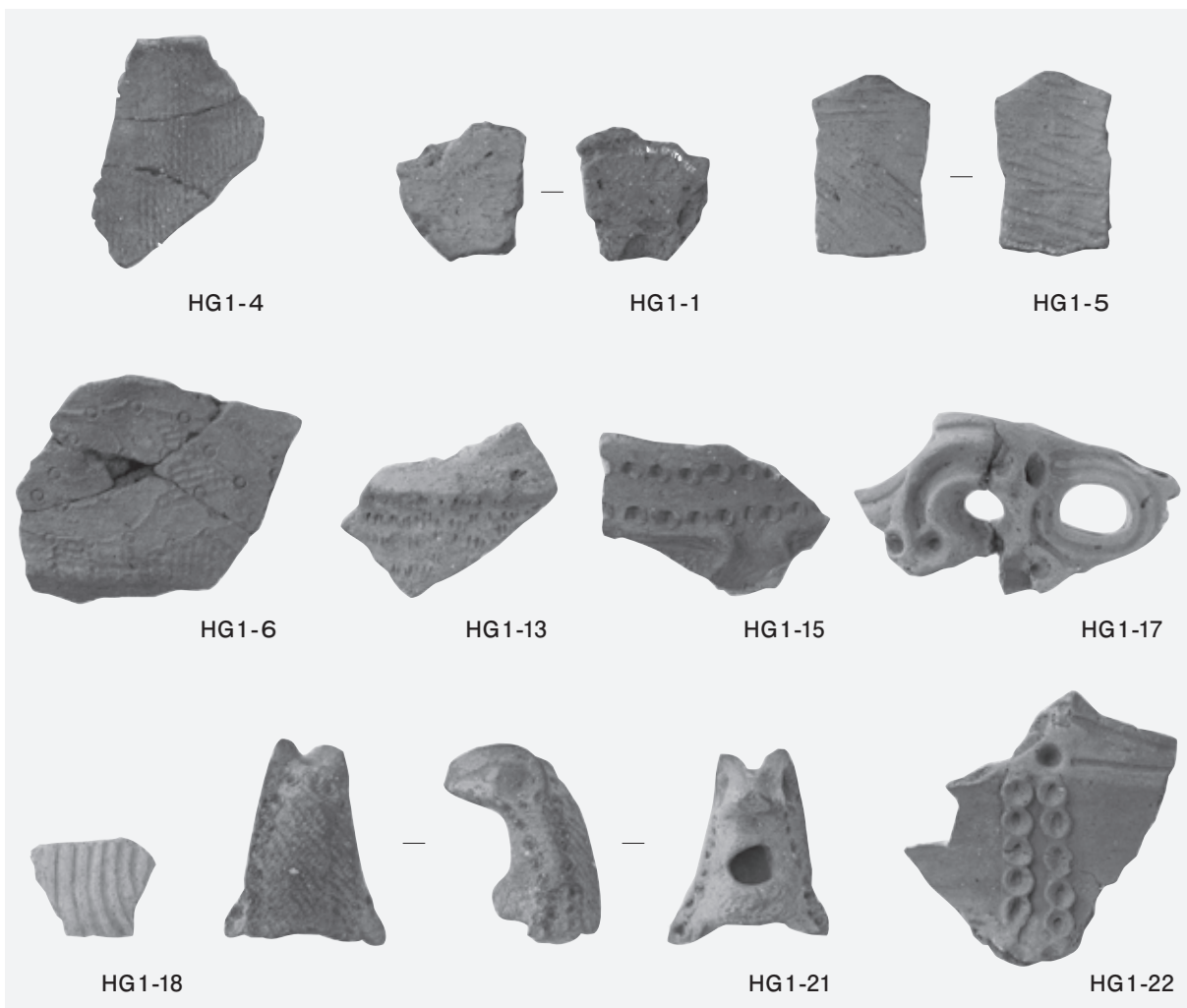
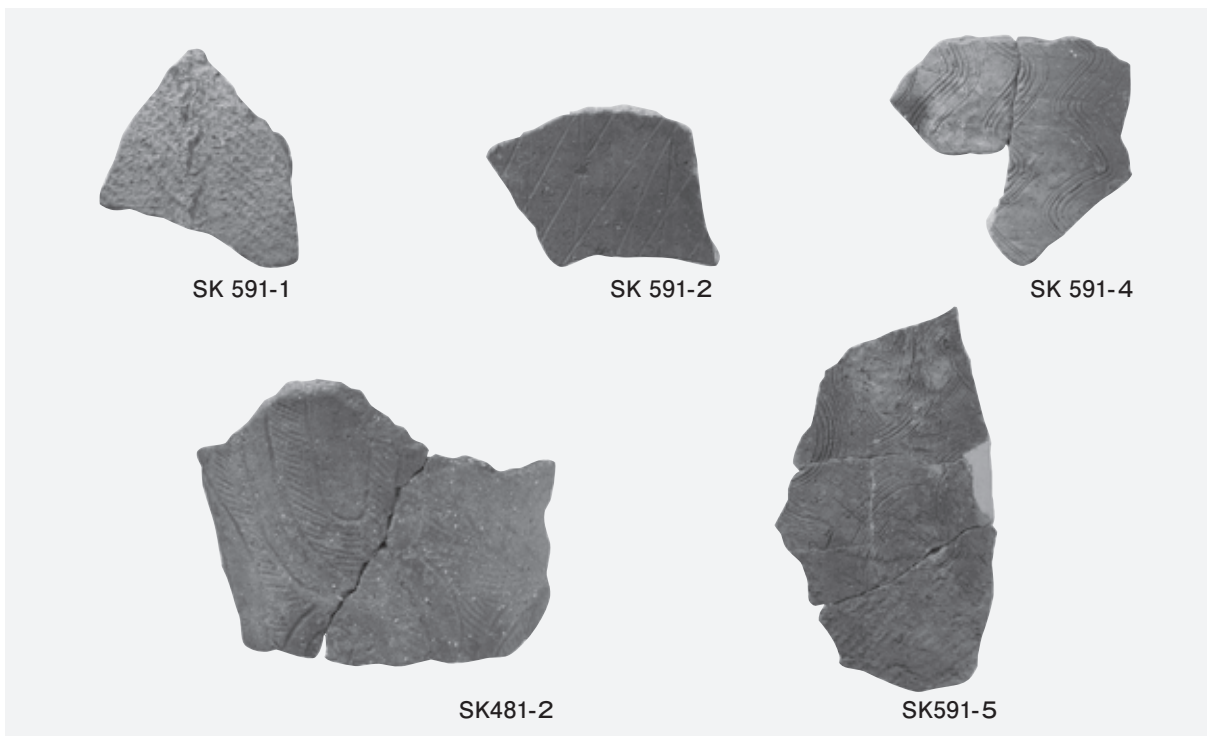


SK656-3

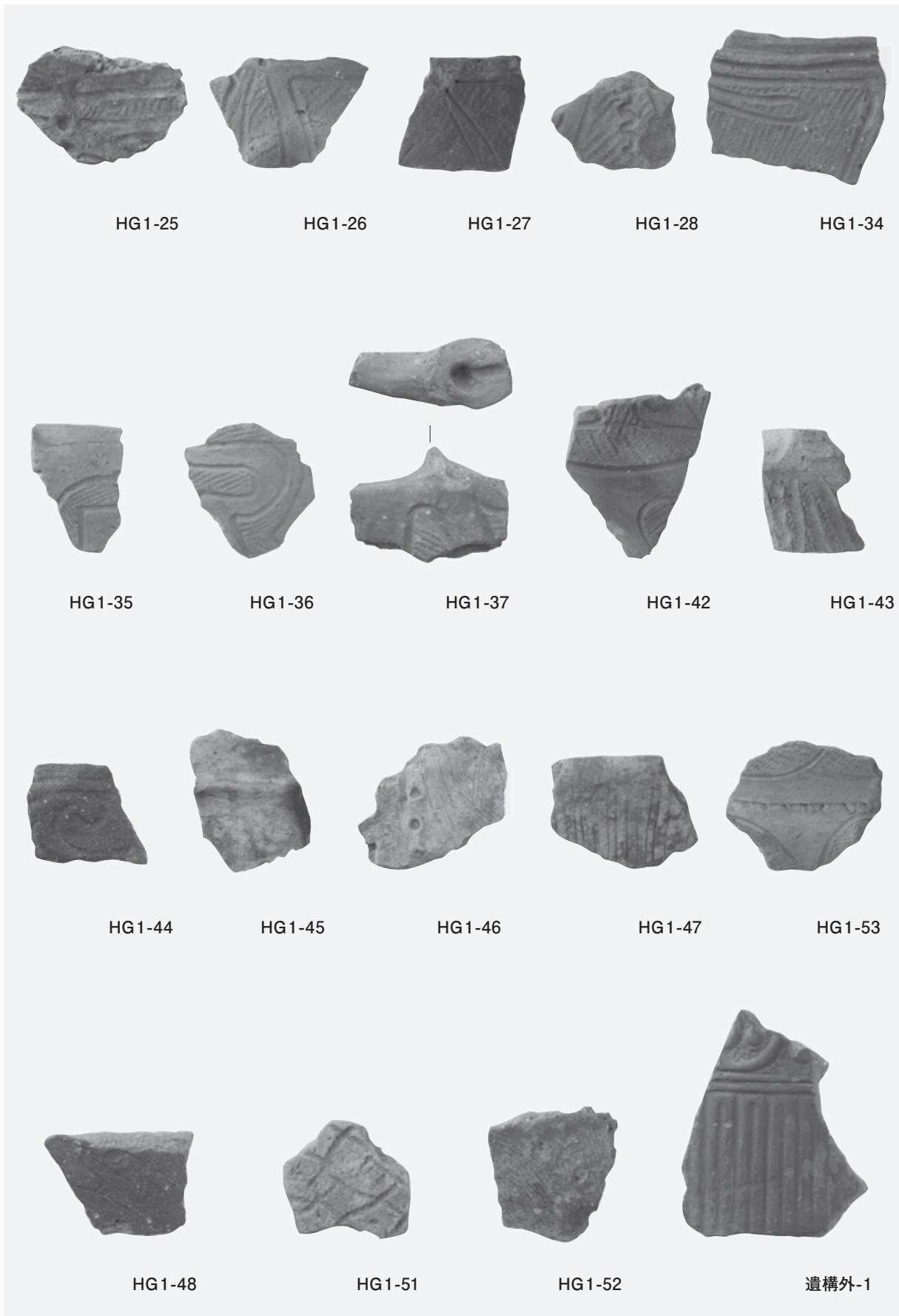
SK601-2

SK210-2

第210·601·656号土坑出土土器



第481・591号土坑，第1号遺物包含層出土土器



第1号遺物包含層，遺構外出土土器



SI 93-15



SI 93-9



SI 33-1



SI 93-6



SI 93-7



SI 101-6



SI 93-14



SI 110-3



TM1-7



SI 110-4

PL68



第66・76・85・93・96・105・110・117号竖穴建物跡出土土器



第60・85・93・117・142・144・147号竖穴建物跡，第1号墳出土土器

PL70



第28·80C·93·95·105号竖穴建物跡，第628号土坑，第1号墳出土土器



PL72



第40·52·72·79·86·93·109号竖穴建物跡出土土器



第28・67・72・79・80C・109・113号竖穴建物跡出土土器

PL74



第79・80A・80C号竖穴建物跡，遺構外出土土器



第34・52・72・80A・80B・80C・84号竖穴建物跡出土土器

PL76



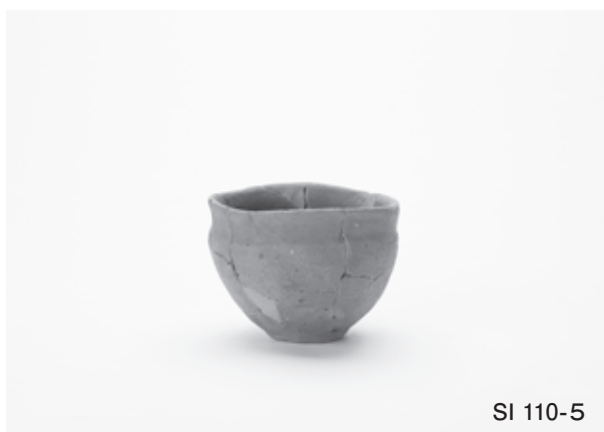
第46·68·82·84·99·109号竖穴建物跡，第1号墳出土土器



SI 5-2



SI 93-17



SI 110-5



SI 93-20



SI 105-4



SI 117-6



SI 77-4



SI 113-2

PL78



第28・34・39B・40・79・80B・109号豎穴建物跡出土土器



PL80



第72・79・80B・87号豎穴建物跡出土土器



第80C号竖穴建物跡，第1号墳出土土器

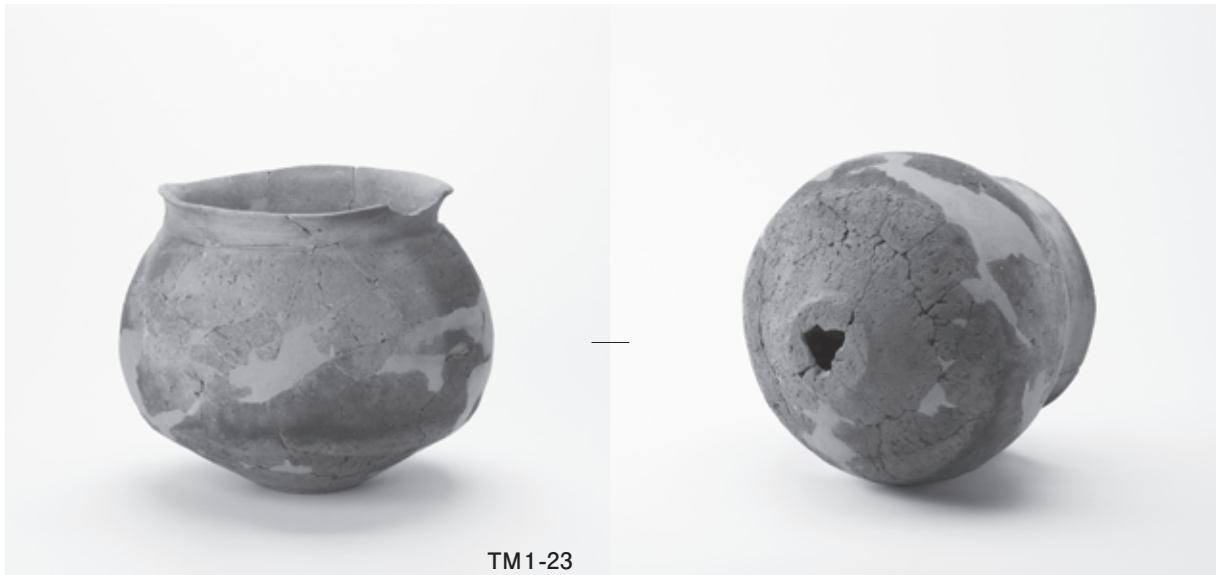
PL82



第93・105号竖穴建物跡，第1号墳出土土器



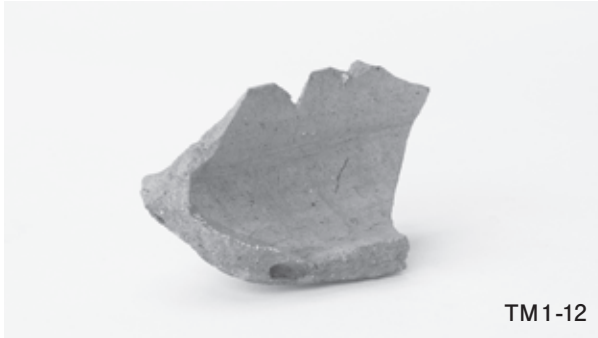
PL84



第105・110号竖穴建物跡，第1号墳出土土器



PL86



第5・22・66・74・93・142・144号竖穴建物跡, 第1号墳出土土器



SI 108-4



SI 63-7



SI 142-7



SI 63-9



SK483-1



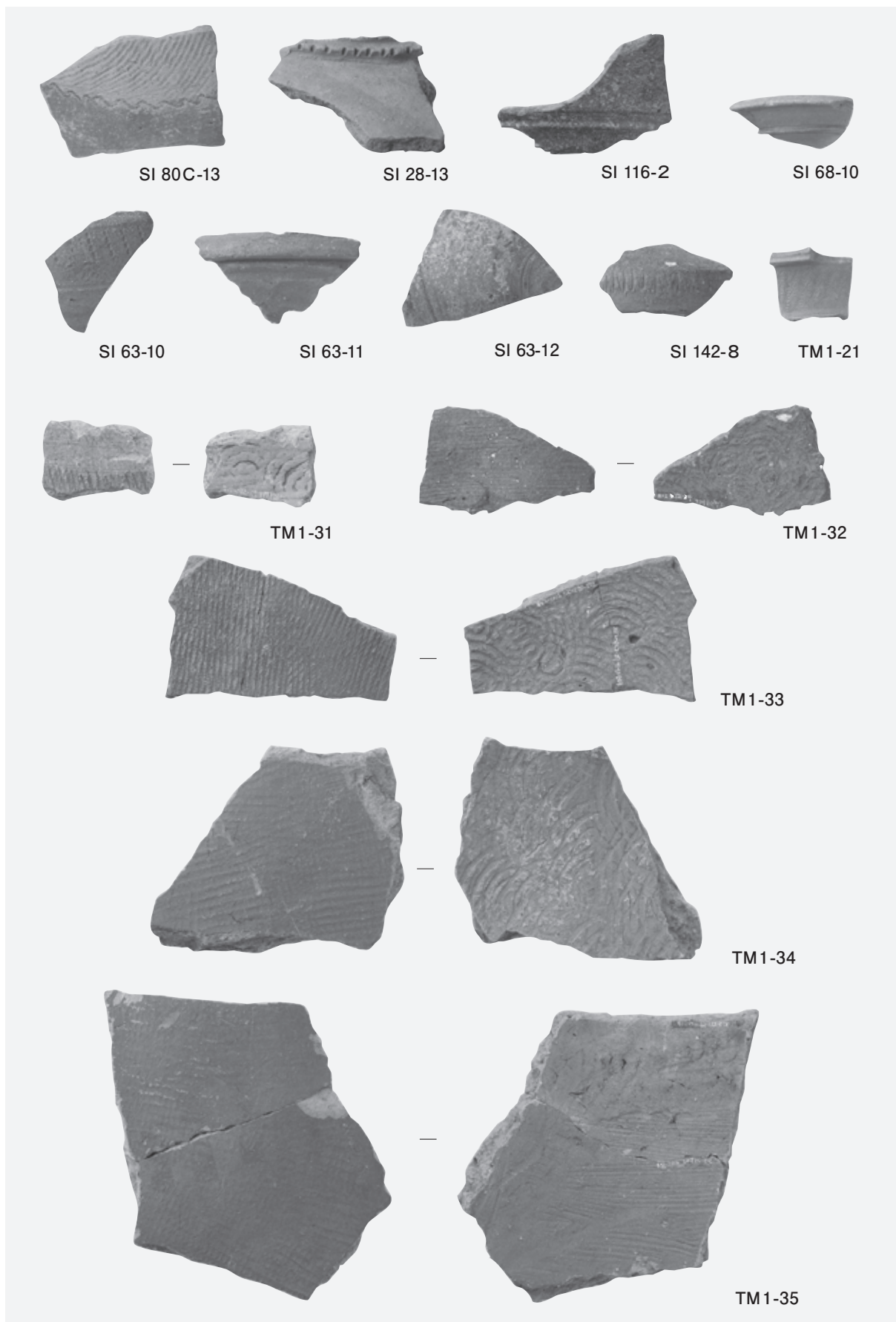
SI 63-8



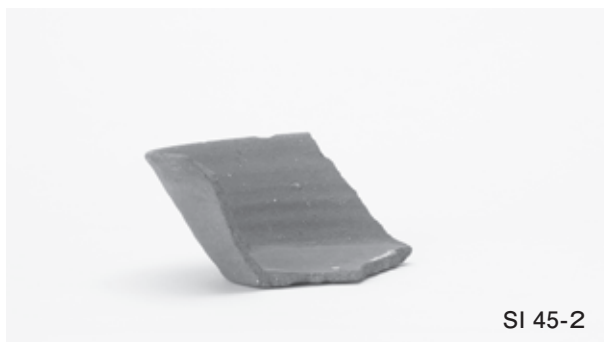
TM1-18



SD6-4



第28·63·68·80C·116·142号豎穴建物跡，第1号墳出土土器



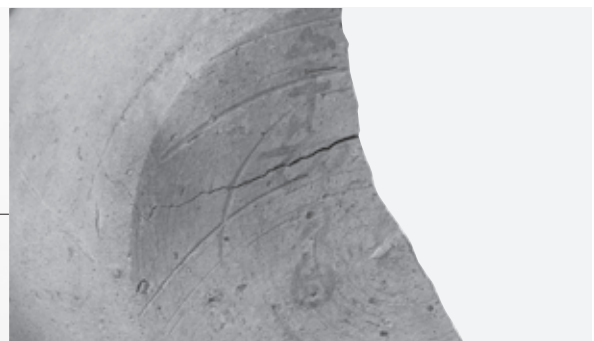
PL90



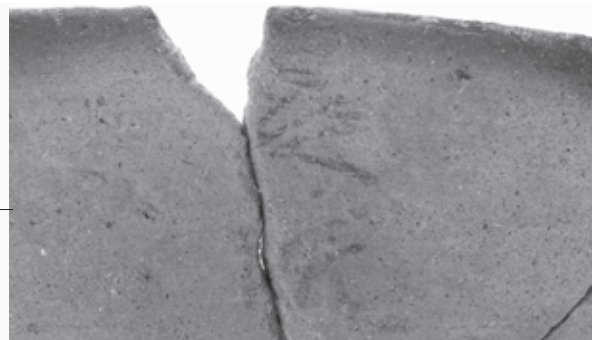
第10・25・31・103・131・133・137号竖穴建物跡出土土器



PL92

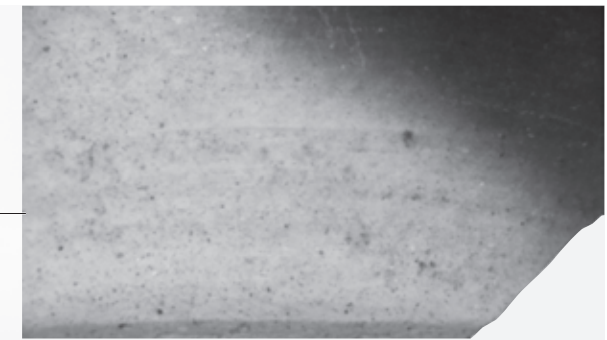
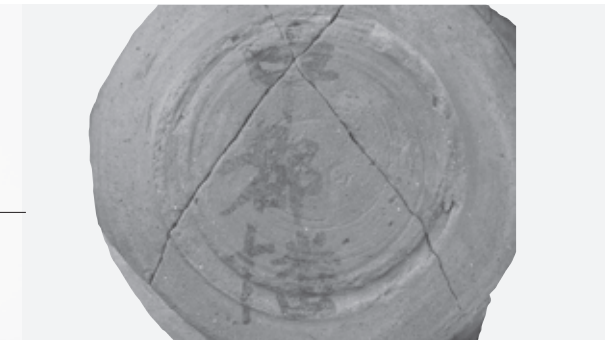


第2·7·10·44·61·106号豎穴建物跡，第4号掘立柱建物跡出土土器

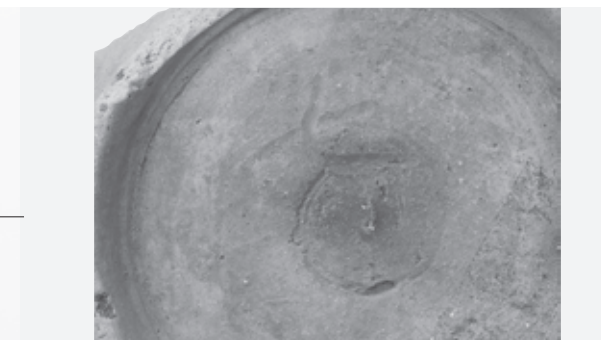
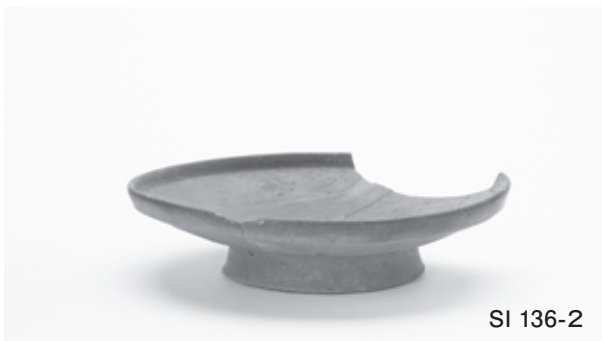


第8・10・19・29号竖穴建物跡出土土器

PL94

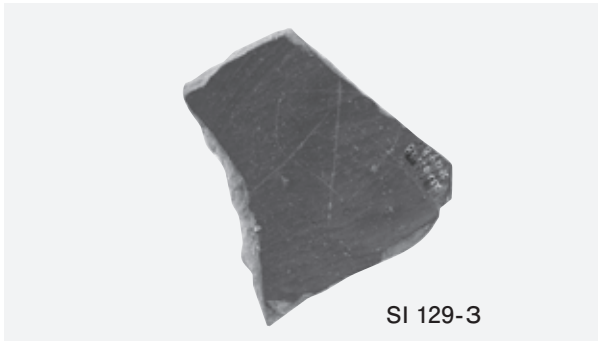
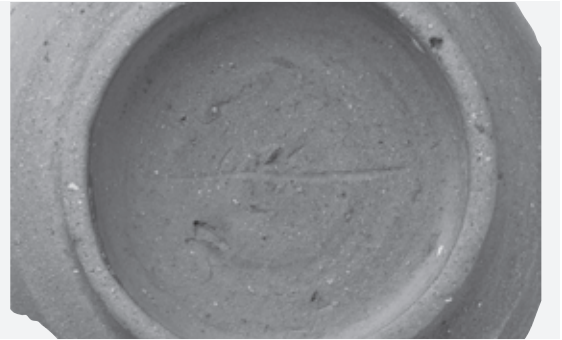


第26・51・61・106号竖穴建物跡，遺構外出土土器



第 8 · 12 · 18 · 26 · 61 · 136号豎穴建物跡，第 2 号掘立柱建物跡，第 675 号土坑出土土器

PL96



第16・18・19・62・70・129・140号竖穴建物跡出土土器







SD12-1



SK8-1



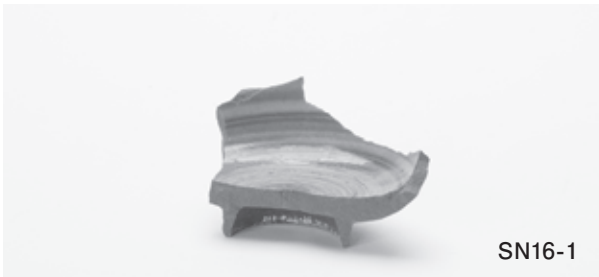
HT2-1



SN24-1



SK611-1



SN16-1



遺構外-9



SN16-2



SF2A-1



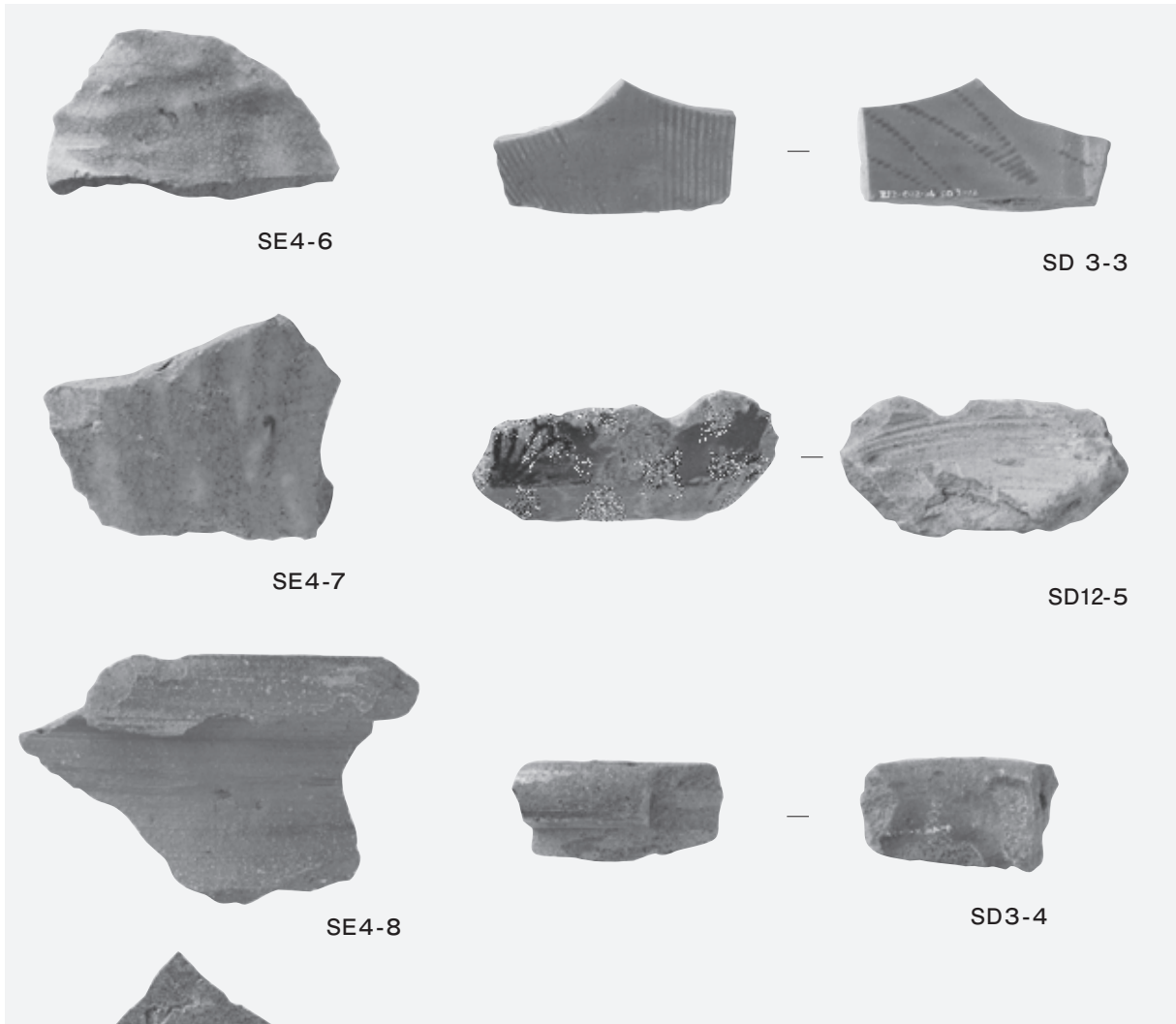
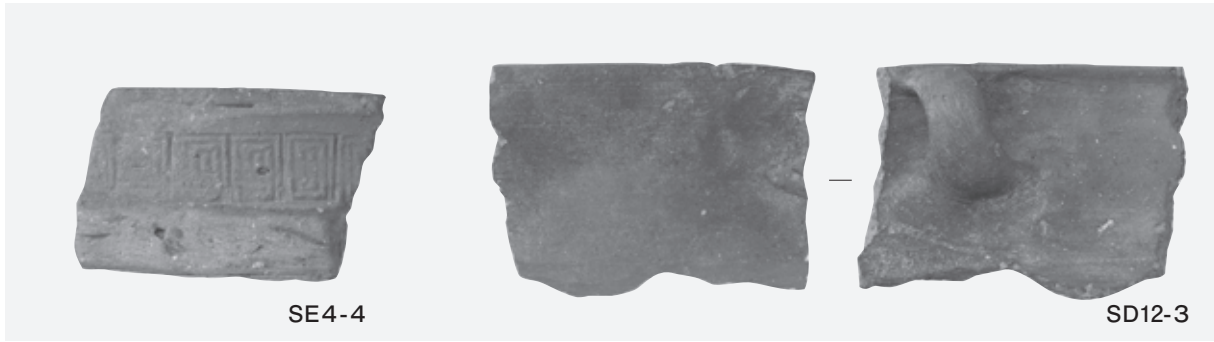
SK459-1



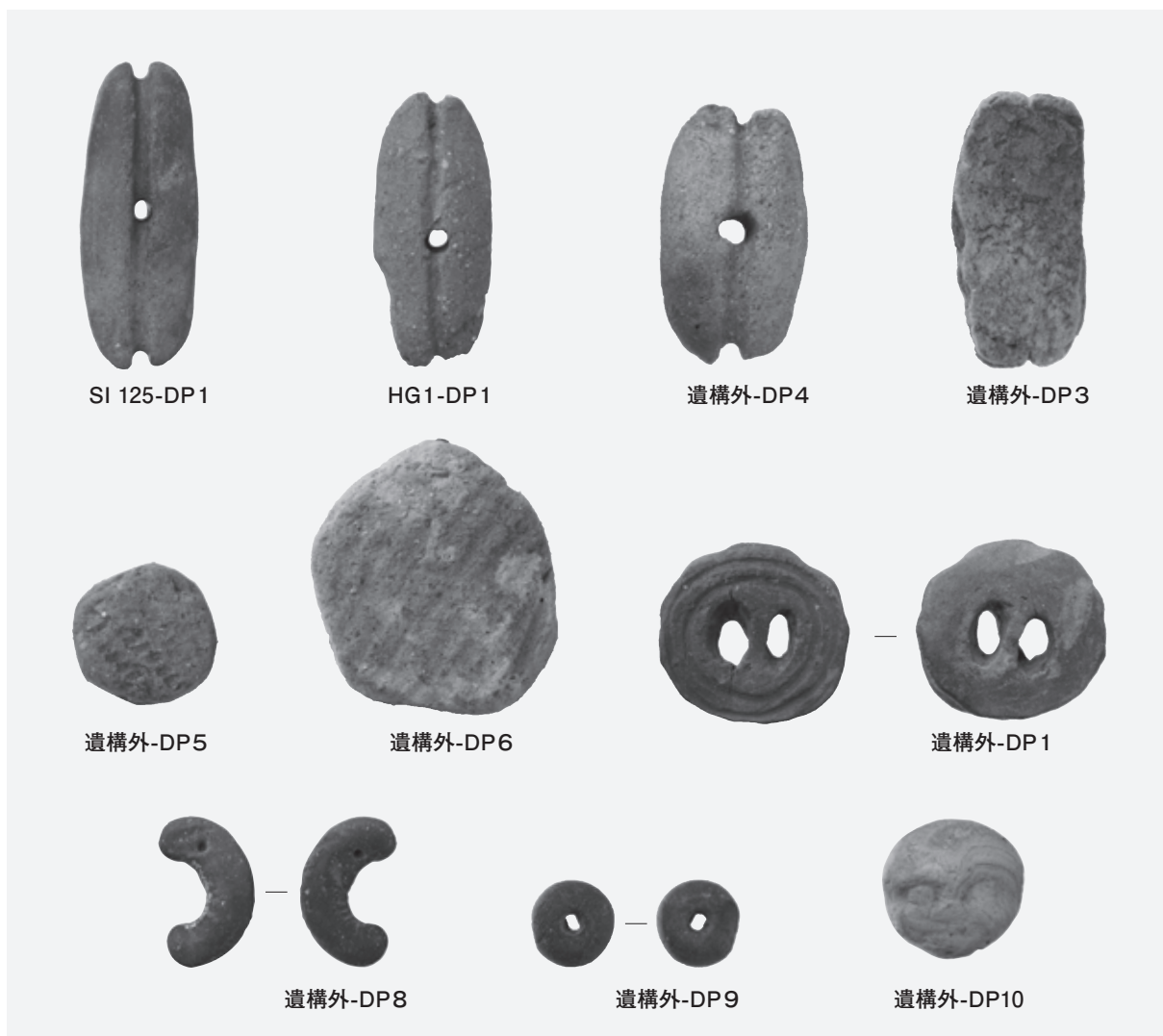
SD15-1

第2号方形豎穴遺構，第16・24号粘土貼土坑，第2A号道路跡，第12・15号溝跡，第8・459・611号土坑，遺構外出土土器

PL100



第4号井戸跡，第16号粘土貼土坑，第3・12号溝跡，第371号土坑出土土器

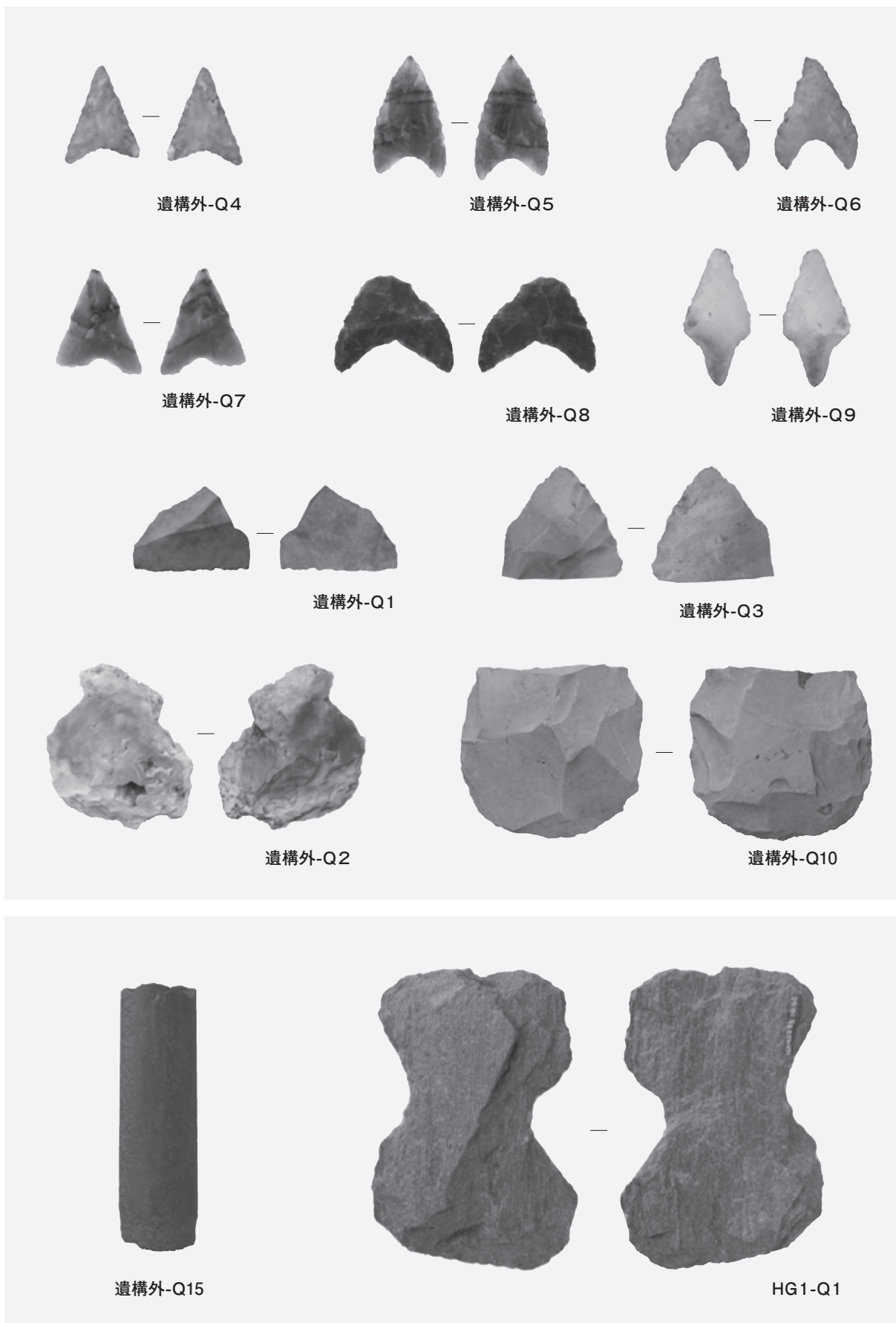


第4・96・125号竖穴建物跡，第1号墳，第1号遺物包含層，遺構外出土土製品

PL102

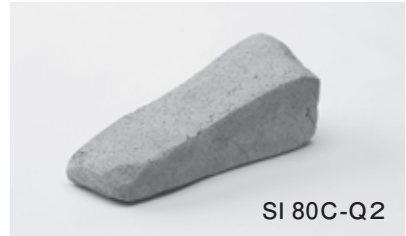


第125号竖穴建物跡，第202・512・601号土坑，遺構外出土石器



第1号遺物包含層，遺構外出土石器，石製品

PL104



第27・34・39A・40・44・51・62・76・77・79・80C・84・86・103号豎穴建物跡，
遺構外出土石器

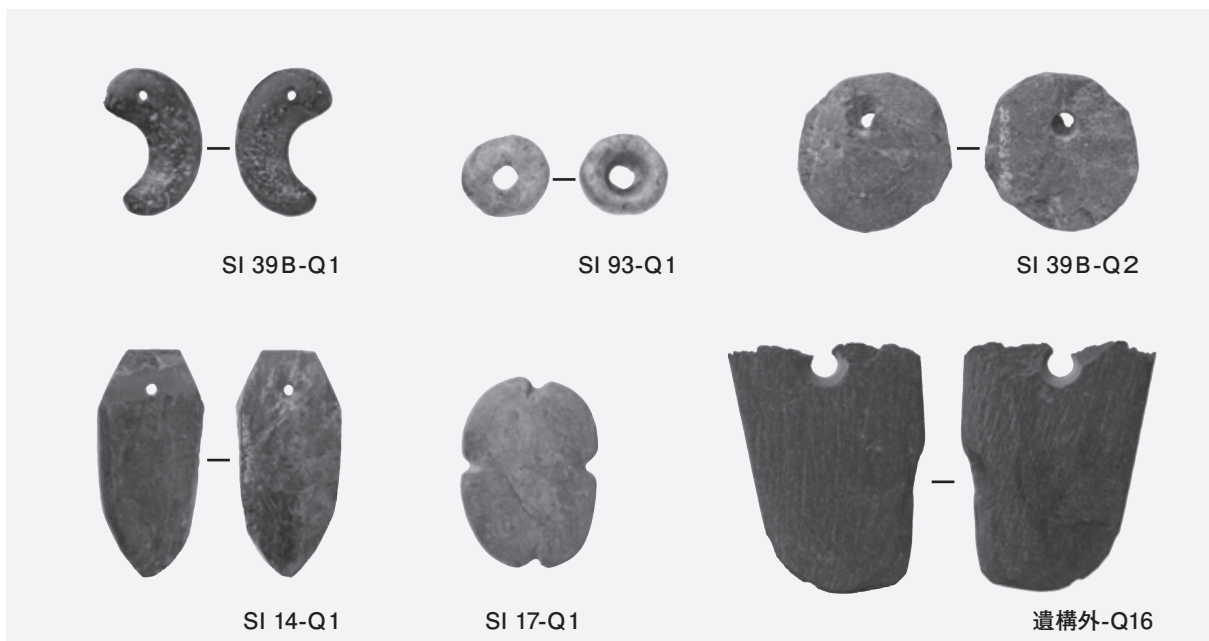


第 8 · 22 · 23 · 38 · 46 · 96号豎穴建物跡出土石器

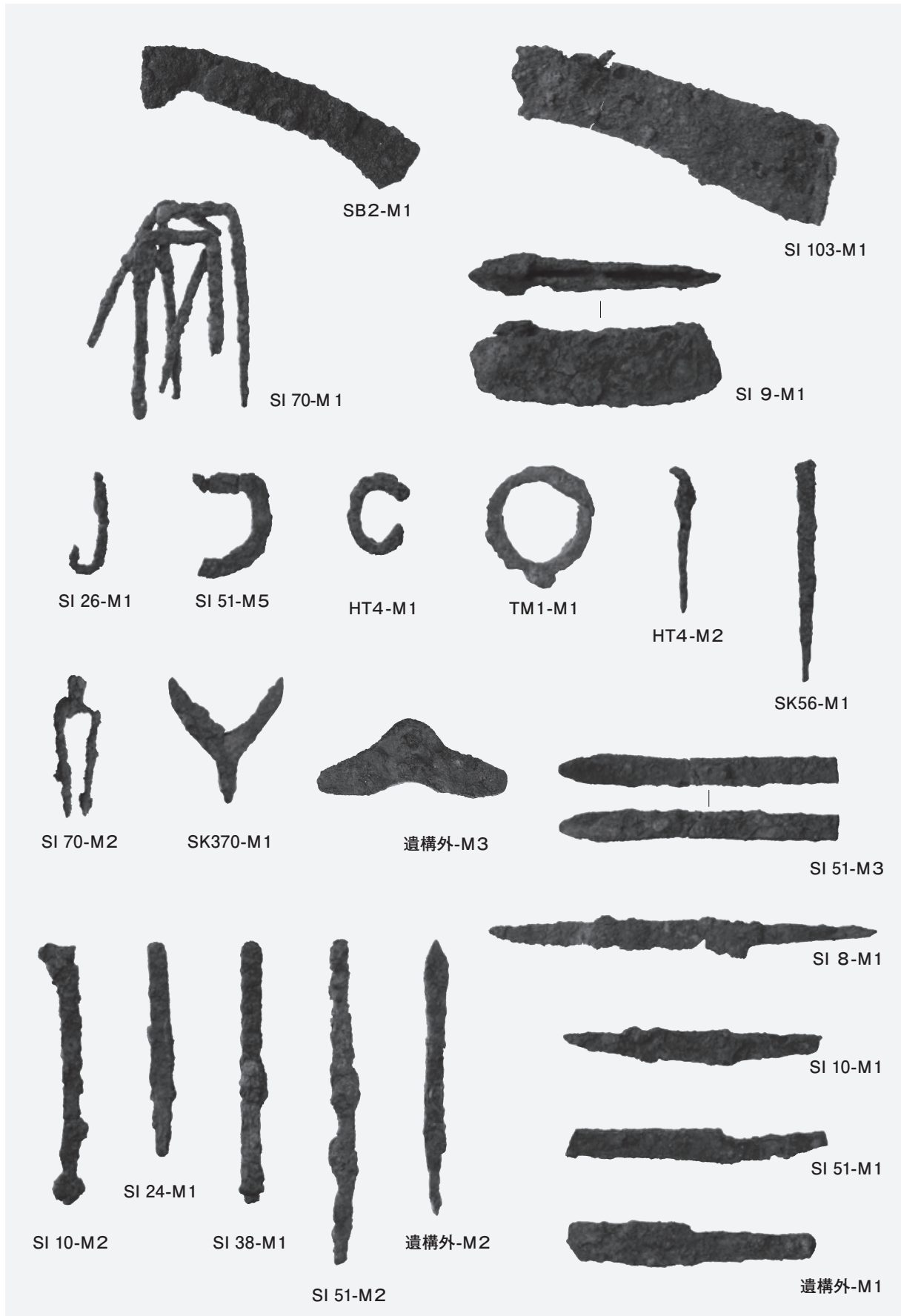
PL106



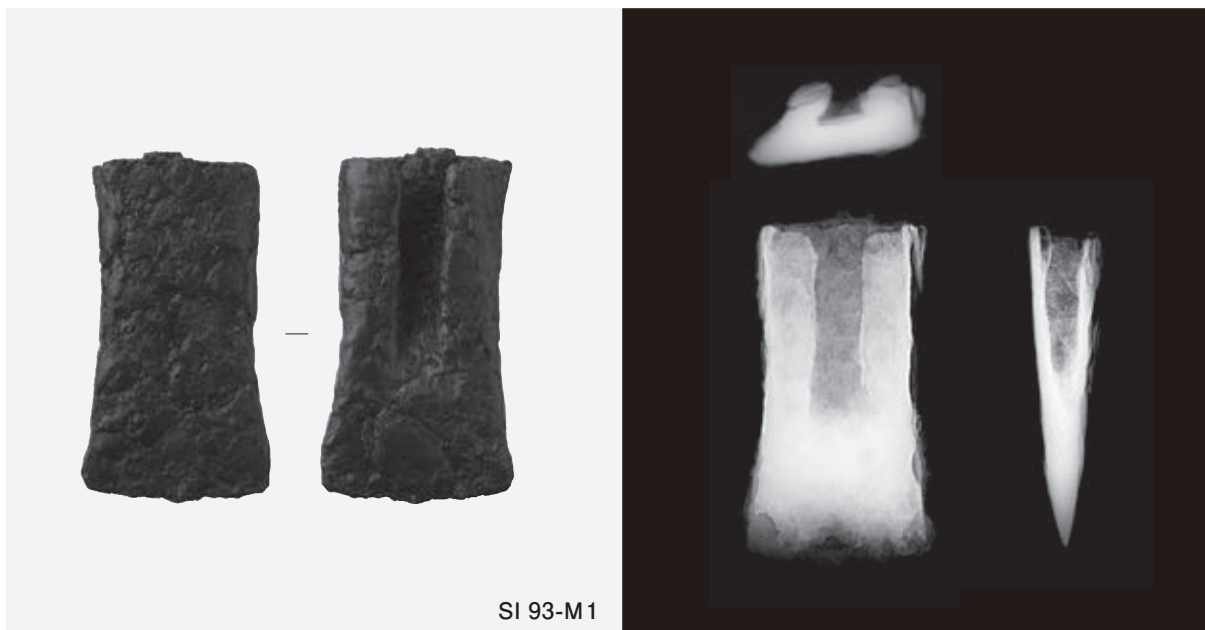
第51・61・63・71・93・103・105号竖穴建物跡出土石器



第14・17・39B・93号竖穴建物跡，第7号墓坑，第433・459号土坑，遺構外出土石器，石製品，瓦



第8・9・10・24・26・38・51・70・103号竖穴建物跡，第2号掘立柱建物跡，
第4号方形竖穴遺構，第1号墳，第56・370号土坑，遺構外出土金属製品



SI 93-M1



SI 51-M7



SI 110-M1



SI 51-M6



SI 51-M4



SN14-M1

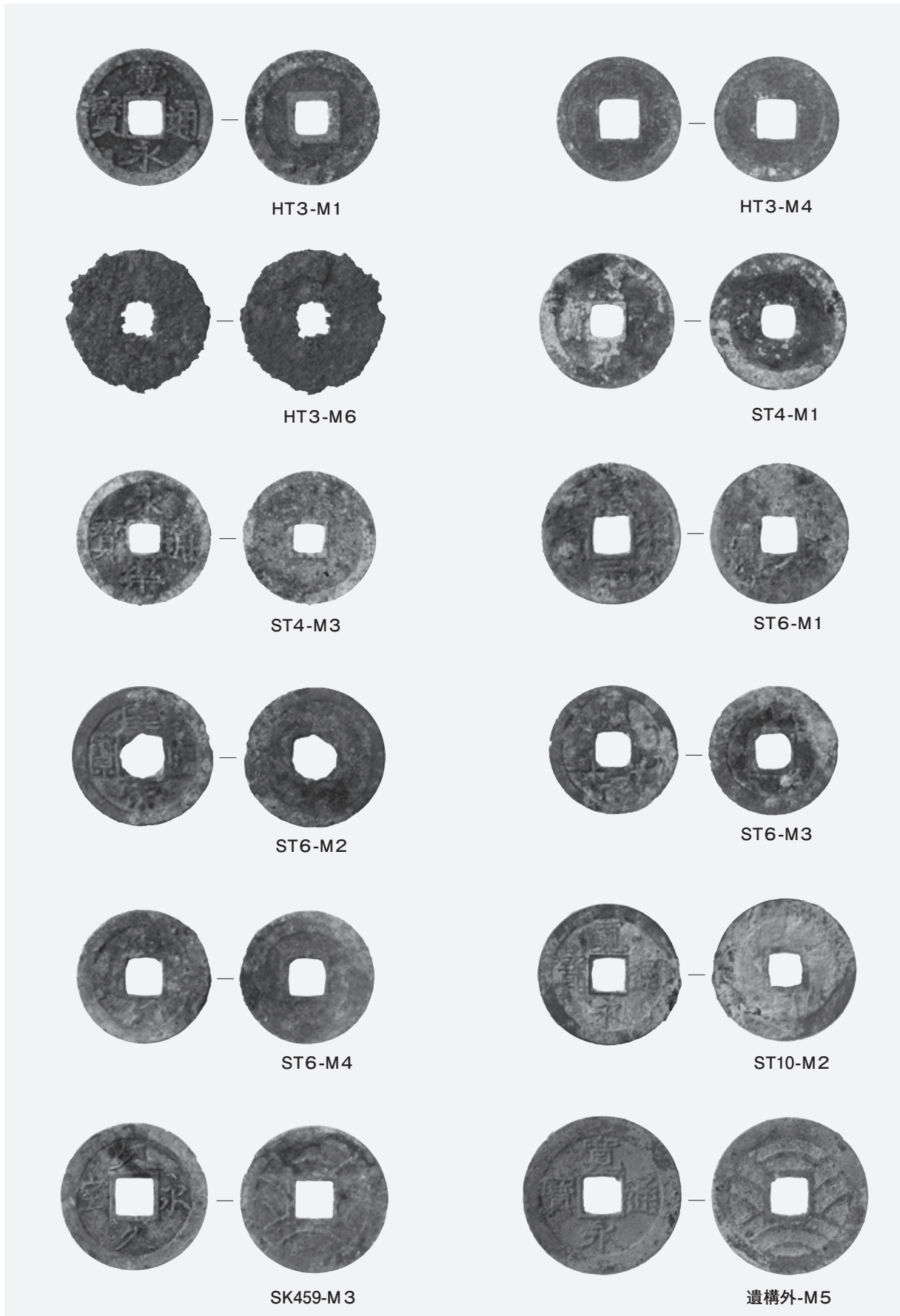


遺構外-M4



ST10-M1

第51・93・110号竖穴建物跡，第14号粘土貼土坑，第10号墓坑，遺構外出土金属製品



第3号方形竖穴遺構，第4·6·10号墓坑，第459号土坑，遺構外出土錢貨

抄 録

ふりがな	ずいりゅういせき							
書名	瑞龍遺跡							
副書名	一般国道 293 号常陸太田東バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 436 集							
著者名	田村雅樹 大武宣隆 見越広幸							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒 310 - 0911 茨城県水戸市見和 1 丁目 356 番地の 2 TEL 029 - 225 - 6587							
発行日	2019 (平成 31) 年 3 月 18 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
瑞龍遺跡	茨城県常陸太田市 瑞龍町 629 番地ほか	08212 022	36 度 33 分 25 秒	140 度 31 分 54 秒	42 m	20130901 ~ 20140331 20140401 ~ 20140930 20151102 ~ 20160331 20160401 ~ 20160731	2,080 m ² 4,098 m ² 3,673 m ² 1,857 m ²	一般国道 293 号常陸太田東バイパス整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
瑞龍遺跡	集落跡	縄文	竪穴建物跡	4 棟	縄文土器 (蓋・深鉢), 土製品 (土錘・土器円盤・土偶), 石器 (打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石)			
		弥生	竪穴建物跡	2 棟	弥生土器 (広口壺)			
		古墳	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 古墳 円形周溝遺構 井戸跡 柱穴列 溝跡 土坑	77 棟 2 棟 1 基 1 基 1 基 2 条 1 条 30 基	土師器 (坏・椀・埴・器台・高坏・鉢・壺・脚付盥・小形甕・甕・台付甕・甌・ミニチュア土器), 須恵器 (坏・蓋・高坏・甕・横瓶・平瓶・水瓶・長頸瓶・短頸壺・広口壺・甕), 土製品 (紡錘車・羽口), 石器・石製品 (砥石・剣形品・勾玉・有孔円盤・紡錘車・支脚・袖部芯材), 金属製品 (釘・鉄斧・壺金・貴金具)			
		奈良	竪穴建物跡	27 棟	土師器 (坏・高坏・鉢・小形甕・甕・甌・ミニチュア土器), 須恵器 (坏・高台付坏・蓋・盤・鉢・長頸瓶・円面硯・甕), 石器・石製品 (砥石・紡錘車・支脚・袖部芯材), 金属製品 (鏃・鎌)			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瑞龍遺跡	集落跡	平安	竪穴建物跡 40棟 掘立柱建物跡 14棟 井戸跡 1基 柱穴列 1条 土坑 28基	土師器（坏・椀・高台付坏・蓋・盤・皿・鉢・小形甕・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・コップ形土器・鉢・長頸瓶・甕）、石器・石製品（紡錘車・支脚・袖部芯材）、金属製品（鎌・刀子・釣針・鎌・鋤先・紡錘車・釘・鏝・槍鉋・火打金・煙管・椀形滓）	
	集落跡 墓域	鎌倉・室町	掘立柱建物跡 1棟 方形竪穴遺構 5基 井戸跡 1基 墓坑 7基 柱穴列 1条 道路跡 2条 溝跡 5条 段切状遺構 1条 土坑 16基 ピット群 8か所	土師質土器（皿・火鉢）、瓦質土器（播鉢）、陶器（碗・香炉 ₉ ・瓶類・甕）、磁器（碗）、石製品（五輪塔）、銭貨（皇宋元寶・咸平元寶・皇宋通寶・熙寧元寶・紹元聖寶・永樂通寶）	
		江戸	掘立柱建物跡 1棟 方形竪穴遺構 2基 粘土貼土坑 29基 墓坑 3基 道路跡 2条 溝跡 2条 土坑 37基	土師質土器（皿）、瓦質土器（火鉢 ₉ ）、陶器（碗・蓋・皿・德利・灯明受皿・水鉢・行平鍋 ₉ ）、磁器（碗）、土製品（土人形）、金属製品（釘・取手 ₉ ・鏝・煙管・雁首銭）、銭貨（寛永通寶・文久通寶）、瓦（平瓦・軒棧瓦）	
	その他	時期不明	竪穴建物跡 1棟 掘立柱建物跡 1棟 井戸跡 1基 溝跡 6条 土坑 416基 ピット群 11か所	縄文土器（深鉢・注口土器）、土製品（環状耳飾・土器片錘・土器円盤・小玉・泥面子）、石器・石製品（鎌・搔器・石剣・温石）、金属製品（火打金・鉄砲玉）、銭貨（天聖元寶）	
要約	<p>当遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけて、断続的に集落や墓域として営まれた複合遺跡である。特に6世紀中葉から11世紀は継続的な集落で、中央政権と地方豪族の関係性をみる上での一資料となり、政治・政策などの社会背景の基に集落の盛衰や形態が変化する状況がみられる。</p> <p>出土遺物では、4世紀中葉の羽口が鉄製品の製作に関わる資料として、9世紀後葉の高台付坏の底部にヘラで記された「題女□」は、国字の出土例として希有で、一地方にも国字をする有識者が存在したことを物語る貴重な遺物として特筆できる。</p>				

印刷仕様

編集 OS Microsoft Windows 7
Home Premium ServicePack1
編集 Adobe InDesign CS5
図版作成 Adobe Illustrator CS5
写真調整 Adobe Photoshop CS5
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
図面類 EPSON ES-1000G
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第436集

瑞 龍 遺 跡 下 巻

一般国道293号常陸太田東バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成31（2019）年 3月15日 印刷

平成31（2019）年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

TEL 029-227-5505